

# 柏北部東地区 埋蔵文化財発掘調査報告書 2

— 柏市駒形遺跡 —  
縄文時代以降編 1

平成 21 年 3 月

独立行政法人 都市再生機構  
財団法人 千葉県教育振興財団

# 柏北部東地区 埋蔵文化財発掘調査報告書 2

— 柏市駒形遺跡 —  
縄文時代以降編 1





花積下層式土器



ニッ木・関山・黒浜式土器（右から）

## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第616集として、独立行政法人都市再生機構の柏北部東地区土地区画整理事業に伴って実施した柏市駒形遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文海進の最中にある縄文時代前期に営まれた貝塚を伴う集落跡が発見されており、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願ってやみません。

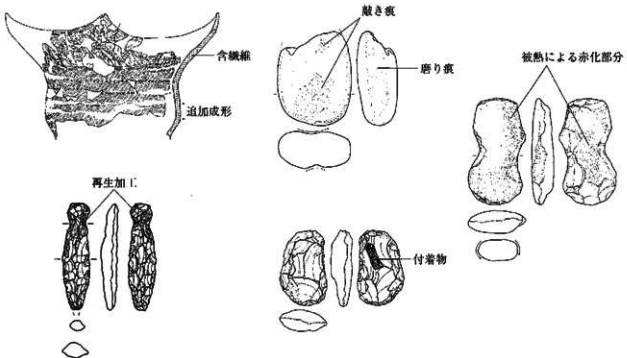
終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成21年3月

財団法人 千葉県教育振興財団  
理事長 福 島 義 弘

## 凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による柏北部東地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県柏市小青田370ほかに所在する駒形遺跡（遺跡コード217-024）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団（平成17年9月1日付けで財団法人千葉県文化財センターから名称変更）が実施した。
- 4 発掘調査及び整理事業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は調査研究部長 大原正義、整理課長 高田博の指導のもと、執筆の一部を栗田則久が行った他は上守秀明が担当した。なお、整理事業の実施にあたり、小宮 孟（元管理普及部長）、西川博孝（千葉県立中央博物館）、峰村 篤（松戸市教育委員会）、横山 仁（千葉県立関宿城博物館）、池谷信之（沼津市教育委員会）、笹森紀巳子（さいたま市立博物館）、石井克己・長谷川福次（洗川市教育委員会）、田中和之（蒲田市教育委員会）、奥野麦生（白岡町教育委員会）、早坂廣人（富士見市教育委員会）、高橋清文（（有）毛野考古学研究所）、渡辺 新（千葉県縄文研究会）の各氏に御指導、御協力を得た。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構及び柏市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は以下のとおりである。  
第3図 国土地理院発行 1/25,000地形図「流山」(N1-54-25-1-2)、守谷 (N1-54-25-1-2)
- 8 周辺航空写真は、京業測量株式会社による昭和48年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、測量値は日本測地系による。
- 10 遺物分布図では土器（●）、石器（□）、垂飾（▽）とした。
- 11 遺物実測図で必要なものは以下に示した。



# 本文目次

序文

凡例

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
(1)	発掘調査	1
(2)	整理作業	3
2	調査の方法	3
第2節	遺跡の位置と環境	5
1	遺跡の位置と地理的環境	5
2	周辺遺跡の発掘調査歴と概要	5
第2章	検出された遺構・遺物	12
第1節	縄文時代の遺跡概要	12
1	概要	12
2	土器の分類	12
第2節	A地区	18
1	竪穴住居跡	18
2	土坑	30
3	炉穴	33
4	陥穴	35
5	遺構外出土土器	36
第3節	B地区	42
1	竪穴住居跡	42
2	土坑	57
3	陥穴	61
4	遺構外出土土器	61
第4節	C地区	64
1	土坑	69
2	陥穴	72
3	遺構外出土土器	75
第5節	D地区	77
1	竪穴住居跡	77
2	土坑	101
3	炉穴	105

4	集石土坑	106
5	遺構外出土土器	106
第6節	E地区	117
1	竪穴住居跡	117
2	土坑	156
3	炉穴	159
4	陥穴	159
5	遺構外貝層	161
6	ビット群	161
7	遺構外出土土器	161
第7節	土器以外の出土遺物	169
1	石器	169
2	貝刃	209
3	土器片錘・土製品	209
4	垂飾	209
第8節	貝層出土の動植物遺存体	211
1	分析方法	211
2	貝類	213
3	魚類・哺乳類	216
4	堅果類	217
第9節	古墳時代以降の遺構・遺物	217
1	古墳時代の遺構・遺物	217
2	平安時代の遺構・遺物	217
3	近世以降の遺物	217
第3章	まとめ	219
第1節	出土土器と集落の変遷	219
1	出土土器の変遷	219
2	住居跡と集落の変遷	230
第2節	千葉県北西部地区を主とした縄文前期遺跡の分布と駒形遺跡における生産活動	242
1	遺跡分布	242
2	駒形遺跡の生産活動	259
	報告書抄録	巻末

## 挿図目次

第 1 図	調査区域と確認トレンチ配置図・周辺地形	2	第 33 図	SI013 (3)	50
第 2 図	グリッドの設定	3	第 34 図	SI014 (3)	52
第 3 図	周辺遺跡分布図	11	第 35 図	SI014 (4)	53
第 4 図	各地区の位置と遺構配置	13	第 36 図	SI015 (2)	55
第 5 図	A 地区遺構分布図 (1)	14	第 37 図	SI016	55
第 6 図	A 地区遺構分布図 (2)	15	第 38 図	SI017	55
第 7 図	A 地区遺構分布図 (3)	16	第 39 図	SI018	56
第 8 図	A 地区遺構分布図 (4)	17	第 40 図	B 地区土坑	58
第 9 図	SI001	19	第 41 図	B 地区土坑出土土器	60
第 10 図	SI002	19	第 42 図	B 地区陥穴	61
第 11 図	SI003 (1)	21	第 43 図	B 地区遺構外出土土器 (1)	63
第 12 図	SI003 (2)	22	第 44 図	B 地区遺構外出土土器 (2)	64
第 13 図	SI004	23	第 45 図	C 地区遺構分布図 (1)	65
第 14 図	SI005	25	第 46 図	C 地区遺構分布図 (2)	66
第 15 図	SI006	25	第 47 図	C 地区遺構分布図 (3)	67
第 16 図	SI007	26	第 48 図	C 地区遺構分布図 (4)	68
第 17 図	SI008・SK007 (土坑)	27	第 49 図	C 地区遺構分布図 (5)	69
第 18 図	SI009	28	第 50 図	C 地区土坑 (1)	71
第 19 図	SI010	29	第 51 図	C 地区土坑 (2)	72
第 20 図	SI011	30	第 52 図	C 地区陥穴 (1)	73
第 21 図	A 地区土坑	32	第 53 図	C 地区陥穴 (2)	74
第 22 図	A 地区炉穴	34	第 54 図	C 地区遺構外出土土器	76
第 23 図	A 地区陥穴	35	第 55 図	D 地区遺構分布図 (1)	78
第 24 図	A 地区遺構外出土土器 (1)	37	第 56 図	D 地区遺構分布図 (2)	79
第 25 図	A 地区遺構外出土土器 (2)	40	第 57 図	D 地区遺構分布図 (3)	79
第 26 図	A 地区遺構外出土土器 (3)	41	第 58 図	D 地区遺構分布図 (4)	80
第 27 図	B 地区遺構分布図 (1)	42	第 59 図	D 地区遺構分布図 (5)	81
第 28 図	B 地区遺構分布図 (2)	43	第 60 図	D 地区遺構分布図 (6)	82
第 29 図	SI012 (1)	45	第 61 図	SI019 (1)	84
第 30 図	SI012 (2)	46	第 62 図	SI019 (2)	85
第 31 図	SI013 (1)・SI014 (1)・SI015 (1)	47	第 63 図	SI019 (3)	86
第 32 図	SI013 (2)・SI014 (2)	48	第 64 図	SI020	88
			第 65 図	SI021	89
			第 66 図	SI022	91



第67図	SI023 (1)	92	第103図	SI041~SI043・SI047 (3)	145
第68図	SI023 (2)	93	第104図	SI044	147
第69図	SI024	95	第105図	SI045	148
第70図	SI025	95	第106図	SI046	149
第71図	SI026	96	第107図	SI048	151
第72図	SI027	96	第108図	SI049	151
第73図	SI028 (1)	98	第109図	SI050	152
第74図	SI028 (2)	99	第110図	SI051 (1)	153
第75図	SI029 (1)	100	第111図	SI051 (2)	154
第76図	SI029 (2)	101	第112図	SI052	155
第77図	D地区土坑	104	第113図	E地区土坑	158
第78図	D地区炉穴・集石土坑	107	第114図	E地区炉穴・陥穴	160
第79図	D地区土坑・炉穴・集石土坑出土土器 .....	108	第115図	E地区遺構外貝層	160
第80図	D地区遺構外出土土器 (1)	109	第116図	E地区ピット群	162
第81図	D地区遺構外出土土器 (2)	111	第117図	E地区土坑・炉穴・ピット群・ 遺構外貝層出土土器	163
第82図	D地区遺構外出土土器 (3)	113	第118図	E地区遺構外出土土器 (1)	165
第83図	D地区遺構外出土土器 (4)	115	第119図	E地区遺構外出土土器 (2)	167
第84図	E地区遺構分布図 (1)	118	第120図	E地区遺構外出土土器 (3)	169
第85図	E地区遺構分布図 (2)	119	第121図	石器 (1)	171
第86図	E地区遺構分布図 (3)	120	第122図	石器 (2)	172
第87図	E地区遺構分布図 (4)	121	第123図	石器 (3)	173
第88図	SI031・SI035 (1)	123	第124図	石器 (4)	175
第89図	SI031・SI035 (2)	124	第125図	石器 (5)	176
第90図	SI032	126	第126図	石器 (6)	178
第91図	SI033 (1)	127	第127図	石器 (7)	180
第92図	SI033 (2)	128	第128図	石器 (8)	181
第93図	SI034 (1)	130	第129図	貝刃	210
第94図	SI034 (2)	131	第130図	土器片鏟	210
第95図	SI036	132	第131図	不明土製品	210
第96図	SI037・SI038 (1)	134	第132図	石製・土製・牙製垂飾	210
第97図	SI037・SI038 (2)	135	第133図	貝種組成	214
第98図	SI037・SI038 (3)	136	第134図	貝類計測値分布	216
第99図	SI039	137	第135図	SI030・SK067	218
第100図	SI040	139	第136図	近世以降の遺物	218
第101図	SI041~SI043・SI047 (1)	141	第137図	出土土器集成 (1)	220
第102図	SI041~SI043・SI047 (2)	143	第138図	出土土器集成 (2)	222

第139図	出土土器集成(3)……………	224	第147図	千葉県北西部地域を主とした前期遺跡分布(1)……………	256
第140図	出土土器集成(4)……………	227	第148図	千葉県北西部地域を主とした前期遺跡分布(2)……………	257
第141図	出土土器集成(5)……………	229	第149図	千葉県北西部地域を主とした前期遺跡分布(3)……………	258
第142図	竪穴住居跡集成(1)……………	232	第150図	時期別石器組成……………	260
第143図	竪穴住居跡集成(2)……………	234	第151図	石器三角グラム……………	260
第144図	竪穴住居跡集成(3)……………	236			
第145図	時期別遺構分布(1)……………	239			
第146図	時期別遺構分布(2)……………	241			

## 表 目 次

第1表	発掘調査一覧……………	1	第15表	E地区縄文石器器種組成表……………	205
第2表	調査遺構新旧対照表……………	4	第16表	E地区縄文石器石材組成表……………	205
第3表	周辺遺跡一覧……………	7	第17表	石器・垂飾・土器片鏢・不明土製品・貝刀属性表……………	206
第4表	遺構一覧……………	182	第18表	貝サンプル一覧……………	212
第5表	縄文土器観察表……………	184	第19表	動物遺存体種名一覧……………	212
第6表	縄文石器器種・石材組成表……………	202	第20表	貝類同定結果……………	213
第7表	A地区縄文石器器種組成表……………	202	第21表	貝種組成表……………	214
第8表	A地区縄文石器石材組成表……………	202	第22表	貝類計測値分布……………	215
第9表	B地区縄文石器器種組成表……………	203	第23表	発掘資料動物遺存体同定結果……………	216
第10表	B地区縄文石器石材組成表……………	203	第24表	サンプル検出魚類遺存体同定結果……………	217
第11表	C地区縄文石器器種組成表……………	203	第25表	前期竪穴住居跡の床面積……………	231
第12表	C地区縄文石器石材組成表……………	203	第26表	水系・時期別遺跡数……………	242
第13表	D地区縄文石器器種組成表……………	204	第27表	千葉県北西部の縄文前期遺跡……………	245
第14表	D地区縄文石器石材組成表……………	204			

## 図 版 目 次

巻首図版	花積下層式土器、 二ツ木・関山・黒浜式土器(右から)	図版4	竪穴住居跡3 SI014貝層出土状況、SI014貝層・土器出土状況、SI014、SI016~SI018、SI019遺物出土状況、SI019
図版1	遺跡周辺航空写真	図版5	竪穴住居跡4 SI020、SI021土器出土状況、SI021、SI022遺物出土状況、SI022、SI023遺物出土状況、SI023、SI024土器出土状況
図版2	竪穴住居跡1 SI001、SI002、SI003遺物出土状況、SI003貝層出土状況、SI003~SI006	図版6	竪穴住居跡5 SI024~SI029、SI031、SI032
図版3	竪穴住居跡2 SI007、SI007炉跡、SI008・SK007、SI009~SI013		

- 図版7 竪穴住居跡6 SI033、SI034、SI037~SI038、SI040、SI041~SI044
- 図版8 竪穴住居跡7 SI045、SI048、SI050遺物出土状況、SI050、SI051遺物出土状況、SI051、SI052遺物出土状況、SI052
- 図版9 土坑・陥穴1 SK001~SK006、SK012、SK017~SK019、SK021~SK023
- 図版10 土坑・陥穴2 SK024、SK025、SK029、SK031、SK032、SK034、SK036・SK037、SK041、SK042、SK044~SK046
- 図版11 土坑・陥穴3 SK047、SK049、SK050貝層出土状況、SK050貝層出土状況(拡大)、SK050~SK052、SK057、SK060~SK062、SK064
- 図版12 土坑・陥穴4 SX001礫群出土状況、SX001、SK067墨書土器出土状況、SK069、SK074貝層出土状況、SK074貝層出土状況、SK075遺物出土状況、SK079貝層出土状況、SK079貝層出土状況、SK081、SX003貝層出土状況、SX003貝層出土状況(拡大)
- 図版13 縄文土器1 SI003-1、SI003-2、SI003-7、SI003-8、SI003-15、SI003-16
- 図版14 縄文土器2 SI003-17、SI005-9、SI006-1、SI006-4、SI007-1、SI007-10、SI009-1
- 図版15 縄文土器3 SI011-1、SI011-2、SI011-3、SI011-4、SK012-1、A地区遺構外25、A地区遺構外39、A地区遺構外40
- 図版16 縄文土器4 SI012-4、SI012-5、SI012-6、SI012-7、SI012-8、SI013-5、SI013-12、SI014-1
- 図版17 縄文土器5 SI014-2、SI014-3、SI014-4、SI014-5、SI014-6、SI014-7
- 図版18 縄文土器6 SI014-8、SI014-9、SI014-10、SI014-11、SI014-12、SI014-13
- 図版19 縄文土器7 SI014-14、SI014-20、SI014-21、SI017-6、B地区遺構外16、B地区遺構外24、SK034-1
- 図版20 縄文土器8 SI019-4、SI019-6、SI019-7、SI019-9、SI019-10、SI019-12、SI019-13
- 図版21 縄文土器9 SI019-14、SI019-15、SI019-21、SI019-31、SI019-32、SI019-33、SI019-34、SI019-35
- 図版22 縄文土器10 SI019-36、SI020-3、SI021-1、SI021-2、SI021-3、SI021-8、SI021-9、SI022-8
- 図版23 縄文土器11 SI022-9、SI023-1、SI023-2、SI023-3、SI023-5、SI023-6、SI023-8、SI023-18
- 図版24 縄文土器12 SI024-1、SI027-5、SI028-3、SI029-8
- 図版25 縄文土器13 D地区遺構外91~95、D地区遺構外113、D地区遺構外136~139
- 図版26 縄文土器14 SI031-3、SI031-16、SI031-17、SI033-13、SI033-25、SI034-7、SI037-16、SI038-6
- 図版27 縄文土器15 SI038-10、SI038-25、SI038-26、SI039-4、SI040-12、SI041-6、SI042-13、SI044-4、SI045-11
- 図版28 縄文土器16 SI045-16、SI045-17、SI047-3、SI051-17、SI051-19、SI069-2、SK075-8、SX002-24、SX002-25
- 図版29 縄文土器17 E地区遺構外41、E地区遺構外42、E地区遺構外43、E地区遺構外44、E地区遺構外45、E地区遺構外73、SK067-1、SK067-1墨書拡大
- 図版30 縄文土器18上 SI001~SI003  
縄文土器18下 SI004、SI005
- 図版31 縄文土器19上 SI006、SI007  
縄文土器19下 SI008~SI010
- 図版32 縄文土器20上 SK001、SK002、SK004~SK007  
縄文土器20下 A地区遺構外(1)
- 図版33 縄文土器21上 A地区遺構外(2)

- 縄文土器21下 A地区遺構外(3)
- 図版34 縄文土器22上 A地区遺構外(4)
- 縄文土器22下 SI012、SI013
- 図版35 縄文土器23上 SI014、SI015~SI017
- 縄文土器23下 SI018
- 図版36 縄文土器24上 SK019~SK025、SK027~SK030
- 縄文土器24下 B地区遺構外
- 図版37 縄文土器25上 SK035、SK036、SK038~SK042、C地区遺構外
- 縄文土器25下 SI019(1)
- 図版38 縄文土器26上 SI019(2)
- 縄文土器26下 SI020、SI021
- 図版39 縄文土器27上 SI022
- 縄文土器27中 SI023~SI025
- 縄文土器27下 SI026、SI027
- 図版40 縄文土器28上 SI028
- 縄文土器28中 SI029
- 縄文土器28下 SK050~SK052
- 図版41 縄文土器29上 SK053、SK054、SK056~SK059、SK061、SK062、SX001
- 縄文土器29下 D地区遺構外(1)
- 図版42 縄文土器30上 D地区遺構外(2)
- 縄文土器30下 D地区遺構外(3)
- 図版43 縄文土器31上 D地区遺構外(4)
- 縄文土器31下 D地区遺構外(5)
- 図版44 縄文土器32上 D地区遺構外(6)
- 縄文土器32下 D地区遺構外(7)
- 図版45 縄文土器33上 SI031
- 縄文土器33下 SI032
- 図版46 縄文土器34上 SI033(1)
- 縄文土器34下 SI033(2)
- 図版47 縄文土器35上 SI034
- 縄文土器35下 SI035
- 図版48 縄文土器36上 SI036、SI037
- 縄文土器36下 SI038(1)
- 図版49 縄文土器37上 SI038(2)、SI039
- 縄文土器37中 SI040
- 縄文土器37下 SI041(1)
- 図版50 縄文土器38上 SI041(2)
- 縄文土器38中 SI042
- 縄文土器38下 SI043
- 図版51 縄文土器39上 SI044
- 縄文土器39中 SI045
- 縄文土器39下 SI046~SI049
- 図版52 縄文土器40上 SI050、SI051
- 縄文土器40下 SI052
- 図版53 縄文土器41上 SK069、SK073、SK074~SK077、SK079、SK080、SX002、SX003
- 縄文土器41下 E地区遺構外(1)
- 図版54 縄文土器42上 E地区遺構外(2)
- 縄文土器42下 E地区遺構外(3)
- 図版55 縄文土器43上 E地区遺構外(4)
- 縄文土器43下 底部外面の文様
- 図版56 縄文土器44 前期前半土器の文様(拡大)
- 図版57 石器1 石鏃(1)、石鏃(2)
- 図版58 石器2 石鏃(3)、石鏃(4)
- 図版59 石器3 石鏃(5)・模倣石器・尖頭器、石鏃・石匙
- 図版60 石器4 打製石斧、磨製石斧・磨石類(1)
- 図版61 石器5 磨石類(2)、磨石類(3)・石鏃
- 図版62 垂飾・土製品 上 石製・土製・牙製垂飾、垂飾・土製品 下 土器片鏃・不明土製品
- 図版63 貝刃・貝類
- 図版64 魚骨・獣骨・炭化物

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構は、常磐新線（つくばエクスプレス）建設に関連して「柏北部東地区土地区画整理事業」を計画した。実施に当たり、千葉県教育委員会へ事業予定地内の埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて照会した結果、予定地内には花前Ⅰ遺跡・花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・館林Ⅱ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡・大松遺跡・原畑遺跡・小山台遺跡・寺下前遺跡・宮前遺跡・八反目台遺跡の合計14遺跡（位置は当地区発掘調査報告書1（以下「柏北部東1」）第1図を参照されたい）が所在する旨、回答があった。千葉県教育委員会は独立行政法人都市再生機構とその取扱いについて協議した結果、現状換地等により現状保存が可能な部分を除き記録保存の措置を講ずることとし、独立行政法人都市再生機構は発掘調査を財団法人千葉県教育振興財団（当時は財団法人千葉県文化財センター）に委託することになった。

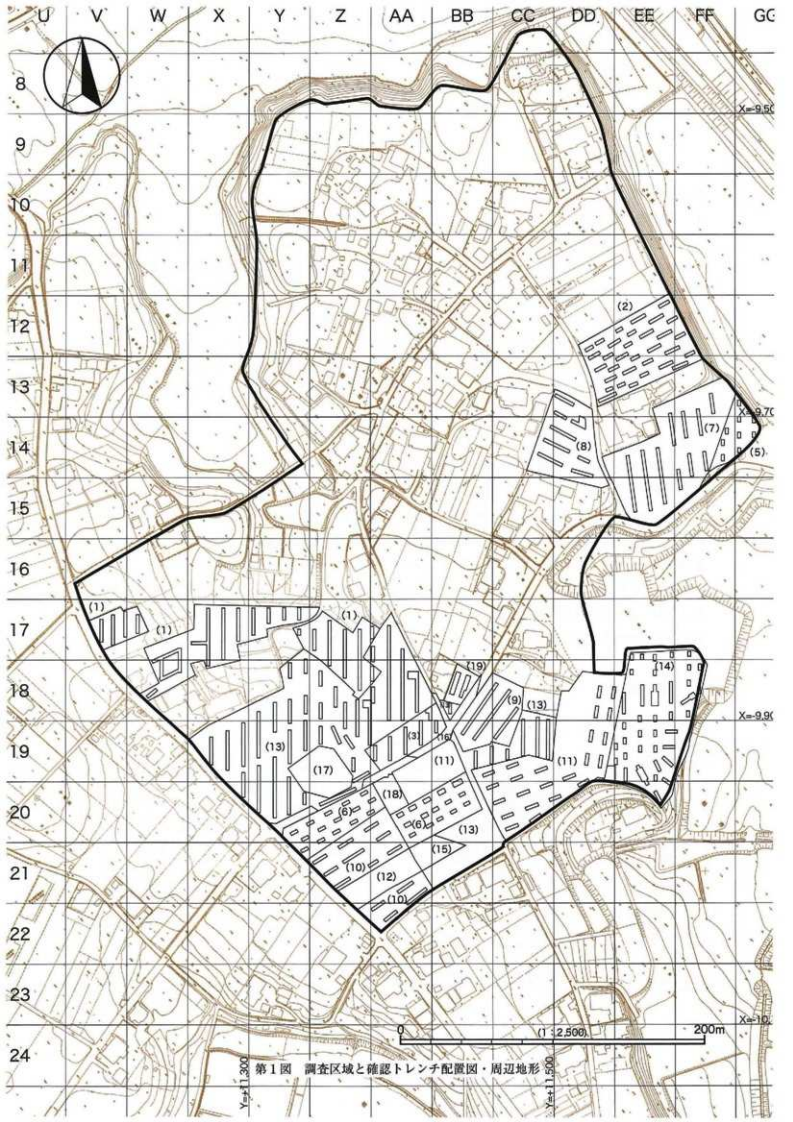
今回報告する内容は、平成12年6月から平成17年9月にかけて断続的に行われた第1次から第19次までの発掘調査（第1図）のうち、縄文時代以降を対象として平成19・20年度に実施した整理作業の成果である。調査対象面積は49,153.6㎡で、上層が8,748.6㎡の確認調査と10,099㎡の本調査、下層が1,936㎡の確認調査と1,644㎡の本調査を実施した。主な成果としては、縄文時代前期初頭から末葉にかけて形成された集落の検出が挙げられる。なお、旧石器時代については別途報告される予定である。

発掘調査及び整理作業は、調査部（現調査研究部）西部調査事務所及び調査研究部整理課がその任に当たったが、各年度の担当職員、作業内容等は以下のとおりである。なお、整理作業に関しては、縄文時代編に携わった担当職員と作業内容のみを記載した。

### (1) 発掘調査

第1表 発掘調査一覧

調査区	年度	期 間	部長	所長	担 当 者	対象面積 (㎡)	確認調査 (㎡)		本調査 (㎡)	
							上層	下層	上層	下層
(1)	平成12	12.6.1～12.9.29	沼澤 豊	及川淳一	岡田誠造・横山 仁・中道俊一	5,227	826	280	690	187
(2)	平成12	13.1.9～13.3.29	沼澤 豊	及川淳一	岡田誠造	3,364	440	188	1,204	362
(3)	平成12	13.1.9～13.1.31	沼澤 豊	及川淳一	横山 仁	1,128	158	63	0	0
(4)	平成13	14.1.7～14.2.28	佐久間豊	田坂 浩	角谷敏昭・織田良昭	4,500	456	254	139	140
(5)	平成14	14.5.1～14.5.31	齋本 勝	田坂 浩	織田良昭	715	72	32	0	0
(6)	平成14	15.2.3～15.3.5	齋本 勝	田坂 浩	織田良昭	2,810	281	116	0	360
(7)	平成14	15.2.3～15.2.14	齋本 勝	田坂 浩	嶋田清司	4,540	454	0	0	0
(8)	平成14	15.2.17～15.3.27	齋本 勝	田坂 浩	嶋田清司	1,980	238	79	1,090	0
(9)	平成15	15.4.7～15.4.30	齋本 勝	田坂 浩	岸本雅人	1,328	212	60	460	0
(10)	平成15	15.4.7～15.5.9	齋本 勝	田坂 浩	嶋田清司	2,561	288	132	1,100	0
(11)	平成15	15.5.1～15.8.18	齋本 勝	田坂 浩	岸本雅人・大澤正次	5,697.6	2,283.6	248	980	210
(12)	平成15	15.7.1～15.8.5	齋本 勝	田坂 浩	大澤正次	814	—	32	814	0
(13)	平成15	15.10.1～16.2.27	齋本 勝	田坂 浩	岸本雅人	11,848	1,530	380	3,400	0
(14)	平成16	16.5.11～16.5.26	矢戸三男	田坂 浩	嶋田清司	205	40	8	0	0
(15)	平成16	16.6.16～16.7.30	矢戸三男	田坂 浩	落合章雄	408	408	20	222	185
(16)	平成16	16.8.18～16.8.25	矢戸三男	田坂 浩	落合章雄	490	490	20	0	0
(17)	平成16	16.11.25～16.11.26	矢戸三男	田坂 浩	岡田光広	921	48	—	0	—
(18)	平成16	17.1.19～17.1.31	矢戸三男	田坂 浩	久高将博	339	339	12	0	0
(19)	平成17	17.9.20～17.9.30	矢戸三男	田坂 浩	上野潤一郎	278	85	12	0	0



## (2) 整理作業

平成19年度

期 間 平成19年4月2日～平成20年3月31日

部長 矢戸三男

課長 高田 博

担当職員 横山 仁 (全体)、新田浩三・山岡磨由子 (縄文石器関係)

内 容 整理作業 分類・選別、接合・復元、実測・拓本、トレース、挿図作成の一部

平成20年度

期 間 平成20年4月1日～平成21年3月31日

部長 大原正義

課長 高田 博

担当職員 上守秀明 (全体)、栗田剛久 (第2章第9節の原稿執筆)

内 容 整理作業 写真撮影、挿図作成の一部・図版作成、原稿執筆、報告書の刊行

## 2 調査の方法

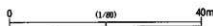
発掘調査の開始に当たり、調査対象区域に公共座標を基準として40m×40mの大グリッドを設定し、さらにその大グリッド内を4m×4mに分割し、100個の小グリッドに細分した。大グリッドは西から東へA、B、C、…Z、AA、BB…、北から南へ1、2、3、…と記号を付け、A1、B2、…と呼称した。小グリッドは北西隅を起点として西から東へ00、01、02、…、北から南へ00、10、20、…と番号を付けた。これらを組み合わせて表すと、例えばY19-24のような呼称となる(第2図)。

発掘調査は上層の確認調査・本調査に続いて、下層の確認調査・本調査へと順に実施した。上層の調査は対象面積の10%を原則にトレンチを設定し、遺構及び遺物の分布状況を調べ、本調査範囲を確定し、本調査を実施した。遺構の調査は表土除去後、覆土層観察用のベルトを設定し、掘り下げ、覆土層断面図や平面図などの記録を作成した。

本調査にあたっては、調査年次毎に遺構種別毎の通し番号が付されていた。各遺構の種別は堅穴住居跡にはSI、土坑等にはSK、その他にはSXが付されていたが、一部混同も認められた。各遺構とも年次毎に001から番号が付く煩雑さもあるため、整理段階で19次に亘る調査範囲を便宜的ながらAからEまでの5地区にまとめ直したのを機に、地区を優先した上で種別毎に遺構番号を通し番号に変更した。なお、新旧対応表は第2表のとおりである。

上層の本調査終了後、調査対象面積の4%を原則にグリッドを設定し、下層の確認調査を実施した。その結果、一定の石器の分布状況が認められたものについては本調査範囲を確定し、本調査を実施して発掘を完了した。

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20	22								
30		33							
40			44						
50				55					
60					66				
70						77			
80							88		
90									99



第2図 グリッドの設定

第2表 調査遺構新旧対照表

## 【A地区】

新遺構番号	旧遺構番号	種別
SI001	(2) SI001	住居跡
SI002	(2) SI002	住居跡
SI003	(2) SI003	住居跡
SI004	(2) SI004	住居跡
SI005	(2) SI006	住居跡
SI006	(8) SI001	住居跡
SI007	(8) SI002	住居跡
SI007	(8) SI003	住居跡
SI009	(8) SI004	住居跡
SI010	(8) SI005	住居跡
SI011	(8) SI006	住居跡
SK001	(2) SK001	土坑
SK002	(2) SK002	土坑
SK003	(2) SK005	土坑
SK004	(2) SK006	土坑
SK005	(8) SK001	土坑
SK006	(8) SK002	土坑
SK007	(8) SK003	土坑
SK008	(2) SX001	炉穴
SK009	(2) SX002	炉穴
SK010	(2) SX003	炉穴
SK011	(2) SX004	炉穴
SK012	(2) SX005	炉穴
SK013	(2) SX006	炉穴
SK014	(2) SX007	炉穴
SK015	(2) SX008	炉穴
SK016	(2) SK003	陥穴
SK017	(2) SK004	陥穴
SK018	(2) SK007	陥穴

## 【B地区】

No	旧遺構名	種別
SI012	(1) SI001	住居跡
SI013	(1) SI002	住居跡
SI014	(1) SI003	住居跡
SI015	(1) SI004	住居跡
SI016	(1) SI005	住居跡
SI017	(1) SI006	住居跡
SI018	(1) SI007	住居跡
SK019	(1) SK003	土坑
SK020	(1) SK004	土坑
SK021	(1) SK007	土坑
SK022	(1) SK008	土坑
SK023	(1) SK009	土坑
SK024	(1) SK010	土坑
SK025	(1) SK011	土坑
SK026	(1) SK015	土坑
SK027	(1) SK018	土坑
SK028	(1) SK020	土坑
SK029	(1) SK021	土坑
SK030	(1) SK022	土坑
SK031	(1) SK005	陥穴
SK032	(1) SK016	陥穴

## 【C地区】

新遺構番号	旧遺構番号	種別
SK033	(13) SK003	土坑
SK034	(13) SK004	土坑
SK035	(13) SK005a	土坑
SK036	(13) SK006a	土坑
SK037	(13) SK006b	土坑
SK038	(13) SK007	土坑
SK039	(13) SK008	土坑
SK040	(13) SK010	土坑
SK041	(13) SK019	土坑
SK042	(14) SK001	土坑
SK043	(14) SK002	土坑
SK044	(3) SK001	陥穴
SK045	(13) SK001	陥穴
SK046	(13) SK002	陥穴
SK047	(13) SK005b	陥穴
SK048	(13) SK009	陥穴
SK049	(13) SK017	陥穴

## 【D地区】

No	旧遺構名	種別
SI019	(4) SI001	住居跡
SI020	(9) SI001	住居跡
SI021	(9) SI002	住居跡
SI022	(11) SI001	住居跡
SI023	(11) SI002	住居跡
SI024	(11) SI003	住居跡
SI025	(11) SI004	住居跡
SI026	(11) SI005	住居跡
SI027	(11) SI006	住居跡
SI028	(13) SI001	住居跡
SI029	(13) SI002	住居跡
SI030	(11) SI007	住居跡
SK050	(4) SX001	土坑
SK051	(11) SK001	土坑
SK052	(11) SK002	土坑
SK053	(11) SK003	土坑
SK054	(11) SK004	土坑
SK055	(11) SK005	土坑
SK056	(11) SK006	土坑
SK057	(11) SK007	土坑
SK058	(13) SK013	土坑
SK059	(13) SK014	土坑
SK060	(4) SK001	炉穴
SK061	(4) SK002	炉穴
SK062	(4) SK003	炉穴
SK063	(4) SK004	炉穴
SK064	(4) SK005	炉穴
SK065	(4) SK006	炉穴
SK066	(11) SX001	炉穴
SK067	(11) SK008	土坑
SX001	(9) SX001	集石遺構



【E地区】

No	旧遺構名	種 別	No	旧遺構名	種 別
SI031	(10) SI001	住 居 跡	SI050	(15) SI001	住 居 跡
SI032	(10) SI002	住 居 跡	SI051	(15) SI002	住 居 跡
SI033	(10) SI003	住 居 跡	SI052	(15) SI003	住 居 跡
SI034	(10) SI004	住 居 跡	SK068	(6) SK001	土 坑
SI035	(12) SI001	住 居 跡	SK069	(10) SK002	土 坑
SI036	(12) SI002	住 居 跡	SK070	(12) SK001	土 坑
SI037	(12) SI003	住 居 跡	SK071	(12) SK003	土 坑
SI038	(12) SI004	住 居 跡	SK072	(12) SK004	土 坑
SI039	(12) SI006	住 居 跡	SK073	(12) SK005	土 坑
SI040	(12) SI007	住 居 跡	SK074	(12) SK006	土 坑
SI041	(12) SI008	住 居 跡	SK075	(12) SK007	土 坑
SI042	(12) SI009	住 居 跡	SK076	(13) SK016	土 坑
SI043	(12) SI010	住 居 跡	SK077	(13) SK018	土 坑
SI044	(12) SI011	住 居 跡	SK078	(15) SK001	土 坑
SI045	(12) SI012	住 居 跡	SK079	(13) SX002	土 坑
SI046	(12) SI013	住 居 跡	SK080	(12) SX001	炉 穴 跡
SI047	(12) SI015	住 居 跡	SK081	(10) SK001	陥 穴
SI048	(13) SI003	住 居 跡	SX002	(13) SX003	ビツト群
SI049	(13) SI004	住 居 跡	SX003	(10) SX001	遺構外貝層

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境（第1図）

千葉県北部に展開する下総台地は、広範な関東平野の一部を形成する。駒形遺跡が所在する台地は、下総台地北西部に属する柏市域の北部に位置する。この下総台地北西部は現在の利根川・江戸川水域を介して埼玉・茨城両県に接し、巨視的には関東平野の中央部近くまで貫入するかの位置にある。台地には大小河川やその支流によって開析された幾多の谷地形が入り込み複雑な地形を呈し、広大な平坦面を幾つかの台地に区分する。下総台地南東部は標高130m以上と最も高く、その付近では境界を接する上総丘陵の標高を一時凌駕するが、北西部に向かい漸次低平となり遺跡近隣の県北西端では標高10m前後となる。

駒形遺跡周辺の台地は標高約13～18mを測り、沖積層からなる低地との比高差は最大でも約8mを超えることはない。この台地は現在、利根川から南西方向に流入する二つの支谷に挟まれた地形を呈す。周辺一帯は江戸期の利根川東遷以前、小貝川に合流していた古常陸川の水系にあったと言え、古鬼怒湾に属する古常陸川湾奥部の柏・我孫子低地の北西端に面している。いわゆる縄文海進の盛期には、付近の古常陸川谷に谷奥干潟が形成されていたと考えられている。富士見遺跡・大松遺跡を含めた台地は南西部を基部とし、柏・我孫子低地に向かって半島状に突出している。駒形遺跡はこの台地の北東部を占めており、遺跡の東側と、富士見遺跡と分別される北側からさらに小支谷が流入している。

### 2 周辺遺跡の発掘調査歴と概要（第3表・第3図）

当地区周辺遺跡の概要と位置を第3表・第3図に示した。時代別概要については、既に「柏北部東Ⅰ」で述べているので、今回は報告内容の主要部分となる縄文時代の遺跡に絞って概括するが、それでも図面内に示し得た遺跡は83を数える。本事業による駒形遺跡（Ⅰ）～館林（Ⅱ）遺跡（Ⅳ）を対象とした大規

複な発掘調査が計画・実施される以前、柏市北部地域で初めて広域な発掘調査が行われたのは、1971（昭和46年）～1972年（同47年）に実施された日本住宅公団（当時）による北柏地区土地区画整理事業に伴う鴻ノ巣（Ⅱ）遺跡（52）の調査を嚆矢とする。次いで1977（昭和52年）～1981年（同56年）には日本道路公団による常磐自動車道建設に伴い、今回の柏北部東地区に隣接したエリアで花前（Ⅰ）遺跡（9）～元割遺跡（22）という複数の遺跡を対象とした大規模調査が実施されている。このうち花前（Ⅰ）遺跡（9）～館林（Ⅱ）遺跡（14）は、今回の事業対象地と重複する。また現在、本事業とほぼ併行する形で千葉県県土整備部による柏北部中央地区区画整理事業が実施されており、現在までのところ北花崎遺跡（33）～原山遺跡（39）の7遺跡から縄文時代の遺構・遺物が検出されている。

今回取り上げる周辺遺跡は、古鬼怒湾に属する古常陸川湾奥部の三ヶ尾低地、柏・我孫子低地、手賀・印旛沼湾奥部の手賀沼低地というそれぞれの水系に所在する柏市北東部・野田市南東部の主な遺跡である<sup>1)</sup>。個々については第3表の記載を参照していただくが、大別時期毎に概括しておきたい。

草創期は元割遺跡（22）で石楯・植刃を主体としたブロックが検出されている。早期前半弥生文期以降では、柏・我孫子低地区に属する駒形遺跡（1）をはじめとする柏北部東地区・常磐道関連の諸遺跡で土器等の遺物が検出されている。明確な居住の痕跡は認められないものの、僅かに駒形遺跡では稲荷台式細片を伴う集石土坑が1基検出されている。一方、狩猟用と考えられる陥穴は三ヶ尾低地区の高砂遺跡（29）をはじめ、駒形遺跡や溜井台遺跡（38）など柏北部東地区・同中央地区の諸遺跡で検出されている。溝型のものが主体となっており、遺物を伴わないものの草創期～早期初頭の所産と考えられる。早期後半条痕文期になると、古鬼怒湾における海面上昇に伴い、各水系とも遺跡数が増加する。炉穴群が構築される遺跡が当事業区内の小山台遺跡（5）をはじめ、柏・我孫子低地区を中心に数多く形成される。三ヶ尾低地区では狭小な調査範囲であったが、野田市下三ヶ尾初咲遺跡（82）で鶴が島台期の堅穴住居跡1軒と鶴が島台～茅山上層式期の炉穴群が検出され、発掘調査の稀有な地域の事例として注目される。

前期初頭花積下層式期では遺跡数が減少する。その中でも駒形遺跡、富士見遺跡（2）では堅穴住居跡が検出されている。前期中半二ツ木・関山期では土器等の遺物が検出される遺跡は若干増加するものの、現在のところ両期にわたって堅穴住居跡が検出されるのは駒形遺跡のみである。富士見遺跡・大松遺跡（3）では関山式後半期の堅穴住居跡が検出されている。前期中葉黒浜式期になると堅穴住居跡が検出された遺跡数が増大し、奥東京湾側同様に中小規模の集落が広く展開する。三ヶ尾低地区では山神宮裏遺跡（30）、手賀・印旛沼低地区では柏北部中央地区の屎敷内遺跡（34）、原山遺跡、鴻ノ巣（Ⅱ）遺跡が挙げられる。柏・我孫子低地区では駒形遺跡、富士見遺跡、大松遺跡、原畑遺跡（4）、小山台遺跡、寺下台遺跡（6）、花前（Ⅰ）遺跡など当事業区の諸遺跡をはじめ、上前留遺跡（49）、香取神社遺跡（50）、宿連寺遺跡（51）など数多く所在するが、このうち富士見遺跡は発掘調査途上の数ながら100軒以上検出され、黒浜式期では一つの集落と考えられる駒形・大松遺跡の住居跡数を加えると130軒以上の大規模集落となり、当該地域の拠点集落となることは確実である。また、ほとんどすべての遺跡で住居跡を中心に少なからず遺構内貝層が形成されていることも特筆される。前期後半になると再び遺跡数は減少し、柏・我孫子低地区の花前（Ⅰ）遺跡、花前（Ⅱ）遺跡（10）、花前（Ⅲ）遺跡（11）、駒形遺跡で、諸磯・浮島式期、興津式期の小規模集落が見られる程度で、遺構内貝層の規模も総じて小さくなる。さらに事項で説明する中期になると遺構内貝層を形成する遺跡がなくなり、奥東京湾側と様相を異にする。

中期初頭では前期末葉に引き続き遺跡が稀薄になるが、これは全県の傾向である。僅かに高砂遺跡で集

石土坑Ⅰ基が検出されるのみである。中期前葉阿玉台・勝坂式期になると、柏・我孫子低地区を中心に再び遺跡数が増加する。特に常磐自動車道建設に伴う発掘調査では水砂(Ⅱ)遺跡(16)、水砂(Ⅰ)遺跡(17)、中山新田(Ⅱ)遺跡(19)、中山新田(Ⅰ)遺跡(20)、聖人塚遺跡(21)遺跡など、中小規模の該期集落が検出されている。中期中葉～後葉では土器等が出土する遺跡は前葉と同程度に所在するが、明確な規模の集落は常磐道事業地と本事業地を除き、ほとんど見られない。大松遺跡は一部、調査以前に掘削されたエリアがあるものの、堅穴住居跡79軒、土坑219基が環状構成となる中期前葉～後葉の集合・反復的居住を示す拠点集落である。また調査途上であるが、大松遺跡と指呼の位置にある小山台遺跡でも該期の住居跡、土坑が数多く検出されつつあり、大松遺跡と双環状集落になる可能性が高い。また、水砂(Ⅱ)遺跡では阿玉台Ⅲ式の集石土坑が1基検出されており、柏北部地域は若干であるが他に比べ、時期を超えて集石土坑が構築された可能性が指摘できそうである。中期中葉から後葉までの集合・反復的居住形態は崩壊した後、中期末葉～後期初頭では全体的に分散的居住の傾向を示すが、当該地区には明確な集落は検出されていない。後期前葉掘之内式期になると花前Ⅰ遺跡・花前Ⅱ遺跡に中小規模の集落が形成される程度で、周辺地区では遺物の出土は散見されるものの分散的居住後の集落再編成の状況が明確ではない。後期中葉以降はさらに遺跡数が減じ特筆すべきものもないので、「柏北部東Ⅰ」に記載された内容に準拠し省略する。

以上、駒形遺跡を含む縄文時代周辺遺跡について瞥見してきたが、これらの遺跡群が縄文海進盛期前後の古鬼怒湾区域の生産・居住様式解明のため、極めて重要であることが改めて認識できよう。

註1 地域区分は当時刊「研究紀要」19「第2節 千葉県貝塚分布地図・地名表」(西野1999)の記載に準じている。

第3表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	水系名	大別(個別)時期	遺跡種別	備考	文献番号
1	駒形遺跡	柏山小青田370他	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	早期(井草～稲荷台・駒ヶ岡台～芋山上層)、前期(花袋下層～諸磯・浮島～舞津)、中期(阿玉台・勝坂・加曾利E)、後期(称名寺～曾谷)	集落跡・貝塚・包蔵地	熱糸文期?集石土坑、前期初頭～末葉集落跡、遺構内貝層(川端貝塚)、炉穴	78
2	富士見遺跡	柏市小青田字立山158-1他	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	早期(井草～稲荷台・駒ヶ岡台～芋山上層)、前期(花袋下層～諸磯・浮島～舞津)、中期(五領ヶ台・阿玉台・勝坂・加曾利E)、後期(堀之内)	集落跡・貝塚・包蔵地	前期初頭集落跡、中葉拠点集落跡、遺構内貝層(前形・小青田貝塚)、炉穴	78
3	大松遺跡	柏市小青田字大松274-1他	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	前期(関山～諸磯・浮島)、中期(五領ヶ台・阿玉台Ⅰb～加曾利E IV)、後期(加曾利B・安行)	集落跡・貝塚・包蔵地	前期中葉集落跡、中期前葉～後葉拠点集落跡、遺構内貝層(大松貝塚)	48・78
4	歌壇遺跡	柏市大南字歌壇269-4他	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	前期(黒浜～諸磯・浮島)、中期(阿玉台・加曾利E)、後期(称名寺・堀之内・加曾利B・安行)	集落跡・貝塚・包蔵地	前期中葉集落跡、遺構内貝層	78
5	小山台遺跡	柏市大室字前畑374他	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	早期(田戸下層・茅山)、前期(花袋下層～諸磯・浮島～舞津)、中期(阿玉台・勝坂・加曾利E)、後期(称名寺～加曾利B)	集落跡・貝塚・包蔵地	前期中葉集落跡、中期中葉～後葉集落跡、遺構内貝層(前畑貝塚)、炉穴	78
6	寺下前遺跡	柏市大室字御前1060-1他	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	早期(茅山)、前期、中期	集落跡・貝塚・包蔵地	前・中期集落跡、遺構内貝層(大室貝塚)、炉穴	78
7	宮前遺跡	柏市大室宮前1615	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	後期	包蔵地		78
8	八反目台遺跡	柏市大室字東山1479-1他	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	前期、中期	包蔵地		78
9	花前(Ⅰ)遺跡	柏市船戸字花前1210他	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	早期(熱糸文・田戸下層・茅山)、前期(黒浜・浮島Ⅱ・Ⅲ・諸磯a・b)、中期(五領ヶ台・阿玉台Ⅱ)、後期(堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曾利B)	集落跡・貝塚・包蔵地	花前Ⅰ遺跡、前期中葉～後葉集落跡(遺構内貝層)、後期前葉集落跡	42・78

番号	遺跡名	所在地	水系名	大別(個別)時期	遺跡種別	備考	文献番号
10	花前(Ⅱ)遺跡	柏市船戸字新町1472他	古常陸川河奥部: 柏・我孫子低地	早期(井草・田戸上層・茅山)、前期(黒浜・浮島Ⅰ・Ⅱ・諸磯a・b)、中期(加曾利EⅡ)、後期(堀之内Ⅰ・加曾利B)	集落跡、包蔵地	花前Ⅱ-2遺跡、前期後葉集落跡、後期前葉集落跡	43・78
11	花前(Ⅲ)遺跡	柏市船戸新町1472他	古常陸川河奥部: 柏・我孫子低地	早期(井草→福寄台・茅山・茅山上層以降糸糸体匠層)、前期(浮島Ⅰ・諸磯a・b)、中期(加曾利EⅡ)、後期(堀之内Ⅰ)	集落跡、包蔵地	花前Ⅲ-1遺跡、前期後葉集落跡、炉穴	41・43・78
12	矢船(Ⅰ)遺跡	柏市船戸矢船1519他	古常陸川河奥部: 柏・我孫子低地	早期(福寄台・茅山)、前期(黒浜・浮島Ⅰ・興津・諸磯c・前期末縄文)、中期(阿玉台Ⅰb・Ⅳ・加曾利E)、後期(加曾利B)	包蔵地	矢船遺跡、土版块状耳環、前期葉集落跡	43・78
13	矢船(Ⅱ)遺跡	柏市船戸矢船1501他	古常陸川河奥部: 柏・我孫子低地	前期、中期、後期	包蔵地	土坑・陥穴	43・78
14	繪林(Ⅱ)遺跡	柏市船戸字繪林1781他	古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	早期(田戸下層・田戸上層・茅山)、前期(諸磯b・c・浮島・興津・十三菩提・前期末縄文)、中期(五領ヶ台・阿玉台Ⅰa~Ⅰb)、後期(加曾利B)	包蔵地		41・78
15	繪林(Ⅰ)遺跡	柏市船戸字繪林1731他	古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	早期(田戸下層・田戸上層・茅山)、前期(諸磯b・c・浮島・興津・十三菩提・前期末縄文)、中期(五領ヶ台・阿玉台Ⅰa~Ⅰb)、後期(加曾利B)	包蔵地		41・78
16	水砂(Ⅱ)遺跡	柏市大青田水砂1559他	古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	早期(福寄台・三戸・田戸下層・田戸上層・茅山)、前期(黒浜・諸磯・浮島・興津・前期末縄文)、中期(五領ヶ台・阿玉台Ⅰa~Ⅳ・勝坂・中時・加曾利EⅡ~Ⅲ)	集落跡、包蔵地	水砂遺跡、中期前葉集落跡、炉穴	41・78
17	水砂(Ⅰ)遺跡	柏市大青田水砂1551他	古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	早期(福寄台・三戸・田戸下層・田戸上層・茅山)、前期(黒浜・諸磯・浮島・興津・前期末縄文)、中期(五領ヶ台・阿玉台Ⅰa~Ⅳ・勝坂・中時・加曾利EⅡ~Ⅲ)	集落跡、包蔵地	水砂遺跡、中期前葉集落跡、炉穴	41・78
18	中山新田(Ⅲ)遺跡	柏市大青田字八野野744他	古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	早期(糸糸体匠末・茅山)、前期(黒浜・諸磯a・c・浮島)、中期(五領ヶ台・阿玉台Ⅱ・Ⅲ・加曾利E)、晚期(安行3a)	包蔵地	中山新田Ⅲ遺跡、炉穴、土坑	42・78
19	中山新田(Ⅱ)遺跡	柏市大青田字八野野744他	古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	早期(茅山)、前期(諸磯a・c・浮島Ⅰ~Ⅲ・興津・前期末縄文)、中期(五領ヶ台・阿玉台Ⅰb~Ⅳ・勝坂・中時・加曾利EⅡ~Ⅲ)、後期(加曾利B・安行)、晚期(安行3C・大淵A併行)	集落跡、包蔵地	中山新田Ⅱ遺跡、中期前葉集落跡、陥穴	42・48・78
20	中山新田(Ⅰ)遺跡	柏市十余二572他	古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	早期(井草→福寄台・三戸・田戸下層・子母口→茅山上層以降)、前期(岡山Ⅱ・黒浜・諸磯b・浮島Ⅱ・Ⅲ・興津・前期末縄文)、中期(五領ヶ台・阿玉台Ⅰa~Ⅳ・勝坂・中時・加曾利EⅡ)、後期(赤名寺・堀之内・加曾利B・安行1・2)、晚期(大淵A併行)	集落跡・貝塚・包蔵地	中山新田Ⅰ遺跡、中期前葉集落跡、炉穴	44・78
21	望人塚遺跡	柏市大青田字望人塚694他	古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	早期(紅島・田戸下層・子母口→茅山上層以降)、前期(黒浜・諸磯a・c・浮島Ⅱ・Ⅲ・興津・前期末縄文)、中期(五領ヶ台・阿玉台Ⅰa~Ⅳ・勝坂・中時・加曾利EⅡ)、後期(赤名寺・堀之内・加曾利B・安行1・2)、晚期(大淵A併行)	集落跡、包蔵地	望人塚遺跡、中期前葉集落跡、炉穴	44・78
22	元創遺跡	柏市青田新田飛塚字元創212他	古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	中期(勝坂)	包蔵地	元創遺跡、石器片終末→草創期の石鏡・短刀	44・78
23	出山遺跡	柏市大青田出山全区他	古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	中期(勝坂・加曾利E)、後期(加曾利BⅡ)	包蔵地		78
24	福寄山遺跡	柏市大青田福寄山296他	古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	中期(阿玉台)	包蔵地		78
25	小川山遺跡		古常陸川河奥部: 三ヶ尾低地	前期(浮島Ⅲ・諸磯b)、中期(阿玉台・加曾利E)	包蔵地		78

番号	遺跡名	所在地	水系名	大別(編別)時期	遺跡種別	備考	文献番号
26	川津台遺跡	柏市大昔田川津台1387地	古常陸川湾奥部: 三ヶ尾低地	中期(阿玉台・加曾利EⅡ)	包蔵地		78
27	大山遺跡	柏市大青山小波1603地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	中期(阿玉台・加曾利E)	包蔵地		78
28	宮木遺跡	柏市船戸宮本1159地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	後期(堀之内)	包蔵地		78
29	高砂遺跡	柏市船戸山高野高砂182地	古常陸川湾奥部: 三ヶ尾低地	早期(茅山)、前期(黒浜)、中期(五領ヶ台・阿玉台)、後期(堀之内・加曾利B)	集落跡、包蔵地	陥穴、五領ヶ台埋集石土坑	12・78
30	山神宮裏遺跡	柏市山高野宮本392地	古常陸川湾奥部: 三ヶ尾低地	早期(茅山)、前期(関山・黒浜・浮島)、中期(阿玉台・藤城・加曾利E)	集落跡、包蔵地	茅山期住居跡?・炉穴	13・78
31	正通寺貝塚	柏市正通寺内山420地	手賀・印旛沼湾奥部: 手賀沼低地	前期(黒浜)	集落跡・貝塚	遺構内貝層?	78
32	興福前遺跡	柏市大車正通寺156地	手賀・印旛沼湾奥部: 手賀沼低地	前期	包蔵地		78
33	北花崎遺跡	柏市花野井北花崎746地	手賀・印旛沼湾奥部: 手賀沼低地	前期	包蔵地		78
34	巖倉内遺跡	柏市正通寺364地	手賀・印旛沼湾奥部: 手賀沼低地	前期、後期	集落跡、包蔵地	前期住居跡	78
35	内山遺跡	柏市正通寺内山394-3地	手賀・印旛沼湾奥部: 手賀沼低地	早期(惣糸文・桑根文)	包蔵地	陥穴	78
36	大刑遺跡	柏市若葉字大刑227-1地	手賀・印旛沼湾奥部: 手賀沼低地	早期、前期	包蔵地	炉穴	78
37	須賀井遺跡	柏市若葉226-3地	手賀・印旛沼湾奥部: 手賀沼低地	前期、中期	包蔵地	陥穴	78
38	瀧井台遺跡	柏市若葉字瀧井台264-1地	手賀・印旛沼湾奥部: 手賀沼低地	早期(井草・重島・子母川・野島・茅山上層)、前期(黒浜・諸磯・浮島・前期未編文)、中期(阿玉台・加曾利E)、後期(堀之内・加曾利B)	包蔵地	陥穴	48・78
39	原山遺跡	柏市若葉字原山276-1地	手賀・印旛沼湾奥部: 手賀沼低地	前期(黒浜)	集落跡、包蔵地	住居跡・陥穴	78
40	北花崎遺跡	柏市花野井北花崎746地	手賀・印旛沼湾奥部: 手賀沼低地	後期(加曾利B)	包蔵地		78
41	田中小遺跡	柏市大富中野台1256	手賀・印旛沼湾奥部: 手賀沼低地	前期(黒浜)、中期(阿玉台)、後期(安行)	集落跡	住居跡、獨立建物跡	14・78
42	尾井戸(Ⅰ)遺跡	柏市花野井尾井戸1827地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	早期(鶴ヶ島台・茅山上層)、前期(関山・黒浜・諸磯・浮島)、中期(加曾利E)	集落跡	住居跡	11・78
43	尾井戸(Ⅱ)遺跡	柏市花野井尾井戸1764地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	早期(茅山)、前期(関山)、中期(阿玉台・加曾利E)	包蔵地		11・78
44	寺前遺跡	柏市花野井寺前一帯	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	前期(黒浜・浮島)、中期(加曾利E)、後期	集落跡、貝塚	住居跡	15・78
45	原(Ⅰ)遺跡	柏市花野井原970地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	中期(加曾利E)	包蔵地		78
46	原(Ⅱ)遺跡	柏市花野井丸山1070地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	中期、後期	包蔵地		78
47	三峯館遺跡	柏市花野井三峯館1179地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	早期、後期	包蔵地		78
48	塚卒遺跡	柏市花野井塚卒1414地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	早期(茅山)、前期(黒浜・興津)、中期(阿玉台・加曾利E)	包蔵地		78
49	上前留遺跡	柏市花野井上前留587地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	前期(黒浜)、中期(五領ヶ台・阿玉台)	集落跡、包蔵地	住居跡	16・17・78
50	香取神社遺跡	柏市花野井西高野367地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	早期(鶴ヶ島台)、前期(黒浜)	集落跡	住居跡	78
51	留蓮寺遺跡	柏市留蓮寺木戸ノ内344地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	前期(黒浜)、中期(阿玉台・加曾利E)、後期(安行)	集落跡、包蔵地	住居跡	78
52	溝ノ鼻(Ⅱ)遺跡	柏市十余二字溝ノ鼻287-280地先施	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	前期(黒浜・諸磯)	集落跡・貝塚	前期中集落跡、遺構内貝層	78・81
53	南原遺跡	柏市松ヶ崎南原1083-1地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	前期	包蔵地		78
54	八幡遺跡	柏市松ヶ崎八幡328地	古常陸川湾奥部: 柏・我孫子低地	前期(黒浜)	集落跡	住居跡	78

番号	遺跡名	所在地	水源地	大別(編別)時期	遺跡種別	備考	文献番号
55	松ヶ崎(I)遺跡	柏市松ヶ崎井戸作419地	古常陸川河奥部:松・我孫子低地	前期(黒沢)	集落跡	前期中葉集落跡?、遺構内貝層?、炉穴	78
56	松ヶ崎(II)遺跡	柏市松ヶ崎八郎351地	古常陸川河奥部:松・我孫子低地	前期(黒沢)	集落跡	住居跡	78
57	谷中上遺跡	柏市高田谷中上790地	古常陸川河奥部:松・我孫子低地	前期、後期(加曾利B)	包蔵地		78
58	殿内遺跡	柏市高田西下ノ台1030地	古常陸川河奥部:松・我孫子低地	前期(浮島)、中期(加曾利E)	集落跡	住居跡	78
59	青田第II遺跡	流山市青田140地	手賀・印旛沼河奥部:手賀沼低地	中期(阿玉台・加曾利E)	包蔵地		78
60	三ツ塚宮前貝塚	野田市三ツ塚宮前地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	早期(茅山ノ層)	貝塚		78・89
61	三ツ塚大六天遺跡	野田市三ツ塚大六天地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
62	三ツ塚中原遺跡	野田市三ツ塚中原地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
63	瀬戸向原遺跡	野田市瀬戸上塔地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	早期(熱糸文)	包蔵地		78
64	土塔遺跡	野田市瀬戸向原地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
65	瀬戸多良ノ木遺跡	野田市瀬戸西野前地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
66	瀬戸西野前遺跡	野田市瀬戸西野前地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
67	瀬戸全久保遺跡	野田市瀬戸字全久保地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
68	瀬戸押出し遺跡	野田市瀬戸押出し地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
69	瀬戸前遺跡	野田市瀬戸前地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
70	瀬戸欠作遺跡	野田市瀬戸欠作地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
71	瀬戸江川遺跡	野田市瀬戸江川地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
72	瀬戸伏ヶ崎遺跡	野田市瀬戸字伏ヶ崎地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
73	中坪遺跡	野田市西三ツ塚中坪地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	中期(加曾利E)	包蔵地		78
74	栗山遺跡	野田山下三ツ塚栗山下地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
75	浅間下遺跡	野田市西三ツ塚下三ツ塚地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
76	下三ツ塚木戸前遺跡	野田山下三ツ塚木戸前地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
77	下三ツ塚尾の原遺跡	野田山下三ツ塚字久作地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	貝塚	下三ツ塚貝塚	78
78	下三ツ塚大作遺跡	野田山下三ツ塚地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
79	上三ツ塚根郷前遺跡	野田市上三ツ塚根郷前地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
80	下三ツ塚下寺遺跡	野田山下三ツ塚下寺地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78
81	下三ツ塚根郷遺跡	野田山下三ツ塚字根郷地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	早期(田戸下層・茅山)、前期(浮島)、中期(加曾利E)、後期(加曾利B)	包蔵地		78・92
82	下三ツ塚初吹遺跡	野田山下三ツ塚初吹地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	早期(熱糸文・田戸下層・茅山上層)、前期(黒沢・浮島)	集落跡	住居跡・土坑・炉穴	78・90・91
83	下三ツ塚大六天前遺跡	野田山下三ツ塚地	古常陸川河奥部:三ツ塚低地	時期不詳	包蔵地		78



## 第2章 検出された遺構・遺物

### 第1節 縄文時代の遺跡概要

#### 1 概要

駒形遺跡の全体面積は約147,000㎡である。第1次から第19次まで実施した上層調査は、発掘対象面積で見ると49,153.6㎡で、全体の約1/3である。その後、平成20年8月末までに第20次から39次までの調査を実施しているが、完了には至っていない。第20次以降の整理作業は次年度以降に実施する予定であるため、遺跡に関する種々の性格論に関しては現段階では未明な部分が多い。今回報告する内容は先述した19次に及ぶ発掘調査のうち、主に合計10,099㎡の本調査によって明らかにされた成果である。

注目すべき成果は、縄文時代前期初頭から末葉までほぼ継続的に営まれた集落の検出である。特に県内では事例の少ない花積下層式期、二ツ木式期、関山式期の集落が検出されたことである。黒浜式期は隣接する富士見遺跡・大松遺跡を含め現在までに130軒以上の住居跡が検出されており、大規模集落の様相を呈している。続いて諸磯・浮島式期、興津式期でも小規模な集落が形成され、その後集落は終焉するものと思われる。もう一つの重要な成果は、既述した集落設営時期のほぼ全時期を通じ、構築されていた遺構の一部に遺構内貝層が形成されていたことである。これらから採取された貝サンプルを分析することにより、奥東京湾区域に比べ、これまでデータに基づく資料の蓄積がほとんどされていなかった古鬼怒湾区域においても、縄文前期生産・居住様式の解明について具体的な進展が期待できるということである。

しかしながら、本調査が行われた区域は遺跡全体から見れば部分であるため、各期の集落のまとまりを捉え時期毎に逐次説明することは困難である。ここでは本調査行った発掘区を近接したもの同士統合し、便宜的にA～Eの5地区（第4図）に分けた。次節以降、区毎に順を追って事実記載を行う。

#### 2 土器の分類

本報告書に掲載した出土土器の説明に際し、事実記載のための便宜的分類を提示する。早期前半から後期中葉まで断続的に出土しているが、質量とも遺構の中心時期である前期初頭～中葉のいわゆる織維土器が他を圧倒する。

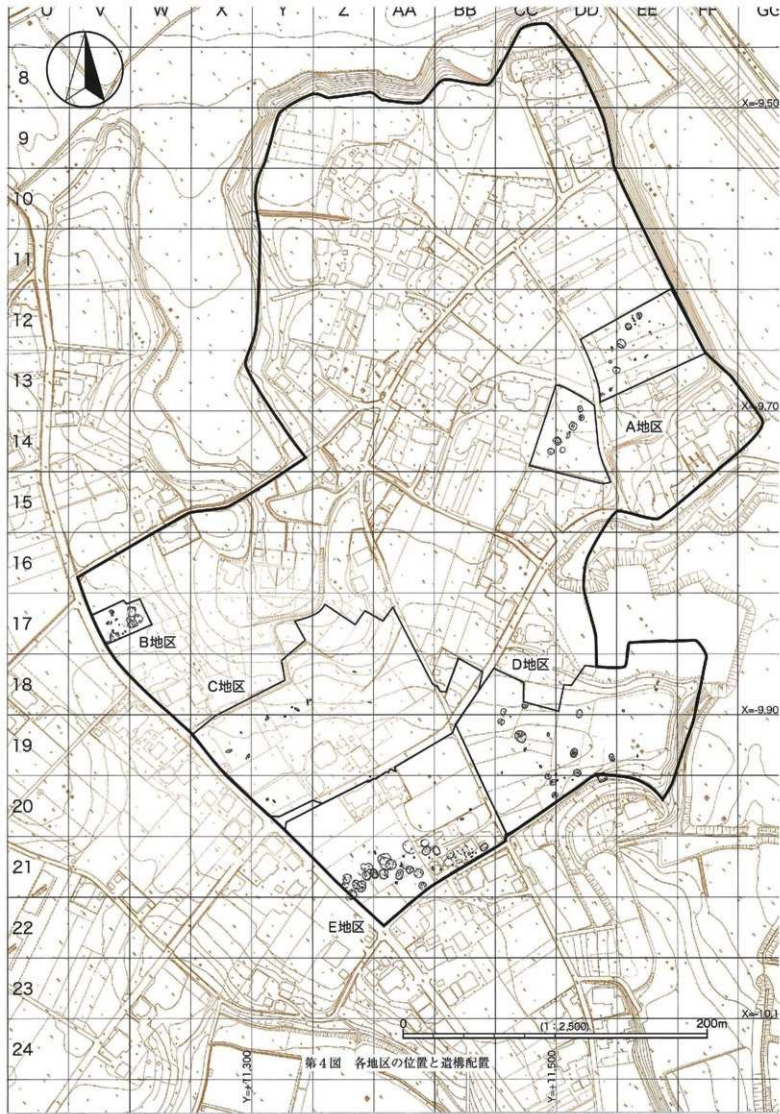
##### 第1群 早期の土器

- 1類 早期前半撫糸文土器
- 2類 早期後半条痕文土器

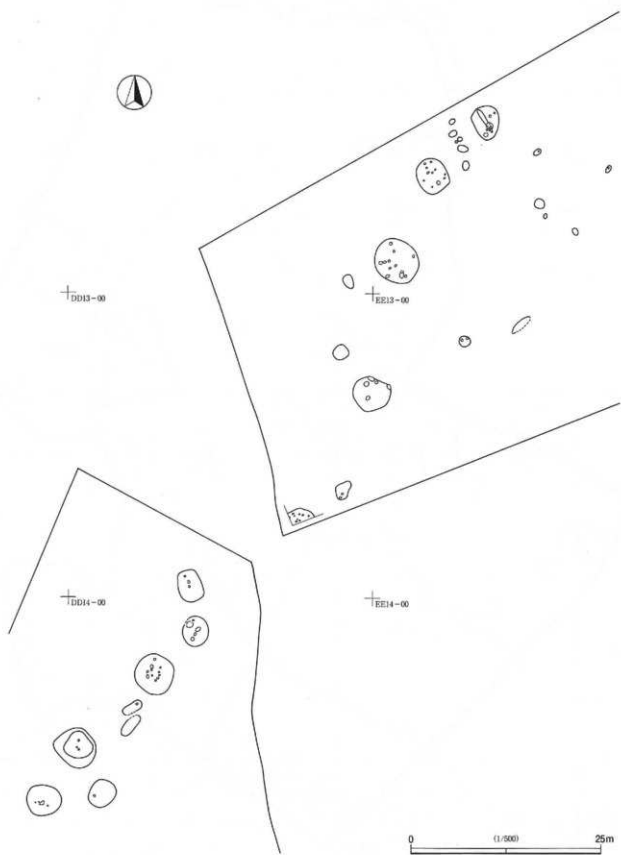
##### 第2群 前期の土器

- 1類 前期初頭花積下層式土器
- 2類 前期前葉二ツ木式土器
- 3類 前期前葉関山式土器
- 4類 前期前半の異系統土器
- 5類 前期中葉黒浜式土器
- 6類 前期後葉諸磯式土器

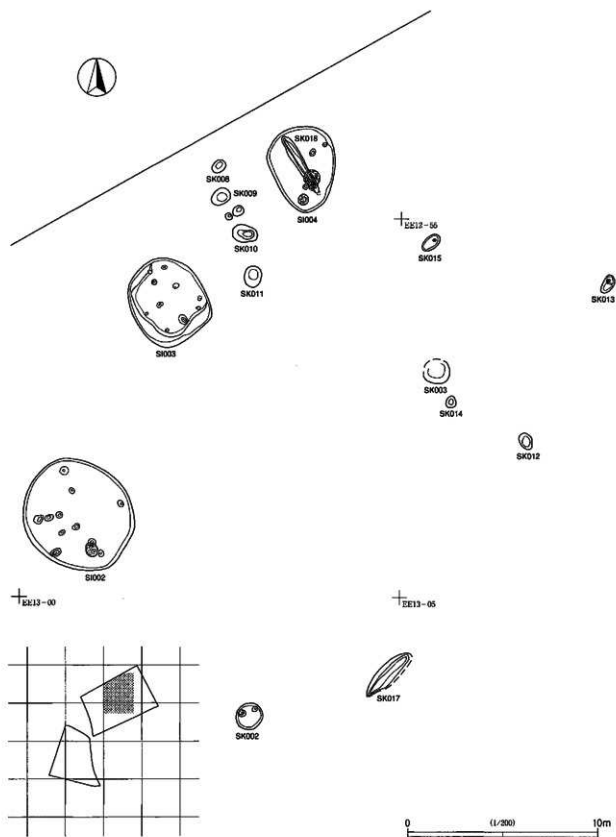




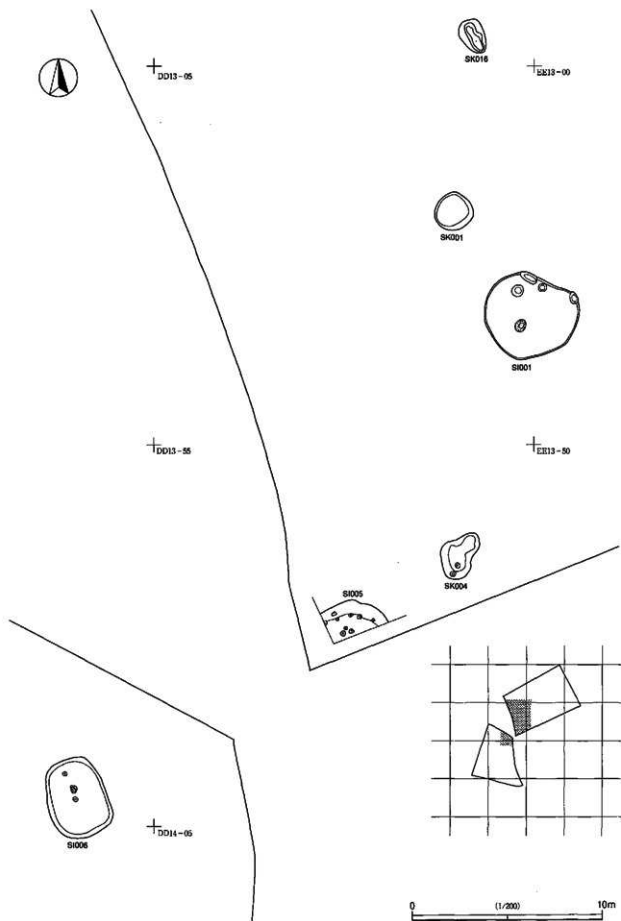
第4図 各地区の位置と遺構配置



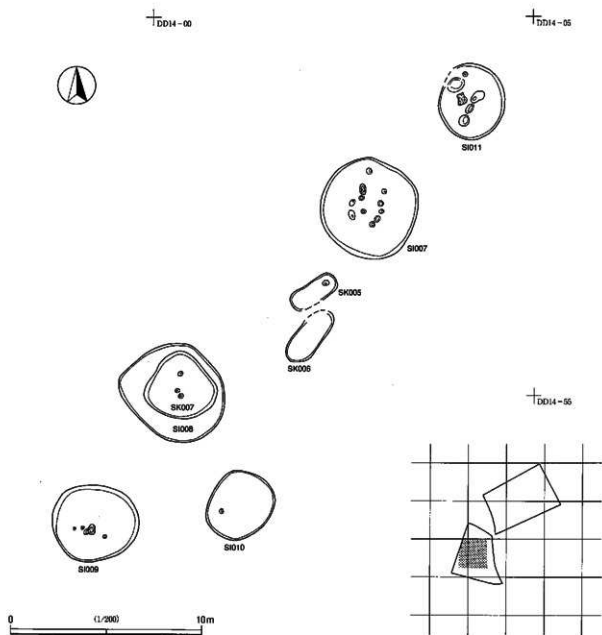
第5图 A地区遺構分布図(1)



第6图 A地区遺構分布图(2)



第7图 A地区遗址分布图(3)



第8图 A地区遺構分布图(4)

- 7類 前期後葉浮島式・末葉興津式土器
- 8類 前期後半の異系統土器
- 第3群 中期の土器
  - 1類 中期初頭五領ヶ台式土器
  - 2類 中期前葉阿玉台式土器
  - 3類 中期前葉勝坂式土器
  - 4類 中期後葉加曾利E式土器
- 第4群 後期の土器
  - 1類 後期初頭称名寺式土器
  - 2類 後期前半堀之内式土器
  - 3類 後期中葉加曾利B式・曾谷式土器

## 第2節 A地区

A地区は第2次・第8次の調査区が該当し、遺跡全体のうちでは東部に位置する(第1・4図)。道路を挟んで調査区が2ヶ所に分別されるが、便宜的にこれらを北区・南区と呼称する。合計した本調査面積は2,294㎡である。北区は大グリッドDD12・13、EE12・13区の接点を中心に、南区はCC14、DD13・14区にかけてそれぞれ遺構が分布するが、見かけは北北東-南南西を主軸に列状を成す。検出された遺構は初頭を主体とした縄文時代前期の竪穴住居跡11軒・土坑4基の他、時期不明の土坑3基、縄文早期後半条痕文期と思われる炉穴8基、縄文草創期～早期と考えられる陥穴が3基である(第5～8図)。

### 1 竪穴住居跡

#### SI001(第7・9図、図版2・30)

DD13-39区付近に位置する。4.88×4.48mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは0.16mと浅い。柱穴と思われるピットは4本あるが、北東側に偏在しいずれも床面から0.2m前後と比較的浅い。中央やや南西寄りに規模0.68×0.56m、深さ0.12mの炉が設けられるが、焼け面の遺存は不良である。

遺物は覆土の残存が不良のため小片ばかり50点以上の出土であるが、このうち土器3点を図示し得た。1は口縁端部から太目の原体RL・LRを用い羽状縄文を構成する。2は口縁部と以下を区切る隆帯上にLRが横走する。3は器面の摩擦で不鮮明ながらしが横位に施される。小片ながらいずれも第2群1類の花積下層式と思われ、住居跡の時期も該期の可能性が高いと思われる。他に非掲載の凹石片1点が出土した。

#### SI002(第6・10図、図版2・30)

EE12-80区付近に位置する。5.92×5.52mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.16mと浅い。柱穴と思われるピットは11本あるが、床面からの深さはP3の0.39mを除き、いずれも0.12～0.29mの範囲に収束する。主柱穴は確定し得ないがP1・3・6・11に可能性がある。P5は炉と一部重複しており、柱の付け替えが考えられる。南側に偏在して規模0.8×0.68mの炉が設けられるが、床面との差はほとんど見られず焼面と呼ぶべきかもしれない。床面は炉付近を除き硬化が認められない。遺物は覆土の残存が不良だったため約20点の出土であるが、このうち土器5点を図示し得た。1は折り返し口縁の下端に三角文が加えられ、この部分が横位齧歯状を呈すと思われる。2・3は器面に対しほぼ寝かせた状態で押し引いた半截竹管に



よる有節平行線文を密接施文する。3には鋸齒状貝殻腹縁を立てて描出した連続刺突文も認められる。4・5は沈線区画内に鋸齒状貝殻腹縁による波状貝殻文が密に充填される。いずれも第2群7類の興津式で、住居跡の時期も該期の可能性が高いと思われる。他に非掲載の砥石片1点が出土した。

#### SI003 (第6・11・12図、図版2・13・14・30)

EE12-51・52区付近に位置する。外形は4.48×4.0mの略楕円形を呈するが、内接して3.52×3.36mの2段掘り込みを有す。建替えの可能性もあろうが、記録された土層断面で判断する限りではこの時期に稀有な三方に段差を有す住居跡であり、確認面からの深さは0.4mを測る。柱穴と思われるピットは9本ある。P4・8は0.3m前後とこの住居としては浅いが、他は0.44~0.74mの範囲にあり総じて深い。主柱穴は確定し得ないがP1・3~6・9に可能性がある。北西に偏在して規模0.58×0.52m、深さ0.15mの炉が設けられる。住居廃絶後、中心付近の床面から下層にかけて貝層が形成されていた。図示した貝層はA~Gの7か所の小ブロックに分かれているが、本来は不整形ながら約1.9×1.5mの範囲で一つに繋がった貝層に復元されると思われる。貝サンプルはブロック毎であるが一括で全量を採取しており、分析結果を別項で報告した。

遺物は覆土中層を中心に約400点出土しており、このうち土器17点を図示し得た。1~5は沈線による文様を描出するものである。1は平縁に小波状突起を有し、器面全体に半截竹管による横位の波状文を施す。2は胴部中位で、先端の鋭利なへら状工具で粗雑な格子目文を施す。3も胴部中位で、横位にナデた上に、縦位を基調とし部分的には斜位に沈線文を重ねる。4は基本的には平縁だが小突起を有す。櫛歯状工具による押し文が端部を区画し、以下にも櫛歯状工具によって密な平行沈線文が施される。5は器面が荒れ判別しにくい、胴部上半にはLが、下半には縦位の平行沈線が施文される。6~13は縄文が施されるもの。6は口縁部が無文帯となり以下にRが施される。7は残存部から判断すると4単位にはならないが、図示正面が突出した波状線となる。器面をRLが覆うと思われる。8~10は器面の軟らかな段階に縄文を施している。8・10はL、9はRを施文。11はRL・LRを用い羽状縄文を構成する。12・13は菱形文を構成する。12はRL・LRを、13は器面の軟らかな段階でL・Rを用いている。14は無文だが、平滑に仕上げた際の横位ナデ痕が顕著。15は胴部下半から底部で、RL・LRを用い羽状縄文を構成する。器面がかなり軟らかい段階で施文したため、施文単位の切れ目にミミズ腫れ状のはみ出し粘土が認められる。16・17は底部で、16にはLが、17には軸の縄不明で附加条Rの附加条縄文を施す<sup>(1)</sup>。以上は全て第2群5類の黒浜式で、住居跡の時期を決定するものである。石鏃1点(第121図1)を図示した他、非掲載の打製石斧1点が出土した。

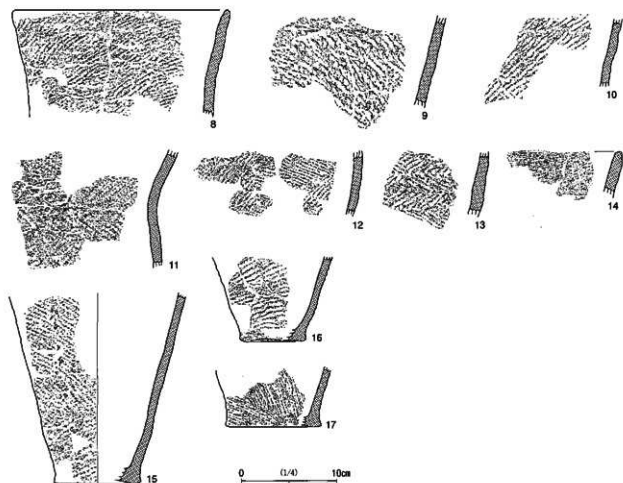
#### SI004 (第6・13図、図版2・30)

EE12-43区付近に位置する。4.48×3.6mの卵形を呈し、確認面からの深さは0.32mを測る。炉は2ヶ所ありいずれも南側に偏在する。炉Aは0.88×0.8、深さ0.16mを測るが、炉Bは0.56×0.48、深さ0.03mと焼面状である。柱穴と思われるピットは5本あるが、床面からの深さはP5の0.33mを除き、いずれも0.1~0.2mと浅く、配置からも主柱穴は確定できない。P5は炉Aに切られており、柱の付け替えが考えられる。

遺物は約50点と少ないが、床面から覆土上層まで時期的に限定できる土器が多い。このうち12点を図示し得た。1は浅く施した貝殻条痕文が表裏に認められる。2~5は基本的に表面に縄文、裏面に貝殻条痕文あるいは別工具による条痕文が施されるものである。2は表面にRが、口縁端部と裏面に貝殻条痕文が





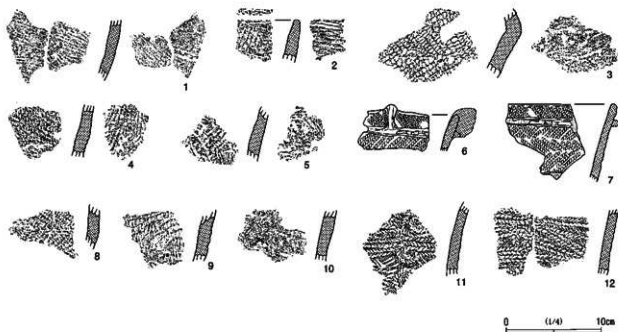
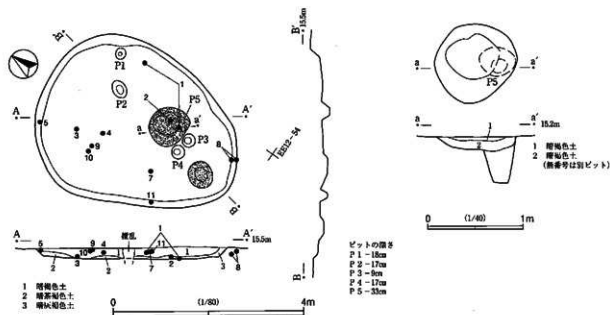


第12図 SI003 (2)

施される。3は口縁部が逆くの字に内屈する器形で、太めの原体RL・LRを用い羽状縄文を構成する。4はRが施されるが結節による原体末端線が認められる。5は表面にRと条痕文が、裏面に条痕文が施される。6～10は縄文を施すものである。6・7は隆帯によって狭小な口縁部区面を持つ同一個体。6では横位区面に接して突起が付く。口縁部からRL・LRを用い羽状縄文を構成する。8はRL・LRを用い羽状縄文を構成する。9は太めの原体Lを施文。10はLを施文しているが他の細い条を以て縛り留めた原体末端線が認められ、以下は無文となる。11・12はいわゆる燃糸側面匠痕文の施されるものである。基本的には異方向の原体を組み合わせ直・曲線のモチーフを描出する。いずれもやや太めのRとLを用いており、12には刺切文がモチーフ間に充填される。以上の土器は一部第1群2類の要素を含むものの、第2群1類の花積下層式に比定でき得るので、住居跡の時期も該期としたい。他に石鏃1点を図示した(第121図2)。

#### SI005 (第7・14図、図版2・14・30)

DD13-77区付近、北区の南西隅に位置する。現道や家屋との境界にあるため概ね3.12×1.76mの範囲の部分的な調査である。確認面からの深さは0.4mを測る。柱穴を含め9本のビットが検出されているが、0.1～0.96mの範囲で深さにばらつきがあり、配置も不明瞭である。炉は調査範囲内からは検出されていない。



第13図 SI004

遺物は約50点と少ないが、このうち土器9点を図示し得た。1は肥厚した折り返し口縁の端部にLの押圧を刻み目状に付す。口縁端部からL・Rを用い羽状縄文を構成し、縄文地各所に円形竹管文が配される。2は口縁端部に円形刺突列が巡り、以下にはRが施される。3は内削ぎ状の断面形を呈し、口縁端部から縦位の沈線文が施される。4は隆帯によって狭小な口縁部区画を持つと思われるが、区画以下は無文、口縁部文様は不明である。5～7は縄文を施すものである。5はLRを施し、6・7はRL・LRを用い羽状縄文を構成する。8は放射肋を有す貝殻背による圧痕文が施される。9は器面に凹凸が認められるが、無文の底部である。以上の内容から第2群1類の花積下層式、第2群5類の黒浜式が混在し出土位置でも明

確に分別できないことから、住居跡の時期は花積下層期あるいは黒浜期としておきたい。他に石鏃（第121図4）、尖頭器（第122図107）、石鏃（第123図110）を各1点図示した。

#### SI006（第7・15図、図版2・14・31）

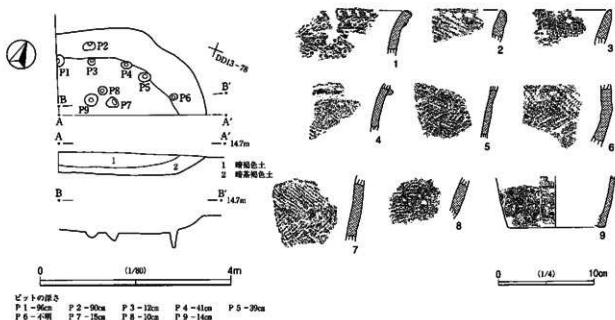
DD13-94区付近、南区の北東部に位置する。4.24×3.2mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さ0.2mを測る。柱穴と思われるピットはほぼ中軸上のやや北寄りに2本、その間に炉が設けられる。柱穴はそれぞれ0.17m、0.23mと浅く、炉の規模は0.4×0.32m、被熱の認められる範囲は周縁のみ、床面との差はほとんど見られず焼面と呼ぶべき構造で、短期間の居住の可能性がある。

遺物は70点以上出土しているが、このうち土器4点を図示し得た。1は4単位の波状縁で、最大径は波頂部で14cm、器高は18cmを測る。口縁部から底部近くまで0段多条のRL・LRを用い羽状縄文を多段に構成する。縄文帯間には自縄或いは他の細い糸を以て縛り留めた原体末端線が認められる。底部は上げ底で、ほぼ全面に縄文あるいは擬縄文化した放射肋を有す貝殻背による圧痕文が施される。炉直上からの出土。2は有段口縁で端部からRL・LRを用い羽状縄文を構成する。3・4は放射肋を有す貝殻背による圧痕文が施されるもの。3は器面の剥落が著しいが、折り返し口縁部で端部から貝殻背圧痕文が施される。4は底部下端と外底面まで貝殻背圧痕文が施される。以上の土器は第2群1類の花積下層式で、住居跡の時期も該期としたい。他に打製石斧1点を図示した（第124図121）。

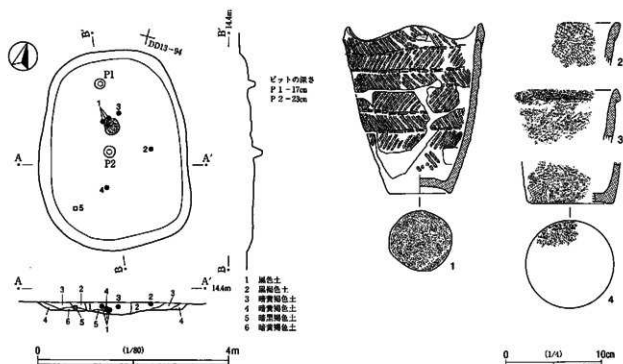
#### SI007（第8・16図、図版3・14・31）

DD14-22区付近に位置する。5.36×5.2mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。柱穴と思われるピットは10本検出されているが0.07～0.5mの範囲で深さにばらつきがあり、位置もP1を除き中央付近に偏在する。中央やや北寄りに規模0.56×0.38m、深さ0.06mの炉が設けられる。

出土遺物は約260点で、このうち10点の土器を図示し得た。1は復元径11.2cmの小形土器で、口縁部端部上には斜位の刻み目を有す。器面の剥落が進んでおり不明な部分が多いが、口縁部区画にはRを2本用いた側面圧痕文と刺切文を組み合わせ文様帯を形成する。区画接点には縦位の8の字状隆帯が付加されよう。2～6は縄文が施されるもの。2は折り返し口縁部部に鋸歯状の短沈線が巡ると思われる、以下からLR・RLを用いた羽状縄文を多段に施文する。3は縄文折り返し口縁部からRLが3段施された後、直下にはLRが施されることから羽状構成が幅広になる可能性がある。4は口縁部部に接合痕跡が認められ、全面にRLが施される。5はやや胴部が張る器形で、細い原体RLを用いて多段に施文するが、括れ付近は縄文が磨り消されている。6はLRが施される。7は基本的にRLが施されるが、部分的に放射肋を有す貝殻の背圧痕文が付加されている。8～10は放射肋を有す貝殻の背圧痕文が施される。8は折り返し口縁部を横して貼り付けた隆起線で口縁部を区画する。端部の貝殻背圧痕文は連続斜位に施されていて擬縄文効果がある。9は細かな単位で放射肋を有す貝殻の背圧痕文が施される。10は残存部から推定すると波状口縁になるとと思われる。胴部中位に貼り付け隆起線が巡るが、この部分で推定径27.2cmを測る。多方向に細かな単位で放射肋を有す貝殻の背圧痕文が施される。以上の土器は第2群1類の花積下層式で、住居跡の時期も該期としたい。他に石鏃（第121図3）、石鏃（第123図111）を各1点図示した。



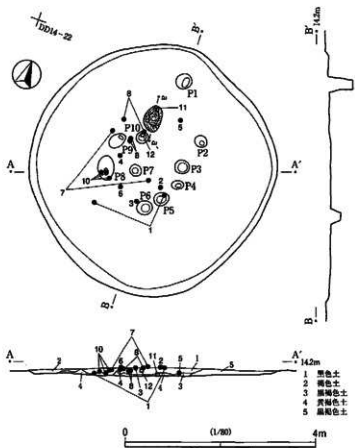
第14図 SI005



第15図 SI006

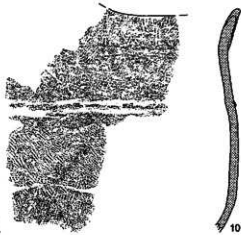
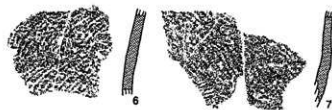
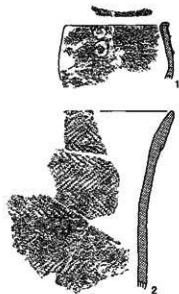
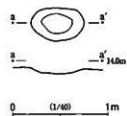
SI008 (第8・17図、図版3・31)

DD14-50区付近に位置する。SK007と重複関係があり本住居跡の方が古い。5.44×4.64mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。入れ子状に重複するSK007は3.52×3.52mの不整円形を呈し、確認面からの深さは0.44mと深いので、本住居跡の炉の有無は不明である。ピットは3本検出されている



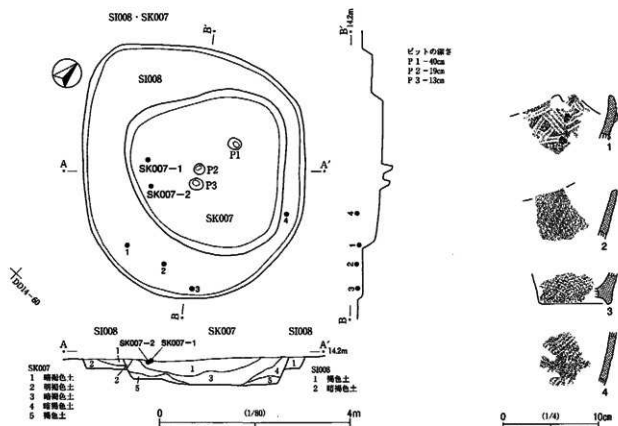
ピットの大きさ  
 P1-80cm  
 P2-36cm  
 P3-7cm  
 P4-21cm  
 P5-15cm  
 P6-18cm  
 P7-8cm  
 P8-19cm  
 P9-62cm  
 P10-14cm

1 紫色土  
 2 褐色土  
 3 緑褐色土  
 4 黄褐色土  
 5 黒褐色土



10cm

第16図 SI007



第17図 SI008・SK007 (土坑)

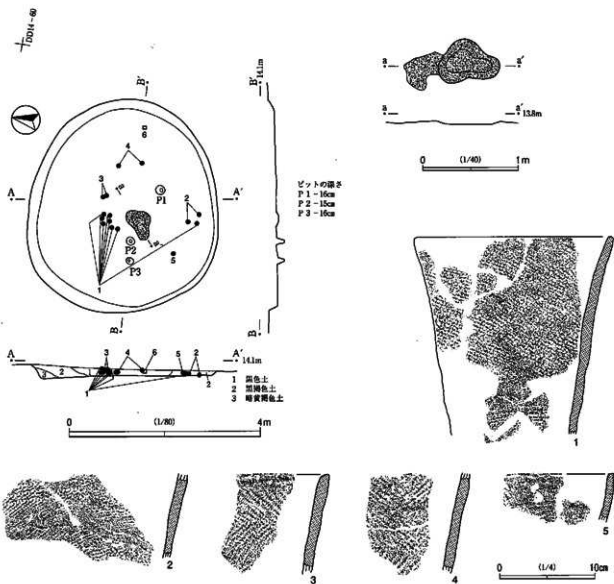
が、どちらに帰属するか不明である。

出土遺物は約50点で、このうち4点を図示し得た。1は双頭状の波状口縁と思われ、主幹文様が半截竹管による平行沈線と描出され、梯子状沈線にはならない。主幹文様の基本構図は山形附加になると思われ、点状文様は瘤状貼付文である。2は波状口縁端部から前々段合燃（いわゆる異節縄文）の2段の縄文が施される。3は組原体による粗縄が施される。4はLRが施される。以上は第2群3類の関山式でI式の新しい部分～II式に相当すると思われるが、いずれも覆土上層からの出土であるため、住居の時期は関山式の可能性があるとしておく。他に非掲載の磨石・敲石片各1点が出土している。

#### SI009 (第8・18図、図版3・14・31)

CC14-69区付近、南区では最も南西部に位置し、北から南へやや傾斜する。4.56×4.08mの楕円形を呈し、確認面からの深さは北側で0.32cm、中央部で平均0.16mを測る。中央やや南西寄りに規模0.56×0.52m、深さ0.04mの炉が設けられるが、周縁東にも焼け面が広がる。柱穴と思われるピット3本は炉の周辺に偏在しており、径は小さく深さも0.15～0.16mと浅いため、構造的に短期間の居住の可能性がある。

出土遺物は約40点で、このうち5点を図示し得た。1～4は縄文を施すものである。1は口径21.2cmを測り、端部から直前段多条のRLが密に施されている。胴部下半には内皮の痕跡が残る幅広い半截竹管を用いた鋸歯状沈線を巡らす。2は末端環付のLRと通常のRLが施される。3は口縁端部に無文帯を作出し、以下からRL・LRを用いて羽状縄文を構成する。4は中位に磨り消した範囲があるが、基本的には0段多



第18図 SI009

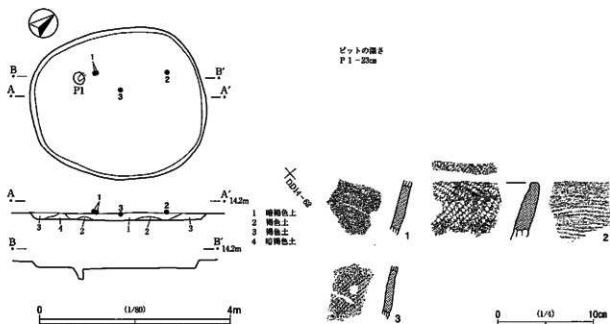
条のLR・RLを用いた羽状あるいは菱形の縄文を施すと思われる。5は表裏とも若干の凹凸を伴うが、ミガキが多用される無文である。以上は決め手に欠くものも含まれるが、おそらく第2群5類の黒浜式に比定でき、住居跡の時期を決定するものである。他に石鏃1点を図示した(第121図5)。

SI010 (第8・19図、図版3・31)

DD14-61区付近に位置する。376×328mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.16mを測る。炉は検出されておらず、柱穴と思われるピットも深さ0.23mのもの1本のみの検出であるため、住居の要件にやや欠けるが一応、堅穴住居跡に含めた。

出土遺物は約20点と少ないが、このうち3点を図示し得た。1は横位の擦痕が器面全体に認められる。2は口縁端部にRLが、端部以下の器表面にはやや太めの原体RL・LRを用い羽状縄文を構成する。また、他の細い条を以て縛り留めた原体末端線が認められる。裏面には放射肋を有す明瞭な貝殻条文が横位に





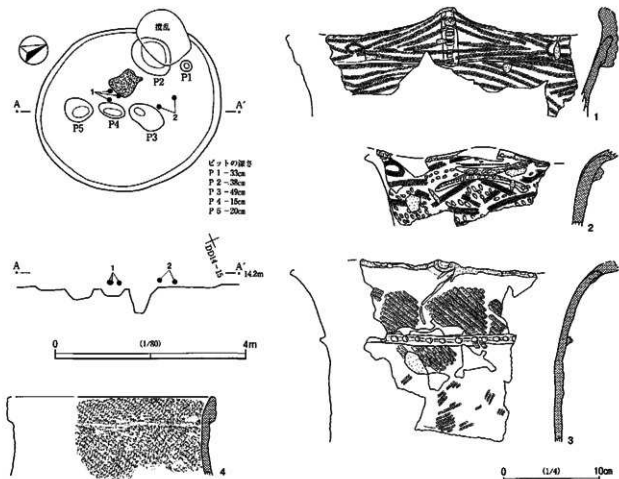
第19図 SI010

施される。3は器面の剥落が進んでいるが、原体RL・LRを用い羽状縄文を構成すると思われる。以上の土器はいずれも覆土上層からの出土で、かつ一部第1群2類の要素を含むものの、第2群1類の花積下層式の古い段階と考えられるので、住居跡の時期も該期としたい。他に非掲載の削器片1点が出土している。

#### SI011 (第8・20図、図版3・15)

DD14-14区付近に位置する。4.0×3.44mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.08mと浅い。中央やや西寄りに規模0.64×0.48mの炉が設けられるが、深さ0.02mとほとんど掘り込まれず、炉は焼け面的である。ピットは5本検出されているが攪乱と重複するP2は柱穴とは思えない。他は0.15~0.49mの範囲で深さがばらつき、PIを除き炉の周辺に偏在する。配置は不明瞭である。

出土遺物は12点と少ないが、一括性の高い4点の土器を図示し得た。1は1単位のみが残存であるが波状口縁を呈すると思われる。平縁部で推定径34.8cmを測る。口縁部は段で区画されており波頂部から貼付隆帯が垂下する。異方向2本の原体による側面圧痕文により口縁・胴部とも菱形文あるいは重三角モチーフを描出するが、口縁部では接点に側面圧痕による円文が配される。2は強く外反する波状口縁を呈すると思われる。口縁端部上には刻み目が巡らされると思われる。波頂部下には刻み目付の2本の弧状隆起線がX字状に貼付される。口縁部内は菱形文や円文を基調に各種モチーフを描き、空白部に刺切文を充填する。平縁部で推定径26.4cmを測る。3は焼成不良で器面の剥落も進んでいるが波頂部に窪みを有す波状口縁で、端部上に刻み目が巡らせられると思われる。幅広の口縁部区画が交互押圧による横位の波状隆起線で作出される。口縁部内、区画隆起線付近にはLが、胴部下端付近ではLRが施される。4は折り返し口縁で胴部に向かって外開きの器形になると思われる。口縁・胴部ともRLが施されるが、図示できなかった口縁部の一部にLRが施されている。以上の土器は覆土一括取り上げのものも含まれるが、いずれも第2群1類の花積下層式であるので、住居跡の時期も該期としたい。



第20図 SI011

## 2 土坑

### SK001 (第7・21図、図版9・32)

DD13-18区付近に位置する。2.04×1.98mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.36mを測る。出土遺物は6点と少ないが、このうち覆土上層から出土している同一個体と思われる1点の土器を図示した。1a・1bは表面にRL・LRを用いた羽状縄文を多段に構成すると思われる。縄文帯間には他の細かい条を以て縛り留めた原末端線が認められる。裏面には明瞭な条痕文が施される。以上の土器は一部第1群2類的要素を含むものの第2群1類の花積下層式に比定でき得るので、遺構の時期も該期としたい。

### SK002 (第6・21図、図版9・32)

EE13-13区付近に位置する。1.5×1.38mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.18mを測る。底面の壁際に径約0.3~0.4mの小ピットが2本検出された。出土遺物は7点と少ないが、このうち2点の土器を図示し得た。2a・2bは表裏に条痕文が施される第1群2類、3は縦位の平行沈線文が疎らに施される第2群5類黒浜式である。以上の零細な内容では遺構の時期決定が困難だが、より新しい黒浜期の可能性がある。

SK003 (第6・21図、図版9)

EE12-75区付近に位置する。1/3ほど上面が遺存していないが1.44×1.38mの略円形を呈すると思われ、確認面からの深さは0.21mを測る。遺物は出土せず遺構の時期は不明である。

SK004 (第7・21図、図版9・32)

DD13-69区付近に位置する。2.28×2.22mの不整形を呈し、確認面からの深さは0.36mを測る。南西寄りの底面と壁面中位に径約0.25～0.3mの小ピットが検出された。

出土遺物は115点と土坑としては多いが、図示し得る土器は2点である。4はSI011の1同様口縁部に段で区画しており、L・R・Lの3本の原体を揃えた胴面圧痕文により口縁・胴部とも菱形文を連繋するモチーフを描出する。円形竹管による縦位の刺突文も認められ、口縁部の菱形文の空白部には刺切文が充填される。裏面は丁寧に磨かれている。5は折り返し口縁で口縁・胴部とも0段多条のLRが施されている。以上は覆土中下層の出土でいずれも第2群1類の花積下層式に比定できるので、遺構の時期も該期の可能性が高い。

SK005 (第8・21図、図版9・32)

DD14-32区付近に位置する。一部攪乱により上面が遺存していないが2.76×1.2mの長楕円形を呈すると思われ、確認面からの深さは0.18mを測る。北東側に径約0.35mの小ピットが検出された。遺物は数点出土しているが、いずれも覆土一括取り上げでうち1点を図示した。6は放射筋を有す貝殻背による圧痕文が施される第2群1類花積下層式の可能性がある。遺物の内容が零細なため遺構の時期は決定できない。

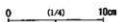
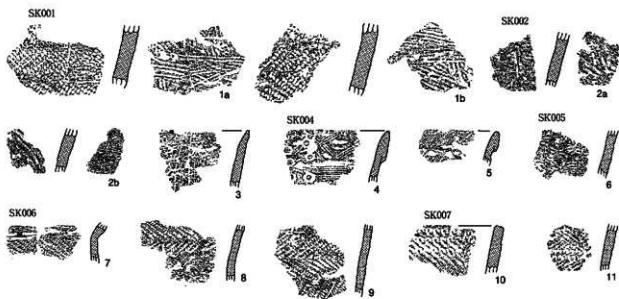
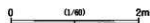
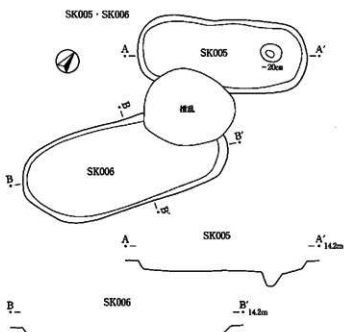
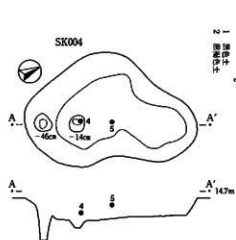
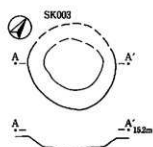
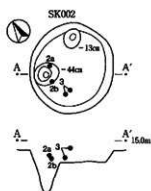
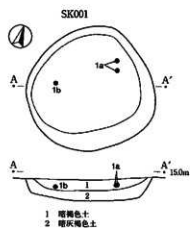
SK006 (第8・21図、図版9・32)

DD14-42区付近に位置し、SK005とほぼ並列する。一部攪乱により上面が遺存していないが3.36×1.44mの長楕円形を呈すると思われ、確認面からの深さは0.18mを測る。

遺物は10数点出土しているが、いずれも覆土一括取り上げでうち3点を図示した。7は剥落しているが横位の隆起線が口縁部を区画すると思われる。直下にはやや長めの刺突列が付随し、以下にはRLが施される。第2群1類花積下層式である。8はRL・LRを用いて羽状縄文を構成する。閉じた縄の末端が看取できる。第2群1類花積下層式の可能性がある。9はRL・LRを用いて結束させ(結束第1種)、羽状縄文を構成する。裏面のミガキは顕著ではない。第2群2類二ツ木式～3類間山式の範疇と思われる。遺物の型式が複数に亘り、かつ取り上げ状況も不良のため遺構の時期は決定できない。

SK007 (第8・17・21図、図版32)

DD14-50区付近に位置する。3.52×3.52mの不整形円形を呈し、確認面からの深さは0.44mを測る。SI008と重複関係にあるが本土坑の方が新しい。遺物は約180点出土しているが、図示し得るものは少なく位置を記録した2点を図示した。10は口縁端部から1段目は脚短、2段目は脚長の可能性のある末端環付のRLが施される。異間隔横帯区画になる可能性がある。11は末端環付のLR、が腕手部分を頭合せで施す。いずれも第2群3類間山式であり、入れ子の重複関係にあるSI008同様に本土坑も該期の可能性がある。



第21图 A地区土坑

### 3 炉穴

#### SK008 (第6・22図)

EE12-42区付近に位置する。1.14×0.9mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは0.12mを測る。遺構の状況から第1群2類早期後半条痕文期の可能性を持つものの、遺物が出土していないため決定し得ない。

#### SK009 (第6・22図)

EE12-42区付近に位置する。1.62×1.2mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは0.3mを測る。遺構の状況から第1群2類早期後半条痕文期の可能性を持つものの、遺物が出土していないため決定し得ない。

#### SK010 (第6・22図)

EE12-52区付近に位置する。1.98×1.38mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは0.48m。遺構の状況から第1群2類早期後半条痕文期の可能性を持つものの、遺物が出土していないため決定し得ない。

#### SK011 (第6・22図)

EE12-53区付近に位置する。1.62×1.44mの略円形を呈し、確認面からの深さは傾斜する北側で0.24mを測る。遺構の状況から第1群2類早期後半条痕文期の可能性を持つものの、遺物が出土していないため遺構の時期は決定し得ない。

#### SK012 (第6・22図、図版9・15)

EE12-76区付近に位置する。1.32×0.96mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは土器の出土した北側の最深部で0.24mを測る。1は6単位の緩やかな波状口縁になると思われもので、推定口径は28.8cmを測り、尖底となろう。口縁端部上には斜位方向に施した刺突文が巡る。表裏とも放射肋を有す貝殻条痕文を施した後には撫で消される第1群2類。底面直上の出土で、本遺構の時期を決定するものである。

#### SK013 (第6・22図)

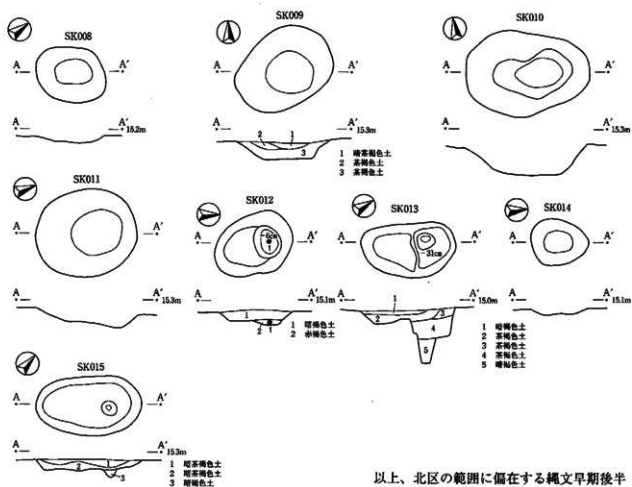
EE12-57区付近に位置する。1.5×0.9mの不整楕円形を呈す。一見すると炉部と足場部に分れるような段差があり、確認面からの深さはそれぞれ0.24、0.56mを測る。遺構の状況から第1群2類早期後半条痕文期の可能性を持つものの、遺物が出土していないため遺構の時期は決定し得ない。

#### SK014 (第6・22図)

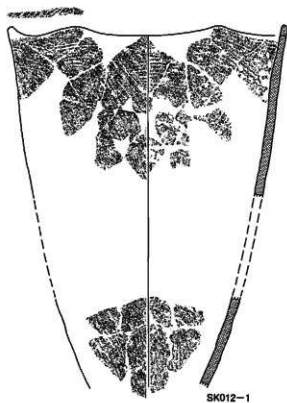
EE12-75区付近に位置する。0.96×0.78mの卵形を呈し、確認面からの深さは0.12mを測る。遺構の状況から第1群2類早期後半条痕文期の可能性を持つものの、遺物が出土していないため決定し得ない。

#### SK015 (第6・22図)

EE12-55区付近に位置する。1.68×0.96mの楕円形を呈し、底面東寄りに小ピットを1つ有す。確認面からの深さは小ピットを除き0.18mを測る。遺構の状況から第1群2類早期後半条痕文期の可能性を持つものの、遺物が出土していないため決定し得ない。



以上、北区の範囲に偏在する縄文早期後半条痕文期と思われる炉穴8基を説明した。総じて火床範囲と他との分別が不明瞭であり、炉部と足場部が区別される典型例とは異なる。



0 1/4 10cm

第22図 A地区炉穴

#### 4 陥穴

##### SK016 (第7・23図)

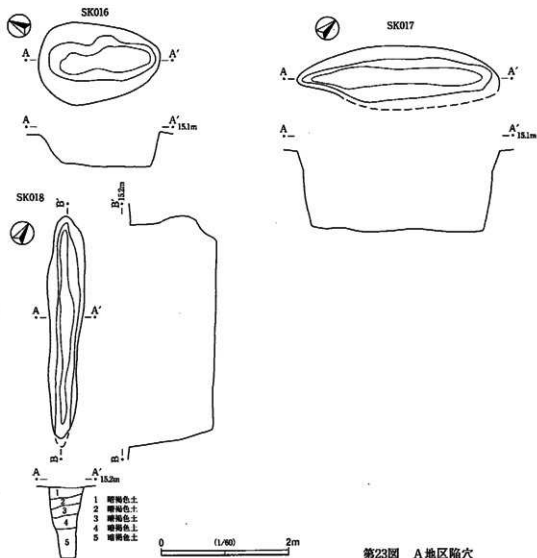
DD12-99区付近、緩やかな傾斜面に位置する。1.92×1.32mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは最深部で0.54mを測る。遺物は出土していないが、遺構形状から本遺構とした。

##### SK017 (第6・23図、図版9)

EE13-14区付近に位置する。3.24×1.02mの不整長楕円形を呈し、確認面からの深さは1.26mを測る。遺物は出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に頻出する溝型陥穴と考える。

##### SK018 (第6・23図、図版9)

EE12-43区付近、花積下層式期のSI004と重複するが、床面下から検出された本遺構の方が古い。3.66×0.6mの不整長楕円形を呈し、確認面からの深さは1.38mを測る。遺物は出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に頻出する溝型陥穴と考える。



第23図 A地区陥穴

## 5 遺構外出土土器 (第24~26図、図版15・32~34)

遺構出土土器に加え、遺構に伴わない早期前半壺系土器から後期前半壺之内1式土器までの間の諸型式が出土しているため、順に説明しておく。

### 第1群1類 早期前半壺系土器 (第24図1~14)

1~3は壺系文R、4~8は壺系文Lが施される口縁部である。9~12は壺系文Rが施される胴部である。13はRLを斜位に施文することで縦位の条を得る。14は本類の尖底と思われる。以上は条の粗密等によって夏島~稲荷台式にそれぞれ帰属すると思われる。なお、胎土に細かな砂塵が混入するものが多い。

### 第1群2類 早期後半条痕文系土器 (第24図15~27)

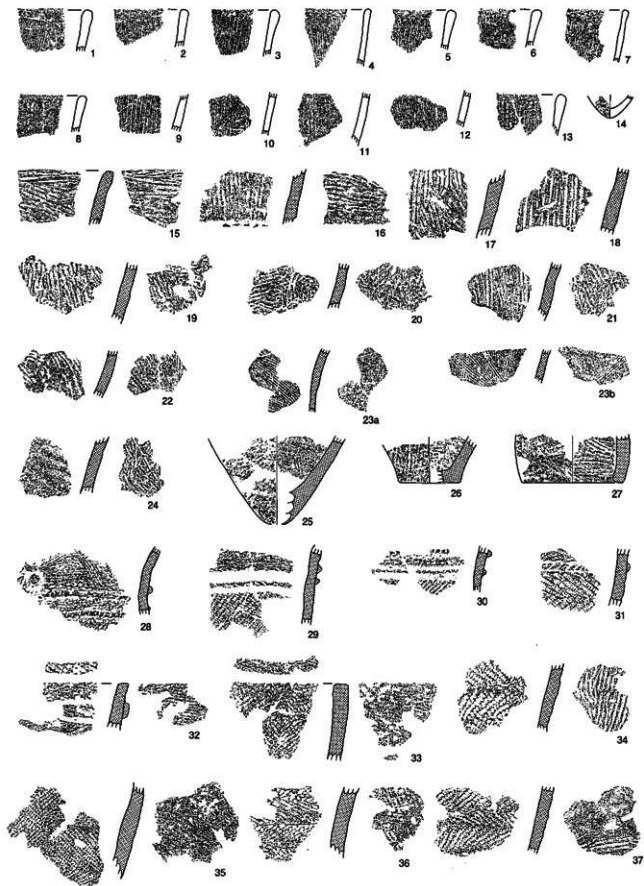
15~27は放射肋を有す貝殻条痕文が縦・横・斜めのいずれかの方向に施される。15は表裏ともに明瞭な貝殻条痕文が施される口縁部である。16~24は胴部で、このうち16・19~23bは表裏に貝殻条痕文が施される。24の表面は器面修正の凹凸を残した無文で、裏面に貝殻条痕文となる。なお、16の下端には横位の半隆起的な結節沈線が巡ると思われる。25~27は底部である。25は尖底で表面は被熱が著しく文様は判別できない。裏面には部分的に貝殻条痕文が施される。26は平底で表面には貝殻条痕文、裏面には擦痕文が施される。27は台付土器の脚部と思われ、表面には貝殻条痕文、裏面には擦痕文が施される。D地区には鶴ヶ島台式が散見されるものの、本地区では有文のものはほとんど無く、広義の条痕文系土器としておく。

### 第2群1類 前期初頭花積下層式土器 (第24図28~第25図49・53)

28~32は口縁部と以下を区画する横位の隆起線を巡らすものである。28~30は平行する2本の刻み目付隆起線が口縁部を区画する。区画内にはRとL、異方向2対4本の原体を交互に揃えた側面圧痕文により、直曲線モチーフを描出する。28は区画接点には円形貼付文が配される。モチーフの空白部、隆起線間にはやや稚拙な刺切文が充填される。29はモチーフの空白部に刺切文が充填され、胴部にはRLが施される。30は隆起線間にはやや稚拙な刺切文が充填され、胴部にはRLが施される。31は斜位の刻み目が付された扁平な区画隆起線で口縁部が区画される。区画内には幅広いLで側面圧痕文が施され、胴部にはRL・LRを用いた羽状縄文が施される。

32~37は表面に縄文、裏面に貝殻条痕文あるいは擦痕文を施した所謂縄文条痕土器である。32は扁平で幅広い隆起線によって口縁部が区画される。表裏とも器面の剥落が進んでいる。口縁端部上と隆起線上にはRを施し、胴部にはLが施される。33は口縁端部上にRを施し、端部直下からR・Lを用いた菱形文が認められる。34・37はRL・LRを用いた羽状縄文が多段に構成されると思われるが、他の細い条を以て縛り留めた原体末端線が認められる。35はRL・LRを用いた羽状縄文・菱形文が施されるが、施文単位の境界に粘土の寄りがミミズ腫れ状に残存する。36はL・Rを用いた羽状縄文が多段に構成されると思われる。38~44は表面に縄文が施されるものである。38は口縁端部上に放射肋を有す貝殻の背圧痕文が施される。端部直下からRL・LRを用いた羽状縄文・菱形文が施されるが、施文単位の境界に粘土の寄りがミミズ腫れ状に残存する。39は口縁端部上に丸棒状工具の押捺による窪みが巡ると思われる。端部下には括りを留めるために作られた結節の痕跡が認められ、以下にRL・LRを用いた羽状縄文が構成されよう。推定口径は21.0cmを測る。40はL・Rを用いた羽状縄文が施される胴部下で推定最大径21.6cmを測る。41はRL・





第24图 A地区遗物出土土器(1)

0 (1/4) 10cm

LRを用いた羽状縄文、閉じた端を少し曲げて回転したため斜行する条の末端線が連なるLRが施される。42・44はRL・LRを用いた羽状縄文が多段に構成されると思われるが、他の細い条を以て縛り留めた原体末端線が認められる。43は扁平な折り返し口縁にLRが施され、裏面が丁寧に磨かれている。45～49は貝殻文の施されるものである。45～47はハマグリなど放射肋のない腹縁を用いたもので、45・46は刺突文、47は波状貝殻文が施される。48・49はハイガイなど放射肋のある貝殻を用いたもの。48は殻頂から殻表部を用いた圧痕文で、顆粒の凹凸が明瞭である。49は腹縁を用いた貝殻刺突文が施される底部付近である。53は上げ底の底部。器表面には放射肋のある貝殻の殻表部を用いた圧痕文とLRが重複して施され、外底面には背圧痕文が認められる。

#### 第2群2類 前期前葉二ツ木式土器（第25図50・51）

50は口縁部上下端が各2条の刻み目付き細隆起線で区画される。区画内には異方向2対4本の燃糸側面圧痕文で蕨手状の主幹文様を描く。空白部には円形竹管刺突文が配され、刺切文が密に充填される。本式でも最も古期の新田野段階である。51は口縁部に異方向1対2本の燃糸側面圧痕文が認められるが、構成は不明である。点状文様として円形竹管刺突文と瘤状貼付文が配される。胴部には脚短な末端環付RL・LRを用い羽状縄文が構成される。

#### 第2群3類 前期前葉関山式土器（第25図52）

1点のみを図示した。直前段合燃（いわゆる異条縄文）が施される。

#### 第2群5類 前期中葉黒浜式土器（第25図54～61）

総じて裏面のミガキは丁寧である。54は疎らな縦位の沈線文が施される。55～60は縄文の施されるものである。55は口縁端部にLが、直下からL・Rを用いた羽状縄文が施される。56は歪な外削ぎ状の口縁端部から小さな単位で多方向にLが施される。57は太目のLRが施される。58は0段多条のLRが施される。59は胴部中位の括れ部付近でRLが密に施される。60は底部付近でLが施される。61は底部で下端に縦位沈線が比較的密に施される。

#### 第2群6類 前期後葉諸磯式土器（第26図63・64）

63は口縁端部に結節沈線文が廻り、胴部中位の平行沈線まで無文となる。器形は壺形になるか。64は半隆起線的なC字形の結節沈線文（C字爪形文）で、X字状を基調としたモチーフが描き出されよう。地文に横位の捻糸文Lがまばらに施されており稀有な事例であるが、浮島式との折衷的要素であろうか。

#### 第2群7類 前期後葉浮島式・末葉興津式土器（第26図66～73）

66は半截竹管内側を用いた平行沈線で網目状のモチーフを描出する。67は幅広い平行沈線を引いた後に刺突を加え、結節沈線を表出している。下端にはハマグリなど放射肋のない貝殻腹縁を用いた波状貝殻文が施されている。68は口縁端部に刻み目を付し、以下には横位に平行する細い結節沈線、断続的に付された押し文が施される。69a～cは口縁端部に刻み目を付し、以下には凹凸文、三角文を施すものである。70は複列の結節沈線間にハマグリなど放射肋のない貝殻腹縁を用いた波状貝殻文が施されている。71はハイ

ガイなど放射肋のある貝殻腹縁を用いた波状貝殻文が施されるが、振り幅は小さく連続押圧に近い。72・73は疎らな摺糸文Rが施される。

#### 第2群8類 前期後半の異系統土器（第25図62a～c・第26図65）

62a～cは同一個体と思われる。口縁部を欠損するが、口縁部以下との区画は横位の結節沈線が付随する隆起線によりなされよう。以下は胴部下半に至る範囲まで単軸絡条体第5類による網目状摺糸文が施されており、下端の器面は被熱により赤変、一部剥落している。1類花積下層式にも網目状摺糸文が伴うが、結節沈線の存在から可能性は薄いと思われる。5類黒浜式に併行する大木2a式としておけるが、あるいは結節沈線が施されることから大木2a式の影響を受けた黒浜式の可能性もこのころかもしれない。

65は口縁部を半載竹管の内側を用いた半隆起線的な結節沈線で区画し内側に鋸歯状沈線を充填するが、一段目は押し引き手法で描出している。直下の地文RLには横位の結節回転が重ねられる。文様要素から前期末葉大木6式の影響を受けた土器と思われる。胎土中に長石等の砂礫を多く含む。

#### 第3群2類 中期前葉阿玉台式土器（第26図74・75）

いずれも断面カマボコ状の隆起線上と器面にRが施される阿玉台Ⅳ式である。

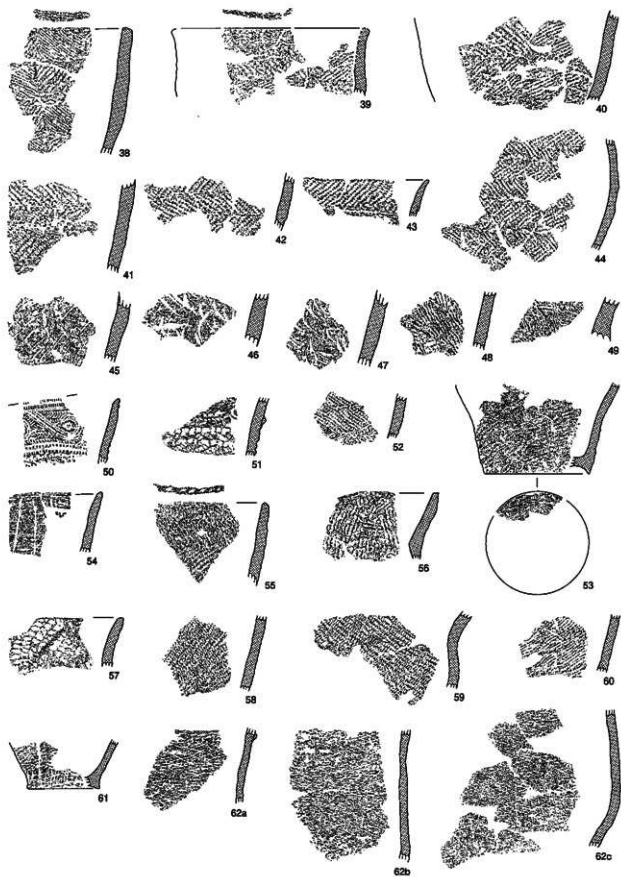
#### 第3群4類 中期後葉加曾利E式土器（第26図76・77）

76は口縁部区画内に縦位の沈線が充填される加曾利EⅠ式、77は口縁部・胴部とも縦位にRLが施されるEⅡ～Ⅲ式である。

#### 第4群2類 後期前半堀之内式土器（第26図78～87）

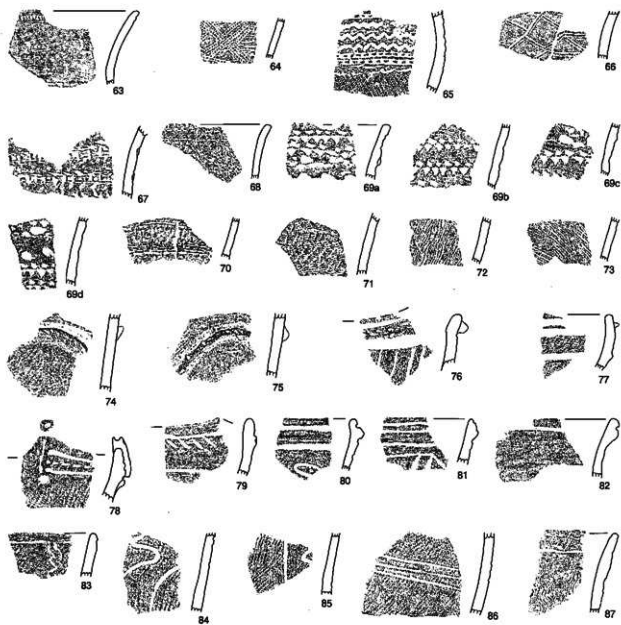
78～83・87は口縁部である。78は円形刺突と沈線で幅狭な区画帯を作出し、結節沈線を充填する。胴部にはRLを施文。83は地文LRで、無文帯を作出する横位沈線から波状沈線が垂下する。87は口縁部無文帯以下に櫛齒状工具による波状沈線が垂下する。84～86は胴部で、地文上に84・85は意匠文、86は沈線文が施される。85は不完全な磨り消しながら、磨手文となろう。いずれも堀之内Ⅰ式の範疇と思われる。

註1 附加条については、山内清男『日本先史土器の縄紋』において3種類が提示されている。即ち附加条が軸の縄の撚りと同方向に絡げであるものを第1種、附加条が軸の縄の撚りと反対方向に絡げであるものを第2種、附加条を軸の縄に対して右巻きあるいは左巻きしているものを第3種と解説しているわけである。今回は基本的にこの判別呼称にしたがった。判断に迷うものとして規則的な間隔を置いて撚紐の回転方位が表出されるものが挙げられるが、附加条であっても軸の縄の残っていないものが甚だ多いことは『日本先史土器の縄紋』の記載中にもあることと、今回の土器観察結果からもこの指摘を取ってきたので、これを軸の縄不明の附加条縄文として記載することとした。それは2条以上が組になり規則的な間隔をおいて施文されている場合、軸に棒状工具を用いたいわゆる摺糸文（絡条体回転文）を施したというよりも、軸の縄に撚紐を絡げた方がより軸に絡みつくので2条以上が安定して表出するのではないかと観察結果から判断したためである。もちろん1条絡げたものの中には糸が濡れているものもあるので、今回附加条縄文とした中に所謂摺糸文とすべきものを含んでいる可能性があることを断っておかねばならない。



第25图 A地区遗物外出土器(2)

0 (1/4) 10cm



第26图 A地区遺構外出土土器(3)

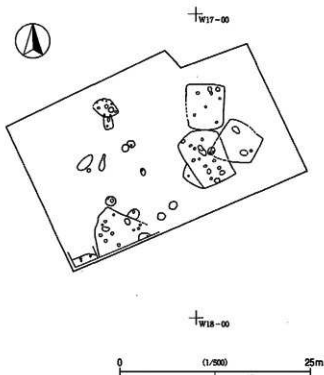
### 第3節 B地区

B地区は確認調査を行った3ヶ所の第1次調査区のうち、最も西側に位置する調査区が該当する。本調査面積は690㎡である。ここは遺跡全体のうちでは西部の一角にあたり、大グリッドV17・W17区に含まれる。調査区西端に接する道を境界に西側は富士見遺跡の範囲となる(第1・4図)。本地区は5地区のうち最も狭小な面積ではあるが、遺構は中業を主体とした縄文時代前期の竪穴住居跡7軒・土坑4基の他、後期の土坑4基、時期不明の土坑4基、縄文草創期～早期と考えられる陥穴が2基検出されている。重複する事例も多いので、本遺跡中では現在のところ比較的遺構密度が濃い地区と言えよう(第27・28図)。

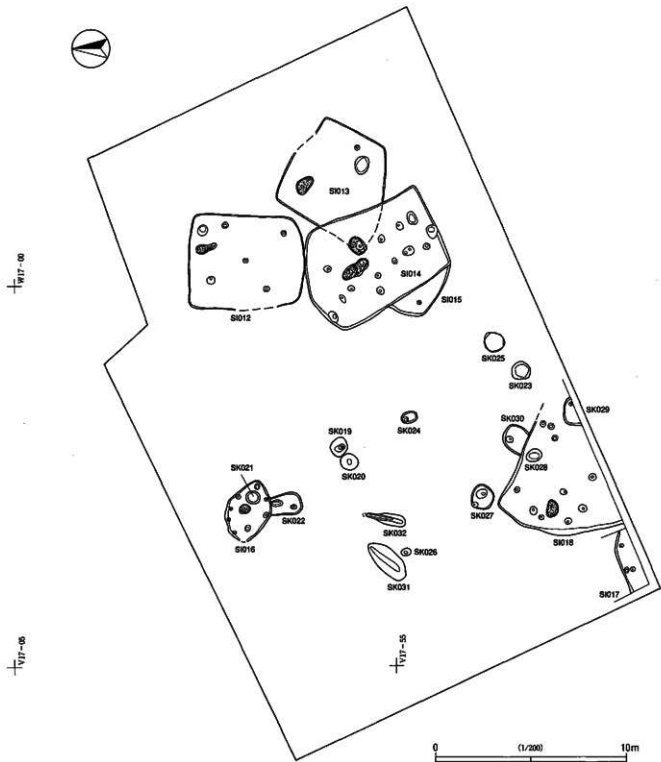
#### 1 竪穴住居跡

SI012 (第28～30図、図版3・16・34)

W17-20・30区付近に位置する。南辺の立ち上がりはSI014のそれと接するので、同時存在はしなかったと思われる。南辺は若干なりだが、外形は基本的には $6.16 \times 5.04\text{m}$ の略長方形を呈する。確認面からの深さは $0.08\text{m}$ と浅く、辛うじてプランが検出された。柱穴と思われるピットは6本ある。床面からのピットの深さはP1・2が $0.28 \sim 0.43\text{m}$ の範囲にある比較的浅いグループ、P3・4・6が $0.77 \sim 0.88\text{m}$ の範囲にある深いグループと概ね2つに分かれる。主柱穴は並び的にはP2～4、6が可能性としてあるが、P2に替えてP1を結ぶ案もあり、確定し得ない。P1・P6間のP1側に寄ったか所、全体でも北に偏在して位置に規模 $1.08 \times 0.48\text{m}$ 、深さ $0.12\text{m}$ の炉が設けられるが、南側は上面が削平されている。形状からすると2基の重複も考慮されるが、柱穴からは物証が得られない。やはり上面が削平されているため正確な規模が不明であるが、住居廃絶後、炉付近の床面から下層にかけてA～Cの3ブロックに分かれた貝層が形成されていた。規模は最大長×最大幅で示すがAが $0.8 \times 0.6\text{m}$ 、Bが $0.5 \times 0.3\text{m}$ 、Cが $0.5 \times 0.3\text{m}$ をそれぞれ測る。厚さは全て $0.1\text{m}$ である。A・Bは図示した規模でcut1・cut2とした一括サンプルを採取した。別項で分析結



第27図 B地区遺構分布図(1)



第28图 B地区遺構分布图(2)

果を報告したが、貝種組成はAがマガキ中心で、Bはサルボウ、マガキ、ハマグリが拮抗する。サルボウは左右の殻が閉じたものが多かった。

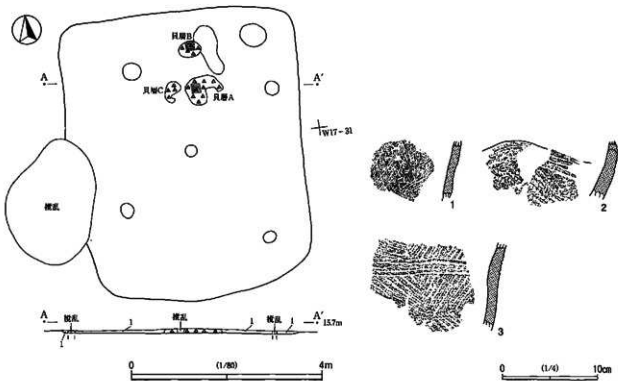
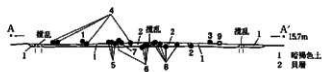
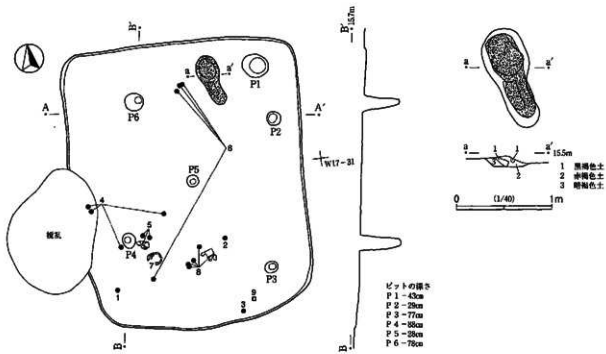
遺物は覆土の遺存状況が不良であったにもかかわらず、復元可能な土器を含め60点以上が出土している。このうち土器8点を図示した。1～7は主要モチーフや文様の一部に沈線を用いるものである。1は半載竹管による平行沈線によって葉脈文あるいは格子目文を描出する可能性がある。2は山形で丸みを持つ波状線、端部に沿った形で複列の半載竹管による平行沈線文が巡らされると思われ、以下にはRLが施される。3は胴部中位の括れ部に、複列の半載竹管による平行沈線文が巡らされると思われる。地文には条の太さの異なるRLを縦横に施して羽状縄文を構成している。4は口縁端部から地文として疎らな捺糸文Rを横走させた後、半載竹管を用いた支点をずらしながら描出したコンパス文が巡らされると考える。復元口径28.2cmを測る。5はおそらく口縁部下端と思われる若干括れた位置に、半載竹管内側を用いた複列の結節沈線文が巡らされると思われる。以下の胴部にはRL・LRを用いた羽状縄文を多段に施す。下部は被熱による赤変が顕著であり、雑さ成形痕も認められる。残存部の最大径32.2cmを測る。6は残存部が少ないが緩やかな波状線となる可能性がある。口唇部は内削ぎ状で胴部中位で括れた後、再び膨らむ器形となろう。括れ部で径23.2cmを測る。0段多糸RLRを施す。7は波状線と波頂部直下の狭小な無文帯には焼成前の円孔が配され、波頂部間の端部上には1対の角状小突起が付される。これらの位置を起点として、半載竹管による平行沈線、円形凹文によって米字文の粗形となる枠状文を構成。地文にはRLを施している。波頂部での推定口径23.2cmを測る。8は胴上部で括れを持つ壺形とも言うべき器形である。口縁端部からRLを全面に施すものと考えられる。推定口径27.2cmを測る。以上のうち、1～6は胎土に繊維を含む黒浜式、7・8は胎土に繊維を含まない諸磯a式と従来の知見によれば分別されるものである。しかしながら繊維の有無による分別は文様等で類似性がある場合は必ずしも有効ではないことや、本遺構の遺存状況を考慮すれば、帰属時期は黒浜式としておきたい。他に楔形石器1点を図示した(第122図105)。

#### SI013・SI014・SI015(第28・31・32図、図版3・4)

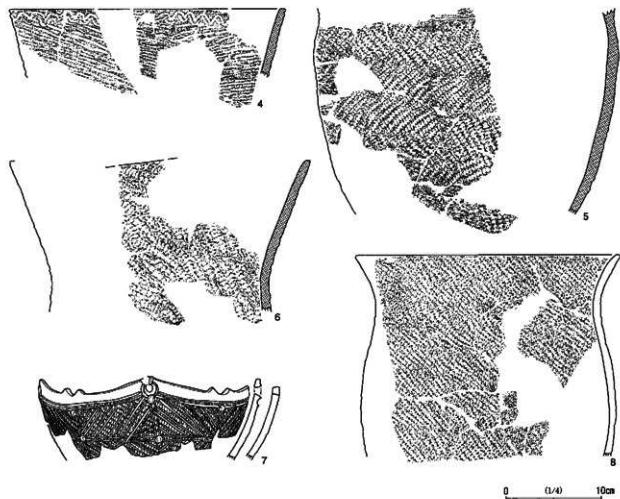
SI013はW17-41区付近に位置する。SI014と重複関係にある。調査図面では本住居跡の方が古いとされるが、後述する問題がある。SI014と攪乱によりプランが確定できないが、台形を呈すると思われる。規模は現存部の最大長・最大幅で5.68×5.36m、確認面からの深さは0.08mと浅い。炉は1ヶ所設けられるが焼面の範囲がかなり小さい。北コーナーに偏在しており、規模は1.04×0.68m、深さ0.06mを測る。柱穴と思われるピットはP1しか検出されなかったが、床面からの深さは0.67mと比較的深い。他に屋内貯蔵穴と考えられる規模0.96×0.76m、深さ0.2mの穴が炉の対角、P1に隣接した位置で1基検出されている。

SI014はV17-49、W17-40区付近に位置する。SI013と重複関係にあるが、本住居跡の床面硬質範囲が重複部にも認められることから本住居跡が新しいとされるが、出土土器を比較すると逆になる。北辺は弓なりだが、外形は基本的には7.68×5.6mの略長方形を呈し、確認面からの深さは0.32mを測る。柱穴と思われるピットは14本検出され、うちP11・14を除き他は主軸上にはほぼ並列しており、上屋根を支えていたものであろう。深さは床面から0.45～0.84mの範囲にあり安定的な深さである。炉は3基あり、それぞれの規模は炉Aが1.0×0.8m、深さ0.04m、炉Bが0.96×0.6m、深さ0.32m、炉Cが推定規模1.6×0.76m、深さ0.08mをそれぞれ測る。炉AはP2と重複しているため、柱の付け替えが考えられる。また、炉B・Cはほぼ相似形のプランが概ね主軸方向でずれたような重複で炉Bが新しいなど、本住居跡では小規模な改築





第29図 SI012 (1)



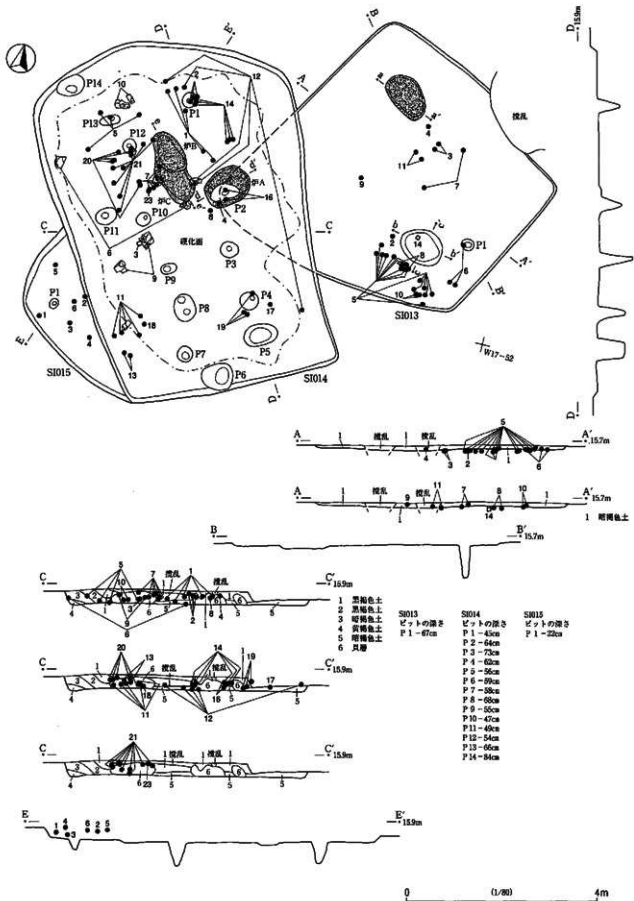
第30図 SI012 (2)

が行われる程度であったと思われる。住居廃絶後、床面から下層にかけて比較的大きなA～Cの3ブロック、小規模なD・Eの2ブロックに分かれる貝層が形成されていた。A・Bの規模は最大長×最大幅・厚さで示したが、Aが $3.2 \times 1.2 \text{m} \cdot 0.25 \text{m}$ 、Bが $3.9 \times 1.4 \text{m} \cdot 0.3 \text{m}$ を測る。C～Eの規模はCが $2.5 \times 1.8 \text{m}$ 、Dが $0.65 \times 0.3 \text{m}$ 、Eが $0.55 \times 0.45 \text{m}$ で、厚さは記録がないため不明である。貝サンプルはA・Bにサンプルサイズ $30 \times 30 \text{cm}$ 、厚さ5cmを単位としたコラムサンプルを設定し、Aは5カット、Bは6カットを採取した。今回はサンプルAのみを分析対象とし、別項でその結果を報告した。

SI015はV17-59区付近に位置する。SI014と重複関係にあるが土層断面では新旧が把握されていない。多くが深さのあるSI014の範囲に含まれるため、本住居跡は隅丸方形の可能性あるプランの一角が検出されたにすぎなく2辺は現存部で約3.2mと1.8mで、確認面からの深さは0.24mである。柱穴は床面からの深さ0.22mのものが1本確認されているだけである。

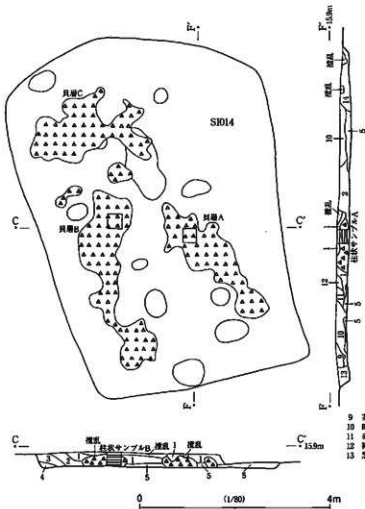
#### SI013出土遺物 (第28・33図、図版16・34)

遺物は約90点出土しているが、このうち12点を図示し得た。貯蔵穴中やその周辺に僅かながら集中が認められる。1～6は竹管文が施されるもの。1～3は半截竹管による平行沈線といわゆる葉脈文が施され

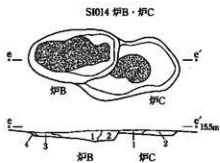
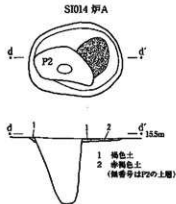
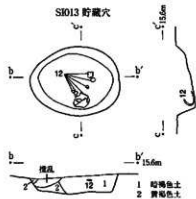
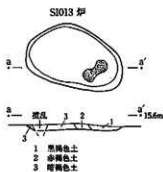


第31圖 SI013 (1)・SI014 (1)・SI015 (1)

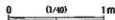
V17-49



- 9 茶褐色土
- 10 暗褐色土
- 11 赤褐色土
- 12 褐色土
- 13 炭褐色土



- |        |        |
|--------|--------|
| 炉B     | 炉C     |
| 1 黒褐色土 | 1 赤褐色土 |
| 2 赤褐色土 | 2 暗褐色土 |
| 3 赤褐色土 |        |
| 4 茶褐色土 |        |

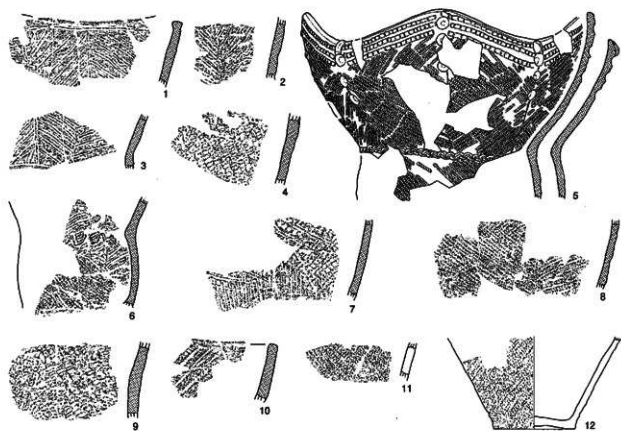


第32図 SI013 (2)・SI014 (2)

るものである。1は波状線で口縁部内面に稜が作出されている。2は葉脈の単位が比較的密で、裏面には縦位のミガキが顕著である。3も葉脈の単位が比較的密で、胴部中位の括れには横位の平行沈線が巡ると思われる。4は地文RL上に円形竹管による刺突列が巡ると思われる。5は4単位の緩やかな波状線で、これに付随した狭小な端部に3列の結節沈線文が巡る。また波頂部間の端部上には小突起が付される。波頂部と小突起の直下には、3単位の円形凹文が細沈線に貫かれた様な串団子状のモチーフで胴部に垂下する。胴部にはこの縦位の分割線を軸として左右にRL・LRを用いた羽状縄文が描出される場合が多い。地文上の胴部中位の括れ部には、半截竹管を用い支点をずらしながら描出したコンパス文が巡らされる。波頂部の推定口径29.8cmを測る。貯蔵穴周辺から分割された状態で出土している。6も地文上の胴部中位の括れ部に、半截竹管を用い支点をずらしながら描出したコンパス文が巡らされると思われる。胴下半となる破片下端にも半截竹管による平行沈線文が認められる。地文にはRL・LRとも用いているが、羽状縄文の意識は薄い。7～12は縄文が施されるものである。7は胴下半に縦位の集合沈線（半截竹管による平行沈線？）を引いた後、軸の縄Rに附加条R2本、軸の縄Lに附加条L2本を反対方向に絡げた附加条第2種が羽状構成となる。8はRL・LRを用いた羽状縄文が構成される。器表面の柔らかな段階で施文されたため粘土のめくれが認められる一方で、裏面には丁寧な縦位のミガキが入る。9は太目のRLを施しており、胎土中の砂礫の混入が目立つ。10は角頭状の口縁部で、端部の狭小な無文帯直下から軸の縄Rに附加条Rを反対方向に絡げた附加条第2種を施している。11はRLが施される。12はLRが密に施される底部で、貯蔵穴の覆土上層からの出土である。以上のうち11・12の胎土中には繊維が含まれないが、他の土器内容はかなりの一括性が認められる。本遺構の遺存状況からより新しい時期のものが後世に混入した可能性もなく、本事例のような縄文のみの場合も含め繊維の有無による分別は文様等で類似性がある場合は必ずしも有効ではないため、本住居跡の帰属時期は黒浜式としておきたい。他に楔形石器（第122図106）、石匙（第123図117）、打製石斧（第124図123）をそれぞれ1点図示した。

#### SI014出土遺物（第28・34・35図、図版16～19・35）

遺物は470点以上と今回報告する住居跡では2番目に多い。このうち21点を図示し得た。床面から覆土上層まで万遍なく出土しているが、個体復元された良好な資料が含まれる。1・2は竹管文が施されるものである。1は波状線で、端部に付随して半截竹管による平行沈線・結節沈線を押し引き手法の有無によって使い分けながら描出している。胴部上半にも同一手法によって大柄な波状沈線文、あるいは山形文を重畳して描くと思われる。平坦部で推定口径39.2cmを測る。2は口縁部から底部まで、幅狭な半截竹管による平行沈線で格子目文を描出する。推定口径12.8cmの小形深鉢である。3～18は縄文が施されるもので、附加条縄文の多様の他、この時期としては多様な縄文が使用されている。3は推定口径9.6cmの小形鉢で、底部は上げ底になる。口縁部から底部まで、軸の縄LRに附加条Rを同方向に絡げた附加条第1種を施している。4は条が湾曲したり施文単位の切れ目にはみ出した粘土がミミズ腫れ状に残ったりするので、Lを器面が軟らかい段階で施文したと思われる。5は口縁部上に工具あるいは指頭による押捺で凹凸が刻み目状に巡らされる。端部以下には軸の縄は判別できないが、附加条が直前段反RRになる附加条縄文を施している。推定口径28.0cmを測る。なお、薄い網点で示した範囲には漆の可能性のある薄い皮膜が認められる。6は軸が棒状の工作物か縄であるかは不明であるが、横位の施文方向に規則的なS字状結節と軸に留めた痕跡と思われる点状の窪みが単子上端付近に認められる。原体はLである。推定口径



第33図 SI013 (3)

30.6cmを測る。7は一部分以外、末端環付Rを口縁端部から胴上半まで環付部分を多段に施し、胴部上半以下は末端環付Rの幅広と環付のみの部分が交互する異間隔施文となる。胴部下半は被熱による赤変が顕著である。推定口径15.3cmに比して器高がある細身の深鉢であろう。8は口縁端部に指頭による押捺で凹凸文が巡ると思われる。器面が柔らかな段階での施文、しかも器表面も荒れているため、原体の特定は難しいが、縄の途中にあまり間隔を置かず作られた2か所の結節部分のみを横位回転したものか、2本を緩く結節した部分を同様に転がしたものであるか判別が難しい。推定口径15.5cmを測る。9は器表面が軟らかい段階で施文されたため不鮮明な部分もあるが、条の中に傾きが90°異なる複節と無節が交互に表出している。傾きの異なる複節が交互に表出する場合はいわゆる異節縄文になろう。異節と組紐には撚り戻しと意識的な組違いという密接な関係が想定されるので、内容は未明だが本例は組違いで生じた原体の可能性はある。推定口径21.1cmを測る。

10は内割ぎ状の刃部のような口唇部を呈し、胴部上半で若干括れた後、漸次底部に接続すると思われる大形の甕形ともいえる深鉢で、推定口径37.0cmを測る。軸の縄と附加条が同方向の附加条第1種を多段に施すが、横位の施文単位が明瞭に捉えられる。現存部の一段目左は軸の縄Rに附加条Rを2本絡げた附加条縄文で、末端には撚り止めの結節回転が認められる。右側は残存部が小さいが、軸の縄Lに附加条Lを2本絡げた附加条縄文になり羽状縄文を構成しよう。以下4段は軸の縄Lに附加条Lを2本絡げた附加条縄文が施され（2段目右は軸の縄Rに附加条Rを2本絡げた附加条縄文になり羽状縄文）、最下段は施文幅が長い軸の縄Rに附加条Rを2本絡げた附加条縄文が施される。11はやや小形の典型的な深鉢で、推定

口径18.8cmを測る。軸の縄Rに附加条L2本を反対方向に結げた附加条第2種と、軸の縄Lに附加条R2本を反対方向に結げた附加条第2種が施されており部分的に羽状縄文を構成する。底部は若干、上げ底になる。12は口縁端部が歪にやや波を打つが平縁で、口唇部は内削ぎで刃部状である。11同様に軸の縄Rに附加条L2本を反対方向に結げた附加条第2種と、軸の縄Lに附加条R2本を反対方向に結げた附加条第2種が施されており、これらによって菱形文が施される。推定口径18.8cmを測る。13は推定口径10.1cmの小形深鉢である。共に軸の縄の圧痕がほとんど残されていないため不明であるが、附加条RとLを2本結げた附加条縄文が施される。部分的に羽状縄文とはなるが単位は入り組んでいて構成意識は希薄である。14は口縁がやや歪な平縁で、推定口径16.5cmの小形深鉢である。11同様に軸の縄Rに附加条L2本を反対方向に結げた附加条第2種と、軸の縄Lに附加条R2本を反対方向に結げた附加条第2種が施されている。大柄な羽状縄文になる部分もあるが、構成の意識は希薄だと考える。15は軸の縄の施文が浅い箇所が多いが軸の縄Lに附加条R3本を反対方向に結げた附加条第2種と、軸の縄は不明であるが附加条L3本を反対方向に結げた附加条第2種が葉脈状あるいは部分的には菱形のモチーフを描出する。モチーフは附加条のみが鮮明である方がより効果的という意識があるかもしれない。なお、表裏に薄い網点で示した範囲には、5同様に漆の可能性のある薄い皮膜が認められる。推定口径18.8cmを測る小形深鉢でと思われる。16は軸の縄が不鮮明ながら、附加条RとLを2本ずつ結げた第2種の附加条縄文が認められるが、羽状縄文の意識は希薄である。17は口縁端部に押捺による凹凸文が巡る可能性がある。端部直下から軸の縄Lに附加条R2本を反対方向に結げた附加条第2種と、軸の縄Rに附加条L2本を反対方向に結げた附加条第2種が羽状縄文を整然と構成している。裏面の成形はやや雑で小さな凹凸が認められる。18は胴部中位付近で、軸の縄Lに附加条R2本を反対方向に結げた附加条第2種と、軸の縄Rに附加条L2本を反対方向に結げた附加条第2種が施され、菱形文を描出している。

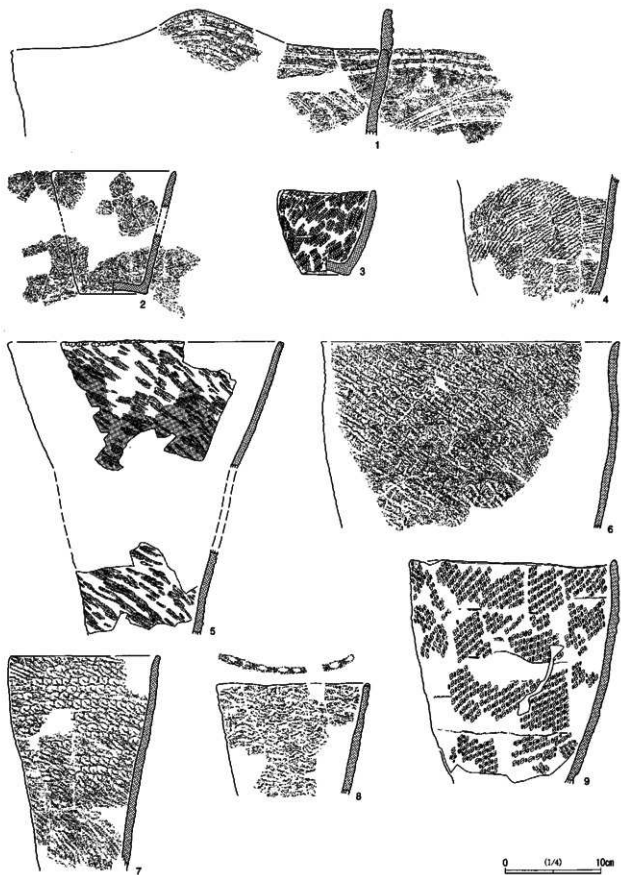
19は無文の小形深鉢で、表裏とも成形は雑で凹凸が残る。推定口径8.8cmを測る。20・21は底部である。20は胴部下部までRとLによって羽状縄文が構成されており、菱形文を描出する。21は底部まで3本1単位の幅広い歯状工具により、横位に平行沈線文や振りの少ない波状沈線文が描出される。底面は上げ底状になる。以上は遺構内出土資料としては本遺跡中最も充実している内容である。黒浜式の前段階から中段階に比定されるものであり、住居跡の帰属時期を示すものであり、調査所見によるSI013との重複関係に矛盾が生じている。他に胎土中に繊維が含まれない黒浜式の土器片錘1点を図示した(第130図4)。

#### SI015出土遺物(第28・36図、図版35)

1は1本引きの沈線文が施されるが、部分的には格子目状に交差している。2～5は縄文の施されるものである。2はLR、3はRL、4はL、5は燃糸文Lがそれぞれ施されている。6は無文で器面の荒れが進んでいる。以上は零細な資料ではあるが、時期的には黒浜式に限定し得るので本遺構の帰属時期を示すものとする。

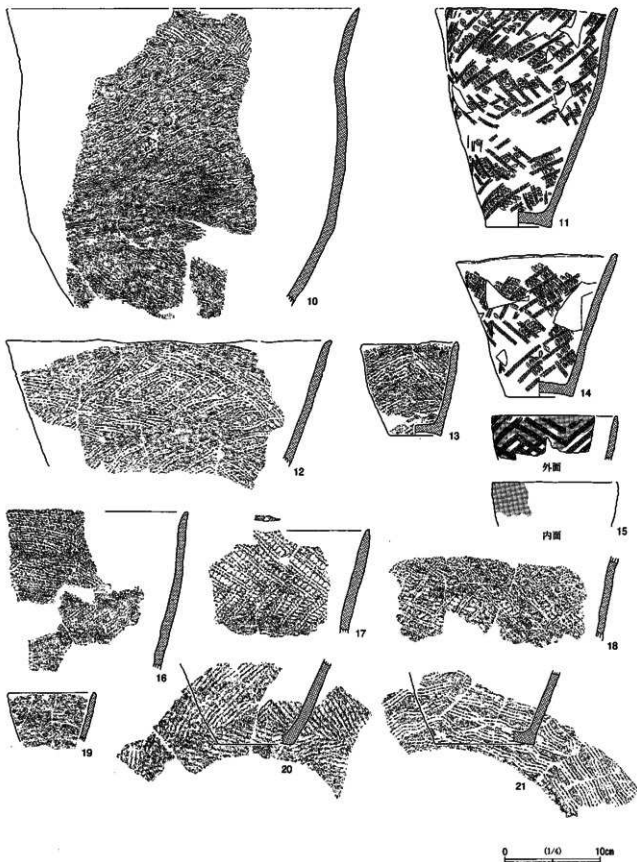
#### SI016(第28・37図、図版4・35)

V17-37区付近に位置する。中軸西端は攪乱されるが3.36×2.32mの不整槽円形を呈す小形な住居跡で、確認面からの深さ0.16mを測る。柱穴と思われるピットは8本あり壁際付近に配されている。床面からの深さは0.09～0.43mの範囲までであるが、P1・P8を除いて概ね0.1～0.2mの範囲にある。中軸上のやや北寄り



第34图 SI014 (3)





第35圖 SI014 (4)

に規模0.56×0.52m、深さ0.08mの炉が設けられる。炉の東南には本住居跡より新しいSK021が重複している。また、南側で重複しているSK022は本住居跡に切られている。

出土遺物は約10点と少なく、このうち土器2点を図示し得た。1・2は縄文の施されるもので、1はR、2はRLである。以上は第2群5類の黒浜式と思われるが資料は零細である。しかしながらSK021の時期は後述するよう黒浜期に比定できるので、本住居跡も該期の可能性が高い。他に黒浜式の土器片鑑1点を図示した(第130図2)。

#### SI017 (第28・38図、図版4・19・35)

V17-86区付近、調査区の南西隅に位置する。概ね3.2×1.04mの範囲の部分的な調査である。確認面からの深さは0.32mを測る。柱穴と思われるピットは3本検出されているが、いずれも床面から0.15m前後と浅い。炉は調査範囲内からは検出されていない。

出土遺物は約15点と少ないが、このうち土器6点を図示し得た。1・2は縄文の施されるもので、1はLR、2は軸の縄LRに附加条Rを同方向に絡げた附加条第1種である。3は放射肋を有す貝殻腹縁により連続刺突文が施される。4・5は基本的には無文だが、4では口縁端部から器面調整に伴う横位の擦痕が顕著である。6は底部で、軸の縄の原体は不明ながら反対方向にLを絡げた附加条第2種である。以上は全て第2群5類の黒浜式である。部分的な調査ながら、住居跡の時期は黒浜期の可能性が高いとしておきたい。

#### SI018 (第28・39図、図版4・35)

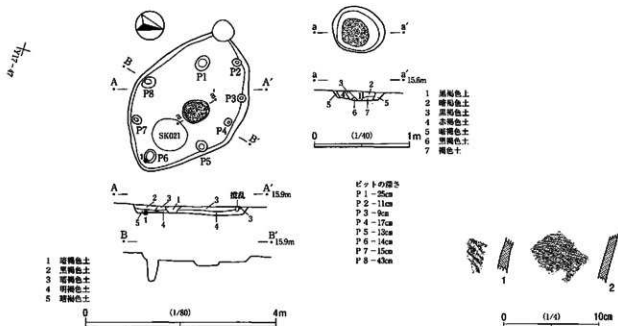
V17-77・87区付近、調査区の南西に位置する。SI017と重複関係にあると思われるが、重なる部分は調査区外になるので新旧は言及し得ない。また、本住居より新しいSK028～SK030とも重複関係にある。部分的な調査であり遺存状況も不良な部分もあるため、現状では不整形の2辺が検出できたのみでそれぞれ6.56m、4.8mを測る。確認面からの深さは0.2mを測る。柱穴と思われるピットは10本検出されており、床面からの深さは0.29m～0.6mの範囲にあり、極端に浅いものはない。住居跡の北隅近くP6・P9の間に規模0.88×0.6m、深さ0.04mの炉が設けられているが、床面との差はほとんど見られず焼面と呼ぶべき構造で、短期間の居住の可能性がある。

出土遺物は約170点で、このうち15点の土器を図示し得た。1～10は胎土中に繊維を含み、11～15は繊維を含まない。1～5・10は沈線または刺突による文様が見られるものである。1は口縁端部から横位に条線が連続的に付けられた後、細いヘラ引き沈線で格子目文が施される。2・4は半截竹管による平行沈線で葉脈文が描出される。3は半截竹管による平行沈線で上弧肋骨文が描出されると思われる。5は0段多条のLRLを地文とし、円形竹管による刺突文が2列認められる。10は底部で、細いヘラ引き沈線で格子目文が施される。6～9は縄文が施されるものである。6は胴部中位と思われる括れ部に、放射肋を有す貝殻腹縁により押し文が施される。以下の胴部にはRLが施される。7は波状縁で、口縁端部からLR・RLを用い羽状縄文を構成する。8はLRが施される。9は軸の縄Lに附加条Lを反対方向に絡げた附加条第2種と、軸の縄Rに附加条Rを反対方向に絡げた附加条第2種が羽状縄文を構成する。以上は第2群5類の黒浜式である。11は無文の口縁端部下と斜位刻み付き隆起線の間にD字爪形文が巡ると思われる。胴部以下には半截竹管による平行沈線により下弧肋骨文が描出されると思われ、地文には捺糸文Rがまばらに

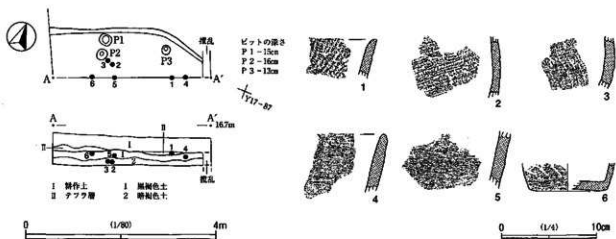


第36図 SI015 (2)

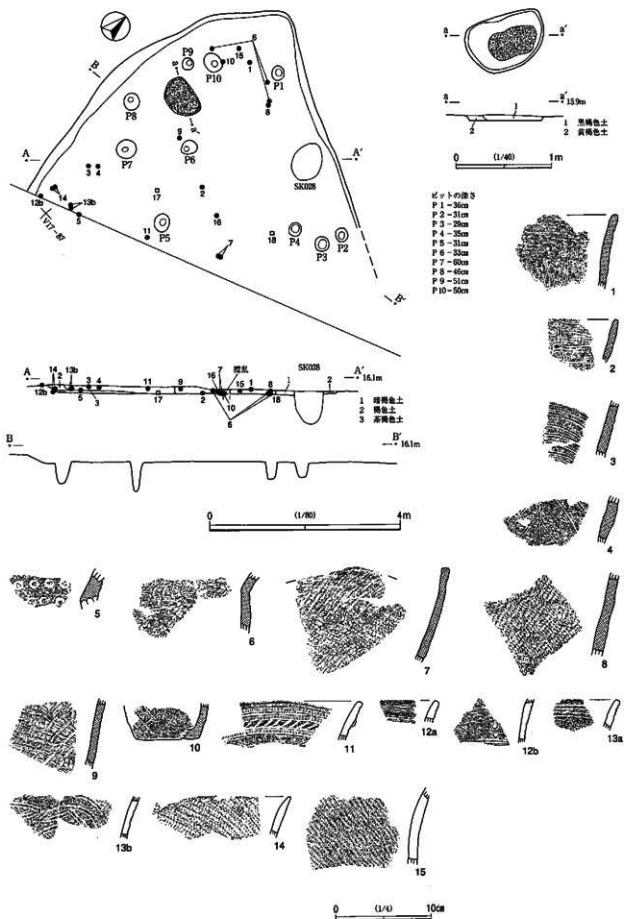
0 (1/4) 10cm



第37図 SI016



第38図 SI017



第39図 S1018

施される。12a・bは無文の口縁端部下に半載竹管による平行沈線が、胴部には波状文が施される。胴部にはD字爪形文が垂下しよう。以上は第2群7類のうち、浮島I式に比定できる。13a・bは無文の口縁端部下に半載竹管による平行沈線が通ると思われ、胴部には平行沈線で描出された木葉文が展開しよう。木葉内側に充填される縄文はRLか。胎土中に長石等の細かな砂礫を多量に含む。14・15はRLが施されるもので、15は0段多条である。以上は第2群6類のうち、諸磯a式に比定できる。住居跡の帰属時期は上記の諸型式が混在して出土していることから、より新期の諸磯a・浮島I期に比定しておきたい。他に黒浜式の土器片錘（第130図1）、石鏃（第121図14）、石皿（第127図149）を図示している。

## 2 土坑

### SK019（第28・40・41図、図版9・36）

V17-47区付近に位置する。1.02×0.9mの不整円形を呈し、確認面からの深さは底面までで0.84m、底面に穿たれる小ピットで1.05mを測る。遺物は4点以上出土しており、このうち3点を図示し得た。1は半載竹管による平行沈線で、肋骨文が描出されると思われる。2はLRを施した後、円形竹管による刺突列が垂下する。3はRLが施される。以上は第2群5類の黒浜式である。これらはいずれも覆土上層から出土なので、遺構の時期は黒浜期の可能性があるという程度に止めておく。

### SK020（第28・40・41図、図版36）

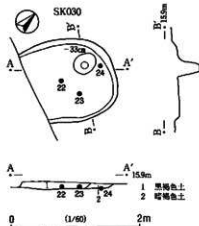
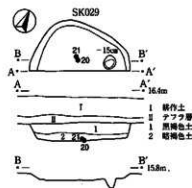
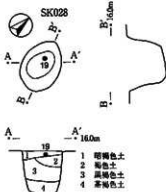
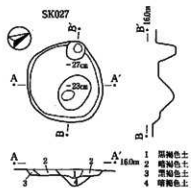
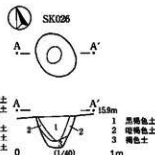
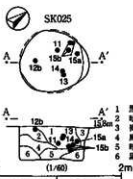
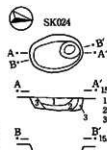
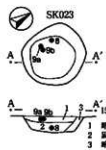
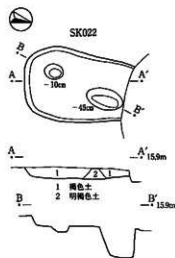
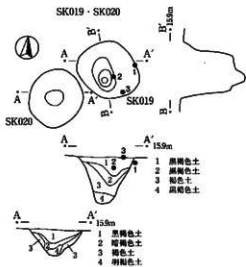
V17-47区付近、SK019南西側に近接した位置にある。0.96×0.84mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.42mを測る。断面形は楕円状を呈す。出土遺物は覆土一括で数点のみだが、このうち1点の土器を図示し得た。4は半載竹管による平行沈線で、横位区画文と葉脈文を描出する第2群5類黒浜式である。以上の零細な内容では遺構の時期決定が困難であるため、時期不明としておきたい。

### SK021（第28・40・41図、図版9・36）

V17-37区付近、SI016と重複しており、本土坑が新しい。0.78×0.72mの略円形で、確認面からの深さは0.36mを測る。遺物は5点以上出土しており、このうち2点を図示し得た。5は口縁端部にナデによる無文帯を作出し、以下には軸の縄は施文が浅く不明であるが、附加条はR2本を格げた附加条縄文が施される。6は波状線で、外削ぎ状の口唇部で直下から半載竹管による平行沈線で矢羽根状文を描出する。以上は第2群5類黒浜式で、出土位置からも本遺構の時期を決定するものである。

### SK022（第28・40・41図、図版9・36）

V17-37区付近、SI016と重複しており、本土坑が古い。不整円形を呈すると思われ、現存部で1.74×1.14m、確認面からの深さは0.18mを測る。ピットが2本検出されており、床面からの深さは0.1m、0.45mを測る。南西寄りの底面と壁面中位に径約0.25～0.3mの小ピットが検出された。出土遺物は覆土一括で数点のみだが、このうち1点の土器を図示し得た。7は波状線にLRが施される第2群5類黒浜式である。以上の零細な内容では遺構の時期決定が困難であるため、時期不明としておきたい。



第40图 B地区土坑

SK023 (第28・40・41図、図版9・36)

V17-68区付近に位置する。1.02×1.02mの不整形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。遺物は3点出土しており、全てを図示した。8は口縁に平行して刺突が充填される区画沈線が認められる。9a・bは同一個体で、曲直線の意匠文描出線内に兩垂れ状の列点文が充填される。以上は第4群1類の称名寺式のうちⅡ式に比定されるもので、出土位置からも本遺構の時期を決定するものである。

SK024 (第28・40・41図、図版10・36)

V17-58区付近に位置する。0.84×0.6mの楕円形を呈す。確認面からの深さは底面北側の小ビット部分で0.24mを測る。出土遺物は覆土一括で数点のみだが、このうち1点の土器を図示し得た。10は器面の剥落が顕著だがLが施される第2群5類黒浜式と思われるが、内容的に遺構の時期は不明としておきたい。

SK025 (第28・40・41図、図版10・36)

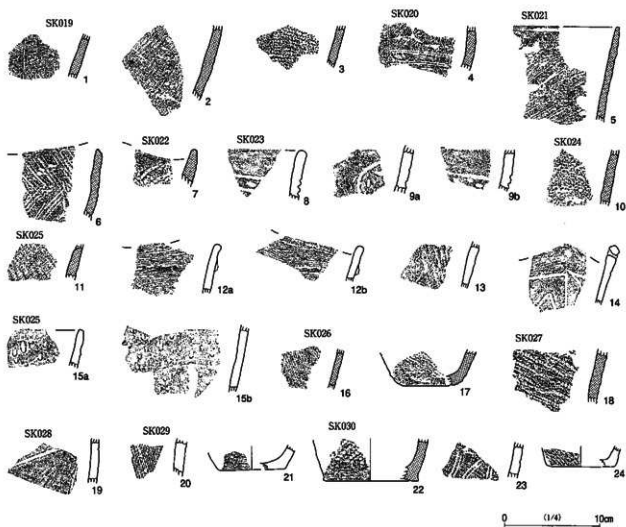
V17-69区付近に位置する。1.08×1.02mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.54mを測る。立ち上がりはほぼ垂直で、一部は僅かにオーバーハングする。遺物は30点以上出土しているが、5点を図示し得た。11はRL(下半は0段多条のもの)が施される第2群5類黒浜式である。12a・bは櫛歯状工具による集合沈線を地文とし、斜位の刻み目を持つ浮線文が巡らされると思われる。aには押引文が加えられている。また、胎土中には砂礫を少量含むが裏面のミガキは丁寧である。第2群6類のうち、諸磯b式の新段階に比定されようか。13は縦位にRのZ字状結節回転文を施している第3群1類の五領ヶ台式である。14は波状線、波頂部に円孔が穿たれる。口縁部無文帯以下に意匠文が配されるが、下端に列点文の充填が認められる。15a・bは口縁端部から区画文を作出せず、全面的に兩垂れ状の列点文を施す。これらは第4群1類の称名寺式のうちⅡ式に比定される。以上記載したように複数時期の土器が覆土中層から上層にかけて出土しているため、遺構の帰属時期は最も新しい称名寺Ⅱ式としておきたい。同時期と考えられるSK023が本土坑の南西1mに位置していることも付記しておく。

SK026 (第28・40・41図)

V17-56区付近に位置する。0.48×0.36mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.32mを測る。出土遺物は覆土一括で数点のみだが、このうち2点の土器を図示し得た。16は先端の細いへう状工具による細沈線で葉脈文が施されると思われる。17は胴部下半～底部で、放射肋を有す貝殻背による圧痕文が施される。いずれも第2群5類黒浜式であるが、零細な内容であるため帰属時期は不明としておきたい。

SK027 (第28・40・41図、図版36)

V17-67区付近に位置する。1.32×1.26mの略円形を呈す。底面に2本の小ビットが検出されている。確認面からの深さは底面までで0.12m、ビット部分で0.23m、0.27mを測る。出土遺物は覆土一括で数点のみだが、このうち1点の土器を図示し得た。18は直前段反転RRLが施される第2群5類黒浜式であるが、零細な内容であるため帰属時期は不明としておきたい。



第41図 B地区土坑出土土器

**SK028 (第28・40・41図、図版36)**

V17-67区付近に位置する。SI018と重複関係にあり、本土坑が新しい。0.84×0.6mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.6mを測る。出土遺物は接合しなかった1個体7点で、このうち1点を図示した。19は沈線により意匠文を描出すると思われる第4群2類の堀之内1式に比定されよう。内容はやや零細ながら単一時期であることから、帰属時期は該期としておきたい。

**SK029 (第28・40・41図、図版10・36)**

V17-78区付近に位置する。SI018と重複関係にあり、本土坑が新しい。土坑の約1/2は調査区外であるが、現存部で1.62×0.84m、確認面からの深さは土坑の中軸状で0.3mを測る。底面に小ビットが1本検出された。出土遺物は数点で、このうち底面付近から出土した2点を図示した。20は先端の細いヘラ状工具による細沈線で斜格子目文が描出される。21は無文の底部である。以上はやや決め手に欠くが第4群2類の堀之内1式に比定されよう。内容はやや零細ながら出土位置を重視して、帰属時期は該期としておく。



SK030 (第28・40・41図、図版36)

V17-67区付近に位置する。SI018と重複関係にあり、本土坑が新しい。現存部で1.68×1.44m、確認面からの深さは0.09m、1本検出された小ピットは底面から0.33mを測る。遺物は6点以上出土したが、底面から出土した3点を図示した。22は胴部下半にLRが施されるが、下端はナデ消される第2群5類黒浜式の底部である。23は半截竹管による平行沈線で描出された木葉文が展開しよう。木葉内側に充填される縄文はRLか。24は細密なRLが底部付近まで施される。以上は第2群6類のうち、諸磯a式に比定できる。内容はやや零細ながら出土位置を重視して、より新しい諸磯a式を帰属時期としたい。

3 陥穴

SK031 (第28・42図、図版10)

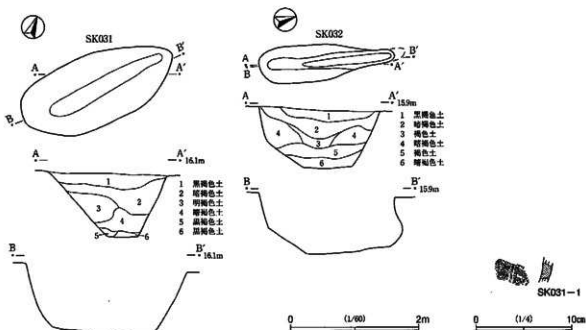
V17-46区付近に位置する。2.58×1.2mの不整長楕円形を呈し、確認面からの深さは最深部で1.02mを測る。遺物は遺構一括で半截竹管による平行沈線が引かれた2群5類黒浜式が出土しているが、遺構形状から草創期後半～早期前半に類出する溝型陥穴と考える。

SK032 (第28・42図、図版10)

V17-46区付近、SK031の東側約1mにはほぼ並列した形で位置する。2.16×0.6mの不整長楕円形を呈し、確認面からの深さは1.26mを測る。遺物は出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に類出する溝型陥穴と考える。

4 遺構外出土土器 (第43・44図、図版19・36)

遺構出土土器とほぼ同様の型式に加え、僅かながら遺構に伴わない早期前半撚糸文土器、早期後半条痕文土器が出土しているので、順に説明しておく。



第42図 B地区陥穴

### 第1群1類 早期前半条系文系土器 (第43図1)

無文の尖底であるが、本類の可能性が高いので含めた。細別時期は不明である。

### 第1群2類 早期後半条痕文系土器 (第43図2)

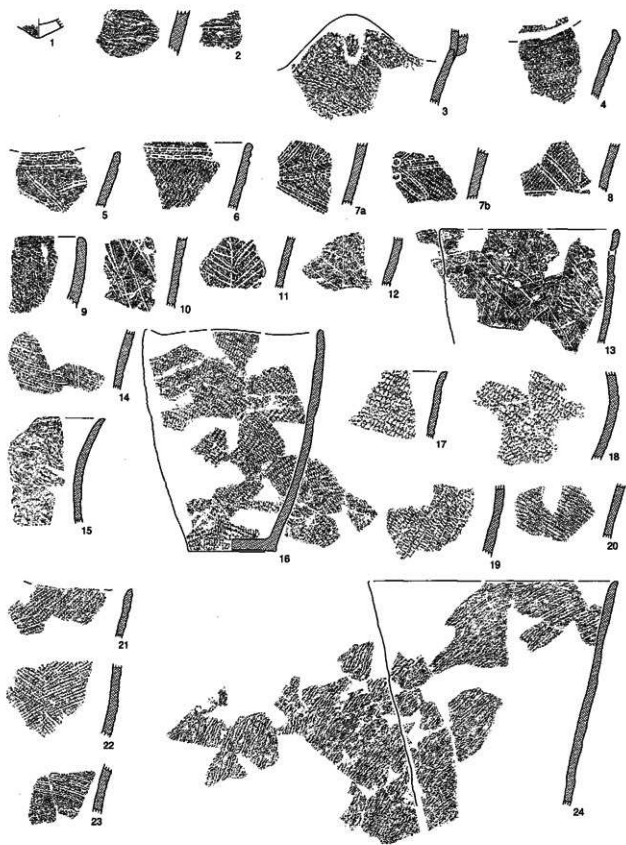
2は放射肋を有す貝殻条痕文が表裏とも横位を基本に施される。広義の条痕文系土器としておく。

### 第2群5類 前期中葉黒浜式土器 (第43図3～24)

3～15は半載竹管やヘラ状工具等を用いて沈線による文様が施されるものである。3は波状縁と思われ、中軸上端部直下に長粒の貼付文が認められる。波状縁に平行して細身の半載竹管を2本組にして内側を用いた複列の結節沈線文が2条引かれており、貼付文両側にも付随している。以下にはあまり明瞭ではない軸の縄Lに附加条L2本を反対方向に絡げた附加条第2種が施される。4は刻み目を有す無文の口縁端部が短く内屈する波状縁で、以下には5条、半載竹管内面を用いた結節沈線文が施される。胴部以下には細い撚り紐によるLRが施されると思われる。5は波状縁で、端部に平行して細身の半載竹管を2本組にして内側を用いた複列の結節沈線文が2列引かれる。以下には半載竹管を用いた平行沈線を斜位に組み合わせ、山形文を描出している可能性がある。6は口縁端部に平行して半載竹管内面を用いた結節沈線文が2条施される。以下にはLRが施される。7a・bは地文RL上に円形竹管刺突文、磨り消しを伴う半載竹管内側による平行沈線や結節沈線によって、いわゆる曹菱形文が強調して描出されている。黒浜式でも新しい段階となろう。8は地文RL上に半載竹管内側を用いて半隆起線に近く丁寧に引いた平行沈線で葉脈文が描出されると思われる。軸線上には円形竹管による刺突文が連続して加えられる。この平行沈線は磨り消しの効果があり、また垂下する円形刺突列も米字文に類出するところから、黒浜式でも新しい段階となろう。9は放射肋を有す貝殻の背圧痕文を斜縄文に似せて施した上に、先端の細いヘラ状工具によって、縦位を基調とした沈線が密に重ねられている。10はヘラ状工具で斜格子目文が施される。11はヘラ状工具で、12・14は半載竹管による平行沈線で葉脈文が施される。13は弧の曲率の少ないいわゆる劣載竹管内側を用いたと考えられるもので、内皮の擦痕が顕著な平行沈線で格子目文を描出する。1対となる補修痕が認められる。15～24は各種縄文が施されるものである。15は外反する口縁部に、やや不鮮明だが反摺RRが施される。16はかなり緩やかな波状縁を呈すと思われ、幅広3段の羽状縄文がRL・LRにより構成される。推定口径18.0cmを測る。17・18・20はRLが、19は0段多条のLRが施される。21～24は附加条縄文の施されるものである。21は波状縁で、軸の縄LRに附加条Rを同方向に絡げている附加条第1種。22は軸の縄RLに附加条Lを同方向に、軸の縄LRに附加条Rを同方向に絡げた附加条第1種を用いて羽状縄文を構成している。23は軸の縄の原体は不明だが、附加条L2本を絡げている。24は器面全面に亘って、軸の縄の原体は不明だが附加条L2本を絡げた附加条縄文を施している。推定口径26.0cmを測る。

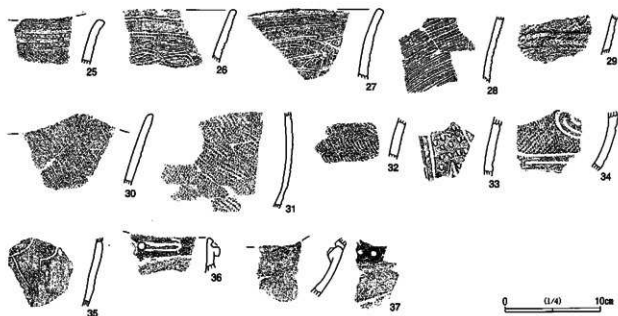
### 第2群6類 前後葉諸磯式土器 (第44図25・26・28～32)

25は波状縁で、無文の口縁端部に細い半載竹管内側により半隆起線的なC字形の爪形文が3条巡ると思われる。以下にRLを施文する。26も無文の口縁上下端に半隆起線的なC字形の爪形文が巡らされ、胴部には連結木葉文が施される。28は半載竹管による平行沈線で、上弧肋骨文が描出されると思われる。30～32は縄文が施されるもの。30・31はRLが施され、32は自らS字状結節を作り撚りを止めたRLが施される。



第43图 B地区遗物出土土器(1)

0 1/4 10cm



第44図 B地区遺構外出土土器(2)

以上はa式に比定される。29は地文LRに斜位の刻み目付きの浮線文が貼付されるb式。

#### 第2群7類 前期後葉浮島式・末葉興津式土器(第44図27)

27は先端の細いヘラ状工具で疎らな捺糸文風に施した縦位沈線を地文とし、半截竹管内側を用いた平行沈線でやや扁平な木葉文を描出する。浮島I式の古い部分に比定できよう。

#### 第4群1類 後期初頭称名寺式土器(第44図33)

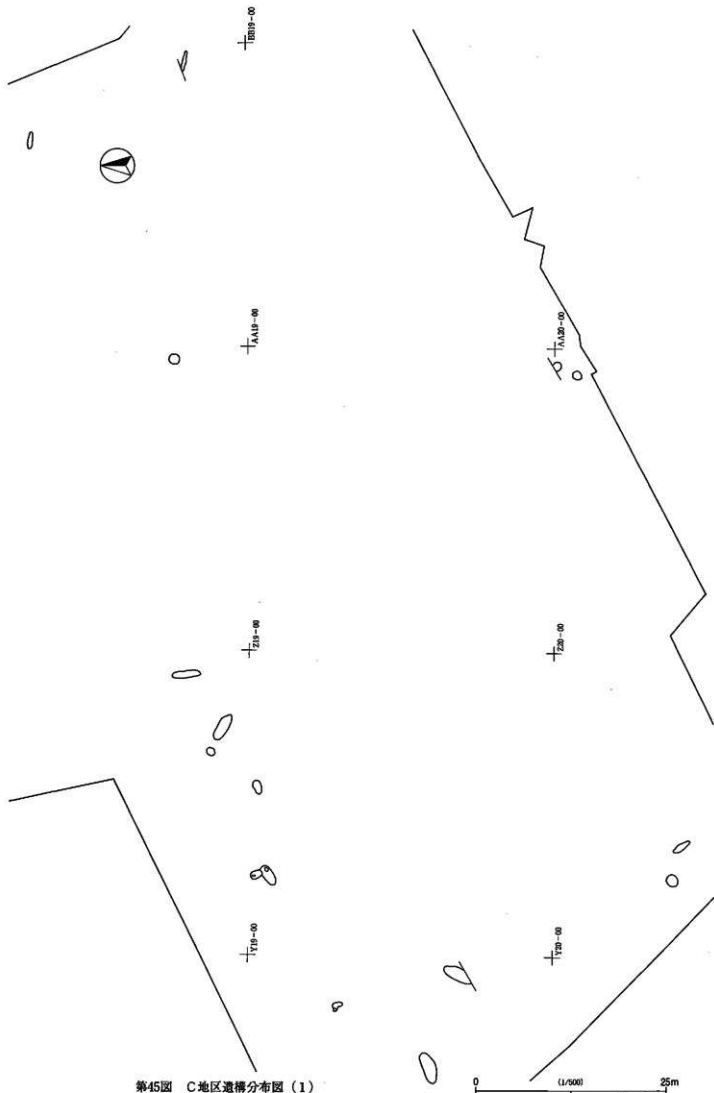
33は沈線で描出される意匠文内に兩垂れ状の列点文が充填されるII式である。

#### 第4群2類 後期前半堀之内式土器(第44図34~37)

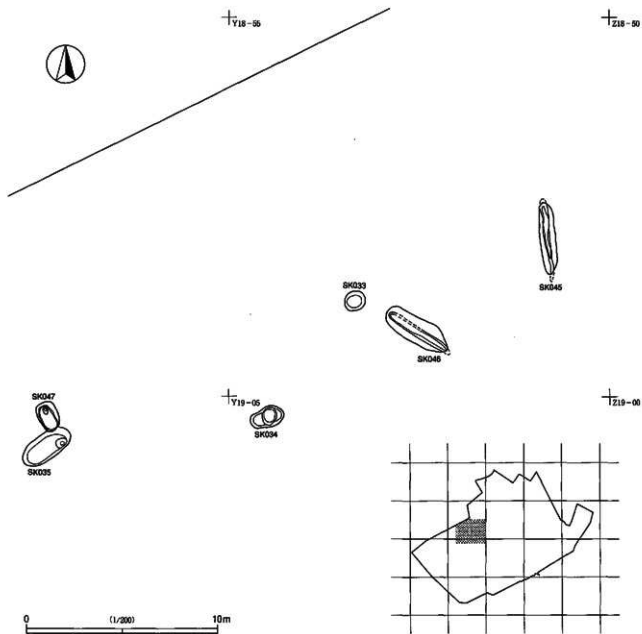
34は地文LRに磨り消しを伴う沈線で意匠文や区画文を描出しよう。35は胴部下半で剣先状の意匠文が沈線で描出される。以上はI式に比定できよう。36は折り返し口縁に凹文や円形刺突、沈線を組み合わせた文様帯が形成されよう。37は口縁表面に36に相似した文様帯を形成する浅鉢と思われる。以上の胎土は緻密で、色調も淡褐色なところが特徴的である。網取式系と思われる。

### 第4節 C地区

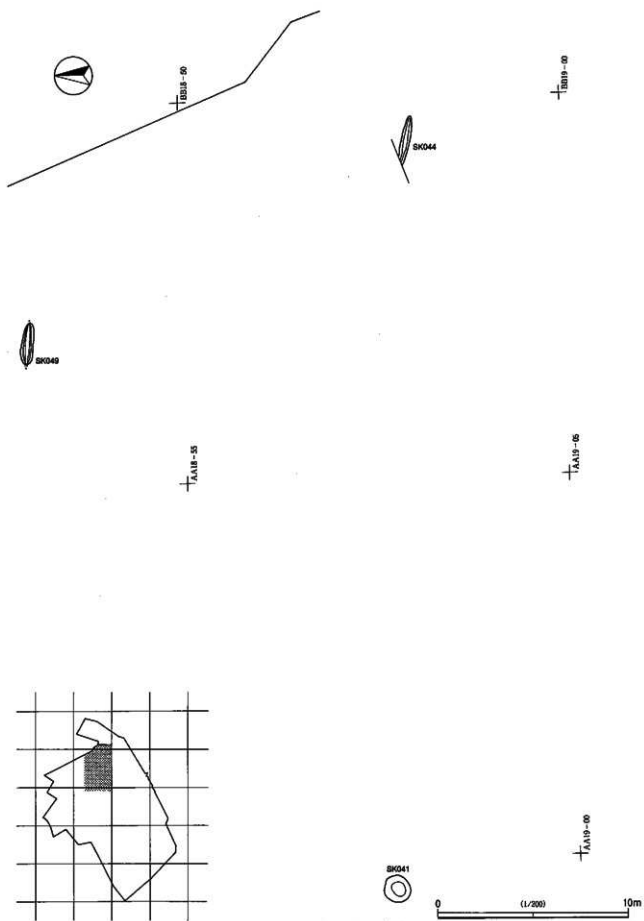
C地区は、第1次調査区3ヶ所のうち最も東側に位置する調査区、第3次調査区、第13次調査区5ヶ所のうち北西側の3ヶ所の調査区、第16次調査区、第17次調査区、第19次調査区という数次に亘った確認調査の範囲を統合したものである。ここは遺跡全体のうちでは南西部にあたり、大グリッドX19区、Y18・19区、Z18・19区を中心としたかなり広い範囲である。やはり調査区南西端に接する道を境界に、南西側は富士見遺跡の範囲となる(第1・4図)。本地区は5地区のうち最も広範ではあるが、遺構分布は最も希薄で本調査面積は1,955㎡である。他の4地区で検出されている縄文時代前期の竪穴住居跡は1軒も



第45图 C地区遗構分布图(1)



第46图 C地区遺構分布图(2)



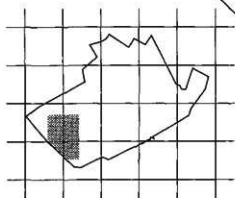
第47图 C地区遗構分布图(3)



† Y19-50



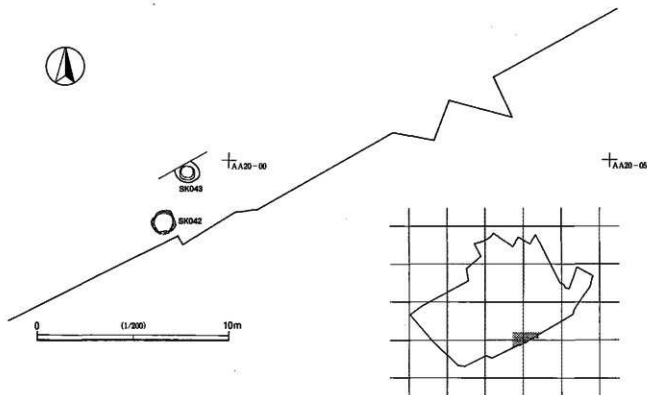
† Y20-00



0 (1/200) 10m

第48图 C地区遺構分布图(4)





第49図 C地区遺構分布図(5)

見られず、土坑も時期が確実なものは後期の土坑1基、前期の可能性のあるものを含め時期の決め手に欠く土坑10基、縄文草創期～早期と考えられる陥穴が6基検出されているだけである(第45～49図)。

未だ未調査地を含むものの、前期の住居分布では広場の空間地にあたる可能性がある。隣接した富士見遺跡の範囲では再び黒浜期を中心とした住居跡群が検出されており、この考えを補強している。

## 1 土坑

### SK033 (第46・50図)

Y18-86区付近に位置する。1.14×1.02mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。遺物は出土していないため時期不明である。

### SK034 (第46・50・51図、図版10・19)

Y18-05区付近に位置する。上面は1.8×1.14mの不正楕円形を呈し、下面には1.02×0.84mの楕円形を呈す2段堀込みを有す。確認面からの深さは段掘り底面で0.42mを測る。遺物は約50点出土しているが、覆土下層～上層までの間で26片が接合した1個体を図示した。1は口縁端部に横方向のナデによる狭小な無文帯を作出し、以下には櫛歯状工具による条線が垂下する。部分的には間隔を空け縦位の無文帯を作出する。胴部中位で緩やかな括れを持つ器形で、第4群2類の堀之内1式に比定できるか。推定口径34.0cmを測る。この土器の出土状況から考え、帰属時期は該期とする。

### SK035 (第46・50・51図、図版37)

Y18-02区付近に位置し、北隅が陥穴であるSK047と重複関係にある。2.88×1.32mの長楕円形で、確認

面からの深さは0.42mを測る。東側の壁際に底面からの深さ0.23mの小ピットが1本検出されている。遺物は覆土一括で数点出土しているのみだが、このうち1点を図示し得た。2は0段多条のRLが施される。第2群6類の諸磯式の可能性が高いが、時期を決定するにはやや零細な内容であるため該期の可能性があるという程度に止める。

#### SK036・037 (第48・50・51図、図版10・37)

X19-28・38区付近に位置し、新旧関係はSK036が新しい可能性がある。SK036は1.32×0.6mの楕円形を呈す。南側が0.72×0.42mの楕円形を呈す2段堀込みになっており、この部分で確認面からの深さ0.48mを測る。出土遺物は覆土一括で数点のみだが、このうち1点の土器を図示し得た。3はLの施される第2群5類の黒浜式であるが、零細な内容から遺構の時期は不明としておく。

SK037はSK036に切られるため全容は不明であるが、現存部で0.72×0.42m、確認面からの深さ0.24mを測る。西壁際に規模0.3×0.24mのオーバークラフする小ピットが穿たれるが、底面からの深さ0.24mを測る。遺物は遺構一括で石礫1点(第122図96)が出土しているが、決定要素に乏しく時期不明とする。

#### SK038 (第48・50・51図、図版37)

X19-69区付近に位置するが、宅地に掛かっていた部分は完掘されていない。現存部で4.2×1.74mを測る。北半が不整楕円形を呈す1.92×0.64m程の緩やかな2段堀込みになっており、最深部で確認面からの深さは0.42mを測る。出土遺物は覆土一括で数点のみだが、このうち2点の土器を図示し得た。4は無文の口縁部、5はLの施されるいずれも第2群5類の黒浜式であるが、時期を決めるにはやや零細な内容であるため、該期の可能性があるという程度に止めておく。他に石礫片1点が出土しているが図示しない。

#### SK039 (第48・50・51図、図版37)

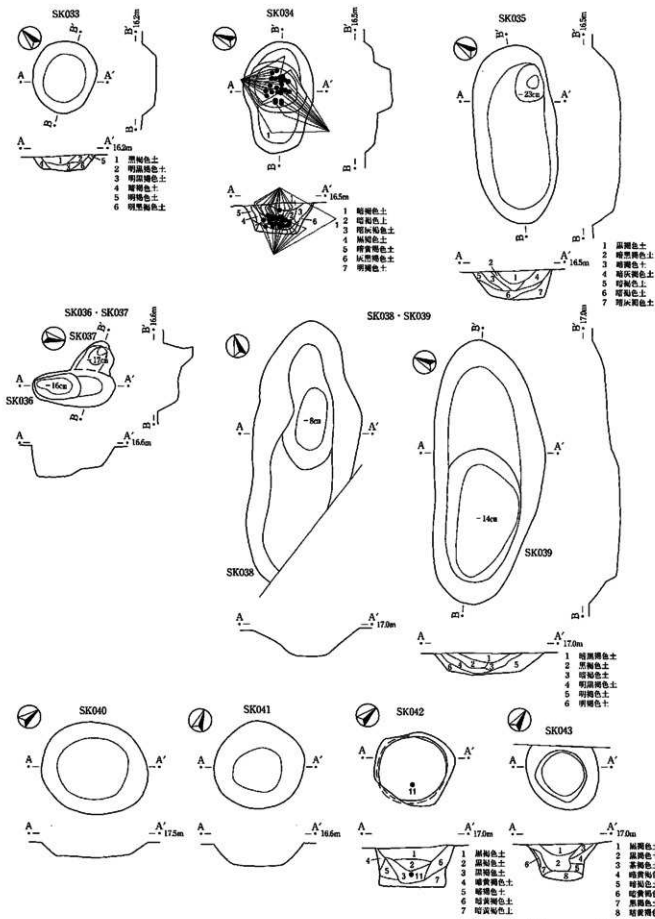
X19-56区付近に位置する。4.2×1.74mのやや不整な長楕円形を呈す。西半が2.1×1.17m程の緩やかな2段堀込みになっており、最深部で確認面からの深さは0.45mを測る。出土遺物は覆土一括で数点のみでこのうち2点の土器を図示し得た。6はRLが施される。7は胴下部までLRの施される底部。いずれも第2群5類の黒浜式で、時期を決定するにはやや零細な内容であるため可能性があるという記載に留める。

#### SK040 (第48・50・51図、図版37)

Y20-32区付近に位置する。1.68×1.44mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。出土遺物は覆土一括で数点のみだが、このうち1点の土器を図示し得た。8はRが施される第2群5類の黒浜式であるが、時期を決定するにはやや零細な内容であるため該期の可能性があるという記載に留める。

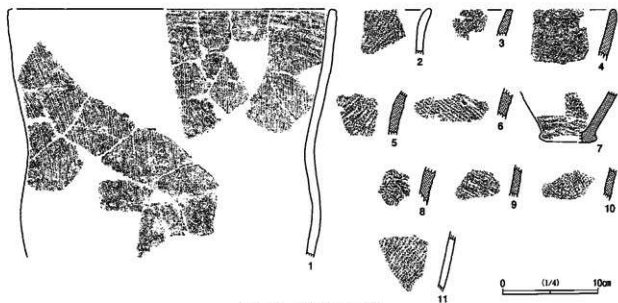
#### SK041 (第47・50・51図、図版10・37)

Z18-79区付近に位置する。1.44×1.38mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.36mを測る。出土遺物は覆土一括数点で、このうち2点の土器を図示。9は軸の縄の原体が不明だが、附加条Rを2本結げた附加条縄文が施される。10は軸の縄Lに附加条L2本を反対方向に結げた附加条第2種を施文。いずれも第2群5類の黒浜式で、時期を決定するにはやや零細ながら該期の可能性があるという記載に止める。



第50图 C地区土坑(1)

0 (1/60) 2m



第51図 C地区土坑(2)

**SK042 (第49～51図、図版10・37)**

Z20-09区付近に位置する。1.26×1.2mの不整形円形を呈す。壁は中位で少し窄まった後、約2/3が少々オーバーハングし、確認面からの深さは0.66mを測る。出土遺物は約10点を数えるが、このうち覆土下層の位置を記録した1点の土器を図示。11はLRが施され、胎土に砂粒を少量含む。第2群6類の諸襷式の可能性が高い。内容はやや零細ながら出土位置から遺構に伴う可能性が高いので該期の可能性が高い。

**SK043 (第49・50図)**

Z20-09区付近に位置するが、宅地に掛かっていた部分は完掘されていない。現存部で1.14×1.02mを測るが、おそらく略円形を呈すと思われる。壁は部分的に中位で少し窄まっており、確認面からの深さは0.6mを測る。遺物は出土していないため時期不明である。

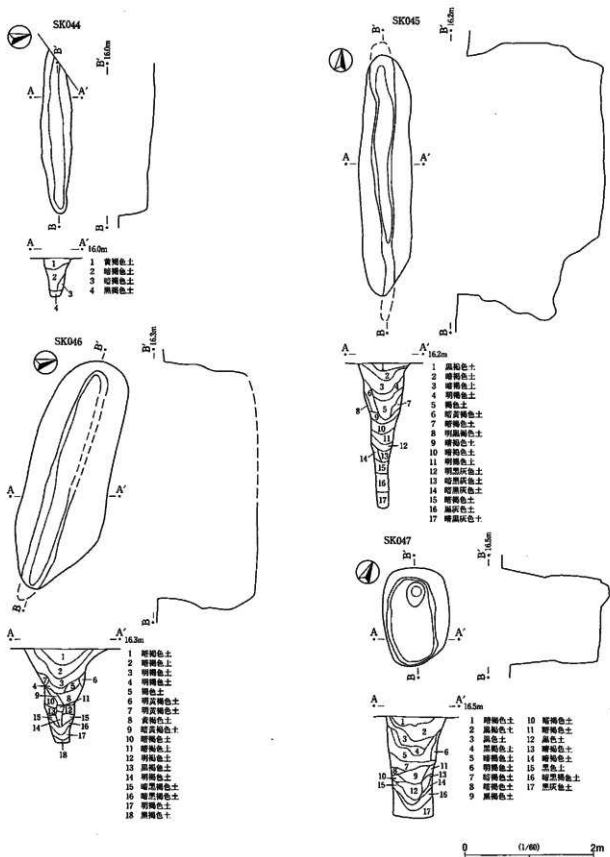
**2 陥穴**

**SK044 (第47・52図、図版10)**

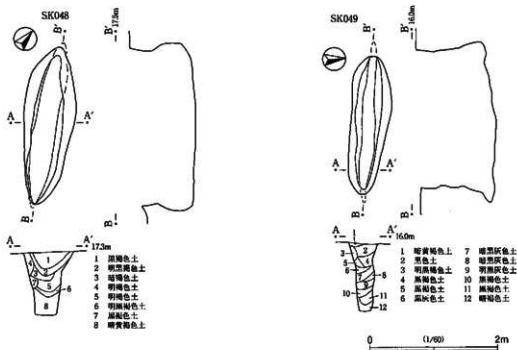
AA18-79区付近に位置する。西端が未掘のため現存部で2.58×0.54mを測るが、不整形長楕円形を呈すと思われる。確認面からの深さは最深部で0.48mを測る。上面に削平を伴うのか浅い作りであるが、遺構形は草創期後半～早期前半に頻出する溝型陥穴に類似する。遺物は出土していない。

**SK045 (第46・52図、図版10)**

Y18-79区付近に位置する。3.78×0.96mの不整形長楕円形を呈す。縦断面によると南側に段差が見られ、南北端ともオーバーハングする。確認面からの深さは最深部で2.28mを測る。遺物は出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に頻出する溝型陥穴と考えられる。



第52图 C地区陷穴(1)



第53図 C地区陥穴(2)

**SK046 (第46・52図、図版10)**

Y18-97区付近に位置するがSK045の東側約1mにほぼ並列した形で位置する。3.78×1.44mの不整楕円形を呈す。破線部分は調査時に掘りすぎているが、確認面からの深さは1.56mを測る。遺物は出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に類出する溝型陥穴と考えられる。

**SK047 (第46・52図、図版11)**

Y19-02区付近に位置する。1.56×1.08mの不整楕円形を呈す。長軸上の壁は中位で若干干まり、以下はほぼ直立する。北壁際に浅い小ピットが穿たれており、この部分で確認面からの深さは1.65mを測る。遺物は出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に類出する陥穴と考えられる。

**SK048 (第48・53図)**

Y20-43区付近に位置する。2.54×0.84mの不整長楕円形を呈し、南北端ともオーバーハングする。確認面からの深さは最深部で1.2mを測る。遺物は出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に類出する溝型陥穴と考えられる。

**SK049 (第47・53図、図版11)**

AA18-26区付近に位置する。2.22×0.66mの不整長楕円形を呈し、縦断面によると底面に凹凸が認められ、南北端ともオーバーハングする。確認面からの深さは最深部で0.96mを測る。遺物は出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に類出する溝型陥穴と考えられる。

### 3 遺構外出土器 (第54図、図版37)

既述したように遺構稀薄部であること、加えて前期遺構空白地であることもあり出土量は他地域に比べ少ない。しかし遺構出土器とはほぼ同様の型式に加え、他地区に比べ後期中葉土器がやや目立っている。

#### 第2群1類 前期初頭花積下層式土器 (第54図1)

1はいわゆる捻糸側面圧痕文の施されるものである。異方向の原体を組み合わせ直・曲線のモチーフを描出するもので、やや太めのRとLを用いている。刺切文がモチーフ間に充填される。

#### 第2群3類 前期前葉岡山式土器 (第54図2・3)

2は主幹文様の構図は不明だが、多載竹管による平行沈線と梯子状沈線で描出されと思われる。点状文様は瘤状貼付文である。1式の新しい部分以降であろう。3はLRとRLを結束した羽状縄文である。

#### 第2群5類 前期中葉黒浜式土器 (第54図4～17)

4～8は半載竹管やヘラ状工具等を用いて沈線による文様が施されるものである。4～6はヘラ状工具を用いて口縁端部直下から縦位を基本に沈線文が施される。7・8は半載竹管を用いた平行沈線が施される。7は縦位の基幹線に斜沈線が交差し格子目文状である。8は口縁端部下に沿って平行沈線が施され、以下にはR・Lで羽状縄文を構成。施文上端には他の細い糸を以て縛り留めた原体末端線が認められる。9～17は各種縄文が施されるものである。9はRL・LRで羽状縄文が構成される。10はR・Lで羽状縄文が構成されるが、器表面の柔らかな段階で施文されたため粘土のめくれが認められる。11はRLの施される波状線で小突起が付く。12はRLが縦位に、13はLRが、14はLとLRが施される。15は軸の縄の原体が不明だが、附加条L2本を絡げた附加条縄文が口縁端部直下から施される。16は軸の縄Rに附加条Rを同方向に絡げた附加条第1種が施される。17は底部で下端までRLが施される。

#### 第3群2類 中期前葉阿玉台式土器 (第54図18)

18はヘラ状工具による押し文が認められる。

#### 第3群4類 中期後葉加曾利E式土器 (第54図19・20)

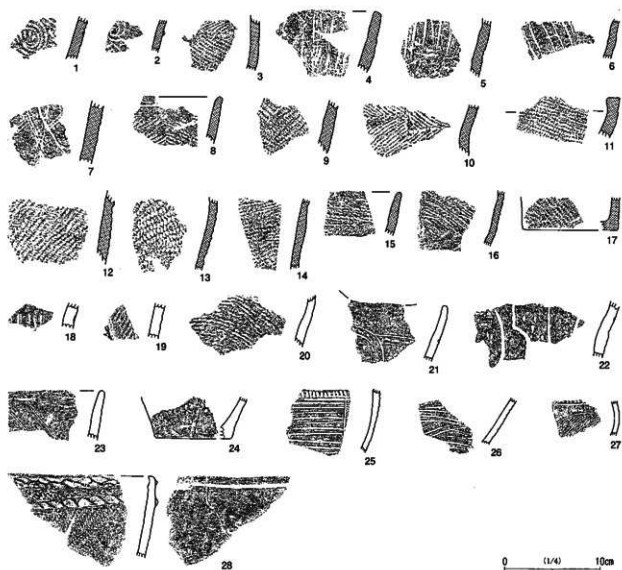
19は磨消懸垂文間にRLが施されるEⅡ式あたりと思われる。20はLが施される。

#### 第4群1類 後期初頭称名寺式土器 (第54図21・22・24)

21・22は沈線で描出される意匠文内に雨垂れ状の列点文が充填される。21には円形竹管が用いられている。いずれもⅡ式である。24はこの時期前後の底部であろう。

#### 第4群2類 後期前半堀之内式土器 (第54図23)

23は半載竹管による平行沈線を複数並列させて引き、直線的な意匠文を描出すると思われる。



第54図 C地区遺構外出土器

第4群3類 後期中葉加曾利B式・曾谷式土器 (第54図25~28)

25は刻み目付きの沈線で縦横を区画された中に横位沈線を充填するB2式である。26は細沈線で綾杉状文を描出するB2である。27は頸部の刻み目と胴部の弧線文が認められるB3式である。以上は精製土器である。28は口縁端部に近接して2条の紐線文が付され、裏面端部に1条の沈線が巡る粗製土器である。



## 第5節 D地区

D地区は第4次調査区、第9次調査区、第11次調査区2ヶ所のうち東側の調査区、第13次調査区5ヶ所のうちの最も東側の調査区という数々に亘った確認調査の範囲を統合したものである。ここは遺跡全体のうちでは南東部にあたり、東側の低地からこの範囲の南北に支谷が浅く入り、略舌状の地形を呈す。大グリッドCC19・20区、DD18・19区を中心とした広い範囲で、このうち本調査面積は2,154㎡である(第1・4図)。検出された遺構は前葉を主体とした縄文時代前期の竪穴住居跡11軒・土坑2基の他、時期不明の土坑8基、縄文早期後半条痕文期と思われる炉穴7基、縄文早期前半の集石土坑1基である。前期の竪穴住居群は舌状台地の縁片にやや散漫な分布を示している(第55～60図)。

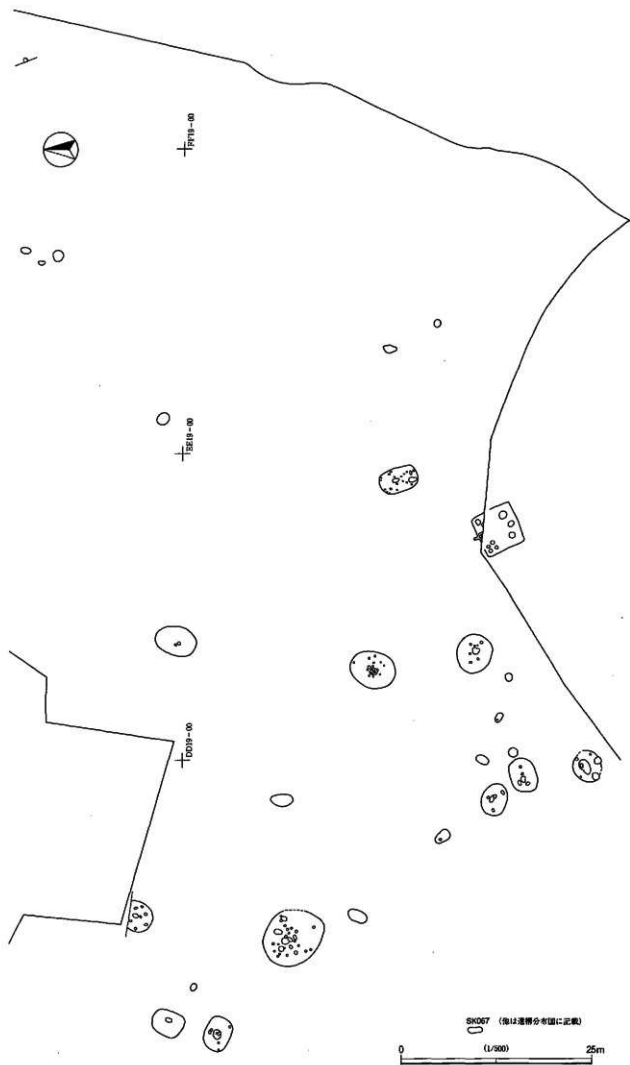
### 1 竪穴住居跡

SI019(第58・61～63図、図版4・20～22・37・38)

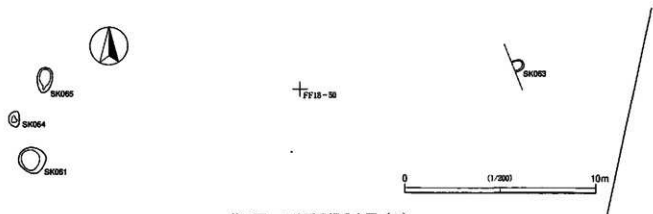
DD19-69区付近に位置するが、ここは南側に緩やかに傾斜している。5.04×3.12mのやや不整な隅丸方形を呈し、確認面からの深さは0.48mを測る。柱穴と思われる比較的小形のピットは19本あり、壁際から床面中央付近まで散在している。床面からの深さは0.1～0.74mの範囲でばらつきがある。他に床面南西部に1.12×0.64mの不整楕円形を呈す屋内貯蔵穴状の落ち込みが検出されており、深さ0.22mを測る。中央やや北寄りには規模0.84×0.48m、深さ0.08mの炉が設けられており、底面には被熱痕跡が認められる。

遺物は200点以上が出土しているが、特に炉北側の床面近くで復元可能な土器が複数個体検出された。これらを中心に土器36点を図示した。1～4は主幹文様と点状文様が明確なもの。1は口縁部の主幹文様が1本引き沈線による梯子状沈線で描出されるが、基本構図は不明。点状文様は円形竹管刺突文である。胴部には脚短な末端環付LR・RLが交互・多段に施されようか。第2群2類の前期前葉二ツ木式である。

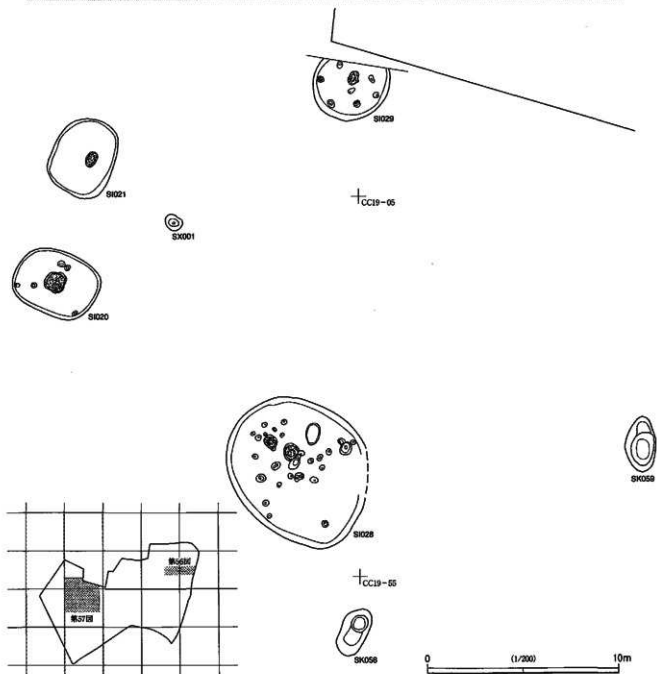
2a・b～4は口縁部文様帯の主幹文様が半載竹管を用いた平行沈線による梯子状沈線で描出され、点状文様に瘤状貼付文が用いられるものである。2a・bは波状線で頂部と平坦部の端部上に半載竹管による連続刺突文が付される。主幹文様の基本構図は麻手状になろう。胴部以下にはLが施される。3は口縁部に白歯状突起が付される。主幹文様の基本構図は鋸歯状+山形附加である。4は波頂部が内湾する波状線で、両側に集合角状突起が付される。波頂部下には粒状と円環状の貼付文が付く。主幹文様の基本構図は鋸歯状+山形附加である。5の口縁部文様帯は地文にRLを施した後、半載竹管による平行沈線のみで鋸歯状+山形附加となる主幹文様を描出する。胴部以下は環付部のみと脚長な末端環付RLを多段に施し、異間隔横帯区画となろう。胴部中位には半載竹管による真正コンパス文が巡らされる。6・9は口縁部に主幹文様は描かれず、瘤状貼付文による点状文様のみが配されているものである。6は炉北側の床面付近から出土した。口縁部に集合角状突起が4単位付されると思われ、器形は湾曲の強いキャリバー形を呈す。口縁部下端と胴部中位の括れ部よりやや下部、胴部下半の膨み部にそれぞれ半載竹管による真正コンパス文が巡らされる。地文縄文はRL・LRとも0段多条で、脚長・脚短の末端環付で羽状縄文を構成し、異間隔横帯区画となる。口縁部の残存率約80%で推定口径47.1cm、最大径47.6cmを測り、現高は34.0cmとかなり大形の個体である。9も口縁部に集合角状突起が付され、口縁部と胴部に半載竹管による真正コンパス文が巡らされよう。地文は異方向2種の直前段合摺(2段目が全く解けて2本の条と化した)で羽状縄文を構成する。7はRLが施される推定口径10.6cmを測る円筒状の小形土器である。口縁部上部に半載竹管による真正コンパス文が施される。8は口縁部から環付部のみを施し、以下にはRL・LRとも0段多条となる脚長の末端環付で羽状縄文を構成。広義には異間隔横帯区画といえる。



第55图 D地区遺構分布图(1)



第56图 D地区遺構分布图(2)

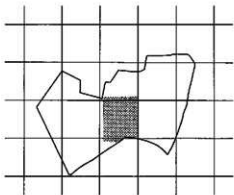


第57图 D地区遺構分布图(3)



SK025

DD19-05



DD19-05



SK027



SK018

DD30-06



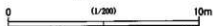
SK022



SK056

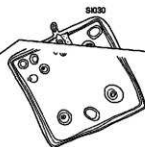


SK057



(1/200)

10m



SK030

大松遺跡

第58图 D地区遺構分布图(4)



EE19-00



SK050

EE19-05

EE19-50

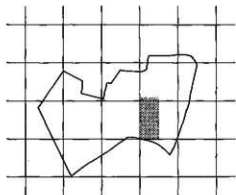
EE19-05



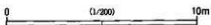
SK062



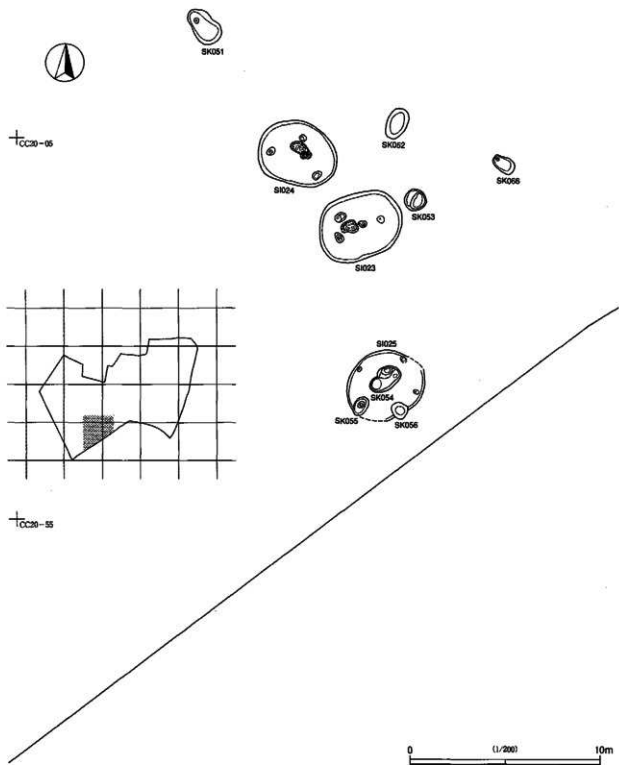
SK060



EE20-05



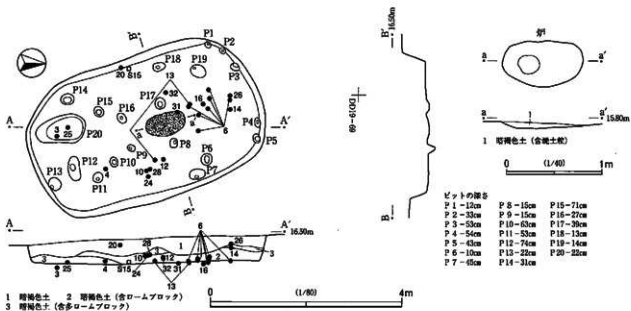
第59图 D地区遺構分布图(5)



第60图 D地区遺構分布図(6)

10・11・13・14は口縁端部以下にRL・LRとも0段多条となる脚長の末端環付で羽状縄文を構成するものである。10は口縁端部にやや大形の角状突起が付くが、残存部で判断する限り4単位にはならない。間に脚短の末端環付が入るので、異間隔横帯区画といえる。推定口径14.1cmを測る。11は口縁端部の狭小な無文帯が作出される。頸部付近で横帯の方向が乱れ狭くなっており、広義には異間隔横帯区画といえる。推定口径29.6cmを測る。13は追加成形痕と補修孔が認められ、推定口径24.8cmを測る。14は口縁端部に集合角状突起が付される。間に脚短の末端環付が入るので、異間隔横帯区画といえる。推定口径29.5cmを測る。12は口縁端部から0段多条LR・RLを用いた羽状縄文が、以下からはRL・LRとも0段多条となる脚長の末端環付で羽状縄文がそれぞれ構成される。胴部中位には半載竹管による真正コンパス文が巡らされよう。15は0段多条LR・RLを用いた羽状縄文が構成されるが、閉端を折り曲げた痕跡が横位に連続する。胴下半に追加成形の痕跡である下部文様への粘土被りが認められる。推定口径29.6cmを測る。16は口縁端部から0段多条LR・RLを用いた羽状縄文が構成され、胴部中位以下は環付部のみと脚長な末端環付RLによる異間隔横帯区画となろう。追加成形の痕跡である下部文様への粘土被りが2か所認められる。推定口径12.4cmを測る小形土器である。以上は第2群3類の関山式のうち、I式の範疇となる口縁部・復元胴体である。17は波状線で、端部から0段多条のR2本とL2本をそれぞれ緩く結び、この部分を閉じた端とした「結節回転B」が交互に幅狭等間隔で施文される。広義の羽状縄文となろう。第2群2類のニツ木式～3類の関山式でもI式古段階の範疇になろう。18～24は環付部のみ、0段多条LR・RLを用いた脚短・脚長な末端環付を施し異間隔横帯区画となる胴部である。18は下端に真正コンパス文が認められる。20は現存最大径27.0cmを測る。21の現存部上端は脚短・脚長な末端環付を施し異間隔横帯区画となるが、下半は幅広な羽状縄文や菱形文を構成する。現存最大径40.8cmを測る。22は環付部のみを多段に施し、以下には脚長な末端環付を施し異間隔横帯区画となる。24は口縁部以下に幅広な無文帯を作出し、以下に脚短・脚長な末端環付を施し異間隔横帯区画となる。25は端部を欠損するが、幅広の口縁部文様部に半載竹管による平行沈線とヘラ状工具による1本引き沈線を用いて格子目文を描出する。下端に僅かながらLRが認められる。関山式では稀有な事例だが、床面から出土している。26はややための原体RL・LRを用いて羽状縄文を構成。

27は欠損するが片口注口土器と思われる。半載竹管内側を用いた半隆起線的な平行沈線でV字や渦巻きあるいは蕨手状の意匠文が施されると思われ、組紐を地文とする。28は地文LR上に半載竹管内側を用いた平行沈線により、鋸歯状+山形附加を基本構図とする主幹文様が描出される。胴部以下には0段多条LR・RLを用いた脚短・脚長な末端環付を施し、異間隔横帯区画となる。29は直前段合摺（2段目が全く解けて2本の条と化した）を地文とし、胴部中位に半載竹管による平行沈線が縦位に密接して施される。30は組紐、広義に捉えれば組原体が施される。27～30は3類関山式でもII式の範疇に含まれると思われる。31～36は底部で全て上げ底である。31・32は多段に施す環付部のみ、0段多条LR・RLを用いた脚短・脚長な末端環付で異間隔横帯区画となる。胴部下位に半載竹管による真正コンパス文が施される。32は外底面にも0段多条RLを施す。33は器表下端まで0段多条LRを施す。34は器表下端まで0段多条LR・RLを用いた脚短な末端環付を施し、幅狭等間隔になると思われる。外底面にも0段多条RLを用いた末端環付を施す。35は0段多条LR・RLを用いた羽状縄文・菱形文が構成される。36は器表、外底面とも貝殻背圧痕文が施される。以上説明した土器の中では第2群3類のうち関山I式に比定されるものが最も多数で、かつ出土位置からも蓋然性が高いので、該期を本住居跡の帰属時期とする。他に石鏃1点を図示した（第121図15）。



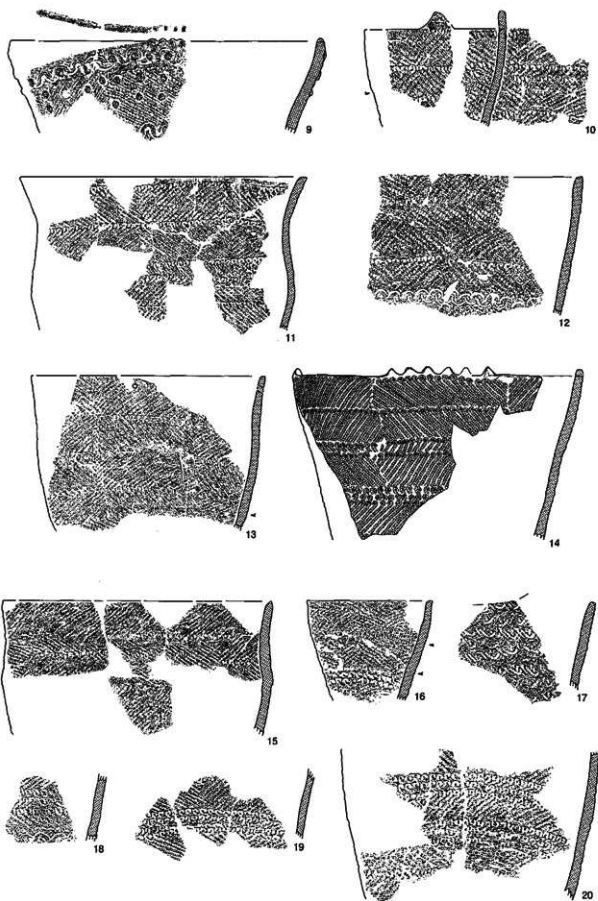
ピットの深さ

P 1 - 12cm	P 8 - 15cm	P 15 - 71cm
P 2 - 33cm	P 9 - 15cm	P 16 - 27cm
P 3 - 53cm	P 10 - 63cm	P 17 - 39cm
P 4 - 54cm	P 11 - 53cm	P 18 - 13cm
P 5 - 45cm	P 12 - 75cm	P 19 - 14cm
P 6 - 10cm	P 13 - 22cm	P 20 - 22cm
P 7 - 45cm	P 14 - 31cm	

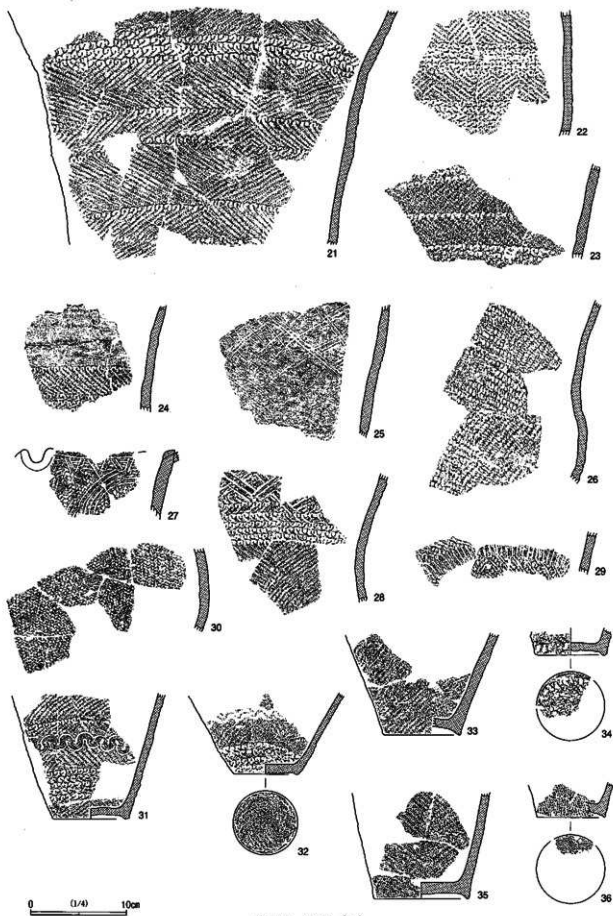


第61圖 SI019 (1)





第62圖 SI019 (2)



第63图 SI19 (3)

#### SI020 (第57・64図、図版5・22・38)

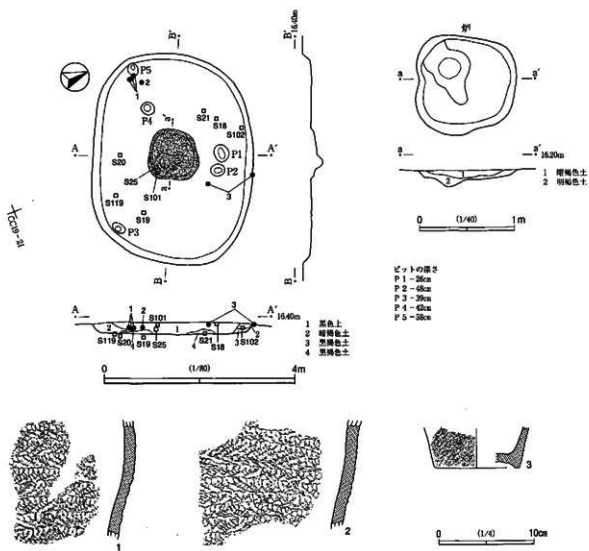
CC19-11区付近に位置する。4.64×3.84mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは0.16mと浅い。柱穴と思われるピットは5本あり、床面からの深さは0.26~0.58mの範囲に収束する。柱穴の配置は不規則で、上層構造に関する情報に乏しい。床面のほぼ中央に竪穴規模にしては大きいと思われる規模1.12×1.08m、深さ0.16mの炉が設けられる。上面での焼土散布はほぼ全面に亘るが、底面はほとんど被熱痕跡が認められないことから、比較的短期間の使用に留まったと思われる。

遺物は約150点出土しているが、土器については細片がほとんどであるため、3点を図示するに留まった。1・2は口縁部文様帯の構図は不明だが、胴部にはLR・RLを用いた末端環付を交互に施すことで広義の羽状構成と見なすこともでき、幅狭等間隔横帯区画になると思われる。いずれも器厚1cmを超えるので、大型な土器になると思われる。3は上げ底になる底部で器表下端までLRが施される。以上は区画法の特徴等から第2群2類のニツ木式に比定できると思われ、遺構の時期を決定するにはやや零細な内容ながら該期の可能性が高いとしておきたい。他に石鏃5点(第121図18~21・25)、石鏃未製品(第122図101・102)、石匙?(第123図119)を図示した。

#### SI021 (第57・65図、図版5・22・38)

CC18-91区付近に位置する。4.23×3.44mの略隅丸方形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。柱穴は検出されなかったが、中央やや南東寄りに規模0.8×0.48m、深さ0.16mの炉が設けられているので住居跡であると判断した。炉上面での焼土散布は疎らかつ底面の被熱痕跡も視認しにくかったので、短期間の使用に留まったと思われる。床面は地形に沿って北→南に緩やかに傾斜している。

遺物は覆土中層を中心に約250点出土しており、このうち土器9点を図示し得た。1は4単位の波状縁になると思われる。底部は欠損するが、現高で34.2cmを測る口径に比して器高が長大になる稀有な器形となろう。口縁部文様帯の主幹文様は、1本引き沈線による梯子状沈線でレンズ状・菱形状の図形が複合した構図を描出し、梯子状沈線の接点には点状文様として瘤状貼付文が配されている。底部下半にも梯子状沈線で上下を区画し、主幹文様を1本引き沈線で鋸歯状の構図を描き、接点に点状文様として瘤状貼付文配置する文様帯が形成されている。縄文帯は上段が0段多条LR・RLを用いた脚短な末端環付を交互に施し、下段はLR・RLを用いたと思われる環付部のみを交互に施して、いずれも幅狭等間隔横帯区画としている。炉覆土中と住居覆土下~中層の破片が接合しており、推定口径は平坦部で35.0cmを測る。類例として埼玉県さいたま市貝塚B23号住居跡16の土器が挙げられる。2は幅狭な口縁部端部の上下端を、半截竹管使用の平行沈線による梯子状沈線で区画する。下端の梯子状沈線に瘤状貼付文の剥落痕が認められる。胴部中に横ナデによる無文帯が作出しされているが、上半はやや幅広、不規則な単位でRL・LRとも0段多条となる脚長の末端環付で羽状縄文を構成し、下半は幅狭等間隔にRL・LRとも0段多条となる脚短の末端環付で羽状縄文を構成する。推定口径30.9cmを測る。3も胴部中に横ナデによる無文帯が作出し、その箇所以外はやや幅広な単位で0段多条RL・LR用いた羽状縄文が構成される。推定口径25.0cmを測る。4~7は各種縄文が施される破片で、4は口縁部からLRが、5~7は胴部にRL・LRを用いた羽状縄文が構成される。8・9は上げ底となる底部である。8は被熱による剥落が著しいが、器表下端の原体は0段多条のRLで、外底面にも原体不明の縄文が施されている。9は器表下端まで0段多条LR・RLを用いた脚短な末端環付で幅狭等間隔横帯区画による縄文帯を形成し、外底面にも0段多条LRを用いた

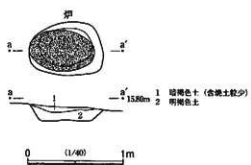
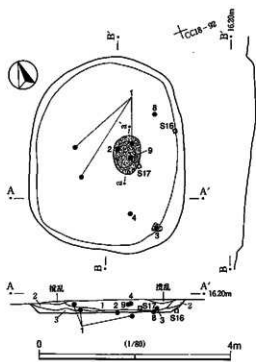


第64図 SI020

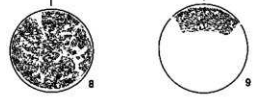
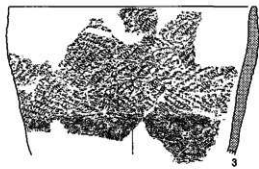
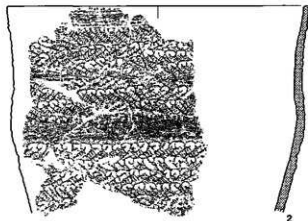
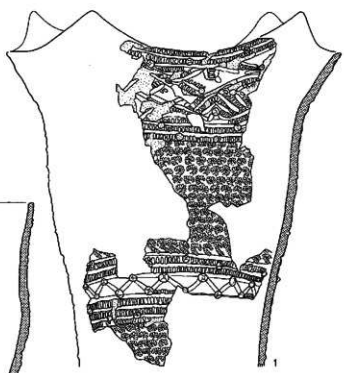
脚短な末端環付が施される。以上は概ね第2群2類の二ツ木式に比定でき、遺構の所属時期を示すものである。他に石炭2点(第121図16・17)を図示した。

SI022 (第58・66図、図版5・22・23・39)

DD19-93区付近に位置するが、ここは南側に緩やかに傾斜している。5.12×4.56mのやや不整な楕円形を呈し、確認面からの深さは0.4mを測る。柱穴と思われる比較的小形のピットは7本あり、炉周辺の東西を中心に検出されている。床面からの深さはP3が0.24mの他、0.56~1.04mの範囲にあり極めて深い。中央南東寄りに規模0.92×0.8m、深さ0.16mの炉が設けられている。上面・覆土中の焼土散布はほぼ全面に亘り、底面も被熱痕跡が顕著であることから一定期間の居住が想定される。床面は中央付近が若干低く周辺から緩やかに傾斜する。遺物は約150点出土しているが、土器については細片がほとんどであるため、9点を図示するに留まった。1は双頭状の波状縁で、口縁部文様帯に半截竹管による梯子状沈線と平行沈線で主幹文様を描出するが、変形のレンズ状+波頂下連結・上・下区画線連結の構図となろう。円形竹管刺



- 1 褐色土 (含ロ-A較少)
- 2 暗褐色土 (含ロ-A較多)
- 3 暗褐色土 (含ロ-A較多)



第65回 SI021

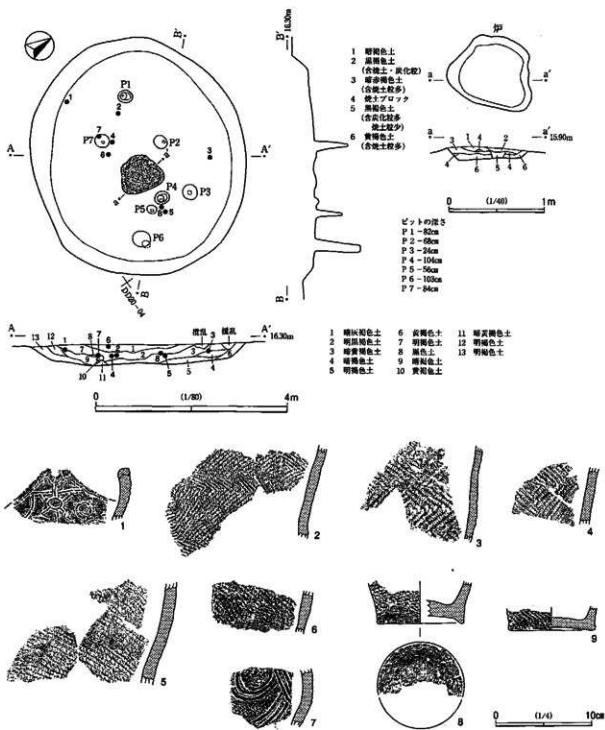
0 (1/4) 10m

突文を擬似した平行沈線による点状文様が描出される。2～6は各種縄文の施される破片である。2は0段多条LR・RLを用いてやや幅広い羽状縄文を構成する。3は0段多条のLRとRLを結束した羽状縄文を何段か施すと思われる。4は0段多条LR・RLを用いて羽状縄文、菱形文を構成しよう。5はRLを、6は0段多条RLを施す。以上は3類の関山式のうちI式に比定され、1は古段階の可能性はある。7は器表が磨滅しているため地文縄文は不明で、半截竹管内側による半隆起線的な平行沈線で蕨手状などの意匠文が描出されるII式。8・9はいずれも上げ底で外底面にも施文のある底部。8には組違いで生じた原体、9にはRLが施文される。以上の内容から細別は判断できないので、帰属時期は関山式としておく。

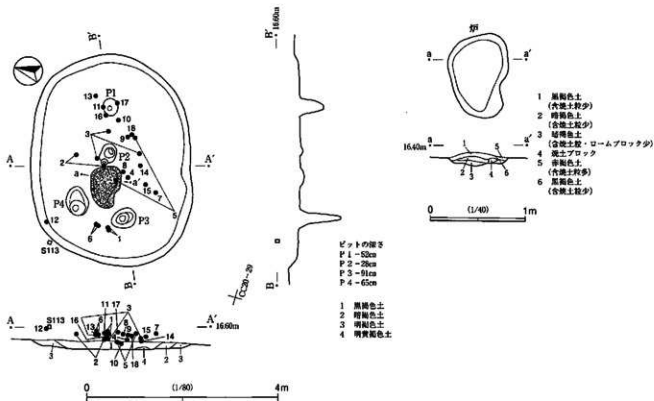
#### SI023 (第60・67・68図、図版5・23・39)

CC20-19区付近に位置する。4.56×3.52mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。柱穴と思われるピットは4本検出された。床面からの深さはP2の0.28mを除き、他は0.52～0.91mの前後と相対的に深く主柱穴と考えられる。炉はこの3本の主柱穴の内側となる、床面中央より西側かなり西側に寄った位置に設けられている。規模0.88×0.64m、深さ0.16mを測る。上面・覆土中の焼土散布は密でほぼ全面に亘り、底面も被熱痕跡が顕著であることから一定期間の居住が想定される。

遺物は遺構プラン確定以前から多く出土しており、250点以上になる。確認面付近かそれ以上から出土しているものが多く、住居の立ち上がりが現存高よりかなり深いことを示唆している。これらのうち18点の土器を図示し得た。1～5は口縁部文様帯の主幹文様と点状文様が明確なものである。主幹文様は全て1本引き沈線による梯子状沈線で描出される。1の主幹文様の基本構図はレンズ状・蕨手状に上下区画線連結等が加えられるもの。点状文様は円形竹管刺突文と、全て剥落しているが瘤状貼付文となろう。胴部の器表摩耗が顕著だが、幅狭等間隔で0段多条R2本、L2本を各々繰り結び、この部分を閉じた末端とした「結節回転B」が交互・多段に施されると思われる。残存部右下端に、構図は不明ながら口縁部同様に梯子状沈線が施されている。推定口径21.6cmを測る。2の場合梯子状沈線は部分的で、多くは平行沈線風に引いている沈線で主幹文様が描出される。基本構図は菱形で、点状文様は瘤状貼付文とへら状工具先端を用いた刺突文である。胴部以下にはLR・RLを用いた羽状縄文が構成されるが、ともに閉じた端を少し曲げて回転させた線状の痕跡を表出させている。補修孔が認められ、推定口径30.7cmを測る。3は軸線が右傾する大形の波状縁で、主幹文様の基本構図は蕨手状、一部レンズ状となり、複数の波頂下連結が加えられる。点状文様は梯子部分と同様の刺突文で空白部を埋めるように施す。胴部には0段多条LRを用いた末端環付が幅狭等間隔帯区画を形成する。2か所に追加成形の痕跡である下部文様への粘土被りが認められる。推定口径44.1cmを測る。4の主幹文様は蕨手状と菱形(レンズ)状が複合する構図と思われる。点状文様は瘤状貼付文と円形竹管刺突文と、刺突位置に瘤を貼付した両者が認められる。胴部には0段多条LR・RLを用いた脚短な末端環付を幅狭等間隔・山形に施し、横帯区画とならない。5は口縁端部に刻み目を施す波状縁で、主幹文様は鋸歯状・菱形状・蕨手状が複合する基本構図で、波頂下連結も加えられよう。点状文様は円形竹管刺突文と、刺突文風に施したへら状工具先端を用いた刺突文である。胴部には幅狭等間隔でR・Lを合わせて繰り結び、この結節部を横位回転した「結節回転A」が施される。現存最大径25.0cmを測る。7は器表の剥落が著しいため観察面が少なく、1本引き沈線か半截竹管による平行沈線か決定しがたいが、主幹文様を鋸歯状の基本構図で描出しよう。胴部には0段多条LR・RLを用いた脚短な末端環付で幅狭等間隔帯区画を形成すると思われる。

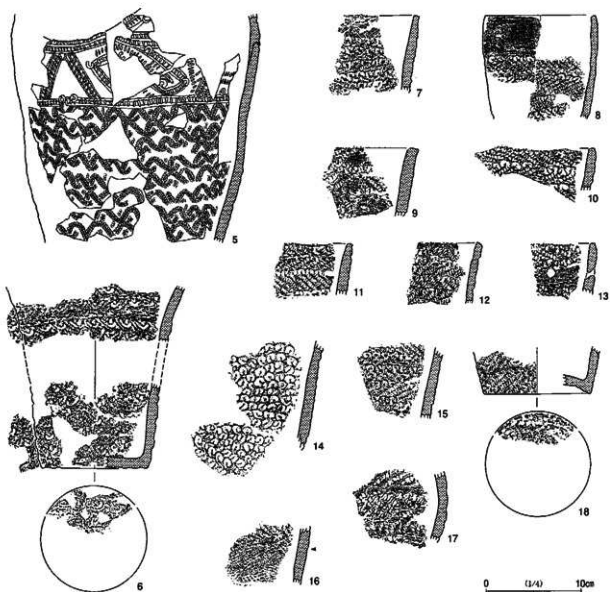


第66図 S1022



第67図 SI023 (1)





第68図 SI023 (2)

6・8～18は各種縄文を施すものである。6は器表下端まで、0段多条R 2本、L 2本を各々緩く結び、この部分を閉じた末端とした「結節回転B」が交互・多段に幅狭等間隔で施されると思われる。残存最大径18.7cmを測る。8～13は口縁部破片である。8は口縁部にやや幅広な無文帯を作出し、以下にLR・RLを用いた末端環付で羽状構成となる横帯区画を形成すると思われる。推定口径11.5cmを測る。9はかなり太目のLR・RLを用いて羽状縄文を構成しよう。10は口縁部では原体末端が施文されていないが、0段多条LR・RLを用いた脚短な末端環付で幅狭等間隔横帯区画を形成すると思われる。11・12は0段多条LR・RLを用いた脚短な末端環付で、端部直下から幅狭等間隔横帯区画を形成すると思われる。13も口縁部では原体末端が施文されていないが、RLを用いた末端環付が無文部を挟み施されている。補修孔が認められる。14～17は胴部破片。14には隙間無く末端環付RL・LRが施されるが、施文方向は横位・斜位が混じり合う。15は0段多条RL・LRを用いた末端環付で羽状構成となる横帯区画を形成する。16は上半にRLが施され、追加成形の痕跡である粘土被り下には貝殻背圧痕文が認められる。17はLRを施すが、閉

端を少し曲げて回転させたため生じた痕跡が横位に連なる。18は器表下端まで0段多条RL・LRを用いた羽状縄文が構成されるが、外底面にも縄文が施される。以上はいずれも第2群2類二ツ木式の範疇に含まれる要素を持つものなので、本住居の帰属時期も該期とする。他に住居プランに接した位置からの出土であるが、本遺構分として石錐1点を図示した(第123図113)。

#### SI024 (第60・69図、図版5・6・24・39)

SI023の北西約1m、CC20-08区付近に位置する。4.08×3.6mの弧の片側がやや膨らむ楕円形を呈し、確認面からの深さは0.16mを測る。ピットは4本検出された。床面からの深さはP2が0.18mと浅いが他は0.6m前後と深く安定している。P4は炉の端を切って2本が重複しており、柱穴と考えた場合は付け替えを想定。土圧で潰れていたが、西寄りの落ち込み上層に1の土器が埋設されていた。炉に付随、あるいは炉廃絶後に設けられた埋壺の可能性も否定できない。掘り方の最深部は床面から0.36mを測る。炉は床面中央やや北寄りに設けられ、現存部で規模1.0×0.56m、深さ0.08mを測る。上面の焼土散布はやや疎らだがほぼ全面に亘るが、底面の被熱痕跡はそれほど顕著でない。遺物は約80点と少なく土器細片が多いため、埋壺と土器片1点を図示するに留まった。1は波状縁で、口径に比して器高が高く胴下半がやや膨らむ器形となろう。被熱による器面の剥落が著しく使用状況を示唆するものと言える。口縁端部から0段多条RとL(異方向の原体)を緩く結び、この結節部を閉じた端とした「結節回転B」が幅狭等間隔で施文される。開いた端には他の細い糸を以て縛り留めた末端縁を視認。残存最大径23.4cmを測る。2は太目となる0段多条RL・LRが施され羽状縄文を構成しようか。土器からでは二ツ木式と関山I式を分別する決定要素がないが、住居跡の内容から帰属時期を二ツ木式の可能性が高いとおきたい。

#### SI025 (第60・70図、図版6・39)

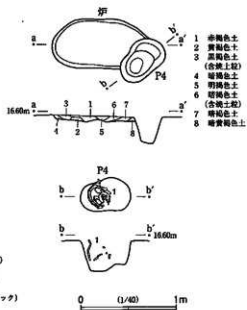
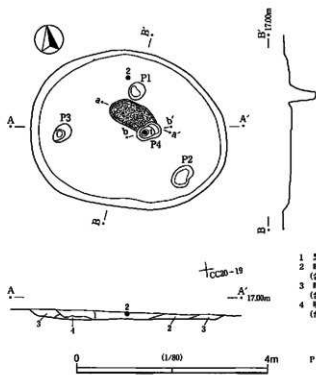
SI024の南約4.5m、CC20-39区付近に位置する。南東方向に新しい時代の溝が走り本遺構を切っている他、本遺構よりいずれも新しいと考えられるSK054-056とも重複関係にある。おそらく4.08×3.68mの楕円形を呈し、確認面からの深さ0.1mを測る。柱穴と思われるピットは壁際に4本検出されているが、床面からの深さはP2が0.59mを測る他は0.1m未満で、溝に切られたP3は不明。炉はSK054が重なるか所に本来は設けられたと思われるが不明である。

遺物は10数点の土器細片が出土しているのみで、土器1点の図示に留まった。1はLR・RLで羽状縄文が構成される。第2群3類関山式と思われるが、決定要素に乏しいため住居の帰属時期は該期の可能性があるということに留めておく。

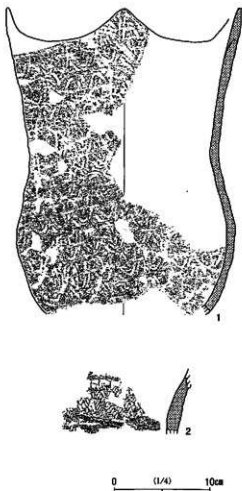
#### SI026 (第58・71図、図版6・39)

DD18-93区付近に位置する。5.36×3.84mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。中央やや南寄りに掘り込みのない径0.48mの焼け面が認められる。焼土の散布は疎らながら全面に認められるものの炉の機能を有したか不明である。柱穴と思われるピットは炉の北側に1本検出されたが、床面からの深さは0.13mと浅い。短期間の居住施設の可能性がある。

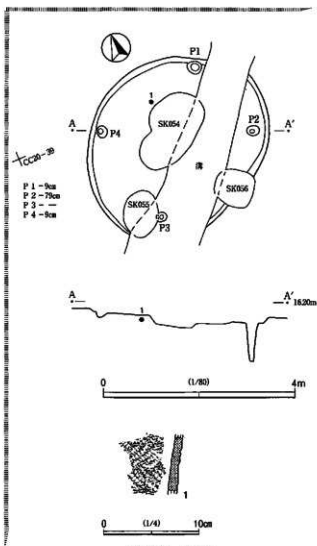
出土遺物は約150点を数えるが土器細片が多く、このうち5点の図示に留まった。1は上端に横位に連続する短沈線が認められる。1・2・4の胴部には0段多条LR・RLを用いた脚短な末端環付で、幅狭等



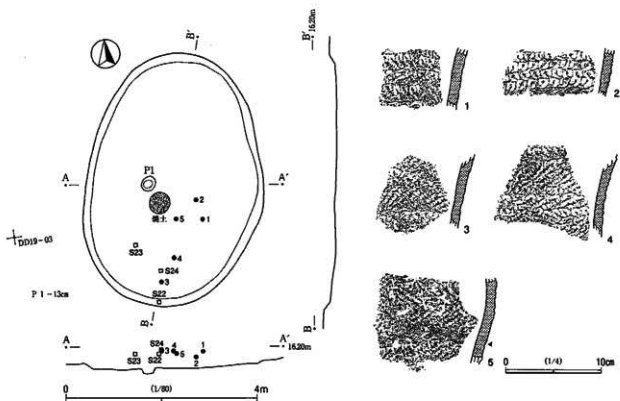
P 1 - 50cm P 2 - 15cm P 3 - 61cm P 4 - 36cm



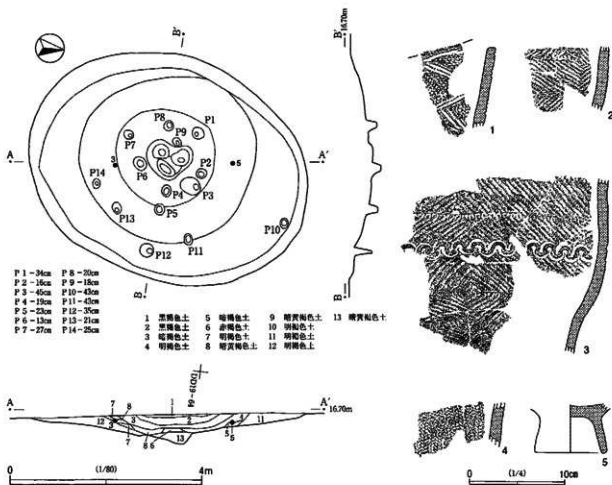
第69図 SI024



第70図 SI025



第71图 SI026



第72图 SI027

間隔横帯区画を形成しよう。3はLR・RLが施されるが、LRは開いた端に他の細い条を以て縛り留めた末端線が、RLには閉端を少し曲げて回転させたため生じた痕跡が横位に連なる。5は器表の磨滅が著しいが、RL・LRを用いた羽状縄文が構成されよう。胴下半に追加成形の痕跡である下部文様への粘土被りが認められる。以上の内容では二ツ木式と関山I式を分別する決定要素がないので、帰属時期は二ツ木～関山I式としておきたい。他に石鏃3点を図示した(第121図22～24)。

#### SI027 (第58・72図、図版6・24・39)

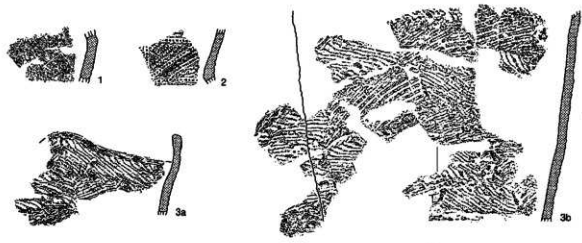
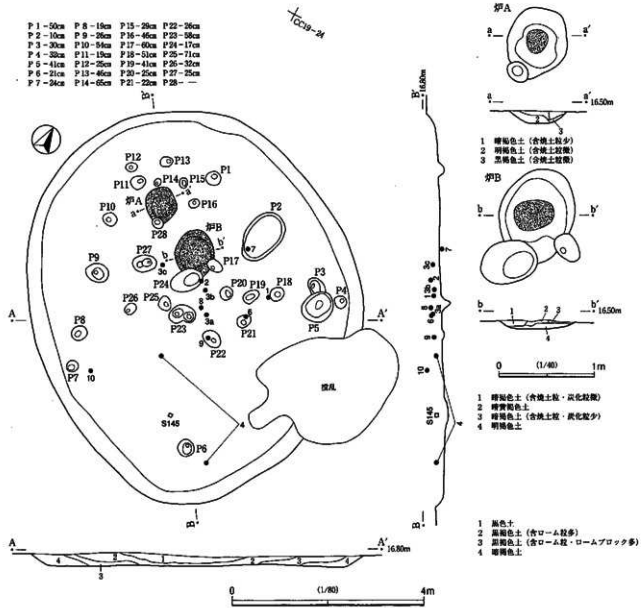
DD19-62区付近に位置する。5.92×4.96mの楕円形を呈し、確認面からの深さは中央付近の最深部で0.64mを測る。平面図及び遺構断面図によると、周縁の壁際から中央部に向かって緩やかに傾斜するので、床面は平坦になっていない。また、中央部にも攪乱状の不整形な落ち込みがあるため、炉の有無も明確でない。11・12層を除いた範囲は土坑等の別遺構で、本遺構と切合い関係にある可能性も否定できない。ピットは14本検出されているが、これらの床面からの深さは0.13～0.45cmの範囲にある。堅穴住居跡の要件に若干乏しいことを付記しておく。

出土遺物は約10点で、このうち5点を図示し得た。1は波状線で半截竹管による平行沈線を重ねて区画と山形状の意匠文を描出すると思われ、地文は組紐となる。2は0段多条LR・RLを用いて羽状縄文を構成する他、LRを用いた末端環付も施される。3は0段多条LR・RLを用いた末端環付で幅広横帯区画を形成するが、そこには羽状縄文、菱形文が構成される。胴部中位には半截竹管による真正コンパス文が廻らされる。4は組紐が施文される。5は台付土器の脚部である。脚端部から底部内面まで5.2cmを測る。以上は概ね第2群3類関山式でもⅡ式に比定できるものである。遺構の性格等に問題が残るものの、帰属時期は該期としたい。

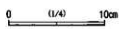
#### SI028 (第57・73・74図、図版6・24・40)

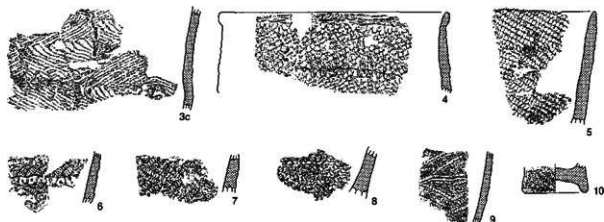
CC19-34・44区付近に位置する。攪乱で一部を欠損するが、弧の片側がやや膨らむ8.06×7.04mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。本遺跡では最大規模の堅穴住居跡となる。炉跡は床面中央より北西寄りの位置に2ヶ所検出された。炉Aは規模0.76×0.64m、深さ0.12mを測る。炉Bは推定規模1.0×0.8m、深さ0.08mを測る。いずれも上面の焼土散布は疎らながらもほぼ全面に亘っており、底面に焼土堆積、被熱範囲が認められる。柱穴と思われるピットは28本検出された。床面からの深さは0.1～0.71mまでばらつきが認められる。炉の周辺に大部分が所在しており炉と重複するものもあることから、柱の付け替えが行われたと考えられる。それぞれの炉に伴う柱穴の分別等はできなかったが、建替え等による一定期間の居住が想定できよう。

遺物は約600点と今回報告する住居跡では最多の出土量である。床面から覆土上層まで万遍なく出土しているが、土器細片が多いため10点の図示に留まった。1・2は基本的に沈線文を施すものである。1は先端の鋭いヘラ状工具による細沈線で格子目文を描出し、以下にRが施される。2は地文LRに半截竹管内側によるC字形の爪形文が米字文の祖形となる棒状文を描出しよう。3a～10は各種縄文が施されるものである。3a～cは同一個体で波状線となる。R・Lを用いて羽状縄文や菱形文を構成するが、器面がかなり軟らかい段階で施文したため、施文単位の切れ目にはみ出した粘土が認められたり、条が湾曲したりしている。部分的にだが、開いた端に他の細い条を以て縛り留めた末端線も痕跡と、閉じた端を少し曲げて



第73図 SI028 (1)





第74図 SI028 (2)

0 (1/4) 10cm

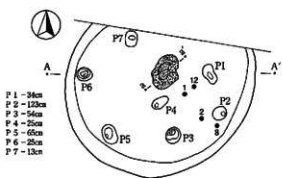
回転したため結節状に条の末端線が連なる痕跡がそれぞれ視認される。現存最大径30.2cmを測る。4は口縁端部を折り返して狭小な無文帯を作出し、以下に0段多条LRを用いた脚長な末端環付が施される。器面がかなり軟らかい段階で施文したため、施文単位の切れ目にはみ出した粘土が認められる。推定口径23.5cmを測る。5は口縁端部からRLが施されるが、破片中央やや上の部分に貝殻背圧痕文が重ねられている。6は0段多条LR・RLを用いた脚短な末端環付で幅狭等間隔横帯区画を形成する。7はRL・LRを用いた羽状縄文が構成される。8はRLが縦位に施される。9は半截竹管内側の内皮痕跡が表出される平行沈線で区画されよう。軸の縄Lに附加条Lを同方向に結げた附加条第1種と、軸の縄不明で附加条Rを結げた附加条縄文で羽状縄文を構成すると思われる。10は台付土器の脚部で、器表下端まで0段多条RLが施される。以上のうち6・10は2類・3類の可能性も否定できないが、他は第2群5類黒浜式に比定できる内容である。遺構の帰属時期は該期としたい。他に凹石1点を図示した(第127図145)。

#### SI029 (第57・75・76図、図版6・24・40)

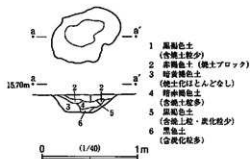
北側に向かって緩やかに傾斜するCC18-84区付近に位置する。北東部は調査対象区域外にあるため完掘されず、4.0×3.04mの範囲の調査である。円形に近い楕円形を呈すと思われる、確認面からの深さは0.24mを測る。柱穴と思われるピットは7本検出されており、床面からの深さは0.25~1.3mとばらつきが大きい。床面ほぼ中央と思われる位置に規模0.76×0.6m、深さ0.2mの炉が設けられる。上面の焼土散布は疎らながらほぼ全面に亘っており、底面の被熱も顕著であるので一定期間の居住が想定される。

出土遺物は約30点と少ないが、このうち16点を図示し得た。1は折り返しになる波状線で、端部には鋸歯状の集合沈線が施される文様帯、以下には異方向となるRとLを組にした燃糸側面圧痕文、斜沈線、刺切文が施される文様帯が形成される。2・3は0段多条LR・RLを用いた羽状縄文が施される。以上は第2群1類の花積下層式である。4はR、Lともを用いた燃糸側面圧痕文で口縁部を区画し、燃糸側面圧痕文と円形竹管刺突文で文様帯を形成する。胴部以下には0段多条LR・RLを用いた脚短な末端環付で、幅狭等間隔横帯区画を形成しよう。6は波状線で主1本引き沈線による梯子状沈線でレンズ状・山形附加?の主幹文様が描出されよう。点状文様として瘤状貼付文と棒状工具による刺突文が配される。第2群2類の二ツ木式で、4は最も古い新田野段階に比定されよう。

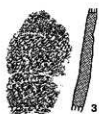
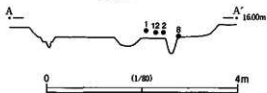
TC18-M



- P1 - 24cm
- P2 - 125cm
- P3 - 54cm
- P4 - 25cm
- P5 - 65cm
- P6 - 26cm
- P7 - 13cm

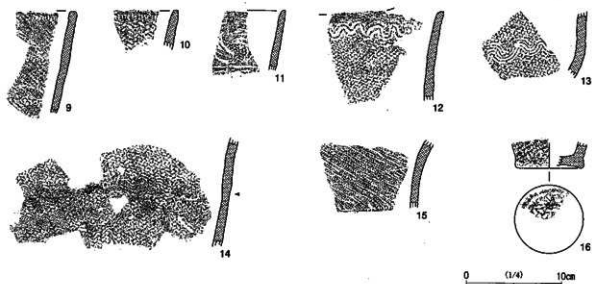


- 1 黒褐色土 (含焼土粒少)
- 2 赤褐色土 (焼土ブロック)
- 3 暗赤褐色土 (焼土ほとんどなし)
- 4 暗赤褐色土 (含焼土粒多)
- 5 黒褐色土 (含焼土粒・炭化粒少)
- 6 黒色土 (含炭化粒多)



第75図 SI029 (1)





第76図 SI029 (2)

5は波状線で、半載竹管使用の平行沈線による梯子状沈線でレンズ状の主幹文様を描出しよう。点状文様として円形竹管刺突文と瘤状貼付文が配される。7は半載竹管を用いた平行沈線で口縁部下端を区画し、区内も平行沈線で鋸歯状の構図を描出すると思われる。点状文様は配されず、地文は疎らにRを施文。8はいわゆる台付土器で、身の部分は注口の付かない鉢である。口径22.3cm、最大径24.9cm、器高18.0cmを測る。口縁部には半載竹管内側による平行沈線を2本並行させて、鋸歯状・蕨手状複合+弧状附加の主幹文様を描出する。脚部には平行沈線で上下分割した横帯の中をそれぞれ弧状、鋸歯状の意匠文が巡らされよう。地文は条が右傾・左傾する2種の直前段合燃（異条縄文）である。P2付近の床面から出土した。9の口縁端部はナデ消されているが、0段多条RLを用いた脚長な末端環付を多段に施すと思われる。10～14は組紐が施されるものである。10は口縁端部に縦位の短沈線が巡らされると思われる。11は半載竹管内側による平行沈線で口縁部文様帯を作成する。地文の組紐は半載竹管内側による平行沈線やナデで消され、組紐の残った部分は意匠文の効果を持つ。12は波状線で、端部の狭小な無文帯直下に半載竹管による半波状化したコンパス文が巡らされる。13は胴部中位～下半に半載竹管による真正コンパス文が巡らされる。14は追加成形の痕跡である下部文様への粘土披りが認められる。15は軸の縄RLに附加条Lを絡げた附加条縄文が施される。下端に横位沈線と円形刺突列が認められる。16は上げ底となる底部で、器表下端まで0段多条LRが施されるが、一部にRが重なる。外底面にも縄文が施される。以上は第2群3類関山式で、8～14はⅡ式に比定される。以上のように本遺構からは1類～3類が出土しているものの、8の出土状況等から判断すれば、帰属時期は関山Ⅱ式として支障ないとする。

## 2 土坑

SK050 (第59・77・79図、図版11・40)

EE18-91区付近に位置する。1.62×1.56mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.48mを測る。土坑中央部付近、遺構廃絶後の堆積土中の窪みに貝層が形成されていた。上面は部分的に削平されているが、土坑の下層から上層にかけて平面形は不整形ながら規模0.9×0.8m、厚さは最厚部で0.35mを測る遺構内貝

層である。貝サンプルは一括で全量が採取されており、別項にて分析結果を報告した。底面は若干凹凸が認められるがほぼ平坦なつくりで、壁の立ち上がりは垂直に近い。

遺物は土器細片を主として約150点出土しているが、貝層に伴うものや周辺から出土したものが多し。このうち9点を図示し得た。1は地文として疎らな縞糸文Rが施される。2は口縁端部下に横位の変形爪形文、刺突文、放射筋を有す波状貝殻文が施される。3は意匠不明だが半截竹管による平行沈線が横位、格子目状に引かれる。4は基本的には振り幅の小さい放射筋のある波状貝殻文が施されるが、一部は押し文となっている。以上は概ね第2群7類前期後葉浮島式でI～II式の範疇にある。5はC字形爪形文で弧線文を組み合わせた意匠を描出しよう。6は口頸部と胴部の境界を、斜位刻み目付きの隆起線と2条のC字形爪形文で区画する。区画内は斜位刻み目付きの隆起線にC字形爪形文が付随して弧線文や木葉状入組文が描出されよう。現存最大径13.2cmを測る小形土器である。以上は概ね第2群6類前期後葉諸磯式でb式の範疇にある。7～9も諸磯式で細別は不明。7は幅狭な単位でLRが施され、結節回転が重ねて施文されている。8はLR・RLが施されるが羽状縄文の意識は希薄と思われる。9は上端に斜位沈線が連続すると思われ、以下には疎らなRLが施される。胎土中に砂礫を含む。以上の内容から判断すると、本遺構の帰属時期は出土土器の主体となる第2群6・7類の諸磯b・浮島式II式としたい。

#### SK051 (第60・77・79図、図版11・40)

CC19-87区付近に位置する。21×138mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。底面の北西側に径約0.3mの小ピットが検出された。出土遺物は数点で土器細片1点を図示した。10は器表が磨滅しているため不鮮明であるが、軸の縄Rに附加条Rを絡げた附加条縄文の可能性のある第2群5類黒浜式である。遺物の内容が零細なため遺構の時期は決定できない。

#### SK052 (第60・77・79図、図版11・40)

DD19-90区付近、SI024の東約2.5mに位置する。1.68×1.08mの楕円形を呈すると思われ、確認面からの深さは0.18mを測る。遺物は数点出土しているが、いずれも覆土一括取り上げでうち2点を図示した。11は縞糸文Lがやや疎らに施される第1群1類縞糸文系土器で稻荷台式。12はLRが施される。細片だが第2群6類前期後半諸磯式の範疇になろうか。遺物の内容が零細なため遺構の時期は決定できない。

#### SK053 (第60・77・79図、図版41)

DD20-00区付近、SI023の東約0.5m、西から東に下がる緩斜面に位置する。上面は1.14×1.14mの不整円形を呈すが、実際は2基が切り合っているようで南東側の掘り込みが新しい。確認面からの深さは最深部で0.48mを測る。遺物は数点出土しているが、いずれも覆土一括取り上げでうち3点を図示した。13・14は縞糸文Lがやや疎らに施される第1群1類縞糸文系土器で稻荷台式。15は無文だが第2群5類黒浜式あたりに比定できようか。遺物の内容が零細なため遺構の時期は決定できない。

#### SK054 (第60・77・79図、図版41)

CC20-39区付近、SI025の炉が設けられたと思われる場所に重複するが、本土坑が新しい。1.8×1.14mの不整楕円形を呈し、底面に3か所の窪みを認める。新しい時代の溝により本遺構の南東側上面が削平さ

れているが、確認面からの深さは現存部の最深部で0.3mを測る。遺物は数点出土しているが、このうち出土位置の記録がある1点を図示した。16は放射肋を有す貝殻腹線による刺突文が認められる第2群7類浮島式の可能性がある。遺物の内容は零細だが、関山期に帰属するSI025より新しい時期ということは言えよう。

#### SK055 (第60・77図)

CC20-39区付近、SI025の南西壁際の一部と重複するが、本土坑が新しい。1.02×0.72mの略楕円形を呈し、底面に1か所の小ピットが検出された。新しい時代の溝により本遺構の南東側上面が削平されているが、確認面からの深さは現存部の最深部で0.24mを測る。遺物が出土していないためこの点から遺構帰属時期は言及し得ないが、関山期に帰属するSI025より新しい時期ということはいえよう。

#### SK056 (第60・77・79図、図版41)

DD20-30区付近、SI025の南東壁際の一部と重複するが、本土坑が新しい。0.9×0.9mの不整円形を呈す。確認面からの深さは0.44mを測る。SI008と重複関係にあるが本土坑の方が新しい。新しい時代の溝により本遺構の北西側上面が削平されているが、確認面からの深さは現存部の最深部で0.36mを測る。遺物は約10点出土しているが、このうち覆土上層ではあるが出土位置の記録があった2点を図示した。17は無文だが細かな砂粒含む特徴から第1群1類捻糸文系土器の可能性がある。18も無文だが第2群5類黒浜式あたりに比定できようか。内容が零細で遺物から遺構帰属時期を決定できないが、関山期に帰属するSI025より新しい時期ということはいえよう。

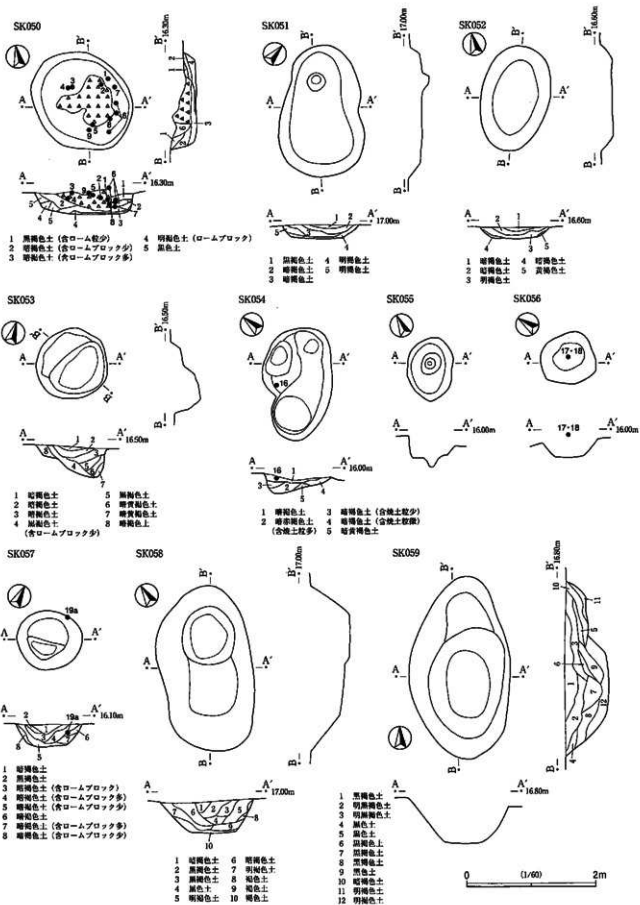
#### SK057 (第58・77・79図、図版11・41)

DD20-02区付近、SI022の南西約3.5m、西から東に下がる緩斜面に位置する。1.07×0.96mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.36mを測る。遺物は数点出土しているが、このうち出土位置の記録がある1点を含め3点を図示し得た。19a・bはヘラ状工具による格子目文を施す同一個体で、aは覆土中層の出土。20はRL・LRを用いた羽状縄文が施される。以上は第2群5類黒浜式で、やや零細な内容ながら帰属時期は該期の可能性がある。

#### SK058 (第57・77・79図、図版41)

CC19-54区付近、SI028の南南東約3.5m、南から北に下がる緩斜面に位置する。2.64×1.56mの不整楕円形をするが、北西側に0.96×0.9の略円形のピットが穿たれ段を有す。確認面からの深さは最深部で0.6mを測る。

遺物は覆土一括では10数点の土器が出土しており、このうち7点を図示し得た。21は0段多条LR・RLを用いた脚短な未端環付で、幅狭等間隔横帯区画を形成しよう。第2群2類・3類の二ツ木式~関山I式古段階に比定できよう。22は口縁端部に角棒状工具により刺突文を巡らすと思われ、端部からも同一工具による三列の刺突文が垂下する。23は縦位にヘラ状工具による縦位沈線が施される。24は口縁端部に棒状工具による凹文を付し、端部直下からLLを施す。25はRを施す。26は波状縁で、波頂部の垂線を軸に2種の附加条縄文を羽状構成する。軸の縄を磨り消している部分が多いため、附加条のみ記しておく



第77図 D地区土坑

LとRを用いている。27も附加条が不明だが、軸の繩にL2本を絡げた附加条繩文が施される。以上は第2群5類黒浜式に比定されよう。出土位置の記録がないため遺構の帰属時期は明言できないが、第2群5類黒浜式の可能性がある。他に遺構一括の石鏃1点を図示した(第122図95)。

#### SK059 (第57・77・79図、図版41)

CC19-38区付近に位置する。上面は2.94×1.62mの不整楕円形を呈す底面南側に1.8×1.2mの楕円形の段を有し、確認面からの深さは最深部で0.66mを測る。遺物は約10点出土しているが、いずれも覆土一括取り上げでうち4点を図示した。28の構図は不明だが、1本引き沈線を平行沈線状に引き内部に刺突文を充填した描線が主幹文様を構成しよう。点状文様は円形竹管刺突文だが、一部主幹文様の描線と重なる。第2群2類二ツ木式に比定されよう。29は口縁部に半截竹管による平行沈線で弧線文が描出され、以下に0段多条RL・LRを用いた羽状縄文が構成されようが、整然としていない。30も同様な羽状縄文が施されている。31は等間隔に0段多条RL・LRを用いた羽状縄文が構成されよう。追加成形の痕跡である下部文様への粘土披りが認められる。以上は第2群3類関山式に比定されよう。出土位置の記録がないため遺構の帰属時期は明言できないが、第2群3類関山式の可能性がある。

### 3 炉穴

#### SK060 (第59・78図、図版11)

EE19-84区付近に位置する。1.0×0.96mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.28mを測る。覆土最下層に焼土が0.1m以上堆積し、底面にも被熱痕跡が認められる。遺構の状況から第1群2類早期後半条痕文期の可能性を持つものの、遺物が出土していないため決定し得ないが、周辺グリッドから該期土器が出土していることを付記しておく。

#### SK061 (第56・78・79図、図版11・41)

EE18-56区付近に位置する。1.48×1.4mの不整円形を呈し、確認面からの深さは0.2mを測る。覆土全般に亘って焼土粒・ブロックを多く含む。遺物は遺構一括で2点出土しており、これらを図示した。32は表面に横位の条痕文、裏面に横位の擦痕が認められる。33は表裏に放射肋のある貝殻条痕文が施される。以上は遺構一括ではあるが、いずれも早期後半条痕文系土器である。遺構の状況からも帰属時期を該期として支障ないと思われる。

#### SK062 (第59・78・79図、図版11・41)

EE19-63区付近、SK060の南東約6mに位置する。1.76×1.04mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは0.3mを測る。覆土は暗褐色の単一層で焼土粒を少量含む。南側の落ち込み範囲が若干、被熱が及んでいるかどうかという程度である。遺物は遺構一括で1点出土しており、これを図示した。34は表面に放射肋のある貝殻条痕文が施される、早期後半条痕文系土器である。遺構の状況からは決定要素に欠けるが、遺構の帰属時期は該期の可能性があるとしたい。

#### SK063 (第56・78図)

FF18-42区付近に位置する。概ね0.6×0.56mの範囲を調査したが、完掘はし得なかった。本来は楕円形を呈すと思われ、確認面からの深さは0.08mを測る。覆土中には焼土粒が含まれるので炉穴の範疇で捉えたが、遺物が出土していないため遺構の帰属時期は決定し得ない。

#### SK064 (第56・78図、図版11)

EE18-56区付近、SK061の北西約1mに位置する。0.8×0.56mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは0.1mを測る。遺構の状況から早期後半条痕文期の可能性を持つものの、遺物が出土していないため遺構の帰属時期は決定し得ない。

#### SK065 (第56・78図)

EE18-46区付近、SK064の北東約1.2mに位置する。1.36×0.8mの楕円形を呈す。一見すると炉部と足場部に分れるような段差があり、炉部側には焼土の堆積が顕著である。確認面からの深さはそれぞれ0.08、0.16mを測る。遺構の状況から早期後半条痕文期の可能性を持つものの、遺物が出土していないため決定し得ない。

#### SK066 (第58・60・78図)

DD20-01区付近に位置する。1.2×0.8mの楕円形を呈す。一見すると炉部と足場部に分れるような小さな段差があり、北西壁近くに小ピット1本が検出された。確認面からの深さはそれぞれ0.2m、0.28mを測る。焼土は覆土全層に含まれるが、特に中層には焼土ブロックが堆積している。遺構の状況から第1群2類早期後半条痕文期の可能性を持つものの、遺物が出土していないため決定し得ない。

以上、D区の範囲に所在する炉穴7基を説明した。多くが火床範囲の他との分別が不明瞭であり、炉部と足場部が区別される早期後半期の典型例とは異なる。時期を決定しがたいものも含まれるが、7基は舌状台地南北の縁辺部から緩斜面部に立地している。

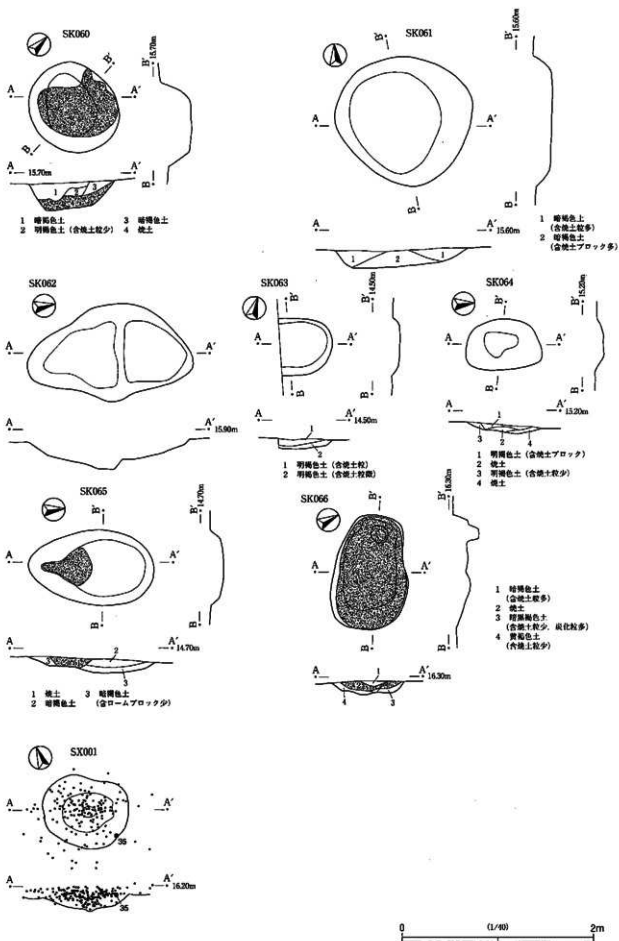
## 4 集石土坑

#### SX001 (第57・78・79図、図版12・41)

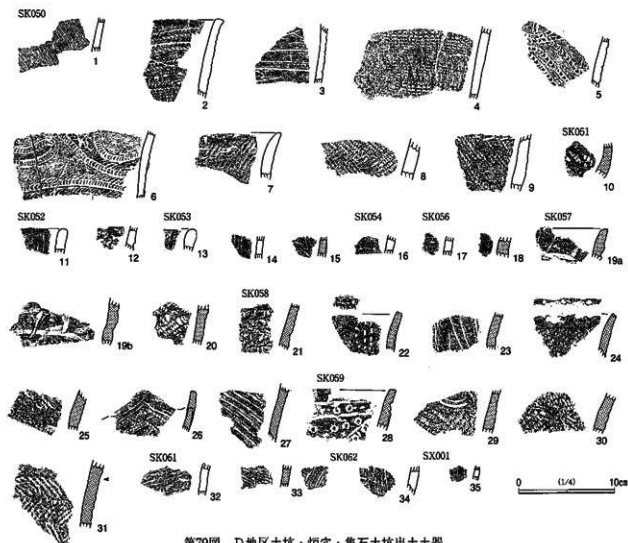
CC19-02区付近に位置する。遺構精査の段階から底面検出まで、約0.3mの幅で礫・剥片・礫石器片等が208点出土した。総重量は約8kgである。土坑は0.92×0.88mの不整円形を呈し、確認面からの深さは最深部で0.16mを測るが、礫はこれより上層から出土したものがあつたので、構築面はさらに上層であつたと思われる。他に土器1点が覆土上層から出土している。35は撚糸文Rが施される第1群1類撚糸文系土器で、稲荷台式に比定される。以上のように遺構の帰属時期を決定する要素にやや欠けるが、該期の可能性があるとしておく。

## 5 遺構外出土土器 (第80～83図、図版25・41～44)

遺構出土土器に加え、遺構に伴わない早期前半撚糸文系土器から後期前半堀之内1式土器までの間の諸型式が出土しているので、順に説明しておく。



第78図 D地区炉穴・集石土坑



第79図 D地区土坑・炉穴・集石土坑出土土器

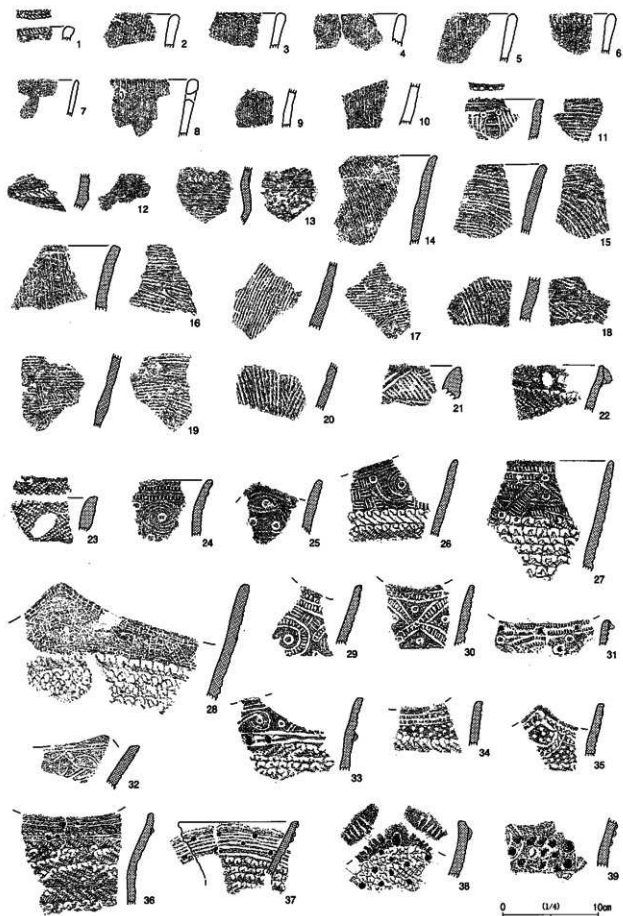
第1群1類 早期前半条糸文系土器 (第80図1~10)

1は肥厚した口縁端部上と口唇部にRLが施され、口唇部下に無文部が作出されるとされる井草式。2・3は条糸文R、4・5・7・8は条糸文L、6は斜位にRLが施される口縁部である。8は回転施文の他に条痕になるか所を認める。9は条糸文L、10は条糸文Rが施される胴部である。以上は条の粗密等によって夏島～稲荷台式にそれぞれ帰属すると思われる。胎土に細かな砂礫が混入するものが多い。8は稲荷台式以降の可能性もある。

第1群2類 早期後半条痕文系土器 (第80図11~20)

11~13は地文に放射肋を有す貝殻条痕文が施される有文のもの。11は口縁端部に凹文が刻み目状に施され、表裏とも貝殻条痕文が施される。口縁部には円形竹管刺突文と沈線によって区画を作出し、集合沈線を充填する文様帯を形成すると思われる。12も表裏とも貝殻条痕文が施される。沈線と円形刺突文による区画を作出し、区画内には短沈線が押し文となって充填される。13は区画内に格子目文と刺突文が施される。12・13は口縁部下端に段を有する。以上は嶋ヶ島台式に比定される。14~20は放射肋を有す貝殻条痕文のみが施されるもので、14・20を除き表裏に施文。14は肋間の単位が狭く凹凸の差も小さいので、サル





第80图 D地区遗物出土土器(1)

ボウを施文具としているか。以上は縄ヶ島台式に比定しうるものを含むが、広義の条痕文系としておく。

#### 第2群1類 前期初頭花積下層式土器 (第80図21・23)

21は折り返し口縁で、端部には鋸歯状の集合沈線が施される文様帯が形成される。23は内割ぎ状の口縁端部にLRが、端部以下にはRL・LRを用いた羽状縄文が構成されよう。

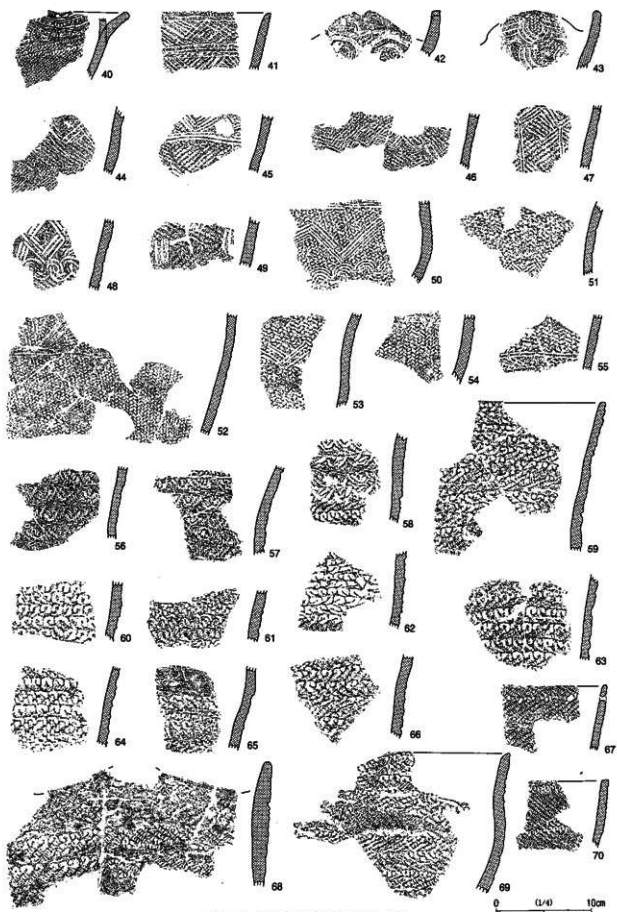
#### 第2群2類 前期前葉二ツ木式土器 (第80図22・24~35)

22は口縁端部に隆起線により狭小な区画帯を作出する。二ツ木式一関山I式に比定されよう。24の口縁部上端には2条の刻み付き細隆起線が付されるが、おそらく口縁部両端を区画すると思われる。細隆起線間、区画内にはRとL、異方向の原体を組み合わせた燃糸側面圧痕文で蕨手状の主幹文様を描き、点状文様として円形竹管刺突文が配される。25は山形状の小突起を有す波状縁で、口縁部区画と蕨手状の主幹文様をRとL、異方向の原体を組み合わせた燃糸側面圧痕文で描出し、点状文様として円形竹管刺突文が配される。26は波状縁に沿う形でRとL、異方向の原体を組み合わせた燃糸側面圧痕文が上端を区画し、区画内にはL・R・Lと3本の原体を組み合わせた燃糸側面圧痕文が蕨手状の主幹文様を描出し、点状文様として円形竹管刺突文、短沈線による充填文が施される。胴部以下には0段多条RLを用いた脚短な末端環付が幅狭等間隔で施されよう。27は口縁端部に2条の横位沈線を引き内部に短沈線を充填させ、刻み目付き細隆起線様に区画する。区画内にはRとL、異方向の原体を組み合わせた燃糸側面圧痕文が刻み目付き細隆起線様の充填沈線文に付随して鋸歯状の主幹文様を描出する。点状文様として円形竹管刺突文が配され、空白部を短沈線、刺切文が充填する。胴部以下にはRL・LRを用いた脚短な末端環付が幅狭等間隔で施される。

28~35は波状縁である。28~30は1本引き沈線による梯子状沈線による主幹文様が描出される。28は大形の波状縁で、区画内には蕨手状、鋸歯状、波頂下連結、弧状附加、上下区画線連結の意匠が単発的に描出されている。点状文様は特になく、短沈線が下端近くに配される程度である。以下には0段多条RL・LRを用いた脚短な末端環付が幅狭等間隔で施される。29の主幹文様は蕨手状の構図になると思われ、点状文様は円形竹管刺突文である。空白部には3本単位で引いた縦横の短沈線が交互に充填される。30の主幹文様は鋸歯状+山形附加になると思われ、点状文様は円形竹管刺突文である。31は2条の刻み目付き細隆起線が口縁端部に沿って区画文となる。区画内の主幹文様も同隆起線で蕨手状の構図を描出しようか。点状文様は円形竹管刺突文と瘤状貼付文が併用される。32は波状縁に沿って1本引き沈線による梯子状沈線が引かれ、内部に意匠不明の1本引き沈線が描かれる。33は1本引き沈線を平行沈線様に重ねて、区画線と蕨手状の主幹文様を描出する。点状文様は円形竹管刺突文と瘤状貼付文が併用される。胴部以下にはLRを用いた脚短な末端環付、環付部のみが施される。34・35は1本引き沈線による梯子状沈線2条で上端区画を行い、区画内に列点状の刺突文を密に施すもの。35は波頂下連結の描線が認められる。以上のうち、24~26は本式でも最も古期の新田野段階に比定しうる。

#### 第2群3類 前期前葉関山式土器 (第80図36~第82図95・第83図115)

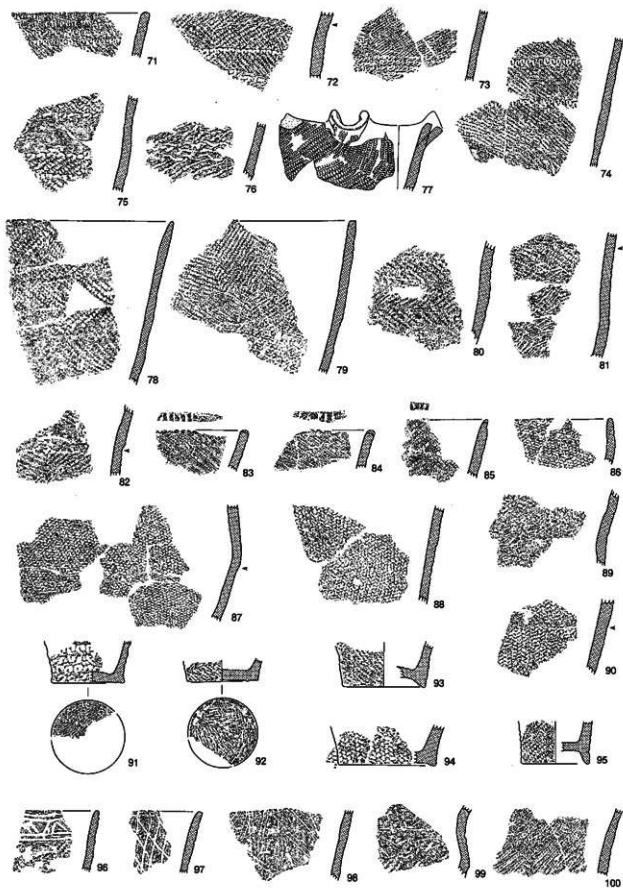
36~39は点状文様である瘤状貼付文の付されるもの。36は半數竹管を用いた平行沈線による梯子状沈線で、幅狭な口縁部区画を形成し、区画線上に瘤状貼付文が付加される。胴部以下にはRL・LRを用いた末



第81图 D地区遗物外出土器(2)

端環付が施されるが、整然とした横帯区画にはならない。37は半載竹管による平行沈線が重畳して横位に引かれる文様帯に瘤状貼付文が配される。胴部以下には0段多条RL・LRを用いた脚短な末端環付が幅狭等間隔で施される。推定口径12.0cmを測る。38は波状線で、波頂部下には長粒の貼付文、端部上両側には臼歯状突起が付される。地文はRLを用いた末端環付が施される。39は1本引き沈線で主幹文様が描かれるが、意匠は不明。40・41は半載竹管による平行沈線が施されるもの。40は片口注口土器の注口部で、口縁端部から続く半載竹管を用いた平行沈線による梯子状沈線が周縁を巡ると思われる。41は地文の末端環付RL・LR上に平行沈線で区画した中を鋸歯状の意匠が2段描出されている。以上は関山Ⅰ式に比定されると思われる。42～47・49～55は半載竹管内側の内皮が表出していたり、半隆起線的に引かれたりした平行沈線を用いたもの。42は鈍角な双頭状の波状線で、地文LRL上に曲線的な意匠が描出されよう。43は緩やかな弧を描くような波状線で、地文の組紐上に半隆起線的な弧状沈線を重畳させて意匠文を描出しよう。44は地文の繊細な0段多条RL・LR上に鋸歯状の意匠文が描出される。45は地文RL・LR上に口縁部区画線と意匠文を半隆起線的な沈線で描出する。46は胴部中位に鋸歯状沈線が巡ると思われる。0段多条RL・LRが施される。47・49は半隆起線の沈線で意匠文が描出されるが、地文は47がRL・LR、49が0段多条RL・LRである。48は半載竹管外面を用い、重ねて引いた3条の沈線で菱形文を描出しよう。以下には半載竹管による上下に大きく振ったコンパス文が巡ると思われ、0段多条RLが地文として施される。50～55は地文に組紐が施されるもの。50・51は半載竹管による平行沈線で鋸歯状の意匠文を描出する。50は平行沈線が重畳し、以下に半載竹管による真正コンパス文が巡らされると思われる。52は半載竹管内皮の表出が顕著な平行沈線で意匠文が描出される。54は半隆起線の平行沈線で意匠が描出されるが横位→鋸歯状沈線の施文順が明瞭である。以上は概ね関山Ⅱ式に比定されると思われる。

56～95は各種縄文が施されるものである。56～58は、0段多条R2本、L2本を各々緩く結び、この部分を閉じた末端とした「結節回転B」が交互・多段に幅狭等間隔で施されるものである。58の下半には0段多条RL・LRを用いた脚短な末端環付も施される。59～66・68～70・72～75は末端環付が施されるものである。59は口縁端部から0段多条RL・LRを用いた脚短な末端環付を幅狭等間隔で施す。60・61・63・64も0段多条RL・LRを用いた脚短な末端環付を幅狭等間隔で施す。62は0段多条RL・LRの環付部のみを多段に施し、以下に0段多条LRを用いた末端環付を施文。65は無文部を作出した際の粘土が上段の末端環付に被っている。66は0段多条RL・LRを用いた末端環付を幅狭等間隔で施す。以上は関山Ⅰ式あるいは2類の二ツ木式に含まれるものと考えられるものである。67は口縁端部に0段多条RL・LRの結束による羽状縄文が構成される。68～75の末端環付は相対的に脚長なもの、横帯区画も異間隔になるものを含む。68は欠損するが波状線で、0段多条RL・LRを用いた脚長な末端環付を施す。69は幅狭ではないが0段多条LRを用いた末端環付を多段に施す。70は口縁端部に幅狭な無文を作出し、以下に0段多条RLを用いた脚長な末端環付を施す。71は0段多条RLを用いた末端環付が施される。72はLRと0段多条RLを用いた末端環付が施される。73は細めの原体LRとLRを用いた環付部のみを多段に施し、異間隔横帯区画となる。74は0段多条RLを用いた脚長な末端環付が施される。75は末端環付RL・LRによる羽状縄文を施した後、磨り消しにより中位に無文帯を作出する。上部に消し残った環付部が認められる。76はLの開いた端に自縄で作った結節が認められる。77は片口注口土器でLRが施される。78・79は口縁端部下からRL・LRで羽状縄文を構成するものである。80は0段多条RL・LRによる羽状縄文を構成。81はRLとLが施される。82はR・Lで羽状縄文を構成するが、追加成形による下部文様への粘土被りが認められる。83～85は口縁端



第82图 D地区盗掘外出土器(3)

部に白歯状突起が付されるもので、いずれも附加条縄文が施される。83・84は軸の縄LRに附加条R2本を反対方向に絡げている附加条第2種を施す。85は軸の縄RLに附加条L2本を反対方向に絡げている附加条第2種を施文。86～90は組紐を施すものである。91～95は底部である。91は器表下端までRL・LRを用いた脚短な末端環付を施し、外底面には貝殻背圧痕文を密に施す。92は器表下端までと外底面にL・Rを施す。93～95は器表下端まで文様が施される上げ底の底部。93はRL、94は組紐、95はLRが施される。115は器表の風化あるいは二次焼成の影響により不鮮明であるが、口縁部に半截竹管による平行沈線で菱形文を描出し、これに列点状刺突が付随する。菱形文が小さく細部で異なるものの黒浜式と併行関係がある有尾式系統と当初は考えたが、Ⅱ式の範疇に含まれるものである。

#### 第2群5類 前期中葉黒浜式土器 (第82図96～第83図113)

96～99は沈線による文様が施されるもの。96は半截竹管による平行沈線で口縁部を区画し、同工具による鋸歯状文を区画内に充填する。胴部以下にはLRが施される。97はヘラ状工具により明瞭に引かれた斜格子目文が、口縁部から施される。99は口縁部を欠くが、以下にヘラ状工具によりやや粗く引かれた縦横の沈線が認められ、膨らみを持つ胴部にはLが施される。

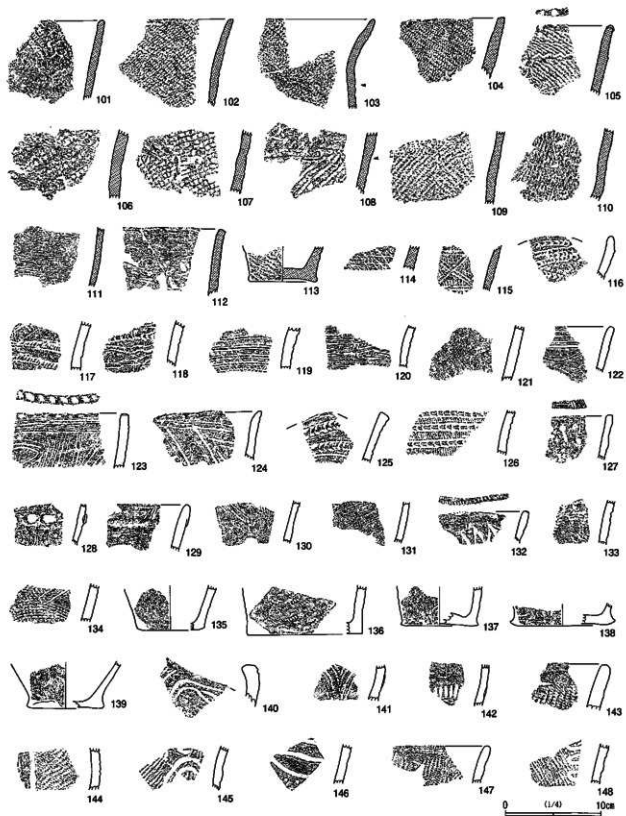
100～109は各種の縄文が施されるものである。100は軸の縄はともに不明瞭だが、附加条R2本、L2本をそれぞれ絡げた附加条縄文が施される。101～104はRLが施されるものである。102では内削ぎ分が継ぎ足され無文となっており、103では追加成形の痕跡である下部文様への粘土被りが認められる。105は口縁部端部に上に刻み目状に凹文を付す。端部直下からRが施されるが、開いた端に自縄で作った結節が認められる。106はかなり太目のLRで施文される。107はLを用いた末端環付が施されるが、器面が軟らかい段階の施文のためか施文単位の境界に粘土の寄りがミミズ麗れ状に残存する。108はLが施されるが、追加成形の痕跡である下部文様への粘土被りが認められる。109はRL・LRとも施文されるが、明瞭な羽状縄文にはならない。110・111は放射肋のある貝殻による背圧痕文が施されるもの。110は縦位で擬似縄文的、111は短い単位で横位に施文。112は基本的には無文で、横位の擦痕が顕著。113は底部で器表下端まで0段多条RLが施される。

#### 第2群6類 前期後葉諸磯式土器 (第83図116～121・135・136)

116は波状線で、C字爪形文で弧線文を組み合わせた意匠を描出すと思われる。117は斜位に刻み目の入る爪形文で意匠を描出しよう。118は横位のC字爪形文と半截竹管による平行沈線で波状文が施される。119・120は地文にRLが施される。119は地文はほとんど磨り消され、半截竹管による平行沈線が横位に連続する。120では縦位に半截竹管による押し文が垂下する。121細めのRLが施される。いずれも胎土に砂粒または砂礫を含み、b式の範疇と思われる。135・136は底部で、135は磨り消され疎らになったLRが、136は細めのRLが施される。

#### 第2群7類 前期後葉浮島式・末葉興津式土器 (第83図122～134・137～139)

122は口縁部部に平行沈線文により横位区画を行い、以下に木葉文を施すと思われる。地文に緩んだ懸糸文が横位に施されている。123は口縁部端部に指頭押捺による凹文が刻み目状に付される。端部に平行沈線による横位区画を行い、以下に縦位の平行沈線に分割された木葉文が施される可能性がある。124



第83图 D地区遗物外出土器(4)

は口縁端部に小突起が付されると思われる。端部には半截竹管による平行沈線で横位区画を行い、以下に同工具で山形文が描出されるか。125は波状縁で変形爪形文が施される。126は端部を欠損するが口縁部付近と思われる。地文の熱糸文R上に横位のD字爪形文が施され、横位区画となる。127は口縁部端部に1か所平行短沈線が付され、端部以下には凹凸文、平行短沈線、放射肋を有す波状貝殻文が施されている。128は口縁端部を欠損するが、以下に凹凸文が施される。129は折り返し口縁で無文。130は半截竹管による平行沈線が斜位に垂下する。131は斜位に疎らな熱糸文Rが施される。132～134は貝殻文の施されるもの。132は口縁端部に刻み目を付し、以下に放射肋のないハマグリ等による波状貝殻文が施される。133は放射肋を有すハイガイ等により振幅の大きな波状貝殻文が施される。以上は浮島式で、122・123・126はI式に比定できようが、他は概ねII式主体でそれ以降と考えられる。134は先端の鋭いヘラ状工具等により区画を作成し、区画内には放射肋を有すハイガイ等の貝殻を密に押し引いて有文部としたいわゆる磨消貝殻文が施される興津式。137～139は底部で、下端が外側に突出する本類の特徴を有している。

#### 第2群8類 前期後半の異系統土器 (第83図114)

114は網目状熱糸文が施されることから、黒浜式に併行する大木2a系土器の可能性がより高いと考えたが、1類花積下層式にも網目状熱糸文が伴うので断定はし得ない。

#### 第3群1類 中期初頭五領ヶ台式土器 (第83図140・141)

140は波状縁で波頂部下にV字状の貼付文が付され、この両側に沈線による枠状区画が形成されよう。胎土に雲母、長石等の砂粒・砂礫を含む。五領ヶ台式最末に位置付けられよう。141は隆起線による区画に角押文が付随し、内側にも同種の角押文が充填される。阿玉台式直前に比定されるので、本類に含めた。

#### 第3群2類 中期前葉阿玉台式土器 (第83図142)

142はひだ状文から派生したと思われる縦長な連続刺突文が胴部下半に巡る。胎土に雲母末を多く含む。阿玉台I b式に比定できよう。

#### 第3群4類 中期後葉加曾利E式土器 (第83図143～145)

143は口縁部無文帯が作出され、以下にLRが施される。144は磨消懸垂文が垂下する胴部で、0段多条のRLが施される。145は胴部中位の括れ部で、磨消を伴う弧線文が対向する可能性がある。地文はRLである。以上はE II～III式に比定されるキャリパー形土器と思われる。

#### 第4群1類 後期初頭称名寺式土器 (第83図146)

146は沈線で描出される意匠文内に兩垂れ状の列点文が充填されるII式である。

#### 第4群2類 後期前半堀之内式土器 (第83図147・148)

147は口縁端部に横ナゲによって幅狭な無文帯を作出し、以下に0段多条LRが施される。148は地文LR上に深い沈線で巖手状の意匠文が描出されよう。



## 第6節 E地区

E地区は第6次調査区、第10次調査区、第11次調査区2ヶ所のうち西側の調査区、第12次調査区、第13次調査区5ヶ所のうちの最も南側の調査区、第15次調査区、第18次調査区という今回報告する中では最も多い7次に亘った確認調査の範囲を統合したものである。ここは遺跡全体のうちでは南西部にあたり、調査区西端に接する道を境界に西側は富士見遺跡の範囲となる標高17m前後の比較的平坦な地形を呈する(第1・4図)。大グリッドZ20・21区、AA20・21区、BB20・21区を中心とした広い範囲で、このうち本調査面積も3,006㎡と最大である(第1・4図)。検出された遺構は初頭と中葉を主体とした縄文時代前期の竪穴住居跡21軒・土坑4基の他、前期型式不明の竪穴住居跡1軒・土坑8基・ピット群1か所、縄文前期初頭の可能性がある炉穴1群5基、縄文草創期～早期と考えられる陥穴が1基、前期初頭あるいは中葉と時期の特定できない面状の遺構外貝層が1か所と、内容は多岐に亘る。このうち前期の竪穴住居群は南側と富士見遺跡に連続する西側に分布範囲を広げることが予想される。この範囲で全体は弧状を呈すると思われ、D区で検出された前葉を主体とした住居群とは分布を異にするとと思われる(第84～87図)。

### 1 竪穴住居跡

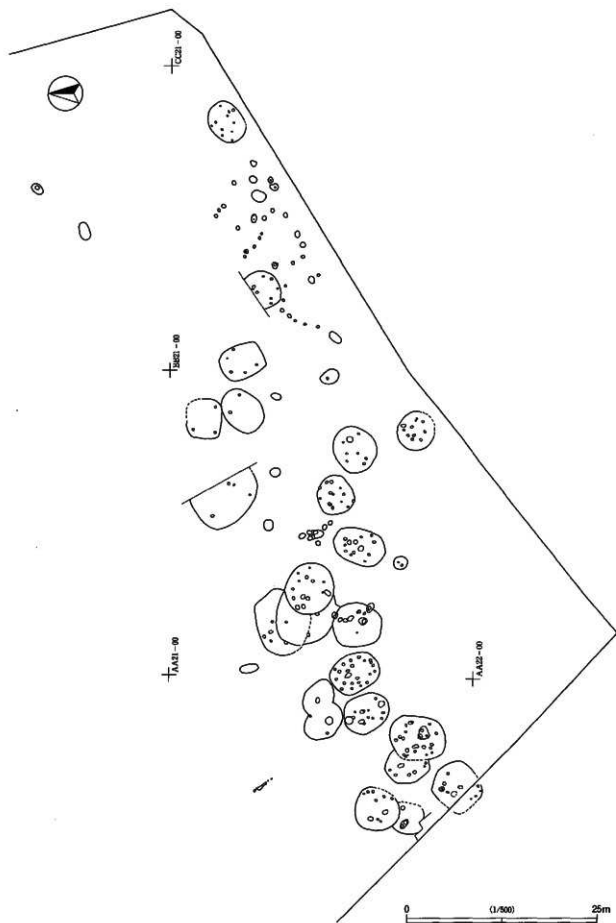
#### SI031・035(第85・88図、図版6)

SI031はZ21-65区付近に位置する。本住居跡は第10次で調査され、第12次で調査されたSI035と重複関係にあるが、本住居跡の方が新しいと思われる。規模については南東方向に新しい時代の溝が走り本遺構の一部を切っているので、5.92×5.76mの略円形を呈すものと推定した。確認面からの深さは0.2mを測る。柱穴と思われるピットは8本あるが不規則で主柱穴は確定し得ず、床面からの深さは0.18～0.61mの範囲に収束する。炉は作り替えのためか2か所検出されている。いずれも住居の中央付近には設けられず、西側に偏在して炉A、南側に偏在して炉Bが設けられている。炉Aは規模0.76×0.5m、深さは0.1mを測る。上面での焼土分布は疎らながらほぼ全面に亘り、底面はほとんど被熱痕跡が認められない。炉Bは規模0.7×0.6m、深さは0.12mを測る。上面での焼土分布は疎らながらほぼ全面に亘り、底面の一部に被熱痕跡が認められる。西側の壁近くに床面より若干高い不整形の硬化面が認められる。炉の位置との関係が説明しにくい、出入口に起因する差異の可能性がある。

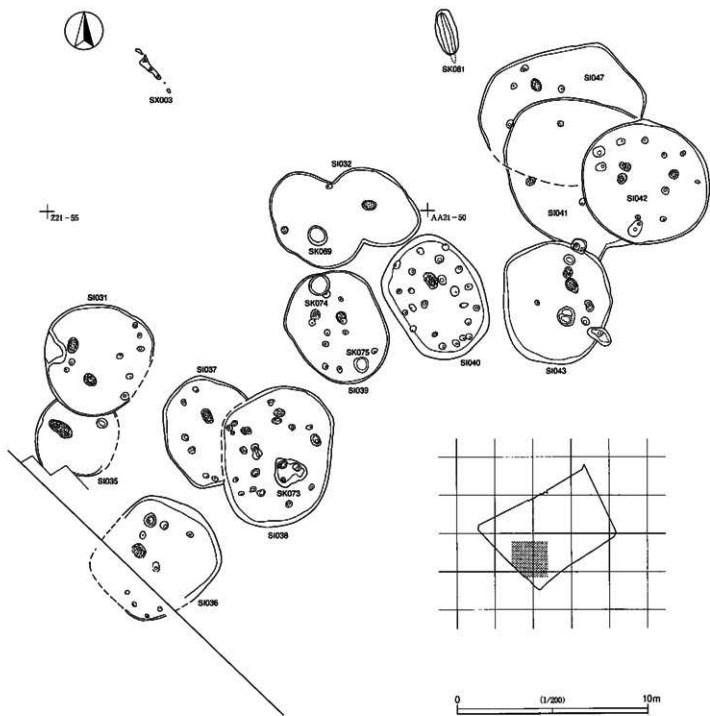
SI035はZ21-85区付近に位置し、SI031と重複関係にあるが本住居跡の方が古いと思われる。南側は調査区外、SI031と新しい時代の溝に本遺構の一部が切られているため、4.72×4.48mの略円形を呈すものと推定した。確認面からの深さは0.12mと浅い。柱穴と思われるピットは1本検出されたのみで、床面からの深さは0.19mと浅い。炉は床面中央から北西寄りに規模1.4×0.68m、深さは0.22mを測る炉が設けられている。上面での焼土分布は疎らながらほぼ全面に亘る。炉の掘り方を見ると東西に2か所の底面が認められる。記録から重複関係は捉えられないが、平面形状から作り替えられた可能性はあると思われる。

#### SI031出土遺物(第88・89図、図版26・45)

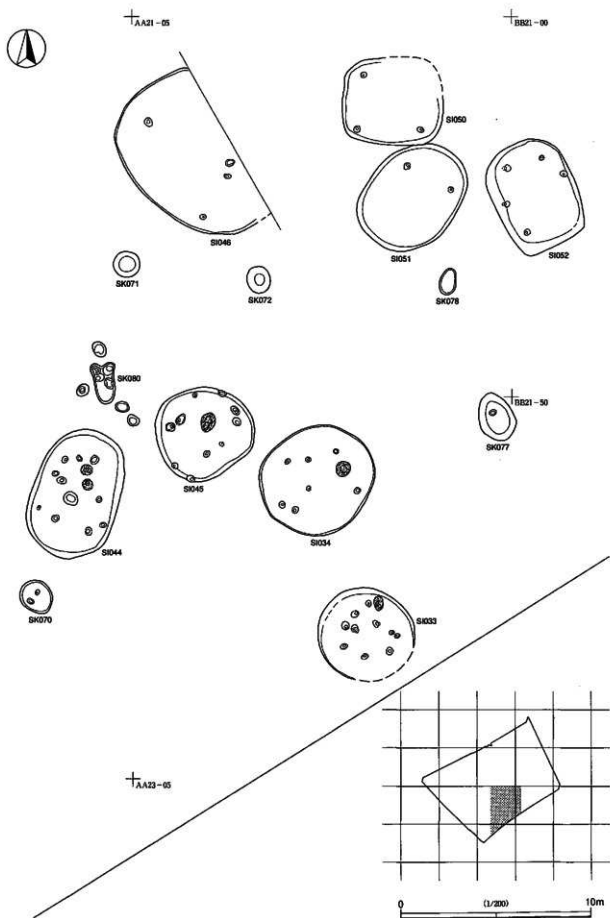
遺物は約120点出土しているが、このうち土器17点を図示し得た。1～8はLR・RLを用いた羽状縄文が多段に構成されるものである。1は刻み目付き隆起線で狭小な口縁部枠状区画を作出する。胴部以下には比較的幅狭な単位で羽状縄文を構成しよう。LR・RLとも他の細い糸を以て縛り留めた原体末端線が認められる。2・3は折り返し口縁部から羽状縄文が多段に構成される。3は推定口径27.0cmを測り、胴部下半で膨らんだ後、底部と接続する器形となろう。4～8はほぼ等間隔で羽状縄文が多段に構成される。



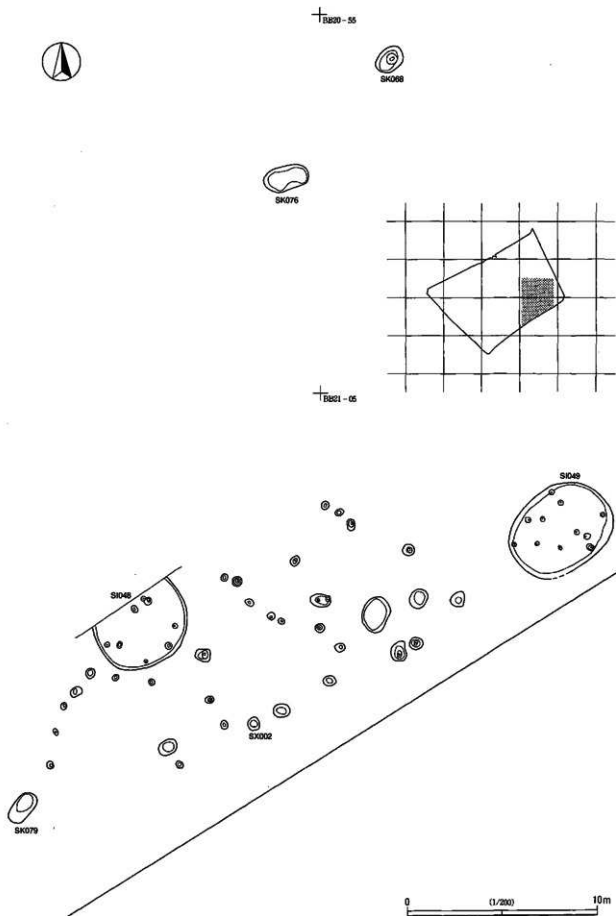
第84图 E地区遗物分布图(1)



第85图 E地区遺構分布图(2)



第86图 B地区遺構分布图(3)



第87图 E地区遗構分布图(4)

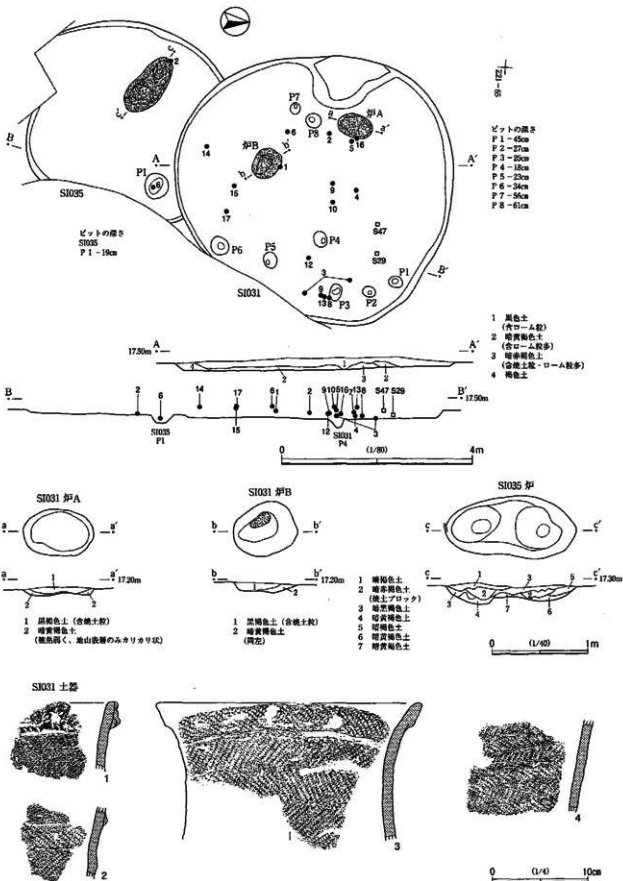
8ではRLに他の細い糸を以て縛り留めた原体末端線が認められる。9の上半には撚りの緩んだ疎らな撚糸文Rが施され、一部に疎らな貝殻背圧痕文の重なりが認められる。下半は判然としないが横位の貝殻条痕文が施されると思われ、一部に太目の異方向組の原体R-Lによる側面圧痕文が交差して施されているようか。10-15は貝殻背圧痕文が施されるもので、13を除きかなり密に施文されている。10は推定口径25.0cmを測る。16・17は底部。16はLRと底部外面にRL、17はLを施文。以上は第2群1類花積下層式土器に比定できるもので、遺構の帰属時期を決定する内容である。他に石畿3点を図示した(第121図29・31・47)。

#### SI035出土遺物(第89図、図版47)

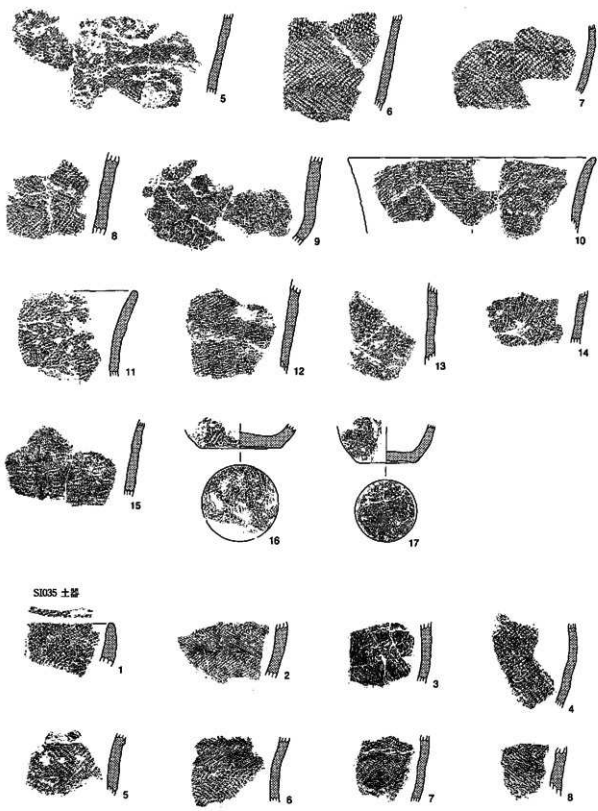
遺物は約20点少ないが、このうち土器8点を図示し得た。1は口縁端部上、端部直下から斜縄文LRを意識した貝殻背圧痕文が密に施される。2-8は各種縄文で羽状縄文が施されるものである。2は上半にLとRを結束した羽状縄文が施され、以下には閉じた端を少し曲げて回転したため斜行する条の末端線が連なるL、通常のRが施される。3はRL、8はRを施した後、貝殻背圧痕文を重ねている。4は比較的施文単位が短いLR・RLを用いて多段に構成する。5は0段多条RL・LRを用いて羽状縄文を構成するが、単位の切れ目は整然としない。6はRL・LRを用いて構成するが、LRでは開いた端を止めた痕跡が列点状に認められる。7は基本的には羽状縄文だが、やや間隔を空けてRL・LRが施される。RLには開いた端に自縄で作った結節が認められる。以上は第2群1類花積下層式土器に比定でき、遺構の帰属時期を決定する内容である。他に遺構一括だが石畿1点(第121図41)、磨製石斧1点(第126図136)を図示した。

#### SI032(第85・90図、図版6・45)

Z21-58区付近に位置する。調査時には土層断面から重複関係は認められなかったとされるが、西側が推定規模5.6×4.0mの楕円形、東側が推定規模5.0×3.6mの楕円形を呈する2軒が重複する可能性があるため、西側をSI032a、東側をSI032bというように便宜的に分けて遺構の説明を行う。SI032aでは柱穴と思われるピットは1本検出されたのみで、床面からの深さは0.28mを測る。南西側の壁近くの床面に0.4×0.36mの掘り込みのない焼け面が検出されている。SI032bでは柱穴は検出されていないが、床面からの深さは0.28mを測る。床面のほぼ中央に規模0.76×0.52m、深さ0.1mの炉が設けられる。炉の上方面での焼土分布は疎らながらほぼ全面に亘り、底面の一部に被熱痕跡が認められる。SK069と重複するが新旧は不明。いずれも竪穴住居跡の要件に若干欠けるが、今回は住居跡として扱った。遺物の記載は一括した。全体で130点以上の出土であるが、このうち土器11点を図示し得た。1・2は折り返し口縁上に段が作出されるが、1ではかなり幅広となる。鋸歯状の集合沈線が施される文様帯となる。3-6は各種縄文で羽状縄文が施されるものであるが、総じて単位幅が短く羽状縄文を構成する異方向の単位が対向しないですれたり、被り合ったりする部分もあり、いわゆる横帯区画が整然としていない。3・4・6はRL・LRが施される。5は0段多条RL・LRが施される。7-8dは放射肋を有す貝殻による背圧痕文の施されるものである。7は口縁端部から横位に施されるが疎らである。8a-dは接合しなかったが、出土位置や文様、器面の状態等から同一個体とした。8aは口縁端部上には疎らに、端部以下には密接して横位に貝殻背圧痕文が施される。8bは胴部下半、8c・dは胴部下半から底部に掛けての破片で、貝殻背圧痕文が横位または斜位に密接して施されると思われるが、被熱による表層剥落が進んでいる。底面にも貝殻背圧痕文が比較的密に施されている。以上は第2群1類花積下層式土器に比定できる。9は波頂部を欠損する波状縁で、口縁端部に



第88図 SI031・SI035 (1)



第89図 SI031・SI035 (2)



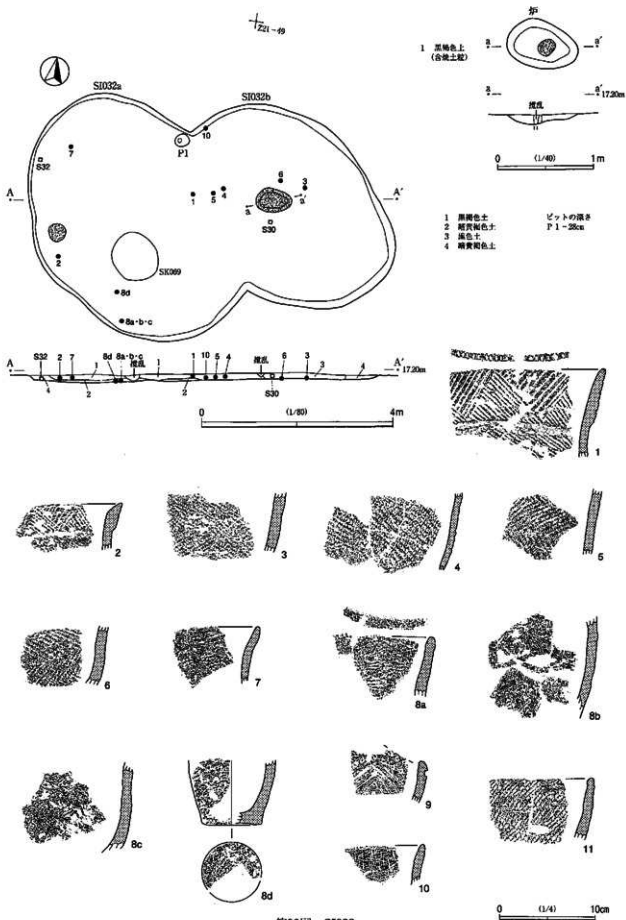
沿って複列、波頂部から垂下して単列の円形竹管刺突文が施される。後者の中軸線両側にはヘラ状工具による沈線で葉脈文が描出されよう。10は口縁端部からヘラ状工具による縦横の短沈線が格子目文風なモチーフを描く。出土位置は覆土下層である。11は口縁端部からLが施されている。以上は第2群5類黒浜式土器に比定できる。遺構の燔属時期は既述したように遺構の新旧関係や、遺物の出土位置の差などから決定するのは困難である。この少ない情報からはSI032aは花積下層期の可能性が、SI032bは花積下層期あるいは黒浜期の可能性があるという記載に留めておきたい。他にSI032a・bとも出土位置の記録のある石蔵が各1点、a・b一括のものが1点出土しているので図示した(第121図30・32・33)。

### SI033 (第86・91・92図、図版7・26・46)

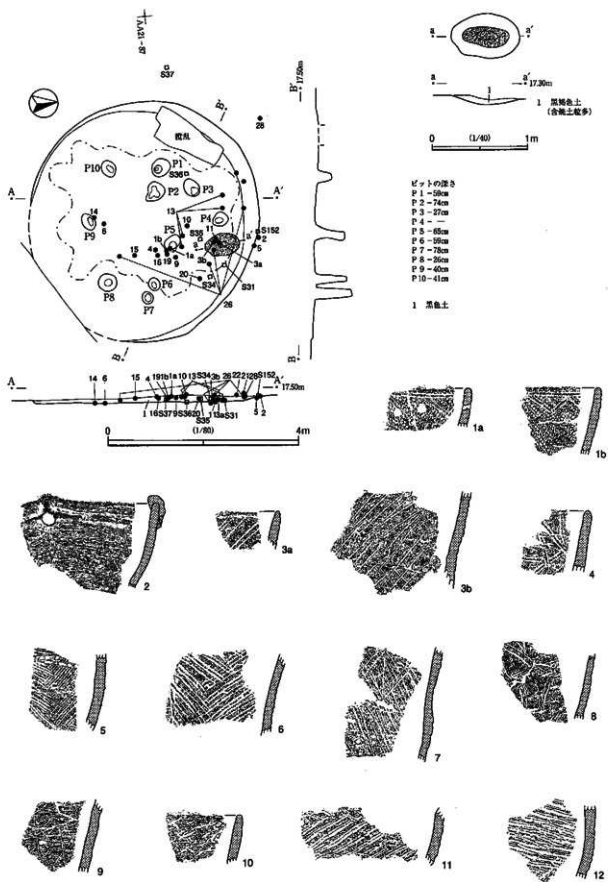
AA21-87・88区付近に位置する。調査区外の道路に近接している南東部では壁の立ち上がりが一部確認できなかったが、外形は5.1×4.88mの略円形を呈すると思われる、確認面からの深さは平均0.08mと浅い。西側の一部に壁から床面に掛かる攪乱があるが、床面の硬化範囲(一点鎖線の範囲)は確認できている。柱穴と思われるピットはこの硬化面とほぼ重なる形で10本検出されているが、床面からの深さは記録のなかったP4を除き、0.26~0.78mの範囲にばらついている。硬化面の北端の1ヶ所、壁に近接した位置に偏在した形で規模0.72×0.5m、深さ0.1mの炉が設けられている。炉の上面での焼土分布はやや疎らだがほぼ全面に亘っている。底面に被熱痕跡が認められるものの、それ程使い込まれていない。

遺物は約200点出土しており、このうち床面~覆土中までの土器28点を図示し得た。1~9は主要モチーフや文様の一部に沈線を用いるものである。1a・1bは口縁端部下に半載竹管を用いた平行沈線が区画として巡らされ、これに接して同様の施工で鋸歯状文が描出される。地文には疎らなRLが施され、1aには補修孔1対が認められる。2は口縁端部に隆起線による幅狭な区画帯を作出し、端部に小突起を有するが、これらの接点には円文が貼付される。半載竹管を用いた複列の結節沈線が区画内に充填され、また、円文下の中軸線、中軸線両側の多段の横位沈線として用いられている。胴部のモチーフは横線肋骨文になると思われる。3a・3bはヘラ状工具を用いた斜位沈線が口縁部から胴部まで施されよう。4は軸線がずれるが基本的には半載竹管内面を用いた平行沈線で葉脈文が施される。5は口縁部下端と思われる位置に、半載竹管を用いた複列の結節沈線が横位に施される。以下の胴部には鋸歯状工具による矢羽根状の集合沈線が縦位に施される。6は半載竹管を用いた平行沈線で、間隔のあく矢羽根状あるいは山形状の集合沈線が縦位に施される。7は半載竹管を用いた平行沈線が右下がりでありに密に施された後、同様の工具による縦位あるいは左下がりの沈線が部分的に重ねられる。8は半載竹管を用いた平行沈線が疎らに施される。9は先端の鋭いヘラ状工具を用いた細沈線で葉脈文が描出されよう。

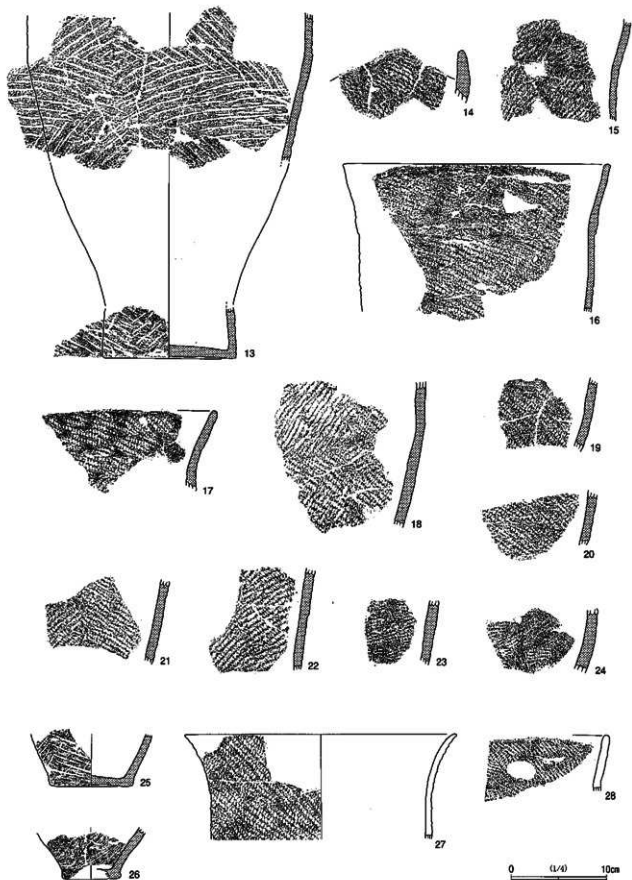
10~22は各種の縄文が施されるものである。10~13は附加条縄文。10は軸の縄Lに附加条Rを右巻きした附加条第3種が施される。11は軸の縄の原体は不明だが、附加条R2本、L2本をそれぞれ絡げた附加条で羽状縄文を構成しよう。12も軸の縄の原体は不明だが、附加条Rを絡げる。13は軸の縄RLに附加条Lを反対方向に絡げた附加条第2種と、軸の縄LRに附加条Rを反対方向に絡げた附加条第2種が施され、菱形文を描出している。図上復元ではあるが、底部が突出し口縁部に向かって開く器形を呈すると思われる、現存部の推定最大径29.8cmを測る。14は波状縁でRを、15はLをそれぞれ施文。16・19・20はRLが施される。16は口縁部に向かって少し開く器形で、RL施文後に部分的にヘラでナデ消されている。推定口径27.5cmを測る。17は口縁端部からRLが、以下にLが施され羽状縄文を構成しよう。18はLとRLが施され、整



第90図 SI032



第91図 SI033 (1)



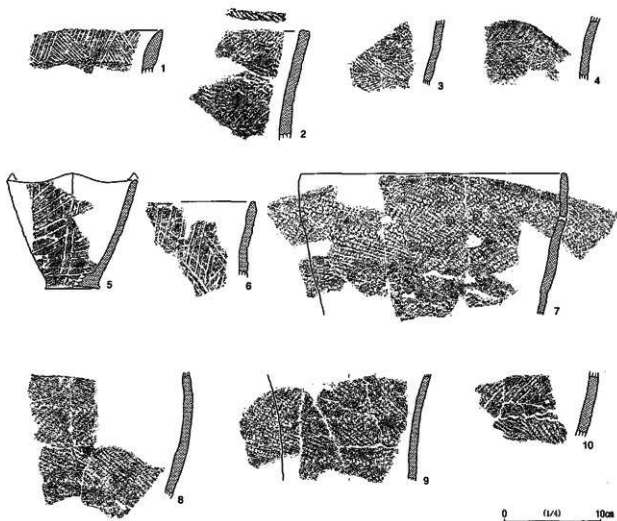
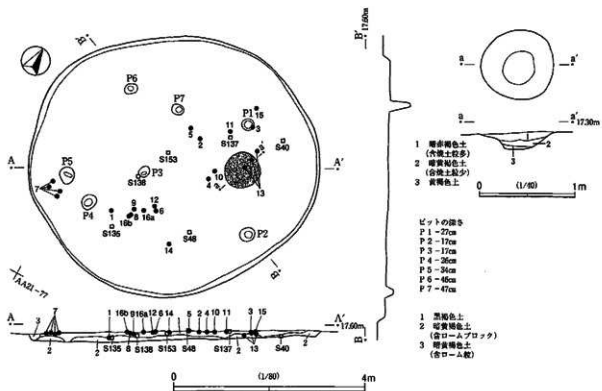
第92圖 SI033 (2)

然とはしないものの羽状縄文が構成される。21はLR・RLが施文されるが、器面がかなり軟らかい段階で施文したため、施文単位の切れ目にはみ出した粘土が認められ、RL→LRの施文順序が看取される。22はLRが施される。23・24は放射肋を有す貝殻を用いた背圧痕文が施される。25・26は底部である。25は器表下端まで半載竹管を用いた平行沈線で集合的な斜沈線を施す。26は底部が若干突出する器形で、Lが施される。以上は胎土に繊維を含む第2群5類黒浜式土器に比定される。27・28はRLが施される。27は口縁部向かって開く器形で、推定口径27.5cmを測る。以上は胎土に繊維を含まない第2群6類諸磯式のうちa式に比定される。以上のように従来の知見によれば繊維の有無により分別されるが、この分別は文様等で類似性がある場合は必ずしも有効ではないことを本遺跡SI012の事例で述べたところである。本遺構例は有文ではないが、この考えに従い遺構所属時期を黒浜式としておきたい。他に石罫4点、石皿片1点を図示した(第121図34~37、第128図152)。

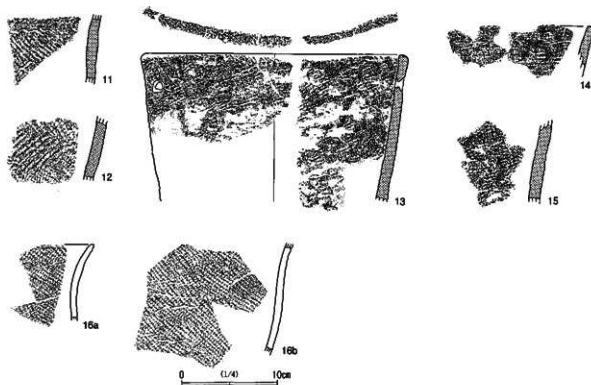
#### SI034 (第86・93・94図、図版7・26・47)

AA21-67区付近に位置する。5.92×5.76mの略楕円形を呈し、確認面からの深さは0.16mを測る。床面中央より西側に偏在して規模0.78×0.74m、深さ0.16mを測る。炉の上面での焼土分布は疎らながらほぼ全面に亘るものの、底面には被熱痕跡がほとんど認められないことから、短期間の使用に留まったものと考えられる。柱穴と思われるピットは7本検出されており、これらはやや不規則ではあるが炉を挟んで列状の配置にある。床面からの深さは0.17~0.47mの範囲に収束する。

遺物は約170点と出土しており、このうち土器16点を図示し得た。1は折り返し口縁状に段が作出される。鋸歯状の集合沈線が施される文様帯となり、以下にはLRが施される。2は口縁部端部にR、端部以下はL・R・附加条縄文が施され、羽状縄文を構成しよう。附加条は軸の繩の方向が不明ながら附加条Rを絡げている。3は幅狭等間隔でR・Lが交互に施され、羽状縄文を構成する。4はほぼ等間隔でLR・RLが施され、上部が羽状縄文となっている。以上は第2群1類花積下層式に比定される。5・6は半載竹管による平行沈線で文様を描出するものである。5は残存部から判断すると波状線を呈すと思われる小形土器で、推定口径13.0cmを測る。葉脈文を描出しよう。6は斜沈線の右上がりには密に、左上がりは疎に施されて粗い格子目文を描出しようか。7~12は各種の縄文により羽状縄文が構成されるものである。7はRL・LRによる結束第1種で羽状縄文が構成されている。補修孔が1対認められ、推定口径26.9cmを測る。8は中位にLR・RLによる結束第1種で羽状縄文が構成されている。また、上位と下位の単位には、閉じた端を少し曲げて回転させた波状の痕跡が認められる。9はLR・RLによる結束第1種で羽状縄文が多段に構成されると思われる。現存部の推定最大径17.1cmを測る。10・11ともL・Rを用いた羽状縄文が構成され、Rの開いた端に10はS字状、11はZ字状の結節が作られている。12はRLとLが用いられ羽状縄文が施されるが、対向しない部分もあり構成にズレが認められる。以上は胎土に繊維を含む第2群5類黒浜式土器に比定される。13~15は放射肋を有す貝殻の背圧痕文が施されるものである。13は口縁部端部上と端部以下に貝殻背圧痕文が施されるが、いずれも斜位に密接しているところから擬似斜縄文の効果を持つ。補修孔が1か所認められ、推定口径26.8cmを測る。炉上面よりやや浮いた位置から出土しているが、器表は被熱による剥落が著しい。14は口縁部から切れ切れない状態で、横位の貝殻背圧痕文が密に施される。以上の貝殻背圧痕文を有す土器は時期により多寡があるものの前期初頭~中葉まで存在するため、本住居跡出土のものは花積下層式または黒浜式としておきたいが、他遺構のものと比較してみるとより前者



第93図 SI034 (1)



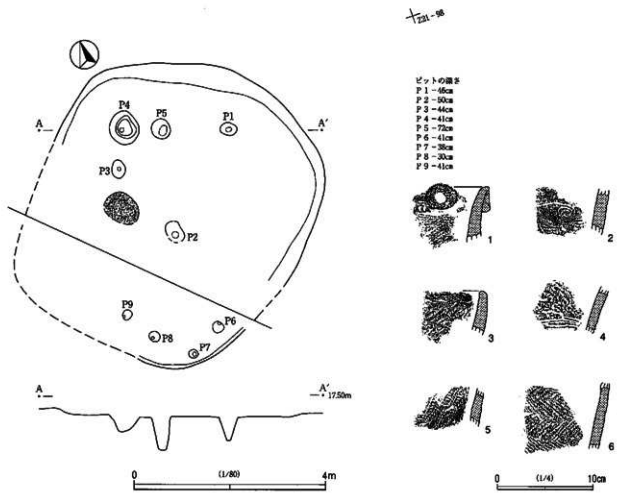
第94図 SI034 (2)

の可能性があると思われる。16a・16bはRLが施され後、結節部のみの回転施文が重ねられている。口縁部向かって開く器形を呈す。胎土に繊維を含まない第2群6類諸磯式のうちa式に比定される。従来の知見によれば繊維の有無により分別されるが、この分別は文様等で類似性がある場合は必ずしも有効ではないことを既述した。遺物の出土位置を見ると、以上の3型式は層位的にも分別できていない。これらを考え合わせると、遺構所属時期は黒浜式としておくのが妥当と思われる。他に石鏃1点(第121図40)、磨製石斧3点(第126図135・137・138)、石皿片1点(第128図153)、不明土製品1点(第131図1)を図示した。

#### SI036 (第85・95図、図版48)

Z21-96区付近に位置する。南西側が調査区外に掛かるため、規模は推定6.4×5.76mの略隅円方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.16mを測る。柱穴と思われるピットは9本検出されているが、床面からの深さは0.3~0.72mの範囲でばらつきがあり、配置も不明瞭である。床面中央からやや西側によった位置に規模0.72×0.5m、深さ0.1mの炉が設けられている。炉の上面での焼土分布は疎らながらほぼ全面に亘るものの、底面には被熱痕跡があまり認められないことから比較的短期の使用が想定される。

遺物は約15点と少ないが、このうち土器6点を図示し得た。1は口縁端部に隆帯による狭小な区画文が作出され、その接点に隆帯による小突起状の円文が貼付される。区画内、円文上、端部以下にいわゆる燃糸側面圧痕文が施されるが、端部以下ではRとLの異なる方向の原体を組み合わせる幾何学的なモチーフを描出しよう。2はLによる戴手状の燃糸側面圧痕文と、放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施される。3は口縁端部にLの開いた端に作られたZ字状の結節が認められる。6はL・Rを用いて羽状縄文が多段に構成



第95図 SI036

されよう。以上は第2群1類花積下層式土器に比定できる。4は半截竹管を用いた平行沈線を胴部に巡らせると思われ、RLが施される。5は軸の縄Rに附加条Rを反対方向に2本絡げた附加条第2種が施される。以上は第2群5類黒浜式土器に比定できる。遺構の帰属時期は既述した土器が遺構一括出土であることから層位関係を捉えることができない。このため遺構の帰属時期は花積下層期あるいは黒浜期と思われるが、より新しい黒浜期の可能性がある。他に遺構一括の石鏃1点を図示した(第121図39)。

SI037・038 (第85・96図、図版7)

SI037はZ21-77区付近に位置し、SI038と重複関係にあるが、土層断面の観察結果より本住居跡の方が古いことがわかった。規模については床面までの深さがあるSI038に切られているため推定であるが、5.76×4.88mの楕円形を呈すものと思われる。確認面からの深さは0.24mを測る。柱穴と思われるピットは西半周に沿うような形で6本検出されており、床面からの深さは0.19~0.67mの範囲でばらつきが認められる。床面中央からやや北側に寄った位置に規模0.78×0.5m、深さ0.08mの炉が設けられる。炉の上面での焼土分布はほぼ全面に亘るものの、底面には被熱痕跡があまり認められないことから比較的短期の使用が想定される。



SI038はZ21-88区付近に位置し、SI031と重複関係にあるが既述のように本住居跡の方が新しい。また、床面中央にはロームブロックを主体とする貼り床がされており、以下には本住居跡より古いと考えられるSK073が構築されていた。規模は7.2×6.0mのやや不整な楕円形を呈すものと思われ、確認面からの深さは0.32mを測る。柱穴と思われるピットは場所により多寡があるが比較的には住居プランに沿うような形で17本検出されており、中には付け替えのための重複も認められる。床面からの深さは0.21~1.05mの範囲でばらつきが認められる。床面中央より北側に偏在した位置に規模0.52×0.44mの炉A、0.48×0.32mの炉Bが検出されたが、いずれも0.01m程度掘り窪められているだけの焼面的な構造である。柱穴・焼面の状況から建替えの可能性も考慮されよう。

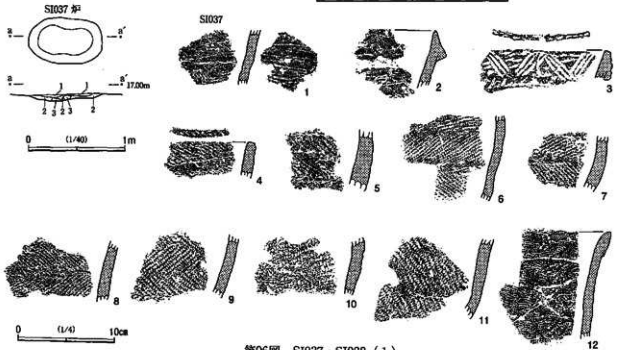
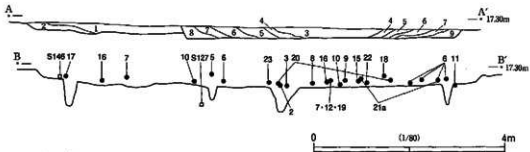
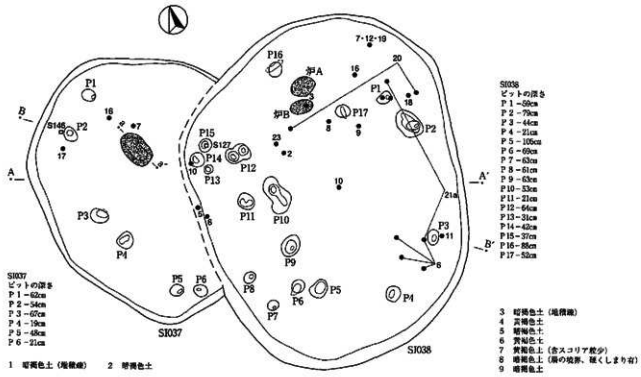
#### SI037出土遺物 (96・97図、図版26・48)

遺物は約70点と少ないが、このうち土器18点を図示し得た。1は表面に閉じた端を少し曲げて回転させた線状の痕跡が認められるRが施され、裏面に横位の条痕文が施されるいわゆる縄文条痕土器。2はL2本による燃糸側面圧痕文と刺切文が施される。3は折返し口縁で、端部に結節沈線が連続的に施される。端部の比較的狭小な文様帯には3本1単位の沈線により鋸歯状文が描出され、空白部に刺切文を充填。4~11は各種縄文の施されるもの。4は口縁端部上と以下にRが施される。5~9は羽状縄文が施されるもの。5はR・L、6~9はLR・RLを用いて羽状縄文が構成される。6では上部に放射肋を有す貝殻による背圧痕文も擬似縄文的に施される。10はLR、11はRLが施される。12~14は放射肋を有す貝殻による背圧痕文を施すもの。12は折返し口縁で、殻頂部に近い部分を圧痕する細かい単位が多く認められる。15~17は底部。15は器表下端まで0段多条RL・LRを用いた羽状縄文を構成。外表面には貝殻腹縁による刺突文あるいは波状貝殻文の先端が複数施されている。16は器表下端までと外底面にLRを施文する。17は器表下端までサルボウなど繊細な放射肋を有す貝殻による背圧痕文などが施される。以上は第2群1類花積下層式に比定される。18は器厚3mmと薄手の作りで、表裏とも指頭による凹凸が著しい。半載竹管による平行沈線で格子目文を施す第2群4類木鳥式で、花積下層式に伴う東海系の土器である。以上の内容から遺構の帰属時期は花積下層期としたい。他に出土位置を記した凹石1点(第127図146)と遺構一括の石鏃6点(第121図43~46・51・70)を図示した。

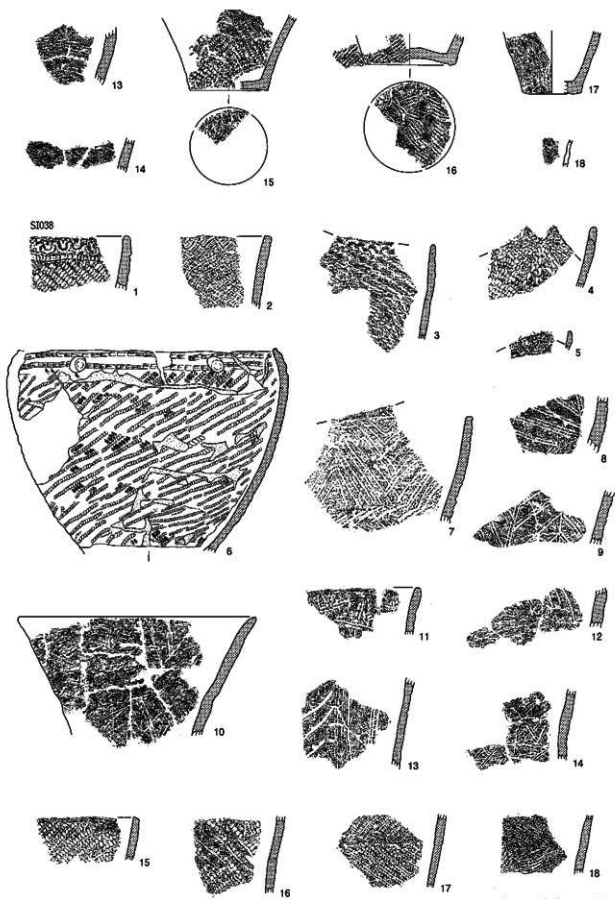
#### SI038出土遺物 (第97・98図、図版26・27・48・49)

遺物は遺構の遺存状況から比べると約80点とやや少ないが、このうち覆土下層~中層で出土位置が記録されているものを主に土器25点を図示し得た。1~14は主要モチーフや文様の一部に沈線を用いるものである。1は口縁端部に半載竹管を用いた真正コンパス文と、結節沈線文が巡らされると思われる。以下には太目の0段多条?RLが施される。2は口縁端部に半載竹管を用いた波状文が巡らされると思われる。地文には軸の縄LRに附加条Rを同方向に結げた附加条1種が施される。3は波状線で、口縁端部に半載竹管内側を用いてコンパス文風の波状沈線文を巡らせるとと思われる。半載竹管内側に残る内皮の線条痕が看取される。以下には斜方向に施された太目の燃糸文Rが施される。4は双頭状の波状線で、端部に沿って半載竹管外側を用いた押し文が列状に施される。中軸とその両側にも押し文が施され、葉脈文を描出しよう。地文はRL。5は丸みのある波状線を呈す小形土器で、端部に沿ってC字爪形文が巡らされると思われる。6は口縁端部上下端に先端に抉りを入れた半載竹管による結節沈線を巡らし、幅狭な区画帯を

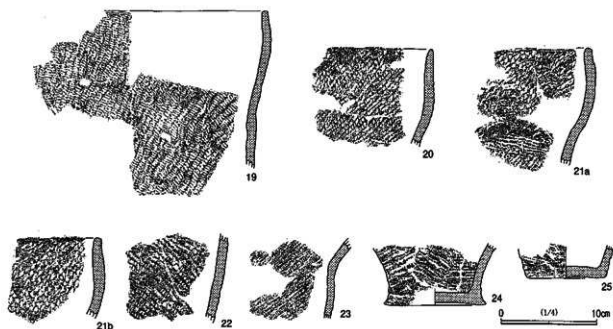
721-76



第96図 SI037・SI038 (1)



第97图 SI037·SI038 (2)



第98図 SI037・SI038 (3)

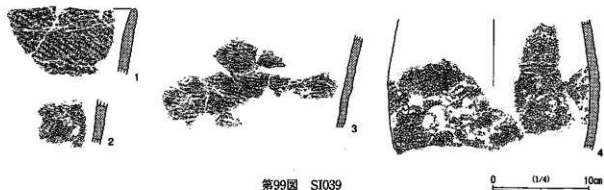
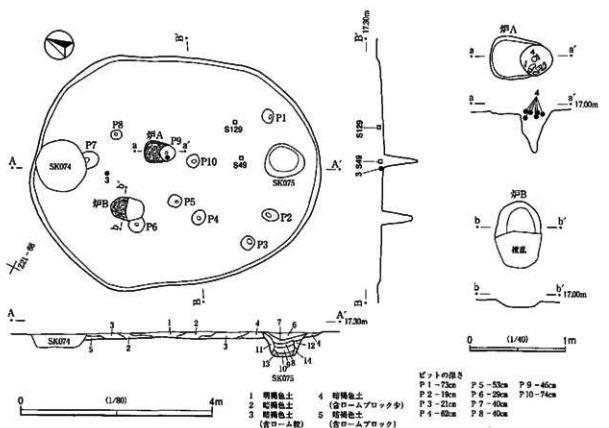
作出する鉢形土器である。結節沈線は施文角度によって、袂り先端が複列状に表出するか所としないか所があることが観察される。区画帯には凹文が何単位か付されると思われ、区画帯以下には軸の縄Rに附加条Rを反対方向に絡げた附加条第2種が施される。軸の縄に対して附加条が太いため、附加条の圧痕が鮮明なのに対して軸の縄の圧痕は所々になっている。推定口径26.6cm、現存部の推定最大径29.6cmを測る。7は波状縁で、幅広い口縁端部にヘラ状工具による集合沈線で鋸歯状文を描出する。頭部には横位の矢羽根状文が巡らされると思われる。8・9は半載竹管を用いた平行沈線で葉脈文を描出する。8では矢羽根状の部分も認められる。10は口縁部が無文で、強いヘラナデ様の整形痕を残し凹凸が顕著である。胴部以下にはヘラ状工具の先端を用いた細沈線で、粗い格子目文が描出されると思われる。推定口径26.6cmを測る。11は口縁端部から半載竹管外側を用いた短沈線を縦横に施す。12は半載竹管を用いた平行沈線が縦位に施される。13は葉脈文が描出されるが、基幹線は半載竹管内側を用いた平行沈線を数条引き、支線は半載竹管外側を用いた沈線である。14は半載竹管を用いた平行沈線により格子目文が描出される。

15~24は各種の縄文が施されるものである。15~17・23は附加条縄文の施されるもの。15は軸の縄LRに附加条Rを同方向に絡げた第1種である。16・17は軸の縄RLに附加条Lを、軸の縄LRに附加条Rをそれぞれ同方向に絡げた第1種で羽状縄文を構成する。23は判然とはしないが、軸の縄Rに太目の附加条Rを反対方向に絡げた第2種と思われる。18はRと撚りの緩んだLで羽状縄文が構成されている。19は口縁端部から太目の0段多条LRが器面全体を埋め尽くすように密に施されている。20は口縁端部からLが施文。21a・bは同一個体で口縁端部と胴部以下に太目の撚糸文Rを斜位施文し、斜縄文を模している。口縁部と胴部の区画には横位に施された撚糸文Lが認められる。22は0段多条RLが施される。24・25は底部である。24は底面周縁が張り出した器形を呈し、ともに軸の縄が不明だが、附加条RとLを絡げた附加条縄文が施され、縦位の羽状縄文を構成する。25は器表下端まで半載竹管を用いた平行沈線が斜位に密接施文されている。以上は第2群5類黒浜式に比定されるもので、遺構層属時期を設期とするには全く支障のない内容である。

他に出土位置を記した打裂石斧1点(第125図127)、石製袂状耳飾1点(第132図1)と、遺構一括の石  
 織1点(第121図48)、牙製垂飾1点(第132図6)、不明土製品1点(第131図2)を図示した。

SI039 (第85・99図、図版27・49)

SI039はZ21-68区付近に位置する。6.24×5.04mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.16mを測る。  
 土坑2基と重複関係があるが、調査所見によれば遺構内貝層を伴うSK074は本住居跡より新しく、SK075  
 は本住居跡より古いとされている。柱穴と思われるピットは10本検出されているが、炉やSK074と切り合  
 う。床面からの深さは0.19~0.74mの範囲でばらつきがあり、位置は炉も含め住居長軸の両側にやや片寄  
 る傾向にある。炉は2か所検出されている。炉Aは床面中央より若干北東に寄った位置に設けられP9に  
 切られているが、推定規模0.66×0.48m、深さ0.08mを測る。底面の被熱痕跡はそれほど顕著ではない。  
 炉Bは床面中央より南西に寄った位置に設けられ、1/2以上を攪乱により壊されている。また、P6が近接



第99図 SI039

した位置に穿たれている。現存部規模0.52×0.44m、深さ0.16mを測る。底面の被熱痕跡はそれほど顕著ではない。以上説明したように複数の炉の構築、柱穴の配置、炉と柱穴の切合い等から建替える可能性が想定され、しかもそれぞれ比較的短期間の使用と考えられる。

出土遺物は約60点で、このうち4点の土器を図示し得た。1は口縁端部からRLが施される。2は上端に列点状の刺突文、以下にLRが施される。3・4は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施されるもの。4は胴部中位が若干張る器形を呈すと思われる。被熱による器面の剥落が顕著だが、貝殻背圧痕文を擬似縄文的効果で斜位に施している。現存最大径22.2cmを測る。炉Aを切るP9覆土上面で掘り出された。

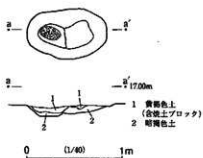
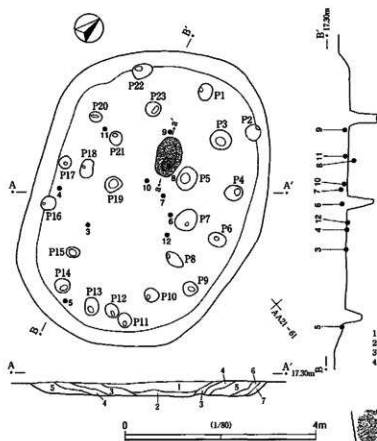
以上の土器は第2群1類花積下層式で、住居跡の時期も前期としたい。他に遺構一括の石罫2点(第121図49・55)と打製石斧1点(第125図129)を図示した。

#### SI040 (第85・100図、図版7・27・49)

AA21-60区付近に位置する。6.56×4.96mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.32mを測る。柱穴と思われるピットは23本検出されているが、壁際と炉周りに規則的に配置されていると思われる。床面からの深さは一部が0.3m～0.4m前後である他、P2の0.86mを最深として大半が0.5mを超えており、上屋を安定的に支えたものと考えられる。住居のほぼ中軸線上、床面中央より北西に寄った位置に規模0.88×0.58m、深さ0.14mを測る。炉の上面での焼土分布は粗密があるが全面に亘り、底面の被熱痕跡も全体に及ぶが特に南東側の底面に顕著である。比較的長期の使用が想定される。

出土遺物は約40点で、このうち土器16点を図示し得た。1は口縁端部を若干欠くが、外反刃状の断面形を呈すと思われる。口縁部は斜位の刻み目付き隆起線で区画され、内部に弧状の集合沈線と上下対向させたモチーフを描出し、空白部に刺突文を充填する。横位の隆起線から口縁端部に向かって縦位の隆起線が付され、区画帯は分割されると思われる。胴部以下にはLR・RLを用いた羽状縄文が構成される。2～8は各種の縄文が施されるもので、2～7には羽状縄文が構成される。2は折返し口縁で、端部上と胴部にRL、口縁端部にLRが施して構成する。折返しの段には横位の刺突列が付けられる。3は胴部が口縁部に向かってやや開くが、以下ではほぼ直立した後、底部に向かって屈曲する器形を呈す。器面の剥落が進んだか所が多いが、ほぼ等間隔でRL・LRを用いて多段に構成される。現存部の推定最大径26.4cmを測る。4はL・Rを用いて構成する。5は0段多条RLと通常のLRを用いて構成する。前者の開いた端には他の細い糸を以て縛り留めた原体末端線が認められる。6・7はLR・RLを用いて多段に構成すると思われる。8はLRが施される。9～11は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施されるもの。9では上部にLが施され、以下の背圧痕は横位に密接して施する11は短く扇形を呈する圧痕形状から殻頂部を多用したと思われる。12は底部で器表下端までLが施され、外底面には放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施される。以上は第2群1類花積下層式に比定される。

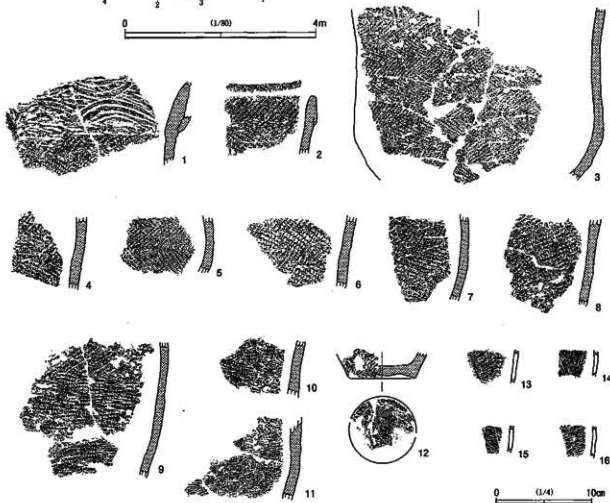
13～16は器厚3～4mmと薄手の作りで、表裏とも指頭による凹凸が著しい。13は施工具を確定し得ないが、構畫を伴う圧痕が押し引き手法により施される。また、爪の先状の短沈線も認められる。14以降の色調は暗褐色だが、本例は薄茶色で胎土に砂粒を少量含む。14～16は細い半截竹管による平行沈線を用いて文様を描出するもので、16では格子目文となっている。以上は第2群4類木鳥式で、花積下層式に伴う東海系の土器である。以上の内容から遺構の帰属時期は花積下層期としたい。他に遺構一括の石罫6点(第121図52・53・56～59・61)を図示した。



ピットの深さ

P 1 - 61cm	P 9 - 40cm	P 17 - 45cm
P 2 - 56cm	P 10 - 49cm	P 18 - 57cm
P 3 - 71cm	P 11 - 39cm	P 19 - 55cm
P 4 - 36cm	P 12 - 44cm	P 20 - 25cm
P 5 - 41cm	P 13 - 70cm	P 21 - 57cm
P 6 - 74cm	P 14 - 38cm	P 22 - 87cm
P 7 - 43cm	P 15 - 69cm	P 23 - 63cm
P 8 - 66cm	P 16 - 41cm	

- 1 黒褐色土 (含ローム状)
- 2 黒褐色土 (含ローム・ブロッケ少)
- 3 黒褐色土 (含ローム状・粘土粒少)
- 4 暗褐色土 (含ローム状)
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土 (含ローム粒少)
- 7 暗褐色土 (含ローム状・粘土粒少)



第100図 SI040

SI041～043・047（第85・101・102図、図版7）

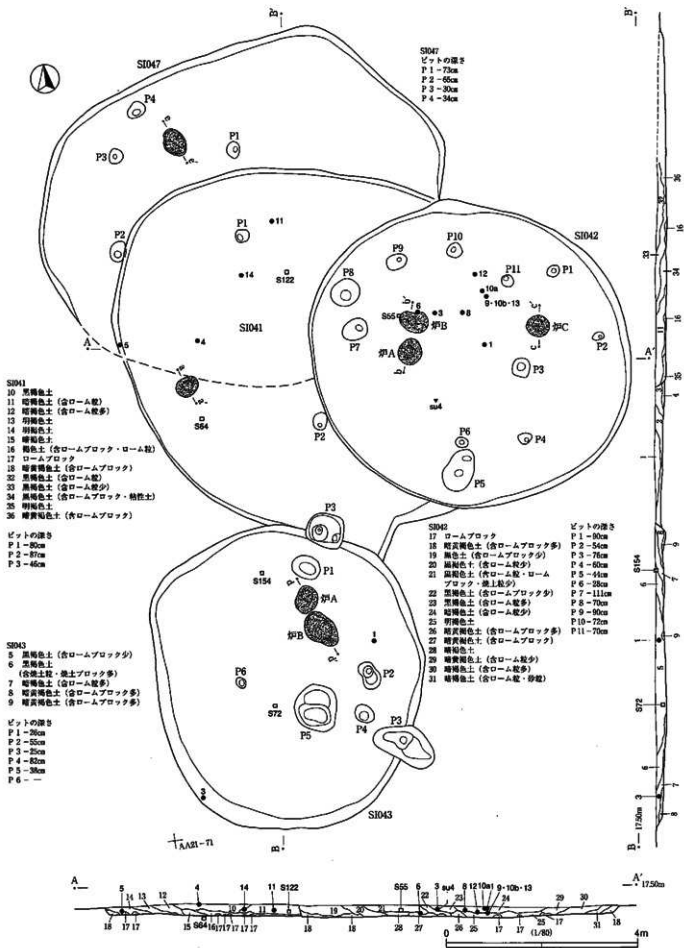
SI041はAA21-41区付近に位置する。本住居跡を含め4軒の住居跡の重複である。北側はSI047と、南側はSI043と、東側はSI042とそれぞれ重複し、調査記録では本住居跡が古いとされる。現存部の最大範囲で7.84×7.68mを測る。周辺の遺構に切られているため形状・規模は明確ではないが、比較的大形の住居跡になろう。確認面からの深さは0.16mと比較的浅い。ピットは現存部で3本のみの検出で、柱穴の可能性のあるものはP3を除いた2本であろう。P3は2本の重複で柱の抜き取り後に上面が広がったのであれば、可能性は残るかもしれない。床面からの深さはP3が0.46m、他は0.8m以上と総じて深い。炉は床面中央より西壁側に偏在して設けられており、規模は0.52×0.4mを測る。上面の焼土分布は盛り上がるような形状で全面に亘っており、中央で厚さ0.08mになるが底面の被熱痕跡は顕著ではない。

SI042はAA21-42区付近に位置する。西側がSI041と重複するが、本住居跡が新しい。6.88×6.64mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。炉は作り替えのためか3か所検出されている。いずれも住居の中央付近には設けられず、西側に寄った位置に炉A・B、東側に寄った位置に炉Cが設けられている。炉Aは規模0.52×0.48m、深さ0.2mを測る。上面での焼土分布は疎密があり、以下の堆積土も地山の可能性もあることから焼面的な構造であるかもしれない。炉Bは規模0.64×0.46m、深さ0.24mを測る。上面での焼土分布はほぼ全面に亘るが、以下の堆積土の状況は炉Aと同様であるので同じく焼面的な構造の可能性はある。炉Cは規模0.56×0.52m、深さ0.22mを測る。上面での焼土分布はほぼ全面に亘るが、以下の堆積土の状況は他と同様であるので同じく焼面的な構造の可能性はある。柱穴と思われるピットは11本検出されており、うち8本が3か所の炉を取り囲むような配置である。床面からの深さはP6が0.28m、P7が1.11mと他と異なるが、他は0.44～0.9mの範囲に収束する。

SI043はAA21-61区付近に位置し、北側の一部がSI041と重複関係にあるが、調査記録から本住居跡の方が古いとされている。6.56×5.76mのやや不整な楕円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。炉は作り替えのためか近接して2か所検出されている。住居の中央付近には設けられず、北東側に寄った位置に設けられている。炉Aは規模0.58×0.5m、深さ0.08mを測る。上面での焼土分布は疎らながらほぼ全面に亘っているが、底面の被熱痕跡はあまり認められない。炉Bは規模0.88×0.58m、深さ0.08mを測る。上面、底面の状態は炉Aとほぼ同様である。ピットは6本検出されているが、柱穴の可能性のあるものはP3を除いた5本であろう。P3は柱の抜き取り後に上面が広がったのであれば、可能性は残るかもしれない。深さの記録がないP6を除き、0.25～0.82mの範囲でばらつきがあり、全体的には東側に片寄った配置である。

SI047はAA21-31区付近に位置する。南側約1/2がSI041と重複しているが、平面的には新旧関係は判断されておらず、土層断面の調査記録から本住居跡の方が新しいとされている。北東側はSI042と重複しているが、本住居跡の方が古いとされる。推定規模8.88×7.6mのやや不整の楕円形を呈すと思われる。確認面からの深さはSI041と同様で0.16mと比較的浅い。柱穴と思われるピットは現存部で4本のみの検出で、床面からの深さは0.3m台と0.7m前後に分かれている。炉は床面中央より北壁側に偏在して設けられており、規模は0.64×0.48m、深さ0.08mを測る。上面の焼土分布は疎らながら全面に亘っているものの、底面の被熱痕跡は顕著ではない。





第101図 SI041～SI043・SI047 (1)

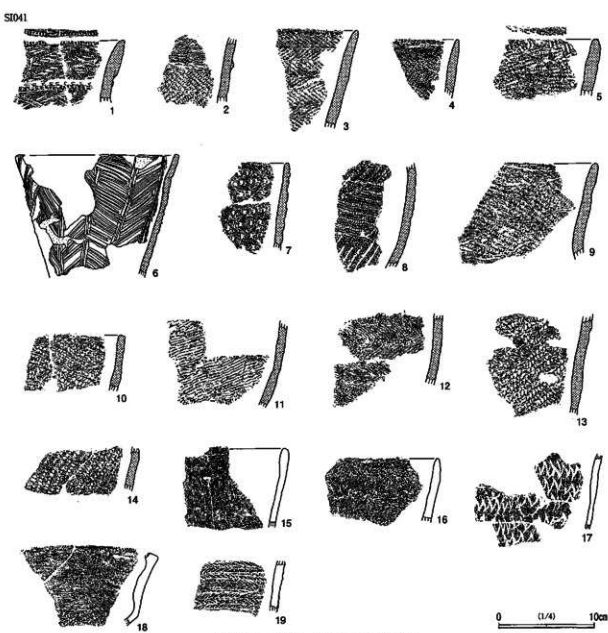
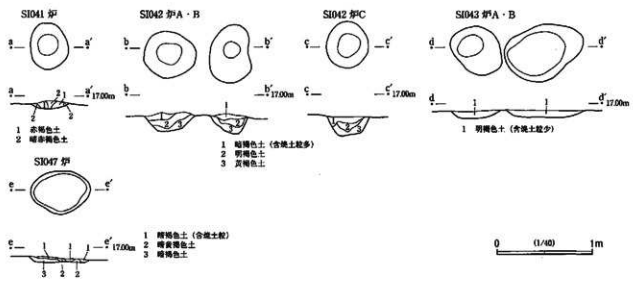
#### SI041出土遺物（第102図、図版27・49・50）

遺物の出土は約40点と少ないが、このうち土器19点を図示し得た。1は口縁端部に刻み目が付され、口縁部下端の刻み目付き隆起線と区画帯を形成する。区画内にはR・L・Rを互い違いに組とした熱糸側面圧痕文により鋸歯状+弧状付加の主幹文様を描出し、刺切文を点状文様に充填する。下端隆起線以下にも同様の熱糸側面圧痕文と刺切文が施される。2は口縁端部を欠くが、下端の断面三角形の隆起線と区画帯が形成されよう。区画内には1と同じ組み方をした熱糸側面圧痕文が格子目状に施される。胴部以下にはRL・LRを用いた羽状縄文が構成される。RLの開いた端には結節が作られたと思われ、隆起線側面に看取される。3・4はRL・LRを用いた羽状縄文が比較的幅狭な単位で多段に構成される。5は口縁部端部上と端部以下に放射肋を有す貝殻による背圧痕文が斜位に連続施文され、擬似縄文的である。以上は第2群1類花積下層式に比定される。

6・7は半載竹管を施文具として用いたもの。6は口縁端部から内側を用いた平行沈線と、部分的には外側を用いた沈線により葉脈文が描出される。推定口径16.3cmを測る比較的小形の土器である。7は口縁端部から先端に抉りを入れた半載竹管内側による横位列点状の刺突文を多段に施す。8~14は各種の縄文が施されるものである。8は軸の縄LRに附加条Rを、軸の縄RLに附加条Lをそれぞれ同方向に結げた附加条第1種で、羽状縄文が構成される。9・10は口縁端部からRLが施される。9は0段多条である。11はLを施すが、施文単位が比較的幅広である。12は原体が細いRL・LRを用いて羽状縄文が構成されるが、上2段は末端環状と思われる。13・14はLRが施される。繊維の他、砂粒も多く含まれる。以上は第2群5類黒浜式に比定される。15は表面をヘラ状工具により平滑に整えた無文だが、輪積修正痕が一部残存している。16は途切れがちではあるが、基本的にはハマグリなど平滑な貝殻腹縁を用いた波状貝殻文が施されると思われる。17はハマグリなど平滑な貝殻腹縁を用いた波状貝殻文が密に施される。以上は第2群7類浮島式に比定される。18は内屈する口縁端部と胴部以下を欠損するが、無文の幅広な口縁部を有す鉢形土器と思われる。胴部以下にはLRが施される。19は地文RL上に斜位の刻み目付きの浮線文が巡らされるところと思われる。以上は第2群6類踏磯式に比定されるが、19はb式である。15~19は本遺構一括で取り上げていたものを帰属の検討を行わず掲載してしまった。本来は重複するSI042に帰属させるべき内容であろう。以上の内容から複数の土器型式をふくむものの、遺構の帰属時期は黒浜期の可能性があるということにしたい。他に出土位置を記した石鏃1点（第121図64）、打裂石斧1点（第124図122）、石製球状耳飾1点（第132図2）と、遺構一括の石鏃3点（第121図60・62・63）を図示した。

#### SI042出土遺物（第103図、図版27・50）

遺物は約20点少ないが、このうち土器13点を図示し得た。1は折返し口縁で端部にLR、以下にRLを施し羽状縄文を構成する。2は厚みのある内削ぎ状の口縁端部で、LR・RLが施されるが、羽状構成は整然としていない。3はR・Lが施されるが、羽状構成は2と同様である。4は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施されるが、短く扇形を呈する圧痕形状から殻頂部を用いたと考える。以上は第2群1類花積下層式に比定される。5は器厚3mmと薄手の作りで、表裏とも指頭による凹凸が著しい。表面に爪の先状の短沈線に伴うヒダ状文が認められる。薄茶色で胎土に砂粒を微量含む。第2群4類木島式で、花積下層式に伴う東海系の土器である。6はRが施された後に半載竹管による直線的、小波状的な平行沈線が横位に加えられている。7は底部で、器表末端までやや不明瞭だが軸の縄RLに附加条L2本を同方向に結げた附



第102图 SI041~SI043·SI047 (2)

加条第1種と、軸の繩LRに附加条R2本を同方向に絡げた附加条第1種で、羽状縄文を構成。以上は第2群5類黒浜式に比定される。8・9は口縁部に輪積文を多段に残すもので、9の端部上には細い半載竹管内側を用いて斜位の刻み目が連続的に付される。10a・10bは放射肋を有す貝殻腹縁により、波状貝殻文や押し文が施される。11は幅広い区画に三角文を多段に施した間に、半載竹管による斜位の平行沈線を刷毛目状に充填する。12は無文だが、器表に凹凸が残されている。13は胴部上半に口縁部から続くと思われる輪積修正痕が認められ、下半にはヘラ状工具による粗雑な格子目文が施される。残存部最大径24.0cmを測る。以上は第2群7類浮島式で、Ⅱ～Ⅲ式に比定されよう。既述の内容から複数の土器型式をふくむものの、出土位置の記録があるもので最も新しい浮島式を遺構層属時期としたい。他に出土位置を記した土製珠状耳飾1点(第132図4)と、遺構一括の石鏃3点(第121図54、第122図71・77)を図示した。

#### SI043出土遺物(第103図、図版50)

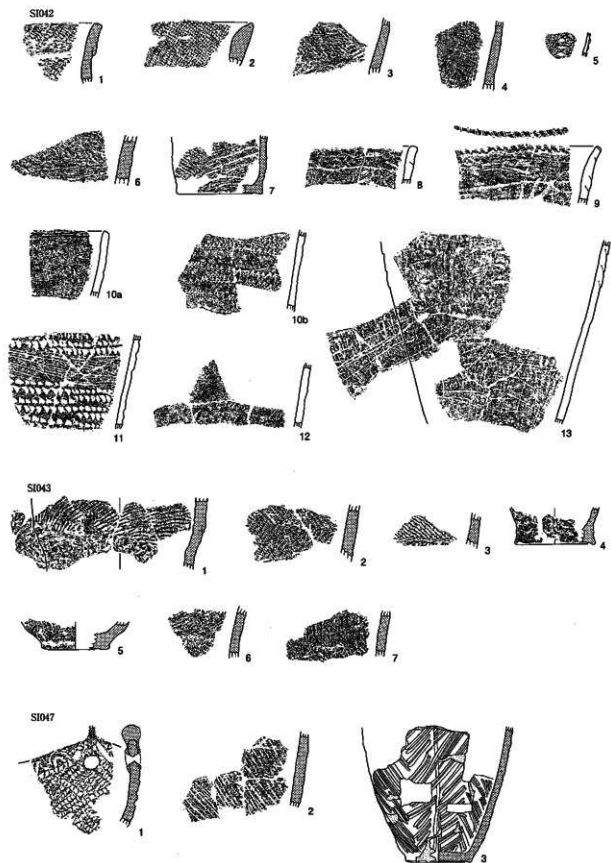
遺物は約30点と少なく、このうち土器7点を図示し得た。1は胴部の接合部を修正した粘土被りが認められ、その上部には縦位のRLが施される。現存部の推定最大径18.4cmを測る。2は0段多条RL・LRを用いた羽状縄文が構成される。3はRが施されるが、開いた端に自縄による結節回転が認められる。4・5は底部で、いずれも外底面周縁に凹凸が残って整っていない。以上は第2群1類花積下層式に比定される。6はLが施される。7はRL施した後、縦位の細沈線がやや疎らに重ねられる。以上は第2群5類黒浜式に比定される。零細な内容なので判断が難しいが、出土位置の記載があるものは花積下層式であるものの、黒浜期の可能性のあるSI041を一部切っているのも、やはり黒浜期の可能性があるとした。他に出土位置を記した石鏃1点(第122図72)、石皿片1点(第128図154)を図示した。

#### SI047出土遺物(第103図、図版28・51)

遺物は約10点と少なく、このうち土器3点を図示し得た。1は波状縁で、波頂部に小突起が付される。下端を結節沈線で区画されたやや幅狭な口縁端部に、半載竹管内側を用いてコンパス文風の波状沈線文が施されており、半載竹管内側に残る内皮の線条痕が看取される。波頂下には円孔が穿たれ、この中軸に結節沈線が樽掛け状のモチーフを描出しようか。地文にはLRとRLが施されるが、羽状構成になるかは現存部では不明である。2は半載竹管を用いた平行沈線を斜位に密接して施す。3は半載竹管内側を用いた平行沈線と、外側を用いた沈線で葉脈文を描出する。現存部の推定最大径15.8cmを測る。重複するSI041より出土した6と同一個体と思われるので、いずれか一方に帰属させるべきだがいずれも遺構一括取り上げのため判断できない。以上は第2群5類黒浜式に比定されが、遺構の層属時期は掲載土器が全て遺構一括であるため、黒浜期の可能性があるという記載に留めたい。

#### SI044(第86・104図、図版7・27・51)

AA21-64区付近に位置する。6.96×4.64mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.28mを測る。炉は作り替えのためか近接して2か所検出されている。住居の中央付近には設けられず、北東側に寄った位置に設けられている。炉Aは規模0.56×0.52m、深さ0.16mを測る。上面での焼土分布は疎らながらほぼ全面に亘っているが、底面の被熱痕跡はあまり認められない。炉Bは規模0.56×0.56m、深さ0.32mを測る。上面、底面の状態は炉Aとほぼ同様である。柱穴と思われるピットは11本検出されており、うち7本が2



第103圖 SI041~SI043・SI047 (3)

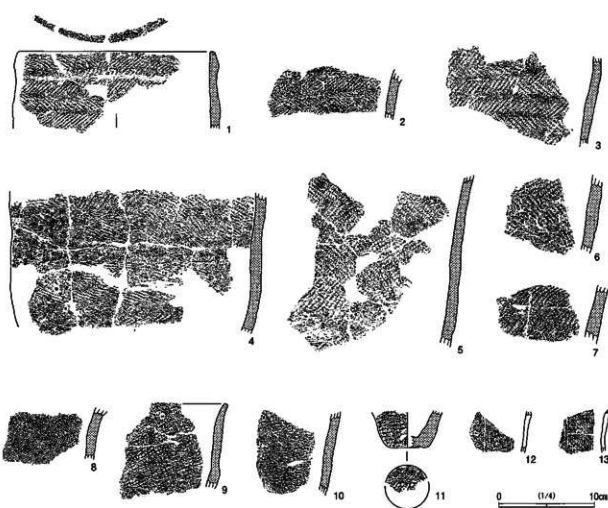
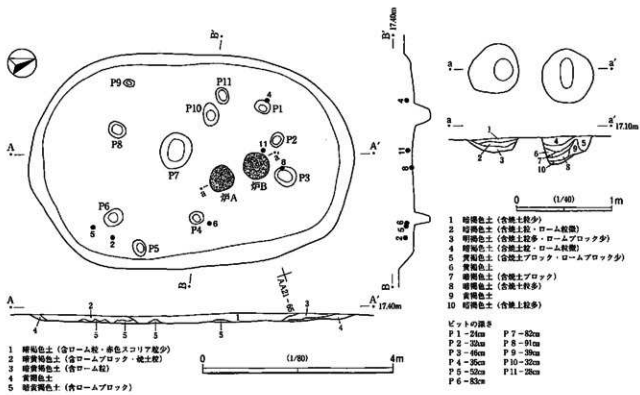
か所の炉を取り囲むような配置である。床面からの深さは0.24~0.91mの範囲にばらつきがある。

出土遺物は約20点と少ないが、このうち土器13点を図示し得た。1~8は各種の縄文が施されるものである。1は口縁端部の接合部を若干厚くしてつなげ、折返し口縁状の段を作出する。端部にRL、端部以下にRL・LRを用いた羽状縄文が構成される。推定口径20.0cmを測る。2は口縁部直下の胴部破片で、上端に僅かながら段が認められる。LR・RLを用いた羽状縄文が幅広く整然と対向している。3は0段多条LRと通常のRLを用いた羽状縄文が多段に構成され、施文帯間を縄文を施した後にナデ消して間隔を空けている部分が多い。4はLR・RLを施すが羽状構成は整然としておらず、不規則にナデが入っていて消されているか所も認められる。推定最大径26.8cmを測る。5はRL・LRを用いた羽状縄文が構成される。LRの一部に開いた端に他の細い糸を以て縛り留めた原体末端線が認められる。下半は被熱による器表の赤化・剥落が顕著である。6はLR・RLを用いた羽状縄文が構成される。7は0段多条LRが施される。8は繊細な撚り紐を用いたLR・RLにより羽状縄文が多段に構成されると思われるが、放射肋を有す貝殻の殻頂部による背圧痕文が中位以下に重ねられている。9・10は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が擬似縄文的に施される。11は底部で、放射肋を有す貝殻による背圧痕文が器表末端までと外底面に施される。以上は第2群1類花積下層式に比定される。12・13は器厚3mmと薄手の作りで、裏裏とも指張による凹凸が著しい。細い半截竹管による平行沈線を用いて文様を描出するもので、縦沈線に斜沈線が重なる。ともに胎土に砂粒を少量含み、色調は12が暗褐色、13は薄茶色である。以上は第2群4類木鳥式で、花積下層式に伴う東海系の土器である。以上の内容から遺構の帰属時期は花積下層期としたい。他に遺構一括の石鉢3点(第122図65・66・73)、磨製石斧(第126図139)を図示した。

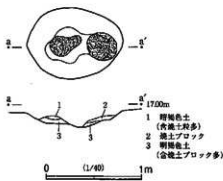
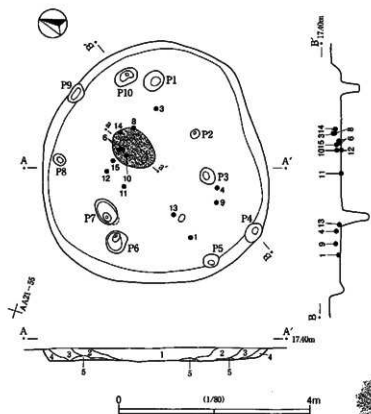
#### SI045 (第86・105図、図版8・27・28・51)

AA21-55区付近に位置する。5.12×4.88mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。中央や北寄りに規模0.96×0.8m、深さ0.16mの炉が設けられる。上面での焼土分布は記録が残っていないため不明のだが、底面2か所に被熱痕跡が顕著な範囲が認められる。柱穴と思われるピットは10本検出されており、床面からの深さは0.21~1.05mの範囲にばらつきがある。近接したものが複数あるので柱の付け替えを想定できようか。

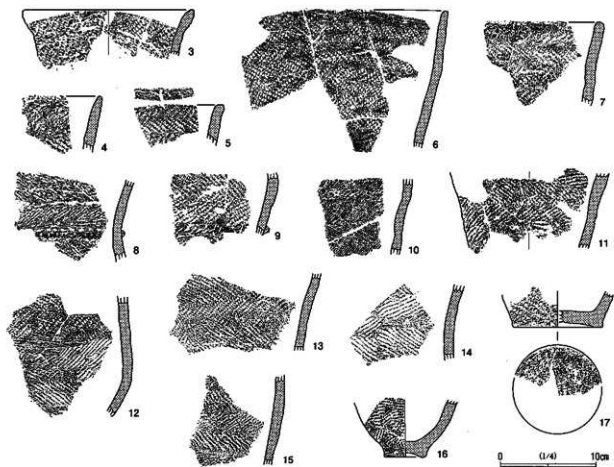
出土遺物は約50点で、このうち土器17点を図示し得た。出土位置を記録したものは床面~覆土下層出土である。1~14は各種の縄文が施されるものである。1・2は折返し口縁である。1は折返し部から0段多条LR・RLを用いた羽状縄文が構成され、胴部以下にも同様の縄文が多段に施されると思われる。2は強く外反する口縁部で、端部は幅狭な折返し部となり、胴部中位も膨らみを持つと思われる。口縁端部上にはRL、端部下にはLR・RLを用いた幅狭等間隔な羽状縄文が多段に構成される。3は口縁端部が折返し口縁状に若干膨らむ。端部下からLRが施され、胎土中に砂粒を多く含む。4はL・Rを用いた羽状縄文が構成される。5は口縁端部に0段多条RLが施され、端部下には0段多条RLと通常のLRを用いた羽状縄文が構成される。6は口縁端部がナデ消され幅狭な無文部となり、以下にはRL・LRを用いた羽状縄文が幅狭な単位で多段に構成されるが、整然とした横帯区画にならない部分もある。7は口縁端部直下から6同様の羽状縄文が構成される。8・9は幅広い口縁部と胴部を区画する刻目付き隆起線がタガ状に巡る。8は隆起線の口縁部側に結節沈線が付随し、口縁部R・Lを用いた羽状縄文が構成されよう。9は隆起線の口縁部側の縁にも短沈線が斜位に連続して施され、口縁部には0段多条RLと通常のLRを用いた羽



第104図 SI044



- ピットの深さ  
 P 1 - 27cm    P 6 - 63cm  
 P 2 - 63cm    P 7 - 112cm  
 P 3 - 33cm    P 8 - 21cm  
 P 4 - 29cm    P 9 - 34cm  
 P 5 - 31cm    P 10 - 59cm
- 1 暗褐色土  
 2 暗褐色土 (含ローム材多)  
 3 暗褐色土  
 4 明褐色土  
 5 ロームブロック



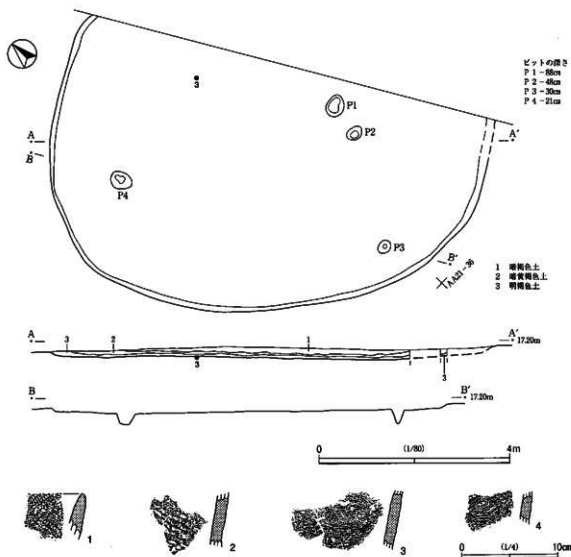
第105図 SI045



状縄文が構成される。10はRL・LRを用いた羽状縄文が構成される他、閉じた端を結束するにたり結び目を付けた結束第2種のLRが施される。11は胴部下半で、RとLを用いた結束第1種により羽状縄文が構成される。推定最大径16.7cmを測る。12は上半にRL・LRを、下半にL・Rを用いた羽状縄文が構成される。13はRL・LRを用いた羽状縄文が、14はL・Rを用いた羽状縄文がそれぞれ構成される。15にはLと放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施されるが、右上がり斜位の貝殻背圧痕文とLが羽状構成をとる。16・17は上げ底の底部である。16はおそらく器高に比して底径が小さく、器表に放射肋を有す貝殻による背圧痕文が密接して施される。17は外底面と器表下端までRLが施される。以上は第2群1類花積下層式に比定され、遺構の帰属時期を決定する内容である。他に遺構一括の石鏃9点(第121図67~69、第122図74~76・78~80)、石鏃未製品1点(第122図103)を図示した。

SI046 (第86・106図、図版51)

AA21-15区付近に位置する。北東側約1/3は生活道路に掛かっているため未調査であるが、かなり大形の住居跡になろう。9.36×5.6mの範囲の部分的な調査で、確認面からの深さは0.16mと浅い。炉はこの



第106図 SI046

範囲からは未検出である。柱穴と思われるピットは4本検出されており、床面からの深さはP1が0.88mの他、0.21～0.48mの範囲に収束する。

出土遺物は約20点で、このうち土器4点を図示し得た。1は口縁端部からLR・RLを用いた羽状縄文が構成される。2はLの縦施文である。3・4は放射肋を有す貝殻による背圧痕の施されるもの。3は左隅の施文が所以外は無文で、床面からの出土である。以上は第2群1類花積下層式に比定されるもので、資料的にはやや零細ではあるが遺構層属時期は該期の可能性があるとしたい。他に遺構一括の石鏃1点を図示した(第122図81)。

#### SI048 (第87・107図、図版8・51)

BB21-32区付近に位置する。北西側約1/4は生活道路に掛かっているため5.12×3.6mの範囲のみを調査したが、現存部では形状から5.2m前後の円形を基調とした住居プランになると推測する。確認面からの深さは概ね0.3mを測り、炉はこの範囲からは未検出である。柱穴の可能性のあるピットは8本検出されている。床面からの深さが0.1～0.19mの範囲の5本と、0.57～0.67mの範囲の3本に分かれているが、前者は柱穴であったとしても補助的なものであろう。

出土遺物は約30点であるが土器細片が多く、土器2点の図示に留まった。1はLを施文。2はR・Lを用いた羽状縄文が構成される。以上は第2群1類花積下層式に比定されるもので、資料的にはやや零細ではあるが遺構層属時期は該期の可能性があるとしたい。他に覆土中層から出土した打製石斧1点を図示した(第124図125)。

#### SI049 (第87・108図、図版51)

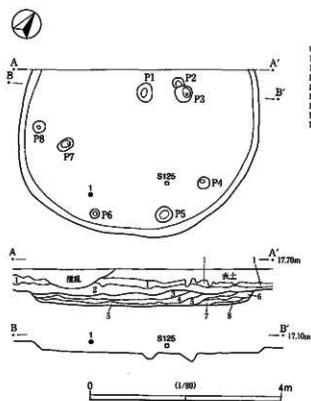
BB21-18区付近に位置する。5.6×4.32mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。炉は設けられていない。ピットは11本検出されている。床面からの深さが0.1m未満のものは柱穴である可能性は極めて薄く、0.1m台のものは柱穴であったとしても補助的なものであろう。0.2～0.53mの範囲に収まるものは柱穴と思われる。

出土遺物は遺構一括の土器細片が数点のみで、土器1点の図示に留まった。1はRLを施文する胎土中に繊維を含む土器で花積下層式～黒浜式の範疇である。住居跡と認定する要件にやや欠け、遺物の内容も零細なため前期の住居跡の可能性があると記載に留めたい。

#### SI050 (第86・109図、図版8・52)

AA21-18区付近に位置し、南東隅はSI051と接する。北東側には倒木痕が重なり本住居跡の約1/3を攪乱しているため、この範囲にあった可能性のある炉や柱穴は検出不能であった。しかしながら、現存部の形状から平面形は5.44×4.52mの隅丸方形を呈すと思われ、確認面からの深さは0.28mを測る。柱穴の可能性のあるピットは3本検出されている。床面からの深さはほぼ均一的で0.55～0.62mの範囲にあり、配置も規則的である。

出土遺物は約60点であるが土器細片が多く、土器4点の図示に留まった。1は口縁端部からLR・RLを用いた羽状縄文が構成される。2はRL・LRを用いた羽状縄文が構成されるが、RLの開いた端に他の細い糸を以て縛り留めた原体末端縁が認められる。3は器表の摩耗が著しいが、L・Rを用いた羽状縄文が構



ピットの深さ

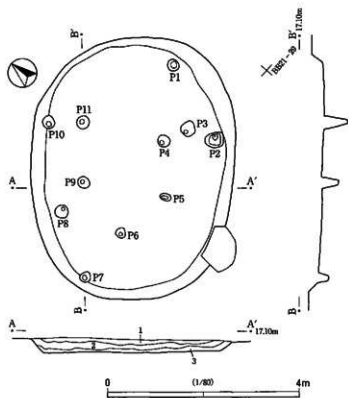
- P 1 - 14cm
- P 2 - 19cm
- P 3 - 18cm
- P 4 - 18cm
- P 5 - 12cm
- P 6 - 10cm
- P 7 - 27cm
- P 8 - 67cm

- 1 磁褐色土 (含新成テフラ: 量多)
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土 (含ローム较多)
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土
- 6 暗褐色土 (含ローム粒)
- 7 暗褐色土 (含ローム粒多)
- 8 暗褐色土 (含ロームブロック多)



0 10cm (1/4)

第107図 SI048



ピットの深さ

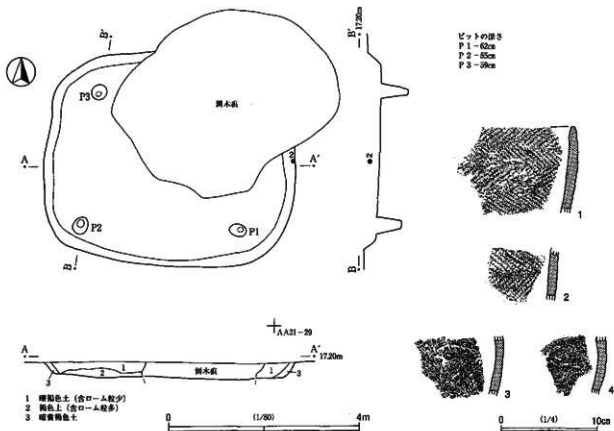
- P 1 - 9cm
- P 2 - 25cm
- P 3 - 20cm
- P 4 - 18cm
- P 5 - 18cm
- P 6 - 6cm
- P 7 - 15cm
- P 8 - 30cm
- P 9 - 25cm
- P 10 - 27cm
- P 11 - 53cm

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 (含ロームブロック多)



0 10cm (1/4)

第108図 SI049



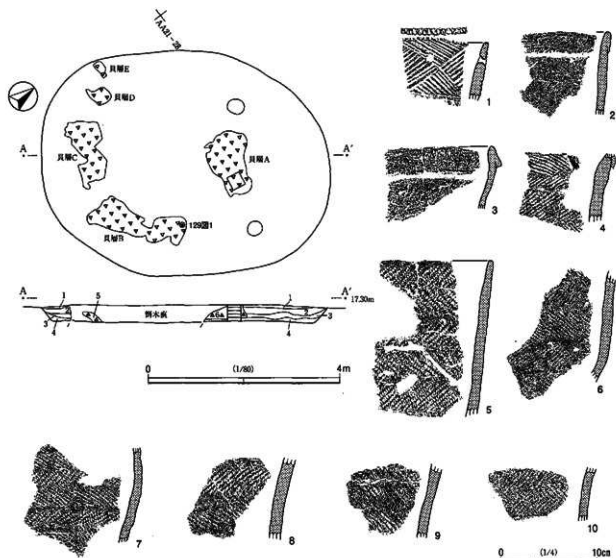
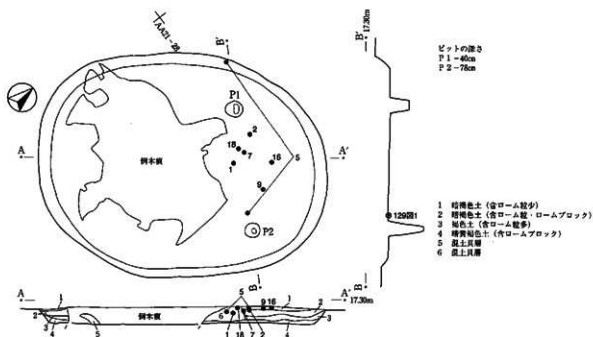
第109図 SI050

成されよう。4は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が斜位に施され、擬似縄文的である。以上は第2群1類花積下層式に比定されるもので、やや零細な内容であるが遺構帰属時期は前期の可能性があったし。

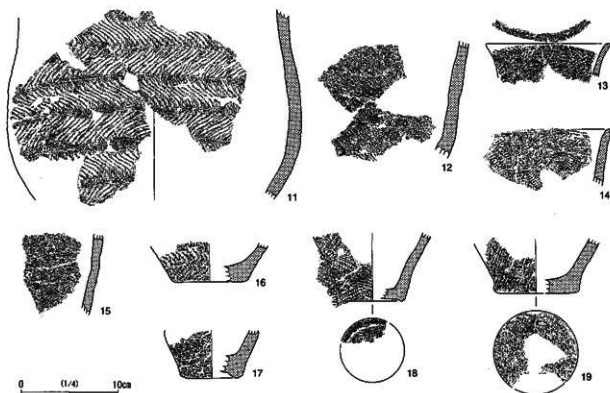
#### SI051 (第86・110・111図、図版8・28・52)

AA21-28区付近に位置し、北隣はSI050と接する。6.16×4.8mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.32mを測る。床面中央から北西側の広い範囲で確認面から床面下に及ぶ倒木痕が重なり、本住居跡の約1/3強を攪乱しているため、この範囲にあった可能性のある炉や柱穴は検出不能であった。柱穴の可能性のあるピットは2本検出されている。床面からの深さはP1が0.4m、P2が0.78mと柱穴として機能できうる深さで、配置もほぼ規則的と考える。また、倒木痕に攪乱されてA-Eの5か所の小ブロックに分かれた貝層が検出された。残存部から判断すると、床面直上から確認面までに及ぶ不整形ながら約4.2×3.4mの範囲で一つに繋がった貝層に復元されると思われる。貝サンプルは、Aとした最も遺存状況の良い小ブロックでコラムサンプルを採取している。サンプルサイズは30×30cmで厚さ5cmを単位として6カット、最下層は5cm未満で1カットというように、合計7カット採取している。

遺物は約350点以上出土しているものの、土器19点の図示に留まった。1は口縁端部に刻み目が付され、以下にやや幅広い文様帯が形成されるが、この部分は折返し口縁や段になっておらず平坦である。内部は集合沈線によるモチーフが形成される。多くが上下から三角形の入組む鋸歯状文となるところ、本例は上下・左右から三角形が組み合わせられるものと思われる。補修孔が1か所認められる。2～12は各種の縄文



第110図 S1051 (1)



第111図 SI051 (2)

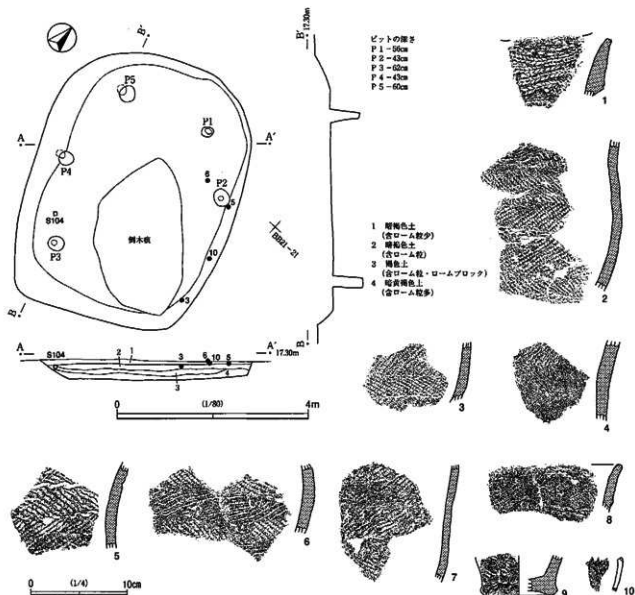
が施されるもの。2は折返し口縁で、口縁端部から幅状な単位でRL・LRを用いた羽状縄文が多段に構成される。3はやや内屈する折返し口縁で、胴部に膨らみを持つ器形となろう。ナデ消されて不明瞭だが、端部にはRL、胴部にはLRが施される。4は端部を欠損するが、内割ぎ状の口縁部となろう。同じく先端を欠損するがやや斜めに隆起線が貼付されると思われる。整然とした帯状にはならないが、RL・LRを用いた羽状縄文が構成される。5は破片の曲率から判断すると、カーブが小さいのでかなり大形の土器になると思われる。口縁端部からRL・LRを用いた羽状縄文が多段に構成される。6は胴部下半で、0段多条LRと通常のRLを用いた羽状縄文が多段に構成される。0段多条LRの開いた端には他の細い条を以て縛り留めた原体末端線が認められる。7はLR・RLを用いた羽状縄文が多段に構成される。8はL・Rを用いた羽状縄文が構成される。9は2本のRの閉じた端を結束するにあたり、結び目を付けた結束第2種と思われる。10は0段多条RL・LRを用いた羽状縄文が多段に構成されると思われる。11は胴下部で膨らむ器形で、R・Lを用いた羽状縄文が多段に構成される。Rはささくれ立つような硬い繊維を燃ったと思われる、器面に深く食い込んだ部分が認められる。Lの開いた端には他の細い条を以て縛り留めた原体末端線が認められる。推定最大径30.7cmを測る。12は胴部下半で、0段3条R・Lを用いた羽状縄文が構成される。Lには12同様に原体末端線が認められる。13～15は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施されるもので、13は口縁端部上にも施文。13・14は端部から斜位に施されて、擬似縄文的効果を与えている。13は推定口径12.0cmを測る小形土器である。16～19は底部である。16は器表下端までRL・LRを用いた羽状縄文が構成される。17～19は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施されるもの。17・18は上げ底で、18には器表の上部にLR・RLを用いた羽状縄文が、下部には羽状縄文を擬似した放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施される。19は外底面にも背圧痕文を施文。以上は第2群1類花積下層式に比定されるもので、遺構場属時

期を決定する内容である。他に貝層内で床面から出土した貝刃1点(第129図1)と、遺構一括の石鍬1点を図示した(第122図93)。

SI052 (第86・112図、図版8・52)

BB21-20区付近、SI051の東側1mに位置する。5.84×4.4mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは0.32mを測る。南東側の範囲で確認面から床面下に及ぶ倒木痕が重なり、本住居跡の約1/4を攪乱しているため、この範囲にあった可能性のある炉や柱穴は検出不能であった。柱穴と思われるピットは5本検出された。床面からの深さは0.43~0.62mの範囲に収束しており、位置も全て壁際寄りで規則的である。

遺物は約230点出土しているものの土器10点の図示に留まった。1・2は口縁部区画にRとLによる異方向1対を組み合わせた燃系側面圧痕文を密に施し、空白部に刺切文を充填する。1は波状縁で段による区画、2は胴部以下との明確な区画線を有さず、RL・LRを用いた羽状縄文帯から胴部となる。3~7は



第112図 SI052

各種の縄文が施されるもの。3は他の条を以て縛り留めた原体末端線が認められるRLと、閉じた端の圧痕が認められるLRで羽状縄文を構成。4はL・Rを用いた羽状縄文が構成される。Lはささくれ立つような硬い繊維を撚ったと思われ、器面に深く食い込んだ部分が認められる。L・Rとも開いた端に他の細い条を以て縛り留めた原体末端線が認められ、器面がやや乾いた段階の施文であるため、条間が疎らである。5はR・Lを用いた羽状縄文が構成されるが、施文帯の境界に結節部のみを用いたS字・Z字状の結節回転が付加される。6はRL・Lを用いた羽状縄文が構成されるが、横帯は整然としていない。7は4単位横位に施したLR以下にRLも認められるので、幅広い羽状縄文が構成される可能性がある。8は折返し口縁状の低平な段を作る端部に放射肋を有す貝殻による背圧痕文が斜位施文され、擬似縄文的である。9は上げ底、周縁が張り出す底部でRが施される。以上は第2群1類花積下層式に比定される。10は器厚3mmと薄手で、口縁端部に角状の小突起が付される。端部から細い半截竹管による平行沈線文を縦位に施す第2群4類木島式で、花積下層式に伴う東海系の土器である。以上の内容から遺構の帰属時期は花積下層期とした。他に遺構一括の石畿未製品1点を図示した(第122図104)。

## 2 土坑

### SK068 (第87・113図)

BB20-55区付近に位置する。1.62×1.2mの楕円形を呈し、中位の平坦面の北東盤際に径0.6mの小ピットが穿たれ、この部分で確認面からの深さ0.51mを測る。遺構一括で胎土に繊維を含む前期初頭～中葉の土器細片数点を出土したが図示し得ないので、遺構の時期は該期の可能性があるという記載に留める。

### SK069 (第85・113・117図、図版12・28・53)

221-58区付近に位置し、花積下層期あるいは黒浜期と考えられるSI032bと重複するが、新旧関係は捉えられていない。1.08×0.96mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.33mを測る。出土遺物は約20点で、このうち2点の土器を図示した。1は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施される第2群1類花積下層式。2は器表端部までLRを施文する底部で、内外の器面調整の状況から第2群5類黒浜式の可能性が高い。以上の零細な内容では遺構の時期決定が困難だが、より新しい黒浜期の可能性がある。他に覆土上面付近から出土した石畿1点を図示した(第122図94)。

### SK070 (第86・113図)

AA21-73区付近に位置する。1.86×1.62mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.15mを測る。底面中央やや北西寄りに、0.36×0.24mと0.24×0.18mの小ピットが2本検出されている。深さはそれぞれ0.21m、0.36mを測る。遺物は出土しておらず時期は不明である。

### SK071 (第86・113図)

AA21-34区付近に位置する。1.44×1.32mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.21mを測る。全体的に西側から東側へ若干傾斜する。遺物は出土しておらず時期は不明である。



SK072 (第86・113図)

AA21-36区付近に位置する。1.44×1.26mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.33mを測る。全体的に西側から東側へ若干傾斜しており、断面形も楕円状である。遺物は出土しておらず時期は不明である。

SK073 (第85・113・117図、図版53)

Z21-88区付近に位置する。黒浜期古段階のSI038と重複関係にあるが、本遺構はSI038のロームブロックを主体とした貼り床の下から検出されたという調査時の観察所見があるので、本遺構の方が古いとされる。規模1.68×1.5mの不整形を呈し、確認面からの深さは0.44mを測り、底面に小ビットが3本穿たれている。遺物は数点出土しているのみで、このうち位置を記録した土器1点を図示した。3は器表が摩耗しており不明瞭であるがLが施され、裏面には放射肋を有す明瞭な貝殻条痕文を横位に施す、いわゆる縄文条痕土器である。第2群1類花積下層式の中段階に比定されよう。本遺構の帰属時期は遺構の重複関係を併せても零細な内容なので、該期の可能性があるという記載に留める。

SK074 (第85・113・117図、図版12・53)

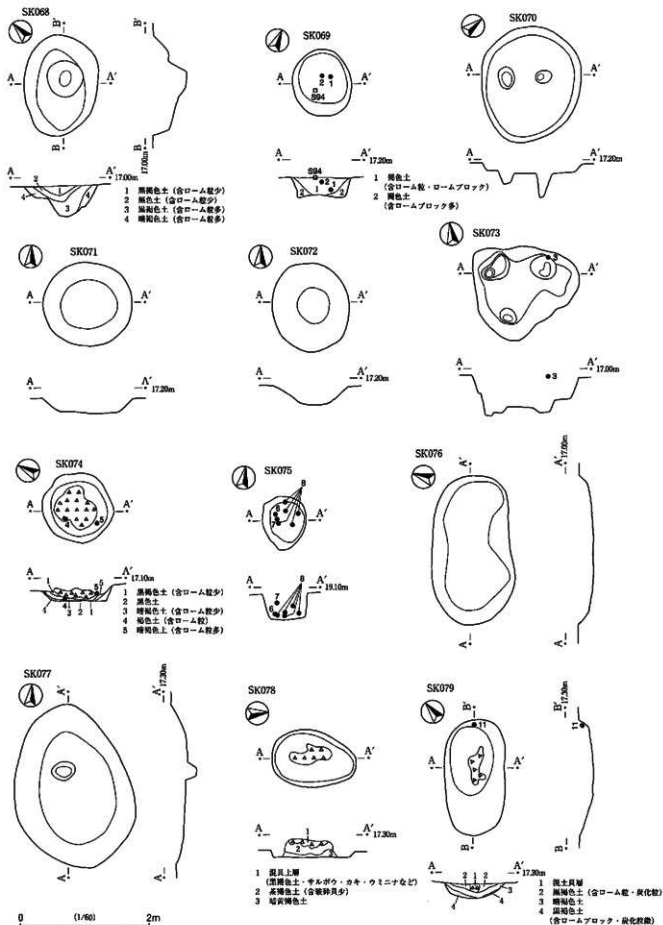
Z21-58区付近、SK069の南側1.5mに位置する。花積下層期のSI039と重複関係にあり、柱穴と思われるP7を切って遺構内貝層を伴う本遺構が構築されているため、新旧は明白である。径1.14mの不整形円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。土坑を若干埋め戻した窪みに、規模0.72×0.66m、厚さが平均0.18mの貝層を形成していた。貝サンプルは貝ブロッカー一括で採取している。出土遺物は約15点出土しているが、図示し得るものは少なく位置を記録した土器2点を図示した。4は器表の荒れが進んでいるため不鮮明で、RとLが施されているものの羽状縄文が構成されるか判断できない。5は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が斜位に施される。以上は第2群1類花積下層式に比定されると思われるが、零細な内容であるため遺構の帰属時期は該期の可能性があるという記載に留める。

SK075 (第85・113・117図、図版12・28・53)

Z21-79区付近に位置する。花積下層期のSI039と重複関係にあるが、調査記録では新旧関係について言及がない。0.87×0.72mのやや不整形な楕円形を呈し、確認面からの深さは0.42mを測る。出土遺物は約30点出土しているが、接合した1個体となったものを含め覆土下層～上層の位置を記録した土器3点を図示した。6は補修孔が認められ、ヘラ状工具の先端で引いた細沈線で葉脈文を抽出する。7は6同様の工具で斜沈線が引かれるが、葉脈文の一部になる可能性がある。8は波状縁で半截竹管を用いた平行沈線で斜沈線、縦位沈線を引くが、粗い格子目文となる部分が多い。胴下半は無文で被熱による赤変が著しい。現存部での推定最大径33.4cmを測る。以上は第2群5類黒浜式に比定され、遺構の帰属時期を決定する内容である。

SK076 (第87・113・117図、図版53)

BB20-74区付近に位置する。2.4×1.38mのやや不整形な長楕円形を呈し、確認面からの深さは0.24mを測る。出土遺物は遺構一括で土器数点と少なくとも1点のみの図示である9はLが施される。特徴に乏しいが繊維は含まれず第2群6類諸磯式など前期後半の可能性があるので、この零細な内容では時期が決定し得ない。



第113図 E地区土坑

#### SK077 (第86・113・117図、図版53)

AA21-59区付近に位置する。2.64×1.89mの卵形を呈し、地形に沿い北側から南側に若干傾斜している。確認面からの深さは0.24mを測る。底面中央から北西側に寄った位置に、規模0.36×0.28m、深さ×0.15mの小ピットが1箇所検出されている。出土遺物は遺構一括で土器数点と少なく、1点のみの図示である。10は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が斜位に施される第2群1類花積下層式であるが、この零細な内容では時期が決定し得ない。

#### SK078 (第86・113図)

AA21-39区付近に位置する。1.32×0.96mの卵形を呈し、確認面からの深さは0.12mを測る。全体的に西側から東側へ若干傾斜する。堆積土層の記録が中途半端なため詳細は不明だが、おそらく覆土上面の窪みに貝層を形成したと考えられる。規模0.66×0.36m、厚さ0.1m前後の小貝層で、貝サンプルは採取されていない。遺物は図示に至らない石器剥片・砕片が各1点出土したのみで、遺構の時期は不明である。

#### SK079 (第87・113・117図、図版12・53)

BB21-51区付近に位置する。1.86×0.99mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.21mを測る。覆土上面に規模0.66×0.36m、厚さが平均0.12mの貝層が形成されているが、土層断面によると一度埋まった覆土を新たに掘り込んで貝ブロックを形成していると考えられる。貝サンプルは貝ブロック一括で採取しているが、今回は分析を行っていない。遺物は花積下層式を主として約60点出土しているが図示し得るものは少なく、位置を記録したものと遺構一括のもの、土器計2点を図示した。11・12はL・Rを用いた羽状縄文が構成されるもので、11は北東側の壁際出土である。以上は第2群1類花積下層式に比定されるものであるが、遺構の状況等から帰属時期は該期の可能性があると記載に留めておく。

### 3 炉穴

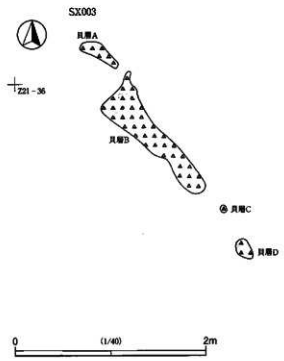
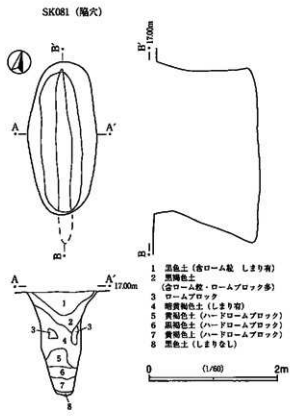
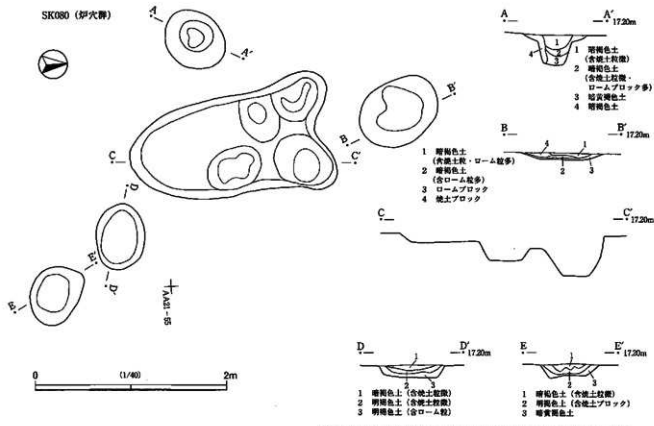
#### SK080 (第86・114・117図、図版53)

BB21-44・54区付近に位置する。覆土中に疎密の差はあるが焼土を含有する土坑で、a～eの1群5基からなる。内容を順に記載すると規模はa：0.72×0.6mの楕円形、b：0.88×0.68mの楕円形、c：2.2×1.3mの不整長楕円形、d：0.72×0.56mの楕円形、e：0.64×0.52mの不整楕円形をそれぞれ呈す。確認面からの深さはa：0.32m、b：0.08m、c：0.1m、d・e：0.14mを測る。遺構の状況から判断すると、炉部が不明瞭であるなど、いわゆる炉穴の要件を満たしていない。また、遺物は覆土一括のみだが、第1群2類の早期後半系痕文ではなく、第2群1類花積下層式が約30点出土しているのも炉穴としなかった理由である。3点を図示し得た。13は口縁端部上と隆起線で区画される端部に、放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施される。14a・bは口縁端部に幅狭な無文帯を作り、以下にRLを施すが施文帯は間隔を空けて作出されている。15は0段多糸LRと反燃LLを交互に施文。遺構の帰属時期は該期の可能性があるとしたい。

### 4 陥穴

#### SK081 (第85・114図、図版12)

AA21-20区付近に位置する。2.48×1.08mの長楕円形を呈し、確認面からの深さは1.88mを測る。遺物



第114図 E地区炉穴・陥穴

第115図 E地区遺構外貝層

は出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に類出する溝型陥穴と考える。

## 5 遺構外貝層

### SX003 (第85・115・117図、図版12・53)

Z21-36・37区付近に位置する。遺構には伴わない面状の貝層で、ローム粒・焼土粒を少量含む黒褐色土中に包含されていた。全体的には長さ3.0m、幅0.3mほどの規模で点列状に貝層を形成しているが、4つのブロックに分かれており、A～Dとした。ブロックBは1.44m×0.52m、厚さ0.2mほどあり、そのほかはごく小さなブロックである。貝サンプルは、ブロックAからDに向けてcut 1～4まで、ブロックごとに全量を一括採取した。ただし、採取量の多いcut 2については、採取した12リットルのうち3リットルのみを分析対象とした。

遺物は遺構一括で約120点が出土している。第1群2類早期後半条痕文4点以外は、第2群1類花積下層式が全体の約2/3で、残りは5類黒浜式であろう。図示し得るものは少なく、土器3点の図示に留まった。26・28はL・Rを用いた羽状縄文が構成される第2群1類花積下層式。27は軸の縄RLに附加条Lを同方向に絡げた附加条第1種で5類黒浜式であろう。以上の考案内容から貝層の時期は決定し得ないが、花積下層式あるいは黒浜式に伴う可能性があるとの記載に留めておく。

## 6 ビット群

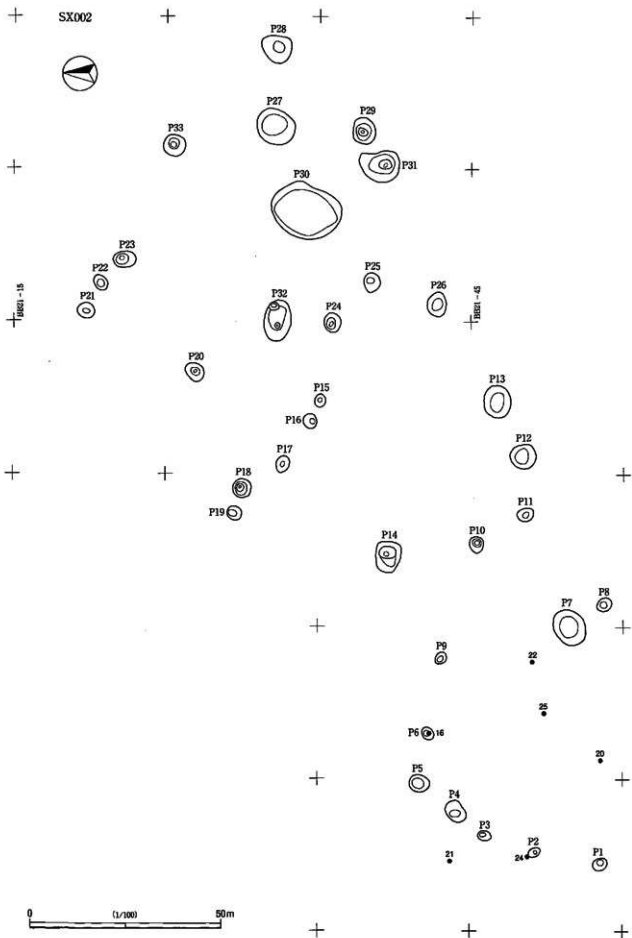
### SX002 (第87・116・117図、図版28・53)

BB21-24区を中心とした約23×15mの範囲に、最小では径0.3mの円形を呈すものから、最大では19×15mの楕円形を呈すものまで小ビットが33基群在していた。確認面からの深さは0.2～0.3mの範囲に収束するものがほとんどである。調査段階で遺構としての落ち込みや壁の立ち上がりか確認されておらず、並びからも住居などの遺構として捉えられなかった。性格は不明と言わざるを得なかったのでSX扱いとし、枝番的にP1～P33の番号を付した。

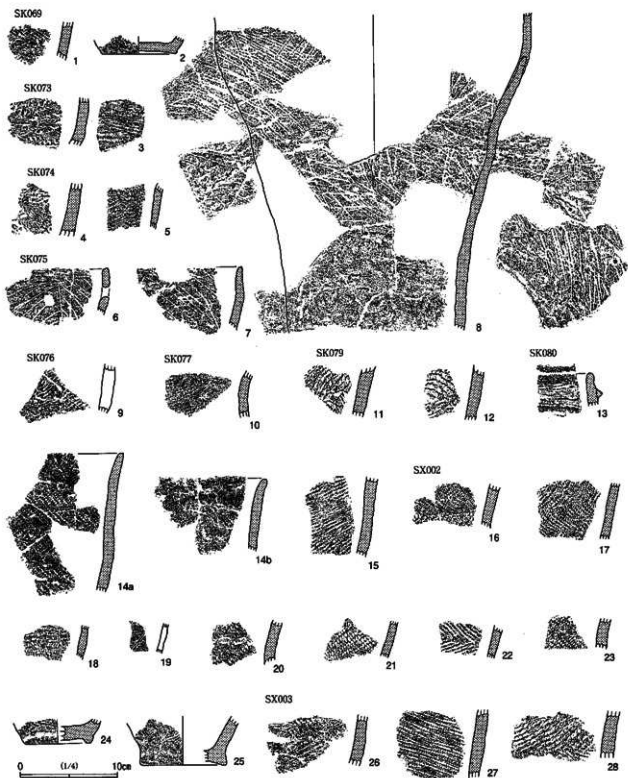
遺物は小ビットから出土したものでなく、この範囲にあったもの全てを含め95点を数えるが、半数以上は図示できなかった石器剥片・碎片類が占めている。ここでは10点の土器を図示した。16・17はLR・RLを用いた羽状縄文が構成されるもので、16はP6中出土である。18・24は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施されるが、24は上げ底の底部になる。20はRが施されるが、開いた端に作った結節が認められる。以上は第2群1類花積下層式に比定される。19は器厚4mmと薄手で、細い半截竹管による平行沈線文を斜格子状に施す。色調は薄茶色で胎土に砂粒を若干含む。第2群4類木島式で、花積下層式に伴う東海系の土器である。22はR・Lを用いた羽状縄文が構成される。21はLR、23はRLが施される。25は底部で、放射肋を有す貝殻による条痕文が短い単位で施される。胎土・内面調整等から判断すると、早期後半の条痕文系にはならない。これらは第2群5類黒浜式に比定される。以上の内容からは遺構の帰属時期を明確にすることはできないので、時期不明とする。他に遺構一括で石鏃1点を図示した(第122図97)。

## 7 遺構外出土土器(第118～120図、図版29・53～55)

遺構出土土器に加え、遺構に伴わない早期前半条痕文系土器から後期中葉加曾利B式土器までの間の諸型式が出土しているので、順に説明しておく。



第116図 E地区ビット群



第117図 E地区土坑・炉穴・ピット群・遺構外貝層出土土器

第1群1類 早期前半燃糸文土器 (第118図1・2)

1・2は別個体だが、ともにRLを斜位に回転させることで燃糸文のような縦位の条を表出する。胎土に細かな砂礫を含む。夏島式に比定されよう。

第1群2類 早期後半条痕文土器 (第118図3・4)

3・4は放射肋を有す貝殻による条痕文が施されるもの。3は表面のみ斜位に施される。4は平底の底部で、表面は縦位、裏面は斜位に施される。以上は有文でないため広義の条痕文土器としておく。

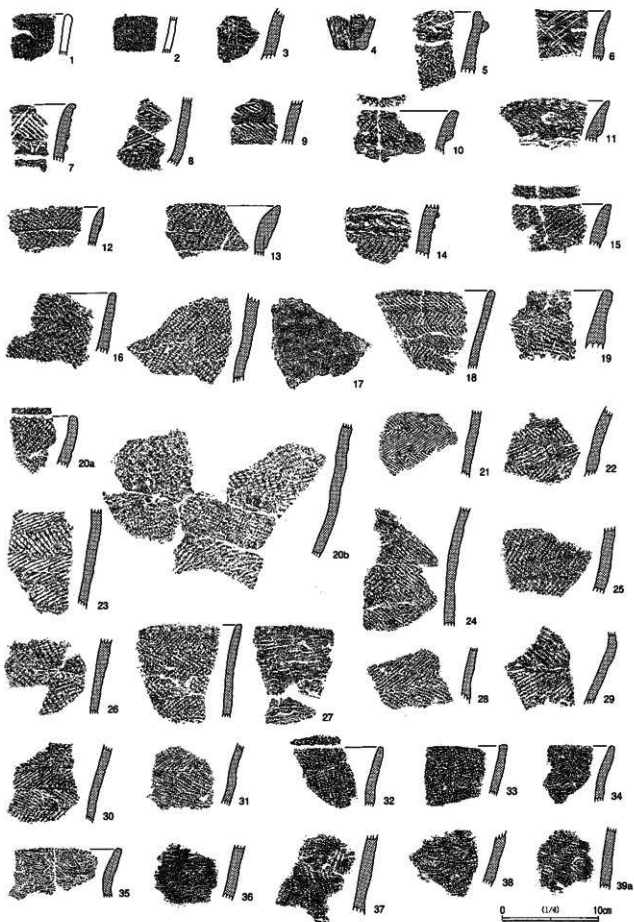
第2群1類 前期初頭花積下層式土器 (第118図5～第119図45・64・70・71)

5～20aは各種の文様が施される口縁部で、端部を欠損するものも含めた。5は貼付隆帯で幅狭な区画帯を作出し、区画内には先端の鋭いへら状工具を用いた沈線で鋸歯状文を描出する。胴部以下には縦位のLを施す。6は段を作り口縁部と胴部を区画する。区画内には半截竹管を用いた平行沈線で格子目文を描出する。7はRが施文される扁平な隆帯と、山形モチーフとなる短沈線で口縁部区画を作出する。区画内には鋸歯状の集合沈線が施される。8・9は口縁部にRとL、異方向2対4本の原体を交互に揃えた側面圧痕文により蕨手状モチーフを描出し、空白部に刺切文を充填する。胴部以下は8ではLR、9ではRLを施す。10～13は折返し口縁である。10は端部に放射肋を有す貝殻による背圧痕文を、端部にRL・LRを施す。11は端部にRLを施文。12は端部、胴部以下ともRL・LRを用いた羽状縄文が構成される。13は端部にLRを施文。14は0段多条LRを施す口縁部と胴部以下を、斜位からの連続刺切文が付随する平行隆起線で区画する。15・16は端部から0段多条RL・LRを用いた羽状縄文が構成される。15は内削ぎの端部上にもRLを施文。17・18は端部からやや幅狭等間隔な単位でRL・LRを用いた羽状縄文が多段に構成される。17は表面に放射肋を有す貝殻による条痕文が施される。19は端部からRを施文。20a・bは端部にLR、端部からRL・LRを用いた羽状縄文が胴部中位まで施され、以下には放射肋を有す貝殻による背圧痕文が擬似縄文的に羽状構成となる。

21～31・64は各種の縄文が施される胴部である。21～23・29はR・Lを用いた羽状縄文が構成される。23には円形竹管による刺切文も認められる。29のLには開いた端に自縄で作ったS字状の結節回転が認められる。24～28・30・31はRL・LRを用いた羽状縄文が構成される。24は施文幅がかなり広いものと思われる。25はやや幅狭等間隔な単位で羽状縄文が構成されるが、部分的に対向しない箇所が認められる。27のLRには開いた端に自縄で作ったZ字状の結節回転が認められ、裏面には条痕文が部分的に施される。30はやや幅狭等間隔な単位で羽状縄文が整然と横帯区画されよう。31のLRには開いた端に他の細い条を以て縛り留めた原体末端縁が認められる。64は口縁端部からL・Rを用いた羽状縄文が構成される。Lの開いた端には自縄で作ったS字状の結節回転が認められる。70・71はLを施すが、開いた端には自縄で作ったS字状の結節回転が認められる。71はささくれ立つような硬い繊維を燃ったと思われる、その部分は器面に深く食い込んでいる。

32～40は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施される口縁部と胴部である。34・35・39bのように単位の小さなものは殻頂部付近を使用したもので、他は相対的に大きめの貝殻を用い、殻頂より腹縁側の部分をできるだけ長く用い、時には長く押捺したり押し引いたりして施文。32～34・37・39a・39b・40に見られるような斜位に連続した施文は、擬似縄文の効果を持つと思われる。41～45は底部である。41は器表





第118图 E地区遗物外出土器(1)

下端までR・Lを用いた羽状縄文が構成される。Rの開いた端には自縄で作ったS字状の結節回転が、閉じた端には先端を少し曲げて回転したため生じた条の末端線の連なりが認められる。外底面にはRが施される。42は器表下端までLが施され、外底面には内容不明だが敷物状の圧痕が認められる。43は器表下端までと外底面にLRが施される。44・45は器表下端まで擬似縄文的に放射肋を有す貝殻による背圧痕文を密に施す。44は上げ底で外底面にも背圧痕文を密に施文する。

#### 第2群4類 前期前半の異系統土器 (第119図46~51)

46~51は器厚3~4mmと薄手の作りで、表裏とも指頭による凹凸が著しい。色調は全て表裏のいずれか一方が薄茶色、他方が暗褐色であり、胎土に雲母末が混じる砂粒が含まれる。46~49・51は細い半截竹管による平行沈線を用いて文様を描出するもので、46・47・51は斜格子状に平行沈線が重ねられる。50は口縁部付近の破片で、端部に指頭押捺と思われる波状の凹凸が認められる。以上は第2群4類木島式で、花積下層式に伴う東海系の土器である。

#### 第2群5類 前期中葉黒浜式土器 (第119図52~63・65~69・73)

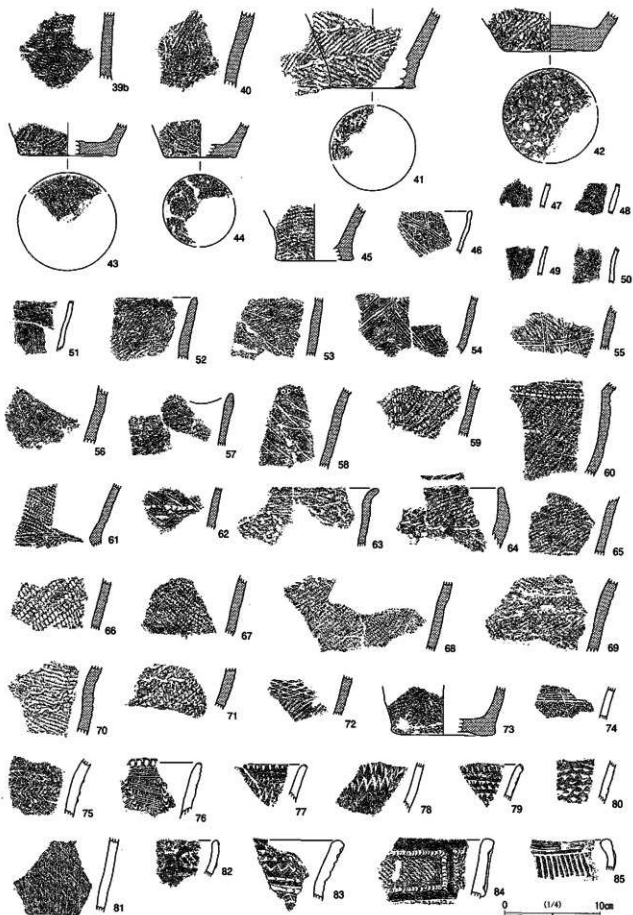
52~62は沈線による文様が施される口縁部と胴部である。52は口縁端部に半截竹管を用いた平行沈線文を縦横に重ね、以下にはLが施される。53も同じ文様が縦位、粗い格子目状に施される。54は半截竹管を用いた平行沈線で葉脈文を描出しよう。55は地文R上に半截竹管を用いた平行沈線を縦横に引き、区画文を作出しよう。56はヘラ状工具の先端を用いた細沈線で格子目文を描出する。57・58は円形竹管刺突文が巡らされるもの。57は波状線に沿って複列施され、以下のLRは斜位施文され横走する。58は以下にヘラ状工具を用いた斜沈線が連続的に施される。59は地文にLRを施し、半截竹管内側を用いた複列の結節沈線を縦位に垂下させる。60は口縁部と胴部の区画として、半截竹管内側を用いた複列の結節沈線が2条以上巡らすものと思われる。61は地文にRLを施し、「くの字」に屈曲する口縁部と胴部の境界に半截竹管内側を用いた平行沈線を巡らすものと思われる。62は結節沈線に区画された2段の波状文が認められるが、上段は半截竹管内側を用いた平行沈線で、下段は外側を用いた1本引き沈線で描出している。63は摩耗が著しい。端部以下の大部分は無文だが、疎らなRも施される。65~69は各種の縄文が施されるもの。65はL、66は0段多条LRL、67はRL、68はLRがそれぞれ施される。69は0段多条RRL・0段多条LRを用いた羽状縄文が構成される。73は上げ底の底部で、器表下端まで放射肋を有す貝殻による背圧痕文が擬似縄文的に施される。

#### 第2群6類 前期後葉諸磯式土器 (第119図74・75)

74は地文にLRを施し、半截竹管を用いた平行沈線を横位に数条巡らせるとと思われる。75は斜位の刻み目を付す浮線文を横位に3条貼付したb式である。いずれも胎土に砂粒または細かな砂礫を含む。

#### 第2群7類 前期後葉浮島式・末葉興津式土器 (第119図76~81)

76は波状線で端部に棒状工具による凹文が刻み目状に付され、半截竹管を用いたD字爪形文と平行沈線で葉脈文を描出するI式。77・78は放射肋のないハマグリ等による波状貝殻文が施されるII~III式。77は端部に棒状工具による凹文が刻み目状に付される。79・80は三角文が施されるIII式。79の端部にはへ



第119图 E地区遗物出土土器(2)

ラ状工具の先端を用いた鋭利で深い刻み目が付される。81は疎らな捺糸文Lが斜位に施される。

第2群8類 前期後半の異系統土器（第119図72）

72は口縁部にLを用いた網目状捺糸文が、以下には0段多条LRが施される。前期中葉黒浜式に併行する大木2a式系、あるいはその影響を受けた黒浜式と考える。

第3群1類 中期初頭五領ヶ台式土器（第119図83）

83は欠損部が多いが端部にRLを施す。端部直下には平行沈線の上下に、円形竹管刺突文を交互に加えた鋸歯状文が作出される。以下、鋸歯状沈線、両側に角押文が付随する低平な隆起線文、鋸歯状沈線が横位に施される。阿玉台式直前に比定されると思われるので本類に含めた。

第3群2類 中期前葉阿玉台式土器（第119図82・第120図86）

82は幅状な楕円区画に単列の角押文が付随し、区画内にも角押文が斜位に充填されるI b式。86は端部に欠損するが口縁部に低平で幅広い隆起線に沈線が付随し、内部を集合沈線で充填する文様帯を形成。

第3群3類 中期前葉勝坂式土器（第119図84・85）

84は口縁部に爪形文が付随する断面カマボコ形の隆起線で、方形区画文を作出する。区画内にはLが縦位に施される。85は口縁部に半蔵竹管内側を強く引いた半隆起線状とも思われる沈線で、区画文・充填文が施される。いずれも本式でも最末の段階に比定されると思われる。

第3群4類 中期後葉加曾利E式土器（第120図87～97）

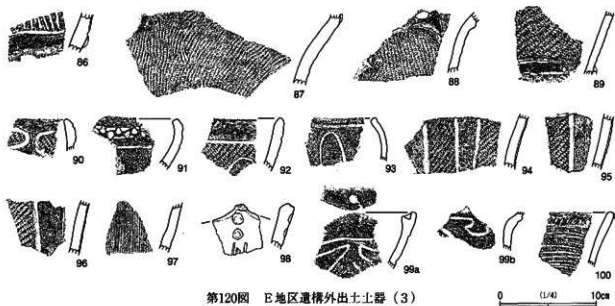
87はRLを斜位に施す。隆起線貼付による口縁部区画文が残存しているので、前半期に比定されよう。88はRLが斜位に施される。隆起線による渦巻文が残存しているので、EⅡ～Ⅲ式あたりに比定されよう。89は口縁部と胴部を両側に沈線が付随する断面カマボコ形隆起線で区画すると思われ、RLを縦位に施す。前半期に比定されよう。90は楕円区画文のみの口縁部文様帯となるEⅡ～Ⅲ式。区画内にRLが施される。91は口縁端部に交互刺突文、地文に捺糸文Lが施される連弧文土器で、EⅡ式に比定されよう。92・93は口縁部無文帯を沈線で作出し、以下には横位連弧線文が描出されよう。地文は92が縦位のRL、93は縦位のLでEⅢ式古段階に比定される。94～96は幅広い磨消懸垂文が垂下するもので、地文は全て縦位のRL。EⅡ～Ⅲ式古段階に比定。97は櫛歯状工具による集合条線が施される。

第4群1類 後期初頭称名寺式土器（第120図98～99b）

98は波状線で波頂下に凹文が並び、以下の意匠文内に列点文を充填しよう。99a・bは波状線で意匠文内に櫛歯状工具による細かな刺突文を密に充填する。以上はⅡ式に比定される。

第4群3類 後期中葉加曾利B式～曾谷式土器（第120図100）

100は口縁端部に刻み目を付す低平な隆起線を貼付し、以下は地文縄文に条線文を加えた曾谷式粗製土器である。



第120図 E地区遺構外出土土器(3)

## 第7節 土器以外の出土遺物

土器については前節までに地区毎に遺構に伴うものと遺構外に分けて説明を加えた。ここでは石器、土器片錘などの土製品、垂飾について遺構出土と遺構外出土のものを一括してそれぞれ記載することとし、遺構出土の遺物は図示したのものについて遺構毎に遺物名と点数を、出土位置の記録のあるものは遺構図に位置を示しておいた。何故なら土器は遺構の帰属時期を説明するにあたり同時に説明する必要があるが、石器は全体の器種や石材別の組成など全体の様相が把握しやすくするためには寧ろ一括して説明した方が良く考えたためであり、垂飾・土製品等は出土量が少ないので遺跡全体の内容が一目でわかる方がより良いと判断したからである。

### 1 石器(第121～128図、図版57～61、第6～17表)

第6表に器種毎の石材組成を示した。また、第7表～第17表には既述した地区毎に器種組成を示しておいたので、詳細は表の記載を参照願いたい。ここでは出土資料について瞥見した内容を以下に記述する。

駒形遺跡第1次～第19次調査で出土した石器と石器製作及び生産活動その他に係る非製品は、総数10,817点、総重量354.66kgである。このうち、点数では礫・礫片が全体の58.9%、次いで剥片・碎片が34.2%となり、これらで全体の93.1%を占め、残りが石器類(石製品を含む)となる。石材は29種類が鑑定されているが、製品・非製品、器種を問わなければ多い順にチャート4,489点(41.5%)、砂岩2,754点(25.5%)、安山岩2,030点(18.8%)となり、これら3種類で全体の85.8%を占める。以下、選択して図化した石器について器種毎に概要を記述しておく。記載に際しては石器整理担当者が作成した図表と観察所見、石材鑑定等を大いに参考とした。なお、剥片・礫石器のいずれにも再生・再利用のものが認められる。

#### (1) 石鏃・石鏃未製品(第121図1～第122図104、図版57～59)

製品133点、未製品39点が出土しているが、このうち製品100点と未製品4点を図示した。製品の石材はチャートが製品104点、未製品32点となり、合わせて全体の78.6%を占める。次いで黒曜石が製品10点、未製品3点で合わせて7.5%となり、千葉県内では縄文前期にチャートが卓越するという従来からの知見

に合致する内容である。黒曜石の産地同定は行っていないが、図示分を肉眼的に観察した結果では信州産と思われる、地域によって多少の差はあるが中期中葉前後になって多量に利用される神津島産のものは含まれていないようである<sup>(1)</sup>。図示した100点を基部形態で分類すると、凸基あるいは平基のもの1点(第122図81)、平基・平基に近いもの4点(第121図2・13・16、第122図73)、不明なもの1点(第121図4)の他は全て凹基である。完形品では最大長31.5mmのもの(第121図12)が最大で、9.9mmのもの(第121図30)が最小であり、いずれも石材はチャートである。

石鏃・石鏃未製品が遺構から出土しているもので時期が確実にわかるものを列挙すると、花積下層式期はSI004・006・007(以上はA地区)・031・035・037・039・040・044・045・051・052(以上はE地区)の12軒、二ツ木式期はSI020・021・026(全てD地区)の3軒、関山式期はSI019(D地区)の1軒、黒浜式期はSI003・009(以上はA地区)・033・034・038(以上はE地区)の5軒とSK075の1基(E地区)、浮島・興津・諸磯式期はSI042(E地区)の1軒が挙げられる。このうちE地区に所在する花積下層式期の住居跡では、SI031(石鏃7点・未製品2点)、SI037(石鏃7点・未製品2点)、SI040(石鏃8点・未製品3点)、SI045(石鏃10点・未製品2点)など、他に比べて石鏃・石鏃未製品を多出するものが目立っている。これらからは石材の詳細な内訳が未明ながら、SI040(剥片343点・碎片409点)を筆頭に剥片・碎片が多量に出土している。石鏃の石材内訳や全体の剥片・碎片の石材内訳が示しているように、頭抜けて多いのがチャートであることから石鏃を代表とする剥片石器の製作跡や廃棄場などが想定される。しかしながら、遺構廃絶と石器類廃棄の時期関係や製品とこれらの接合関係などを検証していないため、可能性の記載だけに止めておく。なお、図示した石鏃・石鏃未製品の詳細は第 表を参照することとし、個々の記載は省略する。

註1 理化学的な分析を実施していないため断定はできないが、池谷信之氏に肉眼的観察を行っていただいた結果による。

### (2) 尖頭器(第122図107~109、図版59)

全体で3点出土しており、全てを図示した。107は先端部を僅かに欠損するが、現存長で55.5mmを測るチャート製の細身な柳葉形尖頭器で、左側縁にグラインディングによる磨耗痕が認められる。花積下層式あるいは黒浜式期の可能性があるSI005より出土。108は最大厚7.9mmと厚みのあるチャート製の左右非対称な尖頭器で、最大長36.2mmを測る。A地区より出土。109は流紋岩製の尖頭器で、基部側約1/2を欠損する。現存長41.1mm、最大厚15.1mmを測る。E地区より出土。

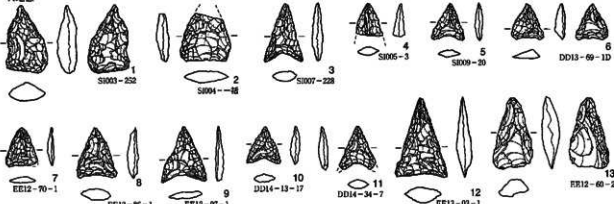
尖頭器は当該地域の縄文時代の石器組成としては極めてまれな器種であるが、北関東・東北地方などでは縄文時代を通じて一定量認められるところから、最も遺構が形成された前期の可能性があるとしておく。

### (3) 楔形石器(第122図105・106、図版59)

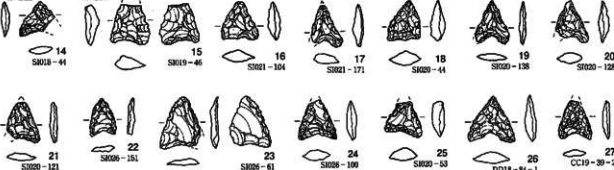
全体で105点出土しているが、石材はチャートが81点と最も多く、次いで黒曜石が11点となる。このうち内容が良好な黒浜式期の住居跡(B地区)から出土した2点を図示した。105は挟み割りされたチャート小円礫の外縁を潰すようにして線状の刃部を作出。腹面は円礫面のままで、最大長31.4mmを測る。SI012より出土。106は挟み割りにより作出された刃部に図示した範囲で使用痕が認められる。チャート製で最大長29.8mmを測る。SI013より出土。石鏃製作との因果関係の有無が今後の課題である。

石器1

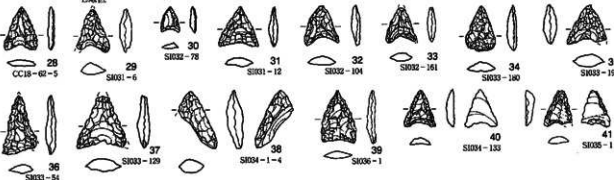
A地区



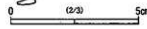
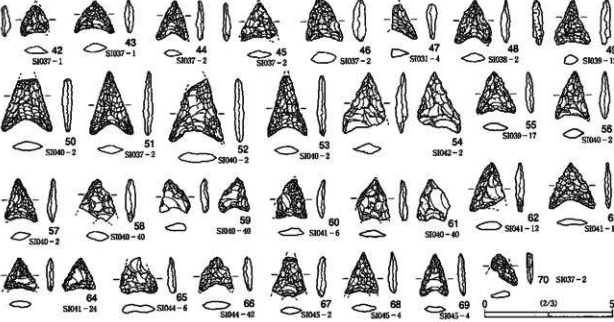
B地区



D地区



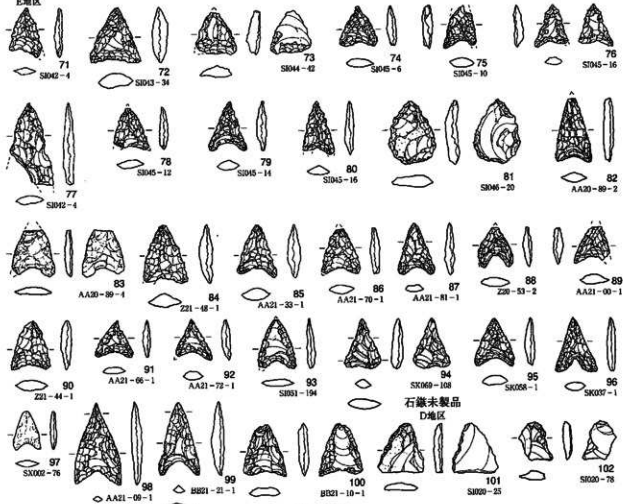
E地区



第121图 石器 (1)

石鏃2

E地区

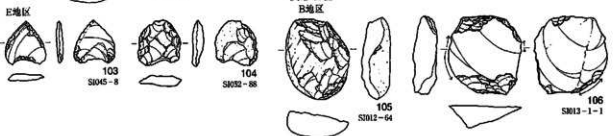


石鏃未製品

D地区

楔形石器

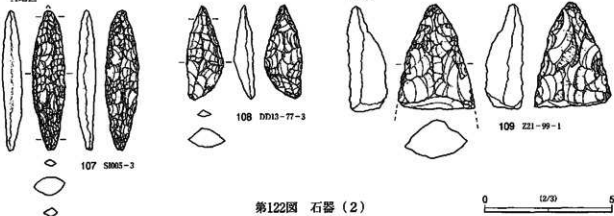
B地区



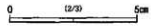
尖頭器

A地区

E地区



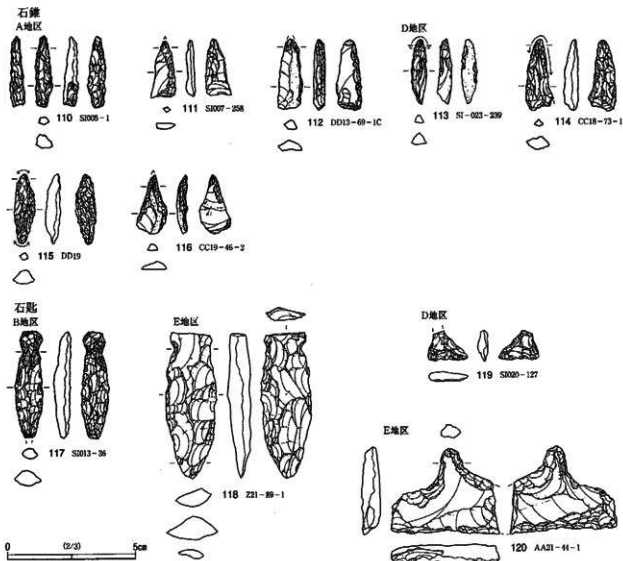
第122图 石器(2)





(4) 石錐 (第123図110~116、図版59)

全体で9点出土しているが、このうち7点を図示した。110は最大長28.6mmを測るチャート製の角柱状石錐で、先端が再生加工されている。花積下層式あるいは黒浜式期の可能性のあるSI005より出土。111は現存長22.6mmを測るチャートの板状剥片素材の石錐で、先端には刺突による衝撃剥離が認められ僅かに欠損する。花積下層式期のSI007より出土。112は現存長27.8mmを測るチャート製の石錐で、素材剥片の側縁を急角度剥離で角柱状に整えている。先端には刺突による衝撃剥離が認められ僅かに欠損する。A地区より出土。113は腹面・背面とも礫面を残すチャート製の石錐で、最大長25.6mmを測る。背後は交互に加撃され角錐状に整えられ、先端は使用により丸み・光沢を帯びる。二ツ木式期のSI023より出土。114は基部を有す最大長28.0mmを測るチャート製の石錐で、先端から基部まで磨耗が認められ、稜が光沢を帯びる。115はメノウを含む玉髄製の石錐で、上下端は使用に伴い丸みを帯びる。器面に油膜状の模様が認められるが、被熱の影響と思われる。116はチャートを素材剥片とし、主要剥離面と礫面をそのまま残してその形状を活かした石錐であるが一方、先端の加工は精緻である。先端部を僅かに欠損し現存長23.2mmを測る。114~116はD地区より出土。



第123図 石器 (3)

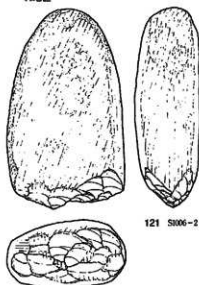
(5) 石匙 (第123図117~120、図版59)

全体で4点出土しており、全てを図示した。117はチャート製のつまみ付き縦型石匙である。先端部を僅かに欠損し、現存長41.2mmを測る。つまみ部を作出する袂りの範囲と他の面では風化の度合いに差があることから、本来、尖頭器であったものを再生加工した可能性がある。黒浜式期の可能性があるSI013より出土。118は折れ面側の両側に袂りを入れ、つまみ部を作出するガラス質黒色安山岩製のつまみ付き縦型石匙で、最大長61.1mmを測る。E地区より出土。119はつまみ部を欠損するが、片側に寄った位置に作出されたと思われる小形の横型石匙である。石材はチャートで、最大幅15.5mmを測る。大きさなどから非実用品の可能性がある。ニツ木式期のSI020より出土。120は扁平な剥片を素材として用いた横型石匙で、片側を欠損する。つまみ部は縁辺を抉るような細かな剥離により作出され、刃部は直線状に整えられる。石材は頁岩で、現存幅42.8mmを測る。E地区より出土。

(6) 打製石斧 (第123図121~第126図134、図版60)

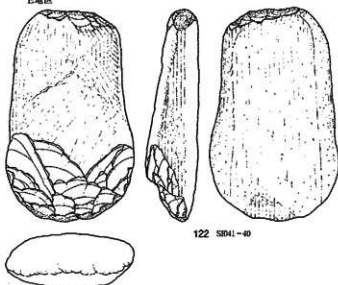
全体で26点出土しているが、第6表に見られるように10種類の石材が確認されており、特定のものに偏らない。このうち14点を図示した。121は側面及び平坦面の一部に敲打による弱い凹みが観察されるが、その荒れた面を磨り整えるように研磨痕が走っている。刃部も同様に剥離痕を研磨して再生しようとして試みているが、その全てを磨りで覆うまでに至っていない。花積下層式期のSI006より出土。122は一見すると蛇紋岩の自然礫を素材に用いたと思われるが、裏面刃部付近に剥離痕を磨り消した整形痕が認められることから磨製石斧を転用したと考える。刃部は大まかな成形剥離を施した後、丁寧に急角度な小剥離により整え、緩やかな弧を描くような円刃を作出する。刃先には使用時における面的な潰れや消耗痕が残るが剥落はなく、硬度の低いものに対して使用された可能性が窺える。上端部には敲打による剥離痕が認められ、最大長112.0mmを測る。黒浜式期の可能性があるSI041より出土。123は刃部からの剥離痕が明らかに調整されているが、刃先部は潰れにより丸みを帯びている。こうした所見からこの石器は礫斧と敲石、両方の複合的機能を有したと考えられる。石材は安山岩で、最大長104.0mmを測る。黒浜式期のSI013より出土。124は緑泥片岩の円柱状素材が縦に割がれたものを石斧として再利用していると思われる。剥離によって作出された刃部には潰れ痕が面的に認められる。最大長137.6mmを測る。E地区より出土。125は発達した片理に沿って縦折れを起こした緑泥片岩を素材とする石斧で、端部は敲打による潰れ痕が顕著である。最大長80.5mmを測る。花積下層式期の可能性があるSI048より出土。126は瑪瑙質を含む玉髄を素材としているが、自然面は黄褐色を呈し、剥離面は玻璃質で煌めく。自然礫の形状を活かし外周加工した最大長72.5mmの石斧であるが、刃部は剥離後に磨いて整えられており、刃先部は使用により生じたと考えられる摩耗が看取される。D地区より出土。127は楕円形のホルンフェルス礫を素材とし、周縁を加撃して成形しており、左側縁には交互剥離が認められる。裏面下部に整形後に加えられた小剥離によって円弧を描く刃部が作出されるが、正面下部は小剥離痕を消すように磨り調整される。最大長78.1mmを測る。黒浜式期のSI038より出土。128はホルンフェルス製で、再加工が繰り返されている。特に裏面右下部は急角度の連続した刃潰し状の加工によって、厚みのある丈夫な刃部が作出されている。基部の稜は使用時の摩耗によるものか丸みがあり、裏面中央部にはターレット状の付着物が認められる。最大長79.3mmを測る。花積下層式期のSI031より出土。129は黄粉状に風化した最大長81.1mmのホルンフェルス製の石斧で、正面右下部は剥離痕を消すように磨り調整される。花積下層式期のSI039より出土。130は扁平な砂岩礫を素材とするが、器

打製石斧I  
A地区



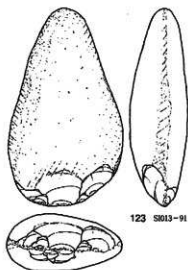
121 SI006-2

E地区



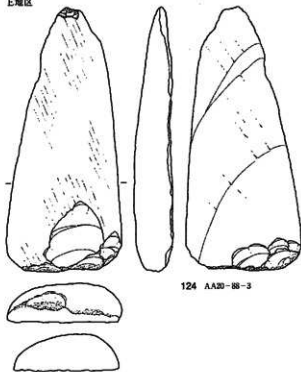
122 SI041-40

B地区

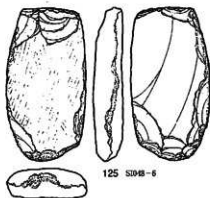


123 SI013-91

E地区

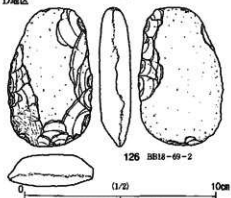


124 AA30-98-3

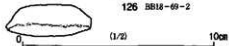


125 SI048-6

D地区

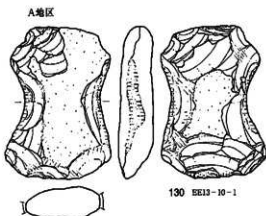
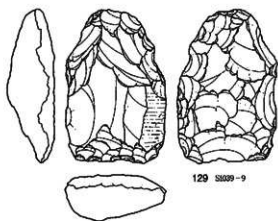
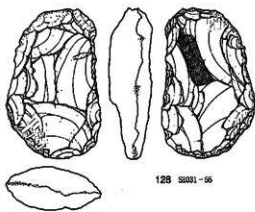
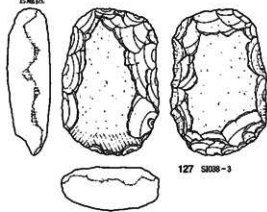


126 SI018-69-2

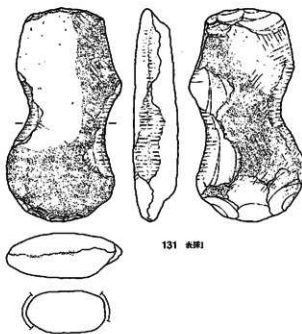


第124图 石器(4)

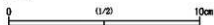
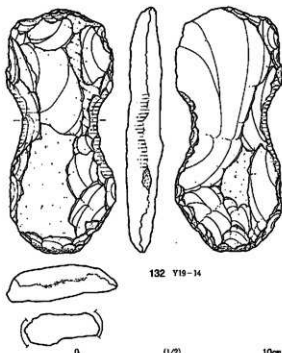
打裂石斧2  
B地区



B地区



C地区



第125图 石器(5)

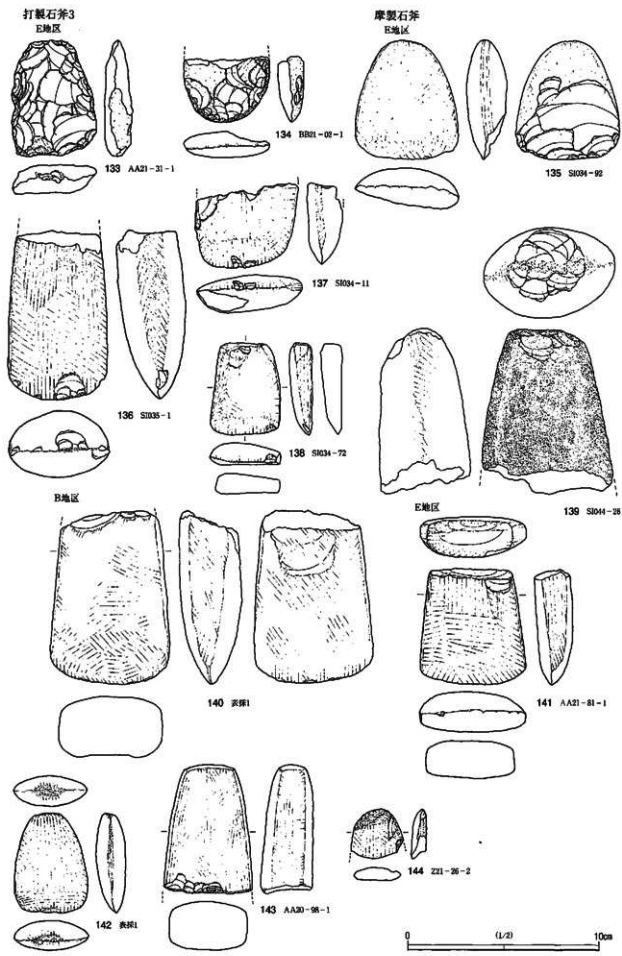
体中央の括れを作出した剥離痕がほぼ平滑になるまで磨り整えている。両刃部は敲打痕、磨痕により丸みを帯びる。最大長79.8mmを測る。A地区より出土。131は砂岩製の左右非対称の分銅形で、最大長112.3mmを測る。全体的に被熱による赤化が認められ、右側縁の抉入部は磨れて面的な様相を呈す。B地区の表面採集資料である。132は緑色凝灰岩を素材とし、側面中央部の抉りは連続した小剥離で作出される。着柄部の剥離は磨れて面的な様相を呈し、最大長128.7mmを測る。C地区より出土。133はホルンフェルス製で、刃部に磨り面が認められるがその磨り部分を剥離痕が切っている。刃部を中心に磨りや剥離が頻繁に繰り返され、補修及び刃部再生が行われたものと考えられる。最大長61.5mmを測る。134は扁平なホルンフェルス礫を素材とし、片面の外周が加工される。刃部以外は欠損し、現存長34.2mmを測る。刃部は敲打による小剥離で整形され、剥離面の稜は磨滅により光沢がある。133・134はE地区より出土。

#### (7) 磨製石斧 (第126図135~144、図版60)

全体で15点出土しているが、第6表に見られるように7種類の石材が確認されており、特定のものに偏らない。このうち10点を図示した。135は小形で扁平な礫を素材とするが、堆積岩が変成しているホルンフェルス製である。全体的に黄粉状に風化しているが、側面の磨痕は灰黒色の帯状を呈す。裏面の大部分は器厚を削ぐように剥離され、鋭利な下稜が作出される。その後小剥離が施され刃部が整えられている。最大長63.0mmを測る。黒浜式期のSI034より出土。136は基部を欠損する砂岩製の蛤刃を呈す石斧で、現存長89.5mmを測る。刃こぼれした刃部を研いで再生させているため刃先の光沢は強く、やや丸みを帯びる。花積下層式期のSI035より出土。137は安山岩が変成しているホルンフェルス製で、蛤刃状を呈す刃部近く以外は欠損する。刃部の欠けは修繕されていないが、左側面の剥離は磨りによる器面修繕と考えられる。現存長43.7mmを測る。黒浜式期のSI034より出土。138は板状で扁平な砂岩礫を素材とした最大長48.3mmの片刃石斧である。横断面でわかるように、角部が磨られて面取りされたような形状となる。刃部の刃こぼれは磨りにより再生されている。黒浜式期のSI034より出土。139は班状組織が発達した安山岩礫を素材とするが、刃部を欠損し現存長86.9mmを測る。断面は楕円形を呈す柱状石斧で、表面は被熱により赤化している。花積下層式期のSI044より出土。140は閃緑岩礫を素材とした両凸刃、直刃あるいは円刃を呈す石斧で、基部を欠損するため現存長91.0mmとなる。裏面中央の敲打痕を磨り消して器面修復を図る。B地区の表面採集資料である。141は緑色凝灰岩礫を素材とした片刃石斧で、基部を欠損するため現存長61.0mmを測る。緩やかな円刃を呈すが、刃部調整により非対称の偏刃になる。基部欠損の後、縁辺や折面は磨かれており、器面は磨りにより面的に区画化される。142は緑色凝灰岩の小礫を素材とした最大長52.1mmの小形磨製石斧である。基部頂部には敲打痕を磨り消して器形を磨き整えたような痕跡が認められる。刃部は縦横に繰り返された研ぎにより若干、面状となっている。表面採集資料である。143は硬砂岩礫を素材とした定角式磨製石斧で、刃部を欠損するため、現存長68.8mmとなる。正面上端部の折れた際の衝撃痕であり、稜は潰れにより僅かに丸みを持つ。144は刃部を欠損するが、緑色凝灰岩の小礫を素材とした現存長26.8mmの小形磨製石斧である。頂部の剥離面に気泡が認められることから被熱の可能性があり、剥落・被熱による器面の荒れに対して磨り調整が加えられるものの最終破損後は未調整である。側面や外周には磨りによる面取りが施されている。141~144はE地区より出土。

#### (8) 磨石類 (第127図145~第128図154、図版60・61)

主として植物食料の加工に用いられた石器を総称して磨石類と呼称する。器種別では磨石50点、敲石69



第126图 石器 (6)

点、凹石7点、台石2点、石皿12点が出土している。第6表に示した器種毎の石材組成によると、磨石は32点が安山岩で9点が砂岩、敲石は51点が砂岩、凹石は5点が安山岩で2点が砂岩、台石は安山岩と砂岩、石皿は8点が安山岩で3点が砂岩というように、他の石材も若干含まれるが最も適した石材として安山岩と砂岩を選択していると思われる。以下、図化したものを説明する。

① 凹石（第127図145・146）

2点を図化した。145は黒く光る角柱状の斑晶が目を引く安山岩を用いたもの。砕けた石皿片の可能性もあるが、砕けた後も凹石として利用したものと思われる。全体的に凹凸が顕著で、現存長70.4mmを測る。黒浜式期のSI028より出土。146は厚みのある安山岩の円礫を用いたもの。一部を欠損しており、現存長97.1mmを測る。平面は磨り及び敲打による凹みが認められ、側面には磨りとともに弱い敲打痕が廻る。花積下層式期のSI037より出土。

② 台石（第127図147）

1点を図化した。147は大きさに比して扁平な多孔質安山岩製で、約1/2程度を欠損するため現存長158.3mmを測る。設置面はほぼ平らで安定している。現存範囲での使用痕跡は不明瞭であるが、折れ位置に掛かって径約6mmの凹み痕が認められることから、成形時に台石として用いられたことは確実である。確認調査で終了したD地区より出土。

③ 石皿（第127図148～第128図154）

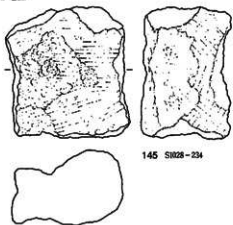
7点を図化した。148は多孔質安山岩製の砕けた石皿片で、現存長130.1mmを測る。皿部縁の立ち上がりとその内側には筋状の擦痕が認められ、使い込まれたものと思われる。底部側には現存部だけでも径25～30mm、深さ15mm程度の凹みが3箇所認められるところから、凹み石の機能も併せ持ったと思われる。A地区より出土。149は両側が凹んだ多孔質安山岩製の石皿片で、現存長120.8mmを測る。皿部の端から縁辺部の立ち上がりに掛けて凹みが認められる。石材の特質や風化などの要因により、成形・調整・使用痕跡は不明である。浮島I・諸磯a式期のSI018より出土。150は大形で扁平な流紋岩礫を用いたもの。平坦面中央部に緩やかな凹みが認められ、磨りによる微光沢を有す。正面下端に剥離痕があるが、磨り消されていない。縁辺を部分的に欠損するが、最大長215.0mmを測る。151は軟質な砂岩製の石皿片で、現存長95.0mmを測る。器面は滑らかに磨り整えられ、微細な凹面中心部及び側縁には弱い敲打痕が廻る。150・151はD地区より出土。152・153は多孔質安山岩製の石皿片である。152には凹みが認められ、現存長71.0mmを測る。黒浜式期のSI033より出土。153は縁辺部に相当。黒浜式期のSI034より出土。154は砂岩製の石皿片で、皿部中央に染み入るような顔料等の赤色付着物が認められる。黒浜式期の可能性があるSI043出土。

(9) 石鏝（第128図155、図版61）

1点のみA地区より出土した。時期は確定し得ない。扁平な硬砂岩の小礫を用い、短軸方向に敲打による剥離によって1対の刻み目を作成。刻み目部分の最大長50.1mmを測り、重さは30.77gである。

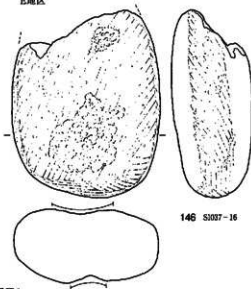
最後に礫・礫片について若干記しておく。冒頭で記載したように全体組成の約60%を占めるわけであるが、遺跡に持ち込まれた多量の礫・礫片の供給先、石器素材と異なるとと思われる利用の在り方など、引き続き行われている調査内容を含め、今後の課題としておく必要がある。因みに石器整理担当者の肉眼による観察所見では、礫・礫片の大部分に被熱痕跡が認められたということである。

凹石  
D地区



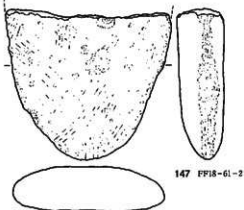
145 S028-234

E地区



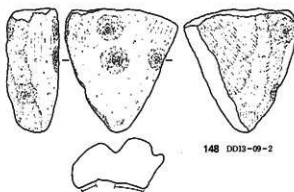
146 S037-16

台石  
D地区



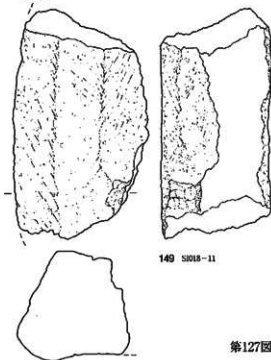
147 FF18-61-2

石皿1  
A地区



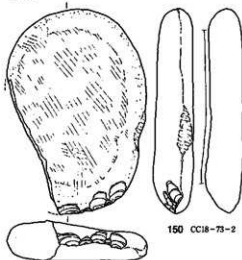
148 D013-09-2

B地区

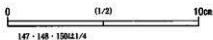


149 S018-11

D地区

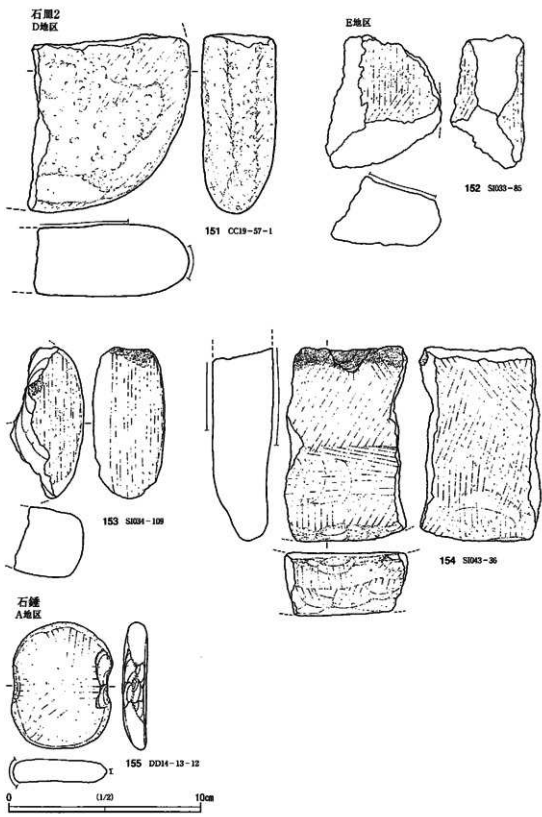


150 CC18-73-2



第127图 石器(7)





第128图 石器(8)

第4表 道標一覽

[No.]	[路線名]	[区道番号]	[種別]	[平面積]	[延長(延長+延長外)]	[幅員]	[平均幅員]	[平均(延長+延長外)×幅員]	[員数]	[大別時期]	[形式]	[位置]	[評価点]	
1	S001	(2) S001	直線部	不整地内	0.82×0.6	0.16	1	有	0.08×0.06	0.12	直線	直線字標	E013-39	7-9
2	S002	(2) S002	直線部	橋内	1.82×0.82	0.16	11	有	0.08×0.08	0	直線	直線字標	E012-80	6-10
3	S003	(2) S003	直線部	橋内内	4.48×0.6	0.4	9	有	0.08×0.02	0.05	●	直線	E012-51-52	6-11
4	S004	(2) S004	直線部	橋内	4.48×0.6	0.12	5	有	A:0.08×0.08 B:0.08×0.08	A:0.08 B:0.02	直線	花道字標	E012-43	6-13
5	S005	(2) S005	直線部	不整地	(3.12)×0.70	0.1	9	無	—	—	直線	直線字標	D043-77	7-14
6	S006	(8) S004	直線部	橋内	4.24×2.2	0.2	2	有	0.1×0.02	0	直線	直線字標	D043-94	7-15
7	S007	(8) S002	直線部	橋内	3.26×0.2	0.01	10	有	0.05×0.05	0.001	直線	直線字標	D014-22	8-16
8	S008	(2) S002	直線部	不整地内	2.44×0.02	0.01	3	有	—	—	直線	直線字標	D014-29	8-17
9	S009	(8) S004	直線部	橋内	4.56×0.05	0.15	3	有	0.06×0.02	0.001	直線	直線字標	CC14-69	8-18
10	S010	(8) S005	直線部	橋内	3.76×0.28	0.14	1	無	—	—	直線	直線字標	D014-61	8-19
11	S011	(8) S006	直線部	橋内	4.0×3.44	0.08	5	有	0.04×0.05	0.02	直線	直線字標	D014-11	8-20
12	S001	(2) S001	土塊	橋内	2.04×1.88	0.26	0	—	—	—	直線	直線字標	D043-16	7-21
13	S002	(2) S002	土塊	橋内	1.5×1.28	0.18	2	—	—	—	直線	直線字標	E013-13	6-21
14	S003	(2) S003	土塊	橋内	1.4×(1.30)	0.21	0	—	—	—	直線	不明	E012-75	6-21
15	S004	(2) S004	土塊	不整地	2.28×2.28	0.36	2	—	—	—	直線	直線字標	D013-69	7-21
16	S005	(8) S003	土塊	橋内	2.76×1.2	0.15	1	—	—	—	直線	直線字標	D014-52	8-21
17	S006	(8) S002	土塊	橋内内	3.36×1.44	0.18	0	—	—	—	直線	不明	D014-42	8-21
18	S007	(8) S003	土塊	不整地内	3.32×3.52	0.41	3	—	—	—	直線	岡山?	D014-50	8-17
19	S008	(2) S001	砂状	不整地内	1.14×0.9	0.12	0	—	—	—	直線	赤松文字?	E012-42	6-22
20	S009	(2) S002	砂状	不整地内	0.88×1.2	0.2	0	—	—	—	直線	赤松文字?	E012-42	6-22
21	S000	(2) S000	砂状	不整地内	1.98×1.28	0.48	0	—	—	—	直線	赤松文字?	E012-52	6-22
22	S001	(2) S001	砂状	橋内	1.02×1.44	0.24	0	—	—	—	直線	赤松文字?	E012-53	6-22
23	S002	(2) S002	砂状	不整地内	1.32×0.96	0.24	1	—	—	—	直線	赤松文字?	E012-76	6-22
24	S003	(2) S006	砂状	不整地内	1.5×0.8	0.56	1	—	—	—	直線	赤松文字?	E012-87	6-22
25	S004	(2) S007	砂状	橋内	0.96×0.78	0.12	0	—	—	—	直線	赤松文字?	E012-15	6-22
26	S005	(2) S006	砂状	橋内	1.68×0.56	0.18	1	—	—	—	直線	赤松文字?	E012-10	6-22
27	S006	(2) S003	陥穴	不整地内	1.92×1.32	0.64	0	—	—	—	直線	赤松文字+ 赤松文字?	D012-99	7-23
28	S007	(2) S004	陥穴	不整地内	3.24×1.82	1.26	0	—	—	—	平直部橋内+ 赤松文字?	不明	E013-14	6-23
29	S008	(2) S007	陥穴	不整地内	3.66×0.8	1.38	0	—	—	—	平直部橋内+ 赤松文字?	不明	E012-43	6-23

[No.]	[路線名]	[区道番号]	[種別]	[平面積]	[延長(延長+延長外)]	[幅員]	[平均幅員]	[平均(延長+延長外)×幅員]	[員数]	[大別時期]	[形式]	[位置]	[評価点]		
30	S012	(1) S004	直線部	橋内	5.16×5.04	0.08	6	有	1.08×0.48	0.12	●	直線	直線	W17-20-30	24-29
31	S013	(1) S002	直線部	橋内	0.80×0.50	0.05	1	有	1.04×0.06	0.06	●	直線	直線	W17-41	28-31
32	S004	(1) S003	直線部	橋内	7.68×5.36	0.32	14	有	A:1.0×0.8 B:0.08×0.6 C:(1.0)×0.7	A:0.08 B:0.02 C:0.02	●	直線	直線	W17-49 W17-48	28-31-30
33	S005	(1) S004	直線部	橋内	0.22×(1.80)	0.24	1	不明	—	—	—	直線	直線	W17-59	28-31
34	S006	(1) S005	直線部	不整地内	3.36×2.2	0.16	8	有	0.05×0.02	0.001	—	直線	直線	W17-37	28-27
35	S017	(1) S006	直線部	不明	(3.20)×(1.04)	0.33	3	不明	—	—	—	直線	直線	W17-85	28-38
36	S018	(1) S007	直線部	不明	(4.80)×(4.8)	0.2	10	有	0.08×0.01	0.04	—	直線	直線	W17-77-87	28-29
37	S019	(1) S002	土塊	不整地内	1.02×0.9	0.04	1	—	—	—	直線	直線	W17-47	28-29	
38	S020	(1) S004	土塊	橋内	0.96×0.64	0.42	0	—	—	—	—	不明	W17-47	28-29	
39	S001	(2) S007	土塊	橋内	0.78×0.72	0.26	0	—	—	—	—	直線	直線	W17-37	28-29
40	S002	(1) S006	土塊	不整地内	(1.74)×1.14	0.18	2	—	—	—	—	不明	W17-37	28-29	
41	S003	(1) S009	土塊	不整地内	1.02×1.02	0.24	0	—	—	—	—	直線	赤松字	W17-08	28-48
42	S004	(1) S010	土塊	橋内	0.84×0.6	0.21	1	—	—	—	—	不明	W17-78	28-48	
43	S005	(1) S001	土塊	橋内	2.28×1.02	0.54	0	—	—	—	—	直線	赤松字	W17-09	28-48
44	S008	(1) S015	土塊	橋内	0.48×0.36	0.33	0	—	—	—	—	不明	W17-56	28-48	
45	S007	(1) S024	土塊	橋内	1.32×1.26	0.12	2	—	—	—	—	不明	W17-87	28-48	
46	S008	(1) S003	土塊	橋内	0.96×0.6	0.6	0	—	—	—	—	直線	橋上内?	W17-47	28-48
47	S009	(1) S001	土塊	不明	(1.62)×(0.84)	0.3	1	—	—	—	—	直線	橋上内?	W17-78	28-48
48	S000	(1) S002	土塊	不明	(1.68)×(1.14)	0.09	1	—	—	—	—	直線	直線	W17-07	28-48
49	S001	(1) S005	陥穴	不整地内	2.88×1.2	1.02	0	—	—	—	—	直線	赤松文字+ 赤松文字?	W17-46	28-48
50	S003	(1) S015	陥穴	不整地内	2.16×0.6	1.26	0	—	—	—	—	平直部橋内+ 赤松文字?	不明	W17-46	28-42

[No.]	[路線名]	[区道番号]	[種別]	[平面積]	[延長(延長+延長外)]	[幅員]	[平均幅員]	[平均(延長+延長外)×幅員]	[員数]	[大別時期]	[形式]	[位置]	[評価点]		
51	S003	(1) S003	土塊	橋内	1.14×1.02	0.24	0	—	—	—	—	不明	Y18-86	46-50	
52	S001	(1) S004	土塊	不整地内	1.8×1.44	0.42	0	—	—	—	—	直線	橋上内?	Y18-05	46-50
53	S005	(1) S005	土塊	不整地内	1.36×1.2	0.67	1	—	—	—	—	直線	直線?	Y18-02	46-50
54	S006	(1) S006	土塊	橋内	1.32×0.6	0.48	0	—	—	—	—	不明	Y18-28	46-50	
55	S007	(1) S006	土塊	不整地内	0.72×0.42	0.34	1	—	—	—	—	不明	Y18-28-38	46-50	
56	S008	(1) S007	土塊	不整地内	(4.2)×1.71	0.42	8	—	—	—	—	直線?	直線?	Y18-68	46-50
57	S009	(1) S006	土塊	不整地内	4.2×1.71	0.45	0	—	—	—	—	直線?	直線?	Y18-56	46-50
58	S010	(1) S010	土塊	橋内	1.88×1.41	0.24	0	—	—	—	—	直線	直線?	Y18-33	46-50
59	S001	(1) S019	土塊	橋内	1.44×1.26	0.26	0	—	—	—	—	直線?	直線?	Y18-78	46-50
60	S002	(1) S020	土塊	不整地内	1.36×1.2	0.66	0	—	—	—	—	直線?	直線?	Y20-09	46-50
61	S005	(1) S002	土塊	橋内	1.14×(1.0)	0.6	0	—	—	—	—	不明	Y20-09	46-50	
62	S004	(3) S001	陥穴	不整地内	0.24×0.54	0.48	0	—	—	—	—	直線	赤松文字+ 赤松文字?	Y18-79	47-52
63	S005	(3) S001	陥穴	不整地内	2.28×0.96	2.28	0	—	—	—	—	不明	Y18-79	47-52	
64	S006	(3) S002	陥穴	不整地内	2.78×1.41	1.26	0	—	—	—	—	平直部橋内+ 赤松文字?	不明	Y18-97	47-52
65	S007	(3) S005	陥穴	不整地内	1.36×1.08	1.68	1	—	—	—	—	直線	赤松文字+ 赤松文字?	Y19-02	48-52
66	S008	(3) S009	陥穴	不整地内	2.52×0.84	1.2	0	—	—	—	—	直線	赤松文字+ 赤松文字?	Y20-43	48-52
67	S009	(3) S001	陥穴	不整地内	2.22×0.66	0.96	0	—	—	—	—	不明	Y18-36	47-53	



第5表 縄文土器観察表

[A地区]

管理番号	遺物No.	分類	型式名	部位	主な文様(縄文は原色)	押印No.	グリッド名
1	SI001-1	第2群1類	花模下層式	口縁部	RL・LR	第9図-1	DD13-39
2	-2	*	*	胴部	LR	-2	*
3	-3	*	*	*	L	-3	*
4	SI002-1	第2群8類	均律式	口縁部	三角文	第10図-1	EE12-80
5	-2	*	*	胴部	有節平行縞文(半軟竹管)	-2	*
6	-3	*	*	胴部	有節平行縞文(半軟竹管)、貝殻縞縞文	-3	*
7	-4	*	*	胴部	波状貝殻文	-4	*
8	-5	*	*	胴部	波状貝殻文	-5	*
9	SI003-1	第2群5類	黒浜式	口縁部	波状文(半軟竹管)	第11図-1	EE12-51・52
10	-2	*	*	胴部	格子目文	-2	*
11	-3	*	*	胴部	沈線文	-3	*
12	-4	*	*	口縁部	押印文、平行沈線文(帯面)	-4	*
13	-5	*	*	胴部	L、平行沈線文	-5	*
14	-6	*	*	口縁部	R	-6	*
15	-7	*	*	口縁部	RL	-7	*
16	-8	*	*	口縁部	L	第12図-8	*
17	-9	*	*	胴部	R	-9	*
18	-10	*	*	胴部	L	-10	*
19	-11	*	*	胴部	RL・LR	-11	*
20	-12	*	*	胴部	RL・LR	-12	*
21	-13	*	*	胴部	L・R	-13	*
22	-14	*	*	口縁部	無文	-14	*
23	-15	*	*	底部	RL・LR	-15	*
24	-16	*	*	底部	L	-16	*
25	-17	*	*	底部	附加糸(輪:不明 附加糸:R)	-17	*
26	SI004-1	第2群1類	花模下層式	胴部	赤黄:貝殻縞縞文	第13図-1	EE12-43
27	-2	*	*	口縁部	縄文赤黄文(R)	-2	*
28	-3	*	*	胴部	縄文赤黄文(RL・LR)	-3	*
29	-4	*	*	胴部	縄文赤黄文(R)	-4	*
30	-5	*	*	胴部	赤:R、赤黄文 黄:赤黄文	-5	*
31	-6	*	*	口縁部	RL・LR	-6	*
32	-7	*	*	口縁部	RL・LR	-7	*
33	-8	*	*	胴部	RL・LR	-8	*
34	-9	*	*	胴部	L	-9	*
35	-10	*	*	胴部	L	-10	*
36	-11	*	*	胴部	赤黄縞縞任直文(R-L)	-11	*
37	-12	*	*	胴部	赤黄縞縞任直文(R-L)、刺切文	-12	*
38	SI005-1	第2群1類	花模下層式	口縁部	L・R、内那竹管文	第14図-1	DD13-77
39	-2	*	*	口縁部	R	-2	*
40	-3	*	*	口縁部	沈線文	-3	*
41	-4	*	*	胴部	無文	-4	*
42	-5	*	*	胴部	LR	-5	*
43	-6	*	*	胴部	RL・LR	-6	*
44	-7	*	*	胴部	RL・LR	-7	*
45	-8	*	*	胴部	貝殻背任直文	-8	*
46	-9	*	*	底部	無文	-9	*
47	SI006-1	第2群1類	花模下層式	口縁部-底部	0段多糸RL・LR、底部 貝殻背任直文	第15図-1	DD13-94
48	-2	*	*	口縁部	RL・LR	-2	*
49	-3	*	*	口縁部	貝殻背任直文	-3	*
50	-4	*	*	底部	貝殻背任直文	-4	*
51	SI007-1	第2群1類	花模下層式	口縁部	赤黄縞縞任直文(R-R)、刺切文	第16図-1	DD14-22
52	-2	*	*	口縁部	RL・LR	-2	*
53	-3	*	*	口縁部	RL・LR	-3	*
54	-4	*	*	口縁部	RL	-4	*
55	-5	*	*	胴部	RL	-5	*
56	-6	*	*	胴部	LR	-6	*
57	-7	*	*	胴部	RL、貝殻背任直文	-7	*
58	-8	*	*	口縁部	貝殻背任直文	-8	*
59	-9	*	*	胴部	貝殻背任直文	-9	*
60	-10	*	*	口縁部	貝殻背任直文	-10	*

題号	遺物No	分類	形式名	部位	主な文様(縄文は草体)	持回No	グリッド名
61	SI008-1	第2群3類	岡山式	口縁部	平行沈線(平織竹管)、縦刺貼付文	第17回-1	DD14-50
62	-2	*	*	口縁部	並+嵌合槽	-2	*
63	-3	*	*	底部	組貫	-3	*
64	-4	*	*	胴部	LR	-4	*
65	SI009-1	第2群5類	煎浜式	口縁部	両面段多糸RL、網面状平行沈線(平織竹管)	第18回-1	CC14-69
66	-2	*	*	胴部	RL、本端段付LR	-2	*
67	-3	*	*	口縁部	RL・LR	-3	*
68	-4	*	*	胴部	0段多糸RL・LR(羽状・変形文)	-4	*
69	-5	*	*	L縁部	無文	-5	*
70	SI010-1	第2群1類	花横下層式	胴部	横線	第19回-1	DD14-61
71	-2	*	*	口縁部	縄文条状文(RL・LR)	-2	*
72	-3	*	*	胴部	RL・LR	-3	*
73	SI011-1	第2群1類	花横下層式	口縁部	無糸網面圧痕文(R-L・R-L:円文・変形文)	第20回-1	DD14-14
74	-2	*	*	口縁部	無糸網面圧痕文(R-L・R-L:円文・変形文)、刺切文	-2	*
75	-3	*	*	口縁部	L・LR	-3	*
76	-4	*	*	口縁部	RL・LR	-4	*
77	SK001-1	第2群1類	花横下層式	胴部	縄文条状文(RL・LR)	第21回-1	DD13-18
78	SK002-2	第1群2類	条状文系	胴部	表裏:条状文	-2	EE13-13
79	-3	*	*	口縁部	平行沈線文	-3	*
80	SK004-4	第2群1類	花横下層式	口縁部	無糸網面圧痕文(L-R-L:変形文) 刺切文(円形竹管)、刺切文	-4	DD13-69
81	-5	*	*	口縁部	0段多糸LR	-5	*
82	SK005-6	第2群1類	花横下層式	胴部	貝殻管圧痕文	-6	DD14-32
83	SK006-7	第2群1類	花横下層式	胴部	RL、縦位縦起線、刺貫列	-7	DD14-42
84	-8	*	*	胴部	RL・LR	-8	*
85	-9	第2群2~3類	二ツホ-岡山式	胴部	RL・LR(結葉帯1種)	-9	*
86	SK007-10	第2群3類	岡山式	口縁部	本端段付RL	-10	DD14-50
87	-11	*	*	胴部	本端段付LR	-11	*
88	SK012-1	第1群2類	条状文系	L縁~底部	表裏:貝殻条状文	第22回-1	EE12-16
89	A地区遺物外-1	第1群1類	以島-煎浜台式	口縁部	無糸文	第24回-1	DD14-15
90	-2	*	*	口縁部	無糸文	-2	EE13-26
91	-3	*	*	口縁部	無糸文	-3	EE13-44
92	-4	*	*	口縁部	無糸文	-4	DD14-50
93	-5	*	*	口縁部	無糸文	-5	DD14-63
94	-6	*	*	口縁部	無糸文	-6	EE13-02
95	-7	*	*	口縁部	無糸文	-7	DD13-59
96	-8	*	*	口縁部	無糸文	-8	EE13-50
97	-9	*	*	胴部	無糸文	-9	EE13-42
98	-10	*	*	胴部	無糸文	-10	EE13-51
99	-11	*	*	胴部	無糸文	-11	DD14-62
100	-12	*	*	胴部	無糸文	-12	CC14-89
101	-13	*	*	口縁部	RL	-13	CC14-89
102	-14	*	*	底部	無文	-14	CC14-89
103	-15	第1群2類	条状文系	口縁部	表裏:貝殻条状文	-15	EE13-50
104	-16	*	*	胴部	表:貝殻条状文、本端沈線 裏:貝殻条状文	-16	EE13-23
105	-17	*	*	胴部	表:貝殻条状文	-17	EE12-59
106	-18	*	*	胴部	表:貝殻条状文	-18	EE13-70
107	-19	*	*	胴部	表裏:貝殻条状文	-19	EE12-43
108	-20	*	*	胴部	表裏:貝殻条状文	-20	EE15-43
109	-21	*	*	胴部	表裏:貝殻条状文	-21	EE13-13
110	-22	*	*	胴部	表裏:貝殻条状文	-22	EE12-43
111	-23	*	*	胴部	表裏:貝殻条状文	-23	EE12-66・69・85
112	-24	*	*	胴部	表:無文 裏:貝殻条状文	-24	EE13-23
113	-25	*	*	底部	表:貝殻条状文	-25	EE12-59
114	-26	*	*	底部	表:貝殻条状文 裏:横線文	-26	EE18-02
115	-27	*	*	底部	表:貝殻条状文 裏:横線文	-27	EE12-58
116	-28	第2群1類	花横下層式	胴部	無糸網面圧痕文(R-L・R-L)、円形刺付文、刺切文	-28	EE13-52
117	-29	*	*	胴部	無糸網面圧痕文(R-L・R-L)、刺切文、RL	-29	EE13-70
118	-30	*	*	胴部	無糸網面圧痕文(R-L・R-L)、刺切文、RL	-30	DD14-04・14
119	-31	*	*	胴部	無糸網面圧痕文(L)、RL・LR	-31	DD13-09
120	-32	*	*	口縁部	縄文条状文(R、L)	-32	EE12-59

登録番号	遺物No	分類	型式名	部位	主な文様(縮文は原形)	押印No	グリッドNo
121	A地区遺物外-33	第2群1類	花巻下組式	口縁部	縄文糸痕文(R・L:変形)	第24図-33	EE12-58・13-22
122	-34	*	*	胴部	縄文糸痕文(RL・LR)	-34	EE12-52
123	-35	*	*	胴部	縄文糸痕文(RL・LR:変形)	-35	EE12-43
124	-36	*	*	胴部	縄文糸痕文(R・L)	-36	EE12-43
125	-37	*	*	胴部	縄文糸痕文(RL・LR)	-37	DD13-06
126	-38	*	*	口縁部	RL・LR(羽状・変形)	第25図-38	EE12-43・86
127	-39	*	*	口縁部	RL・LR	-39	EE12-39・59
128	-40	*	*	胴部	L・R	-40	EE12-58・59
129	-41	*	*	胴部	RL・LR	-41	EE12-53
130	-42	*	*	胴部	RL・LR	-42	EE12-43・44
131	-43	*	*	口縁部	LR	-43	DD13-69
132	-44	*	*	胴部	RL・LR	-44	DD14-14
133	-45	*	*	胴部	貝殻線列突文	-45	EE12-59
134	-46	*	*	胴部	貝殻線列突文	-46	EE12-42
135	-47	*	*	胴部	波状貝殻文	-47	EE12-55
136	-48	*	*	胴部	貝殻線列突文	-48	EE12-59
137	-49	*	*	胴部	貝殻線列突文	-49	ER13-30?
138	-50	第2群2類	二ツ木式(新田野段跡)	口縁部	熱赤面圧痕文(R-L-R-L)、円形竹管刺突文、刺突文	-50	EE12-51
139	-51	*	二ツ木式	胴部	熱赤面圧痕文(R-L)、円形竹管刺突文、刺突文、未確認付(RL・LR)	-51	EE12-60
140	-52	第2群3類	岡山式	胴部	直前融合凸	-52	EE13-91
141	-53	第2群1類	花巻下組式	高部	貝殻線列突文、LR	-53	DD13-77
142	-54	第2群5類	扇浜式	口縁部	比線文	-54	EE12-52
143	-55	*	*	口縁部	L・R	-55	DD13-69
144	-56	*	*	口縁部	L	-56	EE13-92
145	-57	*	*	口縁部	LR	-57	EE12-62
146	-58	*	*	胴部	0段多糸LR	-58	EE13-03
147	-59	*	*	胴部	RL	-59	DD12-78・90
148	-60	*	*	胴部	L	-60	EE13-26
149	-61	*	*	底部	縦位比線	-61	DD13-77
150	-62	第2群8類	大木2a式系	胴部	結節比線文、網目状熱赤文(単軸線糸体第5型)	-62	DD14-13・14
151	-63	第2群6類	網罟式	口縁部	結節比線文、平行比線	第26図-63	DD12-78
152	-64	*	*	胴部	結節比線文(C字爪形文)、熱赤文L	-64	EE12-61
153	-65	第2群8類	大木6式系	胴部	結節比線文(竹管竹管)、扇浜式沈線、直・結節刺突文	-65	DD12-60・78
154	-66	第2群7類	浮島・興津式	胴部	平行比線文(手鏡竹管)	-66	EE13-51・60
155	-67	*	*	胴部	平行比線+刺突、波状貝殻文	-67	EE12-92
156	-68	*	*	口縁部	結節比線文、押引文	-68	EE13-36
157	-69	*	*	口縁部	凹凸文、三角文	-69	DD13-59・69
158	-70	*	*	胴部	結節比線文、波状貝殻文	-70	EE13-51
159	-71	*	*	胴部	波状貝殻文	-71	DD12-78
160	-72	*	*	胴部	熱赤文R	-72	DD13-78
161	-73	*	*	胴部	熱赤文R	-73	EE12-54
162	-74	第3群2類	阿玉台IV式	胴部	断面ハマボコ状隆起線、直	-74	EE12-54
163	-75	*	*	胴部	断面ハマボコ状隆起線、直	-75	EE13-92
164	-76	第3群4類	加曾利E I式	口縁部	光燧線位比線文	-76	EE12-44
165	-77	*	加曾利E II~III式	口縁部	RL	-77	EE13-29
166	-78	第4群2類	瓶之内式	口縁部	円形刺突文・沈線文・結節比線、RL	-78	EE13-19
167	-79	*	*	口縁部	刺突目付隆部、沈線文	-79	EE13-51
168	-80	*	*	口縁部	沈線文(意匠文)	-80	EE13-19
169	-81	*	*	口縁部	沈線文(意匠文)	-81	EE13-41
170	-82	*	*	口縁部	比線文	-82	EE13-60
171	-83	*	*	口縁部	LR、波状比線	-83	DD13-69
172	-84	*	*	胴部	沈線文(意匠文)	-84	EE13-10
173	-85	*	*	胴部	沈線文(意匠文)	-85	DD13-69
174	-86	*	*	胴部	沈線文	-86	EE12-90
175	-87	*	*	口縁部	波状比線(帯曲状)	-87	EE13-00

【B地区】

登録番号	遺物No	分類	型式名	部位	主な文様(縮文は原形)	押印No	グリッドNo
1	SI012-1	第3群5類	扇浜式	胴部	平行比線文(手鏡竹管・扇浜式or格子目文?)	第29図-1	W17-20・30
2	-2	*	*	口縁部	平行比線文(手鏡竹管)、RL	-2	*

管理番号	遺物No	分類	器式名	部位	主な文様(編文は原形)	押加No	グリッド名
3	SI012-3	第2群5類	黒浜式	胴部	丸(羽状)、平行沈線文(半截竹管)	第29組-3	W17-20・30
4	-4	*	*	口縁部	雲形文、コンパス文(半截竹管)	第30組-4	*
5	-5	*	*	胴部	結節沈線文(半截竹管)、丸・LR	-5	*
6	-6	*	*	口縁部	0段多糸丸LR	-6	*
7	-7	*	*	口縁部	平行沈線文(半截竹管)、円形刺文、舟状文、RL	-7	*
8	-8	*	*	口縁部	丸	-8	*
9	SI013-1	第2群5類	黒浜式	口縁部	平行沈線文(半截竹管・雲形文)	第33組-1	W17-41
10	-2	*	*	胴部	平行沈線文(半截竹管・雲形文)	-2	*
11	-3	*	*	胴部	平行沈線文(半截竹管・雲形文)	-3	*
12	-4	*	*	胴部	雲形刺(円形竹管)、RL	-4	*
13	-5	*	*	口縁部	結節沈線文、円形刺文、丸・LR、コンパス文(半截竹管)	-5	*
14	-6	*	*	胴部	コンパス文・平行沈線文(半截竹管) RL、LR	-6	*
15	-7	*	*	胴部	集合沈線(半截竹管?) 附加糸(輪:R 附加糸:R2本、輪:L 附加糸:L2本、附加糸帯2種)	-7	*
16	-8	*	*	胴部	丸・LR	-8	*
17	-9	*	*	胴部	丸	-9	*
18	-10	*	*	口縁部	附加糸(輪:R 附加糸:R、附加糸帯2種)	-10	*
19	-11	*	*	胴部	丸	-11	*
20	-12	*	*	底部	LR	-12	*
21	SI014-1	第2群5類	黒浜式	口縁部	平行沈線・結節沈線(半截竹管・流状形刺文)	第34組-1	V17-49・W17-40
22	-2	*	*	口縁部、底部	平行沈線(半截竹管・格子目文)	-2	*
23	-3	*	*	口縁部・底部	附加糸(輪:LR 附加糸:R 附加糸帯1種)	-3	*
24	-4	*	*	胴部	L	-4	*
25	-5	*	*	口縁部	附加糸(輪:不明 附加糸:雲形刺反摺2段) 雲形?	-5	*
26	-6	*	*	口縁部	結節形刺文?(輪の素材不明 附加の丸・L)	-6	*
27	-7	*	*	口縁部	玉漏摺付R	-7	*
28	-8	*	*	口縁部	結節形刺?	-8	*
29	-9	*	*	口縁部	雲・段合摺(異期) or 組織文?	-9	*
30	-10	*	*	口縁部	附加糸(輪:R 附加糸:R2本、輪:L 附加糸:L2本 附加糸帯1種 羽状)	第35組-10	*
31	-11	*	*	口縁部・底部	附加糸(輪:R 附加糸:L2本、輪:L 附加糸:R2本 附加糸帯2種 羽状)	-11	*
32	-12	*	*	口縁部	附加糸(輪:R 附加糸:L2本、輪:L 附加糸:R2本 附加糸帯2種 雲形)	-12	*
33	-13	*	*	口縁部・底部	附加糸(輪:不明 附加糸:L-R)	-13	*
34	-14	*	*	口縁部・底部	附加糸(輪:R 附加糸:R2本、輪:L 附加糸:R2本 附加糸帯2種)	-14	*
35	-15	*	*	口縁部	附加糸(輪:L 附加糸:R3本、輪:不明 附加糸:L3本 附加糸帯2種 雲形?)	-15	*
36	-16	*	*	口縁部	附加糸(輪:不明 附加糸:R2本、輪:不明 附加糸:L2本 附加糸帯2種)	-16	*
37	-17	*	*	口縁部	附加糸(輪:L 附加糸:R2本、輪:R 附加糸:L2本 附加糸帯2種 羽状)	-17	*
38	-18	*	*	胴部	附加糸(輪:L 附加糸:R2本、輪:R 附加糸:L2本 附加糸帯2種 雲形)	-18	*
39	-19	*	*	口縁部	無文	-19	*
40	-20	*	*	底部	R・L 変形	-20	*
41	-21	*	*	底部	平行沈線文・流状沈線文(磨面映工具)	-21	*
42	SI015-1	第2群5類	黒浜式	胴部	沈線文	第36組-1	W17-59
43	-2	*	*	胴部	LR	-2	*
44	-3	*	*	胴部	丸	-3	*
45	-4	*	*	胴部	L	-4	*
46	-5	*	*	胴部	雲形文L	-5	*
47	-6	*	*	胴部	無文	-6	*
48	SI016-1	第2群5類	黒浜式	胴部	R	第37組-1	V17-37
49	-2	*	*	胴部	丸	-2	*
50	SI017-1	第2群5類	黒浜式	口縁部	LR	第38組-1	V17-56
51	-2	*	*	胴部	附加糸(輪:LR 附加糸:R 附加糸帯1種)	-2	*
52	-3	*	*	胴部	貝殻彫刻文	-3	*
53	-4	*	*	口縁部	無文(刺あり)	-4	*
54	-5	*	*	胴部	無文	-5	*
55	-6	*	*	底部	附加糸(輪:不明 附加糸:L 附加糸帯2種)	-6	*
56	SI018-1	第2群5類	黒浜式	口縁部	糸線、へう引き沈線(格子目文)	第39組-1	V17-77・87

器種別	遺物%	分類	型式名	部位	主な文様(縄文は原形)	種別No	グリッド名
57	SI018-2	第2群5類	*	口縁部	平行比線文(手轆竹管:黒線文)	第36図-2	V17-77・87
58	-3	*	*	胴部	平行比線文(手轆竹管:上弧肋骨文)	-3	*
59	-4	*	*	胴部	平行比線文(手轆竹管:黒線文)	-4	*
60	-5	*	*	胴部	0段多糸LR、刺突文(円形竹管)	-5	*
61	-6	*	*	胴部	押引文(貝殻脈線)、RL	-6	*
62	-7	*	*	口縁部	LR・RL	-7	*
63	-8	*	*	胴部	LR	-8	*
64	-9	*	*	胴部	附加糸(輪:L 附加糸:L、輪:R 附加糸:R 附加糸2種 羽状)	-9	*
65	-10	*	*	底部	ヘラ引き比線(格子目文)	-10	*
66	-11	第2群7類	浮島1式	口縁部	D字爪形文(手轆竹管)、帯糸文R+平行比線文(手轆竹管:下弧肋骨文)	-11	*
67	-12	*	*	口縁部	平行比線文(手轆竹管:黒線文)、D字爪形文	-12	*
68	-13	第2群6類	誇瀧a式	口縁部	平行比線文(手轆竹管:黒線文)+RL?	-13	*
69	-14	*	*	口縁部	RL	-14	*
70	-15	*	*	胴部	0段多糸RL	-15	*
71	SK019-1	第2群5類	黒浜式	胴部	平行比線文(手轆竹管:肋骨文)	第41図-1	V17-47
72	-2	*	*	胴部	LR、刺突列(円形竹管)	-2	*
73	-3	*	*	胴部	RL	-3	*
74	SK030-4	第2群5類	黒浜式	胴部	平行比線文(手轆竹管:横波区画文、黒線文)	-4	V17-47
75	SK021-5	第2群5類	黒浜式	口縁部	付加糸(輪:不明 附加糸:R2本)	-5	V17-37
76	-6	*	*	口縁部	平行比線文(手轆竹管:矢羽状文)	-6	*
77	SK022-7	第2群5類	黒浜式	口縁部	LR	-7	V17-37
78	SK023-8	第4群1類	称名寺日式	口縁部	区画比線+刺突文	-8	V17-68
79	-9	*	*	胴部	帯匠文+列点文	-9	*
80	SK024-10	第2群5類	黒浜式	胴部	L	-10	V17-58
81	SK025-11	第2群5類	黒浜式	胴部	0段多糸RL	-11	V17-69
82	-12	第2群6類	誇瀧b式	口縁部	集合比線(御簀杖工具)+浮線文、押引文	-12	*
83	-13	第3群1類	五重+台式	胴部	2字状結帯留紐文(RL)	-13	*
84	-14	第4群1類	称名寺日式	口縁部	帯匠文+列点文	-14	*
85	-15	*	*	口縁部	列点文	-15	*
86	SK026-16	第2群5類	黒浜式	胴部	比線文(ヘラ状工具:黒線文)	-16	V17-56
87	-17	*	*	底部	貝殻背反刺文	-17	*
88	SK027-18	第2群5類	黒浜式	胴部	両面反摺RL	-18	V17-67
89	SK028-19	第4群2類	堀之内1式	胴部	帯匠文	-19	V17-67
90	SK029-20	第4群2類	堀之内1式	胴部	細比線文(ヘラ状工具:斜格子目文)	-20	V17-78
91	-21	*	*	底部	無文	-21	*
92	SK030-22	第2群5類	黒浜式	底部	LR	-22	V17-67
93	-23	第2群6類	誇瀧a式	胴部	平行比線文(手轆竹管:黒線文)+RL	-23	*
94	-24	*	*	底部	RL	-24	*
95	SK031-1	第2群5類	黒浜式	胴部	平行比線文(手轆竹管)	第42図-1	V17-46
96	B地区遺構外-1	第1群1類	帯糸文系	底部	無文	第43図-1	W17-20
97	-2	第1群2類	糸文系	胴部	表裏:貝殻糸文	第43図-2	W17-31
98	-3	第2群5類	黒浜式	口縁部	長短肋骨文、斜筋比線文(手轆竹管)、附加糸(輪:L 附加糸:L2本 附加糸第2種)	-3	V17-59
99	-4	*	*	口縁部	斜筋比線文(手轆竹管)、LR	-4	V17-37
100	-5	*	*	口縁部	結節比線文(手轆竹管)	-5	V17-77
101	-6	*	*	口縁部	結節比線文(手轆竹管)、LR	-6	V17-48
102	-7	*	*	胴部	RL+円形背刺突文、結節比線文(手轆竹管:帯糸文)	-7	V17-67
103	-8	*	*	胴部	平行比線文(手轆竹管:黒線文)+円形刺突列	-8	V17-57
104	-9	*	*	胴部	貝殻背反刺文+比線文(ヘラ状工具)	-9	W17-41
105	-10	*	*	胴部	斜格子目文(ヘラ状工具)	-10	W17-20
106	-11	*	*	胴部	平行比線文(ヘラ状工具:黒線文)	-11	W17-31
107	-12	*	*	胴部	平行比線文(手轆竹管:黒線文)	-12	W17-32
108	-13	*	*	胴部	平行比線文(手轆竹管:格子目文)	-13	W17-39
109	-14	*	*	胴部	平行比線文(手轆竹管:黒線文)	-14	V14-67
110	-15	*	*	口縁部	反摺RL	-15	V17-34
111	-16	*	*	口縁部-底部	RL・LR	-16	W17-51
112	-17	*	*	口縁部	RL	-17	W17-40
113	-18	*	*	胴部	RL	-18	W17-30
114	-19	*	*	胴部	0段多糸LR	-19	W17-30
115	-20	*	*	胴部	RL	-20	V17-58
116	-21	*	*	口縁部	附加糸(輪:LR 附加糸:L 附加糸第1種)	-21	V17-49



資料番号	遺物No.	分類	型式名	部位	主な文様(縄文は原状)	押印No.	グリッド名
117	B地区遺構外-22	第2群5類	黒沢式	胴部	附加糸(輪:RL 附加糸:L 輪:LR 附加糸:R 附加糸第1種 羽状)	第43図-22	V17-46・57
118	-23	*	*	胴部	附加糸(輪:不明 附加糸:L2本)	-23	V17-59
119	-24	*	*	口縁部~胴部	附加糸(輪:不明 附加糸:L2本)	-24	V17-56
120	-25	第2群6類	陶織a式	口縁部	C字爪彫文(半軟竹管)、RL	第44図-25	V17-67
121	-26	*	陶織a式	口縁部	C字爪彫文(半軟竹管)、連続木葉文	-26	V17-67
122	-27	第2群7類	浮島1式	口縁部	縦長沈線(ヘラ状工具)+平行沈線(半軟竹管:木葉文)	-27	V17-59
123	-28	第2群6類	陶織a式	胴部	平行沈線(半軟竹管:上弧防骨文)	-28	V17-56・67
124	-29	*	陶織b式	胴部	LR+扇み目付の浮島文	-29	V17-87
125	-30	*	陶織a式	口縁部	RL	-30	W18-43
126	-31	*	陶織a式	胴部	RL	-31	V17-79
127	-32	*	陶織a式	胴部	RL	-32	V17-67
128	-33	第4群1類	赤名寺B式	胴部	意匠文+列点文	-33	W17-51
129	-34	第4群2類	堀之内1式	胴部	LR+沈線(点状文、尺面文)	-34	V17-45
130	-35	*	*	胴部	沈線(意匠文)	-35	V17-56
131	-36	*	柳取式系	口縁部	河文、円形刺突文、沈線	-36	V17-28
132	-37	*	*	口縁部	河文、円形刺突文、沈線(表面施文)	-37	W17-41

[C地区]

資料番号	遺物No.	分類	型式名	部位	主な文様(縄文は原状)	押印No.	グリッド名
1	SK034-1	第4群2類	堀之内1式	口縁部~胴部	糸線(柳葉状工具)、無文書	第51図-1	Y18-05
2	SK035-2	第2群6類	陶織式	口縁部	0段多糸RL	-2	Y18-02
3	SK036-3	第2群5類	黒沢式	口縁部	L	-3	X19-28・38
4	SK038-4	第2群5類	黒沢式	口縁部	黒文	-4	X19-69
5	-5	*	*	胴部	L	-5	*
6	SK039-6	第2群5類	黒沢式	胴部	RL	-6	X19-56
7	-7	*	*	底部	LR	-7	*
8	SK040-8	第2群5類	黒沢式	胴部	R	-8	Y19-32
9	SK041-9	第2群5類	黒沢式	胴部	附加糸(輪:不明 附加糸:R2本)	-9	Z18-79
10	-10	*	*	胴部	附加糸(輪:L 附加糸:L2本 附加糸第2種)	-10	*
11	SK042-11	第2群6類	陶織式	胴部	赤糸	-11	Z20-09
12	C地区遺構外-1	第2群1類	花籠下壱式	胴部	赤糸倒置真文(R・L)、刺切文	第54図-1	V19-17
13	-2	第2群3類	黒山式	胴部	平行沈線・線子状沈線(多軟竹管)、扇状點付文	-2	AA18-10
14	-3	*	*	胴部	LR・RL(継ぎ)	-3	X19-17
15	-4	第2群5類	黒沢式	口縁部	沈線文(ヘラ状工具)	-4	Y20-65
16	-5	*	*	胴部	沈線文(ヘラ状工具)	-5	Y19-61
17	-6	*	*	胴部	沈線文(ヘラ状工具)	-6	AA19-50
18	-7	*	*	胴部	平行沈線文(半軟竹管)・線子目文状	-7	AA19-50
19	-8	*	*	口縁部	平行沈線文(半軟竹管)・R・L	-8	X19-46
20	-9	*	*	胴部	RL・LR	-9	Y19-73
21	-10	*	*	胴部	R・L	-10	X19-57
22	-11	*	*	口縁部	RL	-11	X19-17
23	-12	*	*	胴部	RL	-12	X19-66
24	-13	*	*	胴部	LR	-13	X19-24
25	-14	*	*	胴部	L・LR	-14	X19-08
26	-15	*	*	口縁部	附加糸(輪:不明 附加糸:L2本)	-15	Y18-91
27	-16	*	*	胴部	附加糸(輪:R 附加糸:L 附加糸第1種)	-16	Y20-49
28	-17	*	*	底部	RL	-17	X19-06
29	-18	第3群2類	阿玉台式	胴部	押引文(ヘラ状工具)	-18	AA19-53
30	-19	第3群4類	加賀利E式	胴部	RL、扇状點付文	-19	Y20-33
31	-20	*	*	胴部	L	-20	X19-44
32	-21	第4群1類	赤名寺B式	口縁部	意匠文+列点文(円形竹管)	-21	x19-17
33	-22	*	*	胴部	意匠文+列点文	-22	X19-17
34	-23	第4群2類	堀之内式	口縁部	平行沈線(半軟竹管)	-23	Y20-02
35	-24	第4群1類	赤名寺B式	底部	黒文	-24	Z18-75
36	-25	第4群3類	加賀利B2式	胴部	光沢横状沈線(滑製土器)	-25	Y10-65
37	-26	*	*	胴部	線状沈線(滑製土器)	-26	Y19-10
38	-27	*	加賀利B3式	胴部	縦線文(滑製土器)	-27	Y20-02
39	-28	*	豆管式	口縁部	縦線文(滑製土器)	-28	E-17-33

## 【D地区】

深部号	造物%	分類	型式名	部位	主な文種(横文は斜体)	押込%	グリッド名
1	SI019-1	第2群2類	二ツ木式	口縁部	棒子状沈線(一本引き)、内形竹留刺向文、 末端埋付LR・RL	第61図-1	DD19-09
2	-2	第2群3類	関山I式	口縁部	棒子状沈線(半截竹管:兼手文)、扇状貼付文、L	-2	*
3	-3	*	*	口縁部	棒子状沈線(半截竹管:扇歯状+山形文)、 扇状貼付文、RL・LR	-3	*
4	-4	*	*	口縁部	棒子状沈線(半截竹管:扇歯状+山形文)、 扇状貼付文	-4	*
5	-5	*	*	口縁部	RL、平行沈線(半截竹管:扇高状+山形文)、 末端埋付RL、真正コンパス文(半截竹管)	-5	*
6	-6	*	*	口縁部	扇状貼付文、末端埋付0段多糸RL・LR、真正 コンパス文(半截竹管)	-6	*
7	-7	*	*	口縁~底部	RL、真正コンパス文(半截竹管)	-7	*
8	-8	*	*	口縁部	末端埋付0段多糸RL・LR	-8	*
9	-9	*	*	口縁部	羽状網文(両面嵌合橋)、真正コンパス文(半 截竹管)	第62図-9	*
10	-10	*	*	口縁部	末端埋付0段多糸RL・LR	-10	*
11	-11	*	*	口縁部	末端埋付0段多糸RL・LR	-11	*
12	-12	*	*	口縁部	末端埋付0段多糸LR・RL、真正コンパス文 (半截竹管)	-12	*
13	-13	*	*	口縁部	末端埋付0段多糸RL・LR	-13	*
14	-14	*	*	口縁部	末端埋付0段多糸RL・LR、集合角状突起	-14	*
15	-15	*	*	口縁部	0段多糸LR・RL	-15	*
16	-16	*	*	口縁部	0段多糸LR・RL、末端埋付RL	-16	*
17	-17	第2群2~3類	二ツ木~関山 I式	口縁部	精線網紋B(0段多糸R2本・0段多糸L2本)	-17	*
18	-18	第2群3類	関山I式	胴部	末端埋付0段多糸RL・LR、真正コンパス文 (半截竹管)	-18	*
19	-19	*	*	胴部	末端埋付0段多糸RL・LR	-19	*
20	-20	*	*	胴部	末端埋付0段多糸RL・LR	-20	*
21	-21	*	*	胴部	末端埋付0段多糸RL・LR(羽状・変形)	第63図-21	*
22	-22	*	*	胴部	末端埋付0段多糸RL・LR	-22	*
23	-23	*	*	胴部	末端埋付0段多糸RL・LR	-23	*
24	-24	*	*	胴部	無文帯、末端埋付0段多糸RL・LR	-24	*
25	-25	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管)、一本引き沈線(ヘア 状工具)による棒子目文、LR	-25	*
26	-26	*	*	胴部	RL・LR	-26	*
27	-27	*	*	関山II式	縦紐、平行沈線(半截竹管 V字・異巻き・兼手文)	-27	*
28	-28	*	*	胴部	LR、平行沈線(半截竹管:扇歯状+山形文)、 末端埋付0段多糸LR・RL	-28	*
29	-29	*	*	胴部	両面嵌合橋、平行沈線(半截竹管)	-29	*
30	-30	*	*	胴部	網紐	-30	*
31	-31	*	*	底部	末端埋付0段多糸LR・RL、真正コンパス文 (半截竹管)	-31	*
32	-32	*	*	底部	末端埋付0段多糸LR・RL、真正コンパス文 (半截竹管)	-32	*
33	-33	*	*	底部	0段多糸LR	-33	*
34	-34	*	*	底部	末端埋付0段多糸LR・RL	-34	*
35	-35	*	*	底部	0段多糸LR・RL(羽状・変形)	-35	*
36	-36	*	*	底部	H段音階直文	-36	*
37	SI020-1	第2群2類	二ツ木式	胴部	末端埋付LR・RL	第64図-1	CC19-11
38	-2	*	*	胴部	末端埋付LR・RL	-2	*
39	-3	*	*	底部	LR	-3	*
40	SI021-1	第2群2類	二ツ木式	口縁部	棒子状沈線(一本引き:レンズ状・変形・扇 歯状)、扇状貼付文、末端埋付0段多糸LR・RL	第65図-1	CC18-91
41	-2	*	*	口縁部	棒子状沈線(半截竹管)、扇状貼付文、無文帯、 末端埋付0段多糸LR・LR	-2	*
42	-3	*	*	口縁部	無文帯、末端埋付0段多糸RL・LR	-3	*
43	-4	*	*	口縁部	LR	-4	*
44	-5	*	*	胴部	RL・LR	-5	*
45	-6	*	*	胴部	RL・LR	-6	*
46	-7	*	*	胴部	RL・LR	-7	*
47	-8	*	*	底部	0段多糸RL	-8	*
48	-9	*	*	底部	末端埋付0段多糸LR・RL	-9	*
49	SI022-1	第2群2類	二ツ木式	口縁部	棒子状沈線、平行沈線(半截竹管:レンズ状 +流涙下流線・上下区網紐連続、内文)	第66図-1	DD19-93

登録番号	遺物№	分類	型式名	部位	主な文様(縄文は原状)	群別№	グリッド名
50	SI022-2	第2群3類	岡山1式	胴部	0段多糸LR・RL	第66群-2	DD19-93
51	-3	*	*	胴部	0段多糸LR・RL(紐束)	-3	*
52	-4	*	*	胴部	0段多糸LR・RL(羽状・巻形)	-4	*
53	-5	*	*	胴部	RL	-5	*
54	-6	*	*	胴部	0段多糸RL	-6	*
55	-7	*	岡山3式	胴部	平行沈線(半縦竹管・粟手文様)	-7	*
56	-8	*	岡山式	底部	組紐文	-8	*
57	-9	*	岡山式	底部	0段多糸RL	-9	*
58	SI023-1	第2群2類	ニツホ式	口縁部	縷子状沈線(一本引き; レンズ状・菱形状+上下(間隔連続), 縷子状付文, 円形竹管刺突文, 組紐加糸分(0段多糸加2本・0段多糸加2本)	第67群-1	CC20-19
59	-2	*	*	口縁部	沈線・縷子状沈線(一本引き; 菱形状・菱形状), 縷子状付文, 刺突文(ヘア状工具), LR・RL	-2	*
60	-3	*	*	口縁部	縷子状沈線(一本引き; 菱形状・レンズ状・菱形状+流下通線), 刺突文, 末端幅付0段多糸LR	-3	*
61	-4	*	*	口縁部	縷子状沈線(一本引き; 菱形状・菱形状), 縷子状付文, 円形竹管刺突文, 末端幅付0段多糸LR・RL	-4	*
62	-5	*	*	口縁部	縷子状沈線(一本引き; 菱形状・菱形状・菱形状+流下通線), 円形竹管刺突文, 刺突文(ヘア状工具), 組紐加糸A(R+L)	第68群-5	*
63	-6	*	*	胴部~底部	組紐加糸B(0段多糸R2本・0段多糸L2本)	-6	*
64	-7	*	*	口縁部	平行沈線(縷子状), 末端幅付0段多糸LR・RL	-7	*
65	-8	*	*	口縁部	無文帯, 末端幅付LR・RL	-8	*
66	-9	*	*	口縁部	LR・RL	-9	*
67	-10	*	*	口縁部	末端幅付0段多糸LR・RL	-10	*
68	-11	*	*	口縁部	末端幅付0段多糸LR・RL	-11	*
69	-12	*	*	口縁部	末端幅付0段多糸LR・RL	-12	*
70	-13	*	*	口縁部	末端幅付RL, 無文帯	-13	*
71	-14	*	*	胴部	末端幅付LR・RL	-14	*
72	-15	*	*	胴部	末端幅付0段多糸LR・LR	-15	*
73	-16	*	*	胴部	RL, 具縦竹管刺突文	-16	*
74	-17	*	*	胴部	LR	-17	*
75	-18	*	*	底部	0段多糸RL・LR	-18	*
76	SI024-1	第2群2~3類	ニツホ~岡山式1式	口縁部~胴部	組紐加糸B(0段多糸R・L)	第69群-1	CC20-08
77	-2	*	*	胴部	0段多糸RL・LR	-2	*
78	SI025-1	第2群3類	岡山式	胴部	LR・RL	第70群-1	CC20-39
79	SI026-1	第2群2~3類	ニツホ~岡山式1式	胴部	短沈線, 末端幅付0段多糸LR・RL	第71群-1	DD18-93
80	-2	*	*	胴部	末端幅付0段多糸LR・RL	-2	*
81	-3	*	*	胴部	LR・RL	-3	*
82	-4	*	*	胴部	末端幅付0段多糸LR・RL	-4	*
83	-5	*	*	胴部	RL・LR	-5	*
84	SI027-1	*	岡山3式	口縁部	平行沈線(半縦竹管; 山部文), 組紐	第72群-1	DD19-62
85	-2	*	*	胴部	0段多糸LR・RL, 末端幅付LR	-2	*
86	-3	*	*	胴部	末端幅付0段多糸LR・RL(羽状・巻形), 真正コンパス文(半縦竹管)	-3	*
87	-4	*	*	胴部	組紐	-4	*
88	-5	*	*	底部	無文	-5	*
89	SI028-1	第2群5類	黒沢式	胴部	沈線文(ヘア状工具; 格子目文), R	第73群-1	CC19-34・44
90	-2	*	*	胴部	LR+C字爪彫文(半縦竹管; 巻状文)	-2	*
91	-3	*	*	口縁・胴部	R・L(羽状・巻形)	第73・74群-3	*
92	-4	*	*	口縁部	無文帯, 末端幅付0段多糸LR	第74群-4	*
93	-5	*	*	口縁部	RL+具縦竹管刺突文	-5	*
94	-6	*	*	胴部	末端幅付0段多糸LR・LR	-6	*
95	-7	*	*	胴部	RL・LR	-7	*
96	-8	*	*	胴部	RL	-8	*
97	-9	*	*	胴部	平行沈線(半縦竹管), 附加糸(輪:L, 附加糸:L, 附加糸1種・輪:不明, 附加糸:R)	-9	*
98	-10	*	*	底部	0段多糸RL	-10	*
99	SI029-1	第2群1類	花輪下層式	口縁部	組合沈線(縷子状), 熱赤銅面付刺突文(R-L), 羽状沈線, 刺突文	第75群-1	CC18-84
100	-2	*	*	胴部	0段多糸LR・RL	-2	*
101	-3	*	*	胴部	0段多糸LR・RL	-3	*

管理号	遺物No	分類	形式名	部位	主な文様(縄文は原色)	押印No	グリップ名
102	SI029-4	第2群2類	ニツ木式	口縁部	横糸帯肩直文(記、L)、円形竹管刺突文、 土曜帯付0段多糸LR・RL	第75図-4	CC18-84
103	-5	第2群3類	岡山式	口縁部	横糸状沈線(半軟竹管:レンズ状)、円形竹管刺突文、縦状貼付文	-5	*
104	-6	第2群2類	ニツ木式	口縁部	横糸状沈線(一本引き:レンズ状+山形加 <sup>2</sup> )、縦状貼付文、刺突文(棒状工具)	-6	*
105	-7	第2群3類	岡山式	口縁部	平行沈線(半軟竹管:扇状)、L	-7	*
106	-8	*	岡山Ⅱ式	口縁-胴部	直前段合糸+平行沈線(半軟竹管:扇状・ 横糸状合糸+縦状貼加)	-8	*
107	-9	*	*	口縁部	末端帯付0段多糸RL	第76図-9	*
108	-10	*	*	口縁部	横沈線、縦線	-10	*
109	-11	*	*	口縁部	平行沈線(半軟竹管内側)、縦線	-11	*
110	-12	*	*	口縁部	コンパス文(半軟竹管)、縦線	-12	*
111	-13	*	*	胴部	真正コンパス文(半軟竹管)、縦線	-13	*
112	-14	*	*	胴部	縦線	-14	*
113	-15	*	岡山式	胴部	附加糸(輪:RL、附加糸:L)、横位沈線、 円形刺突列	-15	*
114	-16	*	*	底部	0段多糸LR、R	-16	*
115	SK050-1	第2群7類	浮島Ⅰ-Ⅱ式	胴部	横糸文R	第79図-1	EE18-91
116	-2	*	*	口縁部	変形爪形文、刺突文、波状貝殻文	-2	*
117	-3	*	*	胴部	平行沈線(半軟竹管:棒目状)	-3	*
118	-4	*	*	胴部	波状貝殻文(一部押引文)	-4	*
119	-5	第2群6類	指輪h式	胴部	C字爪形文(弧線文)	-5	*
120	-6	*	*	胴部	斜位刺目付散点線、C字爪形文(弧線文、木 垂伏入組文)	-6	*
121	-7	*	滑盤式	口縁部	LR+縁部刺突文	-7	*
122	-8	*	*	胴部	LR・RL	-8	*
123	-9	*	*	胴部	斜位沈線、RL	-9	*
124	SK051-10	第2群5類	黒浜式	胴部	附加糸(輪:R、附加糸:L)	-10	CC19-87
125	SK052-11	第1群1類	稲荷台式	口縁部	横糸文L	-11	DD19-90
126	-12	第2群6類	指輪式	胴部	LR	-12	*
127	SK053-13	第1群1類	稲荷台式	口縁部	横糸文L	-13	DD20-00
128	-14	*	*	胴部	横糸文L	-14	*
129	-15	第2群5類	黒浜式	胴部	無文	-15	*
130	SK054-16	第2群7類	浮島式	胴部	貝殻腹線文	-16	CC20-39
131	SK056-17	第1群1類	横糸文系	胴部	無文	-17	DD20-30
132	-18	第2群5類	黒浜式	胴部	無文	-18	*
133	SK057-19	第2群5類	黒浜式	口縁部	棒目目文(ヘア状工具)	-19	DD20-02
134	-20	*	*	胴部	RL・LR	-20	*
135	SK058-21	第2群2・3類	ニツ木-岡山 式Ⅰ式	胴部	末端帯付0段多糸LR・RL	-21	CC19-54
136	-22	第2群5類	黒浜式	口縁部	刺突文(角棒状工具)	-22	*
137	-23	*	*	胴部	縦位沈線(ヘア状工具)	-23	*
138	-24	*	*	口縁部	LL	-24	*
139	-25	*	*	胴部	R	-25	*
140	-26	*	*	口縁部	附加糸(輪:不明、附加糸:L、R)	-26	*
141	-27	*	*	胴部	附加糸(輪:不明、附加糸:L、R)	-27	*
142	SK059-28	第2群2類	ニツ木式	口縁部	平行沈線(一本引き)+刺突文、円形竹管刺突文	-28	CC19-38
143	-29	第2群3類	岡山式	胴部	平行沈線(半軟竹管:縦線文)、0段多糸RL・LR	-29	*
144	-30	*	*	胴部	0段多糸RL・LR	-30	*
145	-31	*	*	胴部	0段多糸RL・LR	-31	*
146	SK061-32	第1群2類	赤飯文系	胴部	赤:赤飯文、黒:縦線	-32	BE18-56
147	-33	*	*	胴部	赤:赤飯文、黒:縦線	-33	*
148	SK062-34	第1群2類	赤飯文系	胴部	赤:貝殻赤飯文	-34	BE19-63
149	SX001-35	第1群1類	稲荷台式	胴部	横糸文R	-35	CC19-02
150	D地区遺跡外-1	第1群1類	井筒式	口縁部	RL、胴部無文	第50図-1	EE19-63
151	-2	*	夏島-稲荷台式	口縁部	横糸文R	-2	CC18-73
152	-3	*	*	口縁部	横糸文R	-3	CC19-22
153	-4	*	*	口縁部	横糸文L	-4	CC18-73
154	-5	*	*	口縁部	横糸文L	-5	CC18-58
155	-6	*	*	口縁部	RL	-6	CC19-00
156	-7	*	*	口縁部	横糸文L	-7	BB19-47
157	-8	*	*	口縁部	横糸文L(赤飯)	-8	CC18-93
158	-9	*	*	胴部	横糸文L	第80図-9	EE18-44

図番	造物No.	分類	型式名	部位	主本文様(縄文は原形)	押印No.	グリッド名
159	D地区遺構外-10	第1群1類	夏山-扇骨付式	胴部	胴糸文R	-10	CC18-96
160	-11	第1群2類	輪+島台式	口縁部	表:具段糸文・沈線+円形竹管刺突文 裏:具段糸文	-11	EE18-67
161	-12	*	*	胴部	表:具段糸文・沈線+円形刺突文+短沈線(押印文) 裏:具段糸文	-12	EE18-47
162	-13	*	*	胴部	表:具段糸文・沈線+円形竹管刺突文 裏:具段糸文	-13	EE18-71
163	-14	*	糸文文系	口縁部	具段糸文	-14	EE18-46
164	-15	*	*	口縁部	表裏:具段糸文	-15	EE18-66
165	-16	*	*	口縁部	表裏:具段糸文	-16	FF18-60
166	-17	*	*	胴部	表裏:具段糸文	-17	EE18-76
167	-18	*	*	胴部	表裏:具段糸文	-18	CC18-63
168	-19	*	*	胴部	表裏:具段糸文	-19	EE18-58
169	-20	*	*	胴部	具段糸文	-20	EE18-76
170	-21	第2群1類	花壇下層式	口縁部	胴糸状糸合沈線	-21	CC18-94
171	-22	第2群2~3類	二ツ木-岡山式	L口縁部	束端階付RL・LR	-22	EE18-57
172	-23	第2群1類	花壇下層式	口縁部	RL・LR	-23	BB19-67
173	-24	第2群2類	二ツ木式(新田御役所)	L口縁部	胴糸状糸合沈線(R-L兼手状)、円形竹管刺突文	-24	CC18-61
174	-25	*	*	口縁部	胴糸状糸合沈線(R-L兼手状)、円形竹管刺突文	-25	CC18-93
175	-26	*	*	口縁部	胴糸状糸合沈線(L-R-L兼手状)、円形竹管刺突文、短沈線(沈線文)、束端階付0段多糸RL	-26	CC18-72
176	-27	*	二ツ木式	口縁部	胴糸状糸合沈線、短沈線(沈線文)、胴糸状糸合沈線(L-R-L兼手状)、円形竹管刺突文、刺突文、束端階付RL・LR	-27	CC19-54
177	-28	*	*	口縁部	胴糸状沈線(一本引き:兼手状、束端状、波打下層状、縁状階付、上下区隔縁線)、束端階付0段多糸RL・LR	-28	CC18-72・81
178	-29	*	*	口縁部	胴糸状沈線(一本引き:兼手状)、円形竹管刺突文、短沈線	-29	CC18-82
179	-30	*	*	口縁部	胴糸状沈線(一本引き:兼手状+山形階付)、円形竹管刺突文	-30	CC19-18
180	-31	*	*	口縁部	胴糸状沈線(兼手状)、円形竹管刺突文、帯状貼付文	-31	CC18-81
181	-32	*	*	口縁部	胴糸状沈線(一本引き)	-32	CC18-96
182	-33	*	*	口縁部	平行沈線(一本引き:兼手状)、円形竹管刺突文、帯状貼付文、束端階付LR	-33	CC18-82
183	-34	*	*	口縁部	胴糸状沈線(一本引き)、刺突文	-34	CC18-68・22
184	-35	*	*	口縁部	胴糸状沈線(一本引き)、刺突文	-35	CC18-72
185	-36	第2群3類	岡山1式	口縁部	胴糸状沈線(半截竹管)、帯状貼付文、束端階付RL・LR	-36	CC18-72・73
186	-37	*	*	口縁部	沈線(半截竹管)、帯状貼付文、束端階付0段多糸RL・LR	-37	CC18-72・82
187	-38	*	*	口縁部	帯状貼付文、束端階付RL	-38	CC18-73
188	-39	*	*	胴部	沈線(一本引き)、帯状貼付文	-39	DD20-12
189	-40	*	*	口縁部	胴糸状沈線(半截竹管)、束端階付LR	第31図 -40	CC18-83
190	-41	*	*	L口縁部	平行沈線(半截竹管:扇状)、RL・LR	-41	CC18-74
191	-42	*	*	口縁部	平行沈線(半截竹管内側:扇状の裏状)、LRL	-42	CC18-33
192	-43	*	*	口縁部	平行沈線(半截竹管内側:扇状)、扇状	-43	EE19-20
193	-44	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管内側:扇状)、0段多糸RL・LR	-44	CC18-84
194	-45	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管内側)、RL・LR	-45	EE18-67
195	-46	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管内側:扇状)、0段多糸RL・LR	-46	CC18-72・82
196	-47	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管内側:意匠不明)、RL・LR	-47	EE19-04
197	-48	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管:袋形文)、コンパス文(半截竹管)、0段多糸RL	-48	EE18-56
198	-49	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管内側:意匠不明)、0段多糸RL・LR	-49	CC18-73・82
199	-50	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管内側:扇状)、扇状、真正コンパス文(半截竹管)	-50	CC18-84
200	-51	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管内側:扇状)、扇状	-51	CC18-52
201	-52	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管内側)、扇状	-52	CC18-61・62
202	-53	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管内側)、扇状	-53	CC18-52
203	-54	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管内側:扇状)、扇状	-54	DD19-89
204	-55	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管内側)、扇状	-55	CC18-73
205	-56	第2群2~3類	二ツ木式-岡山1式	胴部	扇状階付B(0段多糸R2本、L2本)	-56	CC19-08
206	-57	*	*	胴部	扇状階付B(0段多糸R2本、L2本)	-57	CC19-18

件別号	遺物No	分類	型式名	部位	主な文様(縄文は原色)	押印No	グッド名
207	D地区遺構外-58	第2群2~3類	ニツ小式-岡山1式	胴部	縞部回転B(0段多糸R2本、L2本)、末端環付0段多糸RL・LR	第81図-58	CC18-63
208	-59	*	*	口縁部	末端環付0段多糸RL・LR	-59	CC18-81
209	-60	*	*	胴部	末端環付0段多糸RL・LR	-60	DD18-84
210	-61	*	*	胴部	末端環付0段多糸RL・LR	-61	CC18-72
211	-62	*	*	胴部	末端環付0段多糸RL・LR	-62	CC18-96
212	-63	*	*	胴部	末端環付0段多糸RL・LR	-63	CC18-61
213	-64	*	*	胴部	末端環付0段多糸RL・LR	-64	CC18-52
214	-65	*	*	胴部	無文部、末端環付0段多糸RL・LR	-65	CC19-56
216	-66	*	*	胴部	末端環付0段多糸RL・LR	-66	CC18-81
216	-67	第2群3類	岡山式	口縁部	0段多糸RL・LR(結束)	-67	CC18-64
217	-68	*	*	口縁部	末端環付0段多糸RL・LR	-68	CC18-61
218	-69	*	*	口縁部	末端環付0段多糸RL	-69	BB18-59
219	-70	*	*	口縁部	末端環付0段多糸RL	-70	CC18-84
220	-71	*	*	口縁部	末端環付0段多糸RL	第82図-71	CC18-73・84
221	-72	*	*	胴部	LR、末端環付0段多糸RL	-72	CC19-69
222	-73	*	*	胴部	LR、末端環付LR	-73	CC18-72
223	-74	*	*	胴部	末端環付0段多糸RL	-74	CC18-63・84
224	-75	*	*	胴部	無文部、末端環付RL・LR	-75	CC19-57
225	-76	*	*	胴部	L+新線(2字状)	-76	CC18-52
226	-77	*	*	口縁部	LR	-77	EE18-67
227	-78	*	*	口縁部	RL・LR	-78	CC18-62・73
228	-79	*	*	口縁部	RL・LR	-79	EE18-36
229	-80	*	*	胴部	0段多糸RL・LR	-80	CC18-73
230	-81	*	*	胴部	RL・L	-81	CC18-62・63
231	-82	*	*	胴部	R・L	-82	CC19-56
232	-83	*	*	口縁部	附加糸(輪:LR 附加糸:R2本 附加糸第2輪)	-83	CC18-94
233	-84	*	*	口縁部	附加糸(輪:LR 附加糸:R2本 附加糸第2輪)	-84	CC18-85
234	-85	*	*	口縁部	附加糸(輪:LR 附加糸:L2本 附加糸第2輪)	-85	CC18-73
235	-86	*	*	口縁部	縞線	-86	EE19-87
236	-87	*	*	胴部	縞線	-87	CC18-61
237	-88	*	*	胴部	縞線	-88	CC18-72・73
238	-89	*	*	胴部	縞線	-89	EE18-96・47
239	-90	*	*	胴部	縞線	-90	EE18-67
240	-91	*	*	底部	末端環付RL・LR、貝殻管圧痕文	-91	CC18-82
241	-92	*	*	底部	L・R	-92	CC18-84
242	-93	*	*	底部	RL	-93	FF18-70
243	-94	*	*	底部	縞線	-94	CC18-72
244	-95	*	*	底部	LR	-95	DD19-89
245	-96	第2群5類	扇状式	口縁部	平行沈線(半軟竹管:縦管状)、LR	-96	CC19-65
246	-97	*	*	口縁部	斜格子目文(ヘア状1具)	-97	DD20-03
247	-98	*	*	胴部	平行沈線(半軟竹管)	-98	EE18-79
248	-99	*	*	胴部	沈線(ヘア状工具)、L	-99	CC19-92
249	-100	*	*	胴部	附加糸(輪:不明 附加糸:R2本、L2本)	-100	CC18-73・84
250	-101	*	*	口縁部	RL	第83図-101	CC18-73
251	-102	*	*	口縁部	RL	-102	第4次1T
252	-103	*	*	口縁部	RL	-103	EE18-91
253	-104	*	*	口縁部	RL	-104	EE18-68
254	-105	*	*	口縁部	R+白縄結部	-105	DD19-52
255	-106	*	*	胴部	LR	-106	CC18-64
256	-107	*	*	胴部	末端環付L	-107	CC19-02
257	-108	*	*	胴部	L	-108	CC18-52
258	-109	*	*	胴部	RL・LR	-109	DD19-53
259	-110	*	*	胴部	貝殻管圧痕文	-110	DD19-45
260	-111	*	*	胴部	貝殻管圧痕文	-111	CC18-96
261	-112	*	*	口縁部	無文(縞部直線)	-112	EE18-67
262	-113	*	*	底部	0段多糸RL	-113	CC18-52
263	-114	第2群8類	大木2a式系	胴部	網目状糸文	-114	DD19-20
264	-115	第2群3類	岡山II式	胴部	平行沈線(半軟竹管:菱形文)、列点状刺突	-115	CC18-96
265	-116	第2群6類	踏織b式	口縁部	C字爪形文(縦線文)	-116	DD19-45
266	-117	*	*	胴部	平行沈線+斜格子目(ヘア状工具:爪形文)	-117	DD20-00
267	-118	*	*	胴部	C字爪形文+平行沈線(半軟竹管:菱状文)	-118	EE18-91

器種番号	遺物№	分類	型式名	部位	主な文様(縄文は原件)	押印№	グリッド名
265	D地区遺構外-119	第2群6類	高腰b式	胴部	平行比織(半截竹管)、RL	第338回-119	EE19-64
269	-120	*	*	胴部	押印文(半截竹管)、RL	-120	EE19-64
270	-121	*	*	胴部	RL	-121	第4次2T
271	-122	第2群7類	浮島1式	L胴部	摺承文+平行比織(半截竹管:木管文)	-122	EE19-64
272	-123	*	*	L胴部	平行比織(半截竹管:木管文)	-123	DD18-76
273	-124	*	*	口縁部	平行比織(半截竹管:山形文?)	-124	EE19-64
274	-125	*	*	口縁部	変形爪形文	-125	第4次2T
275	-126	*	*	胴部	摺承文R+D字爪形文	-126	第4次一括
276	-127	*	*	口縁部	凹凸文、平行網比織、流状貝殻文	-127	DD19-15
277	-128	*	*	胴部	凹凸文	-128	DD19-89
278	-129	*	*	口縁部	無文	-129	第4次2T
279	-130	*	*	胴部	平行比織(半截竹管)	-130	第4次1T
280	-131	*	*	胴部	摺承文R	-131	EE19-64
281	-132	*	*	口縁部	流状貝殻文	-132	EE19-39
282	-133	*	*	胴部	流状貝殻文	-133	AA19-86
283	-134	*	*	胴部	唐南貝殻文	-134	EE19-74
284	-135	第2群6類	簡織式	底部	LR	-135	EE19-20
285	-136	*	*	底部	RL	-136	EE19-69
286	-137	第2群7類	浮島・興津式	底部	無文	-137	第4次1T
287	-138	*	*	底部	無文	-138	CC18-72
288	-139	*	*	底部	無文	-139	DD19-67
289	-140	第3群1類	五領+台式	口縁部	神状区画+比織文	-140	第4次1T
290	-141	*	*	胴部	神状区画+角押文	-141	CC18-40
291	-142	第3群2類	阿玉台1b式	胴部	連続刺突文	-142	CC18-87
292	-143	第3群4類	知母野E-II式	口縁部	無文帯、0段多糸RL	-143	EE18-60
293	-144	*	*	胴部	唐南貝殻文、0段多糸RL	-144	EE18-88
294	-145	*	*	胴部	RL+対向縦織文	-145	DD20-11
295	-146	第4群1類	地名守II式	胴部	意匠文(沈線+列点文)	-146	第4次1T
296	-147	第4群2類	福之内式	口縁部	無文帯、0段多糸LR	-147	第4次1T
297	-148	*	*	胴部	LR+意匠文(沈線:葉手状)	-148	DD20-20

[E地区]

器種番号	遺物№	分類	型式名	部位	主な文様(縄文は原件)	押印№	グリッド名
1	S1031-1	第2群1類	花模下層式	口縁部	斜目付き縁起織、RL・LR	第30回-1	Z21-65
2	-2	*	*	胴部	RL・LR	-2	*
3	-3	*	*	口縁部	RL・LR	-3	*
4	-4	*	*	胴部	RL・LR	-4	*
5	-5	*	*	胴部	RL・LR	第30回-5	*
6	-6	*	*	胴部	RL・LR	-6	*
7	-7	*	*	胴部	RL・LR	-7	*
8	-8	*	*	胴部	RL・LR	-8	*
9	-9	*	*	胴部	摺承文R+貝殻背任儀文、貝殻余文、摺承 側面比儀文(R-L)	-9	*
10	-10	*	*	口縁部	貝殻背任儀文	-10	*
11	-11	*	*	口縁部	貝殻背任儀文	-11	*
12	-12	*	*	胴部	貝殻背任儀文	-12	*
13	-13	*	*	胴部	貝殻背任儀文	-13	*
14	-14	*	*	胴部	貝殻背任儀文	-14	*
15	-15	*	*	胴部	貝殻背任儀文	-15	*
16	-16	*	*	底部	LR、底面RL	-16	*
17	-17	*	*	底部	L	-17	*
18	S1032-1	第2群1類	花模下層式	口縁部	集合比織(歯歯状)、RL	第90回-1	Z21-58
19	-2	*	*	口縁部	集合比織(歯歯状)、RL	-2	*
20	-3	*	*	胴部	RL・LR	-3	*
21	-4	*	*	胴部	RL・LR	-4	*
22	-5	*	*	胴部	0段多糸RL・LR	-5	*
23	-6	*	*	胴部	RL・LR	-6	*
24	-7	*	*	口縁部	貝殻背任儀文	-7	*
25	-8	*	*	口縁部-底部	貝殻背任儀文	-8	*
26	-9	第2群5類	無文式	口縁部	円形竹管刺突文、沈線(ヘラ状工具:雲籠文)	-9	*
27	-10	*	*	口縁部	環状織(ヘラ状工具:格子目文風)	-10	*
28	-11	*	*	L胴部	L	-11	*
29	S1033-1	第2群5類	黒沢式	口縁部	平行比織-歯歯状沈織(半截竹管)、RL	第91回-1	AA21-87・88

巻号	遺物No	分類	形式名	部位	主な文様(縄文は原形)	押印No	グリッドNo
30	SK03-2	第2群5類	黒浜式	口縁部	粘結比線(半截竹管: 新骨文)、内文	第91図-2	AA21-87-88
31	-3	*	*	口縁部・胴部	斜位比線(ヘラ状工具)	-3	*
32	-4	*	*	口縁部	平行比線(半截竹管内面: 雲葉文)	-4	*
33	-5	*	*	胴部	粘結比線(半截竹管)、黒色比線(雲葉状工具未用板状)	-5	*
34	-6	*	*	胴部	平行比線(半截竹管: 矢羽根(山形状))	-6	*
35	-7	*	*	胴部	平行比線(半截竹管)	-7	*
36	-8	*	*	胴部	平行比線(半截竹管)	-8	*
37	-9	*	*	胴部	斜位比線(ヘラ状工具: 雲葉文)	-9	*
38	-10	*	*	口縁部	附加条(輪:L、附加条:R 附加条部3種)	-10	*
39	-11	*	*	胴部	附加条(輪:不明 附加条:L2本、L2本)	-11	*
40	-12	*	*	胴部	附加条(輪:不明 附加条:R)	-12	*
41	-13	*	*	胴、底部	附加条(輪:RL、附加条:L、輪:LR 附加条:R 附加条部2種 変形)	第92図-13	*
42	-14	*	*	口縁部	R	-14	*
43	-15	*	*	胴部	L	-15	*
44	-16	*	*	口縁部	RL	-16	*
45	-17	*	*	口縁部	RL、L	-17	*
46	-18	*	*	胴部	L・RL	-18	*
47	-19	*	*	胴部	RL	-19	*
48	-20	*	*	胴部	RL	-20	*
49	-21	*	*	胴部	LR・RL	-21	*
50	-22	*	*	胴部	LR	-22	*
51	-23	*	*	胴部	具股背圧痕文	-23	*
52	-24	*	*	胴部	具股背圧痕文	-24	*
53	-25	*	*	底部	平行比線(半截竹管)	-25	*
54	-26	*	*	底部	L	-26	*
55	-27	第2群6類	頸環a式	口縁部	RL	-27	*
56	-28	*	*	口縁部	R	-28	*
57	SK04-1	第2群1類	花環下層式	口縁部	黒色比線(副産状)、LR	第93図-1	AA21-67
58	-2	*	*	口縁部	L・R・附加条(輪:不明 附加条:R)	-2	*
59	-3	*	*	胴部	R・L	-3	*
60	-4	*	*	胴部	LR・RL	-4	*
61	-5	第2群5類	黒浜式	口縁部	平行比線(半截竹管: 雲葉文)	-5	*
62	-6	*	*	口縁部	平行比線(半截竹管: 巻子目文?)	-6	*
63	-7	*	*	口縁部	RL・LR(結束部1種)	-7	*
64	-8	*	*	胴部	LR・RL(結束部1種)	-8	*
65	-9	*	*	胴部	LR・RL(結束部1種)	-9	*
66	-10	*	*	胴部	L・R	-10	*
67	-11	*	*	胴部	L・R	第94図-11	*
68	-12	*	*	胴部	RL・L	-12	*
69	-13	第2群1類	花環下層式	口縁部	具股背圧痕文	-13	*
70	-14	*	*	口縁部	具股背圧痕文	-14	*
71	-15	*	*	胴部	具股背圧痕文	-15	*
72	-16	第2群6類	頸環a式	口縁部・胴部	RL、斜位比線文(S字状)	-16	*
73	SK05-1	第2群1類	花環下層式	口縁部	具股背圧痕文	第95図-1	Z21-85
74	-2	*	*	胴部	L・R(結束)、L、R	-2	*
75	-3	*	*	胴部	RL・LR、具股背圧痕文	-3	*
76	-4	*	*	胴部	LR・RL	-4	*
77	-5	*	*	胴部	0段多条RL・LR	-5	*
78	-6	*	*	胴部	RL・LR	-6	*
79	-7	*	*	胴部	RL・LR、自縄部	-7	*
80	-8	*	*	胴部	R・L、具股背圧痕文	-8	*
81	SK06-1	第2群1類	花環下層式	口縁部	内文、黒色圓面圧痕文(R-L)	第96図-1	Z21-96
82	-2	*	*	胴部	黒色圓面圧痕文(L: 藤手状)、具股背圧痕文	-2	*
83	-3	*	*	口縁部	L+Z字状粘結部比線文	-3	*
84	-4	第2群5類	黒浜式	胴部	平行比線(半截竹管)、RL	-4	*
85	-5	*	*	胴部	附加条(輪:R 附加条:R2本 附加条部2種)	-5	*
86	-6	第2群1類	花環下層式	胴部	L・R	-6	*
87	SK07-1	第2群1類	花環下層式	胴部	縄文条痕文(R)	第96図-1	Z21-77
88	-2	*	*	口縁部	黒色圓面圧痕文(L2本)+斜切文	-2	*
89	-3	*	*	口縁部	比線文(副産状)+斜切文	-3	*
90	-4	*	*	口縁部	R	-4	*



管理番号	遺物No	分類	型式名	部位	主な文様(周文は原件)	押印No	グリッド名
91	S1037-5	第2群1類	花横下層式	胴部	R・L	第96図-5	Z21-77
92	-6	*	*	胴部	具設背任直文、LR・RL	-6	*
93	-7	*	*	胴部	LR・RL	-7	*
94	-8	*	*	胴部	LR・RL	-8	*
95	-9	*	*	胴部	LR・RL	-9	*
96	-10	*	*	胴部	LR	-10	*
97	-11	*	*	胴部	RL	-11	*
98	-12	*	*	口縁部	具設背任直文	-12	*
99	-13	*	*	胴部	具設背任直文	第97図-13	*
100	-14	*	*	胴部	具設背任直文	-14	*
101	-15	*	*	底部	0段多糸RL・LR 底面:具設直線文、底状比直文	-15	*
102	-16	*	*	底部	LR	-16	*
103	-17	*	*	底部	具設背任直文	-17	*
104	-18	第2群4類	木島式	胴部	平行比直(半織竹管)	-18	*
105	S1038-1	第2群5型	雲渦式	L口縁部	真正コンパス文、縁部比直文(半織竹管)、0段多糸RL	第97図-1	Z21-88
106	-2	*	*	口縁部	底状比直文(半織竹管) 附加糸(輪:LR 附加糸第1種)	-2	*
107	-3	*	*	口縁部	底状比直文(半織竹管内側)、黒糸文R	-3	*
108	-4	*	*	口縁部	押引文(半織竹管:兼直文)、RL	-4	*
109	-5	*	*	口縁部	C半爪彫文	-5	*
110	-6	*	*	口縁部	結節比直文(半織竹管)、凹文、附加糸(輪:R 附加糸:R 附加糸第2種)	-6	*
111	-7	*	*	口縁部	集合比直	-7	*
112	-8	*	*	胴部	平行比直(半織竹管:兼直文、矢羽模文)	-8	*
113	-9	*	*	胴部	平行比直(半織竹管:兼直文)	-9	*
114	-10	*	*	L口縁部	細比直(ヘラ状工具:格子目文)	-10	*
115	-11	*	*	L口縁部	細比直(半織竹管)	-11	*
116	-12	*	*	胴部	平行比直(半織竹管)	-12	*
117	-13	*	*	胴部	平行比直(半織竹管内側・外側:兼直文)	-13	*
118	-14	*	*	胴部	平行比直(半織竹管:格子目文)	-14	*
119	-15	*	*	L口縁部	附加糸(輪:LR 附加糸:R 附加糸第1種)	-15	*
120	-16	*	*	胴部	附加糸(輪:RL 附加糸:L、輪:LR 附加糸:R 附加糸第1種 羽状)	-16	*
121	-17	*	*	胴部	附加糸(輪:RL 附加糸:L、輪:LR 附加糸:R 附加糸第1種 羽状)	-17	*
122	-18	*	*	胴部	R・L	-18	*
123	-19	*	*	口縁部	0段多糸LR	第98図-19	*
124	-20	*	*	口縁部	L	-20	*
125	-21	*	*	L口縁部	黒糸文R、黒糸文L	-21	*
126	-22	*	*	胴部	0段多糸RL	-22	*
127	-23	*	*	胴部	附加糸(輪:R? 附加糸:R 附加糸第2種?)	-23	*
128	-24	*	*	底部	附加糸(輪:不明 附加糸:R、輪:不明 附加糸:L 羽状)	-24	*
129	-25	*	*	底部	平行比直(半織竹管)	-25	*
130	S1039-1	第2群1類	花横下層式	L口縁部	RL	第99図-1	Z21-68
131	-2	*	*	胴部	割突文、LR	-2	*
132	-3	*	*	胴部	具設背任直文	-3	*
133	-4	*	*	胴部	具設背任直文	-4	*
134	S1040-1	第2群1類	花横下層式	口縁部	集合比直(弧状対向)+割突文、LR・RL	第100図-1	AA21-60
135	-2	*	*	口縁部	LR、割突文、RL	-2	*
136	-3	*	*	胴部	RL・LR	-3	*
137	-4	*	*	胴部	L・R	-4	*
138	-5	*	*	胴部	0段多糸RL・遺留LR	-5	*
139	-6	*	*	胴部	LR・RL	-6	*
140	-7	*	*	胴部	LR・RL	-7	*
141	-8	*	*	胴部	LR	-8	*
142	-9	*	*	胴部	L、具設背任直文	-9	*
143	-10	*	*	胴部	具設背任直文	-10	*
144	-11	*	*	胴部	具設背任直文	-11	*
145	-12	*	*	底部	L	-12	*
146	-13	第2群4類	木島式	胴部	押し引きの所直(磨面)、爪状短比直	-13	*
147	-14	*	*	胴部	平行比直(半織竹管)	-14	*
148	-15	*	*	胴部	平行比直(半織竹管)	-15	*

図号	産物%	分類	部式名	部位	主な文様(編文は標準)	押印%	グッド名
149	SI040-16	第2群4類	木鼻式	胴部	平行沈線(半截竹管: 格子目文)	第100回-16	AA21-60
150	SI041-1	第2群1類	花袋下層式	口縁部	熟糸羅面匠文( R-L-R: 雲山状・風状附加)・新切文	第102回-1	AA21-41
151	-2	*	*	胴部	熟糸羅面匠文( R-L-R: 格子目状・RL・LR)	-2	*
152	-3	*	*	口縁部	RL・LR	-3	*
153	-4	*	*	口縁部	RL・LR	-4	*
154	-5	*	*	口縁部	貝殻背匠文	-5	*
155	-6	第2群5類	黒浜式	口縁部	平行沈線(半截竹管内側・外側: 雲山文)	-6	*
156	-7	*	*	口縁部	新切文(半截竹管内側: 別点状)	-7	*
157	-8	*	*	胴部	母加糸(輪: LR 母加糸: R, 輪: RL 附加糸: L 附加糸第1種 羽状)	-8	*
158	-9	*	*	口縁部	0段多糸RL	-9	*
159	-10	*	*	口縁部	RL	-10	*
160	-11	*	*	胴部	L	-11	*
161	-12	*	*	胴部	RL・LR, 末端附付RL・LR	-12	*
162	-13	*	*	胴部	LR	-13	*
163	-14	*	*	胴部	LR	-14	*
164	-15	第2群7類	浮島式	口縁部	無文	-15	*
165	-16	*	*	口縁部	波状貝殻文	-16	*
166	-17	*	*	胴部	波状貝殻文	-17	*
167	-18	第2群6類	踏踏式	口縁部	LR	-18	*
168	-19	*	*	胴部	RL, 浮線文(別点目付)	-19	*
169	SI042-1	第2群1類	花袋下層式	口縁部	L・R, RL	第103回-1	AA21-42
170	-2	*	*	口縁部	LR・RL	-2	*
171	-3	*	*	胴部	R・L	-3	*
172	-4	*	*	胴部	貝殻背匠文	-4	*
173	-5	第2群4類	木鼻式	胴部	爪状短沈線	-5	*
174	-6	第2群5類	黒浜式	胴部	R, 平行沈線(半截竹管)	-6	*
175	-7	*	*	底部	附加糸(輪: RL 附加糸: L 2本, 輪: LR 附加糸: R 2本 附加糸第1種 羽状)	-7	*
176	-8	第2群7類	浮島Ⅱ-Ⅲ式	口縁部	輪紋文	-8	*
177	-9	*	*	口縁部	輪紋文, 別点目(半截竹管内側)	-9	*
178	-10	*	*	口縁部・胴部	波状貝殻文, 押引文(貝殻短線)	-10	*
179	-11	*	*	胴部	三角文, 平行沈線(半截竹管: 朝毛目状)	-11	*
180	-12	*	*	胴部	無文	-12	*
181	-13	*	*	胴部	格子目文(ヘラ状工具)	-13	*
182	SI043-1	第2群1類	花袋下層式	胴部	RL	第103回-1	AA21-61
183	-2	*	*	胴部	0段多糸RL・LR	-2	*
184	-3	*	*	胴部	R	-3	*
185	-4	*	*	底部	無文	-4	*
186	-5	*	*	底部	無文	-5	*
187	-6	第2群5類	黒浜式	胴部	L	-6	*
188	-7	*	*	胴部	RL, 網沈線	-7	*
189	SI044-1	第2群1類	花袋下層式	口縁部	RL・LR	第104回-1	AA21-64
190	-2	*	*	胴部	LR・RL	-2	*
191	-3	*	*	胴部	0段多糸LR・通常RL	-3	*
192	-4	*	*	胴部	LR・RL	-4	*
193	-5	*	*	胴部	RL・LR	-5	*
194	-6	*	*	胴部	LR・LR	-6	*
195	-7	*	*	胴部	0段多糸LR	-7	*
196	-8	*	*	胴部	LR・RL, 貝殻背匠文	-8	*
197	-9	*	*	口縁部	貝殻背匠文	-9	*
198	-10	*	*	胴部	貝殻背匠文	-10	*
199	-11	*	*	底部	貝殻背匠文	-11	*
200	-12	第2群4類	木鼻式	胴部	平行沈線(半截竹管)	-12	*
201	-13	*	*	胴部	平行沈線(半截竹管)	-13	*
202	SI045-1	第2群1類	花袋下層式	口縁部	0段多糸LR・RL	第105回-1	AA21-55
203	-2	*	*	口縁部	LR・RL	-2	*
204	-3	*	*	口縁部	LR	-3	*
205	-4	*	*	口縁部	L・R	-4	*
206	-5	*	*	口縁部	0段多糸RL・通常LR	-5	*
207	-6	*	*	口縁部	RL・LR	-6	*
208	-7	*	*	口縁部	RL・LR	-7	*

管理番号	産物No	分類	部式名	部位	主な文様(組文は原形)	押印No	グリッド名
209	SI045-8	第2群1類	花積下型式	胴部	菊小目付隆起線、R・L、縁部比織	第105図-8	AA21-35
210	-9	*	*	胴部	菊小目付隆起線、O段多糸RL・通常LR	-9	*
211	-10	*	*	胴部	RL・LR、LR(結束帯2種)	-10	*
212	-11	*	*	胴部	R・L(結束帯1種)	-11	*
213	-12	*	*	胴部	RL・LR、L・R	-12	*
214	-13	*	*	胴部	RL・LR	-13	*
215	-14	*	*	胴部	L・R	-14	*
216	-15	*	*	胴部	L、具段背圧痕文	-15	*
217	-16	*	*	底部	具段背圧痕文	-16	*
218	-17	*	*	底部	RL	-17	*
219	SI046-1	第2群1類	花積下型式	口縁部	LR・RL	第106図-1	AA21-15
220	-2	*	*	胴部	L	-2	*
221	-3	*	*	胴部	具段背圧痕文、蒸文	-3	*
222	-4	*	*	胴部	具段背圧痕文	-4	*
223	SI047-1	第2群5類	黒沢式	口縁部	縁部比織文+流皮沈線文(半軟竹笠内側)、LR・RL	第103図-1	AA21-31
224	-2	*	*	胴部	平行沈線(半軟竹笠)	-2	*
225	-3	*	*	底部	平行沈線(半軟竹笠内側)+沈線(半軟竹笠外側):黒沢文	-3	*
226	SI048-1	第2群1類	花積下型式	胴部	L	第107図-1	BB21-22
227	-2	*	*	胴部	R・L	-2	*
228	SI049-1	第2群1-5類	花積下型式-黒沢式	胴部	RL	第108図-1	BB21-18
229	SI050-1	第2群1類	花積下型式	口縁部	LR・RL	第109図-1	AA21-18
230	-2	*	*	胴部	RL・LR	-2	*
231	-3	*	*	胴部	L・R	-3	*
232	-4	*	*	胴部	具段背圧痕文	-4	*
233	SI051-1	第2群1類	花積下型式	口縁部	集合比織(龍巻状文)	第110図-1	AA21-28
234	-2	*	*	口縁部	RL・LR	-2	*
235	-3	*	*	口縁部	RL・LR	-3	*
236	-4	*	*	口縁部	RL・LR	-4	*
237	-5	*	*	口縁部	RL・LR	-5	*
238	-6	*	*	胴部	O段多糸LR・通常RL	-6	*
239	-7	*	*	胴部	LR・RL	-7	*
240	-8	*	*	胴部	L・R	-8	*
241	-9	*	*	胴部	R・R(結束帯2種)	-9	*
242	-10	*	*	胴部	O段多糸RL・LR	-10	*
243	-11	*	*	胴部	R・L	第111図-11	*
244	-12	*	*	胴部	O段3糸R・L	-12	*
245	-13	*	*	口縁部	具段背圧痕文	-13	*
246	-14	*	*	口縁部	具段背圧痕文	-14	*
247	-15	*	*	胴部	具段背圧痕文	-15	*
248	-16	*	*	底部	RL・LR	-16	*
249	-17	*	*	底部	具段背圧痕文	-17	*
250	-18	*	*	底部	LR・RL、具段背圧痕文	-18	*
251	-19	*	*	底部	具段背圧痕文	-19	*
252	SI052-1	第2群1類	花積下型式	口縁部	帯糸御座匠文(R-L)、朝切文	第112図-1	BB21-30
253	-2	*	*	胴部	帯糸御座匠文(R-L)、朝切文、RL・LR	-2	*
254	-3	*	*	胴部	RL・LR	-3	*
255	-4	*	*	胴部	L・R	-4	*
256	-5	*	*	胴部	R・L、結飾縮紙文(S字状、Z字状)	-5	*
257	-6	*	*	胴部	RL・L	-6	*
258	-7	*	*	胴部	LR・RL	-7	*
259	-8	*	*	口縁部	具段背圧痕文	-8	*
260	-9	*	*	底部	R	-9	*
261	-10	第2群4類	木島式	口縁部	平行沈線文(半軟竹笠)	-10	*
262	SK069-1	第2群1類	花積下型式	胴部	具段背圧痕文	第117図-1	Z21-58
263	-2	第2群5類	黒沢式	底部	LR	-2	*
264	SK073-3	第2群1類	花積下型式	胴部	縄文糸痕文(L)	-3	Z21-88
265	SK074-4	第2群1類	花積下型式	胴部	R・L	-4	Z21-58
266	-5	*	*	胴部	具段背圧痕文	-5	*
267	SK075-6	第2群5類	黒沢式	口縁部	縮紙縮(ヘア状工具:黒沢文)	-6	Z21-79
268	-7	*	*	口縁部	縮紙縮(ヘア状工具:黒沢文?)	-7	*

管理番号	遺物No	分類	型式名	部位	主な文様(縄文は原係)	押印No	グリッド名
269	SK075-8	第2群5類	瓜浜式	胴部	平行沈線(半段竹管:格子目文)、無文	第117B0-8	Z21-79
270	SK076-9	第2群6類	埴輪式?	胴部	L	-9	BB20-79
271	SK077-10	第2群1類	花壇下層式?	胴部	具段背圧痕文	-10	AA21-54
272	SK079-11	第2群1類	花壇下層式	胴部	L・R	-11	BB21-51
273	-12	*	*	胴部	L・R	-12	*
274	SK080-13	第2群1類	花壇下層式	口縁部	具段背圧痕文	-13	BB21-44・54
275	-14	*	*	口縁部	無文帯, RL	-14	*
276	-15	*	*	胴部	O段多糸LR, 反巻LL	-15	*
277	SK082-16	第2群1類	花壇下層式	胴部	LR, RL	-16	BB21-24他
278	-17	*	*	胴部	LR・RL	-17	*
279	-18	*	*	胴部	具段背圧痕文	-18	*
280	-19	第2群4類	木鳥式	胴部	平行沈線文(半段竹管:斜格子状)	-19	*
281	-20	第2群1類	花壇下層式	胴部	R, 結線回転文	-20	*
282	-21	第2群5類	瓜浜式	胴部	LR	-21	*
283	-22	*	*	胴部	R・L	-22	*
284	-23	*	*	胴部	RL	-23	*
285	-24	第2群1類	花壇下層式	底部	具段背圧痕文	-24	*
286	-25	第2群5類	瓜浜式	底部	具段余痕文	-25	*
287	SK083-26	第2群1類	花壇下層式	胴部	L・R	-26	Z21-36・37
288	-27	第2群5類	瓜浜式	胴部	附加条(軸:RL, 附加条:L, 附加条部1種)	-27	*
289	-28	第2群1類	花壇下層式	胴部	L・R	-28	*
290	石地区遺構外-1	第1群1類	瓜浜式	L口縁部	RL	第118B0-1	AA21-18・19
291	-2	*	*	胴部	RL	-2	BB21-04
292	-3	第1群2類	余痕文系	胴部	表:具段余痕文	-3	BB21-31
293	-4	*	*	底部	表裏:具段余痕文	-4	AA21-45
294	-5	第2群1類	花壇下層式	口縁部	沈線文(ヘツ状工具:網痕状), L	-5	Z20-89
295	-6	*	*	口縁部	平行沈線(半段竹管:格子目文)	-6	DD14-33
296	-7	*	*	口縁部	R, 網沈線(山形モチーフ), 集合沈線(網痕状)	-7	BB21-31
297	-8	*	*	口縁部	網面圧痕文(R-L-R-L:菓子状), 網面文, RL	-8	AA20-59
298	-9	*	*	口縁部	網面圧痕文(R-L-R-L:菓子状), 網面文, RL	-9	AA21-31
299	-10	*	*	口縁部	具段背圧痕文, RL・LR	-10	BB20-40
300	-11	*	*	口縁部	RL	-11	BB21-20
301	-12	*	*	L口縁部	RL・LR	-12	第15次一括
302	-13	*	*	口縁部	LR	-13	AA21-09・18
303	-14	*	*	胴部	O段多糸LR, 連続刺突文	-14	AA21-19
304	-15	*	*	口縁部	O段多糸RL・LR	-15	AA20-87・88
305	-16	*	*	口縁部	O段多糸RL・LR	-16	AA21-09
306	-17	*	*	胴部	縄文余痕文(RL・LR)	-17	Z21-86
307	-18	*	*	口縁部	RL・LR	-18	第10次一括
308	-19	*	*	口縁部	R	-19	AA21-47
309	-20	*	*	口縁部・胴部	RL・LR, 具段背圧痕文	-20	BB20-99
310	-21	*	*	胴部	R・L	-21	Z21-27
311	-22	*	*	胴部	R・L	-22	BB21-22
312	-23	*	*	胴部	R・L, 内形竹管刺突文	-23	AA20-89
313	-24	*	*	胴部	RL・LR	-24	CC14-77・78
314	-25	*	*	胴部	RL・LR	-25	AA21-47
315	-26	*	*	胴部	RL・LR	-26	AA21-18
316	-27	*	*	口縁部	縄文余痕文(RL・LR)	-27	第15次一括
317	-28	*	*	胴部	RL・LR	-28	BB21-20
318	-29	*	*	胴部	R・L	-29	BB21-10
319	-30	*	*	胴部	RL・LR	-30	第10次一括
320	-31	*	*	胴部	RL・LR	-31	BB21-00
321	-32	*	*	口縁部	具段背圧痕文	-32	第15次一括
322	-33	*	*	口縁部	具段背圧痕文	-33	BB21-20
323	-34	*	*	口縁部	具段背圧痕文	-34	AA21-31
324	-35	*	*	口縁部	具段背圧痕文	-35	BB21-20
325	-36	*	*	胴部	具段背圧痕文	-36	BB21-31
326	-37	*	*	胴部	具段背圧痕文	-37	Z21-39
327	-38	*	*	胴部	具段背圧痕文	-38	AA21-29
328	-39	*	*	胴部	具段背圧痕文	第118・119B0-39	AA21-31・22
329	-40	*	*	胴部	具段背圧痕文	第119B0-40	AA20-88
330	-41	*	*	底部	R・L	-41	BB21-50

登録番号	遺物%	分類	型式名	部位	主な文様(縄文は原形)	押印%	グリッド名
331	B地区遺跡外-42	第2群1類	花積下層式	底部	L 底部:動物状の序文	第119回-42	AA21-08
332	-43	*	*	底部	LR	-43	AA21-07
333	-44	*	*	底部	貝殻背文縄文	-44	AA21-19
334	-45	*	*	底部	貝殻背文縄文	-45	BB20-99
335	-46	第2群4類	木口式	口縁部	平行沈線(半軟竹管:斜格子状)	-46	AA21-08
336	-47	*	*	胴部	平行沈線(半軟竹管:斜格子状)	-47	BB20-99
337	-48	*	*	胴部	平行沈線(半軟竹管)	-48	AA21-19
338	-49	*	*	胴部	平行沈線(半軟竹管)	-49	AA21-28
339	-50	*	*	胴部	無文(前期区のみ)	-50	第15次一括
340	-51	*	*	胴部	平行沈線(半軟竹管:斜格子状)	-51	AA21-09, BB21-20
341	-52	第2群5類	黒沢式	口縁部	平行沈線(半軟竹管), L	-52	BB20-71
342	-53	*	*	胴部	平行沈線(半軟竹管:格子目状)	-53	BB20-61
343	-54	*	*	胴部	平行沈線(半軟竹管:横線文)	-54	AA21-31
344	-55	*	*	胴部	R+平行沈線(半軟竹管)	-55	BB20-64
345	-56	*	*	胴部	細沈線(へう状工具:格子目文)	-56	AA21-31
346	-57	*	*	口縁部	円形竹管刺突文, LR	-57	BB20-52
347	-58	*	*	胴部	円形竹管刺突文, 斜沈線(へう状工具)	-58	AA21-31
348	-59	*	*	胴部	LR+筋筋沈線(半軟竹管内側)	-59	AA21-31
349	-60	*	*	胴部	結節沈線(半軟竹管内側)	-60	Z21-89
350	-61	*	*	胴部	RL+平行沈線(半軟竹管内側)	-61	BB20-61
351	-62	*	*	胴部	結節沈線(半軟竹管), 直状沈線(半軟竹管内側, 一本引き)	-62	第10次一括
352	-63	*	*	口縁部	R	-63	DD14-14
353	-64	第2群1類	花積下層式	口縁部	L・R	-64	Z21-27
354	-65	第2群5類	黒沢式	胴部	L	-65	BB20-61
355	-66	*	*	胴部	0段多糸LR	-66	AA20-88
356	-67	*	*	胴部	RL	-67	AA21-72
357	-68	*	*	胴部	LR	-68	AA21-21, Z1-91
358	-69	*	*	胴部	0段多糸LR・0段多糸LR	-69	BB20-44
359	-70	第2群1類	花積下層式	胴部	L	-70	BB20-04
360	-71	*	*	胴部	L	-71	BB21-21
361	-72	第2群8類	大木2a式系	胴部	網目状沈線文(L), 0段多糸LR	-72	AA21-31
362	-73	第2群5類	黒沢式	底部	貝殻背文縄文	-73	Z20-76
363	-74	第2群6類	黒沢式	胴部	LR+平行沈線(半軟竹管)	-74	Z20-93
364	-75	*	*	胴部	細目目付沈線文	-75	Z21-89
365	-76	第2群7類	浮島1式	口縁部	凹文(陥球工具) D字爪形文, 平行沈線(半軟竹管:横線文)	-76	Z21-13
366	-77	*	*	口縁部	凹文(陥球工具) 波状貝殻文	-77	BB20-61
367	-78	*	*	胴部	波状貝殻文	-78	BB20-61
368	-79	*	*	口縁部	三角文, 刺目(へう状工具)	-79	AA21-83
369	-80	*	*	胴部	三角文	-80	AA20-78
370	-81	*	*	胴部	熱水文L	-81	AA20-686
371	-82	第3群2類	阿玉台1b式	口縁部	角弁文	-82	AA21-28
372	-83	第3群1類	五層台台式	口縁部	凹文, 平行沈線+円形竹管刺突文(黒沢式文), 角弁文	-83	AA20-75
373	-84	第3群3類	藤取式	口縁部	雷面カマココ状突起線, 爪形文, L	-84	第12次一括
374	-85	*	*	口縁部	爪面・突起線(半軟竹管内側)	-85	Z21-18
375	-86	第3群2類	阿玉台式	胴部	沈線, 集合沈線	第120回-86	Z20-48
376	-87	第3群4類	割管利E式手	胴部	RL	-87	Z21-05
377	-88	*	*	胴部	RL, 溝巻文	-88	第6次表推
378	-89	*	*	胴部	RL	-89	第15次一括
379	-90	*	*	口縁部	福内区縄文+RI	-90	BB20-40
380	-91	*	*	口縁部	交互刺突文, 熱水文L	-91	AA21-65
381	-92	*	*	口縁部	無文帯, 横位遺跡区縄文, RI	-92	第15次一括
382	-93	*	*	口縁部	無文帯, 横位遺跡区縄文, L	-93	Z21-18
383	-94	*	*	胴部	RL, 溝消懸垂文	-94	BB20-61, Z1-12
384	-95	*	*	胴部	RL, 溝消懸垂文	-95	BB20-71
385	-96	*	*	胴部	RL, 溝消懸垂文	-96	BB20-71
386	-97	*	*	胴部	集合糸線(溝状工具)	-97	BB21-04
387	-98	第4群1類	刺名寺日式	口縁部	凹文+刺突文	-98	AA20-78
388	-99	*	*	口縁部	歪文+刺突文(溝状工具)	-99	BB21-04
389	-100	第4群3類	笠台式	口縁部	地文縄文+糸線文(縄状土器)	-100	DD14-94











第17表 石器・垂飾・土器片・不明土製品・貝刃属性表

[石器属性表]

管理番号	押印No	出土位置	時期	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
1	121-1	S1003	黒浜	石鏃	チャート	26.9	15.8	7.3	2.90
2	121-2	S1004	花積下層	石鏃	チャート	(18.9)	19.6	4.9	1.75
3	121-3	S1007	花積下層	石鏃	チャート	22.8	15.1	4.0	0.87
4	121-4	S1005	花積下層or黒浜	石鏃	チャート	(13.0)	(10.5)	4.8	0.31
5	121-5	S1009	黒浜	石鏃	チャート	14.3	12.4	3.0	0.34
6	121-6	A地区遺構外	前期	石鏃	チャート	13.8	11.4	3.7	0.53
7	121-7	A地区遺構外	前期	石鏃	チャート	15.2	12.3	2.5	0.39
8	121-8	A地区遺構外	前期	石鏃	チャート	19.8	15.9	4.6	1.05
9	121-9	A地区遺構外	前期	石鏃	チャート	21.8	17.5	3.0	0.79
10	121-10	A地区遺構外	前期	石鏃	ガラス質黒色安山岩	14.7	13.0	3.3	0.44
11	121-11	A地区遺構外	前期	石鏃	チャート	(16.8)	(14.0)	4.0	0.58
12	121-12	A地区遺構外	前期	石鏃	チャート	31.5	20.2	5.6	2.36
13	121-13	A地区遺構外	前期	石鏃	チャート	27.9	15.2	6.8	2.21
14	121-14	S1018	浮島I・埋藏A	石鏃	黒曜石	13.5	(13.9)	3.0	0.25
15	121-15	S1019	岡山I	石鏃	チャート	(15.4)	15.2	5.7	1.12
16	121-16	S1021	二ツ木	石鏃	埴貫頁岩	15.2	14.5	5.0	0.81
17	121-17	S1021	二ツ木	石鏃	チャート	(15.4)	(12.5)	4.0	0.51
18	121-18	S1020	二ツ木	石鏃	チャート	15.8	12.9	5.4	0.95
19	121-19	S1020	二ツ木	石鏃	チャート	17.0	(13.5)	2.6	0.42
20	121-20	S1020	二ツ木	石鏃	チャート	16.9	(13.2)	4.1	0.58
21	121-21	S1020	二ツ木	石鏃	チャート	(16.0)	(12.5)	3.0	0.49
22	121-22	S1026	二ツ木	石鏃	ガラス質黒色安山岩	14.3	10.4	3.0	0.35
23	121-23	S1026	二ツ木	石鏃	ホルンフェルス	20.8	(15.9)	3.5	1.00
24	121-24	S1026	二ツ木	石鏃	チャート	(15.3)	14.9	3.9	0.72
25	121-25	S1020	二ツ木	石鏃	埴貫岩	(14.9)	15.0	4.9	0.77
26	121-26	D地区遺構外	前期	石鏃	チャート	18.2	17.9	4.5	0.92
27	121-27	D地区遺構外	前期	石鏃	黒曜石	(15.4)	13.0	2.9	0.38
28	121-28	D地区遺構外	前期	石鏃	チャート	17.0	13.2	2.5	0.23
29	121-29	S1031	花積下層	石鏃	チャート	(17.2)	(13.0)	4.6	0.66
30	121-30	S1032	花積下層? or黒浜?	石鏃	チャート	9.9	7.5	2.0	0.13
31	121-31	S1031	花積下層	石鏃	チャート	15.5	15.5	3.5	0.53
32	121-32	S1032	花積下層? or黒浜?	石鏃	ガラス質黒色安山岩	16.4	19.5	3.5	0.54
33	121-33	S1032	花積下層? or黒浜?	石鏃	チャート	(13.9)	12.4	3.3	0.46
34	121-34	S1033	黒浜	石鏃	黒曜石	18.0	12.0	3.7	0.57
35	121-35	S1033	黒浜	石鏃	チャート	15.8	15.8	5.5	0.87
36	121-36	S1033	黒浜	石鏃	チャート	(23.0)	(13.5)	3.7	0.78
37	121-37	S1033	黒浜	石鏃	チャート	(20.6)	(19.2)	4.8	1.23
38	121-38	S1034	黒浜	石鏃	チャート	23.2	(15.5)	6.3	1.05
39	121-39	S1036	黒浜?	石鏃	頁岩	20.8	13.7	3.1	0.77
40	121-40	S1034	黒浜	石鏃	チャート	14.3	12.8	3.0	0.50
41	121-41	S1035	花積下層	石鏃	チャート	14.1	10.9	3.2	0.36
42	121-42	S1037	花積下層	石鏃	チャート	(12.0)	10.7	3.6	0.37
43	121-43	S1037	花積下層	石鏃	チャート	12.8	15.5	3.7	0.46
44	121-44	S1037	花積下層	石鏃	チャート	14.5	12.6	3.1	0.40
45	121-45	S1037	花積下層	石鏃	頁岩	15.0	13.8	3.0	0.40
46	121-46	S1037	花積下層	石鏃	チャート	17.8	14.2	5.1	1.06
47	121-47	S1031	花積下層	石鏃	チャート	(14.0)	(10.0)	4.2	0.27
48	121-48	S1038	黒浜	石鏃	チャート	17.1	14.7	3.5	0.58
49	121-49	S1039	花積下層	石鏃	チャート	17.8	13.9	4.0	0.73
50	121-50	S1040	花積下層	石鏃	チャート	(20.6)	19.5	3.9	1.15
51	121-51	S1037	花積下層	石鏃	チャート	24.0	16.5	3.8	0.92
52	121-52	S1040	花積下層	石鏃	チャート	(24.3)	21.6	3.7	1.46
53	121-53	S1040	花積下層	石鏃	チャート	(23.8)	15.2	3.5	0.80
54	121-54	S1042	浮島	石鏃	玉髄(メノウ含む)	24.1	16.8	4.7	1.03
55	121-55	S1039	花積下層	石鏃	チャート	16.2	15.3	3.1	0.60
56	121-56	S1040	花積下層	石鏃	チャート	18.8	13.0	4.1	0.67
57	121-57	S1040	花積下層	石鏃	チャート	17.1	12.3	3.6	0.56
58	121-58	S1040	花積下層	石鏃	チャート	(16.5)	(13.9)	4.0	0.73
59	121-59	S1040	花積下層	石鏃	チャート	13.2	11.8	3.2	0.50
60	121-60	S1041	黒浜?	石鏃	黒曜石	(15.0)	(11.9)	3.1	0.42
61	121-61	S1040	花積下層	石鏃	チャート	(15.8)	(12.6)	2.9	0.36

管理番号	押図No	出土位置	時期	種類	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
62	121-62	SI041	黒浜?	石鏝	チャート	19.1	(13.4)	3.8	0.78
63	121-63	SI041	黒浜?	石鏝	チャート	18.1	18.0	2.6	0.21
64	121-64	SI041	黒浜?	石鏝	黒曜石	(12.8)	(12.6)	2.3	0.29
65	121-65	SI044	花積下層	石鏝	チャート	(14.2)	14.3	3.0	0.52
66	121-66	SI044	花積下層	石鏝	チャート	(13.5)	14.0	3.3	0.42
67	121-67	SI045	花積下層	石鏝	チャート	(15.9)	(13.2)	3.6	0.59
68	121-68	SI045	花積下層	石鏝	ガラス質黒色安山岩	(16.5)	(12.9)	3.2	0.53
69	121-69	SI045	花積下層	石鏝	チャート	16.2	10.9	2.8	0.36
70	121-70	SI037	花積下層	石鏝	黒曜石	(12.9)	(6.2)	2.2	0.21
71	122-71	SI042	淨島	石鏝	チャート	(19.5)	(12.8)	2.7	0.51
72	122-72	SI043	黒浜?	石鏝	チャート	21.6	19.9	6.3	1.98
73	122-73	SI044	花積下層	石鏝	チャート	(16.9)	(16.0)	5.3	1.13
74	122-74	SI045	花積下層	石鏝	チャート	15.8	14.9	3.6	0.61
75	122-75	SI045	花積下層	石鏝	チャート	(17.0)	(12.9)	4.2	0.67
76	122-76	SI045	花積下層	石鏝	チャート	16.8	(13.1)	4.1	0.51
77	122-77	SI042	淨島	石鏝	チャート	(32.8)	17.0	4.5	1.70
78	122-78	SI045	花積下層	石鏝	チャート	(17.0)	(13.8)	3.4	0.63
79	122-79	SI045	花積下層	石鏝	チャート	19.2	14.9	4.0	0.61
80	122-80	SI045	花積下層	石鏝	チャート	(21.2)	(12.2)	3.3	0.61
81	122-81	SI046	花積下層?	石鏝	頁岩	25.1	17.9	5.2	2.24
82	122-82	E地区遺構外	前期	石鏝	チャート	(24.6)	13.4	3.9	1.07
83	122-83	E地区遺構外	前期	石鏝	頁岩	(18.4)	(16.4)	3.3	0.78
84	122-84	E地区遺構外	前期	石鏝	チャート	22.5	16.8	5.2	1.56
85	122-85	E地区遺構外	前期	石鏝	チャート	21.5	15.4	5.0	1.02
86	122-86	E地区遺構外	前期	石鏝	チャート	(18.1)	15.4	3.6	0.77
87	122-87	E地区遺構外	前期	石鏝	チャート	20.6	14.1	3.7	0.73
88	122-88	E地区遺構外	前期	石鏝	黒曜石	(15.5)	12.3	3.3	0.46
89	122-89	E地区遺構外	前期	石鏝	チャート	(14.4)	(13.9)	3.6	0.61
90	122-90	E地区遺構外	前期	石鏝	流紋岩	18.7	15.0	4.3	0.80
91	122-91	E地区遺構外	前期	石鏝	チャート	14.4	14.6	3.2	0.34
92	122-92	E地区遺構外	前期	石鏝	ガラス質黒色安山岩	16.2	(14.2)	2.9	0.42
93	122-93	SI051	花積下層	石鏝	チャート	(19.6)	14.7	3.2	0.83
94	122-94	SK069	黒浜?	石鏝	チャート	19.6	14.0	4.3	0.98
95	122-95	SK058	黒浜?	石鏝	チャート	18.3	15.6	3.9	0.71
96	122-96	SK038	不明	石鏝	チャート	21.4	16.5	3.7	0.77
97	122-97	SX002	不明	石鏝	頁岩	15.1	10.8	2.7	0.32
98	122-98	E地区遺構外	前期	石鏝	チャート	32.8	23.3	4.2	1.77
99	122-99	E地区遺構外	前期	石鏝	チャート	28.8	15.9	5.0	1.68
100	122-100	E地区遺構外	前期	石鏝	チャート	20.1	16.3	4.0	1.30
101	122-101	SI020	二ツ木	石鏝未製品	チャート	19.3	17.8	3.5	1.13
102	122-102	SI020	二ツ木	石鏝未製品	チャート	15.1	13.0	3.4	0.57
103	122-103	SI045	花積下層	石鏝未製品	チャート	16.7	16.1	2.8	0.74
104	122-104	SI052	花積下層	石鏝未製品	チャート	17.2	16.9	4.6	1.52
105	122-105	SI012	黒浜	楕形石鏝	チャート	31.4	24.3	11.1	10.67
106	122-106	SI013	黒浜	楕形石鏝	チャート	29.8	28.0	9.1	7.73
107	122-107	SI005	花積下層or黒浜	尖頭器	チャート	(55.5)	12.7	7.1	4.64
108	122-108	A地区遺構外	前期	尖頭器	チャート	36.2	14.7	7.9	3.50
109	122-109	E地区遺構外	前期	尖頭器	流紋岩	(41.1)	(29.7)	15.1	13.51
110	123-110	SI005	花積下層	石鏝	チャート	28.6	7.1	6.1	1.15
111	123-111	SI007	花積下層	石鏝	チャート	(22.6)	9.8	3.7	0.66
112	123-112	A地区遺構外	前期	石鏝	チャート	27.8	9.6	4.2	1.45
113	123-113	SI023	二ツ木	石鏝	チャート	25.6	6.0	5.5	0.88
114	123-114	B地区遺構外	前期	石鏝	チャート	28.0	10.5	5.6	1.79
115	123-115	D地区遺構外	前期	石鏝	玉髄(メノウ含む)	27.2	8.0	5.9	1.19
116	123-116	D地区遺構外	前期	石鏝	チャート	(23.2)	12.1	4.3	0.79
117	123-117	SI013	黒浜	石鏝	チャート	(41.2)	10.6	6.2	2.51
118	123-118	E地区遺構外	前期	石鏝	ガラス質黒色安山岩	61.1	20.1	8.6	9.44
119	123-119	SI020	二ツ木	石鏝	チャート	(13.0)	15.5	4.0	0.62
120	123-120	E地区遺構外	前期	石鏝	頁岩	33.9	(42.8)	7.5	10.71
121	124-121	SI006	花積下層	打製石斧	砂岩	105.0	62.3	34.0	369.25
122	124-122	SI041	黒浜?	打製石斧	蛇紋岩	112.0	67.1	27.5	309.52
123	124-123	SI013	黒浜?	打製石斧	安山岩	104.0	59.9	29.8	223.28
124	124-124	E地区遺構外	前期	打製石斧	緑泥片岩	137.6	60.1	20.8	243.70

管理番号	押戻No	出土位置	時期	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
125	124-125	SI048	花様下層?	打製石斧	緑泥片岩	80.5	41.4	15.3	91.41
126	124-126	D地区遺構外	前期	打製石斧	玉髓(メノウ含む)	72.5	44.9	16.6	77.23
127	125-127	SI038	黒浜	打製石斧	ホルンフェルス	78.1	51.2	22.3	126.63
128	125-128	SI031	花様下層	打製石斧	ホルンフェルス	79.3	50.0	23.7	95.76
129	125-129	SI039	花様下層	打製石斧	ホルンフェルス	81.1	51.8	24.5	109.56
130	125-130	A地区遺構外	前期	打製石斧	砂岩	79.8	55.8	18.2	100.89
131	125-131	B地区表探	前期?	打製石斧	砂岩	112.3	59.9	23.1	204.28
132	125-132	C地区遺構外	前期	打製石斧	緑色凝灰岩	128.7	57.0	19.2	169.76
133	126-133	E地区遺構外	前期	打製石斧	ホルンフェルス	61.5	44.3	14.9	50.88
134	126-134	E地区遺構外	前期	打製石斧	ホルンフェルス (34.2)	44.2	14.0	25.22	
135	126-135	SI034	黒浜	磨製石斧	ホルンフェルス	63.0	54.5	21.2	80.53
136	126-136	SI035	花様下層	磨製石斧	砂岩 (89.5)	52.3	33.8	268.19	
137	126-137	SI034	黒浜	磨製石斧	ホルンフェルス (43.7)	55.2	18.9	53.53	
138	126-138	SI034	黒浜	磨製石斧	砂岩	48.3	32.4	12.0	36.50
139	126-139	SI044	花様下層	磨製石斧	安山岩 (86.9)	(68.8)	(48.0)	379.82	
140	126-140	B地区表探	前期	磨製石斧	閃緑岩 (91.0)	63.2	32.4	345.00	
141	126-141	E地区遺構外	前期	磨製石斧	緑色凝灰岩 (61.0)	55.3	20.5	124.99	
142	126-142	E地区表探	前期	磨製石斧	緑色凝灰岩	52.1	38.4	15.9	49.48
143	126-143	E地区遺構外	前期	磨製石斧	砂岩 (68.8)	(46.4)	(27.3)	145.00	
144	126-144	E地区遺構外	前期	磨製石斧	緑色凝灰岩 (26.8)	(28.0)	8.0	6.58	
145	127-145	SI028	黒浜	部石	安山岩 (70.4)	(67.3)	(47.1)	198.64	
146	127-146	SI037	花様下層	四石	安山岩 (97.1)	78.2	42.6	463.51	
147	127-147	D地区遺構外	前期	台石	安山岩 (158.3)	177.8	48.6	1360.00	
148	127-148	A地区遺構外	前期	石皿	安山岩 (130.1)	(117.2)	54.8	815.00	
149	127-149	SI018	浮島I・踏躰a	石皿	安山岩 (120.8)	(71.2)	(58.5)	455.00	
150	127-150	D地区遺構外	前期	石皿	流紋岩	215.0	(147.0)	42.8	1765.00
151	128-151	D地区遺構外	前期	石皿	砂岩 (95.0)	(85.0)	39.0	454.71	
152	128-152	SI033	黒浜	石皿	安山岩 (71.0)	(61.2)	(39.4)	140.33	
153	128-153	SI034	黒浜	石皿	安山岩 (80.5)	(48.8)	37.6	113.51	
154	128-154	SI043	黒浜?	石皿	砂岩 (102.5)	(63.5)	33.1	371.93	
155	128-155	A地区遺構外	前期	石鉢	砂岩	50.1	39.6	9.2	30.77

【磨石属性表】

管理番号	押戻No	出土位置	時期	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
1	132-1	SI038	黒浜	石製珠状耳飾	玉髓(メノウ含む)	(22.6)	(11.4)	10.2	3.64
2	132-2	SI041	黒浜?	石製珠状耳飾	滑石	27.0	(19.0)	8.4	4.13
3	132-3	A地区遺構外	前期	石製珠状耳飾	滑石 (28.4)	(16.8)	14.2	9.00	
4	132-4	SI042	浮島	土製珠状耳飾	—	24.0	24.7	14.2	7.79
5	132-5	D地区遺構外	前期	土製珠状耳飾	—	35.5	(23.2)	14.2	8.63
6	132-6	SI038	黒浜	歯牙製歯飾	イノシシ中切歯	36.0	16.0	6.2	2.85

【土器片地質属性表】

管理番号	押戻No	出土位置	時期	器種	軸長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
7	130-1	SI018	黒浜	土器片鏃	36.0	40.1	6.7	11.31
8	130-2	SI016	黒浜	土器片鏃	63.0	62.0	6.8	31.86
9	130-3	B地区遺構外	黒浜	土器片鏃	68.0	68.0	10.0	47.43
10	130-4	SI014	黒浜	土器片鏃	36.0	20.0	10.7	14.36
11	130-5	C地区遺構外	阿玉台	土器片鏃	44.0	29.2	6.0	10.36
12	130-6	D地区遺構外	阿玉台	土器片鏃	(27.0)	30.5	6.5	6.53
13	130-7	E地区遺構外	加曾利EⅡ	土器片鏃	62.0	48.5	11.5	42.72

【不明土製品属性表】

管理番号	押戻No	出土位置	時期	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
14	131-1	SI034	黒浜	不明土製品	71.0	33.0	30.0	41.31
15	131-2	SI038	黒浜	不明土製品	32.0	29.5	18.0	11.29
16	131-3	D地区遺構外	前期	不明土製品	36.5	30.0	13.0	7.33
17	131-4	C地区遺構外	前期	不明土製品	45.0	38.0	10.5	16.11

【貝屑属性表】

管理番号	押戻No	出土位置	時期	貝種	L/R	殻長(mm)	殻高(mm)	重量(g)
1	129	SI051	花様下層	ハマグリ	R	78.4	62.6	27.48

## 2 貝刃 (第129図、図版63、第17表)

ハマグリ の腹縁に微細差が認められる個体が、遺構内貝層中から出土している。内訳は花積下層式期のSI051で1点 (第129図・図版63上左)、黒浜式期のSI014で4点 (図版63上右) である。実体顕微鏡で観察した結果、前者については可能性が高いが、後者については風化等が重なり判別が難しいが可能性は低いとされた<sup>(2)</sup>。前者1点を図示した。殻長78.4cm、殻高62.6cmのハマグリ右貝を利用したもので、左端を欠損するが腹縁表側の1/2強に相当する部分に刃部が作出されており、位置に偏りが認められる。重量は27.48g。

註2 西野雅人の観察による。

## 3 土器片錘・土製品 (第130・131図、図版62、第17表)

前期、中期の土器片を利用した錘が計7点、用途不明の土製品が計4点出土している。以下に説明する。他に平面形状が土製円板に類似した土器片が10点以上出土している。しかしながら、いずれも断面に磨りによる整形痕が認められなかったり、不明瞭であったりする。土器片錘・土製円板の素材である可能性を完全否定できないが、今回は線引きする基準を設けられなかったので全てを除外した。

### (1) 土器片錘 (第130図1～7)

1～4は前期中葉黒浜式の土器片を利用。1・2の切れ目は中軸を外れており、4の切れ目は縦位に伸びた列点文に併せ中軸を通る。いずれもB地区で1は浮島I・諸磯a式期のSI018、2は黒浜式期のSI016、4は黒浜式期のSI014より出土。5・6は胎土に雲母粒を含む阿玉台式を利用。5の切れ目は中軸上を通る。7は磨消懸垂文のある加曾利EⅡ式を利用。切れ目は中軸上を通る。5はC地区、6はD地区、7はE地区より出土。

### (2) 不明土製品 (第131図1～4)

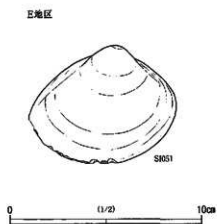
1・2は粘土塊を捻って造形したもので、焼成は不良。1は形態的には不整な三角柱状の突起に近似するもので、片面が凹む。最大長71.0mm。2は側縁に凹みがある他、粗い整形のみで、最大長32.0mmを測る。1はSI034、2はSI038と、いずれも黒浜式期住居跡の覆土一括出土だが、現状からは胎土中の繊維の有無は判断できない。3は粘土塊を捻って造形し、表面を整えた後、焼成前に細く穿孔している。焼成は土器などと変わらず良好であるが、現状からは胎土中の繊維の有無は判断できない。D地区より出土。4は粘土塊を扁平に潰して板状にし、表裏全面にヘラ状工具により沈線や擦痕が加えられたもので、割れ面から判断すると繊維は含まれない。最大長45.0mmを測る。C地区より出土。3・4は時期不明である。

## 4 垂飾 (第132図、図版62、第17表)

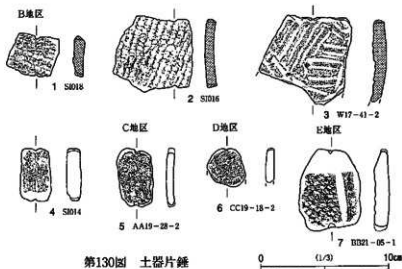
縄文前期の所産と考えられる垂飾が少量ながら出土している。以下に種類・素材別に説明する。

### (1) 石製・土製球状耳飾 (第132図1～5)

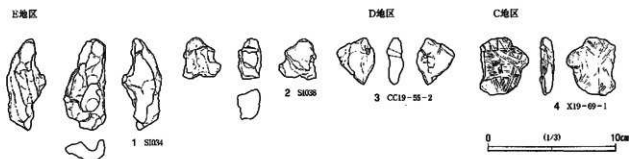
1～3は石製球状耳飾で、出土した3点を図示した。1は僅かに緑色がかった白色の玉髓 (あるいは滑石?) を用いた耳飾片で脆い。両面とも一部に研磨痕とみられる光沢が看取されるが、大部分は風化によって器面が荒れている。現存長22.6mmを測り、重さは3.64gである。残存形状からやや縦長な平面形を呈すと思われる。黒浜式期のSI038より出土。2は発達した片理構造が観察される滑石製の耳飾片で、器面



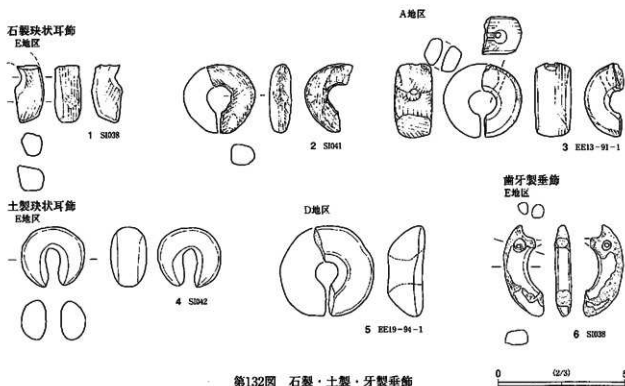
第129圖 貝刃



第130圖 土器片鏟



第131圖 不明土製品



第132圖 石製・土製・牙製垂飾

は磨き整えられている。最大長27.0mm ×最大幅19.0mmのほぼ円形に復元されるが、中心の孔径は10.5mm前後、切れ目の長さは9.5mm前後で円孔が僅かに大きい。中央孔に掛かる断面形は表裏と孔側が直線的、周縁が丸みを持つD字形で、重さは4.13gである。黒浜式期の可能性のあるSI041より出土。3は白、緑白、深緑色が斑状に混じり合った滑石製の耳飾片で、器面は丁寧に磨き整えられている。現存長28.4mmだが円形に復元される。孔径・切れ目ともは10.5mm前後と等しい。中央孔に掛かる断面形は白形で、重さは9.0gである。器上部にある断面ルート状の両側穿孔による孔は上端で横方向の溝を伴うことから、欠損部にも存在したと考えられる。対をなした孔は溝の凹みを伴い補修に使用した紐状結着材を固定していたと考えられる。主体は花積下層式期、次いで黒浜式期及び興津式の遺構が検出されたA地区より出土。

4・5は土製塊状耳飾で、出土した2点を図示した。4は完形で最大長24.0mm ×最大幅24.7mmとほぼ真円を呈し、重さは7.79gを量る。孔に掛かる断面形は略楕円形で厚みがあり、孔の長径は10.5mm前後、切れ目の長さは4.5mm前後と中央孔が大きい。設楽博巳による分類では前期後半に盛行する藤野台タイプに該当する。浮島式期のSI042より出土。5は最大長35.5mmだが径36.8mm前後の真円に復元される残存率1/2強の耳飾片で、重さは8.63gを量る。片面が平坦で、中央孔に掛かる断面形はカマボコ形を呈す。このような特徴的な形態を有す耳飾は石製では藤田富士雄による有明山社型が知られるところで、これを模したとされる土製耳飾は西川博孝により前期後半に多い日向タイプと命名されている。二ツ木式～浮島式期の遺構が検出されているD地区より出土。

## (2) 歯牙製垂飾 (第132図6)

貝層を伴わない黒浜式期のSI038の覆土中層から1点のみ出土した。僅かな欠損や表層の剥落が認められるが、イノシシの中切歯(Ⅰ1)を素材とする。先端のエナメル質を取り去って加工しているが、素材の特徴を活かした垂飾と思われる。歯根に近い部分に垂れ下げ用の穿孔が認められる。最大長36.0mmを測り、重さは2.85gを量る。

## 第8節 貝層出土の動植物遺存体

柏北部東地区の調査では、縄文前期各時期の遺構内貝層が多数発見されており、この時期の動物資源利用の実態を解明する上で、きわめて重要な資料となり得るものである。駒形遺跡においても、報告対象地区内で、遺構内貝層8か所、面状貝層1か所を検出した。貝層の形成時期は、確実なところでは前期初期から前期後葉である。貝層中からは、13種以上の貝類多数のほか、魚類2種以上、哺乳類3種が少数出土している。動物遺存体は、ほとんどが貝サンプルから検出したものであるが、魚類・哺乳類の一部は発掘中に発見したものである。なお、貝層の堆積状況については第2章第2節・第3節・第5節に記載した。

貝類の同定は一部(SI003・SX003)を上守が行った他は、全て小宮が行った。魚類・哺乳類の同定・分析は小宮が行い、小宮の分析成果をもとに上守が作表と事実記載を行った。なお、貝類の分析にあたって当財団・西野雅人の協力を得た。

### 1 分析方法

貝サンプルは、9か所の貝層すべてで採取している(第18表)。ただし、出土した遺構が不明確なSI039とされたサンプルと、時期が不明確なSK074・SK079のものは分析対象から除外した。SI014ではコラムサンプルを分析対象とし、それ以外の一括サンプルは除外した。

貝サンプルは9.5mm・4mm・2mm・1mm・0.5mmメッシュの試験フルイによる水洗分離を経て、選別作業を行った。ただし、採取量の多いSX003については、選別以降の作業を一部に絞った。貝類は4mmメッシュ以上を選別し、二枚貝類は殻頂部の絞歯が約半分遺存するものを左右別に集計し、多いほうを最小個体数とした。巻貝類は殻軸の下端が遺存するものを集計した。計測作業は計測可能個体が多い種について実施した。計測は、ハマグリの一部について2.5mmの階級幅で記録する方法で、他はデジタルノギスを使って行い、2.5mmの階級幅のヒストグラムを作る段階で一つにまとめた。魚類・哺乳類等についてはすべてのメッシュを対象として選別することを基本としたが、ほとんど含まれていないため、遺存体を検出したSI051とSK050以外のサンプルでは、精密な選別を実施しなかった。

第18表 貝サンプル一覧

サンプル名	旧遺構名	種別	時期1	時期	採取法	cut	採取量	分析量	備考
SI051	(15) SI002	住居跡	前期初	花板下層	コラム	6	29ℓ	29ℓ	30×30×厚さ5cmを6カット。魚類・哺乳類出土
SI014	(1) SI003	住居跡	前期中	黒浜	コラム	5	23ℓ	23ℓ	30×30×厚さ5cmを6カット
SI003	(2) SI003	住居跡	前期中	黒浜	コラム	7	LL袋7	不明	貝層平面形×厚さ5cmか。水洗後で10.2リットル
SI012	(1) SI001	住居跡	前期中～後	黒浜～踏破a	一括	2	6.6ℓ	6.6ℓ	4ブロックのうち2ブロックで20×20cm×貝層の厚さを採取
SK050	(4) SX001	土坑	前期後	浮島	不明	5	不明	不明	魚類出土
SX003	(10) SX001	貝塚中地点	早期後～前期中重	桑原文～黒浜	ブロック毎一括	3	18ℓ	8.4ℓ	2ブロックを全量、1ブロックは一部採取
以下は分析・保管対象外									
SI014-B	(1) SI003	住居跡	前期中	黒浜	一括		LL袋11		
SI039?	(12) SI006?	住居跡	-	-	一括		土袋1		出土遺構不明確
SK074	(12) SK006	土坑	前期中?	黒浜?	一括	1	不明	不明	
SK079	(13) SX002	土坑	不明	不明	一括		LL袋3		

第19表 動物遺存体種名一覧

腹足綱	前瓣室綱	原趾腹足目 中腹足目 新腹足目	リュウテンサザエ科 ウミナナ科 アケキガイ科	スガイ ウミナナ科 アカニシ	<i>Lanella coronata corensis</i> <i>Potamididae</i> gen. & sp. Indet. <i>Rapana venosa</i>
二枚貝綱		フネガイ目	フネガイ科	ハイガイ サルボオ	<i>Tegillarca granulosa</i> <i>Scapharca subcrenata</i>
			ナミマガシワ科 イタボガキ科 バカガイ科 マルスダレガイ目	ナミマガシワ マゴキ シオフキ イチヨウシタリ ウネナシトマヤガイ ハマグリ アサリ オキシジミ	<i>Anomia chinensis</i> <i>Crasostrea gigas</i> <i>Macra quadrangularis</i> <i>Merissa caposides</i> <i>Trapezium liratum</i> <i>Meretrix lusoria</i> <i>Ruditapes philippinarum</i> <i>Cyclina sinensis</i>
硬骨魚綱		スズキ目	スズキ科 タイ科	スズキ属 マダイ	<i>Lateolabrax</i> sp. <i>Fagrus major</i>
哺乳綱		ネコ目 ウシ目	イヌ科 シカ科	イヌ シカ	<i>Canis familiaris</i> <i>Cervus nippon</i>



第20表 貝類同定結果

種名	前期前							前期中					前期後		
	SI051 -1	SI051 -2	SI051 -3	SI051 -4	SI051 -5	SI051 -6	SI051 -7	SI014 -1	SI014 -2	SI014 -3	SI014 -4	SI014 -5	SI003 -1	SI003 -2	SI003 -3
スガイ											1				
ウミエナ科	2	5	7	13	7	4	2		3	1	4	2		7	
アカニシ			4	2	1					1	4	2		2	
ハイガイ	42	35	82	74	91	28	3								
サルボオ									1	1	7	7	16		
ナミマガシワ															
マガキ	29	93	116	109	53	20	6		1	1		1	33	72	5
シオフキ	1								4	7	8	7	1	8	1
イチョウシラトリ												1			
ウネナシトマヤガイ	2	6	10	2	1	2									
アサリ								73	263	517	627	307	17	97	8
ハマグリ	4	12	56	52	41	22	4	2	6	11	17	22	6	31	10
オキシジミ	30	48	32	20	18	10	4	201	663	908	834	422	64	233	24
合 計	110	199	307	272	212	86	19	276	940	1447	1496	771	64	233	24
分析量 (リットル)	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	2.0	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	—	—	—

種名	前期中～後				前期後					早期後～後期中				
	SI003 -4	SI003 -5	SI003 -6	SI003 -7	SI012 -1	SI012 -2	SK050 -1	SK050 -2	SK050 -3	SK050 -4	SK050 -5	SK003 -1	SK003 -2	SK003 -4
スガイ													1	
ウミエナ科	2	11	22	8	2		13	1	4	3	1	3	6	1
アカニシ		2	2				2	1	6	2	4	1		
ハイガイ			1						3		1	50	46	13
サルボオ	2	10	3	5	2	39	2			1	1	1		
ナミマガシワ						1								
マガキ	23	58	86	64	14	8	55	5	20	4	8	24	12	8
シオフキ	2	6	23	1		1	2	1	1	2	1			
イチョウシラトリ														
ウネナシトマヤガイ														
アサリ	87	262	481	41	2	1	1	5	4		3			
ハマグリ	21	100	175	28	7	15	3	10	5	24	10	25	22	18
オキシジミ		5	7	2		2	74	30	73	98	63	27	17	4
合 計	137	454	800	149	27	67	152	53	116	134	81	132	104	44
分析量 (リットル)	—	—	—	—	3.4	3.2	—	—	—	—	—	3.0	3.0	2.4

※SK003-3は採取量が少いため分析対象外とした。

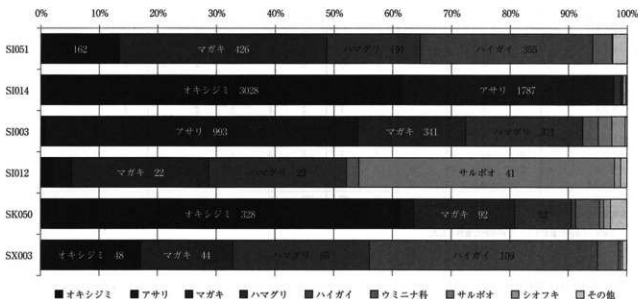
## 2 貝類 (図版63)

貝類は10科13種以上を検出した(第20表)<sup>(2)</sup>。表にはカットごとの同定数を示したが、どのサンプルもカットごとの差はほとんど認められない。これは数種が混在した状態で廃棄されたものとみられる。そこで、サンプルごとにまとめた貝種組成を第21表・第133図に示した。

主要構成種をみると、湾奥泥底干潟種のオキシジミ・ハイガイ・マガキと内湾砂底種のハマグリ・アサリ・サルボオが混在している。前者は、縄文早・前期に海進によって深く入り込んだ海域に発達した貝類群集である。後者は内湾域に生息する貝類群集である。貝種組成は、特定の1～2種に偏らず、全体として湾奥泥底干潟種と内湾砂底種が混在する点特徴といえる。したがって、単純に別々の漁場からもたらされたと解釈することはできない。むしろ、同一ないし連続した漁場から採取されたとみるべきであろう。計測値については、データの提示に留めておく(第22表、第134図)。貝種組成や計測値の評価は、今後の試料の追加を待って検討したい。

第21表 貝種組成表

種名	前期初	前期中	前期中	前期中	前期後進	早期後～前期中	全体	%
	SI051	SI014	SI003	SI012	SK050	SX003		
オキシジミ	162	3028	14	2	328	48	3582	40.22%
アサリ		1787	993	3	13		2796	31.39%
マガキ	426	3	341	22	92	44	928	10.42%
ハマグリ	191	58	371	22	52	65	759	8.52%
ハイガイ	355		1		4	109	469	5.27%
ウミナナ科	40	10	50	2	22	10	134	1.50%
サルボオ		9	43	41	4	1	98	1.10%
シオフキ	1	26	42	1	6	1	77	0.86%
その他	30	9	6	1	15	2	33	0.71%
その他の内訳								
アカニシ	7	7	6		15	1	28	
ウネナシトマヤガイ	23						23	
スガイ		1				1	2	
ナミマガシワ				1			1	
イチョウシラトリ		1					1	
合 計	1205	4930	1861	94	536	280	8906	100.00%



第133図 貝種組成

註3 各サンプルの貝種組成で占める割合の多いものを図版64に取載した。各サンプルとも左→右の順となる。

第22表 貝類計測値分布

マガキ数長					サルボオ数長		ハイガイ数長	
S012	S003-2	S003-5	S003-6	SX003	S012	S1003	S003	SX003
-5					-5		-5	
-10				1	-10		-10	
-15	1	3		2	-15		-15	
-20	2	7	2	7	-20		-20	2
-25	13	28	6	15	-25	2	-25	16
-30	7	11	14	12	-30	25	-30	65
-35	5	20	17	23	-35	20	-35	53
-40	3	8	7	23	-40	11	-40	2
-45	1	5	7	5	-45	2	-45	1
-50		1	2	2	-50	3	-50	1
-55	1	1	2	2	-55		-55	
-60					-60		-60	1
-65			1		-65		-65	
-70				2	-70		-70	
-75					-75		-75	
-80					-80		-80	
-85					-85		-85	
-90					-90		-90	
-95			1		-95		-95	
試料数	35	94	57	92	48	60	48	178
平均	26.9	27.9	33.5	30.8	31.9	31.7	37.6	38.7
標準偏差	7.8	8.1	10.9	8.5	12.0	6.2	6.2	3.2
標準偏差								5.5

ハマグリ数長

(ハマグリの数より右はノギス不使用のデータ)

S012	S003-5	S003-6	SX003	S006	S014-1	S014-2	S014-3	S014-4	S014-5	SX074	SX00
-5											
-10											
-15		2	2								
-20	1	24	9	1		9	19	23	26	19	13
-25	2	27	25	2	3	50	160	203	161	66	99
-30	4	23	52	9	16	39	182	268	186	94	76
-35	1	18	34	8	10	20	107	160	188	79	69
-40	1	8	9	3	12	17	45	84	110	54	59
-45	3	3	4	3	13	6	15	48	66	13	8
-50	1		2	1	20	1	4	17	18	7	5
-55			1		2	1	3	5	3	4	3
-60								3		3	1
-65											
-70	2										
-75											
-80											
-85											
-90											
-95											
試料数	15	115	147	28	76	143	535	808	763	336	243
平均	36.8	25.6	27.8	32.6	38.0	38.0	38.2	39.5	30.7	30.0	37.1
標準偏差	14.6	6.7	6.2	7.5	8.3	6.8	6.1	6.8	7.3	7.1	7.4

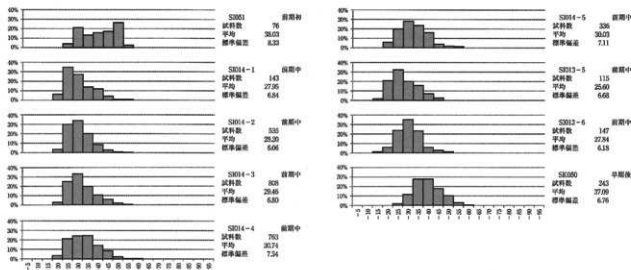
オキシジミ数長

シオフキ数長

アサリ数長

ウミエビ科数長

S003	SX003	S003	S003-5	S003-6	S003	SX003
-5						
-10						
-15						
-20		1				
-25		1				
-30				2		
-35	7	2		3		
-40	1			4		
-45		3		2		
-50				1		
-55						
-60						
-65						
-70						
-75						
-80						
-85						
-90						
-95						
試料数	8	7			13	4
平均	34.4	33.1			35.5	20.9
標準偏差	2.4	10.4			6.4	1.1
試料数			131	200		25
平均			28.4	23.0		18.9
標準偏差			6.8	4.1		4.0



第134図 貝類計測値分布

### 3 魚類・哺乳類 (図版64)

#### (1) SI051

魚類 発掘資料では、属以下のレベルまでの同定が可能な魚類は、スズキ属とマダイの2種である(第23表)。

サンプル資料については、ニシン科(イワシ類)の腹椎1点、真骨類方骨・鱗棘各1点、椎体3点、マダイの左歯骨1点がみられる(第24表)。タイ科遺存体は、発掘資料・サンプル資料とも約3.6m×2.4mの範囲から出土している。前上顎骨・主上顎骨・歯骨はいずれも左側であり、復元体長が同程度であることから1個体由来する可能性がある。

哺乳類 発掘資料のみである。イヌ、シカが同定された。偶蹄類遺存体は、いずれも保存状態の良い成獣骨である(第23表)。イヌの遊離歯は上顎第4小臼歯で歯根が残存する。

#### (2) SK050

魚類 魚類はサンプル資料のみである(第24表)。タイ科臼歯状歯1点、真骨類種不明の椎体がみられる。

第23表 発掘資料動物遺存体同定結果

SI051・魚類			
種名	同定部位	注記No	計測値(mm)
スズキ属	主髯蓋骨	275	復元体長25~30cmのフッコ級
スズキ目種不明	鱗棘	297	
スズキ目種不明	鱗棘	298	
マダイ	後頭骨	266	大型
マダイ	前上顎骨(左)	320	前上顎骨長50±、標準体長60cm以上の大型
マダイ	主上顎骨(左)	327	全長52L、大型
タイ科種不明	臼歯状歯	333	ヘダイ亞科orマダイ亞科、以下同
タイ科種不明	臼歯状歯	334	
タイ科種不明	犬歯状歯	299	
タイ科種不明	犬歯状歯	305	
タイ科種不明	犬歯状歯	307	
タイ科種不明	犬歯状歯	343	
タイ科種不明	犬歯状歯	345	
タイ科種不明	方骨(左)	287	
タイ科種不明	椎体破片	308	
タイ科種不明	鱗棘	270	
タイ科種不明	鱗棘	336	
タイ科種不明	鱗棘	337	
タイ科種不明	腹椎	267	椎体径(前方)14.3、椎体長13.0
タイ科種不明	腹椎	329	椎体径(前方)13.8、椎体長8.6
タイ科種不明	尾椎	335	椎体径(前方)6.8、椎体長8.9

SI051・哺乳類			
種名	同定部位	注記No	計測値(mm)
イヌ	上顎第4小臼歯(右)	341	歯冠長14.8、歯冠長(最大)15.3、歯冠幅8.4、歯根残存、咬合面の咬耗ほとんどなく若齢か
イノシシ?	大腿骨破片	254	種同定不明確
シカ	基節骨	260	遠位幅14.3、全長53.4、成獣
シカ	基節骨	274	遠位幅13.6、成獣
シカ	中節骨	344	成獣
偶蹄類種不明	肋骨片	280	
偶蹄類種不明	肋骨片	311	
小型哺乳類?	椎骨?近位端	314	

### (3) 魚類遺存体について

スズキ属は、内湾を回避し、河口まで遡るスズキの可能性が高い。マダイは近代以降の東京湾の生息地からみると、当遺跡の近くに入り込んだ湾奥部まで回避するとは考えにくい。同じく前期前葉の松戸市幸田貝塚でも多数出土している。今回はデータの提示に留めておき、これらの評価は今後の試料の追加を待って検討したい。

第24表 サンプル検出魚類遺存体同定結果

SI051		cut-メッシュ	cut1 -20	cut1 -10	cut2 -20	cut3 -20	cut4 -20	cut4 -10	cut5 -20	cut5 -10	cut6 -9.52	cut6 -20	cut6 -10
ニシン科	稚体			1									
マダイ	歯骨 左										1		
タイ科	大歯状歯								3			1	1
	臼歯状歯	1	1	5	2	5	7	2	9			6	
真骨類	方骨			1									
	鱗鱗			1									
	稚体			1	2								
方骨・鱗鱗は小形魚。マダイ歯骨は下枝破片で発掘資料と同サイズ													
SK050		cut-メッシュ	cut1 -20	cut3 -10	cut5 -10								
タイ科	臼歯状歯			1									
真骨類	稚体		1	1									

### 4 堅果類 (図版64)

植物遺存体ではクルミの炭化果皮が花積下層式期のSI051で1点、黒浜式期のSI014で2点出土している。いずれもコラムサンプルに含まれていた。

## 第9節 古墳時代以降の遺構・遺物

### 1. 古墳時代の遺構・遺物 (第55・135図)

本調査区からは、古墳時代後期の竪穴住居跡1軒 (SI030) が検出された。D地区南端、DD19-97グリッド付近に位置するが、北東コーナーからカマドにかけてのきわめて小範囲であり、大部分は大松遺跡(8)でSI001として調査されているため、正式な報告は大松遺跡に委ねるが、ここでは概略を述べる。

1辺5.5mほどの正方形を呈し、確認面からの深さは北側で0.5~0.6mと比較的深い。主柱穴は対角線上に4本掘り込まれ、南側の柱穴間には出入り口ピット、北東コーナーには貯蔵穴が掘り込まれる。カマドは北壁中央に掘り込まれ、煙道部は比較的長い。覆土は自然堆積の様相を呈する。出土遺物については、未整理のため詳細は不明であるが、土器片の観察からは古墳時代後期の所産と思われる。

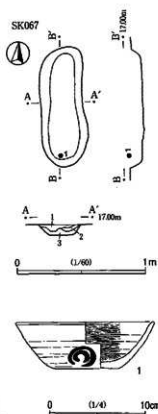
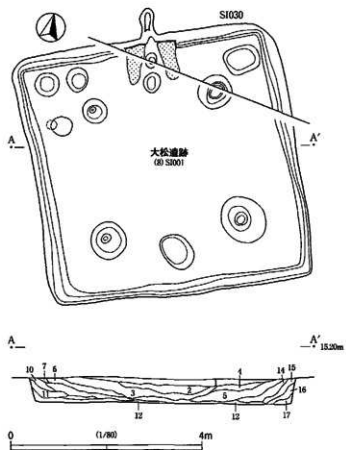
### 2 平安時代の遺構・遺物 (第135図、図版12)

SK-067は、D地区南側、CC19-91グリッドに位置する土坑である。長軸1.94m、短軸0.84m、確認面からの深さ0.21mを測り、長楕円形を呈する。覆土は自然堆積である。

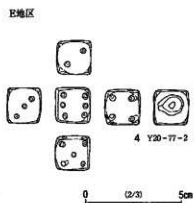
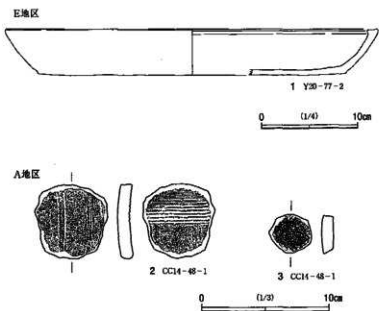
1は、口径14.5cm、器高4.8cmを測る完形の土師器杯である。ロクロ成形で、体部下端に手持ちヘラケズリを施す。底部は、回転糸切り後、周縁に回転ヘラケズリを加える。体部外面下に「○」の記号と思われる墨書が書かれる。この土器の年代は、器形等から9世紀中葉頃と考えられる。

### 3 近世以降の遺物 (第136図)

1は焙烙の鍋である。口唇部は平坦で肥厚し、内面に凹みが巡る。現存部分では耳は確認されない。2・3は常滑の鉢片を円形に加工したものである。3の側面には僅かな研磨がみられる。4は土製の菓子で、1目の周囲に焼成後の線刻が施される。



第135図 SI030・SK067



第136図 近世以降の遺物

## 第3章 まとめ

本章では第2章で記載した縄文時代の遺構・遺物の内容に基づき、駒形遺跡の第19次調査までで明らかになった内容を示すとともに、今後、実施される予定の第20次以降の調査成果をとりまとめるに際し必要な課題を提出することとする。

### 第1節 出土土器と集落の変遷

#### 1 出土土器の変遷（第137～141図）

遺構出土と遺構外出土を併せても欠落する型式があり、且つ型式によって多寡の差があるが、第1群1類の早期前半弥生系土器から第4群3類の後期中葉加曾利B式・曾谷式土器までが出土している。ここでは主要な資料を集めた上で仮称ではあるが縄文土器の大別毎に駒形Ⅰ期～Ⅳ期を設定し、第137～141図に示した。これらのうち検出遺構のほとんどが帰属する駒形Ⅱ期（前期）については、さらにⅡa～Ⅱe期に細分した。以下に順を追って記す。

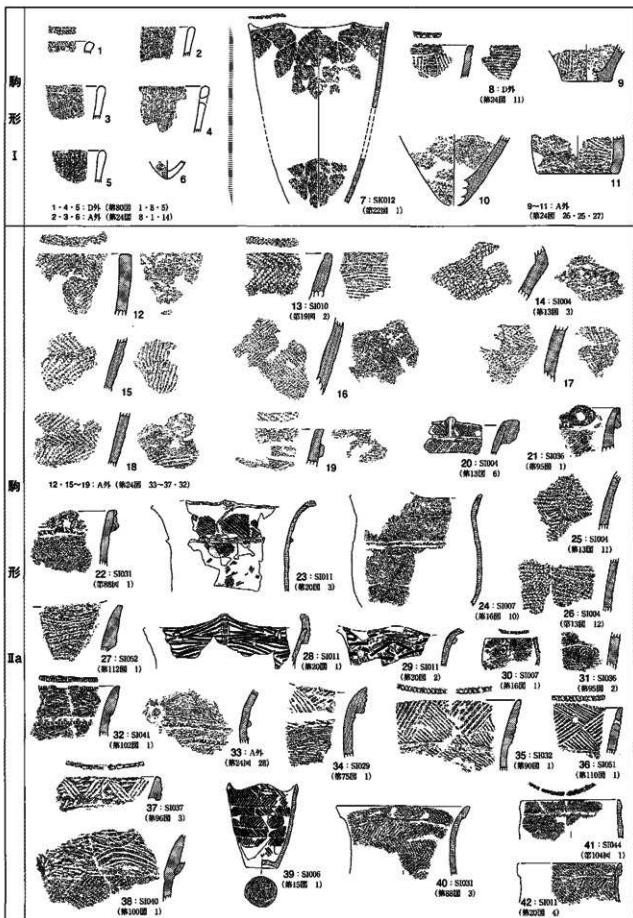
##### （1）駒形Ⅰ期

第1群1類とした早期前半弥生系土器と2類とした条痕文系土器の時期を充当させた。弥生系土器で概要を俯瞰できる資料として第137図1～6を示した。遺構に伴う可能性が高いものは、集石土坑と考えられるSX001から稲荷台式の細片が出土しているだけである。この周囲のグリッドでは僅かな差異はあるが、他より弥生系土器が纏まって出土している。全体的にはA・D地区遺構外を主体に井草式～稲荷台式が散漫に分布する傾向にある。こうした状況は若干の多寡はあっても、柏北部東地区や常磐自動車道建設に伴い発掘調査された周辺遺跡群においても看取される。しかしながら、次期の沈線文系土器は今回の遺跡調査範囲内から検出されていない。常磐自動車道遺跡群では水砂遺跡や中山新田Ⅰ遺跡などで、柏北部東地区遺跡群では富士見遺跡や現在発掘調査継続中の小山台遺跡などで良好な資料が検出されているものの、駒形遺跡では現在までのところ空白期となる。

条痕文系土器で概要を俯瞰できる資料として第137図7～11を示した。確実に遺構に伴うものとして炉穴であるSK012から、緩やかな波状縁で不明瞭な表裏条痕のみが施される大形破片が出土している。遺構外のものとしてはA・D地区の炉穴周辺グリッドから出土しているが、縄ヶ島台式と判別できる有文の破片が微量ある以外はいずれも表裏とも条痕のみの施文である。しかしながら、同じく炉穴が検出されているE地区では計5片と少なく、炉穴の分布とも重ならない。底部は尖底・平底の両者があり、台付状の脚部も認められる。有文が少なく不明な点を含むが、土器型式では次項で触れる花積下層式との型式学的な断絶が認められそうでもあり、そもそも同型式と条痕文系土器との関係に課題があるとも言える。本期はかなり時間幅のある設定となったが、今後の調査成果次第でⅡ期のような細分が可能となろう。

##### （2）駒形Ⅱa期

第2群1類とした前期初頭花積下層式土器の時期を充当させ、内容が俯瞰できる資料として第137図12～第138図57を示した。破片資料が主体となるがA・E地区を主に遺構出土のものが多く、23・28・29・



第137圖 出土土器集成(1)



42はSI011から出土した良好な一括資料である（巻首図版）。内容を概述するが、12～19はいわゆる縄文条痕土器である。19～24は口縁部や頸部以下に貼付隆帯文や区画隆起線を付加するものである。25～34は口縁部や口頸部の主幹文様に捻糸側面圧痕文を施すもので、28～30、32・33では区画線として貼付隆帯文や隆起線が付される。34～38は口縁部に鋸歯状あるいは重弧状のモチーフを沈線によって描出するものである。39～46は2種の原体による羽状縄文で横帯区画を構成するもので、開いた端を縛り留めた原体末端線が認められるものが多い。肥厚あるいは折り返した口縁部形態となるものが認められる。47～52は放射肋を有す貝殻による背圧痕文が施されるものである。51のような殻頂部を多用した扇状の圧痕は他遺跡でも普遍的に認められているが、図示した他のは比較的大きな個体の殻表を揺り動かして付した単位の長い圧痕となる。斜位に連続して施されることから擬似縄文的效果を有すると思われ、49では縄文Lと併用される。53～57は東海地方が分布の中心となりⅡa期の異系統土器にあたる木鳥式土器で、53がSI050の所在するグリッド出土、他はSI040出土と花積下層式と伴出する。

以上の内容を現段階での研究成果に照らし合わせ、駒形遺跡の花積下層式の位置付けを考えてみたい<sup>(1)</sup>。前期初頭とされる花積下層式はいわゆる羽状縄文系土器群の嚆矢的存在であるため、その中に前段階からの過渡的要素が含まれるのは既往研究のとおりである。駒形遺跡においても縄文条痕文、貝殻文、貼付隆帯文、沈線描出の鋸歯状・重弧状文などの過渡的要素と、捻糸側面圧痕文、羽状縄文などより新しい要素のものが共に認められる。底部は尖底を含まず、平底もしくは上げ底である。このうち縄文条痕土器の表面に施される羽状・菱形文は、花積下層式の前段階の特徴である異方向縄文によらず2種の原体による横帯構成で、裏面の条痕文は放射肋を有す貝殻による明瞭な文様が施される。器厚は1cm以上とかなり厚手で、口唇部形態は12・13・19のように角頭状になり、端部に施文帯を有す。口唇部形態や条痕文の施文具合などは古手の要素とも考えられるが、縄文条痕土器の遺構出土例は2種の原体による横帯構成の羽状縄文と、擦痕のものが伴うSI010のみであり、いずれも破片資料というやや零細な内容である。

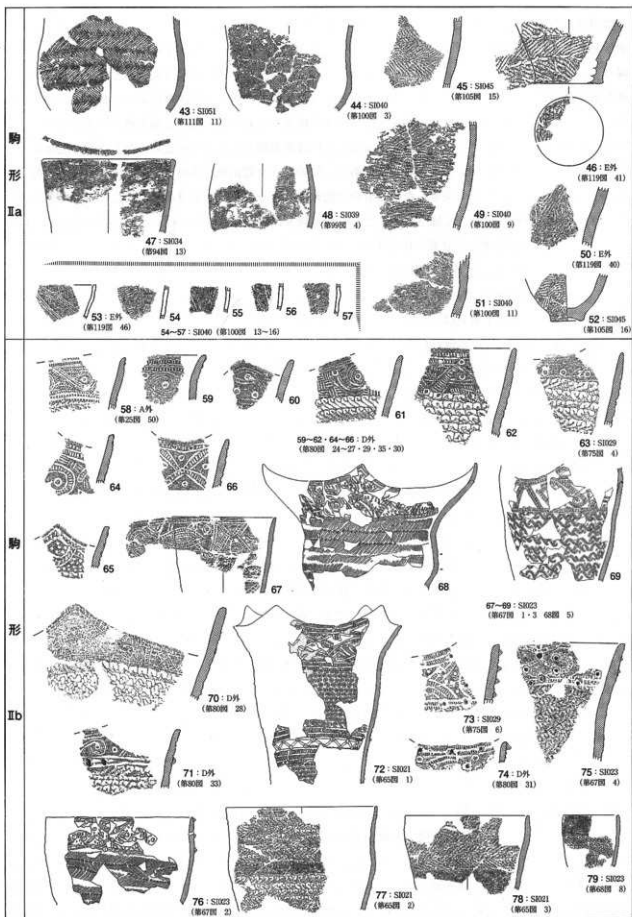
口縁部の主幹文様は捻糸側面圧痕文、沈線描出の鋸歯状・重弧状文などで構成されるが、遺構出土のものを中心に全体的に文様帯の幅や構成はより新しい様相を呈す。即ち横位隆起線や隆起線文で区切られる位置が低く、文様帯の幅は三指幅以上である。頸部まで文様帯のある多段構成のものが多いなどもその特徴として挙げられる。また、点状文様として刺切文が施される例も多い。異系統土器では下吉井式は1片もなく、第2群4類に含まれる木鳥式は少量ながら出土しているもののいずれも小破片である。

既述した内容から駒形遺跡の花積下層式は現時点では中段階以降が主体を占めると考えられ、全体的な様相を捉えるには条痕文系土器群終末を含め未だ課題が残されている。

註1 1980『菊名貝塚の研究』、1994『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』、1995『沼南町石揚遺跡出土の花積下層式土器』、2008『タタラ山遺跡-第2地点-』の成果を参照した。

### (3) 駒形Ⅱb期

第2群2類とした前期前葉二木式土器の時期を充たさせ、内容が俯瞰できる資料として第138図58～第139図87を示した。D地区の遺構・遺構外出土のものが主体となる。このうち67～69・75・76・79・80・81・83はSI023から、72・77・78・87はSI021から出土した良好な一括資料である。内容を概述するが、58～61は単段の口縁部上下端を刻み目付き隆起線や異方向1組の捻糸側面圧痕文で区画し、主幹文様を擦手状側面圧痕文、点状文様を円形竹管刺突文や刺切文で描出するもので、胴部縄文は末端環付による幅狭



第138圖 出土土器集成(2)

等間隔横帯区画となる。62・63は口縁部区画線が扁平で特に下端線が不明瞭である。主幹文様と点状文様の文様要素、胴部縄文の種類・区画法は基本的に58～61と変わらないが、燃糸側面圧痕文は直線的になる。64～70は比較的幅広い口縁部文様帯に1本引きによる梯子状沈線で直曲線的な主幹文様、円形竹管刺突文や列点文、刺切文で点状文様が施されるものである。胴部縄文は引き続き末端環付が主流だが、69のような異方向2本を纏く結節した原体を回転した仮称「結節回転A」<sup>(2)</sup>も幅狭等間隔横帯区画に用いられる。71～77は基本的に64～70と同様だが、点状文様に瘤状貼付文が追加されると共に単独で用いられるものも含まれる。77は狭小な口縁部文様帯となる。77～79は口縁部文様帯の加飾に乏しく口縁部あるいは胴部に無文帯を有すもので、胴部縄文は幅狭等間隔横帯区画とならないものである。80は追加成形の粘土披り下には貝殻背圧痕文、上方には斜縄文が施され羽状構成となっているもの。81は多方向に脚短な末端環付が施されるもの。82～86は0段多条R2本またはL2本を各々纏く結び、この結節部を閉じた端とした仮称「結節回転B」が幅狭等間隔で施文されるものである。83・86は底外面に胴部と同種の縄文が施されるものである。

これらの内容を現段階での研究成果に照らし合わせ、駒形遺跡の二ツ木式の位置付けを考えてみたい<sup>(3)</sup>。58～61は文様構成、文様要素等から二ツ木式古段階（新田野段階）と考える。62・63は同中段階（貝崎第1段階）に相当するもので、いずれも図示したものがほとんど全てで且つ現段階では遺構に伴わない。これら以外の遺構一括を主とした資料は、口縁部の文様構成や文様要素、胴部縄文の区画法等から同新段階（貝崎第2段階）に相当するものと考えられる。また、幅狭等間隔横帯区画の一翼を担う仮称「結節回転B」の事例が二ツ木式期のものとして追加されたことも大きな成果である。既述の内容から駒形遺跡の二ツ木式は現時点では新段階のものが主体を占めると考えられ、花積下層式とは若干の不連続が生じている。

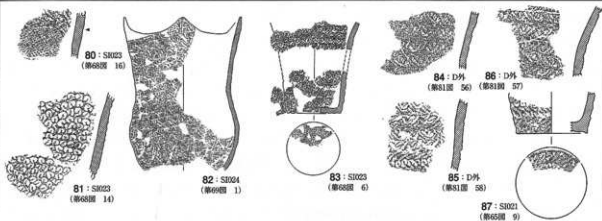
註2 仮称「結節回転B」も含め、詳細は「結節回転による施文効果—千葉県幸田貝塚資料 山内清男考古資料12の整理作業成果から—」を参照いただきたい。

- 3 次項のⅡc期を含め、1981『新田野段階花積下層式土器と二ツ木式土器について』、1984『深作東部遺跡群発掘調査報告』、2000『千葉県幸田貝塚史料 山内清男考古資料12』、2006『第19回縄文セミナー 前期前業の再検討』の成果を参照した。

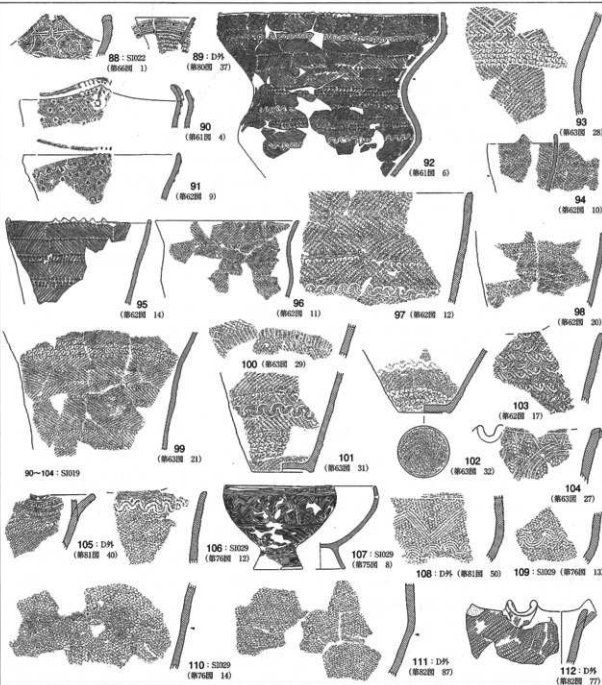
#### (4) 駒形Ⅱc期

第2群3類とした前期前業岡山式土器の時期を充當させ、内容が簡略できる資料として第139図88～112を示した。D地区の遺構・遺構外出土のものが主体となるが、遺構外出土の分布も本区内に大きく偏っている。このうち90～104は遺構一括で時間的に前後するものが一部混入するが、SI019から出土した岡山Ⅰ式の良い一括資料、106・107・109・110はSI029から出土した岡山Ⅱ式の良い一括資料である。内容を順に概述するが、88は双頭状の波状縁で、主幹文様・点状文様とも半截竹管内側による平行沈線で描出されるもの。90は集合角状突起が付される波状縁のもので、梯子状沈線で描出される主幹文様の基本構図は鋸歯状+山形附加、点状文様は瘤状貼付文である。93は半截竹管内側による平行沈線で主幹文様が描出されるもの。これらの主幹文様は直線的である。100は直前段合燃を地文とし、胴部中に半截竹管による平行沈線が縦位に密接して施されるものである。89・91・92は梯子状沈線による主幹文様は描出されず、点状文様であった瘤状貼付文とタガ状の真正コンパス文が文様構成上、重要度を増しているものである。94～99・101・102は主な文様が縄文となるもの。口縁部は（集合）角状突起が付され、胴部や底部にはタ

胸形 Ib



胸形 Ic



第139图 出土土器集成 (3)

が状真正コンパス文が巡らされる。縄文は脚短多段と脚長の0段多条末端環付が異間隔横帯区画となっている。103は仮称「結節回転B」が幅狭等間隔で施文されるもので、ニツ木式～関山Ⅰ式の可能性がある。104～106・112は片口注口土器で、原体の差異などから時間幅がありそうだが、概ね関山Ⅱ式の範疇に収まるものである。107は台付土器で直前段合摺を地文とし、鉢の幅広口縁部と脚部に半載竹管内側による平行沈線を2本並行させて、鋸歯状・蕨手状などの主幹文様を描出する。108～111は組紐が施文されるもので、108・109では櫛歯状工具による鋸歯文やコンパス文が描出される。

これらの内容を現段階での研究成果に照らし合わせ、駒形遺跡の関山式的位置付けを考えたてみたい<sup>(4)</sup>。遺構外出土である88のような関山Ⅰ式古段階（貝崎第3段階）の可能性のあるものも僅かに存在するが、位置付けを考える上で重要なのは既述したSI019及びSI029から出土した遺構一括資料である。SI019出土土器は口縁部における文様構成の簡略化と、胴部への加飾傾向、古段階から継続する異間隔縄文横帯区画などの特徴から、関山Ⅰ式新段階（貝崎第4段階）に相当すると考えられる。一方、SI029出土土器は半載竹管内側による平行沈線を複数並行させ主幹文様を、櫛歯状工具によりコンパス文などを描出すること、地文として直前段合摺や組紐（組原体）が多用されることなどから、松戸市境外Ⅱ遺跡3号住居跡出土土器などに対比される関山Ⅱ式古～中段階に相当すると考えられる。既述の内容から駒形遺跡の関山式は現時点ではⅠ式新段階とⅡ式古～中段階のものが主体を占めると考えられ、ニツ木式新段階、黒浜式古段階との不連続が生じている。

註4 前掲註3の文献に加え、1978『貝崎貝塚第3次発掘調査報告』、1981『大古里遺跡発掘調査報告書』、2000『境外Ⅱ遺跡発掘調査報告書』の成果を参照したが、成果を十分咀嚼仕切れていない。

#### (5) 駒形Ⅱd期

第2群5類とした前期中葉黒浜式土器の時期を充たさせ、内容が簡略できる資料を要素毎に分別して第140図113～第141図149として示した。B・E地区の遺構・遺構外出土のものが主体であるが、A・D地区の遺構出土のものも含まれる。分布傾向は主として遺構の位置にほぼ重なるが、疎密の差はあれ全地区に広がっている。とりわけ比較的狭小な調査区内に黒浜式期主体の遺構が重複しているB地区では、遺構位置に限らずほぼ全域から出土している。このうち113・114・122・140・147はSI033から、117・128・146はSI012から、118・129はSI013から、120・124・133～139・141はSI014から出土した良好な一括資料である。内容を文様要素順に概説する。113～131は広義の沈線文が施されるもの。半載竹管による平行沈線あるいは結節沈線、またはヘラ状工具等による沈線文様を描出されるものである。113～118は口縁端部や胴括れ部に鋸歯状あるいは波状の沈線文やコンパス文が巡らされるもの。113・114はSI033出土の同一個体、約17m離れたSI038出土の115とSI047出土の116は接合する。119は器面全体に半載竹管による横位の波状文を施す。120～123・129は口縁端部に狭小な区画帯を形成するものである。120は胴部に平行沈線による大形波状文が展開する。121はB地区遺構外（SI015付近）出土で、波状線に平行して細身の半載竹管を2本組にして内側を用いた結節沈線文が2条引かれる。122は半載竹管を用いた複列の結節沈線が縦横の区画線や充填文として施される。123は胴部に附加条第2種が施される。124～127は半載竹管あるいは劣載竹管による平行沈線で、格子目文や葉脈文を描出するものである。128～131は半載竹管による平行沈線・結節沈線と円形竹管刺突文・円形凹文、焼成前の円孔等によって、粗形的な米字文やそれに類する文様を描出するものである。129は縦位3単位の円形凹文を貫くような形の細沈線が分割線として認められるが、

括れ部のコンパス文に結合する。131はいわゆる轡型菱形文になると思われる。なお、128はいわゆる無織維化した土器である。

132~147は各種の縄文が施されるものである。132はRL・LRによる結束第1種で羽状縄文が構成されている。133は末端環付Rを脚短・脚長に用いて多段に施す異間隔縄文帯区画となる。134は広義の組原体に含まれる前々段合拵（異節縄文）である。135は軸の素材が不明であるが軸に附加条を結めた原体を用いたものと思われる。136~140は附加条縄文を施したものである。附加条第1・2種、軸の縄が不明（あるいは表出しないように太い附加条を絡げたか？）のものが認められる。141は結節部分のみを横位回転したものか、2条を繰り結節した部分を同様に転がしたものであろうか判別が難しい。142~147は無節あるいは単節縄文を施したものの。142は直前段多条のRLが密に施されているもので、胴部下半には内皮の痕跡が残る幅広な半截竹管を用いた鋸歯状沈線を巡らす。143~145は器面の軟らかい段階で施文したことで生じた、施文単位切れ目のミミズ腫れ状はみ出し粘土が認められる。146・147は口縁部が朝顔状に開くいわゆる無織維化した土器である。

異系統要素を含む土器では黒浜式に併行する第2群8類に含めた148・149がある。図示しなかった1片を加え同一個体となるが、いわゆる網目状捻糸文が施される大木2a式土器あるいはその影響を受けた土器が、A地区遺構外の花積下層式と黒浜式が同割合で分布するSI007と花積下層式期のSI011に挟まれた狭小な範囲と、D地区遺構外から出土している。

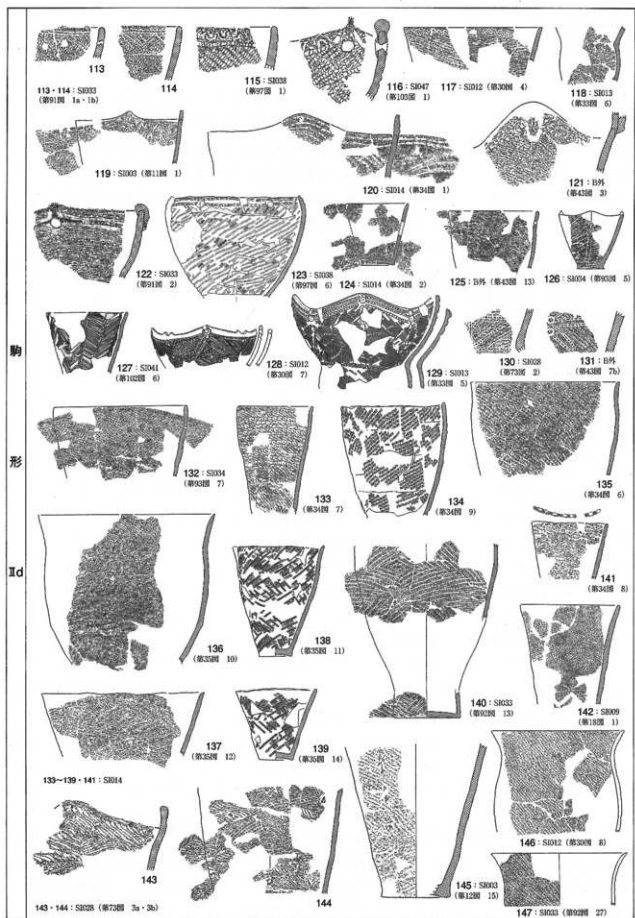
これらの内容を現段階での研究成果に照らし合わせ、胸形遺跡の黒浜式の位置付けを考えてみたい<sup>(5)</sup>。SI014出土土器は有文・縄文系を合わせ最も良好な一括資料である。有文では結節沈線による狭小区画帯+大形波状文のものと半截竹管による粗雑な格子目文が全面に施されるものがある。縄文系は既述のように多種のものが認められるが、中でも末端環付、前々段合拵、各種附加条縄文が揃っていることが重要である。特にこの段階での附加条縄文土器の多出は大宮台地では見られないとのことである。これらの内容から有文は少ないが黒浜古段階の好資料になると思われる。

SI012・013・033出土土器は、既述した内容から黒浜新段階の好資料になると思われる。有文では半截竹管を用いた波状文やコンパス文を口縁端部や胴括れ部に巡らしたもののや、縦位分割線を含め米字文の祖形となる構成を取るものがある。また無織維化した有文、縄文系土器が存在することからである。他遺構・遺構外出土土器においても新段階の資料が割合的には多いと思われる。

既述の内容から胸形遺跡の黒浜式は現時点では主に古段階と新段階のものが認められる。中段階については不明瞭だが、黒浜式の細分・地域相の問題も絡むので未明な部分も含まれよう。加えて課題は黒浜式期の拠点集落である富士見遺跡を中核とし、大局的には該期の同一集落群と考えられる胸形・大松・原畑遺跡、そして谷を隔てて位置する小山台遺跡の土器様相を総合的に分析して結論づける必要がある<sup>(6)</sup>。

註5 1989「黒浜式土器の系統性とその変遷」、1990「シンポジウム 大木、有尾、そして黒浜—縄文前期土器群にみる系統と交流の実態—」、1997「第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相」、2008「羽状縄文系土器」『総覧 縄文土器』の成果を参照したが、未読の重要文献が多々あると思われる。なお、本資料を実見された田中和之、奥野麦生両氏には数々の重要な教示を得た。

6 現在整理作業中の原畑・大松遺跡資料には、岡山Ⅱ式終末—黒浜式古段階の好資料が含まれている。田中和之、奥野麦生両氏の指摘によりその内容を確認し、他遺跡の類例も若干検索できた。また、集落群の中核に位置する富士見遺跡の整理作業進捗によってもたらされる新発見が多々あることは間違いない。



第140图 出土土器集成(4)

## (6) 胸形Ⅱe期

第2群6類・7類とした前期後葉諸磯式・浮島式と末葉興津式土器の時期を充たさせ、内容が俯瞰できる資料として第141図150~168を示した。器形の窺い知れる資料は僅かだが殆どが破片資料である。該期に属する遺構は少ないが、C地区以外に分散的に所在する。C地区を除いた範囲に遺構外も含め散漫に分布するが、出土位置から判断すると遺構覆土中出土の可能性があるものを含んでいる。内容を概述するが、東関東地域を中心に前期後葉~末葉土器群の折衷土器が多々認められるので、浮島・興津式と諸磯・十三菩提式を厳密に分別することが難しい場合がある。今回は便宜的に分けてしまったものを含んでいると思われる。150~154は諸磯式に分別したものの。150・152は半隆起線のC字形の結節沈線文を施す。150には連結木葉文も施される。152は結節沈線文でX字状を基調としたモチーフが描出されるが、地文の疎らな燃糸文Lは浮島式との折衷的要素であろうか。151は上弧肋骨文が描出される。150は浮島Ⅰ式の可能性もあるが、とりあえず以上をa式に比定しておく。153はやや幅広いC字形爪形文が付随した斜位刻み目付きの隆起線で、区画線や文様モチーフを描出する。154は斜位の刻み目付きの浮線文が貼付される。以上はb式に比定される。

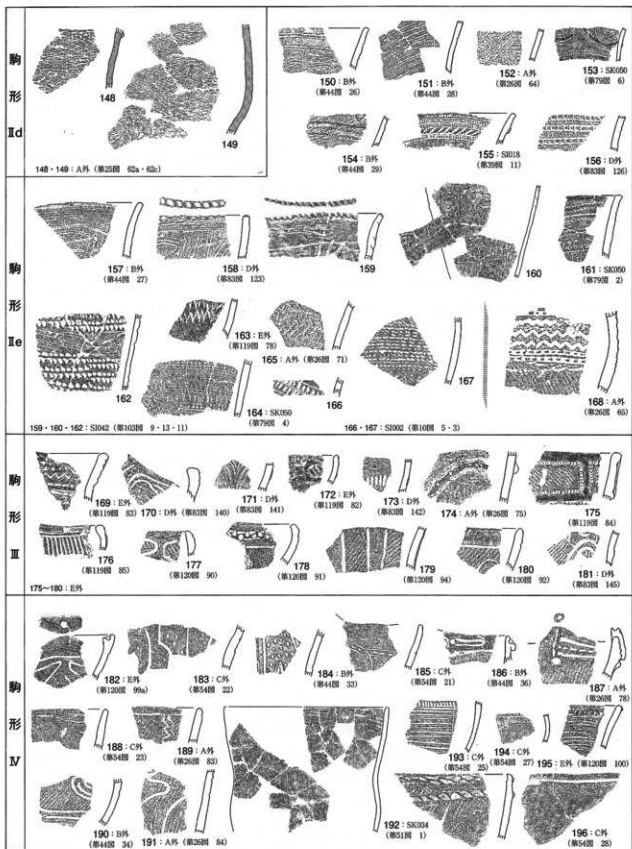
155~167は浮島・興津式に分別したものの。155は地文の疎らな燃糸文R、斜位刻み付き隆起線、D字爪形文、下弧肋骨文が認められる。156は地文の燃糸文R、D字爪形文が認められる。157は疎らな燃糸文風にした縦位沈線を地文とし、やや扁平な木葉文を施す。158は端部に平行沈線による横位区画を行い、以下に縦位の平行沈線に分割された木葉文が施される可能性があるもの。以上は若干の新旧を含む概ねⅠ式に比定できよう。159・160は輪積み痕を残し、指頭等による凹凸や撫で消しが加えられるもの。160の胴部下半には粗いケズリ痕と格子目文が認められる。以上はⅡ~Ⅲ式に比定されよう。161は変形爪形文、刺突文、放射肋を有す波状貝殻文が施されるものでⅡ式に比定される。162は幅広い区画に三角文を多段に施し、その間に半截竹管による斜位の平行沈線を刷毛目状に充填するものでⅢ式に比定される。163~167は貝殻文が施されるものである。施文具の使用法により時期の細別が可能なのであるが、全体の文様構成が未明のためなるべく分別を控えた。有文土器と伴出した164は浮島Ⅱ式、他の文様要素のある166・167は興津式とし得るが、他は概ねⅡ~Ⅲ式に比定されよう。168は8類とした本期に併行するもの。横位並列の結節沈線と波状沈線の描出法、横位結節回転を地文に重ねて施文すること、胎土に多量に含む鉱物等から異系統もしくはその影響を受けた土器と思われ、前期末葉大木6式との関連が注意される。

以上の内容を現段階での研究成果に照らし合わせ、胸形遺跡の諸磯式、浮島・興津式の位置付けを考えてみたい<sup>(7)</sup>。分別が困難な折衷的な土器があることは既述のとおりであるが、概ね西関東系の諸磯式はa~b式の範疇のものが出土している。一方、東関東系は細分の問題を度外視すれば浮島Ⅰ~Ⅲ式、興津式というように少量ながら全時期に亘って出土している。遺構出土資料を挙げると、先ず遺構内層が検出されたSK050で、諸磯b式(中段階)と浮島Ⅱ式が伴出している。SI042では浮島Ⅱ~Ⅲ式が、SI002では興津式が出土している。また、SI018では浮島Ⅰ式が出土している他、遺構外ではあるがこの住居跡に重なる位置から150・151・154という諸磯a・b式が出土していることを付記しておく。

既述した内容から胸形遺跡の諸磯式、浮島・興津式のやや零細な内容が把握できたかと思うが、第20次以降の調査成果をとりまとめるに際しては、事業地内遺跡であり且つ常磐自動車道建設に伴う発掘調査で成果が得られている該期を主体とした花前Ⅰ~Ⅲ遺跡、矢船遺跡の内容を射程において行う必要がある。

註7 1995『浮島式土器の研究』、2008『浮島式・興津式土器』「諸磯式土器」『総覧 縄文土器』の成果を参照し





第141图 出土土器集成(5)

たが、成果を十分咀嚼仕切れていない。また、未読の重要文献があると思われる。

#### (7) 胸形Ⅲ期

第3群とした中期初頭五領ヶ台式～後葉加曾利E式土器の時期を充當させたが、出土量も少なく全て破片資料で遺構外出土である。それでも概要を俯瞰できる資料として第141図169～181を示した。全体的に散漫な分布傾向であるが、それでも中期前葉の小規模集落、中葉～後葉の拠点集落である大松遺跡に隣接したE地区からやや多く出土している。内容を概説するが、169～173は中期初頭～前葉の土器である。169～171は五領ヶ台式末葉～阿玉台式直前型式、172・173は阿玉台I b式に比定される。174～181は中期中葉～後葉の土器である。174は阿玉台IV式、175・176は勝坂式末葉に比定される。177～181は加曾利EⅡ～Ⅲ式に比定されるが、178は連弧文土器である。

以上の土器内容から胸形遺跡は該期では集落が営まれるような場所にはならなかったようである。中期初頭～前葉期では常磐自動車道遺跡群の聖人塚遺跡、中山新田I遺跡、水砂遺跡、中山新田II遺跡、柏北部東地区では大松遺跡、小山台遺跡に中小規模の集落が営まれ、中期中葉～後葉期では大松遺跡、小山台遺跡に拠点集落が形成されたというように、活動の拠点が移っていることが胸形遺跡の該期の在り方からも推察される。

#### (8) 胸形Ⅳ期

第4群とした後期初頭称名寺式～中葉加曾利B式・曾谷式土器の時期を充當させた。出土量は少ないが、前期遺構の空白地帯であるC地区では192の土坑出土のものがある。遺構外の分布は調査区全域に散漫な分布を示すが、既述の理由でC地区にやや多く出土している。概要を俯瞰できる資料として第141図182～196を示した。内容を概説するが、182～184は称名寺Ⅱ式、185～192は網取式系を含むが、堀ノ内I式に比定される。193～196は加曾利B式・曾谷式で、193はB2式、194はB3式の精製土器、196はB式の粗製土器、195は曾谷式の粗製土器である。

以上の土器内容から、胸形遺跡は中期に引き続き該期でも集落が営まれるような場所にはならなかったようである。しかしながら、C地区には僅かに後期前葉堀ノ内I式の土坑が構築されている。第20次以降の調査成果をとりまとめる際には、該期の集落では最も隣接し、その上事業地内遺跡でもあり且つ常磐自動車道建設に伴う発掘調査で成果が得られている花前I・II遺跡の内容を射程におく必要がある。

### 2 住居跡と集落の変遷 (第142～146図、第4・26表)

胸形遺跡で検出された遺構の内容は第2章で既述したとおりであり、その概要は第4表にまとめておいた。縄文前期に属する主な遺構としては堅穴住居跡、次いで土坑、これらの一部に形成された遺構内貝層が挙げられる。遺構外遺物の分布傾向を瞥見してみても、遺構と分離した濃密な分布を示すまとまりである「遺物包含層」は現在までのところ確認されていない。帰属時期が決定できたものでは堅穴住居跡が主たる存在であるため、ここでは前期に帰属する堅穴住居跡を首座に据え、土器で分別した時期毎に抽出できる内容を呈示するとともに、現段階での胸形集落の変遷と今後の課題を炙り出すこととする。

(1) 竪穴住居跡(第142~144図、第4・25表)

前期細別毎に帰属時期が決定できたものは、第4表中に示したように合計39軒である。第142~144図

第25表 前期竪穴住居跡の床面積

【Ⅰa期】

No	遺構名	平均値	計測 1	計測 2	計測 3	計測 4	計測 5
1	SI001	15.67	15.66	15.65	15.69	15.66	15.68
2	SI007	18.58	18.56	18.54	18.58	18.60	18.59
3	SI039	22.89	22.92	22.86	22.91	22.91	22.85
4	SI031	23.26	23.20	23.29	23.25	23.28	23.24
5	SI011	9.43	9.42	9.41	9.44	9.43	9.41
6	SI006	9.02	8.98	9.02	9.01	9.02	9.07
7	SI004	10.44	10.43	10.45	10.44	10.45	10.41
8	SI045	16.63	16.64	16.62	16.62	16.67	16.60
9	SI044	21.82	21.82	21.75	21.78	21.85	21.88
10	SI040	20.31	20.25	20.31	20.34	20.32	20.29
11	SI052	17.01	17.01	17.04	16.99	17.02	17.01
12	SI010	8.83	8.84	8.78	8.86	8.83	8.81
平均値		16.16	(n)				

【Ⅰb期】

No	遺構名	平均値	計測 1	計測 2	計測 3	計測 4	計測 5
13	SI021	9.61	9.58	9.60	9.65	9.65	9.61
14	SI026	13.81	13.75	13.81	13.82	13.81	13.84
15	SI024	9.45	9.38	9.43	9.48	9.44	9.50
16	SI023	10.69	10.71	10.69	10.62	10.70	10.69
17	SI020	10.97	10.89	10.96	10.99	11.00	10.97
平均値		10.91	(n)				

【Ⅰc期】

No	遺構名	平均値	計測 1	計測 2	計測 3	計測 4	計測 5
18	SI019	11.88	11.88	11.85	11.89	11.92	11.88
19	SI022	13.62	13.59	13.63	13.66	13.63	13.60
20	SI029	9.65	9.59	9.67	9.68	9.66	9.63
平均値		11.72	(n)				

【Ⅰd期】

No	遺構名	平均値	計測 1	計測 2	計測 3	計測 4	計測 5
21	SI009	12.26	12.24	12.22	12.26	12.29	12.28
22	SI033	17.52	17.51	17.53	17.51	17.49	17.56
23	SI003	13.05	12.98	13.05	13.08	13.03	13.07
24	SI034	25.27	25.28	25.20	25.28	25.29	25.25
25	SI028	37.69	37.65	37.69	37.67	37.73	37.71
26	SI038	31.55	31.53	31.59	31.50	31.64	31.52
27	SI012	27.73	27.77	27.76	27.72	27.72	27.69
28	SI014	33.94	33.95	33.93	33.92	33.95	33.94
平均値		24.88	(n)				

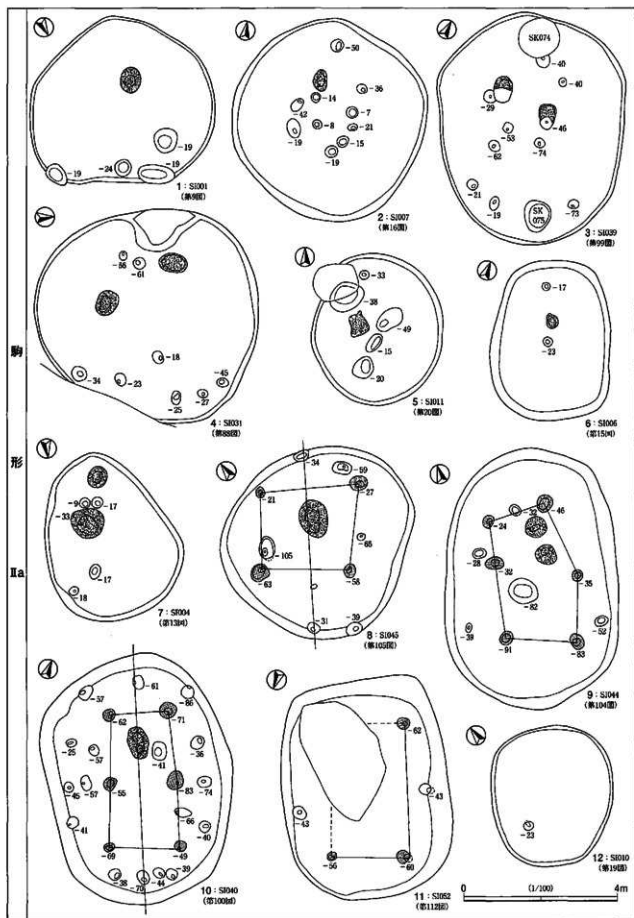
【Ⅱa期】

No	遺構名	平均値	計測 1	計測 2	計測 3	計測 4	計測 5
29	SI042	32.50	32.48	32.52	32.46	32.50	32.54
30	SI002	23.47	23.44	23.46	23.48	23.49	23.44
平均値		27.99	(n)				

及び第25表に分析可能な竪穴住居事例を示した。図は炉の偏在するものは炉のある方を上に、主軸が想定されるものは概ね主軸方向に沿ってレイアウトすることを基本とし、一部記録のなかったピットを除いて床面からの深さを記入しておいた。ここでは平面プラン、炉の位置、柱穴の配置(主柱穴の有無)、ピットの床面からの深さ、床面積を材料として時期毎の特徴を概述する。なお、時期別・遺構毎の床面積計測値と平均値は第25表に示した<sup>(8)</sup>。

① 駒形Ⅱa期(第142図)

花積下層式期に帰属時期が決定できた竪穴住居跡15軒のうち、分析可能な第142図1~12の12軒を抽出した。整・不整の差があるが、大局的には平面形が円形・楕円形を呈する円形系列の竪穴住居跡である。炉は焼面的なものも含まれるが、12を除いて(11は倒木痕で湮滅している可能性有り)長軸上側に寄った位置に設営されている。また、笹森健一が提唱したいわゆるCピットの可能性があるピット、すなわち下方を主として炉と重なったり、近接したりするピットが2:SI007、3:SI039で認められる<sup>(9)</sup>。主柱穴の想定できるものは8~11の4軒である。このうち10:SI040、11:SI052で主柱穴と考えた柱穴の深さはいずれも50cm以上で、しかもばらつきが少ない。特に10は長軸上側に偏在する炉を通る中軸線にほぼ並列する形で、6本



第142圖 豎穴住居蟎集成(1)

の主柱穴が存在し、13本の壁柱穴と炉近辺の4本のピットが総じて深さも安定している点で注目される。床面積は12軒の平均値が16.16㎡である。最大は推定値であるが4：SI031で23.26㎡、最小は炉のない12：SI010で8.83㎡である。全体的には8～11㎡（5～7・12）、15～19㎡（1・2・8・11）、20～24㎡（3・4・9・10）の3グループに分かれる。

駒形遺跡における該期竪穴住居跡は、全体的にはがが片側に偏在する共通性があるものの、ピット（柱穴も含む）は浅くその配置が不規則なものでは片側直線的なもの（1・4）、炉周りに集まるもの（2・3）、主軸と言って良いのか判断に窮するが炉と結ばれる軸上に少数が配されるもの（5～7）が混在する。しかしながら、既述したように柱穴が規則的配列を示すものも存在している（8～11）。出土土器の変遷で述べたように、今回検出された花積下層式は中段階以降であるので、今後の資料追加を待って時期差・系統差が存在するものか検討する必要がある。

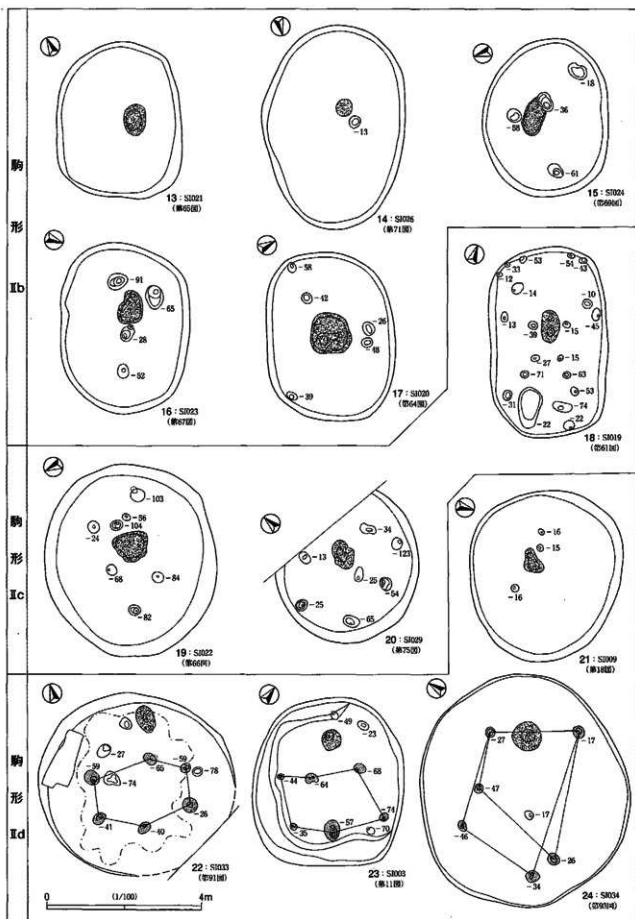
## ② 駒形Ⅱb期（第143図）

二ツ木式期に帰属時期が決定できた竪穴住居跡5軒全てを分析可能なものとして、第143図13～17を示した。整・不整の差があるが、大局的には平面形が楕円形を呈する円形系列と、隅丸方形という円形→方形という過渡系列の竪穴住居跡である。炉は中央より長軸上側または短軸右側にやや偏在したものがあるが、概ね床面のほぼ中央に設営されており、17のSI020はそれなりの規模を有す。主柱穴の想定できるものは無く、Cピットの可能性があるピットが14：SI026、15：SI024、16：SI023に認められる。ピットの深さは10～30cmクラスのもの、30～70cmクラスのものが大半であるが、17を除き一軒の中でもばらつきがある。床面積は5軒の平均値が10.91㎡である。最大は14：SI026で13.81㎡、最小は15：SI024で9.45㎡であるが、第25表に示したようにⅡa期に比べ全体のばらつきが少ないかわりに、20㎡を超えるような大形ものは構築されていないことがわかる。

駒形遺跡における該期竪穴住居跡は、平面形が円形系列から楕円形を経て、やがて方形系列に変容していく過渡期にあること、炉が中央寄りなりつつある傾向が見出されるものの、ピット（柱穴も含む）の配置・深さはばらつき不規則な状態であることがわかった。一方、大宮台地に所在する深作東部遺跡群の二ツ木式中・後段階に相当するD5・B23住居跡などでは、既に関山Ⅰ式に系譜が繋がるような方形プランが基調となっており、柱穴配置も漸次、関山式の壁柱穴＋主柱穴長軸並列型に移行していく様子が窺え、駒形遺跡とは明らかに異なっている<sup>109</sup>。出土土器の変遷で述べたように、今回検出された遺構出土の二ツ木式は新段階のもので、花積下層式新段階とは若干の不連続が生じている。そのため、竪穴住居の時期差、系統差等については、今後の資料追加を待って検討する必要がある。

## ③ 駒形Ⅱc期（第143図）

関山式期に帰属時期が決定できた竪穴住居跡4軒のうち、分析可能な第143図18～20の3軒を抽出した。このうち、方形系列の18：SI019は関山Ⅰ式、円形系列の19：SI022は関山式細別不明、20：SI029は関山Ⅱ式である。炉は18が中央より長軸上側または短軸右側にやや偏在しているものの、全て床面ほぼ中央に設営されており19はそれなりの規模を有す。主柱穴の想定できるものは無く、Cピットの可能性があるピットが全てに認められる。ピットの深さであるが、方形系列の18では20本あるピットが10～74cmの間でばらついており規則的な傾向も見出せず、配置でも壁柱穴が北半に限られている。円形系列の19では24cmの



第143圖 豎穴住居跡集成(2)

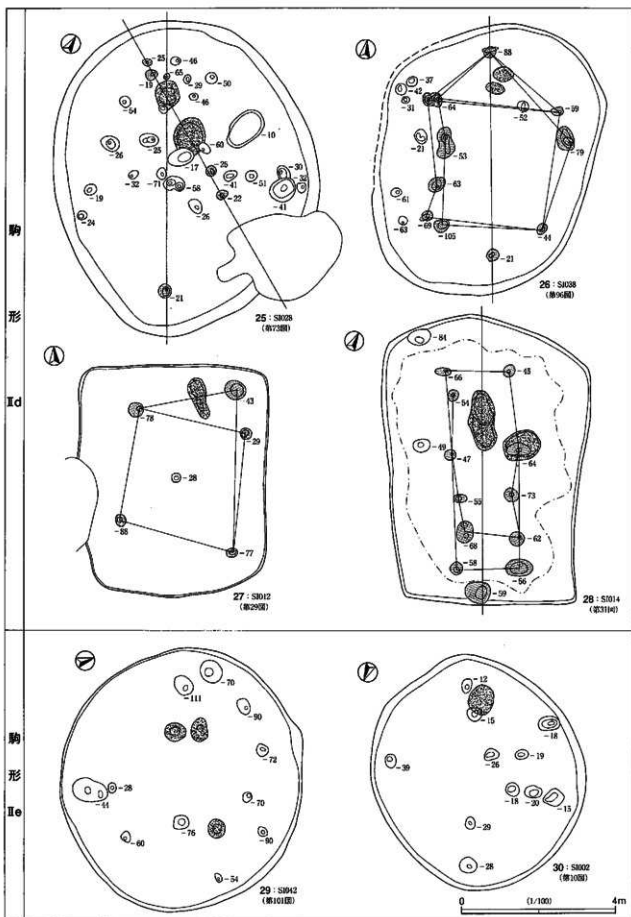
1本以外は56～104cmの間にばらつくものの、総じて深い。20では13～123cmの間にばらついている。床面積は3軒の平均値が11.72㎡である。方形系列の18は11.88㎡、円形系列の19は13.62㎡、20は9.65㎡であるが、サンプル数が少なくこれ以上のことは言及できない。

駒形遺跡における該期竪穴住居跡は、関山Ⅰ式期の18は汎闊東的な方形系列の平面形を有すものの、既述したように大宮台地の深作東部遺跡群では二ツ木式中・後段階より継続している壁柱穴+主柱穴長軸並列型や、さらにこれが発展した壁溝型にはならない点で異なる。しかし、僅かな事例では未明な部分が多い。一方、関山Ⅱ式期の20、関山式細別不明の19は円形系列の平面形を有す。この系列の竪穴住居跡は、大宮台地のさいたま市井沼方遺跡の関山Ⅱ式期に典型例が見出されるが、関山Ⅰ式～Ⅱ式に事例のある印西市一ノ作遺跡やⅡ式期に事例のある松戸市幸田貝塚など、下総台地における関山式後半期の主要な住居形態になる可能性がある<sup>(1)</sup>。しかしながら、駒形遺跡の事例は僅か3例に過ぎず、しかもⅠ式は後半期であるため二ツ木式期との系統性に問題が残ること、そして関山式内部でもⅠ式期：方形系列→Ⅱ式期：円形系列となる竪穴住居の時期差、系統差など解明すべき課題が多い。第22次調査範囲でも該期の方形系列の竪穴住居跡が検出されているようなので、未明な部分は今後の整理作業に委ねる必要があろう。

#### ④ 駒形Ⅱd期(第143・144図)

黒浜式期に帰属時期が決定できた竪穴住居跡12軒のうち、分析可能な第143図21～第144図28の8軒を抽出した。整・不整の差があるが、平面形が円形・楕円形を呈する円形系列の21～26と、長方形を呈する方形系列の27・28に大別される。炉は21：SI029のように二ツ木～関山式期と同じくほぼ中央に設けられるものもあるが、他は円形・方形を問わず長軸片側に寄った位置に設営されており、しかも建替えに伴い複数設けられたり、それが重複したりする例が認められる。また、Cピットの可能性があるピットが21、22：SI033、25：SI028に認められる。主柱穴の想定できるものは円形系列では22：SI033、23：SI003、24：SI034、26：SI038の4軒で、方形系列では27：SI012、28：SI014の2軒である。また、主柱穴は想定できないが、主軸が想定できるものとして25：SI028が挙げられる。これらのうち26・28は、重複する炉をほぼ通る長軸とこれにほぼ並列する主柱穴と建替えが想定される点で注目すべき事例となろう。床面積は8軒の平均値が24.88㎡である。最大は円形系列では推定値であるが25：SI028で37.69㎡、方形系列では28：SI014で33.94㎡となるが、25は駒形遺跡で最も大きな竪穴住居跡である。最小は円形系列の21：SI009で12.26㎡となる。全体的には12～14㎡(21・23)、17～18㎡(22)、25～28㎡(24・27)、30～38㎡(25・26・28)の4グループに分かれる。

駒形遺跡における該期竪穴住居跡は、それまでの内容と大きく変化する。平面形では方形系列→円形系列と変遷してきたものが、再び両系統が認められるようになる。また、主軸・主柱穴が想定できるものが方形系列を主に認められるようになる。炉は前時期で床面ほぼ中央に設けられるようになったものが再び偏在するようになり、複数設けられるようになりしている。床面積の平均値は花積下層式期の約1.5倍、二ツ木・関山式期の2倍以上となっている。出土土器の変遷で述べたように、駒形遺跡の黒浜式は現時点では古段階と新段階を中心としている。この変遷観に照らし合わせ細別時期が判明したものを挙げてみるが、円形系列では21が関山Ⅱ式期最末～古段階、26が新段階となる。方形系列では28が古段階、27が新段階というように平面形の違いなどを時期差に求めることはできないようである。また、周辺遺跡に目を向けてみると、最も近傍には常磐道遺跡群の花前Ⅰ遺跡がある。ここでは該期の竪穴住居跡が10軒



第144图 聚穴住居蜂集成(3)



検出されているが、平面形、炉、不規則な柱穴配置というところに駒形遺跡との共通性が認められる。一方、駒形遺跡から南東約3.4kmに位置する鴻ノ巣遺跡では炉が偏在する点では共通するものの、20軒全てが方形系列と様相を異にする<sup>10)</sup>。しかしながら、土器の変遷でも記載したように、未明な諸点については隣接する黒浜式期の拠点集落である富士見遺跡を中核とし、大局的には該期の同一集落群と考えられる駒形・大松・原畑遺跡、そして谷を隔てて位置する小山西台遺跡の堅穴住居跡を総合的に分析して結論づける必要があろう。

#### ⑤ 駒形Ⅱe期（第144図）

諸磯・浮島・興津式期に帰属時期が決定できた堅穴住居跡3軒のうち、分析可能な第144図29：SI042と30：SI002の2軒を抽出した。29は浮島Ⅱ～Ⅲ式期、30が興津式期に比定される。やや不整ながら、今回は平面形がほぼ円形を呈する事例のみである。炉はいずれも床面中央には設けられず偏在した焼面的な構造で、29には小形なものが複数認められる。支柱穴の想定できるものは無く、Cピットの可能性があるピットが30に認められる。ピットの深さは、29では床面からの深さが28cm、44cmのもの以外は50cm以上と総じて深く、径に比して90～111cmとかなり深いものが4本認められる。30では10～40cmと総じて浅い。床面積は29が32.50㎡、30が23.47㎡、2軒の平均値が27.99㎡というように、黒浜期の第3～第4グループの規模を保有していると言えようが、サンプル数が少なくこれ以上のことは差し控えておく。

駒形遺跡における該期堅穴住居跡を県内調査事例と比較する。諸磯・浮島式期では、最も近傍に位置する常磐道遺跡群の花前Ⅰ遺跡で円形系列が2軒、方形系列が1軒検出されている。同じく花前Ⅱ遺跡では炉の無い円形系列が2軒、方形系列が1軒検出されている<sup>11)</sup>。興津式期については、近傍からは検出事例がない。県内事例の25年以上前の集成によれば、船橋市飯山満東遺跡では不整の方形系列の5軒、同市古和台田遺跡は不整で円形・方形の区別つかない事例を含むが両系合わせて7軒が検出されており、代表的な事例として挙げることができる。一方、興津式期の事例は少なくしかもいずれも方形系列で、流山市中野久木遺跡で3軒、白井市一本松遺跡で1軒検出されているだけである。諸磯・浮島式期では平面形で楕円形・不整円形のものが出検されているが方形系列が優勢で、興津式期は方形系列である点で駒形遺跡と異なるが、炉の内容、不規則なピット配置というところでは共通性が認められる。しかしながら、事例も乏しいので最新の県内集成や近隣地域事例との比較によって議論を深めていく必要があると思われる。

注8 柱穴の配置（支柱穴の有無）を考える際、床面からの深さが15cm未満のピットは対象外とした。床面積の求積にはTAMAYA PLANIX 10Sを用いた。求積方法は1軒に付き5回計測し、測定誤差を少しでも減らすため最大・最小値を不採用とした上で、残り3回の計測値から平均値を算出し当該遺構の床面積とし、全体の平均値を求めた。なお、床面が部分的に滅失しているものは全体を復元し推定値とした。

9 1981「縄文土器前期の住居と集落（Ⅰ）」・「縄文土器前期の住居と集落（Ⅱ）」、1982「縄文土器前期の住居と集落（Ⅲ）」の成果による。

10 1984「深作東部遺跡群発掘調査報告」を参照した。

11 前掲註8の文献に加え、1978「幸田貝塚－第7次（昭和52年度）調査概報」1985「島崎遺跡・幸田貝塚（第10次調査）」を参照した。

12 1984「花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』、1974「柏市鴻ノ巣遺跡」を参照した。

13 註11の1984に加え、1985「花前Ⅱ-1・花前Ⅱ-2・矢船遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ、註7の1982を参照した。

## (2) 集落の変遷 (第145・146図、第4表)

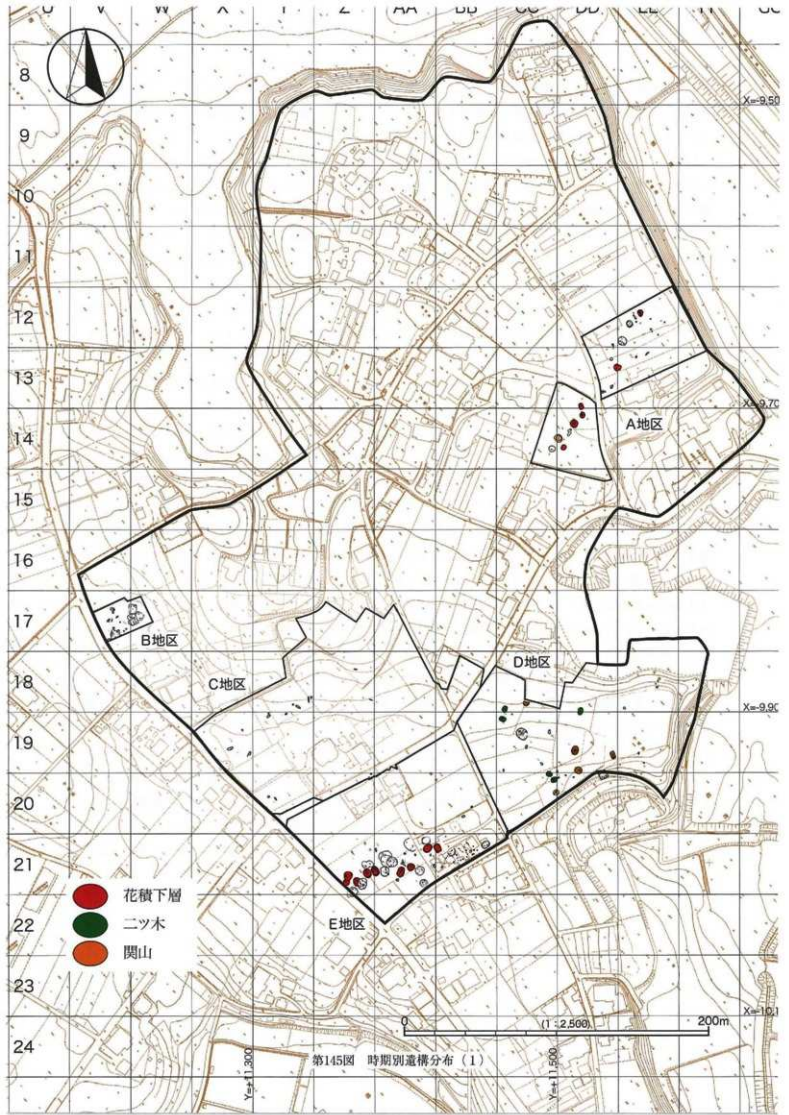
以上のように駒形遺跡における竪穴住居跡の概要と今後の課題を時期毎に記してきた。ここではこれら竪穴住居跡の分布状況などを基に、調査途上ながら現段階で考えられる集落の変遷を述べておきたいが、その前に遺跡周辺の地形について再度確認しておきたい。遺跡周辺の台地は標高約13~18mを測り、低地との比高差も約8mを超えない。縄文時代、この台地を含む周辺一帯は古鬼怒湾に属する古常陸川の水系にあり、駒形遺跡を含む台地は低地側から南西方向に湾入する二つの支谷に挟まれた地形を呈す。富士見遺跡・大松遺跡を含めたこの台地は南西部を基部とし、柏・我孫子低地に向かって北東側に半島状に突出している。駒形遺跡はこの台地の北東部を占めており、遺跡の東側と、富士見遺跡と区分される北側からさらに小支谷が湾入している。

今回の19次に亘る調査区を既述したようにA~E地区に括っておいたが、A地区は遺跡(以下同)東端の一部、B地区は西端の一部、C地区は南西部、D地区は南南東部、E地区は南南西部にそれぞれ該当する。A地区とD地区は共に古常陸川水系の柏・我孫子低地に直面しているが、東側から湾入した支谷により区分され、D地区はさらに南東側からも浅く小支谷が湾入し舌状に近い地形を呈する。A地区は標高約15~16m、D地区は標高約16~17mのそれぞれ平坦面に位置する。B地区とC地区は北側から湾入した支谷にそれぞれ面しているが、B地区は谷頭の南西部に位置する標高約16mの平坦面の一角にあり、富士見遺跡の範囲に繋がっている。C地区の北部は谷頭が侵入しているが、他は標高約16~17.5mの平坦面に位置し、南西側に向かって漸次、標高を増す。E地区はC・D地区と接しておりそれらが継続した標高約17~18mの平坦面に位置し、南側の大松遺跡の舌状台地に向かい漸次、標高を増す。駒形遺跡で最も高い平坦面にあり、A地区など台地北半の平坦面とは比高差約2~3mを測る。

各期はもちろん究極の細別時期でもなく、土器型式としても不連続が存在するが、第145図には駒形Ⅱa期(花積下層式)~駒形Ⅱc期(関山式期)の、第146図には駒形Ⅱd期(黒浜式)~駒形Ⅱe期(浮島・諸磯・興津式期)の竪穴住居跡の分布をそれぞれ示し、第4表に帰属時期を明記しておいた。

駒形Ⅱa期には花積下層式期に帰属時期が決定できた竪穴住居跡15軒が構築されている。内訳はA地区6軒、E地区9軒で、このうちSI051に床面に接した形で遺構内貝層が形成されている。A地区では他時期も含め竪穴住居跡が北東~南西方向を軸に列状に分布しており、この軸を境とした台地縁辺側には竪穴住居跡が構築されていない。未調査部分が多く推測の域を出ず、分布状況も定かでないが、これより北西側に大きく広がる標高15.5~16.0mの台地上に該期を開始期とする前期集落が展開している可能性が高い。一方、E地区では他時期も含め竪穴住居跡が弧状に分布しており、明らかに富士見遺跡・大松遺跡の範囲と一連の展開になる。事実、富士見遺跡の隣接部でも該期の竪穴住居跡が検出されている。C地区が前期遺構群の空白地になることから、E地区南半を北限に標高約18m前後の平坦面に、やはり該期を開始期とする弧状あるいは環状を呈する前期集落が展開することが確実である。

駒形Ⅱb期には二ツ木式期に帰属時期が決定できた竪穴住居跡5軒が構築されており、全てD地区で検出されているが、遺構内貝層は形成されていない。分布は標高約16~17mの略舌状台地の先端部にはなく、中央部から基部に掛けての台地縁辺に構築されており、北側に3軒、南側に2軒が分布している。このう



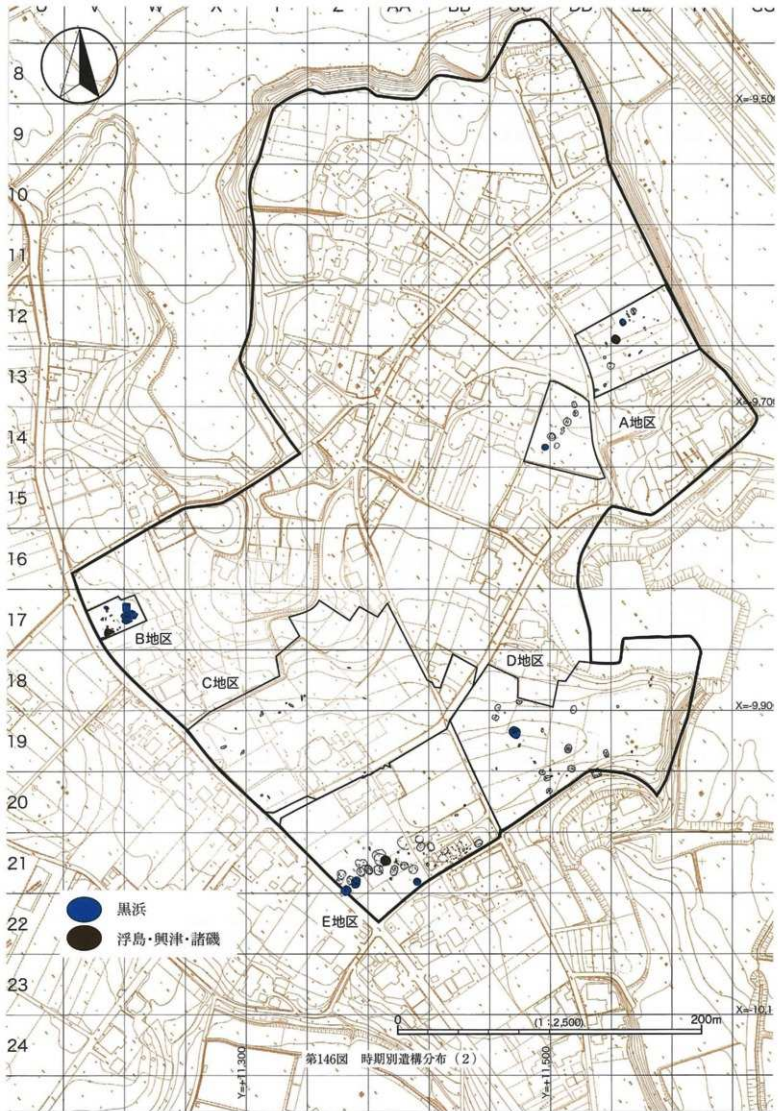
第145図 時期別遺構分布 (1)

ち北側のSI020・SI021、南側のSI020・SI021はそれぞれ近接した位置に構築されていることから、他より密接な関係が想定される。遺跡南半を瞥見すると、おそらくこの5軒が一つの該期集落として完結するものと思われ、未報告部分に該期集落があったとしても別のまとまりとなろう。

駒形Ⅱc期には関山式期に帰属時期が決定できた竪穴住居跡4軒が構築されているが、前時期同様に全てD地区で検出されており、遺構内貝層も形成されていない。内訳はSI019が関山Ⅰ式期、SI022が関山式細別不明、SI029が関山Ⅱ式期、SI027は竪穴住居跡として疑問が残るものの関山Ⅱ式期であり、時間差や平面形態の差がある。分布は前時期同様に略舌状台地の先端部には認められず、中央部から基部に掛けての台地縁辺に構築されており、北側に1軒、南側に3軒が分布している。やはり遺跡南半の該期集落はおそらくこの4軒で完結するものと思われる<sup>註14</sup>。関山Ⅱ式期では富士見遺跡・大松遺跡で別のまとまりになる住居群が検出されており、比較的小範囲でまとまるⅡb期・Ⅱc期の集落形成の在り方が予見できる。

駒形Ⅱd期には黒浜式期に帰属時期が決定できた竪穴住居跡12軒が構築されている。内訳はA地区2軒、B地区6軒、D地区1軒、E地区3軒というように前期遺構空白区であるC地区を除き、多寡の差はあれ全ての地区で検出されている。このうちSI003・SI012・SI014で床面に接した形で遺構内貝層が形成されている。A地区の2軒はⅡa期で記したように、北西側に大きく広がると予想される前期集落の一部に当たったものの、詳細は今後の調査成果に委ねられよう。B地区は全体から見ると狭小と考えられる調査範囲から重複した6軒の竪穴住居跡が検出されている。ここは南西部の富士見遺跡の範囲を含め標高約16mの平坦面にあたり、ここにひとまとまりの該期集落が想定できる。D地区では概ね舌状を呈す台地の基部付近に弧高の1軒が検出されているのみである。E地区の3軒はⅡa期で記したように南半を北限とした標高約18m前後の平坦面に展開すると考えられる弧状あるいは環状を呈する前期集落に含まれるもので、D地区との間に遺構空白部があることから弧高の1軒とは別集落である。全体的には富士見遺跡・大松遺跡を含め、規模の大小はあれ複数のまとまりが台地全体に認められる一大集落となることが予想される。出土土器の変遷で述べたように駒形遺跡の黒浜式は現時点では古段階と新段階を中心としているものの、集落規模から当然、関山式終末を受けて諸磯・浮島式初頭に繋がる内容を含むものと考えられる。これらがどのような集落変遷を辿るのか、駒形遺跡の未報告分をはじめ周辺遺跡の状況が解明されれば、千葉県はもろろ関東地域でも最大級かつ重要な黒浜式期の集落群になることは間違いないであろう。

駒形Ⅱe期には諸磯・浮島・興津式期に帰属時期が決定できた竪穴住居跡3軒が構築されている。遺構内貝層はD地区のSKO50に形成されているものの、竪穴住居跡には認められない。内訳はA地区で興津式期の1軒が、B地区で諸磯a・浮島Ⅰ式期の1軒が、E地区で浮島Ⅱ～Ⅲ式期の1軒がそれぞれ検出されている。既述した地区毎のまとまりの中にそれぞれが位置するものの、現状では零細な内容であるためそれ以上の言及はできない。しかし、前期集落群の終焉期に当たるため次項の遺跡分布・生産活動の問題を含め重要な時期であることは間違いない。周辺遺跡の様相を含め未報告内容に期するところは大きい。註14 未報告分ではあるが、D地区の北西で遺跡範囲の中央やや南に位置する第22次調査において、関山Ⅰ式期の竪穴住居跡が検出されている。



第146図 時期別遺構分布(2)

## 第2節 千葉県北西部地区を主とした縄文前期遺跡の分布と胸形遺跡における生産活動

胸形遺跡をはじめとする柏北東地区遺跡群の地理的・古環境的な位置付けを探るため、既往調査・研究成果に基づき、千葉県北西部地区を主とした縄文前期遺跡の分布とその時期や地理的位置などを示した<sup>(33)</sup>。また、このような地理的・古環境的な位置付けの基に、胸形集落で暮らした人々がどのような生産活動を行っていたのか、考古学的資料を材料に可能性を追求してみることにする。

### 1 遺跡分布(第147~149図、第26・27表)

第147~149図、第27表に示した遺跡は、千葉県北西部地区の地図に入る範囲を主とし、対象としたのは現段階で所在が確認されている貝塚を伴う遺跡及び伴わない遺跡全てである<sup>(36)</sup>。具体的な範囲は東葛飾郡及び下総台地に含まれる埼玉地区、印旛郡・千葉市の一部、八千代市など旧千葉郡の一部を含めている。以下、時期毎に概述するが、二ツ木式を花積下層式、関山式と分別して記載しているのは種であるため、地名表に確かなものは記載したものの分布図に単独で設定するのは断念した。花積下層式~関山式期に継続する遺跡は、この中に二ツ木式が含まれる場合がある。また、ほぼ同様の理由により十三菩提式は諸磯式に、興津式は浮島式にそれぞれ編入した。今回掲載した遺跡は全537遺跡を数えるが、大きく見て東京湾区に属するものと古鬼怒湾区に属するものに大別される。これらを細分した水系・時期区分毎の遺跡数は第26表に示しておいた。複数の時期に亘るものもあるので、この地域における縄文前期の遺跡数は東京湾区で388遺跡、古鬼怒湾区で362遺跡、総数で750遺跡となる<sup>(37)</sup>。以下、便宜的に分けた時期区分毎に記すこととする。

第26表 水系・時期別遺跡数

本図区/時期	花積下層-関山 (貝塚)	花積下層-関山 (貝塚以外)	花積下層 (貝塚)	花積下層 (貝塚以外)	関山 (貝塚)	関山 (貝塚以外)	里出 (貝塚)	里出 (貝塚以外)	諸磯-浮島 (貝塚)	諸磯-浮島 (貝塚以外)	諸磯 (貝塚)	諸磯 (貝塚以外)	浮島 (貝塚)	浮島 (貝塚以外)	本条河川
I A1	0	0	1	6	2	4	6	2	0	1	0	1	0	1	18
I A2	0	0	0	1	0	1	8	6	1	2	1	0	0	2	22
I A4	0	0	0	0	0	2	2	13	0	2	0	2	0	1	22
I B1	2	0	0	1	2	15	6	43	1	12	2	10	0	9	103
I C1	1	1	1	2	1	13	15	55	6	19	3	13	0	11	141
I C1/I C2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
I C2	1	0	0	0	1	0	2	7	1	3	1	0	0	4	21
I C3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
I C4	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	1	0	4	9
I C4/I C5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
I C5	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	0	4
I C6	0	0	0	0	0	4	0	2	2	7	1	7	0	13	24
I C7	0	0	0	0	0	0	0	1	0	6	1	0	0	2	4
I A2	0	0	0	0	0	0	2	4	0	0	0	0	0	0	6
I 小計	4	1	2	4	7	29	63	136	14	46	9	31	0	47	388
II A1	0	0	0	1	1	4	3	24	0	2	0	8	0	6	30
II A1/II A2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
II A2	1	1	0	2	1	6	12	46	1	11	0	6	0	2	89
II A2/II B1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3
II B1	0	0	0	1	2	14	8	28	0	19	0	15	0	17	134
II B2	0	0	1	2	0	8	1	22	0	6	0	7	0	16	64
II 小計	1	1	1	6	4	32	24	174	1	39	0	36	0	41	362
I・II合計	5	2	3	10	11	71	67	210	15	87	9	72	0	88	750

#### 【東京湾区】

I A1 千葉県湾中央部：古五田遺跡地  
I A3 千葉県湾中央部：里出遺跡地  
I A4 千葉県湾中央部：今上遺跡  
I B1 千葉県湾南部：矢切遺跡  
I C1 千葉県湾南部：真間川低地  
I C2 千葉県湾南部：海老川低地

I C3 千葉県湾南部：菟田川谷  
I C4 千葉県湾南部：花見川低地  
I C5 千葉県湾南部：汐田川谷  
I C6 千葉県湾南部：都川低地  
I C7 千葉県湾南部：村田川低地  
II A2 千葉県湾中央部：常陸川流域

#### 【古鬼怒湾区】

II A1 古鬼怒川湾南部：三ヶ池低地  
II A2 古鬼怒川湾南部：船・萩森川低地  
II B1 手賀・印旛湾湾南部：手賀遺跡地  
II B2 手賀・印旛湾湾南部：印旛川低地

### (1) 花積下層式～関山式期 (第147図、第26・27表)

花積下層式～関山式期の貝塚は5遺跡(東京湾区4・古鬼怒湾区1)、貝塚以外は2遺跡(東京湾区1・古鬼怒湾区1)が確認されている。このうち貝塚では東京湾区:奥東京湾湾口部:矢切低地に面した幸田貝塚と二ツ木向台貝塚が代表的である。古鬼怒湾区:古常陸川湾奥部:柏・我孫子低地に面した柏北部東地区遺跡群では、遺構内貝層を有する駒形遺跡が現在のところ唯一である<sup>100</sup>。花積下層式期の貝塚は3遺跡(東京湾区2・古鬼怒湾区1)で、貝塚以外は10遺跡(東京湾区4・古鬼怒湾区6)である。関山式期の貝塚は11遺跡(東京湾区7・古鬼怒湾区4)で、貝塚以外は71遺跡(東京湾区39・古鬼怒湾区32)である。柏北部東地区遺跡群では現在のところ富士見遺跡で遺構内貝層が認められるのみである。

分布から読みとれる内容を概述すると、花積下層式～関山式期の貝塚、花積下層式期の貝塚以外の遺跡は、遺跡数も少なく特定の地域に集中して形成されることもない。但し、既述した花積下層式～関山式期に継続する貝塚が特定の条件の下に営まれた可能性がある<sup>100</sup>。一方、関山式期単独遺跡数は貝塚を除外しても、花積式期単独遺跡の貝塚を含めた総数の5倍以上になり明らかに飛躍的な増大を示す。東京湾区では奥東京湾湾口部:矢切低地に面した15遺跡と東京湾湾奥部:真間川低地に面した13遺跡、古鬼怒湾区では手賀・印旛沼湾奥部:手賀沼低地に面した14遺跡というように集中傾向を示す。因みに古常陸川湾奥部:柏・我孫子低地に面した柏北部東地区遺跡群では、6遺跡が確認されている。この増大の要因には種々の要件が想定されようが、以下の点にも配慮が必要と思われる。既述のように関山式は最低でもⅠ・Ⅱ式に細分されるものであり、しかも関山式終末～黒浜式初頭の型式学的レベルや関山Ⅰ・Ⅱ式間の堅穴住居跡の系統差レベルなど、課題が存在している。後述する黒浜式期遺跡数との比較の中で数的変化のみに捉われない視点が必要かと思われる。

### (2) 黒浜式期 (第148図、第26・27表)

黒浜式期の貝塚は67遺跡(東京湾区43・古鬼怒湾区24)、貝塚以外は310遺跡(東京湾区136・古鬼怒湾区174)が確認されており、今までに無い爆発的な増大を示す。さらに水系区分毎に概観する。東京湾区の貝塚総数を分水嶺上の2区分と不完全な都川低地・村田川低地を除いた10の水系区分で割ると、平均4～5遺跡となる。このうち東京湾湾奥部:真間川低地に面した遺跡は、市川市上台遺跡・同庚塚遺跡など平均の約3倍の15遺跡と他地区を凌駕する。同じく貝塚以外の遺跡数は平均13～14遺跡となるが、奥東京湾湾口部:矢切低地に面した遺跡は松戸市八ヶ崎遺跡・同出来山遺跡など43遺跡、東京湾湾奥部:真間川低地に面した遺跡は松戸市木戸前Ⅱ遺跡・市川市向台遺跡など55遺跡と、明らかに他地区を凌駕する。

一方、古鬼怒湾区の貝塚総数を分水嶺上の2区分と不完全な印旛沼低地を除いた4つの地形区分で割ると、平均6遺跡となる。このうち柏北部東地区遺跡群が所在する古常陸川湾奥部:柏・我孫子低地に面した遺跡は柏市駒形遺跡・同富士見遺跡など12遺跡と総数の半分となり、手賀・印旛沼湾奥部:手賀沼低地に面した遺跡は柏市鴻ノ巣遺跡・我孫子市柴崎遺跡など8遺跡と平均を上回る。同じく貝塚以外の遺跡数は平均37遺跡となるが、手賀・印旛沼湾奥部:手賀沼低地に面した遺跡は我孫子市西野場遺跡など78遺跡と平均の2倍以上となる。また、柏北部東地区遺跡群が所在する古常陸川湾奥部:柏・我孫子低地に面した遺跡は矢船Ⅰ遺跡など46遺跡と平均数を上回る。

分布から読みとれる内容を概述するが、先ず言えるのは多寡の差はあれ、どの地形区分においても例外なく遺跡が形成されていることである。最新の統計数は明らかではないが、黒浜式期が全体的にも汎関東

的にも前期を通じて最も遺跡数が増大することは間違いなく、海水産貝塚形成のピークであることも確実である。その中で柏北部東地区遺跡群は推定200軒前後の聚穴住居跡と、これらを中心に残された遺構内貝層が多数検出される可能性が高い点で特筆される。今後、これらの要因を多角的に探ることで、該期遺跡分布の意味するところを解明することができよう。

### (3) 諸磯・浮島式期 (第149図、第26・27表)

諸磯式と浮島式に伴う貝塚は15遺跡(東京湾区14・古鬼怒湾区1)確認されており、このうち東京湾区の東京湾湾奥部:真間川低地に面した遺跡は、黒浜式期から継続する市川市上台遺跡・同庚塚遺跡など半数近い6遺跡である。古鬼怒湾区では古常陸川湾奥部:柏・我孫子低地に面した駒形遺跡のみである。諸磯式と浮島式に伴う貝塚以外は87遺跡(東京湾区48・古鬼怒湾区39)確認されている。このうち東京湾区では奥東京湾湾口部:矢切低地に面した遺跡として黒浜式から継続する松戸市出来山遺跡など12遺跡、東京湾湾奥部:真間川低地に面した遺跡として松戸市烏崎遺跡・市川市曾谷遺跡など19遺跡があげられるが、いずれも区内の平均である4~5遺跡を大きく上回り、黒浜式期と同様に他地区を凌駕する。古鬼怒湾区では手賀・印旛沼湾奥部:手賀沼低地に面した遺跡が鎌ヶ谷市五本松No.1遺跡など19遺跡があげられるが、区内の平均である9~10遺跡の約2倍となり、黒浜式期と同様に他地区を凌駕する。柏北部東地区遺跡群の所在する古常陸川湾奥部:柏・我孫子低地に面した遺跡は柏市小山台遺跡など11遺跡があげられるが、平均値を僅かに上回る。

諸磯式のみ貝塚は、市川市中台遺跡など東京湾区のみで9遺跡が確認されており、6地区に1~3遺跡ずつ所在する。該期の貝塚以外は72遺跡(東京湾区34・古鬼怒湾区38)である。このうち東京湾区では奥東京湾湾口部:矢切低地に面した遺跡として松戸市道六神遺跡など10遺跡、東京湾湾奥部:真間川低地に面した遺跡として市川市宮久保所願寺遺跡など13遺跡があげられるが、いずれも区内の平均である3~4遺跡の約2倍となり、黒浜式期と同様に他地区を凌駕する。古鬼怒湾区では手賀・印旛沼湾奥部:手賀沼低地に面した遺跡として柏市戸張城山II遺跡など15遺跡があげられるが、区内の平均である9遺跡の約1.5倍となり、黒浜式期と同様に他地区を凌駕する。柏北部東地区遺跡群の所在する古常陸川湾奥部:柏・我孫子低地に面した遺跡は柏市山ノ台遺跡など6遺跡となり平均を下回る。

浮島式のみ貝塚は、現在のところ所在が確認されていない。該期の貝塚以外は88遺跡(東京湾区47・古鬼怒湾区41)確認されている。このうち東京湾区では奥東京湾湾口部:矢切低地に面した遺跡で松戸市溜ノ上・同八ヶ崎遺跡など9遺跡、東京湾湾奥部:真間川低地に面した遺跡で市川市曾谷南遺跡など11遺跡と、いずれも区内の平均である4~5遺跡の約2倍となり、黒浜式期と同様に他地区を凌駕する。古鬼怒湾区では手賀・印旛沼湾奥部:手賀沼低地に面した遺跡で白井市寺向遺跡など17遺跡と、区内の平均である10~11遺跡を上回り、黒浜式期と同様に他地区を凌駕する。柏北部東地区遺跡群の所在する古常陸川湾奥部:柏・我孫子低地に面した遺跡は2遺跡のみと、平均を大きく下回る。なお、全範囲が含まれない東京湾区の東京湾湾奥部:都川低地に面した遺跡は11遺跡、古鬼怒湾区の手賀・印旛沼湾奥部:印旛沼低地に面した遺跡は16遺跡が、それぞれ確認されていることを付け加えておきたい。

分布から読みとれる内容を概説するが、先ず言えるのは黒浜式期に比して遺跡が377遺跡から271遺跡に激減することである。殊に貝塚は67遺跡から24遺跡となり顕著である。次に黒浜式期には多寡の差はあれ、どの地形区分においても例外なく遺跡が形成されていたものが、海退や気候の寒冷化など環境の変化に伴



ったためか、特定の地域に偏った分布を示すようになることである。東京湾区と古鬼怒湾区を比較した場合、貝塚以外は東京湾区で129遺跡、古鬼怒湾区で118遺跡と大差ないが、貝塚は東京湾区で23遺跡、古鬼怒湾区で1遺跡とその差は歴然である。東京湾区では奥東京湾湾口部：矢切低地と東京湾湾奥部：真間川低地の水系区分が該期遺跡の集中域となる。このように前時期より継続して集中域を形成するケースもあることから、気候変動が一元的に下総台地周辺の動植物資源を減少させたとは言い難い。海退に伴う水産資源の減少は明らかだが、その時空差や、森林資源への依存度、古環境の変化による森林域と水域の循環サイクルへの影響など様々な要因を重層的に検討しなければならないと思われる。全果的にも汎果東的にも海退以降、中期前葉までの間で最も遺跡数が減少するのは前期末葉から中期初頭の時期であることは間違いなく、貝塚の形成を例に挙げれば、古鬼怒湾奥部の古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地の水系区分では、柏北部東地区遺跡群の諸磯・浮島式期を最後としている。該期以降の遺跡数激減の要因を考えていく上で、柏北部東地区遺跡群は重要な鍵を握っていると言える。とりわけ規模の差はあれ、前期初頭から末葉まで全時期に集落が営まれた駒形遺跡は、縄文海進・海退に関連させ遺跡分布論を語る上で欠くことのできない遺跡である。

- 註15 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図』（1）と1999『千葉県埋蔵文化財分布地図』（3）を基礎データとした。さらに貝塚の内容については1999『研究紀要19』の分布図と地名表のデータを、旧閩宿町と野田市の内容については2005『野田市史』資料編考古のデータを追加した。なお、水系区分は『研究紀要19』を参考にして設定しているが一部、執筆者の西野雅人氏により区分変更がなされているので、それにしたがった。
- 16 地名表の時期・種別欄中の太ゴチック体は貝塚を形成した時期を、普通のゴチック体は貝塚以外の遺跡の時期を表している。
- 17 東京湾区の東京湾湾奥部：都川低地・村田川低地、古鬼怒湾区の手賀・印旛沼湾奥部：印旛沼低地の遺跡数は、地図に入る範囲のみの数字である。
- 18 駒形遺跡の今回報告分では花積下層式期の遺構内貝層のみであるが、未報告分に関山式期の遺構内貝層が複数存在する。
- 19 2003「動物遺体による縄文前期前葉の生業・居住様式の復元－幸田貝塚と奥東京湾沿岸の遺跡群－」の成果にその可能性が示されている。

第27表 千葉県北西部の縄文前期遺跡

遺跡No	遺跡名	所在地	時期・種別	水系名
1	雲岡寺内貝塚	野田市元町	黒浜	古五田沼低地
2	下納谷遺跡	野田市台町東巻	黒浜	常陸川最奥部
3	東高野貝塚	野田市東高野松原	黒浜	古五田沼低地
4	向山貝塚	埼玉県杉戸町水津内字向山	黒浜	*
5	日沼貝塚	埼玉県杉戸町日沼宮前	花積	*
6	鷺黒貝塚	埼玉県杉戸町鷺黒字前原	関山	*
7	新宿貝塚	野田市木間ヶ瀬	黒浜	*
8	東金野井東貝塚	野田市東金野井	関山・黒浜	*
9	東金野井貝塚	野田市東金野井字口峠	関山・諸磯	*
10	ボタモチ山遺跡	野田市中里	黒浜	*
11	槇の内遺跡	野田市尾崎	関山・黒浜	*
12	小作遺跡	野田市尾崎字小作	黒浜	*
13	尾崎南遺跡	野田市尾崎字宮谷原	関山・黒浜・諸磯・浮島	*

道跡%	道 跡 名	所 在 地	時 間・種 別	水 系 名
14	風早遺跡	埼玉県庄和町西金野井字風早	関山	古五田沼低地
15	桐ヶ作貝塚	野田市桐ヶ作字堀の内	黒浜	常陸川最奥部
16	飯塚貝塚	野田市木間ヶ瀬字飯塚	黒浜	〃
17	松の木遺跡	野田市木間ヶ瀬	黒浜	〃
18	砂南南遺跡	野田市木間ヶ瀬	黒浜	〃
19	下根貝塚	野田市木間ヶ瀬字志部	黒浜	〃
20	茶師前遺跡	野田市尾崎	黒浜	産生沼低地
21	七光台消防会館前遺跡	野田市七光台	浮島	古五田沼低地
22	尾ヶ崎貝塚	埼玉県庄和町尾ヶ崎	黒浜	産生沼低地
23	犬塚遺跡	埼玉県庄和町新宿新田字松通東	黒浜	〃
24	米島貝塚	埼玉県庄和町米島	黒浜	〃
25	厚田遺跡	埼玉県庄和町中野字厚田	黒浜	〃
26	木郷貝塚	埼玉県松伏町徳比地字大宮	黒浜・諸磯	〃
27	宝塚坊遺跡	野田市五木岩名	黒浜	〃
28	栗ノ木遺跡	野田市岩名	黒浜・諸磯・浮島	〃
29	岩名貝塚	野田市岩名	関山・黒浜・浮島	〃
30	岩名第14遺跡	野田市岩名	黒浜	〃
31	堂山貝塚	野田市岩名	黒浜	〃
32	野山貝塚	野田市清水	黒浜	〃
33	北前貝塚	野田市境台北前	諸磯・浮島	〃
34	後台遺跡	野田市中野台字後台	黒浜・浮島	〃
35	中野台貝塚	野田市中野台	花積・黒浜・諸磯・浮島	〃
36	上野馬込遺跡	野田市花卉・花井新田	諸磯	今上低地
37	梅の台遺跡	野田市山崎字梅台	黒浜・諸磯・浮島	〃
38	麻台遺跡	野田市山崎貝塚町	浮島	〃
39	西深井十一の割第1遺跡	流山市西深井字十一の割	黒浜	〃
40	西深井九の割遺跡	流山市西深井字九の割	黒浜	三ヶ尾低地
41	西深井八の割遺跡	流山市西深井字八の割	関山	今上低地
42	東深井甲遺跡	流山市東深井字甲	黒浜	三ヶ尾低地
43	東深井水辺遺跡	流山市東深井字水辺	諸磯	〃
44	美原2丁目遺跡	流山市美原2丁目	関山	今上低地
45	中野久木貝塚	流山市中野久木字堀ノ内	黒浜	〃
46	上新宿宿後遺跡	流山市上新宿字宿後	黒浜	〃
47	上新宿向宿遺跡	流山市上新宿字向宿	黒浜	〃
48	若菜台遺跡	流山市上新宿字若菜山	黒浜	〃
49	内初石3丁目遺跡	流山市西初石3丁目	黒浜	〃
50	西初石板塚遺跡	流山市西初石4丁目	黒浜	〃
51	上貝塚大門	流山市上貝塚字大門	黒浜	〃
52	刺ヶ谷浅間後遺跡	流山市刺ヶ谷字浅間後	黒浜	〃
53	大畔台遺跡	流山市大畔字堂ノ下	黒浜	〃
54	大畔中ノ割遺跡	流山市大畔中ノ割	黒浜	〃
55	西初石5丁目遺跡	流山市西初石5丁目	黒浜・諸磯・浮島	〃
56	三輪野山北浦遺跡	流山市三輪野山字北浦	黒浜	〃
57	三輪野山宮前遺跡	流山市三輪野山字宮前	黒浜	〃
58	大久保遺跡	流山市西初石6丁目	黒浜	矢切低地
59	市野谷二反田遺跡	流山市市野谷字二反田	黒浜	〃
60	市野谷立野遺跡	流山市市野谷字立野	黒浜	〃
61	長崎遺跡	流山市野々下3丁目	黒浜・諸磯	〃
62	長崎五枚割遺跡	流山市長崎1丁H	諸磯・浮島	〃
63	野々下御成堤遺跡	流山市野々下5丁目	諸磯・浮島	〃
64	野々下金クソ遺跡	流山市野々下6丁目	諸磯・浮島	〃
65	市野谷中島遺跡	流山市市野谷字中島	黒浜	〃
66	市野谷向山遺跡	流山市市野谷字向山	黒浜	〃

道跡No	道跡名	所在地	時期・種別	水系名
67	市野谷堀内第1遺跡	流山市市野谷堀内	黒浜	矢切低地
68	野々下山中道跡	流山市野々下1丁目	黒浜	*
69	野々下西方道跡	流山市野々下1丁目	黒浜	*
70	古間木実栗木谷遺跡	流山市古間木実栗木谷	黒浜	*
71	古間木芳賀殿第1遺跡	流山市古間木字芳賀殿	黒浜	*
72	芝崎大園遺跡	流山市芝崎字人園	黒浜	*
73	前平井遺跡	流山市前平井字糸ほうち	黒浜	*
74	中中壘敷遺跡	流山市中宇中壘敷	黒浜	*
75	古間木山王第1遺跡	流山市古間木字山王	浮島	*
76	思井塚の見遺跡	流山市思井字赤松	浮島	*
77	三本松古墳	流山市鶴ヶ崎字塚の腰	黒浜	*
78	清滝院前遺跡	流山市名都信字西ノ上	関山	*
79	幸田貝塚	松戸市幸田2丁目	花積・関山・黒浜・浮島	*
80	名都信佐船込遺跡	流山市名都信字船込	黒浜	*
81	前ヶ崎遺跡	流山市前ヶ崎字上の台	諸磯	*
82	木戸口(中金)遺跡	松戸市中中金杉1・2丁目	黒浜・諸磯	*
83	道六神遺跡	松戸市中中金杉4丁目	諸磯	*
84	原の山遺跡	松戸市殿平賀字原の山	黒浜・諸磯・浮島	*
85	東平賀遺跡	松戸市東平賀字大門前	黒浜・諸磯	*
86	前ヶ崎宮本遺跡	流山市前ヶ崎字宮本	黒浜	*
87	仲通遺跡	松戸市東平賀字仲通	黒浜	*
88	殿平賀向山遺跡	松戸市殿平賀字向山	黒浜・諸磯・浮島	*
89	大谷口(大谷口Ⅱ)遺跡	松戸市大谷口字本城	黒浜・諸磯	*
90	中郷遺跡	松戸市大谷口字連摩・中郷	黒浜	*
91	西(小金)(北小金)遺跡	松戸市小金字西	黒浜・諸磯・浮島	*
92	大勝院遺跡	柏市光ヶ丘大勝院一帯	黒浜	*
93	根本内北ノ台遺跡	松戸市根本内字北ノ台	関山	*
94	境外Ⅱ遺跡	松戸市小金字境外	関山・諸磯・浮島	*
95	境外(北小金駅付近)(東漸寺)遺跡	松戸市小金字境外	黒浜	*
96	溜ノ上(溜の脇)遺跡	松戸市幸谷字溜ノ上・溜ノ脇・ボッケ	関山・黒浜・浮島	*
97	山王前遺跡	松戸市小金上総町字山王前	諸磯	*
98	熊ノ脇遺跡	松戸市幸谷字熊ノ脇	関山・諸磯	*
99	ニツ木前台遺跡	松戸市ニツ木二葉町	黒浜	*
100	殿内遺跡	松戸市小金原2丁目	黒浜	*
101	ニツ木向台(ニツ木)遺跡	松戸市ニツ木字向台	花積・関山・黒浜・諸磯	*
102	入道跡	松戸市八ヶ崎字入	関山	*
103	貝の花貝塚	松戸市小金原八丁目	関山・黒浜・浮島	*
104	若栗(栗ヶ沢)遺跡	松戸市小金原八丁目	黒浜	*
105	勢坐前遺跡	松戸市ニツ木字勢坐前・八ヶ崎字株付	関山	*
106	北道合遺跡	松戸市八ヶ崎字北道合	関山・黒浜・諸磯・浮島	*
107	南道合(八ヶ崎)遺跡	松戸市八ヶ崎字南道合	関山・黒浜・諸磯	*
108	八ヶ崎(中堀込)(中堀込A)遺跡	松戸市八ヶ崎字中堀込	関山・黒浜・浮島	*
109	中堀込(中堀込B)遺跡	松戸市八ヶ崎字中堀込	関山・黒浜・浮島	*
110	登戸Ⅱ遺跡	松戸市千駄堀字登戸	黒浜	*
111	登戸遺跡	松戸市千駄堀字登戸	関山・黒浜	*
112	大六天遺跡	松戸市千駄堀字大六天・天神脇	関山・黒浜	*
113	北郷遺跡	松戸市千駄堀字北郷・西郷	浮島	*
114	千駄堀向山遺跡	松戸市千駄堀字向山	花積・黒浜・諸磯・浮島	*
115	出来山遺跡	松戸市千駄堀字出来山・小原	黒浜・諸磯・浮島	*
116	南屋敷遺跡	松戸市千駄堀字南屋敷	浮島	*
117	清水台(清水)遺跡	松戸市千駄堀字清水台	諸磯	*
118	四ヶ塚台遺跡	松戸市金ヶ作字四ヶ塚台	諸磯	*
119	上木野七旗割(長者園敷)遺跡	松戸市上木野字七旗割・二丁目	関山・黒浜・諸磯・浮島	*

遺跡No	遺跡名	所在地	時期・種別	水系名
120	上本郷遺跡	松戸市上本郷字北台一丁目・二丁目北松所二丁目	黒浜、踏破、浮島	矢切低地
121	千駄堀寒風(千駄堀)遺跡	松戸市千駄堀字寒風・前新田・向新田	黒浜	*
122	寒風台遺跡	松戸市松戸新田字寒風台・久兵衛分	関山、黒浜、踏破、浮島	*
123	小野遺跡	松戸市胡録合字小野	関山、黒浜	*
124	岩瀬塚田遺跡	松戸市岩瀬字塚田	黒浜	*
125	鳥井戸遺跡	松戸市五香西二丁目	関山、黒浜、踏破	真間川低地
126	初富飛地I(株東)遺跡	松戸市初富飛地字元山	浮島	*
127	矢深作遺跡	松戸市田中新田字矢深作	黒浜、踏破、浮島	*
128	生松遺跡	松戸市田中新田字生松	花積、関山、黒浜、浮島	*
129	初崎遺跡	松戸市河原塚字初崎	関山、黒浜、踏破、浮島	*
130	下ノ宮(小屋原)遺跡	松戸市紙敷字下ノ宮・初崎	関山、黒浜、踏破、浮島	*
131	瀧源寺(和名ヶ谷)遺跡	松戸市和名ヶ谷字瀧源寺・二反割	黒浜	*
132	諏訪原(白幡)遺跡	松戸市和名ヶ谷字諏訪原	踏破、浮島	*
133	雨砂遺跡	松戸市紙敷字雨砂	黒浜、浮島	*
134	烏崎(崎崎IⅡⅢ)遺跡	松戸市紙敷字烏崎	黒浜、踏破、浮島	*
135	権現山(一本松第2)(一本松)遺跡	松戸市紙敷字権現山	黒浜	*
136	大久保(一本松第1)(一本松)遺跡	松戸市紙敷字大久保	黒浜、浮島	*
137	新田前(新田前東・西・南)遺跡	松戸市紙敷字新田前・下里敷	黒浜、浮島	*
138	木戸場遺跡	松戸市紙敷字木戸場	黒浜	*
139	中里遺跡	市川市大町	黒浜、踏破、浮島	*
140	天殿遺跡	市川市大町	黒浜	*
141	栗芝台(天戸)遺跡	松戸市紙敷字栗芝台・大山	黒浜	*
142	受原遺跡	松戸市紙敷字受原	浮島	*
143	牧之内(神宿)遺跡	松戸市秋山字牧之内・神宿・堀込	黒浜、踏破、浮島	*
144	秋山神宿遺跡	松戸市秋山字神宿	黒浜、踏破、浮島	*
145	東山王(曾谷貝塚)遺跡	市川市曾谷4丁目	黒浜、踏破	*
146	八反割B遺跡	市川市北国分3丁目	黒浜	*
147	上台(北台)遺跡	市川市中国分5丁目	黒浜、踏破、浮島	*
148	中台(中国分3丁目)遺跡	市川市中国分3丁目	黒浜、踏破	*
149	久保上遺跡	市川市真岡5丁目	黒浜、踏破、浮島	*
150	須和田遺跡	市川市須和田2丁目	黒浜	*
151	根郷留見遺跡	市川市須和田2丁目	関山、黒浜、踏破、浮島	*
152	曾谷遺跡	市川市曾谷4丁目	関山、黒浜、踏破、浮島	*
153	曾谷貝塚	市川市曾谷2丁目	黒浜、踏破、浮島	*
154	高谷津	市川市曾谷4丁目	黒浜	*
155	根吉屋遺跡	市川市曾谷3丁目	踏破	*
156	三中校庭遺跡	市川市曾谷3丁目	花積、関山、踏破、浮島	*
157	向台遺跡	市川市曾谷1丁目	花積、黒浜	*
158	高德保(高德徳)遺跡	市川市曾谷1丁目	関山、黒浜	*
159	宮久保A遺跡	市川市宮久保2丁目	花積	*
160	山ノ後遺跡	市川市宮久保4丁目	黒浜	*
161	宮久保所願寺遺跡	市川市宮久保4丁目	関山、踏破	*
162	小田山遺跡	市川市宮久保6丁目	関山、黒浜、踏破	*
163	曾谷南遺跡	市川市曾谷1丁目	黒浜、浮島	*
164	庚塚遺跡	市川市曾谷2丁目	黒浜、踏破、浮島	*
165	下貝塚	市川市下貝塚2丁目	黒浜	*
166	山王台遺跡	市川市大野町1丁目	黒浜	*
167	木戸前Ⅱ遺跡	松戸市高塚新田字木戸前	関山、黒浜、踏破、浮島	*
168	大野庚塚	市川市大野町2丁目	黒浜	*
169	市ノ谷遺跡	市川市大野町1丁目	黒浜	*
170	舟作遺跡	市川市大野町2丁目	黒浜	*
171	殿山遺跡	市川市大野町2丁目	踏破、浮島	*
172	横道遺跡	市川市大野町3丁目	黒浜	*

路線No	遺跡名	所在地	時期・種別	水系名
173	下台遺跡	市川市大町	関山・黒浜・浮島	真間川低地
174	宮後遺跡	市川市大野町3丁目	黒浜・踏櫓	*
175	御門遺跡	市川市大野町3丁目	黒浜	*
176	前原遺跡	市川市大野町2丁目	黒浜	*
177	殿内B遺跡	市川市大野町4丁目	黒浜	*
178	殿台遺跡	市川市大野町4丁目	黒浜・踏櫓・浮島	*
179	広台遺跡	市川市大野町4丁目	黒浜・踏櫓・浮島	*
180	千駄山B遺跡	市川市大町	踏櫓	*
181	千駄木A遺跡	市川市大町	踏櫓	*
182	木戸橋貝塚	鎌ヶ谷市中沢水戸橋	黒浜・浮島	*
183	中ノ峠遺跡	鎌ヶ谷市中沢中ノ峠	浮島	*
184	林裏遺跡	鎌ヶ谷市初富林裏	踏櫓	*
185	向山No.1遺跡	鎌ヶ谷市初富向山	関山・黒浜・踏櫓	*
186	柳坪遺跡	鎌ヶ谷市中沢柳坪	黒浜・踏櫓	*
187	新田遺跡	鎌ヶ谷市新田	黒浜・踏櫓	印旛沼低地
188	根崎No.4遺跡	鎌ヶ谷市中沢根崎	黒浜・踏櫓	真間川低地
189	西山遺跡	鎌ヶ谷市遠野西山	浮島	*
190	豆ヶ台遺跡	鎌ヶ谷市鎌ヶ谷豆ヶ台	浮島	真間川/海老川低地
191	谷地川No.1遺跡	鎌ヶ谷市中沢谷地川	黒浜	真間川低地
192	株木(株木A)遺跡	市川市柏井町4丁目	黒浜・踏櫓・浮島	*
193	株木東(株木B)遺跡	市川市柏井町4丁目	黒浜	*
194	卯塔前B遺跡	市川市柏井町4丁目	関山・黒浜	*
195	卯塔前A遺跡	市川市柏井町2丁目	黒浜	*
196	杉ノ木台遺跡	市川市柏井町3丁目	花隈・黒浜・踏櫓・浮島	*
197	倉沢東遺跡	市川市柏井町2丁目	黒浜・踏櫓	*
198	坂の下遺跡	市川市奉免町	関山・黒浜・踏櫓	*
199	奉免安楽寺遺跡	市川市奉免町	黒浜	*
200	内荒久遺跡	市川市柏井町1丁目	黒浜	*
201	今島田東遺跡	市川市柏井町1丁目	黒浜・踏櫓・浮島	*
202	法田西(法田)遺跡	市川市柏井町1丁目	黒浜・踏櫓・浮島	*
203	下郷後遺跡	船橋市藤原2丁目	黒浜・踏櫓	*
204	法蓮寺山貝塚	船橋市藤原1丁目	黒浜・踏櫓・浮島	*
205	下郷遺跡	船橋市藤原1丁目	黒浜	*
206	藤原北貝塚	船橋市藤原1丁目	関山・黒浜	*
207	三角遺跡	市川市北方町4丁目	黒浜	*
208	東新山遺跡	市川市北方町4丁目	黒浜・踏櫓・浮島	*
209	花ヶ谷台遺跡	市川市若宮3丁目	黒浜・浮島	*
210	美濃輪台遺跡	市川市北方3丁目	浮島	*
211	西の台遺跡	船橋市二和1丁目	黒浜・踏櫓・浮島	海老川低地
212	高木遺跡	船橋市金杉4丁目	浮島	*
213	古和台遺跡	船橋市新高根1丁目	黒浜・踏櫓・浮島	*
214	前貝塚塚込貝塚	船橋市前貝塚字塚込	黒浜	*
215	向遺跡	船橋市行田3丁目	黒浜	*
216	夏見台西遺跡	船橋市夏見台3丁目	黒浜・浮島	*
217	八栄北遺跡	船橋市夏見町2丁目	黒浜・浮島	*
218	唐沢台貝塚	船橋市高根町字唐沢台	黒浜・踏櫓	*
219	取掛西貝塚	船橋市飯山満町1丁目	花隈・関山・黒浜	*
220	取掛貝塚	船橋市飯山満町1丁目	関山	*
221	飯山満東遺跡	船橋市芝山1丁目	黒浜・踏櫓・浮島	*
222	沢之台遺跡	船橋市七林町沢之台	浮島	*
223	佐倉道南遺跡	船橋市前原西4丁目	黒浜・踏櫓・浮島	*
224	源五台遺跡	船橋市金堀町字源五台	黒浜	印旛沼低地
225	青戸遺跡	八千代市青橋字青戸	黒浜	*

路線No	道 路 名	所 在 地	時期・種別	水 系 名
226	外原道跡	船橋市田喜野井1丁目	浮島	菊田川低地
227	花咲貝塚	習志野市花咲2丁目	踏破・浮島	花見川低地
228	実郷本郷道跡	習志野市実郷本郷	浮島	〃
229	実郷3丁目道跡	習志野市実郷3丁目	黒浜	〃
230	神明道跡	千葉市花見川区畑町神場	黒浜	〃
231	一枚田道跡	千葉市花見川区一枚田	浮島	〃
232	子和清水道跡	千葉市花見川区三角町	黒浜・浮島	〃
233	子和清水西道跡	千葉市花見川区三角町	踏破	〃
234	房地道跡	千葉市稲毛区宮野木町	踏破・浮島	花見川低地/汐田川谷
235	玄香所道跡	千葉市花見川区花園町	浮島	花見川低地
236	烏吹東道跡	千葉市花見川区宮野木台1丁目	踏破・浮島	花見川低地/汐田川谷
237	谷津台道跡	千葉市稲毛区小神台町谷津台	関山・黒浜・踏破・浮島	汐田川谷
238	園生貝塚	千葉市稲毛区園生町	踏破・浮島	〃
239	五味ノ木道跡	千葉市稲毛区栗台町	浮島	都川低地
240	南屋敷道跡	千葉市若葉区瀬町	浮島	〃
241	高津畑田道跡	千葉市若葉区瀬町	浮島	〃
242	駒形道跡	千葉市稲毛区作草部町	関山	〃
243	新畑道跡	千葉市稲毛区作草部町	浮島	〃
244	大西道跡	千葉市若葉区高品町大広	浮島	〃
245	渡戸台北道跡	千葉市若葉区原町渡戸台	踏破・浮島	〃
246	渡戸台道跡	千葉市若葉区原町渡戸台	踏破・浮島	〃
247	北原道跡	千葉市若葉区高品町北原	浮島	〃
248	榎崎道跡	千葉市若葉区原町	踏破・浮島	〃
249	山王道跡	千葉市若葉区原町	浮島	〃
250	原道跡	千葉市若葉区原町	関山・踏破・浮島	〃
251	草刈場北道跡	千葉市若葉区貝塚町草刈場	踏破	〃
252	東田道跡	千葉市若葉区高品町	浮島	〃
253	貝塚道跡	千葉市若葉区高品町貝塚	踏破	〃
254	荒原敷西道跡	千葉市若葉区貝塚町向	関山・踏破・浮島	〃
255	千場道跡	千葉市若葉区貝塚町千場	踏破	〃
256	車坂道跡	千葉市若葉区貝塚町車坂	踏破	〃
257	貝塚向道跡	千葉市中央区都町貝塚向	浮島	〃
258	木戸場道跡	千葉市中央区都町木戸場	踏破	〃
259	宝導寺台道跡	千葉市中央区都町宝導寺台	関山・黒浜・踏破・浮島	〃
260	向ノ台道跡	千葉市中央区都町向の台	踏破	〃
261	加曾利貝塚	千葉市若葉区桜木町	黒浜・踏破・浮島	〃
262	古山道跡	千葉市若葉区加曾利町	踏破・浮島	〃
263	上人塚道跡	千葉市若葉区桜木町上人塚	踏破	〃
264	立木道跡	千葉市若葉区加曾利町立木	浮島	〃
265	雲人塚道跡	千葉市若葉区加曾利町	浮島	〃
266	矢作貝塚	千葉市中央区矢作町	踏破	〃
267	星久喜道跡	千葉市中央区星久喜町小路谷	踏破・浮島	〃
268	寛久道跡	千葉市中央区青葉町	浮島	村田川低地
269	稲荷山道跡	千葉市中央区千歳寺町稲荷山	踏破	〃
270	山ノ神道跡	千葉市中央区宮崎町	黒浜・浮島	〃
271	目吹新立貝塚	野田市目吹字立山	黒浜・踏破	三ヶ尾低地
272	丸山道跡	野田市三ヶ尾字立山・丸山・炭塚	黒浜	〃
273	淨法寺前道跡	野田市三ヶ尾字淨法寺前地	花畑	〃
274	淨法寺前Ⅱ道跡	野田市三ヶ尾字淨法寺前	黒浜	〃
275	下山道跡	野田市宮崎新田字下山	関山・黒浜・踏破	〃
276	上灰毛道跡	野田市瀬戸上灰毛字押出し	黒浜	〃
277	三ヶ尾道跡	野田市三ヶ尾六畝	黒浜	〃
278	稲荷前道跡	野田市三ヶ尾稲荷前	関山・黒浜	〃

道跡No	道 跡 名	所 在 地	時期・種別	水 系 名
279	櫻戸遺跡	野田市三ツ堀稲荷前	黒浜	三ヶ尾低地
280	勢至久保遺跡	野田市ニツ塚	黒浜・諸磯	*
281	三ツ堀宮前貝塚	野田市三ツ堀宮前	浮島	*
282	倉ノ橋遺跡	野田市西三ヶ尾倉ノ橋	黒浜	*
283	本郷A遺跡	野田市西三ヶ尾字本郷	黒浜	*
284	熊ノ前遺跡	野田市下三ヶ尾字熊の前	黒浜	*
285	下三ヶ尾契郷遺跡	野田市下三ヶ尾字根郷	浮島	*
286	下三ヶ尾初吹遺跡	野田市下三ヶ尾字初吹	黒浜・浮島	*
287	山神宮山遺跡	柏市船戸山高野宮本	関山・黒浜・浮島	*
288	高砂遺跡	柏市船戸山高野高砂	黒浜・浮島	*
289	館林Ⅰ遺跡	柏市船戸館林	諸磯	三ヶ尾・柏・我孫子低地
290	館林Ⅱ遺跡	柏市船戸館林	諸磯	*
291	水砂(Ⅱ)遺跡	柏市大青田水砂	黒浜	三ヶ尾低地
292	水砂(Ⅰ)遺跡	柏市大青田水砂	関山・黒浜・浮島	*
293	中山新田(Ⅲ)遺跡	柏市大青田八両野	黒浜・諸磯・浮島	*
294	中山新田(Ⅱ)遺跡	柏市大青田跡地	黒浜・諸磯	*
295	中山新田(Ⅰ)遺跡	柏市大青田南田	関山・黒浜・諸磯・浮島	*
296	こうのす台第Ⅰ遺跡	流山市こうのす台	諸磯	*
297	東深井山ノ越遺跡	流山市東深井字山ノ越	諸磯	*
298	鴻の巣遺跡	流山市こうのす台	黒浜	*
299	こうのす台第Ⅱ遺跡	流山市こうのす台	黒浜	*
300	こうのす台第Ⅳ遺跡	流山市こうのす台	黒浜	*
301	花前(Ⅰ)遺跡	柏市船戸花前	黒浜・諸磯・浮島	柏・我孫子低地
302	花前(Ⅱ)遺跡	柏市船戸花前	黒浜・諸磯・浮島	*
303	花前(Ⅲ)遺跡	柏市船戸新町	黒浜・諸磯・浮島	*
304	矢船(Ⅰ)遺跡	柏市船戸矢船	黒浜・諸磯・浮島	*
305	駒形遺跡	柏市小青田駒形	花積・関山・黒浜・諸磯・浮島	*
306	富士見遺跡	柏市小青田立山	花積・関山・黒浜・諸磯・浮島	*
307	大松遺跡	柏市大青田大松	関山・黒浜	*
308	取畑遺跡	柏市大室原畑全区	花積・黒浜・諸磯・浮島	*
309	小山台遺跡	柏市大室小山台	花積・関山・黒浜・諸磯・浮島	*
310	寺下前遺跡	柏市大室寺下前	黒浜	*
311	田中小遺跡	柏市大室中野台	黒浜	*
312	尾井戸(Ⅰ)遺跡	柏市花野井尾井戸	関山・黒浜・諸磯・浮島	*
313	寺前貝塚(Ⅱ)	柏市花野井寺前	黒浜	*
314	塩辛遺跡	柏市花野井塩辛	黒浜	*
315	宿ノ後遺跡	柏市布施宿ノ後	黒浜	*
316	寺山(Ⅰ)遺跡	柏市布施寺山	黒浜	*
317	寺山(Ⅱ)遺跡	柏市布施寺山	黒浜	*
318	山ノ田台遺跡	柏市布施山ノ田台全区	黒浜・諸磯	*
319	東ノ前遺跡	我孫子市布施字東ノ前	黒浜	*
320	宮前北遺跡	我孫子市布施字宮前北	黒浜	*
321	宮前遺跡	我孫子市布施字宮前北	黒浜	*
322	梶耕地台遺跡	我孫子市久寺家字梶耕地台	諸磯	*
323	谷ノ尻遺跡	柏市布施谷ノ尻	関山	*
324	雷神遺跡	柏市布施新田	黒浜・諸磯	*
○	雷神遺跡	我孫子市布施字雷神	黒浜	*
325	一三本原遺跡	柏市布施十三本原	黒浜	*
326	一ツ木台遺跡	柏市布施一ツ木台	黒浜	*
327	久寺家遺跡	我孫子市久寺家字日寺	関山・黒浜・諸磯・浮島	*
328	中谷遺跡	我孫子市布施字中谷	黒浜	*
329	瀧ノ内遺跡	我孫子市久寺家字上層村附	黒浜	*
330	上居村附西遺跡	我孫子市久寺家字上居村附	黒浜	*

遺跡%	遺 跡 名	所 在 地	時期・種別	水 系 名
331	亀ノ甲北遺跡	我孫子市根戸字亀ノ甲	黒浜・諸磯・浮島	柏・我孫子低地
332	亀ノ甲遺跡	我孫子市根戸字亀ノ甲	黒浜・諸磯	〃
333	甲ヶ谷遺跡	我孫子市根戸字甲ヶ谷	黒浜	〃
334	亀ノ甲南遺跡	我孫子市根戸字亀ノ甲	黒浜	〃
335	関東遺跡	我孫子市我孫子字関東	関山・黒浜・浮島	〃
336	後田南遺跡	我孫子市我孫子字西原	黒浜	〃
337	並木遺跡	我孫子市並木6丁目	黒浜	〃
338	柴崎後畑遺跡	我孫子市柴崎字妻子原	黒浜	〃
339	城根遺跡	我孫子市柴崎字城根	黒浜	〃
340	西台南遺跡	我孫子市青山字西台	黒浜	〃
341	柴崎(第2次)遺跡	我孫子市柴崎台3丁目	黒浜・諸磯	〃
342	柴崎(第1次)遺跡	我孫子市柴崎台3丁目	黒浜	〃
343	柴崎(第3・4次)遺跡	我孫子市柴崎台4丁目	黒浜・諸磯・浮島	〃
344	小山台遺跡	我孫子市都那字小山台	黒浜	〃
345	根古原原遺跡	我孫子市中幹字根古原	黒浜	〃
346	海老宿遺跡	我孫子市中幹字海老宿	黒浜・浮島	〃
347	下根古原遺跡	我孫子市中幹字天地久保台	黒浜	〃
348	才進地遺跡	我孫子市中幹字才進地	黒浜	〃
349	大久保遺跡	我孫子市中幹字下大久保	黒浜	〃
350	下中宅地表東遺跡	我孫子市中幹字下中宅地表	黒浜	〃
351	高根遺跡	我孫子市中幹字高根	黒浜	〃
352	君作遺跡	我孫子市新木字君作	黒浜	〃
353	薬師前遺跡	我孫子市新木字薬師前	黒浜	柏・我孫子/手賀沼低地
354	五郎地遺跡	我孫子市新木字五郎地	黒浜	柏・我孫子低地
355	北原地遺跡	我孫子市新木野2丁目	黒浜	柏・我孫子/手賀沼低地
356	原地遺跡	我孫子市布佐字原地	黒浜	手賀沼低地
357	栗牧西遺跡	我孫子市布佐字北原地	黒浜	柏・我孫子/手賀沼低地
358	正蓮寺貝塚	柏市正蓮寺内山	黒浜	手賀沼低地
359	溜井台遺跡	柏市若柴	黒浜・諸磯・浮島	〃
360	原山遺跡	柏市若柴	黒浜	〃
361	上雷留遺跡	柏市花野井上雷留	黒浜	〃
362	香取神社遺跡	柏市花野井西高野	黒浜	〃
363	涌ノ麻遺跡	柏市松葉可	黒浜・諸磯	〃
364	松ヶ崎(1)遺跡	柏市松ヶ崎井戸作	黒浜	〃
365	松ヶ崎貝塚	柏市松ヶ崎後田	黒浜	〃
366	八幡遺跡	柏市松ヶ崎八幡	黒浜	〃
367	須賀遺跡	柏市松ヶ崎須賀	黒浜	〃
368	殿内遺跡	柏市高田西下ノ台	浮島	〃
369	花戸原遺跡	柏市根戸花戸原全区	黒浜	〃
370	根切遺跡	我孫子市根戸字根切	黒浜	〃
371	中馬場遺跡	柏市北柏2丁目北柏合一番	黒浜	〃
372	荒道遺跡	我孫子市根戸字荒道	黒浜	〃
373	根戸城跡	我孫子市根戸字荒道	関山・黒浜	〃
374	法花坊遺跡	我孫子市台田4丁目	黒浜	〃
375	塗手久保遺跡	我孫子市根戸字塗手久保	黒浜	柏・我孫子低地
376	堀尻北遺跡	我孫子市根戸字堀尻	関山・黒浜	〃
377	台田北遺跡	我孫子市台田3丁目	黒浜・諸磯	〃
378	台田東遺跡	我孫子市台田1丁目	関山	〃
379	根戸船戸遺跡	我孫子市白山3丁目	関山・黒浜・浮島	手賀沼低地
380	白山古墳群	我孫子市白山1丁目	関山	〃
381	大光寺貝塚	我孫子市緑2丁目	関山	〃
382	向原遺跡	我孫子市寿2丁目	黒浜	〃
383	子ノ神古墳群	我孫子市寿2丁目	黒浜・諸磯・浮島	〃

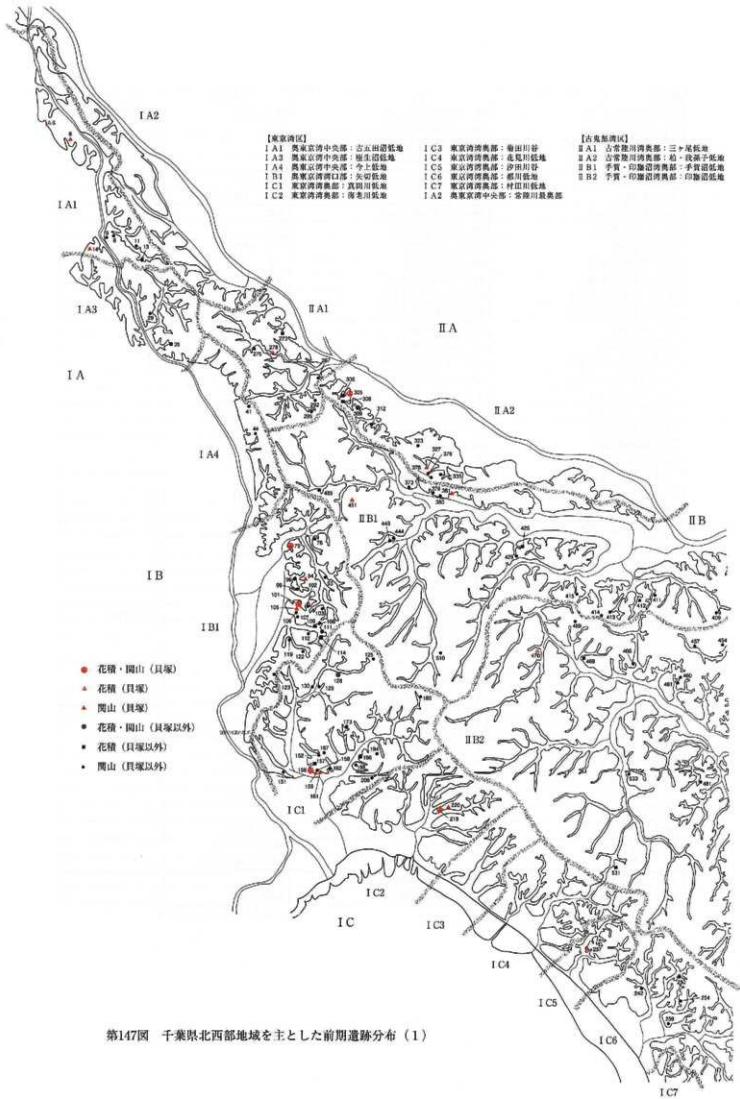


遺跡%	遺跡名	所在地	時期・種別	水系名
384	草塚東遺跡	我孫子市我孫子草塚	黒浜	手賀沼低地
385	西野場遺跡	我孫子市高野山字西野場	黒浜	*
386	本郷遺跡	我孫子市高野山字本郷	黒浜	*
387	高野山北遺跡	我孫子市高野山字前畑	黒浜・浮島	*
388	古屋遺跡	我孫子市高野山字古屋	黒浜・浮島	*
389	前原遺跡	我孫子市高野山字前原	黒浜	*
390	小畚遺跡	我孫子市高野山字小畚	黒浜	*
391	神谷津遺跡	我孫子市國免戸字神谷津	黒浜・浮島	*
392	國免戸新田貝塚	我孫子市國免戸字横町	黒浜	*
393	南原遺跡	我孫子市中里字南原	黒浜	*
394	南久保作遺跡	我孫子市中里字南久保作	黒浜	*
395	別当地遺跡	我孫子市中里字別当地	黒浜	*
396	日秀西遺跡	我孫子市日秀字西	黒浜	*
397	得門神社遺跡	我孫子市日秀字宮前	黒浜	*
398	チアミ遺跡	我孫子市字チアミ	黒浜	*
399	四間戸遺跡	我孫子市日秀字四間戸	黒浜・諸磯・浮島	*
400	羽黒前古墳	我孫子市新水字羽黒前	黒浜	*
401	羽黒前遺跡	我孫子市新水字羽黒前	黒浜	*
402	西大作遺跡	我孫子市布佐字西大作	黒浜・諸磯・浮島	*
403	北人作遺跡	我孫子市布佐字北人作	黒浜	*
404	丑高入遺跡	我孫子市布佐字原地丑高入	黒浜	*
405	南大作遺跡	我孫子市布佐字源地丑高入	黒浜	*
406	勢至前遺跡	我孫子市布佐字勢至前	黒浜	柏・我孫子低地
407	和田前台遺跡	我孫子市布佐字和田前	黒浜	手賀沼低地
408	宗甫北遺跡	印西市別所字大山	黒浜	*
409	西割遺跡	印西市宗甫字西割	関山	*
410	鹿黒遺跡	印西市草深字東泉新田前	諸磯・浮島	*
411	泉北側第2遺跡	印西市鹿黒字新山	関山・黒浜・諸磯・浮島	*
412	和泉向原遺跡	印西市和泉字向原	関山	*
413	木刈峠遺跡	印西市浦輪新田字木刈峠(現、木刈8丁目)	関山	*
414	一本松遺跡	印西市木刈5丁目	関山・黒浜・諸磯・浮島	*
415	向台II遺跡	白井町平塚字向台	関山・黒浜・諸磯・浮島	*
416	寺向遺跡	白井町平塚	浮島	*
417	布瀬向山遺跡	柏市布瀬向山	黒浜	*
418	布瀬貝塚	柏市布瀬字宮前	黒浜・諸磯	*
419	宮前第1遺跡	柏市布瀬字宮前	黒浜	*
420	手賀船戸貝塚	柏市手賀字船戸	黒浜	*
421	明坊池貝塚	柏市手賀字明坊池	黒浜	*
422	片山宮前遺跡	柏市片山宮前	黒浜	*
423	久保作遺跡	柏市片山久保作	黒浜	*
424	寛久遺跡	柏市片山字寛久	黒浜	*
425	石掃遺跡	柏市泉字石掃	花積	*
426	鶴居西原遺跡	柏市鶴戸字西原	諸磯	*
427	丑新田遺跡	柏市鶴戸字丑新田	黒浜	*
428	中台山遺跡	柏市泉字中台山	黒浜	*
429	橋遺跡	柏市泉字橋返し	関山・黒浜	*
430	手賀西小畚遺跡	柏市泉字熊ノ山	黒浜	*
431	稲荷峠遺跡	柏市鷺野谷字稲荷峠	黒浜	*
432	幸田原遺跡	柏市鷺野谷字幸田原	黒浜	*
433	西堀之内遺跡	柏市若白毛字西堀之内	黒浜	*
434	金山宮後原遺跡	柏市金山字宮後原	黒浜・浮島	*
435	水神遺跡	柏市箕輪字水神	諸磯	*
436	中台遺跡	柏市箕輪字中台	黒浜	*

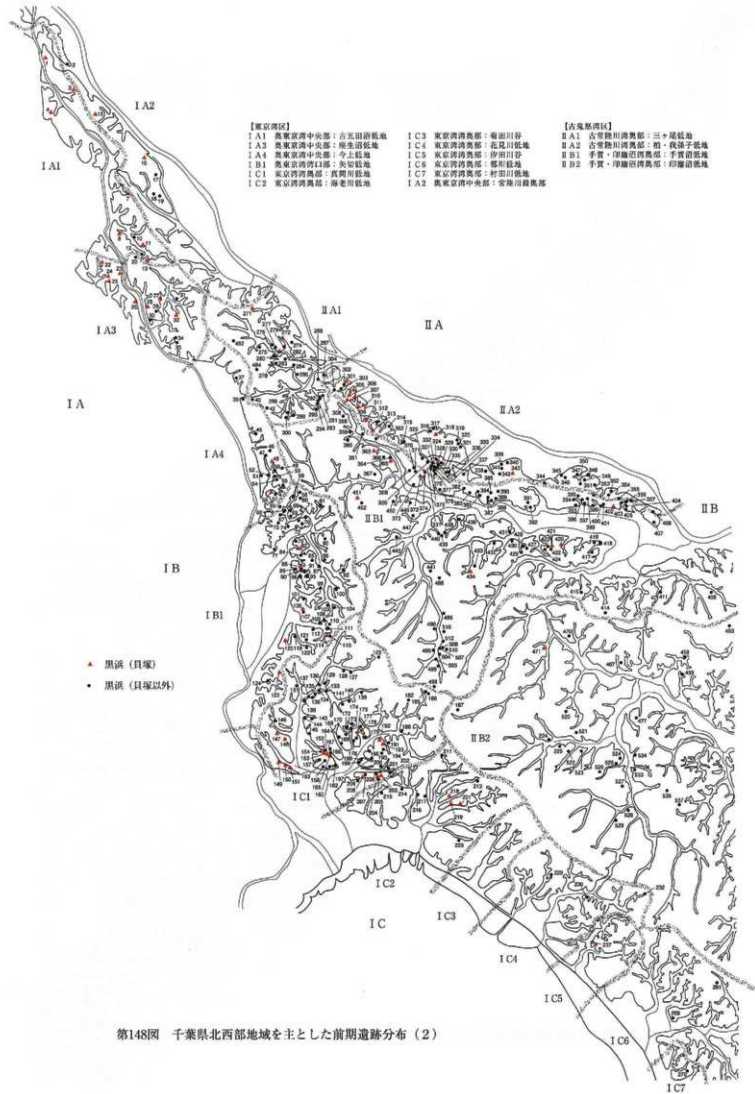
道跡No	道 跡 名	所 在 地	時期・種別	水 系 名
437	大井道跡	柏市大井字竹之越	諸磯	手賀沼低地
438	天神向道跡	柏市大井字天神向	黒浜	〃
439	天神向原道跡	柏市大井字天神向原	黒浜	〃
440	六釜内道跡	柏市大井字六釜内	黒浜・諸磯	〃
441	塚崎第1道跡	柏市塚崎字中島	黒浜	〃
442	小山道跡	柏市道井小山	諸磯	〃
443	南小橋道跡	柏市名戸ヶ谷南小橋	関山・黒浜	〃
444	東小橋道跡	柏市名戸ヶ谷東小橋	関山	〃
445	落合道跡	柏市名戸ヶ谷落合	諸磯・浮島	〃
446	戸張城山(Ⅱ)道跡	柏市戸張城山台	諸磯	〃
447	不動山道跡	柏市戸張伸ノ松山	黒浜	〃
448	大明神前道跡	柏市戸張大明神前	浮島	〃
449	日本橋字橋道跡	柏市柏坪山全区他	黒浜	〃
450	栗山道跡	柏市柏栗山	黒浜	〃
451	競馬場貝塚	柏市豊四季向原豊四季団地	関山・黒浜	〃
452	篠籠田(Ⅱ)道跡	柏市篠籠田下原	黒浜	〃
453	石道谷津道跡	印西市小林字石道谷津	黒浜	印旛沼低地
454	一の作道跡	印西市草深字一の作	関山	〃
455	亀ノ甲東道跡	印西市草深字亀の甲	諸磯	〃
456	亀ノ甲西道跡	印西市草深字亀の甲	浮島	〃
457	原東道跡	印西市草深字原	関山	〃
458	新井堀Ⅱ道跡	印西市草深字新井堀	黒浜・諸磯・浮島	〃
459	松崎Ⅲ道跡	印西市松崎字堀木戸	黒浜	〃
460	松崎Ⅳ道跡	印西市松崎字高野	関山・諸磯・浮島	〃
461	松崎Ⅴ道跡	印西市松崎字高野原	関山	〃
462	西ノ原第3道跡	印旛村吉田西ノ原	浮島	〃
463	吉田馬ヶ台道跡	印旛村吉田馬ヶ台	諸磯	〃
464	榎峠道跡	印西市裏橋新田字榎峠	浮島	〃
465	高根北道跡	印西市小倉字大塚前	浮島	〃
466	船尾白樺道跡	印西市船尾字白樺	関山・諸磯・浮島	〃
467	向新田道跡	印西市武西字向新田	黒浜	〃
468	谷田木曾地道跡	白井町谷田字木曾地他	花積	〃
469	神々廻東原道跡	白井町神々廻字東原	関山・諸磯・浮島	〃
470	神々廻宮前道跡	白井町神々廻字宮前	黒浜・諸磯・浮島	〃
471	復山谷道跡	白井町復山谷	花積・黒浜	〃
472	作山道跡	八千代市小池字作山	浮島	〃
473	真木野道跡	八千代市真木字台	浮島	〃
474	松原道跡	八千代市真木野字松原	浮島	〃
475	子の神台道跡	八千代市佐山字子の神台	浮島	〃
476	桑納前畑道跡	八千代市桑納字前畑	浮島	〃
477	大山道跡	八千代市米本字大山	黒浜・諸磯	〃
478	郷道跡	八千代市保品字郷	浮島	〃
479	丸山道跡	八千代市下高野字丸山	浮島	〃
480	赤作道跡	八千代市米本字赤作	浮島	〃
481	上原寺香原道跡	佐倉市上原寺香原	関山	〃
482	上原道跡	野田市地根字上原	黒浜・諸磯・浮島	三ヶ尾低地
483	中根八幡前道跡	野田市中根	諸磯	今上低地
484	上三ヶ尾平井道跡	野田市上三ヶ尾平井	黒浜・諸磯	三ヶ尾低地
485	駒木諏訪腰道跡	流山市駒木字諏訪腰	関山	手賀沼低地
486	十太夫第Ⅱ道跡	流山市十太夫	浮島	〃
487	土中道跡	柏市増尾小山台	浮島	〃
488	塚崎宮後道跡	柏市塚崎字宮後	黒浜	〃
489	品川根道跡	柏市高橋字品川根	黒浜	〃

道跡№	道 跡 名	所 在 地	時期・種別	水 系 名
490	北後山№1 遺跡	鎌ヶ谷市在津間北後山	黒浜・諸磯	手賀沼低地
491	北後山№2 遺跡	鎌ヶ谷市在津間北後山	浮島	*
492	北根郷屋№1 遺跡	鎌ヶ谷市在津間北根郷屋	浮島	*
493	北根郷屋№2 遺跡	鎌ヶ谷市在津間北根郷屋	浮島	*
494	南後山№2 遺跡	鎌ヶ谷市在津間南後山	諸磯・浮島	*
495	雷遺跡	鎌ヶ谷市在津間雷	黒浜・諸磯・浮島	*
496	栗野田境遺跡	鎌ヶ谷市栗野栗野田境	浮島	*
497	二本松遺跡	鎌ヶ谷市初富二本松	諸磯	*
498	中富遺跡	鎌ヶ谷市初富中富	黒浜・諸磯	*
499	林跡№1 遺跡	鎌ヶ谷市初富林跡	黒浜	*
500	五本松№1 遺跡	鎌ヶ谷市初富五本松	諸磯・浮島	*
501	上葉貫台№2 遺跡	鎌ヶ谷市栗野上葉貫台	諸磯	*
502	上葉貫台№1 遺跡	鎌ヶ谷市栗野上葉貫台	浮島	*
503	橋本遺跡	鎌ヶ谷市栗野橋本	黒浜・諸磯・浮島	*
504	北方前遺跡	鎌ヶ谷市在津間北方前	黒浜	*
505	中山新山№1 遺跡	鎌ヶ谷市在津間中山新山	諸磯・浮島	*
506	中山新山№2 遺跡	鎌ヶ谷市在津間中山新山	浮島	*
507	向山№2 遺跡	鎌ヶ谷市在津間向山	黒浜	*
508	向山№3 遺跡	鎌ヶ谷市在津間向山	黒浜・諸磯・浮島	*
509	向山№4 遺跡	鎌ヶ谷市在津間向山	浮島	*
510	屋敷裏遺跡	鎌ヶ谷市在津間屋敷裏	関山・黒浜	*
511	向山№1 遺跡	鎌ヶ谷市初富本町	諸磯・浮島	*
512	大境№2 遺跡	鎌ヶ谷市在津間大境	黒浜	*
513	山王台№3 遺跡	鎌ヶ谷市在津間山王台	諸磯・浮島	*
514	山王台№4 遺跡	鎌ヶ谷市在津間山王台	諸磯・浮島	*
515	山王台№1 遺跡	鎌ヶ谷市在津間山王台	諸磯・浮島	*
516	山王台№2 遺跡	鎌ヶ谷市在津間山王台	黒浜・諸磯	*
517	遠山№4 遺跡	鎌ヶ谷市梶井沢遠山	浮島	*
518	落山遺跡	鎌ヶ谷市梶井沢落山	諸磯	*
519	東林跡遺跡	鎌ヶ谷市東林跡	諸磯	*
520	鈴身丸山遺跡	鎌ヶ谷市鈴身町字丸山	黒浜	印磨沼低地
521	本郷台遺跡	八千代市桑納字本郷台	黒浜	*
522	吉橋新山遺跡	八千代市吉橋字新山	黒浜	*
523	妙見前遺跡	八千代市吉橋字妙見前	黒浜	*
524	管地ノ台遺跡	八千代市豊田字管地ノ台	黒浜	*
525	権現後遺跡	八千代市ゆりのき台7・8丁目他	黒浜・浮島	*
526	向山遺跡	八千代市大和田新田字向山	黒浜	*
527	川崎山遺跡	八千代市豊田町字川崎山	黒浜	*
528	高台向遺跡	千葉市花見川区横戸町	黒浜	*
529	大溜入遺跡	八千代市八千代台東字大溜入	黒浜・諸磯	*
530	後口遺跡	千葉市花見川区柏井町後口	諸磯	*
531	大山遺跡	千葉市花見川区柏井町大山	花積・浮島	*
532	上台遺跡	千葉市花見川区横戸町上台	諸磯	*
533	持田遺跡	八千代市村上字持田	関山・黒浜	*
534	立野台遺跡	八千代市村上字立野台	黒浜	*
535	新林遺跡	八千代市上高野字新林	黒浜・諸磯・浮島	*
536	上志津御塚山遺跡	佐倉市上志津御塚山	浮島	*
537	井野町大林遺跡	佐倉市井野町大林	黒浜・浮島	*

※時期・種別の太字は貝塚



第147图 千葉県北西部地域を主とした前期遺跡分布 (1)



第148図 千葉県西北部地域を主とした前期遺跡分布(2)



第149図 千葉県北西部地域を主とした前期遺跡分布 (3)

## 2 駒形遺跡の生産活動 (第150・151図)

駒形遺跡を含む柏北部東区遺跡群は、既述のように古鬼怒湾湾奥部の古常陸川谷：柏・我孫子低地の北西端に面した台地上に位置した遺跡群である。縄文海進盛期には広大な内湾であった古鬼怒湾水系と東京湾水系の接点に位置したことで、北関東東部域や南関東西部域との陸海上交通の要衝でもあったと思われる。こうした地理的・環境的な条件のもと獲得しうる動植物を対象とした様々な生産活動と、これら生産活動を支えた生産用具の調達のための交易などが活発に行われ、集落・地域間の交流は盛んであったと考えられる。ここでは遺構内貝層から出土した動植物遺存体や生産用具の内容から、駒形遺跡の生産活動にアプローチしてみたい。なお、動植物遺存体については既述したとおり遺構内貝層の貝サンプルを中心に回収されたもので、今回は花積下層式期と黒浜式期の堅穴住居跡と、諸磯・浮島式期の土坑から得られたデータが主であることを再度、記しておく。

貝類は10科13種以上が同定されたが、対象となったどの時期のサンプルも、主要構成種が湾奥泥底干潟種のオキシジミ・ハイガイ・マガキと、内湾砂底種のハマグリ・アサリ・サルボオが混在する点に特徴がある。これは単純に別々の漁場からもたらされたと解釈することは早計であり、むしろ同一ないし連続した漁場から採取されたとみるべきと考えられるもので、初頭から後葉期まで同一の傾向にあったと予想している。魚類は花積下層式期のSI051からスズキ属、タイ科、マダイ、ニシン科(イワシ類)が、諸磯・浮島式期のSK050からタイ科、真骨類種不明が出土しているが、黒浜式期の遺構内貝層からは出土していない。哺乳類は花積下層式期のSI051のみから出土している。確実なところでイヌ、シカが同定されているが、食料となったシカは成獣である。植物遺存体はクルミの炭化果皮が花積下層式期のSI051で1点、黒浜式期のSI014で2点出土しているだけである。以上のように動植物遺存体のデータ数が少なく、駒形遺跡の生産活動云々を論じることは早計である。今回報告分は未だ資料蓄積の段階にあると言える<sup>100)</sup>。

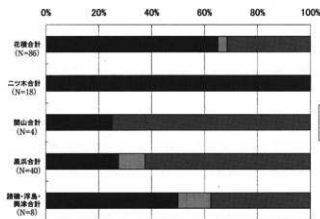
水産資源をターゲットとした漁労活動を支えた主な場所は、二つの穂やかつ広大な内湾である。古海況のデータを織り込んだ前期の研究は、奥東京湾区ではいくつかの重要な成果が公表されている<sup>101)</sup>。これに比して古鬼怒湾区では柏北部東区遺跡群の調査以前に該期の調査事例はほとんど無く、地質学や古生物学のデータを基にした海岸線の変遷を推定した研究も無かったため、東京湾区のような研究が現在までのところ成されていない。

森林資源をターゲットとした狩猟・採集活動を支えた主な場所は、低平且つ広大な下総台地である。周知のように植物遺存体から生産活動にアプローチできるのはこれらが数多く遺されている低地性遺跡に限られるので、多くの台地上の遺跡では出土した生産用具の用途や数量などから生産活動を類推している。こうした研究成果を基礎にさらに森林資源をターゲットとした生産活動の在り方に踏み込んだのが、今村啓爾、西野雅人の研究である<sup>102)</sup>。概要は註に示したが、石鏃=狩猟具、打製石斧=根茎類採集のための土掘り具、磨石類=植物性食料の加工具と規定し、その割合を作成して三角グラムで表すことで、遺跡・時期・地域毎の森林資源の利用傾向を示すものである。西野は植月学と松戸市幸田貝塚の生業・居住様式の特性を論じる上で、前期前半の奥東京湾(狭義の奥東京湾・古入間湾)の遺跡群の古海況、動植物遺存体、集落・遺跡群、石器の内容を基に総合的に分析している<sup>103)</sup>。その中で奥東京湾区前期前半期の諸遺跡の石器組成を三角グラムで表し、その内容から地域的な生業の割合差、中心的な集落と小規模集落との数量・割合差が想定できるとしている。

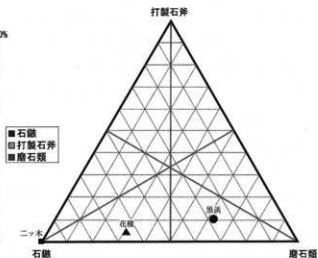
今後、古鬼怒湾区の代表的な前期遺跡群となる駒形遺跡及び柏北部東区遺跡群の生業・居住様式を論

じていく上で有効な方法と思われるので、今回の内容を数量化して示した(第150・151図)。このうち岡  
山式期、諸磯・浮島・興津式期はサンプル数が少なく評価できなかったので、一定の数量があった花積下  
層式期、ニツ木式期、黒浜式期を三角グラムで表した。前期初頭～前業期である花積下層式期、ニツ木  
式期では石鏃=狩猟具に偏る傾向が読みとれ、西野らの指摘と協調的である。既述したように、チャートを  
素材とした石鏃・石鏃未製品、剥片、細片を多出する花積下層式期の堅穴住居跡の存在が示唆的であり、  
未報告分の整理作業でも注意すべき点でもある。これに対して中業期である黒浜式期は、磨石類=植物性  
食料の加工具に偏る傾向が読みとれ、既述した遺跡数増加の一要因となった可能性が考えられる。時期の  
変遷・古環境の変化などに従い、生業・居住様式も変化していくことが想定できたが、さらなるデータの  
蓄積を待って議論を深める必要があろう。以上のように遺跡分布・生産活動の側面から探ってみても、縄  
文時代前期における駒形遺跡をはじめ柏北部東地区遺跡群の重要性は極めて高いことが炙り出された結果  
となった。

繰り返しの議論になるが、駒形遺跡をはじめとする柏北部東地区縄文前期遺跡群の重要度は、土器をは  
じめとする遺物論、住居跡をはじめとする遺構論・集落論、縄文海進・海退に係る中での遺跡分布論、そ  
して生業論というように、どの側面から探ってみても極めて高いことが理解できた。同時に現段階での  
種々の課題も提出できたと思われる。これらについては、未報告分の駒形遺跡の整理作業で引き続き検討  
し、一定のデータが得られたものについては現段階での評価を下せるものと考えている。そして、時期や  
内容によっては柏北部東地区遺跡群全体、あるいは汎関東的な範囲での比較が可能になると思われる。



第150図 時期別石器組成



第151図 石器三角グラム



- 註20 前掲註19の2003地で植月・西野等が前期の多様な廃棄様子を論じている。既データでは住居跡内貝層は基本的に貝類のみが廃棄された場所で、動物遺体は別の廃棄場所が想定されている。このため、資料的な偏りの想定される住居跡内貝層がほとんどであるこの時期の生業の内容や割合を、動物遺体の出土量のみから評価するのは困難で、石器組成や人骨の食性分析、古環境分析など多くの指標・分析から得られた情報を総合化して判断する必要性を説いている。未報告分には整理箱30箱分の貝サンプルが採取されているが、所属時期が確実且つ有効なデータが得られるものを選択する必要がある。
- 21 前掲註19の2003に主要研究の概要紹介があるので参照されたい。
- 22 今村啓爾は中期に遺跡や地域によって群集貯蔵穴と打製石斧の量に格差があることに着目し、石鎌=狩猟具、打製石斧=根茎類採集（ヤマイモ）のための土掘り具、磨石類=植物性食料（堅果類）の加工具と規定した。そして、その割合を三角グラム化して関東甲信地方における地域性を表し、群集貯蔵穴や打製石斧の用途を論じた。西野雅人は今村の分析法を採用し、さらに動植物遺存体のデータ解釈などを多角的に突き合わせて生業・居住様式の在り方に迫る研究を進めている。西野は中期中葉から後葉に形成された東京湾東岸拠点集落の生業・居住様式を多角的に追求する中で、今村の研究を基に東京湾東岸拠点集落の石器三角グラムを作成した。その結果、データ抽出上問題のない該期拠点集落ではどこでも割合が同じであったことから、石器組成の面からも該期拠点集落はどの生業にも偏らないバランスが保たれていたと類推し、定住性の高さを評価している。詳細は1989「群集貯蔵穴と打製石斧」、1999「第1節 縄文中期の大型貝塚と生産活動—有吉北貝塚の分析成果—」[研究紀要19]を参照されたい。
- 23 詳細は前掲註19の文献の後半部分に論じられている。

#### 引用・参考文献（五十音順）

- 1 安中市ふるさと学習館 2008『縄文石器の世界ストーンツールズ』
- 2 石下町史編纂室 1987『石下町史資料第2集 湯野山貝塚発掘調査報告書』
- 3 茨城県教育財団縄文時代研究班 1992「茨城県における縄文時代前期前半の住居跡の形態について」[研究ノート] 2
- 4 1993「茨城県における縄文時代前期後半の住居跡の形態について」[研究ノート] 3
- 5 今村啓爾 1989「群集貯蔵穴と打製石斧」[考古学と民族誌] 六興出版
- 6 浦和市遺跡調査会 1981「大古早遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書19
- 7 大宮市教育委員会 1978「貝崎貝塚第3次発掘調査報告」大宮市文化財調査報告12
- 8 1984「深作東部遺跡発掘調査報告」大宮市遺跡調査会報告10
- 9 小川岳人 2001『縄文時代の生業と集落—古奥東京湾沿岸の社会—』
- 10 奥野麦生 1989「黒浜式土器の系統性とその変換」『土曜考古』13 土曜考古研究会
- 11 柏市教育委員会 1980「尾井戸遺跡」
- 12 1983「千葉県柏市高砂遺跡・林台遺跡」
- 13 1983「山神宮裏遺跡」[柏市埋蔵文化財調査報告書]
- 14 1990「田中小遺跡」[柏市埋蔵文化財調査報告書] 16
- 15 1992「寺前遺跡」[柏市埋蔵文化財調査報告書] 22

- 16 1996 「上前遺跡」『柏市埋蔵文化財調査報告書』31
- 17 2006 「上前遺跡」『柏市埋蔵文化財調査報告書』54
- 18 上長者台遺跡調査会・勝浦市教育委員会 1992 「千葉県勝浦市上長者台遺跡発掘調査報告書」
- 19 上守秀明 2001 「結節回転による施文効果 - 千葉県 '幸田貝塚資料' 山内清男考古資料12の整理作業成果から -」『史館』31 史館同人
- 20 2003 「山内清男博士による幸田貝塚の調査 - 山内清男考古資料調査データおよび写真資料からの復元 -」『松戸市立博物館紀要』10 松戸市立博物館
- 21 黒板慎二 1989 「羽状縄文系土器の文様構成(点描) - 1」『研究紀要』6 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 22 桑山龍通 1980 「菊名貝塚の研究」菊名貝塚研究会
- 23 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会 2001 「幕坪遺跡」
- 24 群馬県渋川市教育委員会生涯学習課 1994 「半田南原遺跡」
- 25 群馬県勢多郡赤城村教育委員会 1985 「見立溜井遺跡・見立大久保遺跡」
- 26 2003 「見立峯遺跡Ⅱ・滝沢日向堀遺跡」
- 27 2005 「見立十三塚遺跡Ⅰ・Ⅱ」
- 28 群馬県勢多郡大胡町教育委員会 1996 「堀越芝山遺跡」
- 29 1997 「大胡西北部遺跡群 横沢新屋敷遺跡」
- 30 1997 「堀越中道遺跡」
- 31 群馬県勢多郡北橋村教育委員会 1993 「芝山遺跡」
- 32 1999 「箱田遺跡群(上原・三角遺跡) 真壁深訪遺跡」
- 33 埼玉地区文化財担当者会 1999 「埼玉の縄文前期 - 埼玉地区縄文時代前期報告書 -」埼玉地区文化財担当者会報告書3
- 34 埼玉県教育委員会 1974 「関山貝塚」埼玉県埋蔵文化財調査報告書3
- 35 埼玉考古学会 1990 「シンポジウム 大木、有尾、そして黒浜 - 縄文前期土器群にみる系統と交流の実態 -」
- 36 (財)印旛都市文化財センター 2000 「千葉県佐倉市吉見台遺跡A地点」
- 37 (財)いわき市教育文化事業団 2007 「弘源寺貝塚」
- 38 (財)かながわ考古学財団 2008 「菊名宮谷貝塚」『神奈川県埋蔵文化財調査報告書』53
- 39 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987 「三原田城遺跡 八崎城址・八崎塚 上青梨子古墳」
- 40 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993 「五目牛清水田遺跡」
- 41 (財)千葉県文化財センター 1982 「館林・水砂・花前Ⅱ-1遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ
- 42 1984 「花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ
- 43 1985 「花前Ⅱ-1・花前Ⅱ-2・矢船遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ
- 44 1986 「元割・聖人塚・中山新田Ⅰ遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ
- 45 1998 「千葉東南部ニュータウン19-有吉北貝塚Ⅰ(旧石器・縄文時代) -」
- 46 (財)千葉県教育振興財団 2007 「柏市溜井台遺跡」『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ
- 47 2007 「酒々井町墨古沢遺跡 旧石器・縄文時代編」『東京都自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書』4

- 48 2008「柏市大松遺跡 旧石器時代編」『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書』1
- 49 2008「流山市西初石5丁目遺跡」『流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書』2
- 50 (財)千葉市文化財調査協会 1993「弥三郎第1遺跡」『土気南遺跡群Ⅳ』
- 51 1994「第Ⅳ編 小山遺跡」『土気南遺跡群Ⅵ (第Ⅳ編 小山遺跡)』
- 52 1996「第Ⅳ編 東台遺跡」『土気南遺跡群Ⅷ』
- 53 笹森健一 1981「縄文土器前期の住居と集落 (Ⅰ)」『土曜考古』3 土曜考古学研究会
- 54 1981「縄文土器前期の住居と集落 (Ⅱ)」『土曜考古』4 土曜考古学研究会
- 55 1982「縄文土器前期の住居と集落 (Ⅲ)」『土曜考古』5 土曜考古学研究会
- 56 庄和町風早遺跡研究会 1979『風早遺跡』
- 57 白岡町遺跡調査会 2008「タタラ山遺跡 (第2地点) 白岡町遺跡調査会調査報告書」6
- 58 市立市川考古博物館 2008「市川市縄文貝塚データブック」市立市川考古博物館研究調査報告9
- 59 下村克彦 1981「新田野段階花積下層式とニツ木式土器について」『奈和』19 奈和同人会
- 60 1986「施文原体の変遷 - 羽状縄文系土器 - 花積下層式 - 関山式土器」『季刊考古学』17 雄山閣
- 61 関根慎二「諸織式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 62 高野博光 1974「黒浜期における貝殻文土器理解のために (その1)」『埼玉考古』12 埼玉考古学会
- 63 高橋清文 2008「見立十三塚遺跡の関山Ⅰ式土器について」『考古学の窓 - 巾着の氏定年退職記念特集号 -』  
國學院大學卒業生有志in群馬
- 64 碓石徹 2007「縄文土器 前期」『日本の美術』496 至文堂
- 65 田中和之 2008「羽状縄文系土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 66 谷井 彪 1971「内は地積第1群土器について」『埼玉考古』9
- 67 谷藤保彦 1999「花積下層Ⅰ式土器とその周辺」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 68 谷藤保彦他 1994「第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相」縄文セミナーの会
- 69 1994「第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相 - 記録集 -」縄文セミナーの会
- 70 1997「第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相」縄文セミナーの会
- 71 1997「第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相 - 記録集 -」縄文セミナーの会
- 72 2006「第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討 - 資料集 -」縄文セミナーの会
- 73 2006「第19回縄文セミナー 前期前葉の諸様相 - 記録集 -」縄文セミナーの会
- 74 タタラ山遺跡調査会 1987「タタラ山遺跡」
- 75 玉川文化財研究所 2006『横浜市港北区 下組東貝塚』
- 76 千葉県 1980『土地分類基本調査 野田 (千葉県内)』
- 77 1997「本編2 千葉県の台地」『千葉県の自然誌』
- 78 千葉県教育委員会 1997「千葉県埋蔵文化財分布地図 (1) - 東葛飾・印旛地区 (改訂版) -」
- 79 1999「千葉県埋蔵文化財分布地図 (3) - 千葉市・市原市・長生 (改訂版) -」
- 80 千葉県史料研究財団 1998「千葉県史編さん資料 松戸市ニツ木向台貝塚資料調査報告書」
- 81 千葉県都市公社 1974『柏市鴻ノ巣遺跡』
- 82 長野県考古学会諏訪地区会 1992「中越文化の集落と住居と建物 - 阿久尻遺跡をめぐって -」『長野県考古学  
誌』67

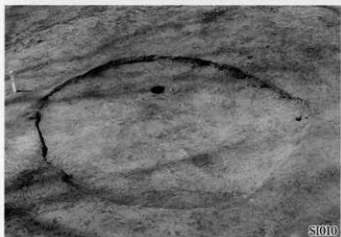
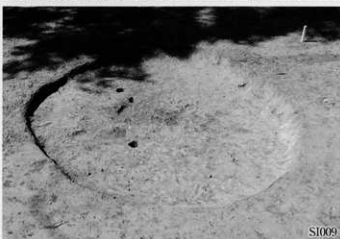
- 83 奈良国立文化財研究所 2000『千葉県幸田貝塚史料 山内清男考古資料12』
- 84 西川博孝 1983「竹管文」『縄文文化の研究7 縄文土器3』雄山閣
- 85 1995「再び土製球状耳飾について」『千葉県文化財センター研究紀要』16 - 20周年記念論集 -
- 86 西野雅人他 1999「貝塚出土資料の分析 第2節 千葉県内貝塚分布地図・地名表」『研究紀要』19
- 87 西野雅人・植月 学 2003「動物遺体による縄文前期前葉の生業・居住様式の復元-幸田貝塚と奥東京湾沿岸の遺跡群-」『松戸市立博物館紀要』10 松戸市立博物館
- 88 西村正衛1984『石器時代における利根川下流域の研究-貝塚を中心として-』早稲田大学出版部
- 89 野田市2005『野田市史 資料編考古』
- 90 野田市教育委員会 1999「ドクケ尾初咲遺跡」『千葉県野田市平成10年度野田市内遺跡発掘報告』
- 91 2000『野田市埋蔵文化財報告書』17
- 92 2003「下ドクケ尾根郷遺跡」『千葉県野田市平成14年度野田市内遺跡発掘報告』
- 93 野田市遺跡調査会 1987『千葉県野田市稲荷前遺跡-図版編-』
- 94 蓮田市教育委員会「〜黒浜貝塚群〜 宿浦遺跡 宿上遺跡 宿下遺跡 天神前遺跡」
- 95 福島県いわき市教育委員会 1986『弘源寺貝塚』
- 96 福島県いわき市教育文化事業所 1996『網取貝塚』
- 97 船橋市遺跡調査委員会 1985「西の台(第2次)-船橋市西の台遺跡発掘調査報告書-」
- 98 細田勝 1989「黒浜式土器成立の背景-特に東北地方土器群との対比を通して-」『古代』87 早稲田大学考古学会
- 99 前橋市教育委員会文化財保護課 2005『柏倉芳美沢遺跡 柏倉倉合遺跡』
- 100 松浦史浩 2008「貝殻文」『縄文土器の考古学7 土器を読み取る-縄文土器の情報-』同成社
- 101 松田光太郎 1995「浮島式土器の研究」『古代探叢』IV 早稲田大学出版部
- 102 松田光太郎 2008「浮島式・興津式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 103 松戸市教育委員会 1971「幸田貝塚-第1次(昭和45年度)調査概報-」松戸市文化財調査小報4
- 104 1972「幸田貝塚-第2次(昭和46年度)調査概報-」松戸市文化財調査小報5
- 105 1973「幸田貝塚-第3次(昭和47年度)調査概報-」松戸市文化財調査小報6
- 106 1974「幸田貝塚の調査(4)-昭和49年度発掘調査概要-」松戸市文化財調査小報7
- 107 1975「幸田貝塚-第5次(昭和50年度)調査概報-」松戸市文化財調査小報8
- 108 1977「幸田貝塚-第6次(昭和51年度)調査概報-」松戸市文化財調査小報11
- 109 1978「幸田貝塚-第7次(昭和52年度)調査概報-」松戸市文化財調査小報12
- 110 1979「幸田貝塚-第8次(昭和53年度)調査概報-」松戸市文化財調査小報13
- 111 1985「鳥崎遺跡・幸田貝塚(第10次調査)」松戸市文化財調査報告10
- 112 1986「幸田貝塚(第11次調査)・東平賀貝塚(第4次調査)」松戸市文化財調査報告12
- 113 松戸市遺跡調査会 2000『境外II遺跡発掘調査報告書』
- 114 安井健一 1995「沼南町石揚遺跡出土の花横下層式土器」『千葉県文化財センター研究紀要』16
- 115 山形県長井市教育委員会 古代の丘資料館 2003『右燃り・左燃り-縄文の土器文様と紐の燃り-』
- 116 山内清男 1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

# 写 真 图 版





竪穴住居跡 1



竖穴住居跡 2





SI014 居住状況



SI014 居住状況



SI015



SI016



SI017



SI018



SI019 遺物出土状況



SI019



SI020



SI021-1出土状況



SI021



SI022遺物出土状況



SI022



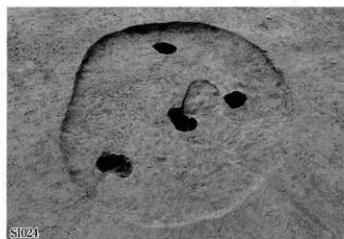
SI023遺物出土状況

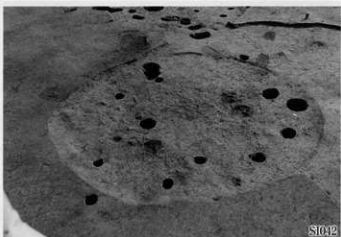


SI023



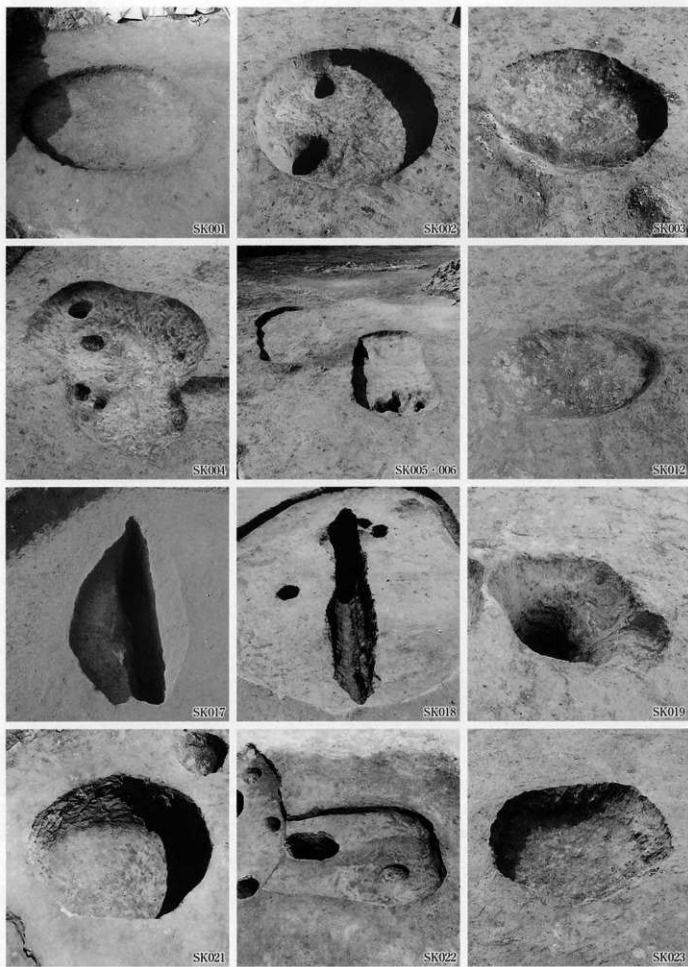
SI024土器出土状況



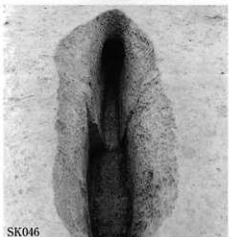
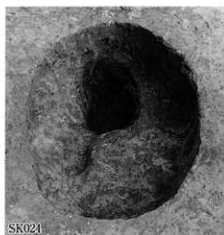


竪穴住居跡6

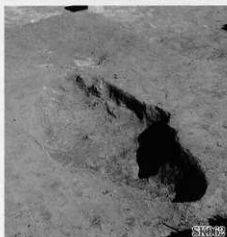
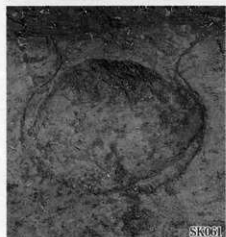
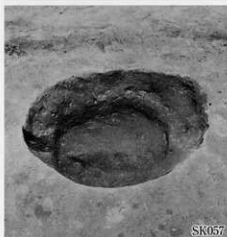
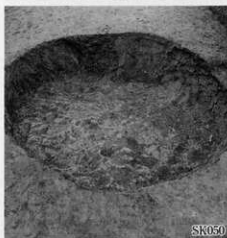
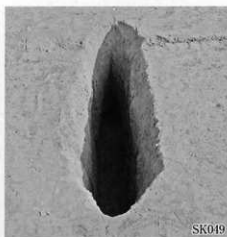




土坑・陥穴1

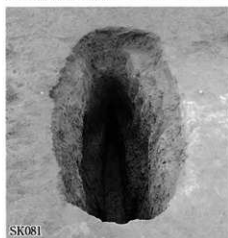
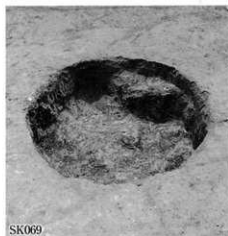
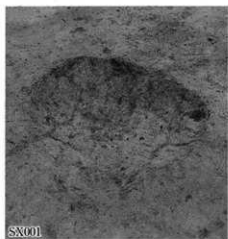


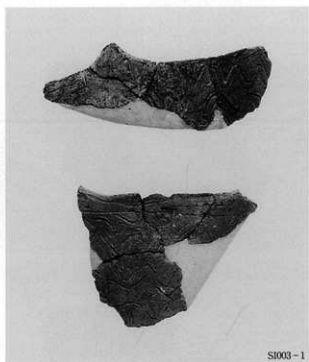
土坑・階穴2



土坑・陥穴 3







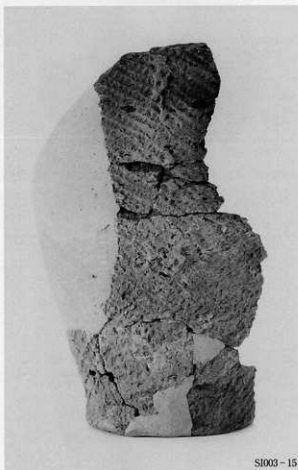
SI003-1



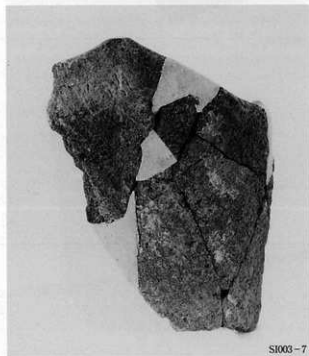
SI003-8



SI003-2



SI003-15



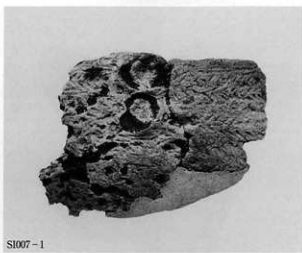
SI003-7



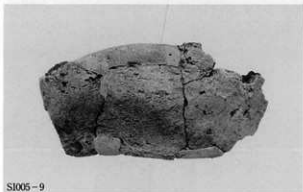
SI003-16



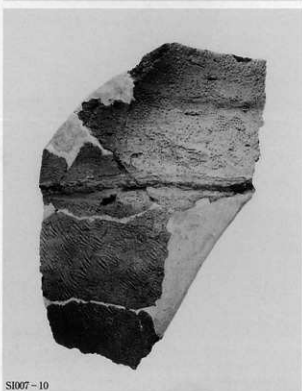
SI003-17



SI007-1



SI005-9



SI007-10



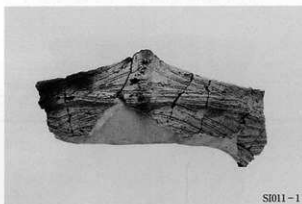
SI006-1



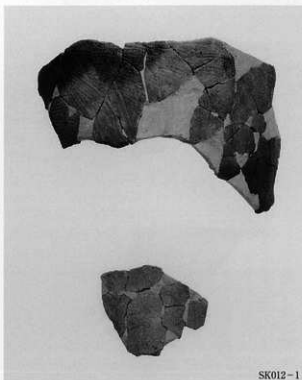
SI009-1



SI006-4



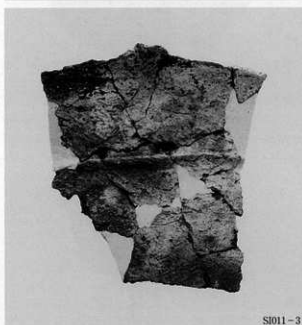
S1011-1



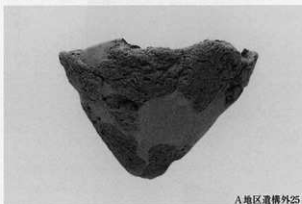
SK012-1



S1011-2



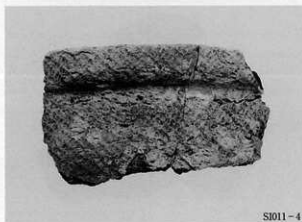
S1011-3



A地区遺構外25



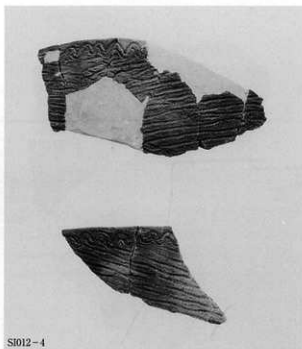
A地区遺構外39



S1011-4



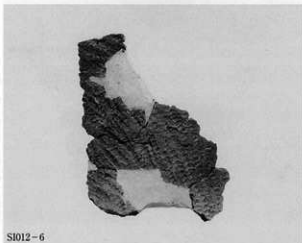
A地区遺構外40



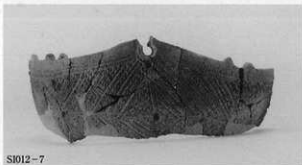
SI012-4



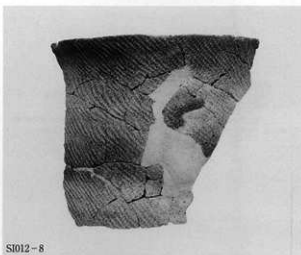
SI012-5



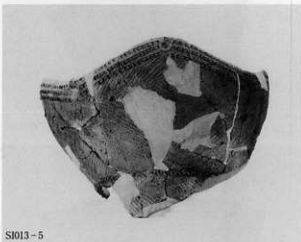
SI012-6



SI012-7



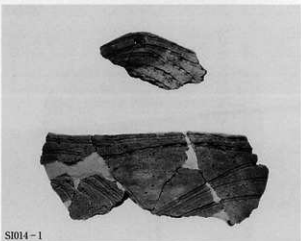
SI012-8



SI013-5



SI013-12



SI014-1



SI014-2



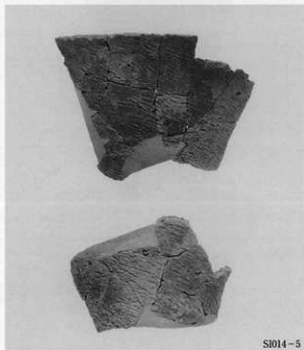
SI014-4



SI014-3



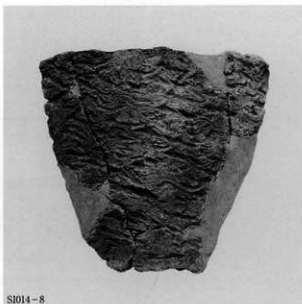
SI014-6



SI014-5



SI014-7



SI014-8



SI014-9



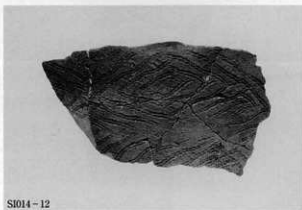
SI014-10



SI014-11



SI014-13



SI014-12



SI014-14



B地区道標外16



SI014-20



B地区道標外24



SI014-21



SK034-1

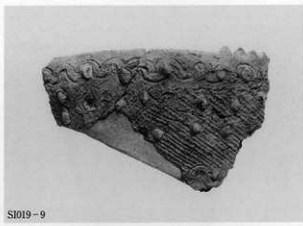


SI017-6





SI019-4



SI019-9



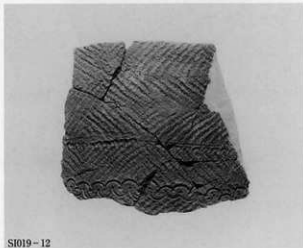
SI019-6



SI019-10



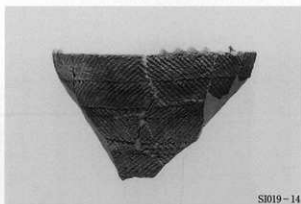
SI019-7



SI019-12



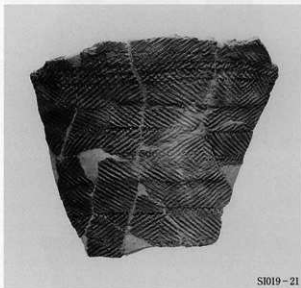
SI019-13



SI019-14



SI019-15



SI019-21



SI019-33



SI019-31



SI019-32



SI019-34



SI019-35



SI019-36



SI020-3



SI021-1



SI021-3



SI021-2



SI021-8



SI021-9



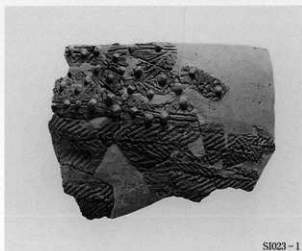
SI022-8



SI022-9



SI023-5



SI023-1



SI023-6



SI023-2



SI023-8



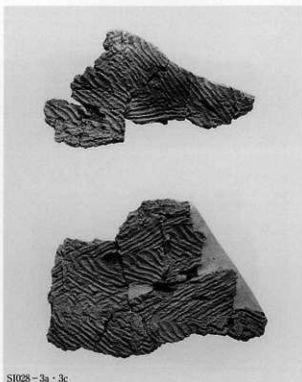
SI023-3



SI023-18



SI024-1



SI028-3a・3c



SI027-5



SI028-3b



SI029-8



SI029-8



D地区遺構外91



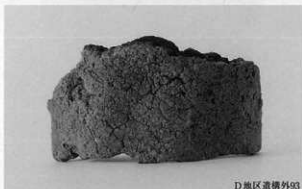
D地区遺構外113



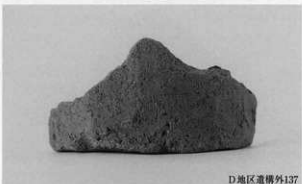
D地区遺構外92



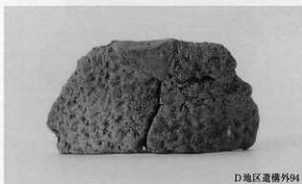
D地区遺構外136



D地区遺構外93



D地区遺構外137



D地区遺構外94



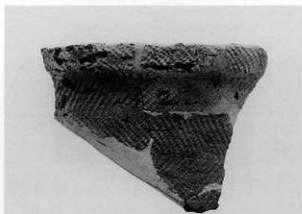
D地区遺構外138



D地区遺構外95



D地区遺構外139



SI031-3



SI033-25



SI031-16



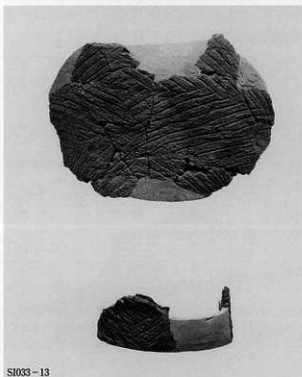
SI034-7



SI031-17



SI037-16



SI033-13



SI038-6







SI045-16



SI051-19



SK009-2



SI045-17



SK075-8



SI047-3



SX002-24



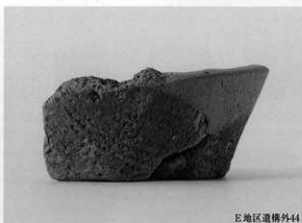
SI051-17



SX002-25



E地区道構外41



E地区道構外44



E地区道構外42



E地区道構外73

平安時代の土師器



E地区道構外43



SK067-1



E地区道構外45



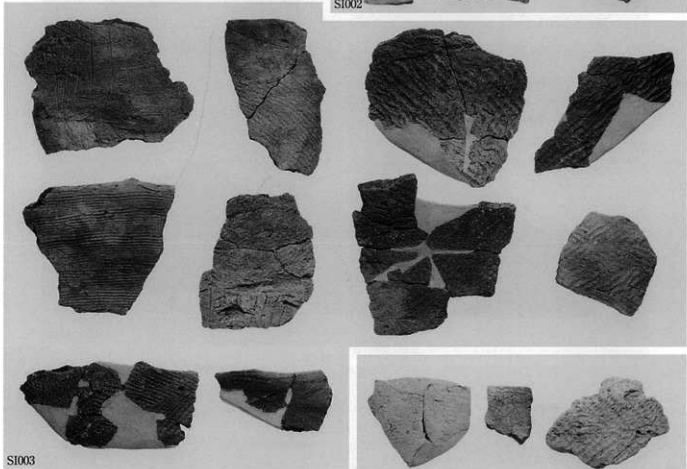
SK067-1 局部拡大



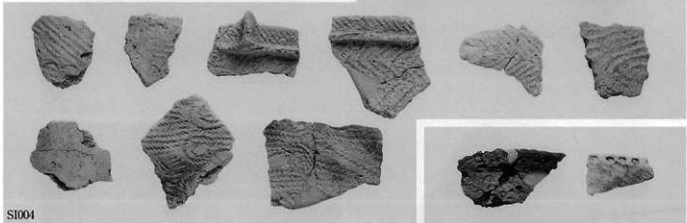
SI001



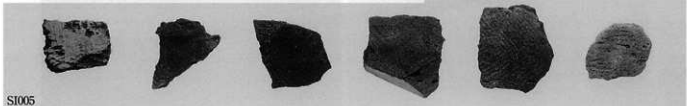
SI002



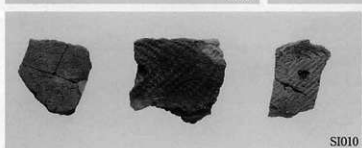
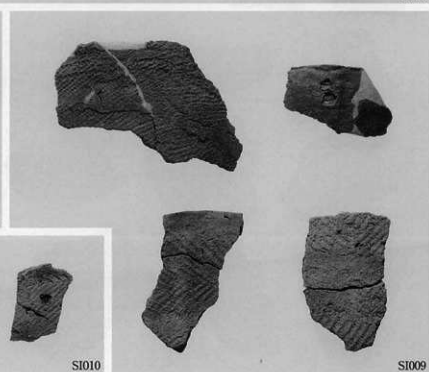
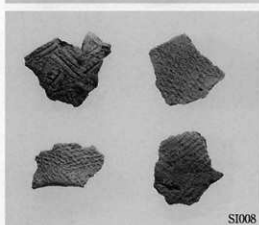
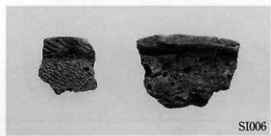
SI003

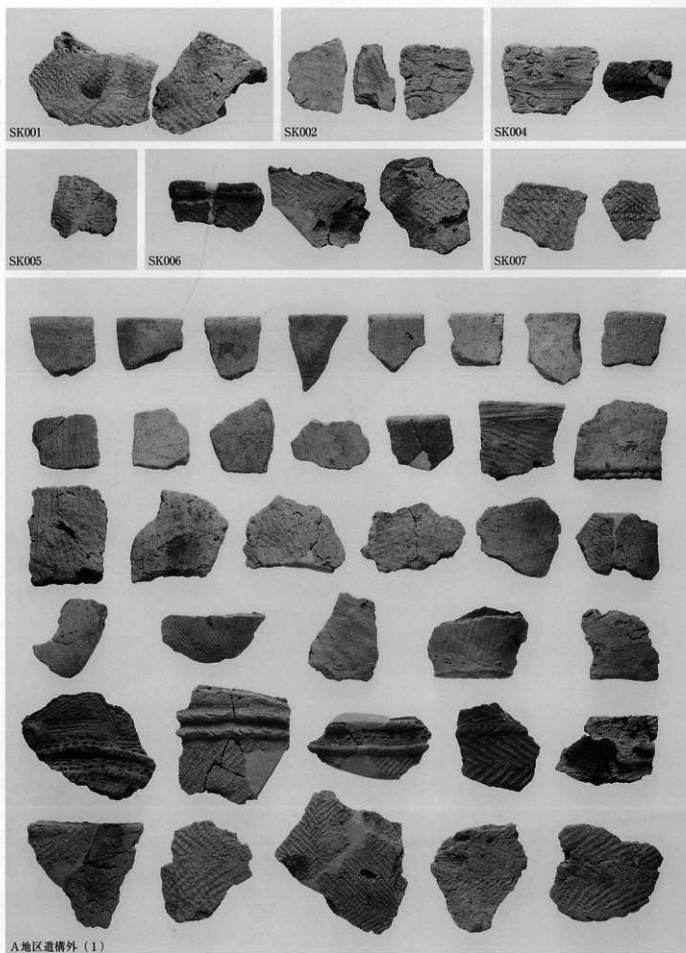


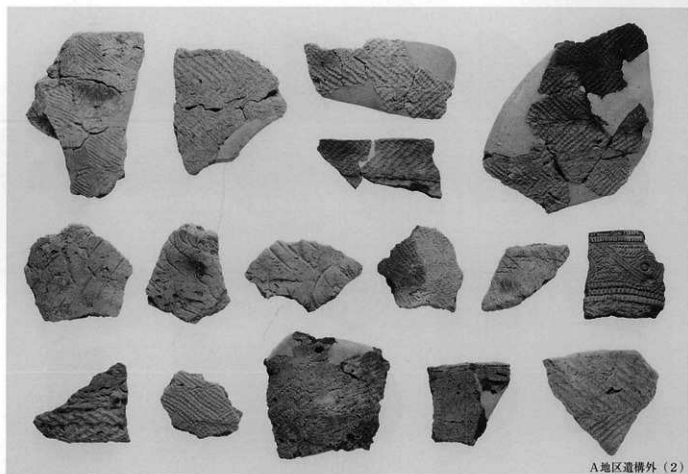
SI004



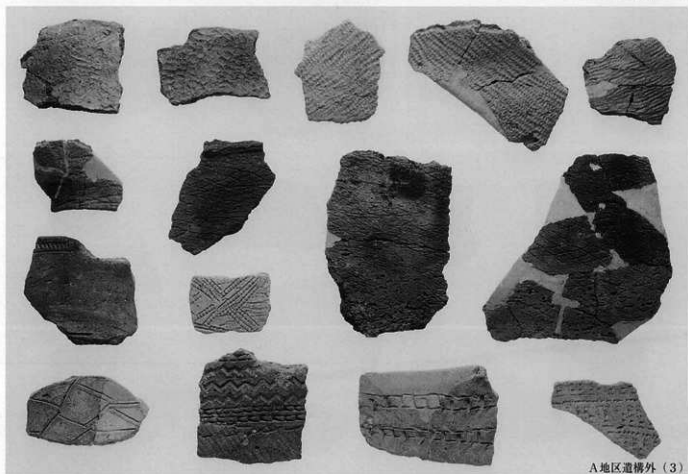
SI005



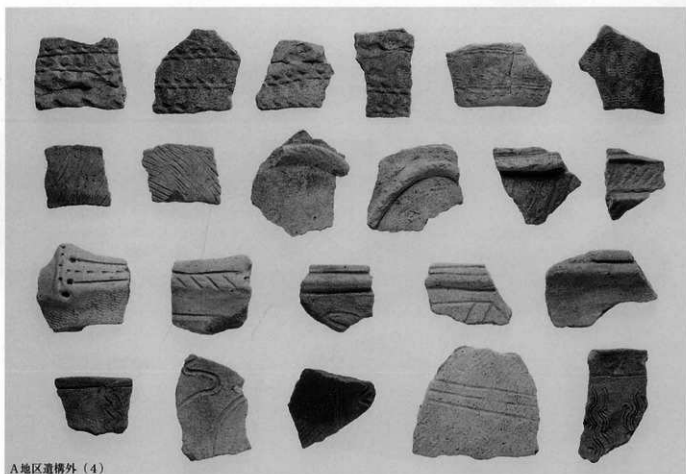




A地区道槽外(2)



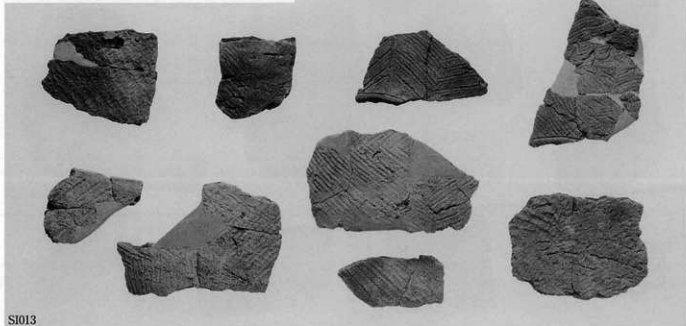
A地区道槽外(3)



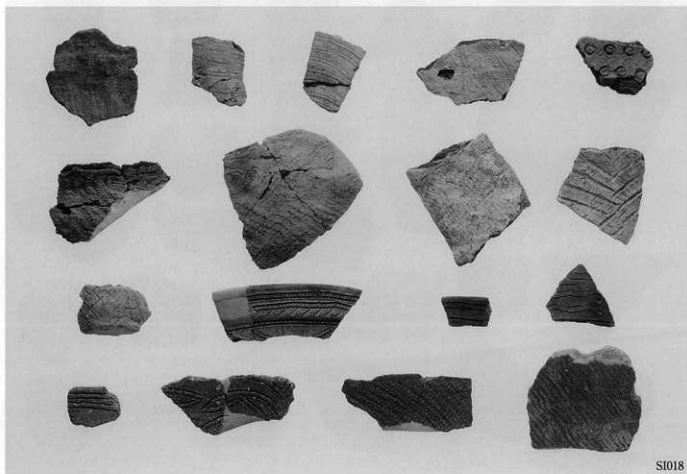
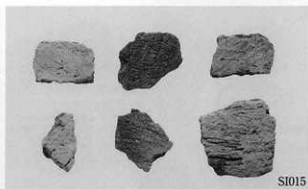
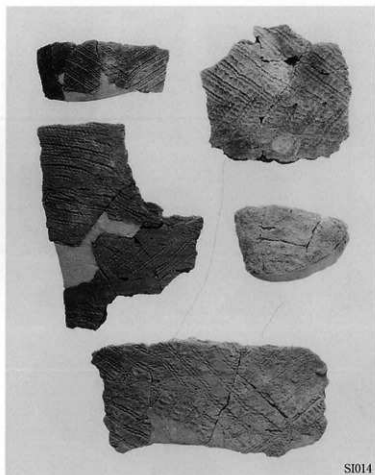
A地区遺構外(4)



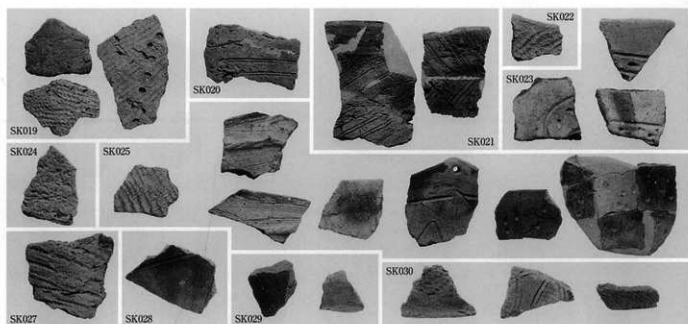
SI012

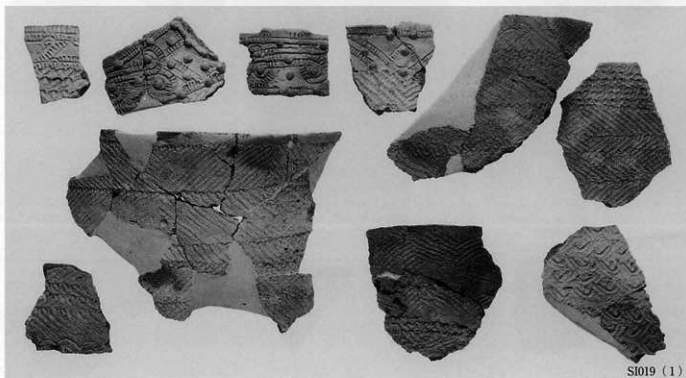
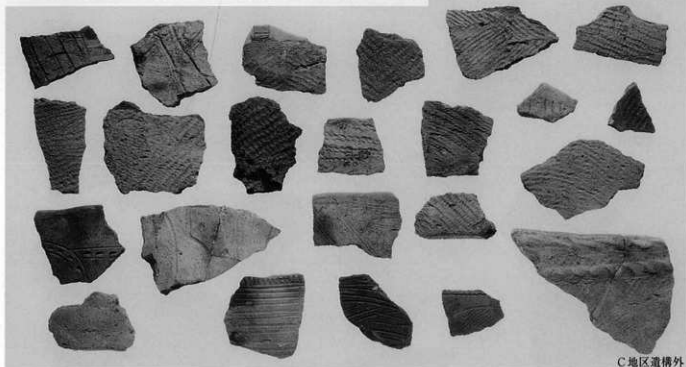
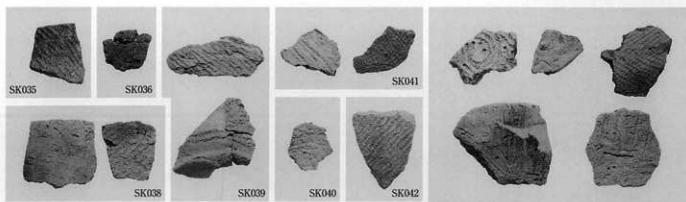


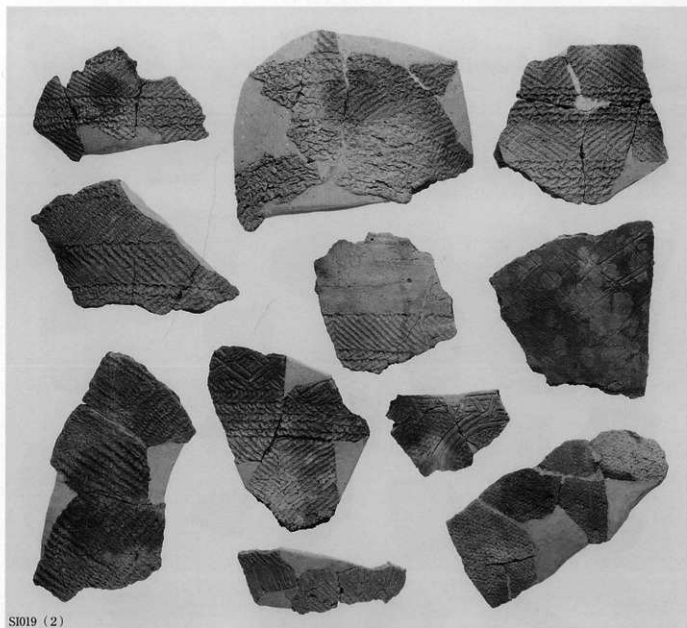
SI013



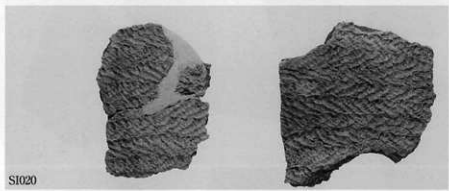








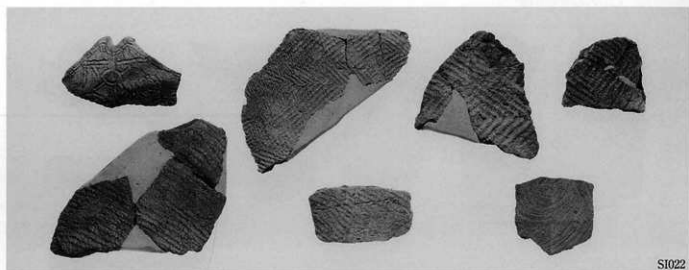
SI019 (2)



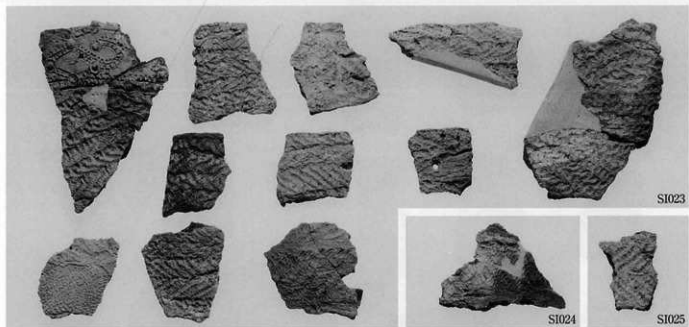
SI020



SI021



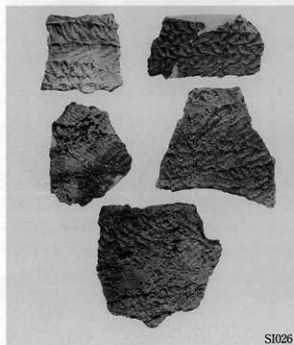
SI022



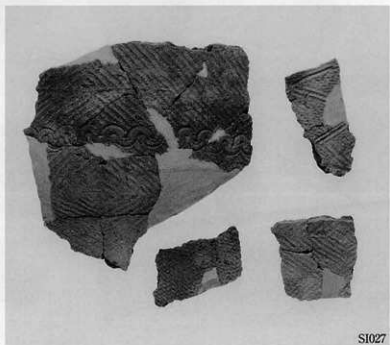
SI023

SI024

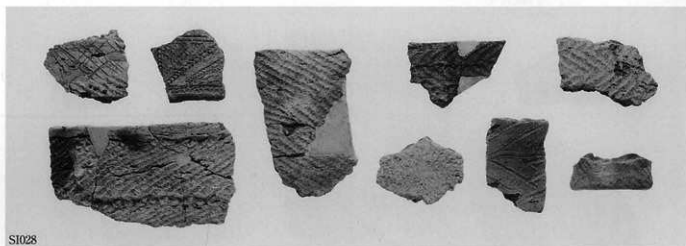
SI025



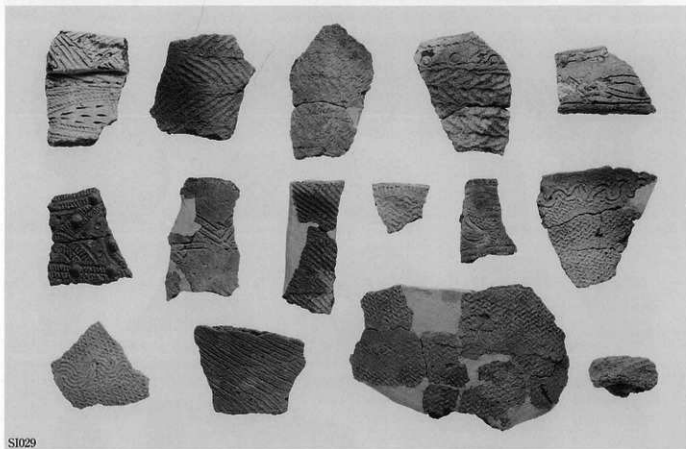
SI026



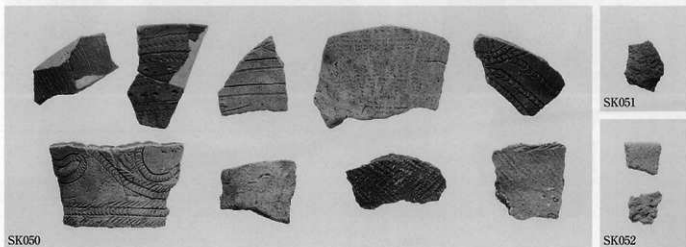
SI027



SI028



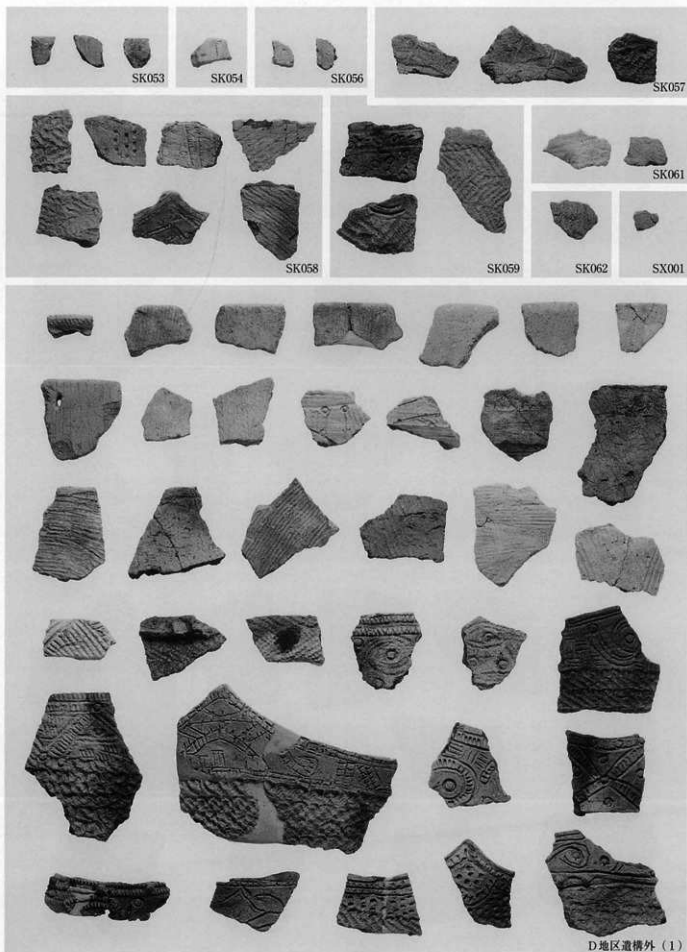
SI029



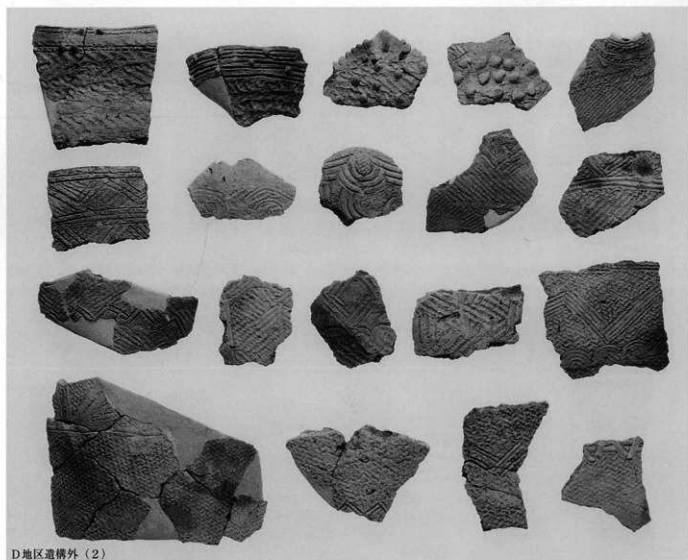
SK050

SK051

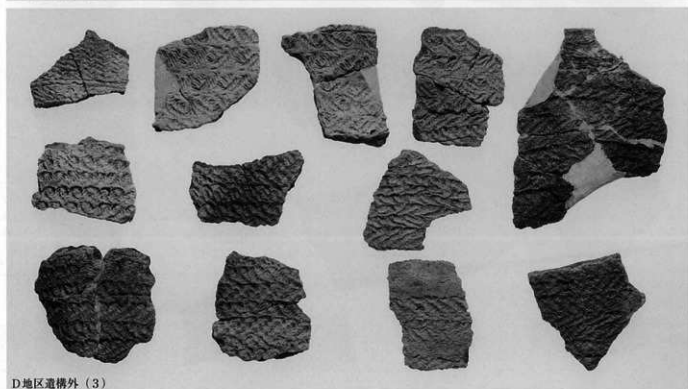
SK052



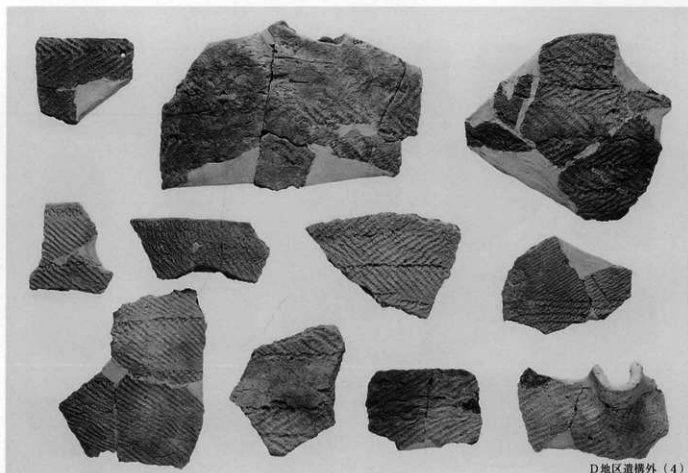
縄文土器29



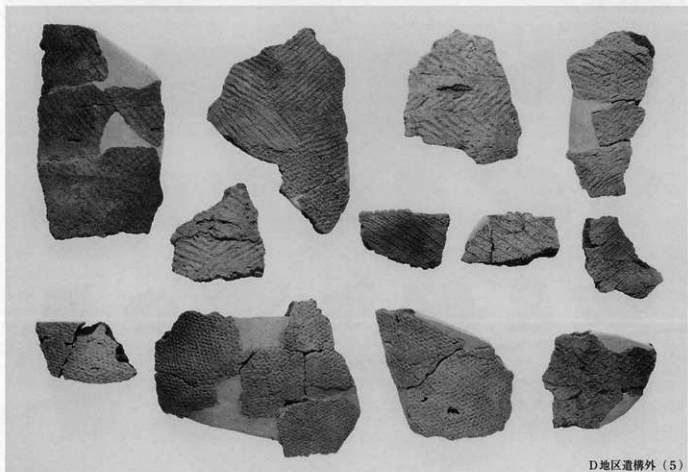
D地区遺構外 (2)



D地区遺構外 (3)

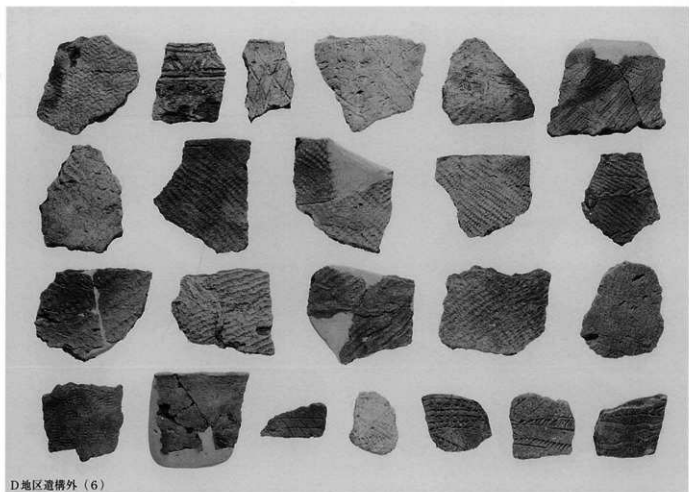


D地区遺構外(4)

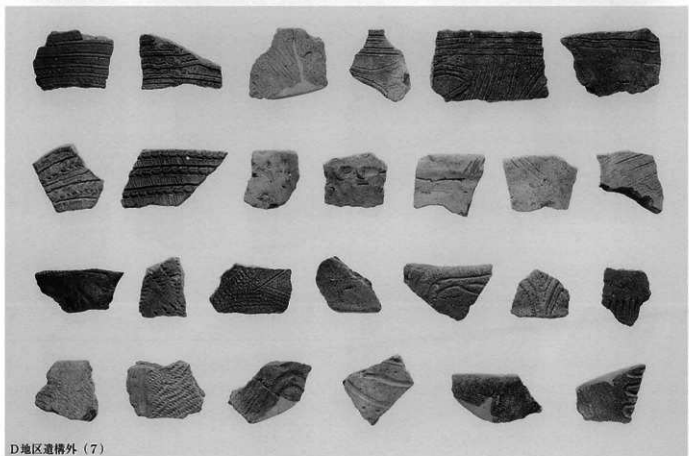


D地区遺構外(5)

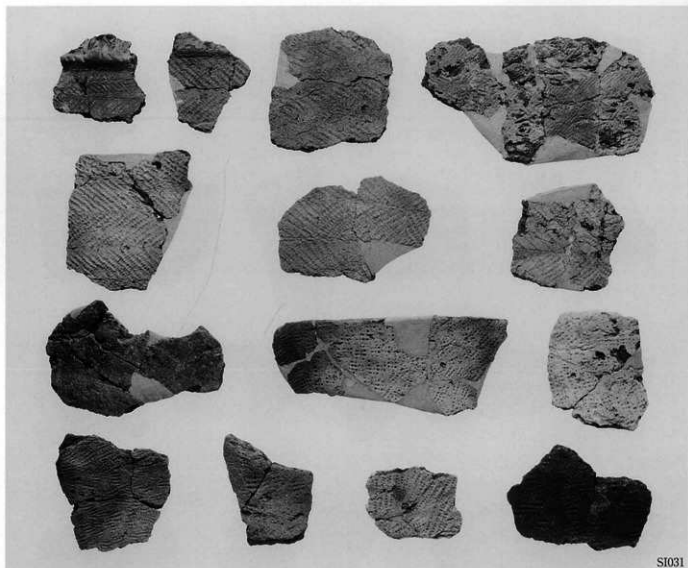




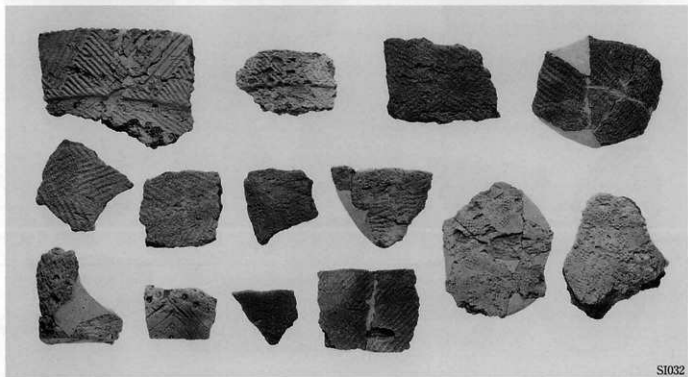
D地区遺構外 (6)



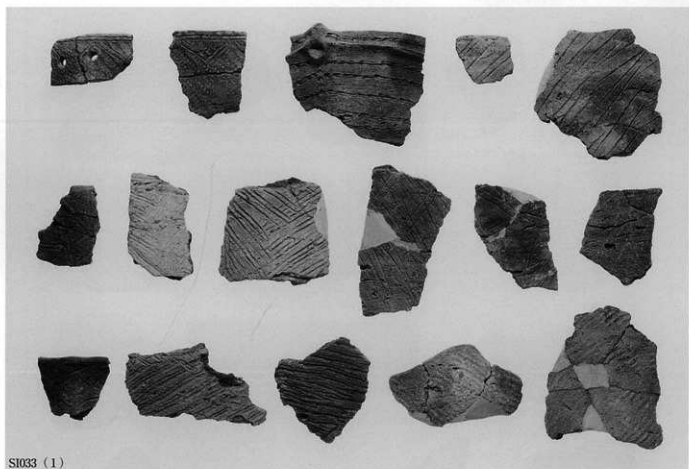
D地区遺構外 (7)



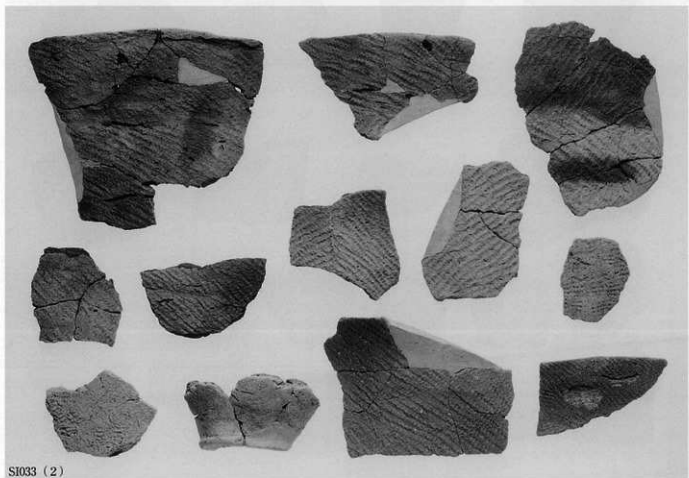
SI031



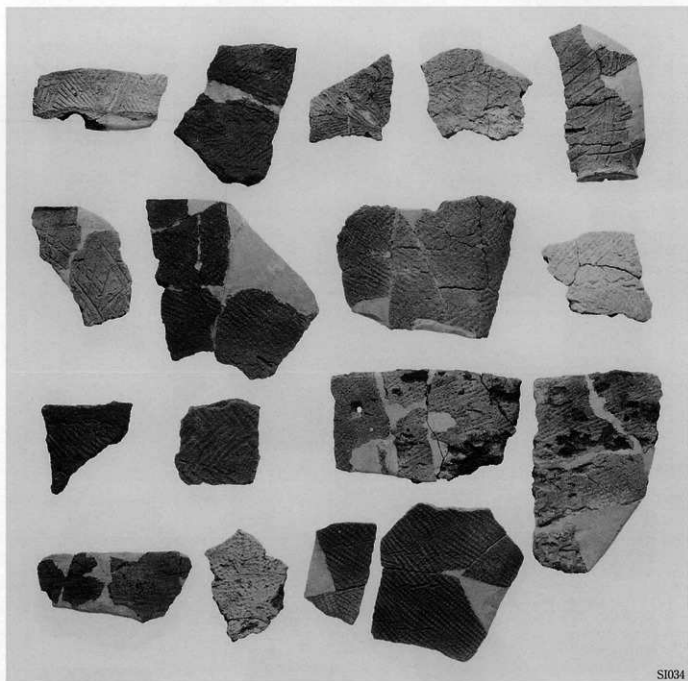
SI032



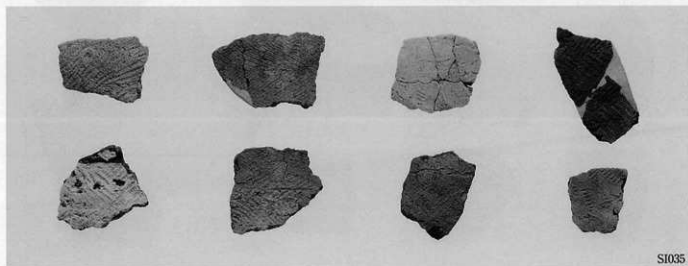
SI033 (1)



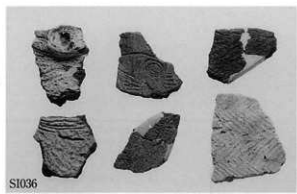
SI033 (2)



SI034



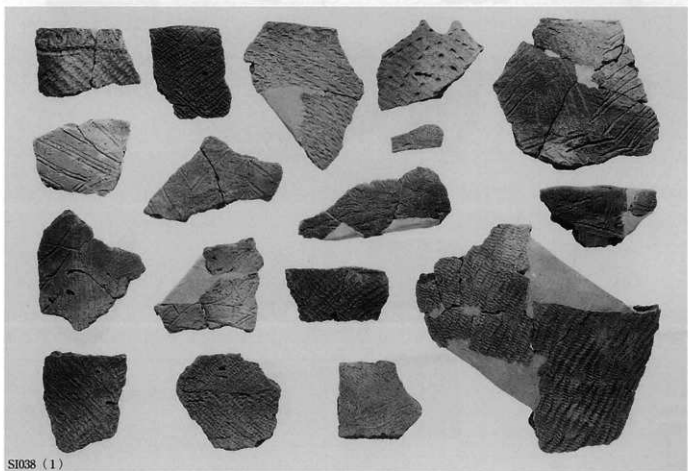
SI035



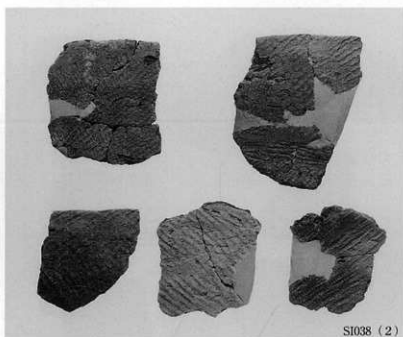
SI036



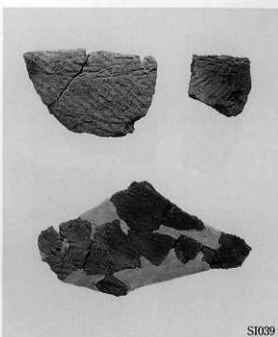
SI037



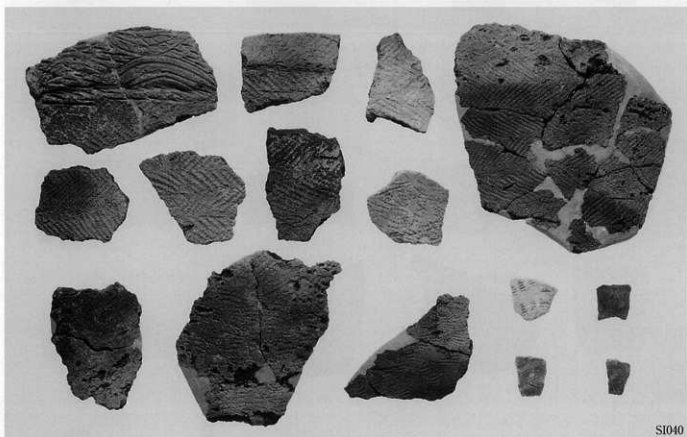
SI038 (1)



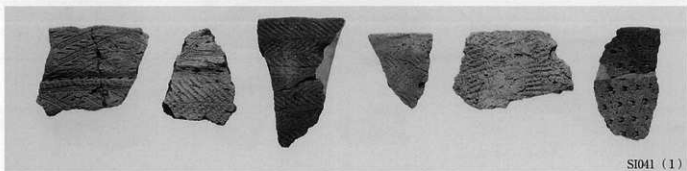
SI038 (2)



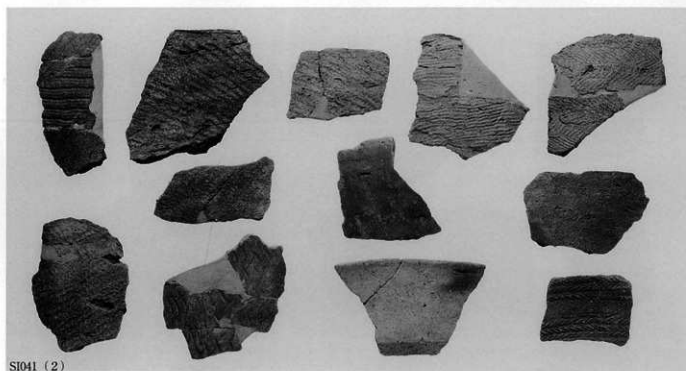
SI039



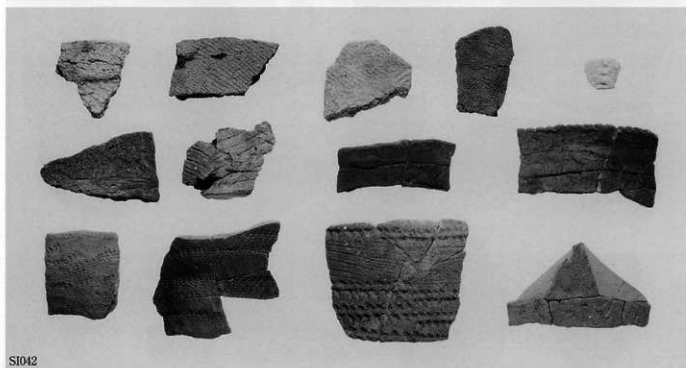
SI040



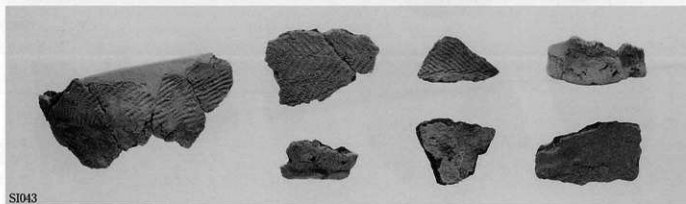
SI041 (1)



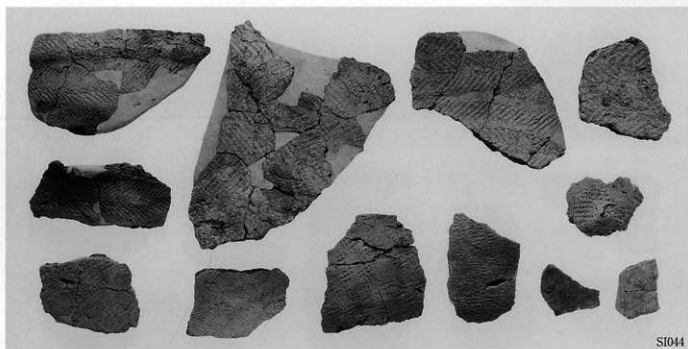
SI041 (2)



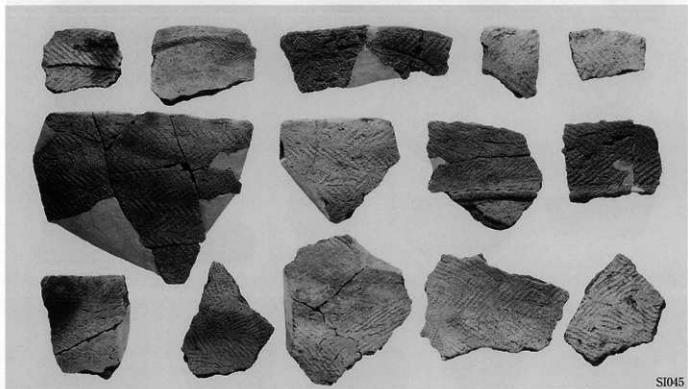
SI042



SI043



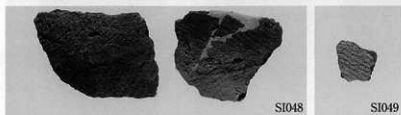
SI044



SI045



SI046



SI048

SI049

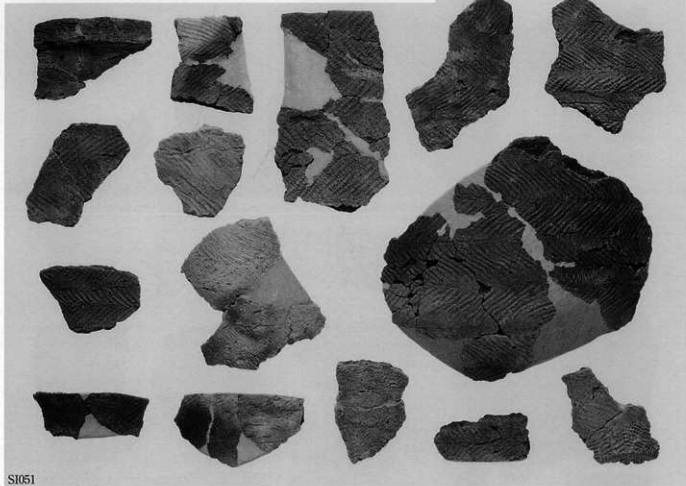


SI047

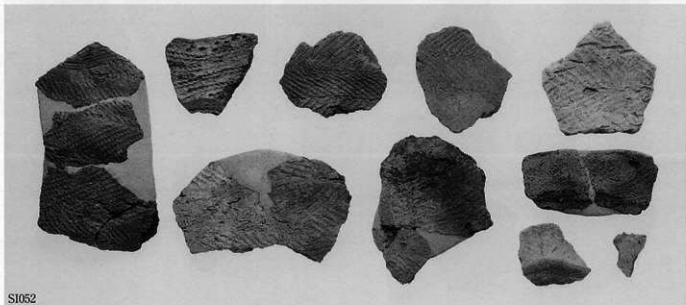




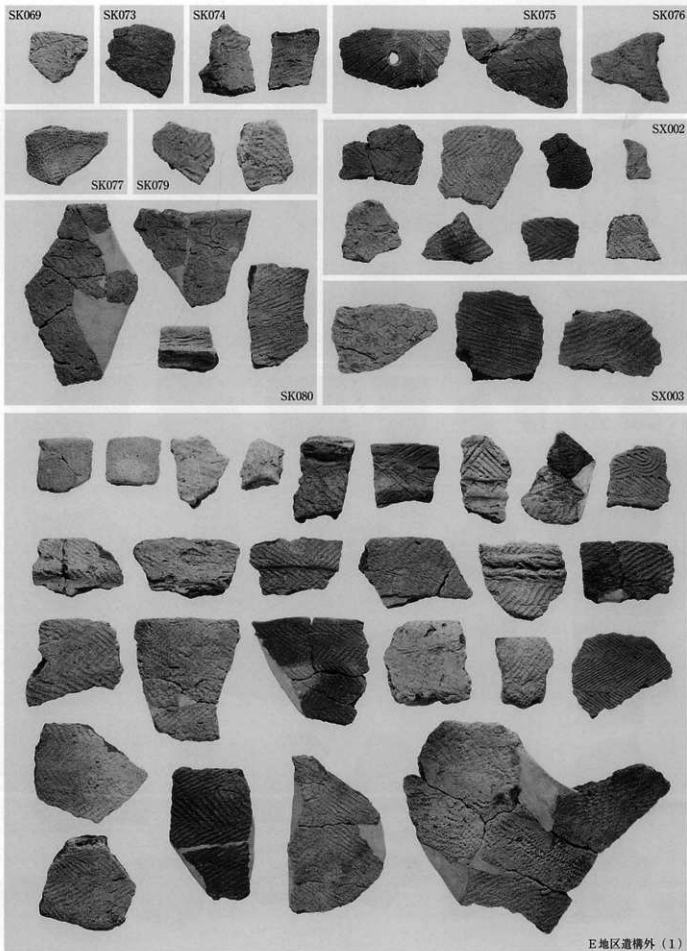
SI050



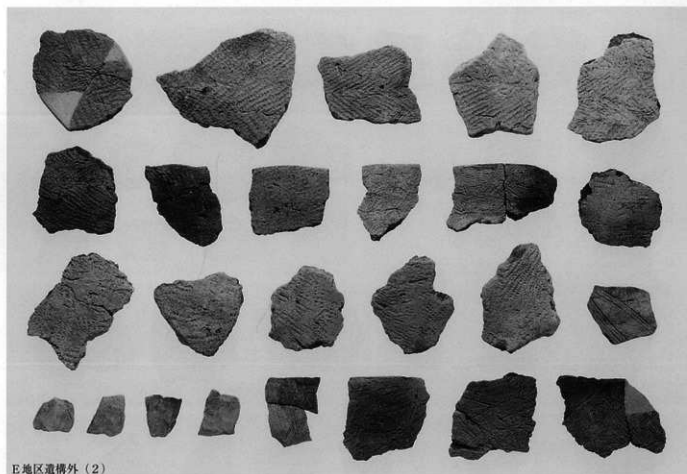
SI051



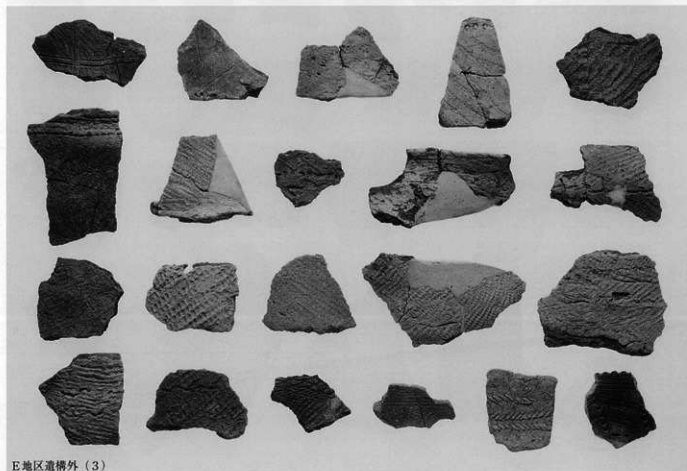
SI052



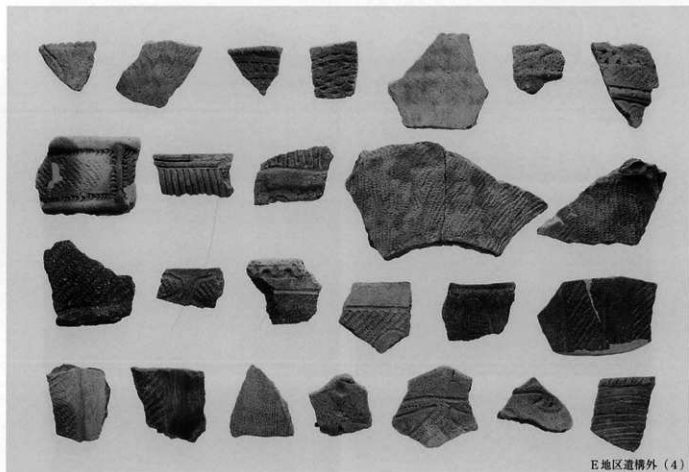
E地区遺構外(1)



E地区遺構外(2)



E地区遺構外(3)



E地区遺構外(4)



底部外面の文様

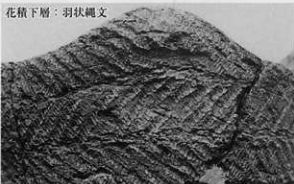
花積下層：撚糸側面印痕文・斜切文



二ツ木式・間山1式・結節回転文



花積下層：羽状縄文



間山1式・櫛子状沈線・櫛状貼付文



花積下層・鋸歯状沈線



間山1式・櫛播沈線・コウバク文・組紐文



二ツ木式：撚糸側面印痕文の円形物着文地



間山1式・羽状縄文

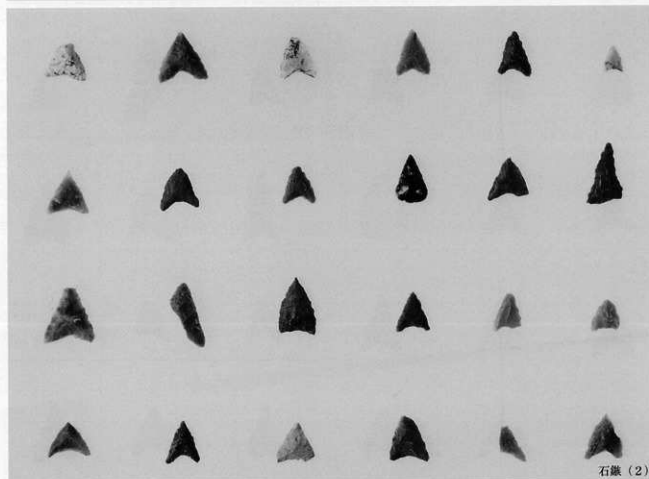
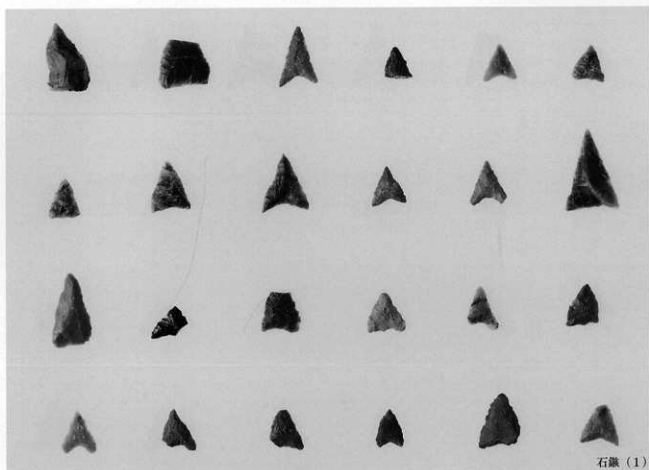


二ツ木式：櫛子状沈線・結節回転文

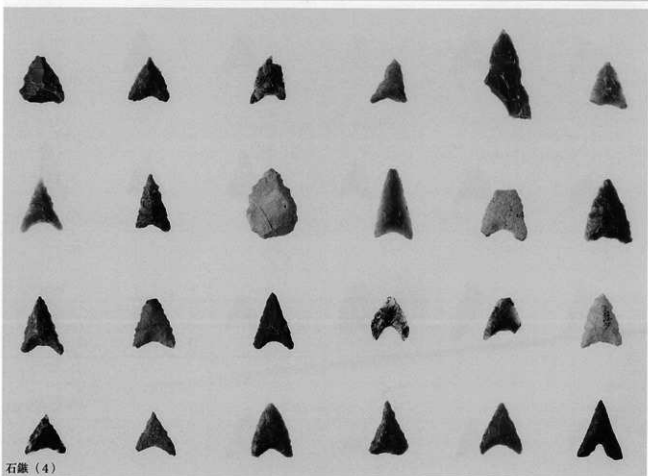
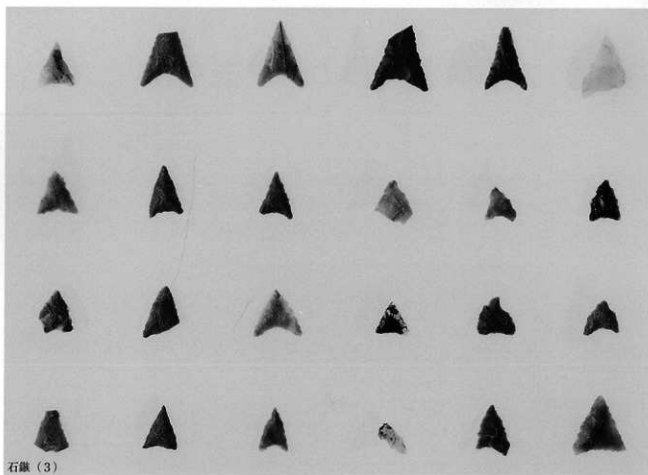


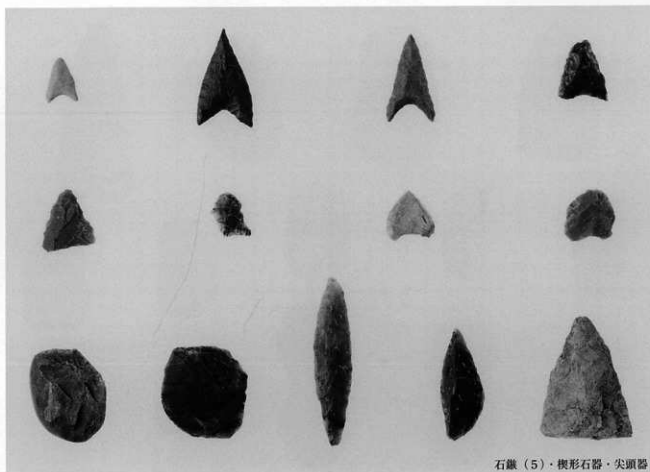
黒浜式：平行沈線文



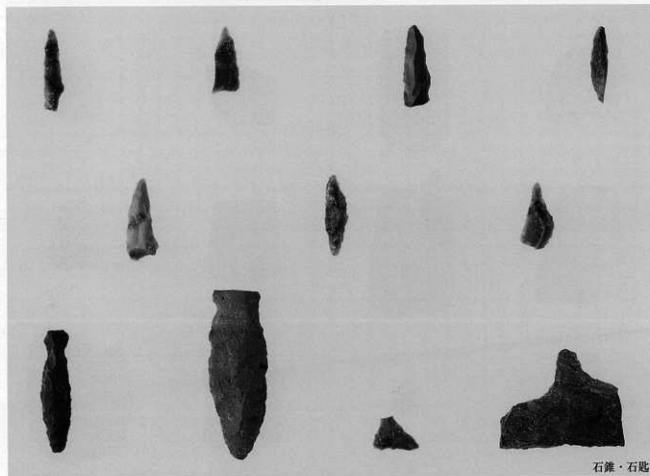


石器1



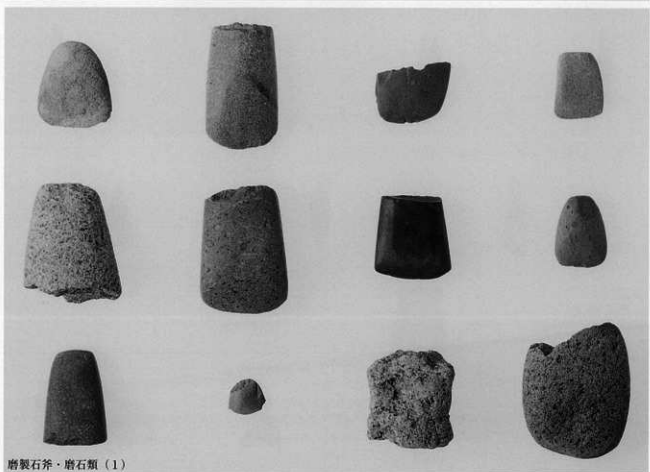
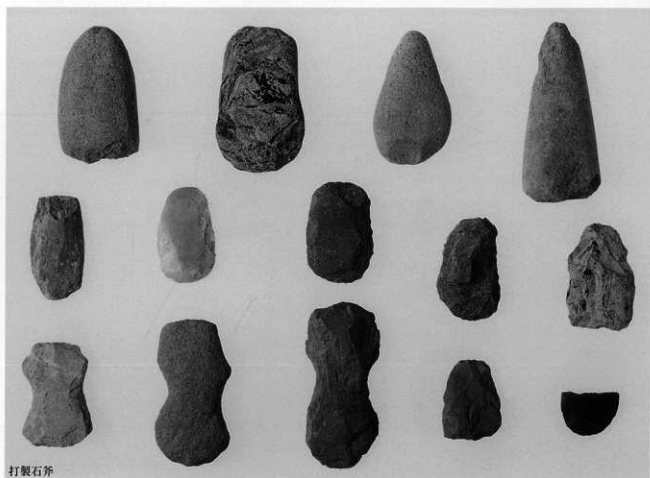


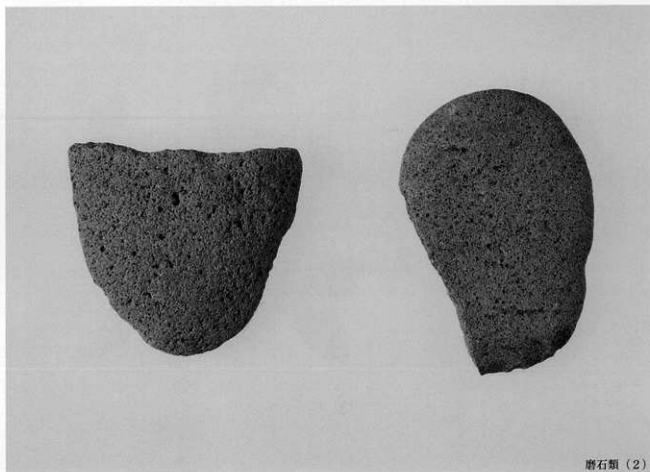
石鏃 (5)・楔形石器・尖頭器



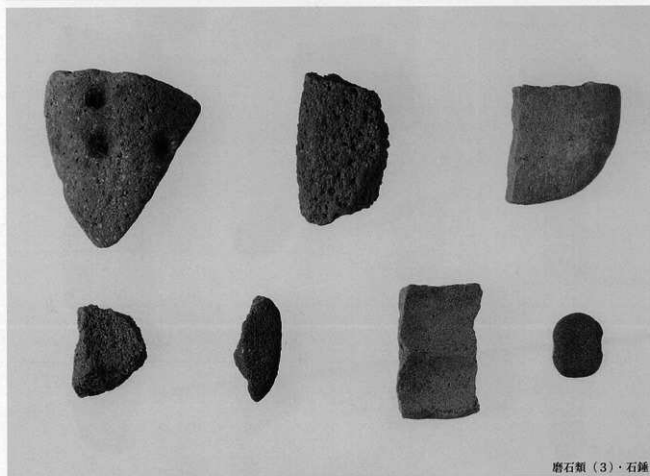
石鏃・石匙



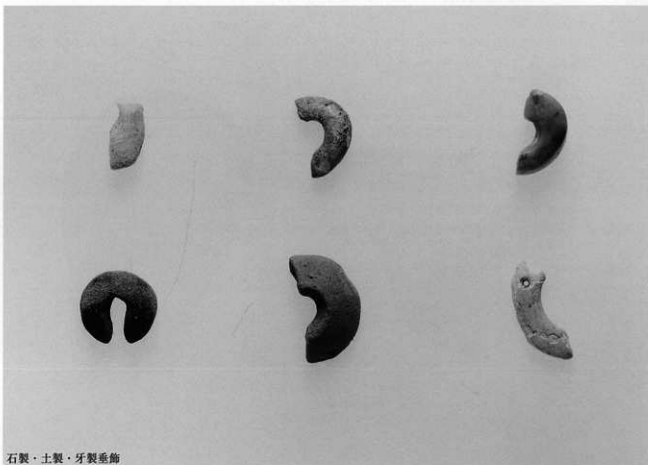




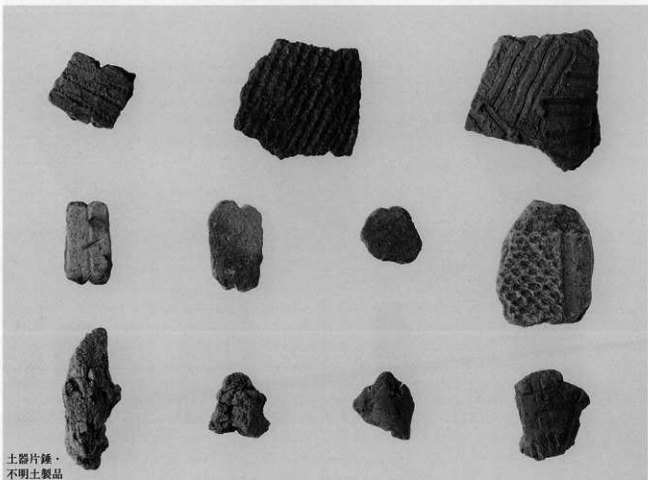
磨石類 (2)



磨石類 (3)・石錘

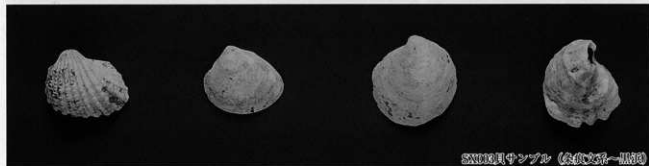
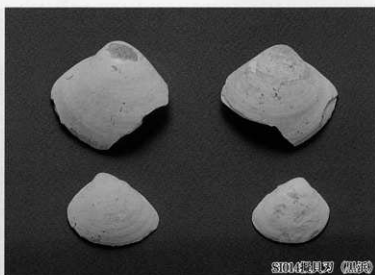
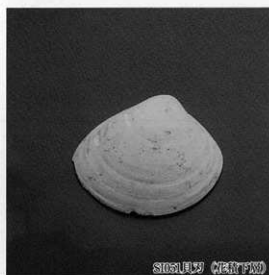


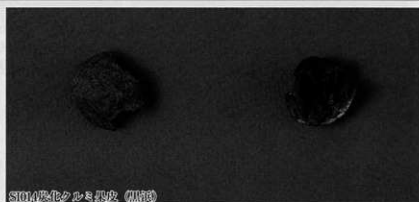
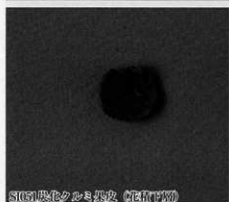
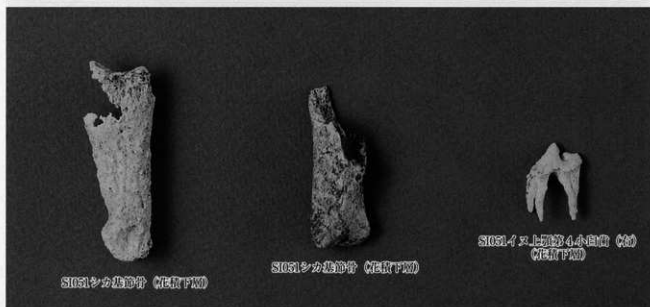
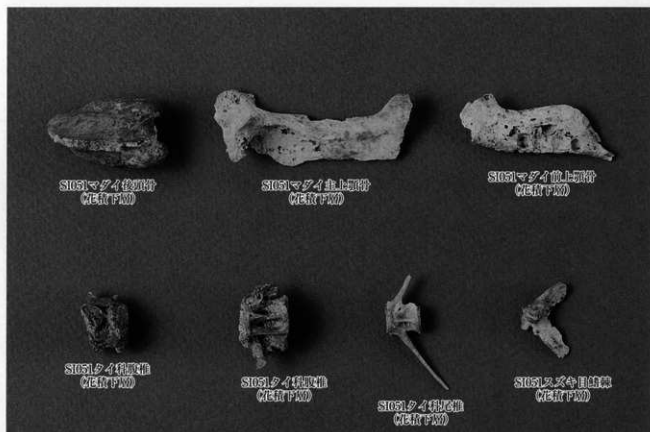
石製・土製・牙製垂飾



土器片鏢・  
不明土製品

垂飾・土製品





魚骨・獸骨・炭化物

## 報告書抄録

ふりがな	かしわほくぶひがしちくまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ2							
書名	柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名	柏市駒形遺跡（縄文時代以降編1）							
巻次	2							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第616集							
編者名	上守秀明							
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043 (424) 4848							
発行年月日	西暦2009年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
駒形遺跡 (1)～(19)	柏市小青田370 ほか	12217	024	35度 54分 59秒	139度 57分 23秒	20000601～ 20050930	22,371.6㎡	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
駒形遺跡 (1)～(19)	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡52軒、土坑41基、炉穴16基以上、陥穴12基、只層6か所	縄文土器、石器、石製・土製・歯牙製垂飾、土器片鏝	本遺跡は、いわゆる縄文海進から海退期にあたる縄文時代前期初頭から末葉まで継続した集落跡である。該期生産居住様式の解明に係る研究は、既に奥東京湾側で焼つかの成果が上げられている。それに比して研究例のほとんどない古鬼怒湾側では、本遺跡を含む柏北部東地区遺跡群の調査成果が極めて重要である。			
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡1軒	土師器				
	集落跡	平安時代	土坑1基	墨書土器				
要約	縄文時代前期を主体とした集落跡である。今回報告する範囲は遺跡全体の約1/3ほどであるが、前期初頭から末葉まで規模や地点をかえながら営まれていたことがわかった。時期によっては隣接する富士見遺跡・大松遺跡と一連の集落跡となる。							

千葉県教育振興財団調査報告書第616集

柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2

— 柏市駒形遺跡 —

縄文時代以降編1

---

平成21年3月25日発行

編 集	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	独立行政法人 都市再生機構千葉地域支社 千葉県美浜区中瀬1-3
	財団法人 千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株式会社 正文社 千葉県中央区都町1-10-6

---